

---

# ヒーローにはなれない...けど

イイ日旅立ち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒーローにはなれない…けど

### 【Nコード】

N4574M

### 【作者名】

イイ日旅立ち

### 【あらすじ】

魔法少女つてココさくらみたいなの？原作を全く知らない主人公が送られたのは、リリなの世界！そこで主人公はオリ主のような活躍ができるのか？

命「だから、俺原作知らないのに話もわからないんだって…」

この作品はオリ主・微チート・恋愛（の殻をかぶった何か）・コメディー（できるといいなあ）です。作者は素人なので、生温かい目で見守ってけると助かります。

## プロローグ（前書き）

作者「まさか、自分がこのように小説を書く日がこようとは……」  
「ワ  
ナワナ」

命「まあ、他の作者様の作品を読んでいて妄想が爆発したらしいけど、タイトルコールは……ってそれどこじゃなさそうだな……はあ、それでは、ヒーローにはなれない……けど プロローグ、はじまるよ」

## プロローグ

「本当にすいませんでしたっ！」

……いきなり目の前でスライディング土下座をしているご老人が、  
すっごい勢いで謝ってきているが、ぶっちゃけそんなことはどうでも  
もいいし、小さいことである。

「いや、だからすま……」

こまけえこたあいいのである！ まあ今の自分はそういつこときにしてはいられなかった、だって……

「俺さつきまでアパートでク○ガのブルーレイ見てたよね！？それがなしていきなり何もなかったところに気づいたら移動してたうえに、いきなりわけのわからんところに来にゃならんのじゃー！ー！しかもまだブルーレイ途中までしか見てなかったのにー！ー！」

……まあ絶賛混乱中なわけだけど、とりあえず落ち着くために今までの自分を振り返ってみようと思う。

自分の名は奈央崎尚久<sup>なのおさきなおひさ</sup>。親にはN・Nと、なんで名前までNにしたんだよ、と思わなくもないが気に入っている名前でもある。

一応大学に通っているが、それほど目標をもって入学をしたわけでもなく、普通科の高校だったから程度の理由しかない。それでも何人かの先生の講義は楽しく、それが大学に通う理由の一つではあるが一番は親のためだろう。

我が家は一般家庭と比較しても裕福とはいえ、仕送りをするのにも結構な負担になるので奨学金や大学のバイトで何とかつないでいるやつている感じだろうか。まあ、それでもあまり生活は変わらず、食費やら、服代やらを浮かしまくっていたんだが…

「それは、お前さんが貯めた金の八割を趣味につき込むからだろうに…」

やかましかつ！食費を切り詰めてでも買う価値があるんだよ！ちよつと取り乱したが、老人がおっしゃる通り、稼いだ金の八割近くは自分の趣味である漫画やラノベに消えている。

お気に入りには漫画なら烈火の〇、〇ンブーブレード、ラノベだと、不幸だーと言ってる割にはやけにモテる少年の物語（個人的な偏見）や、バカばかりでもとて騒がしいでは済まないような学園ラブコメ（？）など自分がおもしろいと思ったものを片っ端から買った結果、ジャンルを問わずそれなりにならオタクな方たちとの会話もで

きるようになった。：友達ほとんどそっち系だったからなあー

それとこっちが本命なのだが、最初俺が混乱していたときに言っていたと思うが、俺は自他共に認める〇面ライダー好きである。

もう一度言おう、俺はっ！仮〇ライダーがっ！大好きだあああああああああ！

…わかっていただくために二度言いました。やかましくてすみません。しかし、だがしかし！こればかりは熱も籠もるってもんである。初めて見たのが平成ライダーの第一作からだが、一目見た瞬間から自分には確信があった。こいつは俺の人生のなかで一番大きな出会いであると…。

弟に言わせると、

「彼女とか将来生まれてくるだろう自分の子供を差し置いてそんなこと言うの？いちいちにいちちゃんは大げさすぎなんだよ？」

このあと俺が弟の発言に対してブチ切れて喧嘩したことは今でも覚えている。その当時の自分は仮にも兄貴なんだからと反省したが、後悔は微塵も無かった。

多分今同じことを言われても昔のようにブチ切れてしまうだろう。自分はこれぐらい仮「あおう、そろそろ現実に戻ってきてくれんかのう」。現状話そうにもいきなり回想してるもんじゃし…」

ちっ、やはり現実からは逃げられなかったようだ。こうして長々と回想してればそのうちあきるだろと思っていたのに…

「一応、自分のライダー好きも確認できたし、落ち着けたからなあ」。よしっ、どんとこいや現実！しっかり受けとめてやんよ！…多



分、きつと、おそろく」

「尻すばみに勢いが無くなっておらんかの？それと、ライダー好きはの方は確認する必要があったのか？まあ、そう気構えんでいいぞ。そう大したことなんじゃが、一応、上と掛け合った結果なんとかなりそうじゃからな」

そう言つて適度に俺の発言にツッコミをいれると、さつきスライディング土下座して謝っていた老人と同一人物とは思えないほど優しそうな笑顔を浮かべた。てか、今の日本語なんか変じゃね？

「（何だ？俺が回想入れてる間になんか話つけてたのか？それに上ってなんのこつちゃ？このじいさんの上役のことか？上役ってことなんかの会社か？それが俺に一体何の用が？）」

俺が一人頭を悩ましているとき、老人が少し表情を曇らせた後爆弾を落とした。

「実はの、最初に言っておくべきじゃったのじゃがわしも先は取り乱しておつてな、言うのを忘れていたんじゃが、落ち着いて聞くのじゃぞ？お主は…もう元の場所には戻れん。」

…は？  
今なんと？

「お主は先ほどこちらに意識が来た時点でもうすでにあちら、わかりやすく言うのなら現世か？には戻ることできるのじゃ」

ええつと、今現世つった？現世っていうと某死神漫画を思い出すなあ〜じゃなくて！

「ちょっといいっすか？その言い方だとまるで俺がもう…」

あまりに突然の発言に驚いたが、一度冷静になってみるといやでもわかる。そう、さっきの老人の発言は俺への…

「お主の思っている通りじゃと思う。そう。お主はもう死んでいる。そしてここは現世とあの世との境目、むしろ神族の者が現世で関わりを持つものと対面し、天国行きか地獄行きかを告げる場所でもある。本当ならお主がここに来るのはあと五十年先なんじゃが…」

ナ、ナンダッテー！…って冗談言ってる場合か！俺が死んでる？ さっきまでピンピンしてたのに？

またもや混乱しかけた俺だが、老人の話が終わっていないかったよ  
うなので最後まで聞くことにした。

いわく、この方、俺の守護霊的な存在だそうだが、少し会社、ここでいう会社とは『THE・GOD・COMPANY』といって現世で生きている生物すべてに対し、一人ずつの担当をつけてその担当してる生物の未来を予測し、待ち受ける困難に立ち向かうのにギリギリ足りないぐらいの力を渡して、それを乗り越えるなり、避けるなりはその生物の意志次第だが、乗り越える者にはそれなりの運氣を与え、人生を良い方向に向かわせる手伝いをするそうだ。

直接的に手を貸さないのはその生物の意志を最大限尊重しているのと、現世への干渉を最小限に留めるためだそうだ。ちなみに、おれの死因を尋ねてみたところ、担当していたその老人が俺への本来するはずの干渉の力の配分を誤ってしまい、その誤差のせいで俺の住んでいたアパートの俺の頭に隕石が激突し、俺は痛みを感じる間もなく即死だったそうだ。

…俺の住んでいた部屋一階のはずなんだけどなあ（涙）

「本当にすまんかった！わしの干渉の力が足りなかったために寿命でもないのに死なせてしまうとは…本当に申し訳ない…」

話終わると、老人は頂垂れるように自分に謝ってきた。俺の死因の元凶がこのご老人にあるのはわかったわけだが、俺はそれまで気にかかっていたことを聞いてみた。

「とりあえずその話はおいとして、さっきなんとかなる的のことを言っただすよね？それって生き返れるとかそういうことであってます？」

そうなのだ。話始める直前にこの人は俺に上と掛け合ったからなんとなくそう、そう言ったのだ。さすがに都合がよすぎる発想だがそう考えでもしないとこの人を責めてしまいそうで、それは嫌だった。こんなに謝ってくれているのに許さないとか鬼畜っぽいし、そんなことはしたくなかった。

「…ああ、それなら心配はいらないぞい。上と掛け合った結果、もう一度、別の世界で生きることができるようになったの。じゃから「まっってください。別の世界？」そうじゃ、お主が生きていた現世とは違う世界、そこで新しい生を受けることができるようになったのじゃ。それでこれからこれで行き先を決めることになっておる。」

そういつて取り出したのは、なんとというか…そのままくじ引き用の箱だった。しかし別の世界か…老人いわくなかに漫画の世界やアニメに世界も含まれているらしいが、俺というイレギュラーが入り込んでしまうので、流れが変わることや、キャラが変わっていることもあるそうだ。この辺に関してはあまり気にしていない。

だって漫画やアニメで見るキャラと実際に見る人物を重ねてみる人っていないと思うし、自分が生きる以上、そこは虚構《フィクション》ではないのだから当然だ。それとお詫びということとで今までの記憶をそのまま持っていくこと（ただ名前は全く一緒ではだめらしい）と、お願いを三つ聞いてくれるそうだ。

「それなんてドラゴンボールとか言わんようにな。」

「あなたもあの漫画知ってたんすか…それにしても願いかあ〜うん」

実際、二つはもう決めているのだが、もう一つを何にしようか、あれこれ考えているうちにふと気になったことを聞いてみた。

「ところで、さっき引いたくじの『魔法少女リリカルなのは』っていうのなんですけど、俺一体どういう状態でその世界に行くんすか？このままの歳ッすか？」

すると、老人は、

「いや、なんでも原作開始の三年ほど前に転生するそうだな、主人公たちの年齢と合わせるそうじゃから多分小学生入るかそこらあたりの年齢じゃと思うんじゃが…お主なら原作の主人公の年齢わかるのではないのか？アニメも観るそうじゃし」

そう言われ、俺はため息をついた後、

「いやー、自分もアニメは観る方ですけど、ポ○モンだったり、コ○ンぐらいでそれは聞いたことも無いんすよ。まあ、下手に原作の知識持つのも嫌なんで構わないんすけどね。」

オタク友達にも言われたことだけど、どうも俺が観るアニメはお子様向けらしく、そこをよくからかわれていた。…おもしろいじゃないか、○ケモン。

「まあ、先入観を持つよりもその方がよいのかもしれない。それで、願いは決まったのか？」

「はい、最後迷ってたんすけど、歳の話聞いて丁度良いの思いつきました。」

「よし、それならばお主の願い事をいつてくれ。」

そして、俺は願い事を頼んだ。



一つ目の願いは、生前の俺の愛読書、烈火の〇に登場する魔導具のうち俺が望んだものすべてと別魅わけみや氷紋剣のような特定の技術、あと一度使ってみたいと夢にまで見た炎術師としての能力である。

勿論火竜も使えるのだが原作のように意志を持っておらず、あくまで力の象徴としての姿だそうで、すべて自分の意志で操ることのできる炎だそうだ。使いやすそうで楽っばいけど火竜との会話を何気に楽しみにしてたので、ちょっとさびしい。

二つ目は、魔導具があってもそれに伴う体力がないと話にならないので、ひとつだけオリジナルの魔導具を作ってもらうことにした。その名も空我クワガ。形状は腕輪版のアーケルのような感じで、赤、青、緑、紫、そして黒と色によって強化の度合いが変わる身体強化用の魔導具だ。…うん、若干ネタに走ったがおおむね問題はないだろう。

そしていよいよ最後の願い、割と言うの恥ずかしいが、大事なことなのでしっかりといわなければ。

「そして最後の願いなんですけど、あなたは俺から担当がはずれることになるんですよね？」

「ふむ、それに今回のようなミスをしてしまったんじゃ。もう仕事をやめるつもりじゃ。さあ、次でさいごじゃ。それを聞くのと同じ時にお主をあっちの世界に送ることになっておる。して、最後の願いは？」

「だったら！その、最後の願いは、あっちの世界で俺のおじいちゃん、家族になってくれませんか？」

「は？」

かなりびっくりしているようだけど、こっちも結構いっぱいっばいだ。

「あっちに行ったら自分一人ですし、もし小学生ぐらいで家無しだ

と目もあてられないでしょう？だから保護者ていうかなんていうか、そんな人が欲しいんです。できればそれをあなたにお願いしたいんですけど…」

最後の方はかなり恥ずかしく、声が小さくなったけどなんとかお願いすることができた。最初こそこの人のせいで死んだのだと怒りを感じていたけど、話をするうちにそれが消えて、俺を想っての一言一言はこの人が優しい人であり、信頼に足る人と思わせるのに十分だった。

それなら、これから先何が起こるのかもわからない異世界。信頼できるこの人についてきて欲しいと思ったのだ。老人も心底意外に思っていたらしく、目を見開いていたけど、おっかなびっくりとした様子で俺に、

「わしが、手違いだとしても真実、お主を殺したわしが、お主と家族？わしが憎くないのか？本当にいいのか？」

確認してくる老人に俺はなるだけ穏やかな声で答えた。

「憎くなんてありませんよ。話をして、あなたがどれだけ俺のことを大事に思ってくれていたかわかりまし、だから、あなたについてきて欲しいんです。それと、できれば俺の新しい名前もつけてくれたらな、とも思っていたりして…あははっ！」

あまりの恥ずかしさにきつと今の俺の顔は齒槽膿漏よりも赤いだろう。それで反応は…って！なんか泣いてらしゃっる！？

「ありがとう、その一言でどれだけわしが救われたか…。わしでよかったですんで家族にさせてくれ、この通りじゃ。」

そう言って頭を下げようとすると老人に慌てて、

「ちょっと！？頭なんて下げないでくださいよ！？これから家族に

なるんだからそんなことしなくてもいいですよ、っていつまでもあなたじゃ格好つきませんね、名前教えてくれませんか？あと、ついでといっちゃあれですけど、自分のことも新しい名前で呼んでくださいー。」

いくら言っても頭を下げようとするのでこのような提案を試みる。すると、少し可笑しそうに笑っている顔の新しい家族がいて、世界を渡るための光に包まれながら…

「ふおっふお、それならわしに対しても敬語はいらんぞ、孫に敬語で喋らせるのもいやじゃしな、それとわしの名じゃが、わしの名はかみなゆき神名雪而じゃ、これからよろしくたのむぞ……

……命《みこと》……」

俺の名前を呼んだ。

## プロローグ（後書き）

作者「はっ！もう後書きだと！？いつの間に…まあ、いいとして、  
次回の更新は主人公の設定をあげたいと思います。それでは、ここ  
まで読んでくださった方、このような拙い文ですが、また次回も見  
てくれるとうれしいです。ではまた！」

## 主人公とその他の設定（前書き）

作者「一応設定あげておきます。でも自分でも思ったけど魔導具つてさ、担い手がいる必要が無いところや馬鹿みたいに魔力喰わないところみると、下手な宝具より強くね？」

命「うん？宝具つて？それは知らんが、雷神や天堂地獄、持ち主に負担以上のものをかける物以外なら、魔導具つて実はかなり使えるんじゃないかって思ってたんだ。それに神慮伸刀とか、鋼金暗器とか、閻水とかめちやくちやかっこいいしね！」

作者「・・・俺も人のこと言えんが、…この厨二め。」

## 主人公とその他の設定

### 主人公設定

名前

かみなみこと  
神名命

身長・体重・外見 (無印時点) 135センチ 31キロ 見た目は黒目黒髪の特レイン(某掃除屋の黒猫)に右目の下に泣きぼくろがついている感じ

性格 前世ではそれなりにオタクっぽい感じの生活をしていたが、ラノベはともかく観るアニメは子供向けがほとんどで、〇ケモンやコロン、日曜のスーパーなヒーローな時間などは毎週欠かさないほど。それで周りからはそれをネタにいじられたりしたが、本人はそれも割と受け入れるので軽くM疑惑があがったほどである。

基本的にのほほんとしていて、自身の趣味以外のことへの関心は薄い。自身の家族は別である、また虐められていた過去から、虐められている人には自分から関わっていくことも。本人いわく「俺はマイノリティーには優しくすることに決めているんだ」とらしい。本人は認めないが結構な年下好きであり、また世話を良くやいていることから、近所の子供たちからは学校の先生よりも頼りにされる



ことも。

また、リリなの世界でもこの性質のせいかな、子供に良く好かれるが自身の精神と見た目の誤差を本人があまり認識していないので、自身は子供の好意を兄的な気分で受け入れている。

それなりにしっかりしているつもりだが、一人暮らしをしていたのに作れる料理はカレー、肉じゃが、シチュー（材料があまり変わらなく作り方も似ているため）ぐらいで、面倒になるとレトルトで済ましている。（だけど異世界補正なのか、こつちの世界では満足にスクランブルエッグすら作れない体質に）

あと少しビビリ君が入っている。

戦闘面・戦闘時は、腰につけている蔵王（原作では物をコンパクトに収納できる魔導具で、本作ではほとんどの魔導具をこの中に収納し、自由に出し入れができる）から繰り出す魔導具と腕輪型の魔導具『アークル』による身体強化、炎術師としての能力や魔導具を組み合わせて、それなりに強い、ていうか結構なチート持ちではあるが、本人がビビリのため、あまり積極的には戦闘せず、能力自体

「こんなんできたらいいよね」とぐらいしか考えていないため本人に戦う気は無いが、我慢の限界や、理不尽に誰かが虐げられている状況においてはその限りではなく、ASH TO ASHてな感じで容赦する事無く攻撃する。がしかし、基本的には戦闘しないで済むならそつちを優先するため、これらの能力は戦闘よりも日常のギヤグ的なノリでしか生かされないかも。

そして今ではもはや見る影も無くなった設定なため、編集集中作者が黒歴史と向き合う時特有の羞恥に悶えたのはこの際どうでもいいだろう。

### 腕輪型魔導具『アークル』

命が二つ目の願いで望んだ、クウガの能力を発揮するための魔導具。腕輪の中央にある霊石アマダムのようなものがあり、通常時は白のグロウイング状態だが、それでも普通車を押せるぐらいの力がだせる。それが赤、青、緑、紫、黒に変色し、それぞれマイティ、ドラゴン、ペガサス、タイタン、アルティメットに対応している。ちなみに身体能力のみ反映されるため、特殊能力は使用不可である。これを作る際、雪面がおまけとしてアークルに人格を与えており、魔導具でありながら、さながらインテリジェンスデバイスのようにその場で持ち主の意志とは別に危機的な状況で最適な身体強化をしてくれる。ちなみにア

ークルの人格は雪而の「しっかりした男性」としてではなく、「おっとりした女性」の人格になってしまい、命に親ばかりかともいえる愛情を注いでいて、時たま暴走する。

今は常時合体していたせいで身体から抜ける事が出来ずに思念通話の要領での会話が主になっているため、最近の悩みはスキンシップを取れないことらしい。すいません作者の力量不足の被害者です

……

#### かみなゆき 神名雪而

元は守護霊として、奈央崎尚久を守護していたが、本人のミスにより死亡させてしまい、償うためにリリなの世界への転生を上司に掛け合ってくれた。そのまま仕事をやめるところを、命の最後の願いにより、祖父としてもについていくことになった。基本的に優しいが、尚久を殺してしまった罪悪感が命の言葉によってその感情がまるまる命への過保護なまでの愛情になってしまった。所謂ジジバカであり、その愛情は海より深く、山よりも高いようで、命に害を与える者には神族の力を持ってしてトラウマに残るような罰を与える。アークルとはともに命を愛する者同士仲がいい。

何故か作者の暴走のせいでヴォルケンフラグの立った男。基本的  
に作者がお爺ちゃん子だったk(r)y

## 主人公とその他の設定（後書き）

作者「今回はちょっと長くなりそうなので前後編にわけて書こうと思います。オリキャラとの出会いや、原作キャラとの絡みやら書きたいことが次から次えと・・・」

命「張り切るのはいいけど、ちゃんと内容まとめてから書かないと。それでは、次回、「風との出会い、夜との出会い」前後編でお送りします。ではまた！」

作者「・・・これだけで誰かわかってしまいそうだな、このサブタイトル（汗）」

## 第一話「風との出会い、夜との出会い 前編」(前書き)

作者「なんとか、前編を書くことができたが……」

命「?なんか問題でも?」

作者「あまりギャグが書けてないんだよ……まあ友達フラグのためとはいえ虐めを書いているとき、ちよつとね……自分の経験が元なので精神にくるしな……」

命「……(汗)思ったより話が重いんだが……」

作者「駄菓子菓子!!これもすべては君の友達フラグ建設のためだ!そのためなら自身の過去だろうとなんだろうとネタになりそうなものは使っていくので、これしきのこと何とでも無いわぁ!!!!」

命「案外、たくましいのな……見習いたくないけど……」

第一話「風との出会い、夜との出会い 前編」

SIDE???

その日も私は憂鬱だった。

あれは私がこの聖祥に入学して一年たった頃だった。うちは他家よりもちよつと事情が違ふせいなのか、多分、子供の無邪気な悪戯心のようなものが始まりだったと思う。とある男子生徒に、

『お前んちの家族ってさ、格好からして皆変だよな、頭大丈夫か  
』?』

その一言に私は激昂し、その男子生徒を思いつきりひつ叩いた。それからというものの、私はみんなからあいつは凶暴だから近づくな、近づいたら殴られる、といった事を言われるようになり、叩いた男子からは仕返しとばかりに何人かの男子を連れて、虐めを受けた。

靴を隠したり、筆箱が気づいたらゴミ箱のなかにいれられていたり、ひどいものになると荷物を溝に落とされたり、体操服を破かれたりなどいろいろされた。陰湿なことにこれらは全部私がない間に行われていたことということだ。なのに何故犯人が分かるのかと聞かれたら簡単だ。いつも私とその現状を見ているそばでそいつらはニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべているのだ。

虐めを受けているのに、みんな私が虐められているのを知っているのに助けてくれない。ただ、見ているだけで自分に火の粉がかからないように知らないふりをしている。

そんな状況が三カ月も続くと、虐めをする方も私を虐めるのに飽きてきたのか、何もしないようになった。そう、まるで私がいなかのようになっ……



今度は無視がはじまった。虐めを受けている間友達もできなかったので、話し相手なんかいない。学校にいる間私はずっと口を閉ざしていた。喋り方を忘れてしまうと思うこともあった。

虐めを受けている事実は親に話していない。幸い、パパもママも私ที่บ้านでは明るくしていたので気づかれることはなかった。両親に嘘をつかないといけなかった自分が嫌だった。

そんな内いえと外がっこうとの生活のギャップに堪えられなくなった私は、授業中にも関わらず、教室を抜け出した。

・・・虐めを受けているのをわかって、助けられない他のクラスメイトや先生がキライ

・・・パパやママにうそをついている自分がキライ

・・・なによりも、こんなことになってもだれ一人として助けられない世界なんてだいつきらい!!

学校を抜け出してしばらくしてそんなことを考えているうちに、いつの間にか公園に来ていた。この公園は近くに海があり、ここから見える海の景色はきれいで、以前ママと遊びで来ていたときにママが話してくれた、ここでママはパパにプロポーズされた思い出の場所でもある。

でも、今の私にそんな事を考えている余裕はなかった。

・・・もう、嫌だ。これ以上こんな辛い思いはしたくない。こんなに辛くて苦しいのなら、それが嫌なら・・・

・・・消えてしまえばいいんだ。

そう決めると不思議と恐怖することなく進み、気づくと真下には海が広がっていて私の様子を見ていた女の子が何かを叫んでいるみたいだけど、私にはほとんど届いていなかった。

・・・ああ、これで苦しい思いをしなくて済むんだ……

そして、私が飛び降りようとしたその瞬間、今まで誰もいなかったはず後ろの方から急に抱きつかれた

・・・抱きつかれた?…え、誰?

S I D E ? ? ? a n o t h e r

その日、私は病院の帰りにちょっと羽をのばして鳴海の臨海公園に軽いピクニックに来ていた。いつもやったらそんなこと一人やしできなかつたけど…

「ふっふふーん ふっふふーん じいちゃん、みこつちゃん！  
はよ行こ！海が！私を待っている！さあ、ハリーハリーハリー！！」

「はやてちゃん。そんなに急がずとも海は逃げんぞ？もうちよつとゆっくりしてもお昼には間に合うんじゃない、のう、命？」

そう、今の私には新しい家族である雪而じいちゃんと…

「はやてちゃん、テンション高過ぎだつてば…。それに海が呼んでるって、今のはやてちゃんは泳げないんだし、もし海がそれをわかっているとして、それって軽い呪いの呼び声的なmアベシツ！？」

ビシーン！とハリセンの響きの中に命の眩きは消えた

「そういうKY発言はいらんねん、今の私は蝶サイコーに気分がいいからそれくらいで済ましてあげるけど、・・・次は・・・わかっところよね？」

そう言ってみこっちゃんに再度ハリセンを見せると「すいまつせんしたー！、自分ちヨーシくれてましたー！！」と、すばやく土下座に移行した。うん、昨日会ったばかりやけどそういう素直なところがみこっちゃんの良い所やと思うぞ？

そんな私たちを見て、じいちゃんは苦笑し、みこっちゃんの右手に着いているアークルさんも「あらあらまあまあ」と穏やかに笑っていて、姿が見えていたら、さぞ微笑ましそうにしているところだろう。…なんか恥ずかしくなってくるなあ〜

・・・この人たちと出会ったのは昨日の夕方やった。さすがにびつくりしたわくだっていきなり家の中で大きな音がして、いよいようちの家にも落下系ヒロインが!? せやけど私に百合の趣味はないけどなあ〜と軽く現実から目を背けていると、不意に落ちてきた人のうち小さい方が気がついたらしく、

「う、うん。あれ?ここはどこ?俺は命、隣で気絶してんのは我がじっちゃん。うん、家族になったからには親しげに呼ぶことしよう。それn「あ〜すいません」うん?」

∴なんかこのままやと自分一人で話を進めてしまいそうやったので、声をかけてみたら、こっちに気づいたらしく、それと同時に自分らが家の屋根をぶち抜いて落ちてきたのを理解したのか冷や汗を滝のようにかきながら、

「はは、家の屋根ぶち抜くとか・・・えっと、そこな女の子?いちおうこれはふかこうりよくなんだけどわざとじゃないんだよ?きづいたらこうなっていただけでこわそうとおもってなんていないけどこれはだめだよねこれはひどいね、本ッ当おおおおに!!! すいませんでしたあああああつあ!!!」

…あはは、なんか漢字を喋る余裕が無くなってきたと思ったら、音を置き去りにする勢いで土下座をはじめた。…この歳で土下座つて（見た目6〜7歳です）…空から降ってきたあたりさぞ波乱万丈な人生やったんやな…

急に私が涙を流すのを見て、男の子の顔が一気に青ざめ、気絶していたおじいさんも起きて私を見て男の子同様にリアクションを取った後、二人同時に土下座した。…なんか無駄に行動がそろったなあ〜関係無いけど。

このままじゃ、土下座のし過ぎで床が陥没しそうだったので、ひとまず二人を落ちつけてから、自己紹介の後、二人の話を聞くことになった。しっかし、このときは本をたくさん読み自称「図書館を統べる女王」の私こと八神はやてちゃんもびつくりしたわ〜。

二次創作でもよく使われている転生なんてものをしてる人が本当にいるとは…最初こそ疑っていたが、男の子、命君の持っている魔導具とかいう道具や、雪而さんの神様POWERを見させて

もらつと、いよいよ現実味をもつてきた。

しかも、命君の手から火がでたり、腕輪が「あらあら、はじめまして。」とかあいさつしてくるんやもん。めっちゃ驚いたわ（その時何気に命君も腕輪が喋ったことにおどろいてたけど）。

そして、とりあえずこの世界にやって来たそうだが、話が終わると少し暗い雰囲気になった。二人とも屋根を壊した罪悪感を感じているようやな。・・・よっしゃ！ここははやてちゃんの精微極まる話術でもってこの雰囲気明るくせんとな！それにこの二人、身寄りがないので住む家も無いハズ、せやったら、このお願いも断れないやろうしな！にしし・・・

「まあまあ、確かに屋根に風穴空けられはしたけど幸いなことに人的被害はゼロなわけやし。ほら、私無傷！」

「それはそうじゃが、人さまの家に穴空けてごめんなさいじゃあ申し訳なさすぎるじゃろ？とりあえず、君の親御さんに事情を話さんといけないしのお。」



…しめしめ、予想通りそういう話になったな、ここでさらにちょっと悲しげな雰囲気醸し出して、

「いえ、いいんです。私しかこの家に住んでいませんし…。」

「……………」

「（ああっ！？予想してたよりめっちゃ暗くなってもた！？）いや、そのもう大分前のことですし、私自身もうそのことに関しては割り切ってるんで。」

・・・そう、私が一人暮らしの状態になってからそれなりになるが、元々体が弱いせいとか特に足が不自由で、この体のせいで学校にも行けなかったので当然友達もいなかった。

けど当時は一人での生活の大変さにそんなこと考える暇などなか

った。だけど、生活にも慣れてきて、ふと心に余裕ができたときに、漸く自分が一人だという事実に気づかされた。病院では石田先生が良くしてくれるが、それでも家ではいつも一人。そんな寂しさに押しつぶされそうになったときに、この二人がやってきた。

・・・その時私はきつと誰でも良かったんだと思う。二人の身寄りが無いと聞いたときにホントはすぐにでもうちにきていいですよ、と言いたかった。だけど二人が仲良くしているとこや、久々に先生以外の大人の人、それに同年代の子と話しているうちになんとしてもこの人たちをここに留めておきたいと思ってしまった…それが例えズルイ手を使ったとしても…

そんな事を考えていたからかしばらく私が黙っていると、命君と雪而さんが、何か意を決したような顔をして私に尋ねてきた、

「あの、勿論屋根は元通りにするし、はやてちゃんが望むならできる限りの事をしてあげたいとも思っており、そこでわしから一つ提案があるのじゃがな・・・」

「（提案？…ッ！まさか修理する代わりに自分たちのことを見逃し

てくれとかか！？いやや！せっかく一緒に住んでもらうよう頼もつしてたのに！もう一人は嫌やつ！！）」

私が感じている焦燥などお構いなしに、雪而さんの台詞を命君が引き継いで、

「その…お願いですっ！修理する代わりに僕たちをここで住まわせてください！！」

「………ほえ？」

「あ、いや、その打算もあってですね！？住む場所が無い僕らからしてみれば知り合いがいてなおかつ僕らの事情を知っている人である八神さんの家はこの上無い好物件ですし八神さんのような人だと僕自身も安心できるしそれにやつぱりこんな小さい子一人しかも足が不自由でいるならなおさらほっとけないし一人だとやつぱり寂しいと思うし僕らでよかったら話し相手にもなれますしだからそのお願いします僕たちをこの家においてくださいっ！」

・・・そう一息に捲くし立てるように言った後、頭を下げてきた。

・・・ああ、さっきまでの不安が一気に消えたのがわかる。今の言葉から、私がかかするまでも無くこの人の「ここにおいて下さい」というのが心からの言葉だとわかる。しかも「打算がある」ってその言葉一つで自分たちが不利になることぐらいわかっているだろうに、だ。

「ぶぶっ、あはははははははは！」

「「?」?」?」?」

二人とも急に笑いだした私を不思議に思っているのか、それとも断られるかと思つとるのやるか?なら安心してやらんとな

「はっはっは、いや〜笑った笑った。いや〜笑わせてもらったわ本当。それでや、その話やけどな、こっちにも条件があるで?」

ゴクリッ

二人は喉を鳴らして次の私の言葉を待っている。私の条件、それは……

「雪而さん、これからはうちもじいちゃんと呼ばせてもらおうで、それと命君は私のことを八神じゃなく、名前で呼ぶ事！私もこれからはみこっちゃんと呼ぶからな！これからもよろしくや！じいちゃん！みこっちゃん！」

二人は最初、ぼけーっとしていたけど私の言葉の意味を理解していくと同時に二人とも笑顔になっていき「こちらこそ、よろしく（じゃ）」「」と返事してくれた。腕輪のアーケルさんも嬉しそうに笑っていた。これが昨日の出来事でその次の日の病院の検査で石田先生に二人のことは遠くからきた親戚ということにした。

くさて、回想し終わったことやし、早速ピクニック再開…と思っていた矢先にそれは起こった。海を見渡していたとき、不意に目に止まったある制服。

「（あれは聖祥の制服？今は授業中のはずやけど・・・）」

まあ、ひよつとしたら何かに授業の延長かなと思つて視線を逸らそうとしたその時、女の子が海に向かつていき、波打ち際に設置してある危険防止用の手すりに手をかけた瞬間、強烈な悪寒が背筋を走った。何をするのかはわからない、わからないがそれを見るとても嫌な予感がした。

私の様子がおかしい事に気付いたみこっちゃんが生をかけてきて「どうかした？なんか顔色悪いけど」「みこっちゃん！！」は、ハイイツ！？」

「お願いっ！あの子！あの子の様子がおかしいんや！よくわからん

けどあの子をほっつておいたらあかん！だから、お願いやからあの子を止めて！」

自分でも混乱していたため言ってる事がめちゃくちゃだったが、みこっちゃん是我的慌てぶりから状況を察したらしく、私の視線を追ってその子を見つけると血相変えて駆け出して行った。アークルさんの能力なのか、文字通り、目にも止まらないスピードでその子の元にたどり着き、海に落ちそうになった子をぎりぎりでするから抱きついて、何とか止める事に成功した。

……どうでもいいけどなんで態々抱きつく必要があったん？帰ってきたらそこんとこちゃんと聞かんとあ〜ンフフ

「(はやてちゃんが、なにやらダークサイドに墮ちているのじゃが…。命、早く帰ってきてくれ)、はやてちゃんが大変なことに  
「ー!」」

第一話「風との出会い、夜との出会い 前編」(後書き)

作者「次の更新は多分明日には！」

はやて・命」「できるのか(んか)?」「

・・・多分



第一話 「風との出会い、夜との出会い 後編」 (前書き)

作者「こうやって書いてみると改めて他の作者様の凄さがわかる……

連日投稿とか、もう凄過ぎて…その上内容もしっかりまとめていると ……」

命「まあ、他の作者様が凄いの当然だとして、それに続くように頑張っている。な。お互い。」

作「うん…(涙) 作者も良い物が書けるよう頑張るよ」

第一話 「風との出会い、夜との出会い 後編」

S I D E ????

・・・え、ええつと、とりあえず今の状況を整理してみようと思う。今まさに自殺しようと思ひ降りそうになったその時、突如後ろから抱きつかれて止められてしまった・・・振り返ってみると、そこにいたのは・・・真っ青な顔をして、今にも泣きだしそうな表情を浮かべた私と同じくらいの男の子だった...

・・・その子は私に後ろから抱きついた格好のまま、私を引っ張って波打ち際から離れてところでようやく私を解放してくれた。

・・・よくよく見るとその子の格好は白のシャツの上にフードのつ

いた半袖のパーカーを着て、下は膝が隠れるくらいの長さのズボンを履いた。私服姿の男の子で、顔立ちは……うん、悪くはない。何かもつとハツラツとした表情が似合いそうな顔なのだが、その顔に浮かんでいる表情は少し歪んで見えた。

「……あのさ、君、さっき自殺しようとしていたよね？」

「ッ！？……違うよ？ちょっと海を近くで見ようとしただけだ。だったら！どうして制服を着て、一人でいるの？周りに他の生徒がないようだし、今は授業中の時間帯のはずでしょ？一人で、こんなところにいるなんておかしくない？」「……」

男の子の質問をかわそうと思ひ喋ろうとしたら、痛いところを突かれ閉口してしまった。確かに今の時間帯なら普通に授業をしている。そこに「海が見たいから」の理由でそれを誤魔化すことはできなかった。そして、押し黙っている私に男の子は「それに……」と言葉を続けて、

「それに……そんな今にも泣きそうなのにそれを我慢しているような表情かおしてそんなこと言っても説得力無いよ？何かあったの？僕にできることなんて無いけどさ、話を聞く事ぐらいはしてあげら

れる。初対面の人間が言うのもなんだけどさ、話してくれないかな？……何がそんな苦しかったの？」

・・・不意にその子の言葉を聞いて、私はただただ、呆然としていた。これまで誰も私を助けてはくれなかった。友達もいない、家族にも話さない、そうしてずっと今まで独りだったので、男の子の言葉を理解できなかった。

・・・話を聞いてくれるの？

私も言葉にその男の子は苦笑し、「僕なんかで良かったらね。」と頬を照れくさそうに掻きながら答えてくれた。

そこからのことはとてもじゃないが人に言えなかった。……だって、その言葉を聞いた瞬間、私は嬉しさのあまりその子の胸に泣きながら飛びつき、そこで今までに溜まっていた想いを全部掃き出し

ただだから。

・・・虐めを受けていること、親にその事を知られたくなく、つきたくも無い嘘についていること、そのせいで内いえも外がっこうでも話をするここのでできる相手がいなくてずっと辛かったこと、そして、その苦しさに耐えきれず、さっき言われた通り自殺しようとしていたこと

……

そんな私の言葉を、男の子は黙って聞いてくれていて、話の間、泣き続けた私の背中をずっとさすってくれていた。・・・今思い出すと顔から火が出るんじゃないかってくらい恥ずかしいっ！・・・でもその時の私を見る優しそうな笑顔…なんていうか…そのう……って！そうじゃない！

その後、私の話が終わり少し落ち着いた後、

「ちょっといいかな？人を待たせているんだけど、良かったら一緒に来ない？これからお昼食べるけど、がっこ抜け出したなら戻りづ

らいだろっし、よかつたら、僕とじいちゃんたちでもついて行かせ  
てもらっけど、どっ？」

と、言ってくれた。確かに戻りづらかった気持ちもあるし、ま  
だこの人と話をしたかったので喜んでその話に甘えさせて貰うこと  
にした。

「あ、あのっ！そういえばお互いに自己紹介まだだったよね！？私  
は嵐山あまじま風花かづなて言うんだけど、その、君の名前も教えてくれると、そ  
の」

途中から恥ずかしくなつて声が小さくなつてしまった私を見て、  
少し可笑しそうに笑った後、

「そういえば名前言ってなかったね、僕は神名命。神様の名前に命  
と書いてかみなみこと。好きに呼んでくれていいよ、それじゃ行こ  
うか、ふーかちゃん！」

そう、笑顔で言ってくれた。その顔を見て、自分の顔が赤くなり  
そうなのを必死で堪えて私も、「うんっ。いこっ、みこと君！」と  
返して、一緒にみこと君の家族の待つ場所へと向かった。

ここまでなら少しイイハナシダナーで終わりそうなものなのだが、  
今私の目の前には……

「さあ〜て？今の今までこの私を待たせて何しとったん？ゆ〜っく  
り、O H A N A S H I I してもらっで〜？」

笑顔なのに寒気を感じさせる車椅子の女の子が、

「いやね？ちよつとこっちのふーかちゃんの話聞いていただけな  
んだけどなにをそんなにおく「問答はッ！無用やッ！」待ってはや  
てちゃん！？俺なんか悪い事した!？」

みこと君を震え上がらせていた。……どうでもいいけどみこと君  
つて一人称「俺」なんだね、さっきまでは私に気を使ってくれてい  
たのかな？それに女の子—— はやてちゃんというそうだけど……O  
H A N A S H I って何？何故かその言葉に恐怖を感じるよ…  
…平和的なことのはずなのに……。

あとおじいさん、そんな微笑ましそうに笑ってないで止めなくて  
いいの？カメラで二人を写してる場合なの？

……こんなことあ少し間続いていたが、はやてちゃんの気が済  
んだのか、「じゃあ、お昼にしようか！せっかく新しい友達もできた  
ことやし！」と笑顔で私に言ってくれた。

最初友達という言葉に驚いたが、はやてちゃんは、



「だって、みこっちゃんとはもう友達なんやろ？ だったら私もふーかちゃんの友達や！ …それとも私が友達になるん嫌？」

と涙目の上目づかいの強力コンボで言ってくれるので、慌ててそんなことないと言つと、さっきの涙目はぱつと消えていてあれが演技だったのかと思うと、なんだかこの子なのが狸に見えてしまつた。

…狸耳と尻尾のコスプレが似合いそうだと思つたのは私だけじゃ無いハズ。

そのあとお昼をご馳走になった後、はやてちゃんの強い要望でそのまま学校には戻らず、夕方まで三人で遊ぶことになり、学校は下校し終わった後、荷物を取りに行くことになった。

・・・楽しい時間はあっという間というが、本当その通り、気づけば夕日が沈みかけていた。

「おい、楽しんでいるところ悪いんじゃないが、そろそろ帰らんと夕飯の準備もあるしの。」

「ええ〜、もうそんな時間なん？つて、もうあんなに夕日が…。こんなに楽しかったんはホントいつぶりやるか。じゃまたな！ふーかちゃん！また遊ぼ！ みこっちゃん、ちゃんとふーかちゃんを無事にお家にお送りするんやで？これに失敗したら夕飯は抜きや」

「うん、わかってるつてば。それにそんな暗くないんだし、そんな心配しなくても大丈夫だつて。それじゃ、聖祥だっけ？そこにある荷物をとってからふーかちゃんを家に送ってく、この任務、ちゃんと遂行するよ」

「任務つて大げさな…。でも、ありがとう。はやてちゃんもまたね！今度はもっと遊ぼうね！約束だよ！」

「うんっ！今度はうちに遊びにきてな！目いっぱいもてなすから！」

「ありがとう…。それじゃあまたね！」

名残惜しいかったけど、はやてちゃんとまた遊ぶ約束をして私とみこと君の二人は聖祥に向かった。その時二人っきりの状況が恥ずかしくてあんまり話かけられなかったのだが、「今日は楽しかった？」と聞かれたのすぐに「うんっ！今までで一番楽しかった！」と言うと彼も笑顔で、良かった、と嬉しそうにしていた。そして、今度は何して遊ぼうかと話していると、不意に、

『あれ、嵐山？学校サボってなにやってるんだ？』

・・・目を向けるとそこにいたのは、私を虐めていたグループの主犯、私が殴った男子、児玉が嫌みったらしい顔を向けてきた。周りには取り巻きたちが二、三人：相変わらず一人では私に向かう勇氣も無いくせに：そう思って黙っていると、みこと君が私の前に出て、

「ちょっといい？ここはまかせて。」

・・・その時の顔は怒りというよりは、なにか、呆れている様だ  
った…

S I D E O U T

S I D E 命

はあく、おっと、いきなり溜め息吐いてる場合じゃねえや。

風花ちゃんを送っている最中に声をかけてきたのは、…まあ何と  
言うか、成金小僧？というか、まあ嫌味という言葉がそのまま名前  
でもよさそうな奴とその取り巻きたちだった。

なんだこいつら？と思っていると、風花ちゃんが何かに耐えるよ  
うに押し黙っていた。…なるほど。何となくこいつらが虐めに関  
わっている奴らか、寄って集って一人を虐めるとか…なにやってん  
だか。そう思い、風花ちゃんに前に出て、一言かけ、仮名イヤミと

愉快的仲間たちと向き合った。

「ちょっといい？俺はふーかちゃんの友達で命っていうんだけど、何か用？」

最後不機嫌な感じになったが、なるべく平時と変わらない調子で声をかけるとイヤミ達は何か慌てた様子で、

「と、友達だって！？おまえ、馬鹿じゃないのか！？そいつのこと知ってるか、そいつは凶暴ですぐに人を殴るし、誰もそいつに近寄らないんだぞ！？そうか、お前そいつに脅されてるんだろ？」

・・・なんかわけわからん。言ってる事の意味がさっぱりだ。風花ちゃんから大方話を聞いていたが今ので確信した。

こいつが風花ちゃんを虐めている連中の主犯、確か名は…まあイヤミでいいや、とにかくこいつが風花ちゃんを…そう思うと何か手の方がチリチリとしてきて見ると、俺の内心の怒りが漏れるかのように火花がバチバチイッ！と弾けていた。そんな俺の様子に気づかずアイツは喋っていた。

「そうだよな、脅されてなきゃ、そいつと友d」やかましい(ボウツ)  
「ひいひいひい!?!」

これ以上、コイツに何か喋らせると風花ちゃんは泣きそうになるし、俺も昔の虐めの事を思い出し、イライラするので手っ取り早く黙らすために、足元に向けて火を放った。

「うるせーよ。脅されているならこんな仲良くするわけねえだろうが…俺がふーかちゃんの事好き(友達として)だから友達になっただ。これ以上もしふーかちゃんをばかにするようなら…(シユシユツ)」

そういつて俺は怒りを発散させるために、（相当手加減して）火竜の力を解放した。

・ ・ ・  
龍ノ炎 りゅうのえん  
壱式 いちしき  
崩 なだれ

解放した崩によって生じた火球を一つの大きな塊にしてイヤミの目の前にそれ固定した

「…こつちもお前を燃やすから、もし虐めを続けるっていうなら…  
…わかるな？」

自分でも驚く程冷たい声だったが、功を奏したらしくイヤミ達が泣きながら「も、もうしません！だ、だから、許してください！」  
と言ってきた。ふう〜と溜め息と同時に崩を消して、一言

「だったら、ふーかちゃんに謝れ、そして、二度とこんなことをするな。友達として言いたい事はそれだけだしな。それと、さっきは怖がらせて悪かった、でもさっきの言葉は本気だからな？」

あんまり子供をビビらせるのはさすがに良心が痛んだので、最後の方は苦笑しながら謝った。もちろん、釘は刺しておいたが…

その後、イヤミ達一同はふーかちゃんに謝った後、他のクラスメイトにも無視をやめるように頼むと言って帰っていった。……帰り際俺を「兄貴！」と言っていたのは気のせいだと思う、他の連中は涙目だったし。

そして、その後は何事もなく学校に着いて、荷物を取った後、学校を抜けた事を知って迎えに駆けつけていた親父さんと一緒に帰って行った。



・・・イヤミ達と別れてから何かずつとボケーっとしてたり、いきなり顔を真っ赤にしたりしてたけど大丈夫かな……風花ちゃん。声かけても「なっ、なんでもにやいによ!?」と呂律も回っていなかったし……

S I D E O U T

・・・その頃の嵐山親子はというと

「お〜い、風花や〜い。どうした？何かずつとにやけたりして。それに顔も真っ赤になって……ハッ!?まさかつ!?さっきの小僧!うちの風花ちゃんに手をだしおったなああああつあああ!!許さんっ!!絶えええ対ツツに!!パパはユルサンゾー……!!」

方や途轍もないほどブチ切れ、もう一人の方は……

「（ほへえ〜）……さっきのみこと君カッコ良かったなあ〜  
火が出たのは謎だけど、私の事好きって……まさか最初に私に抱き  
ついたのも！？いや〜、どうしよう！まだ私小2だしはやいよ  
でももっ！」

一人妄想していたそうなの。割とたくましい少女だった。

第一話 「風との出会い、夜との出会い 後編」 (後書き)

作者「自分ができるシリアスってこんな感じだなあーと思うと気が滅入る…」

はやて「他の作者様の作品読んで勉強しい」

作「厳しい…でもそうだよなあー。勉強するなら他の作品を読むのもいいよね」

は「そや、勉強で思い出した、テストそろそろやる？大丈夫なん？」

作「・・・」

は「ちよつと・・・頭使って勉強しよか？」

作「無理に原作主人公の台詞使って言わんでも…」

## 第二話 「ある日の日常・・・とそれから」(前書き)

作者「今回やっと魔導具を出す事が出来ました！何か使い方に違和感があるかもしれませんが、原作を読んで「こういうこともできるんじゃない？」と思いこのようにしてみました。あと、オリキャラの風花ですが、見た目はまんま原作風子の幼少時です。つまり、使用させる予定の魔導具も・・・」

命「ネタばれ禁止！！」

第二話 「ある日の日常・・・とそれから」

S I D E 命

「うーん、朝にランニングって前<sup>ぜんせ</sup>じゃ考えもしなかったけど、割といいかもしれない… 誰もいない中をこうやって走るのも悪くないかも。」

「（うふふ、いくら強化した体に慣れるために運動を始めるって言っても本人のやる気が無い と続かないものねえ、そういう風に思ってくれると嬉しいわあ）それじゃ、そろそろ戻らないと。朝ごはん、今日は確かはやめちゃんの当番でしょ？遅れると怒られるわよ」

「ははは…、じゃあさっさと帰らないとロ」ちなみに、あと十分ねえ」そういう事はもっと早く教えてってば!？」

どうも、命です。最近日課になっているランニングですが、これには理由があるんです。

以前風花ちゃんを助けるときに、ドラゴンの状態になって初めて気づいた事だけど、体が以前の感覚とはまるで違うのです。

なんつーか、例えば、ドラゴンだと体の重さを感じないような速さで10キロ走り切ってもまるで息切れしない、タイタンだと、溝に嵌まった大型トラックを一人で持ち上げてしまう等、実際のクマガ程ではないけど、少なくとも一小学生級の持つスペックではありません。…人としてもおかしいスペックではあるけどさ…

しかし問題もある訳で、普段の白《グローイング》ですら成人を上回る能力で、普段の中でも気を抜いてしまうと、コップを握りつぶしたりしてしまい、はやてちゃんにハリセンで叩かれてしまうことがあったりして、今では各能力毎に毎日使い分けて、慣れる訓練をしています。

……別に戦闘訓練ってわけじゃないよ？あくまでもいざって時の保険みたいなもんだし、そもそも、人に向かって使うにはいかんせん強すぎなんだよなあ……この力。

でも最近、この力を使わないとまずい場面があったなあ。

最近うちに良く来るようになった風花ちゃんんだけど、一度家に招待されて、はやてちゃん共々遊びに行ったんだけど、びつくりしたね。だって、家の門（普通に家庭に門ってあるものなのか？）を潜ると、いかにも武家屋敷といった豪邸がそこにはあった。

なんでも風花ちゃんのうちは「嵐山組」というこの町有数の極道の組らしく、それを聞いて二人して泣きそうになったが、風花ちゃんいわく、極道といっても白い粉や吸うと気持ち良くなるガスを扱ったり、暴力団と血で血を洗う抗争など一切しないで、ただひたすらに任侠道を極めるための組らしく、むしろ他の組同士の争いを抑える抑止力として、この町で一番偉いらしい月村ってところからも信頼されているそうだ。

・・・もうそれって極道と違うくない？・・・多分はやてちゃんも同じような考えなのだろう、話を聞いて、俺と同じような苦笑いを浮かべていた。

と、まあこのように感じで俺達が話していると...

「キサマかあああああ！うちの風花ちゃんを誑かした小僧はあああああああああ！！」

「ちよつと！？やめてよっ！パパツ！それに誑かすなんて...そんな.....あの」

・・・ドスを構えた、「いかにも、私が親分です」と言わんばかりの風貌に、背後からは般若が見えそうくらいに怒気を孕んだ隻眼のおっさんがいた。あと、風花ちゃんが妙に顔を赤くしていた。謎だ。だけど、いまはそれどころではない。



・・・小僧っていうと俺か？てことはこの人は俺に対して何か怒りを感じているみたいだな。

・・・あれ？このままだとやばくね？

そう思い立った俺の行動は迅速そのもので、

「何か知らないけど、とりあえずすいませんでしたああああああ  
！！(ダッ)」

アークルをコンマ2秒でドラゴンに切り替え、脇目も振らず逃げ出した。

・・・その時ドラゴンを発動させているにも拘らず、2時間も俺を追いかけてきたあの人は多分、生粋の化け物に違いない。

その後、俺の危機を感じてやってきた（家にいたが何かピンときたらしい、鬼○郎のアンテナ的なやつか？）じいちゃんが「おんどれは、何子供に刃物向けとんじゃコラツアツアアア！」と普段の口調なんか忘れ、返り討ちにしていた。その際去り際に聞こえた「・・・小僧、覚えとけ・・・」の声に腰が抜けるくらいビビったのは秘密だ。

そんな事を考えているうちに、八神邸に到着。なんとか朝飯にも間に合って、はやてちゃんを怒らせずに済んだ。ちなみに、この家でまともな食事を作るはじいちゃんとはやてちゃんなので、実質俺はこの家のヒエラルキーは最下層、つまり、二人には全く頭が上がない状態だ。∴食事を握られると人って弱いね。

その代りといつてはあれだけど、買い物はほとんど俺の担当で、その身体能力を生かし、タイムサービスでご近所の主婦をして「あの子には敵わない」と言わしめるほどで、主婦や店の人からは何気に一目置かれている。近所にはそれなりに顔が知られていて、風の噂で俺の事が「漆黒の狩人」なんて呼ばれているなんて聞いたときは、

「はっはっは！なんやそれ！厨二病のひどい人が考えたような名前！！！！」  
「いっそ『シユバルツハンター』とかにしてみる？ なっはっはっはっ！」

「……めちゃくちや笑われたので、魔導具の 式髪 を使ってはやてちゃんの髪型を某野菜人の王子のように固定してしばらく放置して置いたら、泣いて謝ってきたので解除してあげると、「あれはアカン、部屋から一步もでれんなってまう……」と呟いていたので今度からは自重する事に決めた。」

「……自重はするけど、また何かされたら今度は蠟人形好きのロツカーみたいにして。」

「……そんな感じで過して、しばらくして……」

「はい、皆さん静かに！今日は転入生がこのクラスにやってきます。今まではちよつと家庭の事情で学校には通えなかったそうですが、今日から皆さんと同じこのクラスの仲間になるので、仲良くしてくださいねー！」

「「「「「はい！！！！」「「「「「」

・・・なぜか小学校に通う羽目になってしまった。犯人ははやてちゃん、共犯じいちゃん、俺には逆らうこともできなかった。なんでも、「元気なくせに家でゴロゴロとは何事や！」とはやてちゃん一念発起、それに共感したじいちゃんが、

「やはり、子供が健やかに育つためには学校が一番！うん？はやてちゃんの事？大丈夫！はやてちゃんはわしがしっかり面倒みるから命は何にも気にせず学校に行つてきなさい。これが制服、通うのは聖祥じゃったか？はやてちゃんも籍を置いてるところじゃし、風花ちゃんも居る、条件はバッチリじゃ！」

と言われたその日に転入の手続きを済まされ、トントン拍子にここまでできてしまい、今教室の前にいる哀れな羊、俺。

編入テストがあつたが、まあ、難しくても中学レベルいかにないくらい、とても小学三年の解く問題とは思えなかったが、どうやらこの学校、大学までエスカレーター式の有名私立らしく、どうやらそれぐらいはデフォルトラしい。∴この頃の俺って確か逆上がりに全力を傾けていたんだが、ここはレベルが違つらしい。

そんな事を考えていると、担任の先生に呼ばれたので、教室に入つて当たり障りの無い挨拶をした。

「えっと、はじめまして。神名命といます。今までは家庭の事情で学校に通う事ができませんでしたが、今日からみなさんと一緒にいろんな事を学べる事を嬉しく思います。これから、よろしくお願ひします。」

「「「「はーーーーーい、よろしく!」」」」

・・・エライ元気だなあと思いつつ教室を見渡すと、

「・・・・・・・・・・・・・・・・（呆）」

なんか呆然としている風花ちゃんを見つけた。そういや最近はなんか忙しくって遊べなかったからこの事言っただけ無かったんだよね。丁度、俺の席は風花ちゃんの隣の窓際の一番前なので、未だフリーズ中の風花ちゃんに声をかけた。

「おーい。風花ちゃんやーい」

「・・・ハッ!? み、みこと君!? な、なんで聖祥《ここ》に! ?」

「うんっ! それはねっ! うちの権力者たちの陰謀のおかげさっ!」

「そ、そうなんだ…そんなやけっぱちになるほどの強制だったんだね……でも、ここの編入テストって難しいって有名だよ？よくできたね？」

うん？まあ、確かに小三にやらせる問題ではなかったけど…

「確かにそうかもしれないけど、ここってそういう問題を授業でも普通にやってるんでしょ？それぐらい解けなきゃ、そもそもここに居られないさ」「ちよーっと、待って？。」「うん？」

風花ちゃんと話していると横から金髪の外国人？の女の子がなんかこつちを睨んで尋ねてきた。：俺なんかしたっけ？

「私はアリサ・バニングスよ。で、さっきの話だとまるでテストが簡単みたいに聞こえたんだけど？」

「え？まあ、多少は難しかったよ。国数社理について英語まであるし、びっくりしたよ。満点取るつと頑張ったけど確か、480点ぐらいしかとれなかったし。」

そう、小学校のテストだし、とタカをくくっていたのだが、結局は満点なのは社会と国語ぐらいだった。一応前世が大学生の矜持もあったのだが、小学生にも負ける自身の学力に泣ける。…普段はやてちゃんに頭が上がらないところは見逃して欲しい。

「へ、へえ〜……………480点“ぐ・ら・い”ねえ〜へえ〜そう。」

あり？余計に眼光が鋭くなっただが・・・

「みこと君？この編入テストはね？このレベルについてこられ



る人を見るために普通のテストよりも、数段難しいって知ってた？」

・・・ナンデスト？

「それを480点って…そこにいるバニングスさんはね？この学年の中でもトップの学力なんだけど、それでも編入テストは450点が最高なのに…みこと君て勉強も凄いんだね。火も出せるし、頼もしいし…それに…」

最後の方は聞き逃したのだが、どうやら普通のテストはあんな高レベルでは無いらしい。それに、バニングスさんが怒ってる訳も掴めた。ようは自分よりテストができた俺の事を敵視っーかライバル視しているのだろう…どうしよう。

・・・俺の二度目の小学生生活はそんな不安とともに始まった。・・・

・  
・  
・  
不安だ。

第二話 「ある日の日常・・・とそれから」(後書き)

作者「早く原作の流れを書きたいがため無理な時間進行をしてしまったけど、無印まで、もうチヨイ話をはさんでいきます。」

？「ねえ？私原作主人公なのに順番が無いって……しかもはやてちゃんに先越されるって……チャキツ（レイ八さんスタンバイ）」

作「まって！？あなたまだレイ八さん持ってちゃd「バスターー」

ー！」「GYAAAAAAAAAAAAAAAAA!？」

さくしゃは めのまえが まっくらになった！

### 第三話 「少女たちから見る、少年の一日」(前書き)

作者「今回はキャラの口調を掴むための練習を兼ねているので、」  
指摘があると作者が喜びます。それでは、どうぞ！」

第三話 「少女たちから見る、少年の一日」

SIDE アリサ

「おはよう！アリサちゃん！」

「ええ、おはよう、すずか、なのは。今日も元気だなによりだわ。」

私の一日の始まりは親友の月村すずかと、高町なのはに挨拶をするところから始まる。

この二人とは・・・まあ、ちょっとした喧嘩から始まったが、それでも現在はお互いを親友と呼び合う中になった。

・・・そして最近になって私の日課になりつつあるのが、

「ちょっと！アンタッ！いつもいつもバスの中で寝てんじゃないわよ！（バシンッ！）」

「・・・ZZZ。・・・だめえ〜それ・・・今の・・・ノーク」バシンッ！」だべしっ！？」

・・・こいつ、神名命を叩き起こすことだ。

転入初日にこいつがテストで私より高得点だったことで、闘争心に火がついてしまい、「ちょっと、アンタ。今日の国語の時間の小テストで勝負よっ！」と言い放つての小テスト、私は勿論満点を出し、意気揚々に話かけて、

「ねえ？アンタ、テストどうだった？ちなみに私は満点よ！」

「へえ〜、風花に聞いてみたんだけど今回のコレって結構難しいんでしょ？」

「まあ、あ、私にかかればこんなのお茶の子さいさいってところよ。で？あんたはどうだったのよ？」

「うーん、残念ながら一問間違えてさ、バニングスさんの勝ちだよ。いや、すごいね、バニングスさん。」

よっしっ！！とこの時は内心でガッツポーズを取るほどに嬉しかったのだが・・・

「あれ？私がさっき採点した時、満点だったよね？採点ミス？」

「ちょ！？今それをいつちや！？」…「ちょっと、いい？」ほらあゝ面倒なことだ。」

「アハハ…ごめん。」

案の定、そいつのテストは満点で問い詰めて話を聞き出すと、「何か面倒になりそうになりそうだったので…」との事。それを切欠に、以来テストの度にそいつに勝負を挑むのだが、いつも満点同士の膠着が続き、未だに決着が着けられないでいる…本ツ当、まどろっこしいわね。

「アンタ！いい加減に負けなさいよ！」

「そっぴゃ、さっき魔されていたけど、何の夢？」

「……はやてに萌え太郎の壁コンで9割持っていかれる夢。ハメなしの勝負であれば酷い……。」

「私を無視するなああああああ！」

「アリサちゃん…他の人の迷惑だよ…？」

……いつかこいつには絶対ギャフンと言わせてやるんだから！



S I D E O U T

S I D E すずか

「月村！そっち行つたぞ！」

「大丈夫！（ボスっ）」

・・・今は体育の授業中でドッチボールの最中、神名君が声をかけて私に注意してくれ、私はそのボールを難無く受け止め、敵陣に向かって投げる。向こうからは、

『神名と月村が一緒のチームとか…何という無理ゲーWWW』

『頼りのバニングスと嵐山も早々に月村にやられたし…、ていうか、何でドッチのボールがジャイロ回転してんだべラッ！？』

・・・何というか：私達だけで敵相手にまさに無双のゲームのよ  
うな状態だった。私はとある事情から運動は並の人より遙かにでき  
てしまうのだが：それにしても、神名君の身体能力はおかしいと思  
う。だって成人と同じぐらいの力が出せる私を相手に腕相撲に勝て  
るぐらいなもの…

それは、休み時間中のアリサちゃんの一言から始まった。

「ちょっと、命。アンタそれなりに運動できるわよね？」

「あ？何をいきなり…。うん、運動云々はともかく、力なら並の  
人には負けないつもりだけど（普段から白だからなあ）。」  
グロイング

「フッフッフ…、言ったわね？なら！すずか！アンタこいつと腕相  
撲で勝負しなさい！そしてこいつに敗北の二文字を刻みつけるのよ  
！」

・・・アリサちゃん、なんか神名君に突っかかる事が増えて、はっちャけるようになったね…。

心の眩きなど聞こえる筈も無く、いつの間にか人が集まって、断れる雰囲気ではなくなってしまった。…こんなことになるなら、以前なのはちゃんを貧弱呼ばわりしていた人相手に腕相撲無双なんてするんじゃないかって…後悔はしてないけど。

「ちょっと！？バニングス、相手は女の子だぞ！？それを向かわせるとか……鬼か！悪魔か！それともバーニングか！？」

「ケンカ売ってんの！？いいからやるのよっ！すずかはね、以前男子10人を相手に勝ち抜いた事もある猛者よ！アンタなんかけちよんけちよんよ！」

「（口調が……。しかもけちよんけちよんとか久しぶりに聞いた  
が気がする）よ・の（の）」

・・・余談になるけど、アリサちゃんの強い要望（軽い脅迫とも言つ）により、神名君は私達もことをそれぞれ名字でだが、呼ぶ事になっている。

ちゃん付けやさん付を嫌がったアリサちゃんが言いだし、名前で呼ぶように言ったのだが、本人の強い反発により妥協点として、今のようになった。なんでもそう呼ぶことに慣れていないそうで、風花ちゃんもやっと最近になって名前を呼びすて呼んで貰えたと言っていたので、きつと名前で呼ぶのを照れているだろう。

「さあ、準備は良い！？すずか！こんな奴に負けんじやないわよ！」

・・・いつの間にか、中央に用意された机に私と神名君が向き合う形で対峙していた。

神名君は強い諦念を顔に浮かべていて、仕方のないと言い、構えていた。さすがにここまでくると、可哀そうに思えたので、為るべく早く終わらせて楽にしてあげよう。…決して、アリサちゃんの問題に対する八つ当たりでは無いんだよ？

「それじゃ両者手を組んで・・・ファイツ!!」

カンッ!

どこから持ち出したのか、ゴングを鳴らしてアリサちゃんが本物の審判さながらの掛け声をかけ試合開始、さっさと楽にしてあげようと力を込めた瞬間、

「…………ごめんっ!月村!」

そういつて、力が籠もっている筈の私の腕を難無く倒して、勝ち名乗りを受けずに「さらばっ!」と  
教室から飛び出して行った。

残されたのは、ムキーと怒っているアリサちゃんとそれを宥めるなのはちゃんと風花ちゃん、すっげーと騒いでいるクラスメイト、そして呆然と倒された腕を見つめる私だった…

そんな事があり、その時から私は彼の様子を見るようになった。本気の私に腕相撲で勝ったことをお姉ちゃんに話すと、「一応、気を付けておきなさい。」と言っていた。確かに異常な力だったけど神名君を見るとそうは思えないし、たまに所々ぬけてるし…

・・・そんな事を考えている間に、ドッジボールは私達の勝利で終わっていた。

S I D E O U T

S I D E なのは

お昼休み、私とアリサちゃんとすずかちゃんのいつものメンバーは昼食を屋上でとってるのだけど、ここに最近は・・・

「そついえば高町、風花に聞いたんだけど、三人が仲良くなったのは高町がバニングスを張り倒したのが切欠だったのって本当？」

「ちがうの！？確かに思いっきりビンタしたし、それが切欠だったのは本当だけど、張り倒してなんていないの！」

「あれ？そうなの？夕日をバックに死闘を演じてアリサちゃんとなのはちゃん強敵《ともだち》になったんだって、結構有名な話だったんだけど・・・。」

「そうそう。俺もそう聞いた時驚いたのなんのって…。まさか高町がそこまで武闘派だったなんて思いもしなかったし。」

「二人ともひどいの！」

・・・命君に風花ちゃんの二人が加わって、5人で食べる事が多くなってきました。

……それにしても張り倒したなんて…誰がそんな噂流したんだろ？これはO H A N A S H Iが必要かな？

最初は二人で食事していたところに、元々お家の関係で顔を知っていたすずかちゃんと風花ちゃんの間係を知ったアリサちゃんが、だったら二人も呼びましようということまで声をかけたのが始まりでした。



二人が仲が良いのを聞いてみるとなんでも、命君がこつちに引越してきたときからの付き合いらしく、一時期虐めを受けていたらしい風花ちゃんを助けて、虐めをやめさせたのが命君だったみたい。

その時どんな感じで止めたのか、風花ちゃんに尋ねてみたけど、お顔を真っ赤にするだけで答えてくれず、命君はただちよつと話してやめて貰うよう頼んだだけだよ、と事もなげに話してくれた……  
一体何があったんだろ？ううゝ気になるよゝ

「あつ！そういえば！」

「？どうした急に大声だして？」

「あのね、一時期風花ちゃんがいじめを受けてたのは知ってると思うけど、その時虐めをしてたっぽい人が確か「あいつに関わると燃やされる！」って騒いでいて結局、誰の事かわからないままその話も消えたんだけど……。」

「ああ、それなら覚えているわ。当時はクラスも違っていたから虐めの事は知らなかったけど、その噂は聞いた事があるわね、確か」



命君にみんなで問い詰めると、気づいたら出せるようになった。  
という単純な回答が返ってきました。

・・・にはは、気づいたらってできてたって、これって凄い事な  
んじゃないかな？

そうして命君は「このこと知られるのは面倒だから俺達だけの秘  
密にしてくれない？」とお願ひしてきたので、アリサちゃんがその  
代り、私たちのことを名前（もちろん敬称は無し）で呼ぶことを認  
めさせていました。

……アリサちゃん、そういうところ拘るなあ。なんでも対等な  
立場でいたいかららしいけど、私やすずかちゃんを巻き込まなくて  
も…私達同い年の男の子に呼びすてで呼ばれるのって恥ずかしいよ  
〜

## S I D E O U T

S I D E 風花

「あゝあ。別に火を出せる事がばれるのはまだ良かったんだけどなあ。まさか、バニィ、違うか、アリサに名前で呼ぶ事を強制させられる事になるなんて。しかも他の二人まで……。」

「まあまああ、しょうがないってば。相手がアリサちゃんだし、今までも言ってたんだし、良いじゃない。……。まあ、私やはやてちゃん以外をそう呼ぶのはなんか気に納得いかないけど……。」

……。帰り道、アリサちゃんたちはそれぞれ塾に通っているため帰りは別になっていて、今はきやてちゃんと遊ぶ約束をしていたので一緒に帰るところだ。

最近、こうして二人っきりの状態になる機会が少なかったのも結構、いや、かゝなり嬉しい。

でもまさか、命君の火の事はともかく、名前を呼びすてにするなんて……今はまだ心配はいらないうけど……まさかね？

そうこう思っていると、いつの間にか家に到着していた。

「そういえば、はやてちゃんに今日は重大なお知らせがあるってメル来たんだけど、何の事が知ってる？」

「それは、家に入ってからのお楽しみということ。まあ、俺の事でちよつとね。」

「命君の事？」

「そう。三人には炎術、俺の出す火の事なんだけど、その事もばれなし、だったら風花にはも一つ教えてもいいかなあ〜って。」

それって、三人よりも私のほうが特別ってことだよな！？それにもう一つの秘密ってなんだろう？

そう思いつつ、家の中に入ると、どこからともなくはやてちゃんの声が・・・

「ふっふっふ……どうや？声は聞こえるけど姿は見えん。しかもスピーカーではない肉声！

しかも背後からいきなりの突撃いいい！」

……丁寧に背後からのテレフォンアタックを避けたつもりだったのだが、それでもはやてちゃんの姿は見えなかった。一体どこ？まわりをきよろきよろ見ながら探していると。命君が、

「はやて〜、驚かしたい気持ちわかるけど、突撃はだめだろ。さっさとでてきなさい。」

そう言って、何も無いハズの場所を掴むようにしてそこを引つ張ると、そこにはぺこちゃん人形のように舌をだしたはやてちゃんがいて、何も無い筈の命君の手には、カーテンぐらいの大きさの布が握られていた。……いつの間にか？しかもはやてちゃんはどこから？

私の疑問を察した命君はその布を見せながら、少しだけ胸を張りながら、

「驚いた？これは魔導具 臃。今日風花に教えたかったことってのは、これの事。」

そう言った。

・・・そうして私は魔導具という不思議なモノを知り、これを切欠に私は非日常に一步踏み出した。

### 第三話 「少女たちから見る、少年の一日」(後書き)

アークル「うーん、何かしらこの紙？ええっと、「次回は今後使うであろう魔導具の解説役として活躍してもらおう予定(ここ大事!)」なのでアップしておいて下さいBY作者」か、うーん？腕輪なのにどうやってアップすればいいのかしら？発声練習？」

雪而「ちなみにわしもちよっただけ解説ができるようじゃな、まあ、準備といっても作者が書かないとわしらは基本なにもできないのじゃし。ゆっくり命とはやてちゃんを愛でる談義でもしておれば良からう。」

ア「それもそうね。じゃあ、また次回お会いしましょう。さよなら。」



#### 第四話 「少年の想い、少女の決意」(前書き)

作者「一応、今回で物語に登場する魔導具はほとんどです。」

命「でもまだ、鉄丸とか、出してないものもあるみたいだけど、それは？」

作「いやだって、光界玉とかはチートだし、雷神とかもそうだけど、リスクがでかすぎるし、一応書かれてはいないけど、鉄丸は所持してはいるが、まだ呑み込んでいない状態で、君と風花はそれぞれ蔵王(NARUTOの忍具入れのような形状のもの)の中心に「蔵」と書かれた宝玉がついたもので、本来はただの宝玉ですが本作ではこのような形を取らせています(に魔導具を収納していつも持ち歩くようにしています。あとは、いまいち作者がうまい使い方を書く自信がなかったから。)」

命「(そこは頑張って欲しかった...)へ、へえ、ところで、それ以外に形を変えたものってある？」

作「うん、韋駄天の見た目が少しスタイリッシュな感じなぐらいかな。」

## 第四話 「少年の想い、少女の決意」

### S I D E 命

ホントの事言うと、風花には魔導具の事や、俺とじいちゃんの事情などを話す気は無かった。無かったんだが、ちよつとした事があり、話した方がいいという事になったのだ。

・・・別にはやてに脅されたわけじゃない、色々と事情が変わってしまったのだ、面倒な事に…  
今では、うる覚え程度だが、俺が尚久だった頃の記憶の最後、転生直前のことだが、俺の転生先を決めるくじに書かれていたのが「魔法少女リリカルなのは」だったと思う。

…って！なのはってクラスメイトのあのなのは！？・・・それに気付いたのは、食事中に新しくできた友達の事を話していた時、

「なのはちゃん？どっかで聞いた事のある名前のよくな気が？」

「はて？そう言われると大分前にそんな名前を聞いた事があったよ  
うな、無かったよ……。」

「忘れたの？転生したこの世界の名前。」

「……あっ」

以前一緒に暮らそうとなったときに、はやてにはここがある物語  
に似せた世界であると話していたのであったんだが、まさか、主人  
公と関わってしまうとは……

まあ、今のところは事件も何も起こって無いみたいだが、こうな  
ってしまつとちょっと困る。元々はそういう、原作の話（何が起こ  
るかかわらんが、知らないし）には関わらないつもりだったのだが、  
主人公という歩く事件フラグのような人（そっぴやコン君も毎週

のように事件に巻き込まれるし」と知り合ってしまった以上、何が起ころか・・・

ということで家族会議の結果、とりあえず友達のなかでも、特に仲良くしている風花には事情を説明し、巻き込まれた際、自衛ぐらいはできる心構えをしておいて欲しいという事になったのだ。

アリサやすずかとはまだそれほどの仲という訳ではなく、信じてもらえなさそうだったのでまた後日、ということになり、まず風花を家に呼んで、軽くはやてに魔導具を使って風花に魔導具の事を理解してもらい、同じ魔導具のアーケルに大まかな説明を任せることになり、質問などはじいちゃんが受け持つながれになった。・・・あれ？俺いらなくね？

S I D E O U T

S I D E 風花

最初、魔導具という言葉を引きいて「???」となっていたが、命君が「まあ、魔導具の事は魔導具に説明してもらおうか。」と言い、私に右腕を差し出すと、手首から浮かび上がるようにいつもつけているブレスレットが出てきた。何コレ!?手品!?と思っていると、

『はい。こうして会話するのは初めてかしら?いつも会ってるけどねえ』

「えっ!?!どこ!?!またはやてちゃんの悪戯!?!今度はどこ!?!」

『違うわよ。こっちこっち』

「こっちって…。ブレスレットしか」せかい 『嘘…、これ喋ってる…。』

そういつと、ブレスレットは、「驚いてるわね」と妙に間延びした気の抜ける声で言った…。それは驚くよ!普通ブレスレットは喋るものじゃない!?!?

混乱の最中の私だったが、はやてちゃんに促され居間に通されて、そこで、雪而さん、ブレスレット（アークルさんというらしい）に今日話したかった事、命君のまだ知らなかった秘密について語られた。

・・・そこからは、驚きの連続だった。

いわく、二人、正確には命君が本来は一度死んだ人間で、守護霊だった雪而さんの計らいでこの世界に転生していたということ。

いわく、命君の異常な身体能力はアークルさんの能力で、なんでも融合しているらしく、取り外しが出来ないそう、心臓にも魔導具が使われているということ（血を固めているんな形にしていたが、見た目は結構グロかった）。

いわく、この世界ではなのはちゃんが必要な人らしく、私や周りの人も何がしかの事件に巻き込まれるかもしれないということ。

その他にも、アークルさんによる魔導具教室が開かれたけど、その際ももつと驚いた。

初めにはやてちゃんが使っていた 朧 という魔導具を筆頭に、水を固めて剣にするもの、色々な形に変形するもの、物の大きさの拡大・縮小ができるものなど、ドラちゃんもびっくりする程の道具の数々に正直頭がパンクしそうになったけど、重要なのはそんなことじゃない、一番重要なのは・・・

「(ずるいよ！いくらはやてちゃんは家族だからって命君の秘密を知ってるなんて！しかも！ここに落ちてきたのは偶然だったって話だし、だったら！うちに落ちてくれば良かったのに！！)」

「まあ、説明はこんなものか……って、風花ちゃん？どうしたんじゃない？何かすごくおっかない顔になつとるぞい？」

「（もし私の家に落ちてきてくれたら、今頃二人は……）……ッハ！？い、いえっ！なんでも無いんです！ただちよつと世の中はこんな筈じゃない事ばかりだと……。」

すごく不思議そうにされたので慌てて話題を変えることにした。

「あ、あのさ！いっぱい魔導具があるわけだけど、二人は何かお気に入りの物ってある？」

多少強引だったけど、二人はそれぞれ思案した後、いくつかの魔導具を出した。

「うーんとなく、私やったらこの 朧 と 無明&門構 と 土星の輪 かな？」



はやてちゃんが取りだしたのは、先ほどドツキリで使用した姿を消せる布と、玉と籠手がセットになっている物と、中央に（土）と書かれた石の置かれている指輪だった。

無明 という魔導具は魔導具の核などに書かれている文字を変えられる能力があつて、門構 の文字を変えることで様々な能力を使えるそうでなんでも異空間への門を出せたりする能力や色々あつて、はやてちゃんはそれを荷物の出し入れに使っているみたいで、買い物の方に重宝しているとのこと。

・・・その時命君が「平和的な使い方だなあ」と呟いていたけど何でだろ？

土星の輪 の方はというと、着けた者の身体能力を大幅に強化するもので、はやてちゃんはそれをほとんど普段命君をどつくためを使用しているとか…（本人は、「どつく違う！ツッコミャ！」との事）

ちなみに 臙 の使い道は基本ドッキリ用で、背後から姿を消して忍び寄り、相手を驚かせたり、女性相手だと胸を揉むらしい・・・ある意味相性最悪の組み合わせだともうなあ、犯罪的な意味で。

はやてちゃんの説明が終わると、次は命君が、

「俺の気にいつてるのはほとんどが武器だからな、あんまり使わないとは思うけど一応は俺も教えとくよ。 鋼金暗器、 閻水、 夢幻、 飛斬羽、 嘴王、 帝釈廻天、 神慮伸刀、 束縛鞭天、 とまあ、こんなもんかな？」

「お、多いね…。しかも、ほとんどがなんか厳つい武器だし…。」

「・・・ほつといてくれ。前世の時からめっちゃ憧れてんだ、これぐらい贅沢したっていいだろ。」

「やゝい、厨二病。恥ずかしいで？」

「……………式髪。」

「やめてっ！もうズビタリアンは嫌や！」

「……………あはは」

……………なんか説明してくれる雰囲気じゃなくなっちゃったなあ。そう思っていると言而さんが声をかけてきた。

「すまんが、風花ちゃんに頼みたいことがあるんじゃないか……………」

そう言つと本当にすまなさそうな顔とトーンで、

「……………どうか、命の手助けをしてくれんかの？」

「？手助け？どっちかっていうと私がいつも助けて貰う事の方が多いんですけど・・・」

「いや、日常の方もそうなんじゃが……、頼みたいというのはさっき話した事件云々についてじゃ。」

はて？事件の事といわれても命君は「まあ、面倒だし巻き込まれたくはないなあ」とか言っていたけど・・・私に何かすることって…

「実はの、あやつも口では怖い、面倒など言ってはおるが実際は多分関わっていくと思うんじゃ。」

臆病なのに、自分より周りが傷つきその家族が心配することの方を嫌がるからの。本人は否定するじゃろうが、あの子はやさしい子じゃ。わしとしては、一度死なせてしまった命に危険な目に遭わせたくはないんじゃ。勝手なことを言ってるのは承知しておる、わしの我儘なのも承知しているが、わしが神族ということでこの世界の物語への干渉はできない。そこで命と近く、この秘密を知っている風花ちゃんに手伝ってほしい。わしもできる限りのサポートはするつもりじゃ、だから頼む、力を貸してくれ。」

そういつて、雪而さんは頭を下げてきた。

結構命君との付き合いが長い私だ、命君の行動など大体の予想がつく。きつと傍観するふりをして、なのはちゃんの事を気にかけて、どうしようも無いような時だけ出ていく事だろう。かつて、私を助けてくれた時のように……。

だが、今度は訳が違う。相手が子供ではなく、得体の知れない相手なのだ。いくら、命君が強かったって彼はそもそも戦いを好むような性格ではない。どんなことが起こるのかもわからないし、戦う事が無いとは、言いきれない。だけど、それでも彼は怖がりながらもきつとそこに行ってしまう。そんな予感がするのだ。

そうとわかってて、私にその申し出を断るといふ選択肢は頭から消えていた。だからこそ私は……

「こちらからも、お願いします。私にも魔導具を、戦術を教えてください！私、命君の力になってあげたい！」

・・・自分から非日常に足を踏み入れた……。

そこから、私の協力を最後まで渋った命君を全員で説得し、はやてちゃんも後方支援系の魔導具で支援する事になった。

はやてちゃんは新たに 影界玉 という影を使った遠隔視でサポートし、私は魔導具のなかから、 風神 、 砲鬼神 、 鬼の爪 、 韋駄天 、 海月 という魔導具を受け取り、アークルさんや雪而さんの指導の下、口では語りたくもないような特訓をさせられた。…愛の鞭って予想の遙かに上をいくんだね、知りたくは無かったよ…

いくら自分が手出しできないからって、神通力使った訓練はあん

まりだろう、二人がかりでも一発入れるのが限界とか、どれだけ強い  
のさ、雪而さん…。

…唯一の癒しは戦闘訓練中に発現した風神の意志を持った精  
霊？が出てきたことかな。この子の可愛さといったらもうっ！はや  
てちゃんと一緒にモフモフさせていただきました。

そして、日々を特訓で過ごして、訓練で傷がつかないようになっ  
てきたある日の朝の事、

「うーん、おはよ、白ちゃん。にしても、昨日は変な夢みたなあ。」

「おはよ、ご主人。変な夢ってどんな夢？」

「それがね、変な服を着た男の子が怪獣に襲われていて、ボロボロ  
になりながらなんとか助かったみたいけど、最後に助けてって言  
って…そこで目が覚めちゃったの。変な夢でしょ？」

『でもまあ、ご主人が命以外の男の夢を見るなんて・・・これは運命の出会いってやつじゃない？』

「なっ！？違うつてば！？そんな事無いよ！？確かにその子の顔立ちがきれいだったけど……ってそうじゃない！私が好きなのは・・・その・・・」

『はあく、相変わらず初心なご主人だねえ〜。』

・・・その時は運命の出会いなんかじゃないと思っただけど、これはある意味において、確かに運命的なものだったのだと気づくのは、そう遠い事では無かった・・・



#### 第四話 「少年の想い、少女の決意」(後書き)

作「次回いよいよなのは様覚醒ですが、ちょっと原作と違うところもでてくるかと・・・。」

な「ふえ？それってどこが？」

作「具体的に言うとフェレット君の性格がちょっと変わります。」

な「どんな感じなの？」

作「さすがにそれは…、ただ原作を見てて思ったんだけど、あの子には確かに責任感があったからこそ、あんな事になってしまったんだけど、9歳の子供ならもっと子供っぽい理由もあると思うので、少し我儘というか、少々プライドを高くしてみようかなと。」

## 第五話 「魔法少女とフレットと」(前書き)

作者「原作の流れに沿うべきか、どうか・・・」

はやて「どうしたん？なんや難しい顔して。」

作「いやさ、原作の流れに沿いつつ介入させるべきか、オリジナルの展開で書くべきかどうか、と。」

は「確かに。魔導具あつたら魔導師でなくても物語に入っていけるしなあゝ戦闘面。」

作「うん、まあ原作キャラに魔導具を持たせる予定はあるんだけど、戦闘よりも日常のドタバタで使えたらおもしろいかなあつて思いまして。」

は「ポケの度に瀕死になりそうやな・・・」



事の始まりは今朝みた変な夢でした。

この事をいつものメンバーに話してみると風花ちゃんも同じ夢を見ていたようで、お互い変な夢だったよねーと、大して気にしていなかったんだけど、その日の帰りに頭の中に直接声が響いてきて、「誰か…助けて…。」と弱々しい声で助けを求めているみたいでした。

声が聞こえたのは、私と風花ちゃんの二人だけみたいで、アリサちゃんや命君は聞こえていないようで、私達が声の聞こえた公園に来て、茂みの中を探してみると、そこにいたのは傷だらけのイタチっぽい生き物でも弱っていたので、病院に連れて行きました。

先生に聞くとこの子はフェレットという種類の動物みたいで、しばらくすると気がついたみたいで、周りを見渡し始め、私と風花ちゃんをジィ〜っと見つめてきて、また眠ってしまいました。

その子の今後について、アリサちゃんやすずかちゃんはもう、犬

や猫を飼っているのだめ、風花ちゃんも「うちには白ちゃんがいるからなあ。」とNG、命君は、世話する自信が無いと言っていたので、私が家族に相談してOKを貰えたら、飼うということになりました。

そして、その日の夜。また声が聞こえてきたので、病院に向かうとそこには病院から逃げ出しているフェレットと、変な黒いお化け？がいました。

フェレットの方は私を見つけると、

「良かった！僕の声が聞こえたんですね！」

「ふええつえ！？しゃ、喋ったあああ！？」

・・・フェレットが声をかけてきたのでびっくりしていると、黒いお化け？がこっちに向かってきたので、喋るフェレットさんを抱えて逃げていると、

「（このままじゃ埒が明かない…そうだ！）すみません、少しの間僕の話聞いて下さい！僕は今ある物を探している途中なんです、途中で力尽きてしまつてこんなことに……。あなた「御託はいいからさつさと必要なこと言つてつてば！？」それどころじゃないよおおおおお！」「いや、ですから、」

フレットさんが何かを言おうとしているけど、そんな場合じゃないの！他の人よりも運動音痴な私にそれを聞く程の余裕は無く、必死になつて逃げていると・・・

ポツポツポツ！

シュツシュツ！

「「なつ！！？」」

何か燃えるような音と風切り音が聞こえ、恐る恐る振り返ると、黒いお化け？が燃えていて、所々ボロボロになっていました。

何が起こったの！？と慌てる私たちに、ちよつと場違いな調子の声が聞こえてきました。

「アツブネエ、あれタールかなんかの化け物じゃなくて良かった」

「確かにそれだったら引火してドツカーン！だもんね。」

・・・振り返るとそこには、私服姿の風花ちゃんとパジャマ姿の命君がいました。・・・なんでパジャマ？微妙に締まってないの…

S I D E O U T

SIDE フェレット？

思念体に襲われていた僕たちを助けてくれたのは、この子と同じ魔力資質を持った女の子と、一緒にいた少年だった。

その少年は魔力を持たない筈なのにどうしてここへ？そう疑問に思っていると、さっきまで僕と逃げていた女の子も同じ事を考えていたらしく、声をかけていた。

「な、なんでここに命君がいるの？風花ちゃんは声が聞こえていたからわかるんだけど…？」

「ああ。本当ならさっきまで寝てただけどさ、風花から電話きて「ちょっと一緒に来て欲しい。」なんて言うから来てみたらなのが襲われてるじゃん？さすがに危なそうだったからとりあえず燃やしたけど、アレ、まだ動いてるんだよね。気色悪ッ。」



確かにジュエルシールドが封印されていないのであれぐらいならすぐに回復してしまうだろう。多分この人は自分の魔力を隠蔽している魔導師だろうと予測をつけ、

「すみませんが、そのこの現地の魔導師の方、アレを封印してくださいっ！あれは危険な物なんです！」

そうお願いするが、少年ともう一人の女の子は顔を見合わせ、首を傾げた後、

「俺／＼私、魔導師なんて知らないんだけど？」

・・・信じられ無い…あれ程の事ができるのに魔導師を知らない？そんな馬鹿なこと……と思い、二人を注意深く見てみると、やはり、女の子の方には魔力があるのだがそれを使うのに必要な器官、リンカーコアが活性化していなかった。

つまり、この子は未だに魔導師として覚醒していない事になる。少年の方も念入りに調べたが、やっぱり魔力の無い一般人だった。

しかしそれだとさっきの攻撃の説明がつかない。魔力も無しにあんな事出来る筈が……

そうこう考えていると、思念体が復活し、再びこちらに向かって来てるのを見、少年は溜め息を吐いた後、

「とりあえず、俺達は魔導師では無いが、幸い、アレの足どめぐらいなら余裕だ。その隙にフェレットとなのはは、あれをなんとかする準備をよろしくっ！」

「さっき何か行ってたみたいけど、なのはちゃんならアレを何とかできるんでしょ？それまでの時間稼ぎは任せて！」

そう言うと、少年の方は思念体に接近していつの間にか持っていた透明感のある剣で思念体を斬り付け、女の子の方は、右手に装着している籠手のようなものを振るい風を放って、少年と交互に思念体を斬りつけていた。

・・・それは圧倒的な姿だった。僕には魔導師でもない一般人にここまでの動きができる事に呆然としていたが、僕を抱えていた女の子は、いち早く我に返ると、

「ねえ！？私にできることって何！？早くしないと、二人がっ！！」

確かにいくらあの二人が強くても、ジュエルシードが封印できないければ問題は解決しない。

僕は首にかけていたデバイス、レイジングハートを渡し、彼女はそれを見事、完璧に起動させた。

そして、彼女の持つ膨大な魔力量を持ってジュエルシードを封印し、戦闘でボロボロになったその場から脱した。・・・あの少年たちの持っていた武器、魔力は感じなかったけどあれもロストロギアなのだろうか？

S I D E O U T

S I D E なのは

二人の協力もあって、無事にあのお化け（思念体っていうらしいけど詳しくはわからなかったなあ…）の原因であった青い宝石を封印した後、騒ぎに駆けつけてきたパトカーから逃げて、公園へとやってきました。

・・・その際、二人の走る速さが尋常では無く、二人に手をつながれ引つ張られていたんだけど…あまりの速さに足が纏れ何度も転びそうになっては二人に迷惑をかけてしまいました。……今度からお父さん達の早朝ランニング、参加してみようかなあ…

そして、ある程度私が落ち着いたのを見計らって、自己紹介をした後フェレットさんが話し始めました。

フェレットさんの名前はユーノ・スクライアというそうで、ある遺跡を発掘した時に出てきた青い宝石、ジュエルシードを護送中に事故が起こり、ちらばってしまった21個のジュエルシードを回収するために海鳴にやってきたそうです。

こんなに小さいのに（物理的にフェレットだから）責任感強いだなあ、と私は思っていたんだけど、命君はやれやれって感じの溜め息を吐いているし、風花ちゃんも難しい顔をしています。どうして？

「あのさ、ユーノ君に質問なんだけど、その護送して時に君以外の誰かは居なかったの？」

「…いえ、確かに僕以外の人もいたんですが、あれを発掘したのは僕なんです。だから、  
僕が一人で回収しな」  
「なんでだ？」  
「はい？」

ユーノ君が話している途中に命君が声をかけました。それをどこか警戒するような目を向けてユーノ君がそれに答えました。どことなくユーノ君は不機嫌そうにしながら、

「なんでとは？僕が発掘した物なんですから僕が回収するのが道理でしょう？」

「それはおかしいでしょ？発掘したのはユーノ君かもしれない、だけど、発掘したからってそれにまつわるすべての責任を君一人が取る必要なんてない。護送中には護送の責任者がいるだろうし、そもそも突発的な事故の責任を一人で被る必要自体ないじゃない。他の人についてきてもらうなりしたらいい、考えなかったわけじゃないんでしょ？」

「……ッ！それはそうだけど！発掘したのは僕なんだ！だから」「だから、一人でしなきゃならない、ってか？満足に戦えず、現地の子供に助けを求める奴が何を言い出すよ。」「クッ……。」

そこで、風花ちゃんが言葉を引き継ぐように、

「君、気づいてる？それって結局は「これは僕がみつけたんだぞ。」っていう自己満足を満たしたいただけの行動なんだよ？それに私の友達を巻き込んで、危険な目に遭わせた。私達が居なきゃどうなっていたかちゃんとわかってる？……なのはちゃんは死んでいたかもしれないんだよ……！」

ユーノ君を責めるのを止めさせようとしていたのだけど、その言葉を聞き、私は頭が冷えていくのを感じた。あそこで二人が助けてくれなかったら、そう思うと体が震え、その時の恐怖を思い出した私に気付いた風花ちゃんが、私を抱きしめて頭を撫でてくれて、「大丈夫、私も命君もついてるから。」と私の震えが止まるまでそのまま置いてくれました。

普段はアリサちゃん達ほど話をしない風花ちゃんが私の事を大切に思ってくれていることを知り、とてもうれしかった。命君も私達を見て優しく笑ってくれていました。

風花ちゃんが私を放して、私はさっきの風花ちゃん言葉を聞き頂垂れているユーノ君に今後の事について話しました。

「あのね、ユーノ君？これからの事なんだけど、ジュエルシード探し、私に協力させてくれないかな？」

「でも……その人たちの言うとおり、僕はさっき自身の短慮のせいであやうく君を大変な目にあわせてしまふところだった……それなのに何故？」

「うん、確かに怖かったよ。でもね、今度は私以外の人があんな目に遭うかもしれない、それは私の知らない人かもしれないし、お友達かもしれない。誰かがあんな怖い思いをするのはいやだよ。だから、私にそれを止める力があるのなら……私、やるよ！」



今度は危ないかもしれない、そういう恐怖は勿論ある。でもそれ以上に私を撫でてくれた手の暖かき、二人がついてくれるという安心感のほう大きい。

・・・きつとなんとかなる。

漠然とだけれど、確信を持って言うことができる。そして、ユーノ君も、

「…わかりました。協力お願いします。高町さん。」

「敬語じゃなくていいよ。こちらこそよろしくね！ユーノ君！」

そうして、話がまとまり、このまま解散というときに、命君が、

「じゃあ、話もまとまったことだし、そこに隠れている人出てきても大丈夫ですよ。こちらの話は終わりましたし。」

「?????誰かいるの?」

いきなり声を張り上げてそんな事を言い出す命君に何の事が尋ねた時、

「いやはや、完璧に気配は消せたと思ってたんだが…どうして気づけたのかな?」

「まあ、最初からいたのに気づいてた訳じゃありませんよ。なのはが死にそうになったって話が出た時、動揺したせいか気配が一瞬洩れてましたんで…それで気づけたんですが…あなたは?」

そういつて命君は少し身を強張らせて尋ねるとそこに現れた人は・

「そついえば、話は聞いていたけど実際に会うのはこれが初めてだったね。こんばんわ、僕は高町士郎、なのはの父親だよ。」

・・・お、お父さん!?

第五話 「魔法少女とフレットと」(後書き)

作「結局ここで士郎さんを出してしまった・・・この後命は一体どうなってしまうのか!？」

命「・・・とりあえず、争いたくないので穏便に済ませてください。

」

第六話 「事情説明と命の受難？」（前書き）

ご指摘をして頂き、今回はそれになぞる形で書いてみました。

まだまだ努力の必要な身としては指摘をしていただけの事はさらなる精進につながるので「こうしたほうが良くなる」というようなご意見があれば、是非下さい！

はやて「・・・指摘された文章みて泣きそうになってたくせに。」

第六話 「事情説明と命の受難？」

SIDE 風花

「あゝ、メンドゥ。帰りた。すぐ帰りた。帰ってもいい？いいよね？それじゃ！」

「「だめに決まっている(でしょ)の！！」」

・・・今私達、昨日の事件と関係者三人はなのはちゃんの実家で、喫茶店をしている「翠屋」という店に向かっている。

実はあの後、なのはちゃんのお父さんから一体どういう事が起きているのか説明を求められたのだが、時間も遅いということとで、明日ちゃんと説明するということになった。

なのはちゃんの魔法は本来管理外世界（時空管理局とかいうのが無い世界の事らしい）の人には知られてはいけないそうなのだが、なのはちゃんが魔法を使っているところを目撃されていたみたいだったので、ユーノ君が魔法の事も含めて事情を説明することになった。

なら私達は居なくてもいいんじゃないかと意見してみたのだが、一応あの一件の関係者ということ呼びだされてしまい、ユーノ君にも魔導具の事を教えて欲しいということで、私達も事情説明に参加することになった。

命君は魔導具の事を人に教えるのが嫌なのか頻りに帰りたがるので、その度に私となのはちゃんが引き留め現在に至るといふ訳なのです。

「ついたよ、ここが私のお父さんとお母さんのお店だよ！お兄ちゃんやお姉ちゃんも手伝ったりして、私もときどき手伝うんだよ

「！」

そして、到着した翠屋なんだけど…とりあえず中に入って一番に驚いたのは働いている人の美男美女率の高さだった。

なのはちゃんのお兄さんの恭也さんなんだけど…若い。とても子供が三人もいる家の親とは思えない若さで、うちのお父さんとは大違いだった。

それになのはちゃんのお兄さんの恭也さんもすっごいイケメンだし、お姉さんの美由希さんも眼鏡とおさがが似合う美少女って感じで命君なんか少し見とれた後「なにこの顔面ブルジョワのインフレ具合!？」とよくわからないことを言うくらい驚いていた。

「おや、よく来たね。とりあえずもう少ししたらお客さんも掃けていくと思うからそれまでゆっくりしててくれ。僕からの奢りだから何でも頼んでくれて良いよ。」



「なのはがアリサちゃん達以外のお友達を連れてきたのってはじめじゃない？好きな物出してあげるから遠慮無く言っ頂戴」

「へえ〜。この二人が最近できたって言ってた友達？うん、どっちもなかなかかわいいね〜。あつ、男の子に可愛いは嫌だったかな？」

「ア、アハハ・・・。」

恭也さんは特に何も言わなかったけど…顔は良いし、性格は明るく爽やか、なんて非の打ちどころの無い一家なのだろう・・・恐るべし、高町家のスペック！命君なんか美由希さんに質問責めされていてなんか緊張してるっばいし……ああいう人が好みなのかなあ？

そうこうしてるうちにお客さんも少なくなつて、桃子さんが看板を掛けに行ったのを確認してから、さっきまでの穏やかな雰囲気とはうって変わって、三人とも真剣な表情を浮かべた。恭也さんなんかは命君の事を凄く睨んでいて、その睨まれている本人は必死で目を逸らして出されていたアイスレモンティーをストローでちびちび飲んでいた。

「じゃあ早速、昨日の事を話してもらえるかな？」

口調こそ穏やかだけどその目はとても真剣で、ユーノ君も緊張した様子で昨日の事を語り出した。

「はい。実は僕はこの世界の者ではありません。次元世界とってこことは違う別の世界で生きていて、先日僕が発掘した宝石、ジュエルシードというものなんですが、それを護送している時に事故が起こってしまったってジュエルシードがここ地球に落ちてしまった……僕はそれを探し、回収するためにやってきたんですけど一つ回収しただけで怪我して動けなくなってしまって、そこで魔力を持った人に聞こえるように広域念話で助けを求めた時に僕を助けてくれたのが、お宅のなのはさん達です。そこで僕は莫大な魔力を持っていたなのはさんに協力を求めたのですが、予想よりもジュエルシードの暴走が激しくて危なかったところで、その二人の魔力とは別の力で助けられて、後はなのはさんに魔法を使って封印して貰い、その後の事は土郎さんが昨日聞いていた通りです。」

「ちょっと待った、ユーノとやら。そのジュエルシードとやらは何故そんなに危険なんだ？そして何故そんなに危険な物を回収するの

にお前一匹だけなんだ？」

「それは…、まずジュエルシードは持つ者の願いを叶えるという機能があるんですが、それを悪用されたり、原生生物などに寄生するととても危険なんです。だからそうなる前に僕が回収しようとしたんですけど…結局、なのはさん達に助けて貰わなかったら何もできなかった…昨日の事で自分が思いあがっていたんだと痛感しました。巻き込んでしまい本当にすいません。」

そこまで言つてユーノ君は深く頭を下げた。その誠意が伝わったのか少し苛立たしげにしていた恭也さんだったが「わかっているならしい。顔をあげてくれ。」と幾分かは落ち着いていた様だ。

そして、今度は命君に向かって質問した。

「今の話を聞いてわかったが、昨日はなのはを助けてくれてありがとう。兄として礼を言わせてくれ。…そして気になったんだが、君はその魔法とやらは使えないのだろうか？ならばどうやってなのはを助ける事ができたんだ？」

「（やっぱ説明しないと駄目か）ええと、それはまあこうやって

(ボウツ) 火を出したり、後は……。」

そうやって命君は手から火を出してそれを握りつぶした後、腰の  
ポーチ 蔵王 から昨日の戦闘で使った魔導具 閻水 を取りだす  
と、飲みかけのレモンティーにさきつちよについている小さい刃の  
部分を当て、剣を生成し、「これで切つたりして、化け物を撃退し  
ましたね。」と素っ気なく言うと剣をそのまま元のレモンティーに  
戻した後、ズズツと一息に飲んでいた。

「……………。」

……あゝあゝ、みんな驚いてるなあ。私は訓練で何度も見た  
から驚きはしないけど、美由希さんは「何！？今の何！？手品！！  
？」とパニック中だし、土郎さんや恭也さんは啞然としてしてるし、  
昨日見たなのはちゃんやユーノ君でさえ「ほええええ……………」っ  
て感じにいるし……………これで火竜なんて見たらどうなるんだろ？する  
とそこは年長者、一番に復帰した土郎さんが急に、

「な、なあ、命君？ちよつと道場にきてくれないか？その武器や炎を使った戦いを見たい。」

「はい？」

そういつて土郎さんは命君を引きずりながら出て行った。それからちよつとして復帰した他の高町家の皆さん＋フェレットとともに、道場に行く途中では、

「せいっ、たっ！」

・・・ありえない速度で動きまわる土郎さんが、

「風花の父親といい、土郎さんといい、父親ってのはこつも人間離

れできるんかね…？ってうおっ！？危なっ！？ちよつと土郎さん！！  
？子供っ（スッ）、相手につ（スンッ）、こんなっ（ブンッ）、こ  
とっ（ヒュン）、してっ、（サツ）大人気無いですよって…（ヒュ  
ーン）って今度は飛び道具！？殺す気ですかっ！アンタ！！」

「いやいや、それでも攻撃をかわしている君も大したものだよ。こ  
れでも結構本気で攻めているんだけどね。H A H A H A！なかなか  
強いじゃないか！」

「にこやかに言うな—————！！！！死ぬわ—————」  
「—————！！！！」

…命君に攻撃を仕掛け、命君はそれをひたすら避け続けて  
いた。

S I D E O U T

S I D E 命

「ゼエーゼエッー、ほんと…死ぬかと思った…」（バタン）」

道場に連れられそこから土郎さんに「君の実力を見せてくれ」と言われ、その後ひたすら攻め続けられ、「本気を出してきなさいっ！」とか言っと、その瞬間その場から消えたかと思う程の高速移動（神速っていうらしい）で俺の視界から消えていたが、俺はアークルをペガサスで発動、感覚を人間の数百倍まで跳ね上げて、背後から感じた気配に反応し、カウンターを合わせるように火竜の参式、焰を纏った裏拳を土郎さんの顔面に放ち、吹っ飛ばして気絶させ何とか終わらせることができた。

これが感覚強化のペガサスじゃなく、タイタンやマイティのようにパワー強化の状態なら 焰 を使わなくても良いのだが・・・ドラゴンとペガサスはそれぞれの強化の特徴から力が他の状態に比べると劣ってしまうので補助として 焰 はとても重宝している。

・・・ていうかアークルはともかく、炎まで使ってしまうことに

なるとは……どんだけだよ、土郎さん……

にしてもだ、まさか運動音痴のなのはの家族がこうも人間離れしているとは……高町家はきつと容姿や性格以外にも、みんなそれぞれ特殊な能力を持っているに違いない。先の土郎さんの運動能力しかり、桃子さんのつくるシュークリームのおいしさしかり、なのはの異常ともいえるらしい魔力しかりだ。

きつと他の二人もフラグ体質だったり、ポイズンクッキングが作れてしまったりするに違いない。……あれ？なんでそう思うんだろ？

土郎さんが気絶したあとは、今度は恭也さんが挑もう（襲いかかろう）としてきたが、騒ぎを聞きつけた桃子さんが、背後から恭也さんの襟を掴んでそれを阻止、そのまま気絶している土郎さんをつれてどこかへと消えてしまった。その隙に美由希さんが逃がしてくれた。その直後後ろから聞こえてきた悲鳴は空耳だ。

そう納得させると俺はドラゴンを発動、風花は 韋駄天 を取り



だし装着して、アイコンタクトをかわし、それぞれその場から全速力で離れた。・・・別に桃子さんが笑顔なのに黒かったとか聞こえてきた悲鳴が断末魔のように聞こえたことが怖くなって逃げ出したとかじゃない。人様の家庭事情の詮索をしないためなんだ。うん：

・・・後から聞いた話なのだが、その時土郎さんはすでになのはからジュエルシードの回収に協力する旨を伝えてもらっていたらしく、それを手伝う俺の実力を測り、なのはを守るかどうか試していたらしい。……最初からそう言ってくれば、桃子さんが来た時に庇うことができたのに……。

そして結局なのははジュエルシードの回収、俺たちはその手伝いをするのを土郎さんたちに認めてもらえ、なのはが心配をかけたくないからと、この事はアリサたちには内緒となった。

余談になるが、帰宅してこの日の報告をしたところ、はやてには笑われ、じいちゃん、黒い笑みを浮かべ「ふっふっふ……命に手

を出すとは・・・月夜ばかりと思うなよ・・・。「とどこかへ闇討ちにでも仕掛けかねない雰囲気だったので、必死になって説得し、なんとか事無きを得たのだった・・・」

第六話 「事情説明と命の受難？」（後書き）

ここまで書いてきましたが、いい加減テストが近いのでちょっとの間が空くと思いますが（ネタが尽きたともいう）・・・ではまた！

なのは「私今回最初しか台詞なかったの……orz」

第七話 「もう一人の魔法少女は… 前編」(前書き)

うーん、今回はあるキャラの性格をちょっといじっています。  
壊れキャラにしては薄味かも・・・  
では、どござ

第七話 「もう一人の魔法少女は… 前編」

S I D E    フェイト

・・・私は未だかつてない緊張感に包まれながら、その時を待つ

・・・

・・・時間まであとわずか。まわりがざわつき始める中、一人黙してただ獲物の事だけに集中する。

狙いはただ一つ・・・今日のタイムサービス限定で先着一名にのみ与えられるそれは……



「ふうはっはー！残念だったな 金の死神 ！！今日の特売品は俺のモノだー！ー！」

「クツ！あなたはもしかやあの！！？」

「ふっ、誰が呼んだか 漆黒の狩人 とは俺の事っ！最近俺がいな  
い間に金髪紅眼の少女が 金の死神 などと呼ばれ、巷の主婦の皆  
さんを騒がしていたそうだが駄菓子菓子！！そんな厨二くさい名は  
二つもいらん！俺だけで十分なのだ！！」

「ああっ！？そんな！？カツコイイから結構気に入っていたのに！  
？……って！？私のシャトーがあゝゝ」

・・・私は本日の夕食を逃してしまい、仕方なくその隣に置いて  
あった特選豚ロース800グラムをこれまた仕方なく購入し、清算  
を済ませた。するとそこに彼がやって来た。勝者の余裕？そんな感  
じに思っていると彼はさっきの覇気のある表情とはうって変わった  
すまなそうな顔で、

「いやゝ、さっきはごめんね？別にこれを狙ってた訳じゃなくてさ、

本当はそっちを狙っていたんだけど、あんまり君が速くつてさ。自分でも思わずあんな対抗意識を燃やしちゃってついこっちを手に取っちゃって……。それで提案なんだけど、このシャトーブリアンと君の豚ロース。値段は一緒なことだし交換しない？」

そんな提案をしてくれた。思わぬ朗報に「やったよアルフ！私やったよ！」と内心でガッツポーズし、

「ありがとうございますっ！漆黒の狩人さん！！」

「やめてくんない！？さっきはテンションMAXだったから良かったけど、素の状態でその二つ名は痛すぎるっ！主に俺のメンタルに！！！」

そんなこんなで交換した後、二つ名で呼ばれるのは嫌という事でお互いに軽く自己紹介をして、途中まで他愛もない話をしていた（その際、名前で呼ぶ事に抵抗を持っていたようだったけど私が普段ファーストネームで相手と呼ぶ事を伝えると渋々納得してくれた）。



しかし同年代の子とこうして話す事が初めて（白い子とは会話らしい会話してないし…）で話していると、つつい私の事情まで喋ってしまった。

「へえ〜。フェイトはこの町には探し物を探しに来ているわけか。」

「うん、ちょっとした事情で探してるんだけどなかなか見つからなくてね、これが・・・最近白い子とその使い魔に邪魔されるけど…」

最後の声は間を空けて小声で呟いたのだが・・・

「（白い子？使い魔？それに探し物というフレーズ。これってもしかして…）なあ、知らなかったらそれでいいけどさ、その探し物って、もしかしてジュエルシードってy「命っ！それをどこで!？」ストップ！ちゃんと話すから落ち着いて。」

まさか、命がジュエルシードの事を知っているだなんて……彼からは魔力反応は感じられないけど、どうしてその事を知っているの  
だろう？すると命は、

「話すには話すけどさ、さすがにこれから話すと暗くなってしまうし……また今度にする？」

「駄目っ！この国の言葉に「善は急げや、バカヤロー」ってあるでしょ？遅くなっても大丈夫だから話して！！」

「いや、それを言うなら後半は余計だつてば……。うゝん俺が遅くなると家の二人とお客が飢えて苦しむ事になるので、二家合同の夕飯にしてその場でこっちの情報を話すって事にしない？」

「ちょっと待って。アルフにも確認を取るから……。……うん、それじゃ。命、アルフもOKだつて。そっちにお邪魔するってことでいい？」

「ああ、もちのロンですとも。大勢での食事ならばやて達も喜ぶだろうし。」

相手の家ということでも罫の可能性もあるが、相手は魔力を持たない一般人、何があっても対処できると判断し、私はその提案を呑んだ。

S I D E O U T

S I D E 風花

「ちいい！このお！ちょこまかと避ける！いい加減当たり前！」

「アルフさんっていったっけ？それは女の子に言う台詞じゃないよ？それにそんな単調じゃ、私には当たらないっだ！ほうら。そろそろ気を付けないと…。」

「（シユンシユン）…ってまた飛んできた！？厄介な物デバイスを使う魔導師だね、全く！」

「ア〜ル〜フ〜さ〜ん〜？言っときますけどこれは魔導具 海月。デバイスなんてものじゃないし、そして何よりっ！！（スッ）」

「って消えた！？今度は高速いd「私はっ！魔導師なんかじゃないっ！」「真上！？」

「とどめっ！ 風神 ！！かましたち鎌鼬ッッ！！！！」

「うわあああああ！！！！？」

そこは八神家近くの空き地で、命君が連れてきたフェイトちゃんという子に結界を張って貰い、軽〜く、お食事前の運動をしていたのだが、

「いや、運動ってレベルちゃうやろ…最後めっちゃ本気で殺る気やっただやろ？」

はやてちゃんがなんか言っているがそんなつもりは毛頭ない。それにあれはどう考えても相手が悪い。魔法も使わずアルフさんを倒した私を見て驚いているフェイトちゃんを命君が宥めているがそれも気にならないほど、今の私は機嫌が悪かった。それはもうサイコに。なぜなら・・・

「いたたた……。にしても驚いたよ。飛ぶのは禁止していたとはいえ、まさか本当に魔法無しで私に勝つなんて……。しかも傷一つつけられなかったし。」

「アルフさん？これで私が魔導師じゃないことがわかったでしょ？それと……。今度私の前で魔法とか魔導師って言葉、二度と使わないでね？じゃないと……。」

そう言いながら海月を首筋に添え、雪而さんに教えて貰った殺気を出しつつ、私の怒りを込めた視線をぶつけるとアルフさんは涙目になりながらも、「イエス、ママ！」と敬礼してくれた。うんうん、わかってくれたようで嬉しいよ。

「それにしても……なんであの子はあるに魔法を嫌っているの？言

葉一つであんな怒るなんて…ひよっとして最近有名なキレル若者？」

「フエイト、それは多分もう誰も使って無い言葉だからな？まあ、確かにアルフさんが風花の事を魔導師だと疑っていただけでこんな事になったけど、しょうがないっちゃあ、しょうがない理由が有るようなないような…。」

「それは違つよ命君！あれはどう考えてもあつちが悪いよ！命君だつて文句あるでしょ！！？」

そう、私がこれほどまでに魔法を嫌う理由。それは…

「そりやな？なのはとユーノから「もう手伝いはいらぬ」つて言われた時はさすがにムカついたけどさ。あれから考えてみたんだけど何となく理由を察してな。もう気にならなくなつたし。」

「命君は淡泊すぎるんだよ！！大体！なあにが「魔法を使えない君たちをこれ以上巻き込めない」よ！要するに「魔法を使えない君たちは役立たず」つて言ってるようなもんじゃない！何言つてんのよ

あの弱小フェレットもどきがああああ！なのはちゃんもなのはちゃんです「これ以上二人を危険に巻き込みたくないから、ここからは私に任せて」とかほざくし！私に勝てもしないくせ生言っくんじゃないわよー！！そんなに私達は頼りないかあああああああああああ！！！！魔法がそんなに偉いのかあああああああああああああ！！！！」

「「「「「ガクガクブルブル。」」」」」

「「「「「落ちつけ風花。口調が乱暴になっているし、はやてとフイトとアルフさんが怯えてる。とりあえず二人がそういう事をいったのは、一応俺達の身を案じてのことだと思う。なのは辺りは特に自分を省みない性格だし、自分でなんとかしたいんだろ。・・・まあユーノの場合は多分それ以外にもあるんだろうけど。・・・ほら！そろそろじいちゃんが夕飯を作って待ってるどころだろうから、とつと行こう。そこで俺らの詳しい話もするからさ。」

そういつて、命君はまだ怯えている二人を家の中に入るよう促し、三人は逃げるように家に入ってしまった。

「ああもう！私たちは友達なんだから遠慮なんかいらないう

のに…あの子変に人の事を気にする癖にどうしてこう・・・魔法ってそんなに優れているモノのかな？自分たちだけでも何とかできると思っているのかな？・・・もし、そうだったら淋しいな……」

・・・私の独白は誰にも聞かれる事無く消えていった。



第七話 「もう一人の魔法少女は… 前編」(後書き)

それでは後編に続きます。

ちなみに風花の実力は、カートリッジ無しなのはたちなら難無く勝てるレベルです。

訓練では、じいちゃんや命といった、人外を相手にしているためこれぐらいはできるだろうってことで

アルフ「もう二度とあの子とは戦いたくないよ・・・」

第七話 「もう一人の魔法少女は… 後編」(前書き)

うちのユーノ君。作者の妄想ではこんなかんじ

・原作では9歳らしからぬ言動(そう言ったらほとんどの子がそうだが)のユーノ君だが、彼は女子との混浴を目茶苦茶恥ずかしがっていたところからそれなりに早熟していると思われるが、それでも彼は9歳。意地になったり、我儘を言ったりもするのではないか？それに年齢に釣り合わない知識で屁理屈をこねてしまう、そんなこともあると思う。

・・・生意気で我儘なユーノ君……………良いと思うのは作者だけだろうか？

第七話 「もう一人の魔法少女は… 後編」

S I D E ユーノ

「ねえユーノ君？ホントにこれでいいのかな？何もあんな言い方しなくても二人ならちゃんと理由を説明すれば・・・」

「何を言ってるんだよなのは！君だって「危険だから巻き込みたくない」っていつてたじゃないか！それに魔法の才能があるのはとは違って一人は魔力はあつてもそれを扱えないし、それに命の攻撃は非殺傷にもできないもので、とても危ない力なんだ。それを使われると何が起るかもわからない。なるべく近寄らない方がいい」

「ユーノ君？どうしてそんな事言うの？二人は危険なんかじゃないよ！あの時だつて私を助けるために駆けつけてくれたのに！なんでユーノ君は二人にそんなひどい事が言えるの！？私はあの二人にこれ以上危険な目に遭わせたくないから、二人を説得するのに協力したのに！！」

「ま、待って！なのは！（ボタンッ）・・・なのは、どうしてわか

つてくれないんだ…彼らの力は本当に危険なものだ…」

その日僕はなのはに頼んで協力者である二人をこれ以上この件に巻き込まないためと言って、二人をの協力を拒んだ。これが最善だと思っていた。

あの二人が使う力ははつきり言って異常だ。魔法で同じことをすることはできるかもしれないがそれでもかなり高ランクの魔導師でないとできないだろう。彼らはそれを何の苦も無く扱いこなしている。

“魔導具”とよばれるそれは、ある程度訓練を積み、そこそこに適応すれば誰でも扱えるそうだが、それはつまり何の才能も無い人間でも強い力を手に入れることが可能になり、僕たちの世界では質量兵器というものに該当するものになるのではないか？

しかも極め付けは、あの炎だ。何の魔力を持たない彼が放つそれはまさしく脅威そのものだ。いくつかの型に分けて発動できるそう

でいくつかを出して見せてくれたが、そのどれもが異常なものだった。

弾幕のように放たれる炎はその一つ一つの威力だけでもなのは、  
デイベインシューターに匹敵するものだし、刃のような炎は僕の  
結界さえ易々と切り裂いてみせた。

しかも炎での結界も造ることが出来、その防御はなのはの砲撃魔法  
法 デイベインバスターすら防ぐほどのもので、結界を形成する  
点が弱点とのことだが、彼の使う炎は下手な魔導師よりも強力なもの  
だ。それ以外にもまだいくつかの炎はの型があるそうだが危険なもの  
もあるということで、残りは見せてはくれなかった。

・・・正直、彼の力は危険過ぎる……この間、僕と同じジュエル  
シードを探している魔導師の少女のこともある。なのはが危ない目  
に遭わないよう僕がしっかり守ってあげないといけないんだ……

SIDE フェイト

あの後、私達はアルフと彼の家族とさっきの怖かった子、風花という名前らしい、と軽くお互いの自己紹介をしながら、食事をし、情報を交換した。まず向こうの状況だが、

・ユーノというらしいあのフェレット。実はジュエルシードの発掘者らしく、自分の責任とかなんとかで一人で回収にここに来たそうだが、力尽き、そこで現地で強い魔力を持った女の子、なのはというらしい、あの白い少女に協力を仰ぎ、命達はそれの手助けをしていたらしい。

・が、しかし。二人にいきなり協力を拒まれてしまったらしい。その際「魔法が使えないから封印ができない」と言われたらしく、それでも足止めをしたり協力することはいくらでもあると反論すると、今度はユーノという人が「君たちの力は僕たちの世界では質

量兵器に該当するもので、それを使用すること自体犯罪なんだ。もしこれ以上何か言うのなら僕は君たちのことを管理局に報告しないとしない。」  
と半ば脅迫めいた言葉で二人を言いくるめたらしい。

「あああああ！！#今思い出しても腹立つ！！あのフェレットもどきー！！」

「お、落ち着いて、風花？わかったから！あなたの怒りはわかったから落ち着いてえ！」

・・・まあそんな事を言われるとさすがに怒りもするだろう。  
友達を助けただけでそこまで言われたのだから。でも、

「安心して。ここはそもそも管理外世界。管理局の法が適用されることは無い筈だから。たしか、ええっとチガイハウケン？だったかな？」

「なるほど、治外法権か。確かにこの世界じゃ管理局って組織、聞

いたことも無いし外国みたいな扱いになるのか。しかし詳しい事知ってるな、フェイト」

「えへへ。いつもリニスやアリシア姉さんに勉強を教わっていたからね。二人ともすごく頭が良くて、教え方も上手だから。それにね！リニスは私の母さんの使い魔ですごく美人なんだよ！！姉さんも私の元になっている人なんだけどこっちも美人で、みんな私の自慢の家族だよ！！もちろん、アルフもね！」

そうやって自慢する私をアルフは「さすが！私のご主人！良い事言う！！」と拍手していて、他のみんなも感心していたけど、

「へえ〜…って、え？元になっている？お姉さんが元になっている？姉妹だよな？どゆこと？」

私の言葉に引っ掛かりをおぼえたのか、命が尋ねてきたので、



「私はアリシア姉さんのクローンで、姉さんが「妹が欲しい！」って母さんに頼んで、母さんも」どうせなら、双子にしましょう」「ってノリノリだったらしくてね。すごいでしょ？」

そう胸を張って答えると四人とも「」「」「ほ、ほえ〜」「」「といいながら呆然としていた。

「ま、まああれだね！何というか・・・すごいアグレッシブな人なんだね。その人……」

「せ、せやな。「パンが食べられないの？」だったら小麦から作ればいいじゃない！」を地で行く逞しいお人やな……」

いやだなあ〜そんな母さんを褒めてくれるなんて……てれこてれこ。

・・・なんだか話がおかしな方向へと行っていたのでここで軌道

修正し、今度は私達の状況を説明した。

S I D E O U T

S I D E 風花

フェイトちゃんの話をもとめると、

・もともとあのジュエルシードは、フェイトちゃんのお母さんのプレシアさんが調査を依頼された物だそうで、それが事故に遭ってしまい、発掘責任者とともにこの地球にやってきたのを知るとまずプレシアさんは管理局に知らせてそっちと合流してからこちらに向かう事になっていて、使い魔であるリニスさんはプレシアさんの手伝いのため不在、お姉さんのアリシアさんは魔力は無いけどデバイスのメンテなどを受け持っているらしく、現場で動くフェイトちゃんとアルフさんの後方支援をして、連絡を取り合っているということです。

今回回収しているジュエルシードの数は3個、なのはちゃん達が持っている数が5個。あとの13個はまだ見つかっていないそうだが、管理局の人が来てから本格的に探すそう。今は発動を感知した物だけを封印している……

「……と。ここまでが今の私達の状況な訳だね」

「うん。ジュエルシードは発動しないとほとんど見つけることが困難だから……どうしても後手後手に回っちゃうけど、今のところは大きな被害も出ていないし、この調子であれば管理局がきてくれれば……」

「万事解決！って言いたいところだけど……油断は禁物、てところかな。少なくとも俺は魔力感知とかできないからなあ、できて戦闘ぐらいか？それも管理局の人が来てくれればいらなそうだし、本格的にお払い箱か？俺ら？」

「そやな。確かにもうできる事ってほとんど無いみたいやし……もう出しゃばる必要もないんちゃう？私も支援するとか言いつつも、結局すること何も無かつたし」

そういえばそうだ。なのはちゃん達のこともあるが、おそらく管理局の人がなのはちゃんの魔力を感じ取って接触を図る可能性があるそうなので、もう手伝えることも無い。

それならもうこの件に関して私達は手を引けばいい・・・そう思っているとアルフさんがこんなことを言い出した。

「あのさフェイト。この人達別に悪い人じゃないみたいだし協力してもらわないかい？ 実力はさっきみたけど申し分ないものだったし、あの白い子との協力を結ぶためにも悪い話じゃないだろ？ それにこのご飯すっごいおいしいし、リニスよりうまい料理なんて初めて食べたしまた食べたいしさあゝいいだろゝ頼むよゝ」

・・・なんだか後半が主な理由っぽい気がしたが、言ってることは的を得ている。

フェイトちゃんも少し考えてから「じゃあ、お願いできるかな？」とその意見に賛成したようで、命君に上目遣いで頼んでいた。

にしても可愛いなあ〜あの仕草。命君は普通に「じゃあ今から電話してみる」と普通に答えていたけど……

あんなに可愛い仕草に一切動揺しないなんて……美由希さんのときはドギマギしていたのに……ひよつとして命君、年上がいいのかな？あれ？そしたら私、好みじゃない？まままっ不味いよっ！？

……私のそんな葛藤もいざ知らず、命君は電話を高町家へと繋いだ。

S I D E O U T

SIDE 命

「(purrurr)ガチャ(はい、高町です。」

電話にでたのは恭也さんだった。今はさすがに話しずらいが頼まれた以上はちゃんとしとかなないと・・・

「あの、神名ですけど・・・なのはさんは今代わってもらって大丈夫ですか？ちょっと話したいことがあります。」

「ちょっと待っていてくれ・・・おい、なのは！神名君から話があるそうだ」「ちょっと待っていて！すぐに行くからっ！！」・・・だそうだ。じゃあ代わるぞ。」

「ははは……。」

受話器越しから聞こえてきた声に元気があつたみたいで少し安堵する。ここ最近顔を見て話すことが無く元気が無さそうだった。やっぱ元気な方が良いしね。アリサ達も心配してたし。

「もしもしっ！あのあの！命君！そのね、あのね、この前はその、あんなこと言っちゃってその……」

「いや、その辺はもう納得したし。そんな気にしないで良いから。それに今日はそんなことを謝って欲しくて電話したんじゃないかってさ、大事な話があるんだ。」

・・・なんだか後半になるにつれて声のトーンが落ちていったので急いで話を中断した俺は、フェイトたちの簡単な事情説明と用件である協力要請の事を話した。すると「にや！？なんで命君があの子の事知ってるの！？しかも何か仲良くなってるみたいなの！！どういうことなの！？」となりの語（命名アリサ）が出始めたので、スーパーのタイムセールで出会ったと話すと今度はうにゃ〜とかなんかにゃあにゃあ喋って人語を話さなくなったので、明日学校で話すから、と言って無理やり会話を中断させた。

．．．ひょっとしてあいつは猫かなんかに祟られてるんじゃないか。  
、

．．．そういえば、もうお互い顔を知っていたのにどうしてこれまで話しあいの機会が無かったんだろ？と思い、フェイトに聞いてみると、

「だってだって！あの子と鉢合わせになるような時に限って、タイムセールや特売の限定商品とかとダブっちゃって。ジュエルシードも大事だけどこっちも同じぐらい大事だし……そんな板挟みの状態の私にまともな思考ができる筈もないんだよ、だからこれは仕方の無いことなんだよ！！」

「ふえ、フェイトちゃん……意外と家庭的というか……」

「こっちに来る前に母さんが教えてくれたんだ！安くて良い物は逃がさない！たまに贅沢をすること！これがテストタツロサ家の家訓そ



の二、その二！だよ  
「」

・・・とりあえず。この子にはアホの子検定三級一発合格という  
評価を下しておくことにした。今後昇級しないことを願う俺だった。

第七話 「もう一人の魔法少女は… 後編」(後書き)

ここまでの展開を書いてきたのだが、ここからの展開が思い浮かばない!!

・・・なので次回は話を進めずにネタに走ろうかと・・・それではまた。

アークル「よう~~~~やく私の出番かしら?」

第八話 「異種間恋愛？」（前書き）

全く物語には関係ありませんがアニメの伝勇伝、あれにはまって近所の本屋に見に行つたのですが・・・田舎はこれだから。まああつても金無いんですけどね。

雪而「だったら文句言ってちゃだめじゃろ」

## 第八話 「異種間恋愛？」

S I D E なのは

「ふえ〜。そうだったんだ。あの子、フェイトちゃんは元々ジユエルシードの関係者だったんだね」

「まあ正確にはフェイトの母親が、な。プレシアさんっていう人なんだけど、その人が今管理局の人とこっちに向かっているんだってさ」

昨日はいきなりの電話で、しかも命君と風花ちゃん事以外で気がかりだった黒い女の子、フェイトちゃんからの協力要請。

私はその時命君からの電話だけでもどうやって謝ろうか一杯一杯だったのにこのいきなりの発言に私の頭は処理落ちしかけ、明日話すから、と一方的に電話を切られたことに気付くまで五分も掛っちゃいました。

そして今、アリサちゃんに聞かれないようにするため、いつもの座席ではなく命君の隣に座っています。命君は念話が使えないからこうなっただけ……

「(~~~~~)」

……なんだか風花ちゃんが涙目でこちらを見ているの……

私達が話しているのを怪しまれないよう、命君が風花ちゃんにアリサちゃん達の気を逸らすように頼んでそれを実行してくれているんだけど……時折こちらを見る視線がまるで捨てられた子犬を連想させ、居た堪れなくなっています。

この前の事は一応「まあ、今度あのイタチモドキが何か言ったら

刻むだけだし。なのはちゃんについてはもう怒って無いよ」と言ってくれたのでもう許してくれた筈なんですが……

登校中ずっとその視線が辛かったけど、学校に着くと風花ちゃんはすぐに命君に話しかけていました。その時の笑顔を見てアリサちゃんも、

「気のせいかしら？風花に犬耳と千切れんばかりに振られている尻尾を幻視するんだけど……」

……あはは………よっぽど話したかったんだね、風花ちゃん……

・・・その日の放課後、命君と風花ちゃんへの軽いお詫びをと思  
い、翠屋に二人を招待しました。

風花ちゃんは「あの毛虫がいるんじゃないの？」と最初は嫌がっ  
ていたけど、ユーノ君は実家の方だから翠屋には居ないよ、と言  
うとOKしてくれました。

・・・にしても風花ちゃん。イタチモドキとか毛虫とか。どれだ  
け嫌いなユーノ君の事…………

「だって！アイツ、私達がなのはちゃんの手伝いをしただけなの  
に、な・に・が、魔法が使えないからよっ！ざっけんじゃねえ  
わよ！！しかもよりにもよって「命。特に君の力は危険だから通報  
する」だあゝ？ハント！命君が居なかったら今頃自分がどうなっ  
ていたかわかってないんじゃないの？むしろ私がアイツの皮剥いで三  
味線にしてやる…………」

「風花ちゃん！？落ちついてっ！ここはお店の中だからっ！ユー  
ノ君そんな事言っつて無いし、それと言葉使いがどんどん悪くなっ  
てるの！！！」

「なのは、君も十分声がでかいよ。あと三味線のくだりは止めてやらないんだね。・・・何かユーノの事少し可哀相になってきた  
……」

・・・なんだかどどんユーノ君の事嫌っちゃってるみたい。  
しかも命君関連で……少しだけその気持ちかわかるのはみんなには  
内緒だよ？

S I D E O U T

S I D E アークル

何とか静かになったみんなは、その後ジュエルシードについての  
事を話していたんだけど・・・



「でも。どうしてユーノ君はあんなに二人の事を危ないとか言うの  
かなあ〜？二人共とっても優しいのに……」

「なのはちゃん。毛虫にそんな事を考える脳みそなんてないんだよ  
？知ってた？虫の基準で本能しかないんだよ。だから窓に何度ぶつ  
かっても避けることをしないんだから」

「言い過ぎだよ！？それにユーノ君はフェレットだから虫と違うの  
！」

「そんなこたあどうでもいいんだよ、なのはちゃん。今問題なのは  
どうしてあそこまで命君の事を危険視しているのか、でしょ？あそ  
こまで行くともう敵視でも良さそうだけど」

「……いつの間にかどうして命君の事を嫌っているのかって話  
になってるわねえ〜命ちゃんは自分のことだからほつといて静観し  
ているけど。」

うん。でも嫌う理由ねえ。命ちゃんの力が異常なのは魔導具自身で体と融合している私が一番理解しているんだけど、それにしたってあそこまでいくとねえ？

ああまでして命ちゃんをなのはちゃんから遠ざける理由、ねえ？  
……うん？

・・・なのはちゃんから遠ざける？危険だから？いやそれ以外にも他の理由が…（ポクポクポク、チーン！）はは。なるほどなるほど。

「（ポソッ）命ちゃん。」

「（ポソッ）何アークル？急に声かけてきて？」

そこで私が立てた推測を命ちゃんに話すと最初キョトンとしたけど、その後溜め息を吐き、

「なんていうか、微笑ましいと言っべきなのか、素直じゃないと言っべきなのか……」

「ふふふ。本人にもあの子にもそういう自覚はないでしょうけど。多分自分では気づかないうちに芽生えていた感情が命ちゃんへの不信感も手伝ってあそこまで嫌うようになったんでしようね」

ふふっ。若いっていいわねえ、そうだねえ。私たちがのんびりしてる間にも風花ちゃんとなのはちゃんは話しあっていただけ、結局答えはでないままその日は解散となった。

帰宅してみるとそこには昨日のテストロッサ家のフェイトちゃんとアルフさんが遊びに来ていて、今日はずっとはやてちゃんの相手をしてくれていたみたい。

でもあのフェイトちゃんの沈んだ顔はもしかしなくても……

「はやて、ひよつとしなくてもゲームだな？ 一体何回フルボッコした？ 1000回？ 2000回？」

「私どんだけ鬼畜なん！？」

「忘れたとは言わせんよ？ 俺がこの家で暮らし始めてすぐの頃、BやGG、KOFで一方的にやられた時のあの忌まわしい記憶……しばらく凹んで夢にまでその時の事が出てきたんだぞこっち……！」

……その時の事は良く覚えているんだけど、確か家族ができて有頂天だったはやてちゃんが手加減？ 何ソレ？ って感じだったのよね。フェイトちゃんも犠牲になってしまったわけね。

まあ、確かに今命ちゃんが言ったゲームでははやてちゃん負け無しなんだけど、

「あはは……でもそれを言うならみこっちゃん。あんたかて、非  
○天則やら餓狼のMOWで私相手に無双かますやん」

「いいんだよ！あれ、はやてだつて手えつけてないゲームだろ？それぐらい勝たせてくれても良いじゃん！」

何気に命ちゃんも負けず嫌いなのか、はやてちゃんの手持ちのゲームの中でもあまりやり込んでいないものを重点的に練習している。なんだかんだ言っても、命ちゃんもまだまだお子ちゃまねえ。

「うう。みこっくと、はやてに勝てないよ。何回やっても変な棒が後ろから飛んできて姿勢崩されるし、髪を伸ばして刺してきたり、おかしな羽の子が変なレーザー撃ってくるし、着物っぽい服

を着ている人には燃やされるしもういや~~~~~」

・・・今ので何人がわかるかはわからないけど、はやてちゃん、基本的に女キャラ、しかも選別基準は胸部の膨らみ。……この子、自分に大変正直である。

その後は、命ちゃんが自分の得意なゲームで挑んで「ふはは！くらえい！破○弾！」とフェイトちゃんのリベンジを果たしていた。この子ゲームしていると性格が変わるのよねえ〜勝ってる時限定で。

そんな折、はやてちゃんが今日の出来事を尋ねてきたので簡潔に答えていると、

「ユーノ君がみこっちゃんを嫌う理由に思い当たること？何ソレ？気になるんやけど」

「うん、確かに。いくら魔導師が魔法に傾倒してそれ以外の力を認

めたくないって気持ちも理解はできるけど、幾ら何でも行き過ぎだし他に理由がありそうだね」

二人が私の推測に興味を持ったので「ふふふ、それはね・・・」とちよつと間を空けて続けた。

「多分あの子、なのはちゃんの事が好きなんじゃないかしら？あの子、命ちゃんの事は悪く言う事があるんだけど、風花ちゃんにはそれが無いし、無意識にだらうけど私達と話す時にはいつもなのはなのはって、なのはちゃんの事を一番に考えているみたいだったし。きつとなのはちゃんの近くにいた命ちゃんが親しく話しかけていたのが気に喰わなかったのでしょうね。それが元々あった不信感を増長させて、あそこまで言ったんじゃないかしら？」

まあ、本人にはその恋愛感情も命ちゃんを嫌っている理由も理解できていないでしょうけど。と締めくくって周りの反応を確認すると、フェイトちゃんは「アルフ！これがきつと三角関係ってやつだね！」と何か勘違いしていたけど、はやてちゃんは何やら難しい顔をして、

「でもちよつと待って。確かユーノ君ってフェレットなんやろ？つまりこれは人とフェレットの種別の壁を越えた恋愛ってことに……？」

「……ナ、ナンダッテ……！！！！！！？」

まああ確かにそうよねえ。なのはちゃんは人間、ユーノ君はフェレット。この差は大きいわよねえ。普通。

その後「異種間での恋愛の是非について」という議題の下、討論が行われて夕飯まで決着がつかず、ご飯を食べたあとは雪而さんとアルフちゃんも交えての討論となった。で、結局のところ、

「えー、今回の議題の結論……状況次第！ってことで。これにて議論を終了とします。みなさん、お疲れ様でした」



「「「「お疲れさまでした〜」」」」

いつの間にか議長になった雪而さんの挨拶を終え、もうすぐ次の日付けに変わりそうな時刻になっていたのでテストタロツサ家の二人はお泊りということになり、二人の希望ではやてちゃんの部屋で寝ることになった。やっぱり同性の友達とはもっと会話したいんでしょね。

……それにしても「異種」間の恋愛ね〜？

「ねえ命ちゃん？命ちゃんはあの二人が恋愛関係になったらどう思う？やっぱり変だと思っ？」

「（眠いなあ）別に」

「別に…って。もうちょっと何かあるものじゃないの？」

「（さすがに日を跨ぐ時間帯はきつい…）普通に考えるとさ、やっぱり変な事なんだろうけど…。二人がそう望んでくっつくなら俺は応援するよ。紹介文にも書いてたろ？俺、マイノリティーには優しくするんだ。人とかフェレットとか種別とかそんな関係無くな」

「紹介文で…」

「…でも。それはつまり…」

「………てことは命ちゃん。例えば私がもし誰かに恋したとしても応援してくれる？」



でも、もし人間になれたら……私でも命ちゃんの傍にいても良いのよね？

……今日はなんだか良い夢見れそうね？

S I D E O U T

「ふーむ。命のサポートができるようアークルに人格を与えたのじ

やがまさかこうなるとはのう……まあわしにとってもこやつは大事な家族の一員じゃ。物語への介入以外ならこの程度ならなんとかできるじゃろじ

……この心遣いが後の命達にどのような影響をあたえるのか・

第八話 「異種間恋愛？」（後書き）

コメディーにしようと思ったら、恋愛（笑）になっていた。  
・・・どゆこと？

次回は合流前のアースラの事を。

ユーノ君がこんなキャラなら黒い執務官は一体…？

風「あのイタチモドキよりは良い人だと良いなあ」

第九話 「考察・・・魔導師視点の命」（前書き）

今回はアースラ組＋テストロッサ家の面々が登場します。

なかにはキャラが変になってる人もいるけど、タグにも壊れ要素有りって付けてた事だし、大丈夫だよね！！

フェイト「でも、これがテストロッサ家では普通だよ？」

第九話 「考察・・・魔導師視点の命」

S I D E プレシア

「・・・・・・・・以上がフェイトからの報告だよ、母さん」

「ええ、ありがとうアリシア。にしてもフェイトは面白い子と友達になったようね。アルフと二人っきりで寂しい思いをしていないか心配だったから」

「そうだね。フェイトも報告の時嬉しそうに話してくれたよ。しかもその子の協力で現地のジュエルシードの発掘責任者とそれに協力している現地の魔導師の子とも連絡がついて、今度会って話をする事になったんだって。これでその子の持つジュエルシードの数と合わせて8個！まあ大丈夫だと思うよ？なんたってフェイトは私の妹で母さんの娘なんだから！」

「ふふっ。それもそうね。それじゃ引き続きフェイトのバックアップ宜しくね。それじゃ。」



そういつてアリシアからの通信を終え、リニスの入れてくれたコーヒーを飲み一息吐いているとリニスが口を開いた。

「それにしてもフェイトはおもしろい物を見つけてくれましたね。魔導具？と言いましたか？それを使った子が飛行魔法を行使しなかったとはいえ、アルフに圧勝。しかももう一人の子はその子以上の実力者で稀少技能レアスキルとはまた違った能力を持っているとか・・・」

「そうね、アルフもAランク以上の実力は持つてるしそれを地上戦に限定したとはいえ倒してしまうなんて……実際に会ってみたいわね。確かそのレアスキル紛いの能力を持っている少年、ミコトっていったかしら？」

フェイトの報告にあつた、現地での民間協力者であるという少年。魔導師のうちの子をおして「異常」と言わしめる魔導具なる物を所持しているその少年は、なんでも手から炎を出しそれを操る事のできる能力者という。しかも、その炎にはいくつかの型もあるそうだ。

・・・魔力変換資質のうちの一つに『炎熱』というものがある。これは魔力を炎属性に変換する事のできる能力だが、この子の能力はその上位互換とも呼べるものだろう。

本来、この能力を使つての攻撃となると、砲撃魔法に属性を付加させたり、アームドデバイスのような近接武器に能力を付加するといった方法がほとんどで応用が利かないのだが……未確認だが、彼の扱う炎の型は8種類もあり、その中には防御結界や炎自体がなん

らかの形を形成する物もあり、しかもそれらを融合させ新たな能力を使用することができるらしい。

もしこれらの情報が本物で、その炎の運用時のメカニズムが解析できればあるいは…

「うふふふふふふふふふふふふふふ……」

「プレシア？何だかとても怖い顔になってますよ？具体的に説明すると、マッドな科学者のようです」

・・・私が新しい魔力運用法を考えていると、リニスが何か言ってきたけど気にしない。気にしないっいたら気にしない。

「……………はあ。でもまあ、この炎の能力は危険かもしれませんがね。この船の方々には報告しない方がよろしいのでは？」

「大丈夫よ報告しても。このプレシア・テストロッサが娘の友達に手を出させると思う？例え何か害を為そうものなら、ファランクスシフトでサンダースマッシャーを叩きこんでやるわ！！」

「いや、それはいくらなんでも無理でしょ……………」

「子を想う母に不可能の2文字は存在しないっ！！！！」

「3文字ですよ、プレシア」

・・・その後部屋からとつてもアグレッシブな高笑いがある、近くを通った職員が震えていたとかいないとか

S I D E O U T

S I D E クロノ

「へえ〜。これが現地のフェイトちゃんから送られてきた映像だけど、すごいね〜。子の白い子なんて魔力量だけ見てもAAAだし！それに魔法を使い始めてからまだそんなに経ってないって話だけど……砲撃魔法とか飛行魔法とか簡単にやってるし・・・それによりこれだよ！！この魔導具って武器！！フェイトちゃんの使い魔をこんなにあっさり倒しちゃうなんて……」

「そうね。この子が戦闘訓練を受けているのも見受けられるけ

ど、やっぱり目を引くのは魔導具の能力ね。魔力も無しにここまで  
の風を起こせるなんて……」

「陸戦ランクで考えてもA Aは軽く越えていると考えていいで  
しょう。それにこの映っている少年は彼女以上の実力を持っている  
とのことですよ。今回は敵じゃなくて良かったという事でしょう」

今僕ら、次元航行艦「アースラ」の主要メンバーで件の現地協  
力者についての話し合いを行っている。現地にいるプレシア女史の  
ご息からの報告で確認されているこの3人。

一人は一般的なミッド式の魔法を使う魔導師。おそらくこの子が  
は現地で魔法関係者、ジユエルシードの発掘者でその遺跡の責任者  
でもあったユーノ・スクライアと出会いその才能を見出されたのだ  
ろう。

従来ならば、管理世界外での魔法行使は厳禁とされているが、今  
回のケースでは仕方の無い事だろう。

そして気になるのが、この二人。一方の少女はAランク以上の実  
力者に地上限定だが圧勝、少年の方は実力こそ不明だがこの少年が  
魔導具の元々の所持者という点から、少女と同等、それ以上の実力  
を持っている事が予想される。

この二人は先の魔導師の子と交友関係があるそうで、一時協力体  
制を執っていたらしいが、自分たちの力が質量兵器という物に該当  
すると言われ、管理局に報告されなくなったら、と半ば脅迫され  
そのまま別れたとの事。

その後、偶然こちら側の協力者、フェイト・テストロツサと出会  
い、その後二人の間を取り持ち話し合いの場を取り持つ事になり今  
に至る、と……



「……（チャキ）普段二人が僕の事をどう思っているのかよしくわかった。それなら空気を読まずに今からこの場で魔法を使うから許してくれ、二人とも……」

……しばらくしてその場に居たのは、いつも通り済ました顔した執務官と、ぐったりした艦長と通信士だった。

「イタタタ……でもさあクロノ君。能力の確認って言ったけど具体的にはどうするの？」

「本人の実力を知るなら模擬戦が一番だろう？魔力が無い相手ならその方が良いし、何より……」

「何より？」

「僕自身、彼と戦いたくてね。実力的にも申し分ないようだし、最近は訓練相手にも飽きてきたからね、こういった未知数の能力者と戦う事はプラスになる事だしね」

こう言うと二人に白い目で見られたが、これは仕方の無い事だ。艦が保有できる魔導師のランクには制限が掛けられていて、この艦には僕と同ランクの魔導師はいない。そこに現れてくれたかの少年。

能力の確認もでき、僕としても良い訓練相手になってくれるだろうし一石二鳥だ。

そう言うと二人に「この訓練小僧め」ドリルボーイと、言われたがこれは、自分がそれだけ訓練を積んでいるというある意味証でもあるので僕は二人の言葉をスルーし、会う事になるであろう少年に思いを馳せていた。

「カミナミコト…か。ちゃんと僕の訓練相手になってくれよ…  
…?」

---

「ZZZZZZZZ…へっくしっ!…ZZZZZZZZZZ…」

・・・その頃件の少年は、目覚めた時に起こるであろう騒動の事も知らずに暢気に寝続けるのであった



第九話 「考察・・・魔導師視点の命」（後書き）

うちのクロノ君は強くなる事に貪欲で、冷静に物事を判断できて空気も読めるスーパーなお人です。

じやなきや執務官なんて職業勤まるとは思えないし、才能が無いとかいう割にニアSランクだし、ユーノ君とはまた違った形での責任のある職業上、彼の性格はこんな感じになりました。いかがでしょう？

命「どっちみち俺に絡む流れなのね・・・」

だって一応オリ主（仮）ですから。それではまた次回！

第十話 「魔法少女たちの邂逅 +」（前書き）

最近雨が大変で洗濯物が溜まりがちな作者です  
去年なんか雨のせいで水道が止まったりしたけど、今回はそうなら  
ず安心しています。

アルフ「小説に一切関係ないじゃないか!!」

第十話 「魔法少女たちの邂逅+」

S I D E    フェイト

「あっ！ダメッ！はやて、それ禁止…ってあああああああゝゝ！」

「ふふふのふ。フェイトさんや。この大乱闘の中よそ見とは大層な余裕ですなあゝ。私思わずボム兵なげちゃったよ」

「ふ、風花っ！酷いよ！！私のネスの残機はあと一つなんだよ！せめてはやてに一矢報いさせて…」

「ほなこれで」

「酷っ！？アンノーンにチャージショットのコンボだなんて…二人とも酷いよゝ狙って攻めるなんて卑劣だよゝ鬼のシヨギョーだよゝ（涙）」



っごぼっごにされたリベンジでも無い。……………いつか絶対するけど

「ねえ風花。まだ来ないの？あの子」

「いや、さっきメールが来てたけど少し遅れてるって。寝坊でもしたのかな？」

「寝坊って…あのガキンチョも緊張感が無いねえ。これからジュエルシードについての大事な話があるってのにさ」

「あかんでアルフさん。さっきまでゲームしてた私らがそれを言ったら」

……そう今日は例の白い魔導師こと高町なのはとの話し合いをすることになっている。交渉事なので仲介人である命の家でいたと言ったところ「いや交渉って…大袈裟すぎるだろ…」とか言っていたが場所を借りる事を承諾してくれ元々の家主のはやてもあっさりOKしてくれた。そして今にいたるわけだが……

「ほらほら、命ちゃん？男の子がそんないじけてちゃだめですよ？ほら、こっちでお姉さんの膝に座って。慰めてあげる」

「いや……そんな子供扱いしないでくんない？ひて」「えいつ  
ムグツ！？」

「嫌よ。せつかく実体化したんだもの。今までしたくてもで  
きなかつた事ができるんだから、いっぱい、いっぱい！抱きつい  
ちやうんだから。ほぐれ、すりすり」

「ちよつと！？頬ずり止めて！？離れてって…うわっ！む、胸  
に…顔…埋めさせ…無い…で…」

「（敢えて無視）うゝん幸せ」

見た事が無い人がなんだか命に抱きついて幸せそうにしている。  
あつ、今ので命墜ちたかな。

「ねねねねえ、はははははははやてちゃん？あああああの  
ね？みみみみみ命君に、そのだ、抱きついてるあの美人ってだだだ  
だだだ誰なのかなあゝゝ？（ゴゴゴゴゴゴゴゴ）」

「……（滝汗）お、落ち着いて！？今風花ちゃんめっちゃ怖  
いって！あのな、あのナイスなお胸の美人さんはな……  
……アークルさんや」



S I D E 命

あれ？どうしてこうなってんだ？

俺が気絶から目を覚ました時に真っ先に浮かんだのがこれだった。

いやね？俺もさ、ある程度の予測は立てていたんですよ？ユーノに風花が突っ掛かっていないかなあ〜とか、なのはとフェイトはちゃんと仲良くできてるかなあ〜とか。

・・・でも現実はその俺を馬鹿なの？みたいな感じで裏切ってくれた。

「てめえ！もう一遍言ってみろ！！」

ブチ切れ、口調がなんだか親父さん似の風花

「だから！魔法も使えないような君達みたいな人がこれ以上関わるなって言ってるんだ！！」

といつに無く毒を吐くフェレット、じゃなかったユーノ。

・・・突っ掛かるとかじゃなく、マジモンの喧嘩ですね。アークルに尋ねてみると、二人が顔を合わせるとすぐにユーノが今日の事



に関しての不平を訴えたらしくその際、俺を何かしら小馬鹿にした態度をとったため、風花が激怒したとか。それにしたって・・・

「お前封印の時に何一つ手伝えていないだろっ！その癖していつちよまえの事言ってるんじゃない！！それにフェイトから聞いたけどどこ、管理外世界で管理局とやらの干渉は受けないんだろ？な〜」  
「が「質量兵器だから」だ！そんな事関係無いじゃねえか！！よくもまあ私たちの事犯罪者呼ばわりできたモンだねエ〜ああ？」  
「・・・風花？本気で怒っている時の口調って俺よりも男、いや、漢らしいね。おじさんびっくりです。そしてアルフさんなんか先日の殺気を思い出してブルブル震えちゃっているじゃないか：俺も腰が引けてるんだけどね。」

「…………ツツ！？それでもだ！魔法以外でそのような危険な武器を使つての戦闘なんて認められない！第一それには非殺傷設定ができない。そんな危険な物を所持している者を信用なんてできる訳が無い！！それにそもそも今回の話し合い自体僕は信用していない」  
「・・・何かコイツも必死だなあ〜。管理局のくだりを言えば黙ると思つていたけど、まさかここまでとは…………そんなに俺達が嫌いかな？何気に傷つくぞ。」

「なっ！？それはどういうことですか！！私とアルフは正式な時空管理局の協力者です！先日出会った時に話せなかった理由も説明したでしょう！！」

ユーノの発言に反論するフェイト。しかしユーノはそれにも噛みつく。

「なら、それ自体を証明できますか？あなたがジュエルシードを狙う者だという可能性がある以上迂闊に信用することはできません」

「……」

予想外の言葉に絶句しているフェイト。アルフさんが「何だと！この野郎！！」といきり立ってユーノに（物理的に）噛みつかんとする勢いで迫るがフェイトがそれを抑えている。ここで暴れると余計に疑念が膨らむし妥当な判断と言える。

そこで事態の状況についていけずにオロオロしていたのはだったが、ユーノのあまりの言葉にさすがに怒ったのか、いつになく激しい口調で怒鳴った。

「ユーノ君！！相手は自分から私達とお話をしようって声を掛けてくれたんだよっ！それをそんな言い方で……あんまりだっ」うるさい！！」「ゆ、ユーノ君？」

……珍しいというか……まさかなのはにまで噛みつくとは……

「相手がこちらのジュエルシードを狙ってこの話し合いを持ちかけてきたかもしれないんだ。……それを簡単に信用できる程、僕は甘くない……」

最後の言葉はなのは無くこちらに向けられたモノだった。  
・  
・なんとまあー必死なこと。きつと自身が（勝手にそう思っている）責任を負わないという自責の念が八つ当たりの形で発散され

ているのだろうかといえ・・・言ってる事もおかしくなってるし、  
なんだか疑心でしか俺達の事を見ていない気がする。

しかしこれ以上喋らせると、いい加減風花とアルフさんの怒りが  
メルトダウンを起こしそうなぐらい高まっているのでなんとかや  
めさせないと・・・

「はい、そこでストップ！皆さん一旦落ちついて。風花は鬼  
の爪しまって、アルフさんも狼になって噛みつきこうとするの止めて」

その場にいる全員がこちらに注目する。約一名は睨んでいるよ  
うだが、小動物に睨まれたぐらいでビビる程臆病ではないのでその  
視線をスルーし、とりあえずこちらを信用させるために口を開く。

「とりあえずフェイト。今すぐにお姉さんに連絡って取れる？」

「うん。こちらからの連絡はどこからでもできるようになって  
るからこの場でもできるけど・・・それが？」

「ならば、お姉さんの中継して管理局側にいる母親に直接連絡  
取れない？それだったらユーノも信用してくれんじゃないか？もし  
母親でもだめなら管理局の人に出てきてもらえば良いし」

「あっ！そうか！そうだよな。…うん、それならできると思う」

からちよつと待ってて・・・」

咄嗟に思いついたにしては中々の提案だったのだろう。フェイトも「それなら大丈夫！」とそのまま姉に連絡を取り、次元間通信がどうたらで少し準備に時間が掛かるけどできるとの事だった。

そしてちよつとの間時間ができ、フェイトとアルフさんは通信をつなぐために、この場の座標軸とか次元干渉なんたらとかを調べて通信の精度を上げるようにしている。するとなのはがすまなさそうにこちらを見てきたので、話しかけることにした。・・・相変わらずユーノに睨まれたままだが…

「どしたのさ、なのは？お茶受けのお菓子ならあそこにある棚の上だけだ。取ってこようか？」

「違つもの！そうじゃなくて、さっきはゴメンね？ユーノ君、あんな事を言う子じゃないのに…きつとあんな事言つのも訳があると思うの。だから…」

・・・優しい子だなあとと思う。あそこまで暴言を放った相手を庇うなんて。自分だって怒鳴られて言いたかったこと言わせてもらえなかったっていうのに……

「にやにやっ／＼／＼！？どうして命君は私の頭を撫でているの！？」

「あれま。いつの間に」

「自分でも気が付いていなかったの!？」

「どうやら無意識になのはの頭を撫でていたらしい。感心して「ええ子だなあ」と思っていたのが表面化していたらしい。これはうつかり。」

「……（何かを期待している視線）」

「……こつちおいで。お兄さんがナデナデしてあげるよ」

「……大人一名と子供一名に無言の圧力を掛けられたので、子供番組に出てくるお兄さんの感じで声をかけてみると、喜んで頭をこちらに向けてきたので撫でておいた。」

「二人とも嬉しそうだったので良かった……のか？」

「じい~~~~~」

「……なのはがなんかこつちを見ているが、ユーノのがいる手前。これ以上地雷を踏みたくはないので無視することにした。・・・頼むから二人してこつち見んな!怖いから!それとはやて。お前はにやにやすんのやめえい。」

「命!連絡が繋がったよ!」

困っているとフェイトからの見事なインターセプト。GJ！フェイト！と内心で感謝しつつ、そのまま艦長さんとなのはとユーノの話が始まった。

「ふう。これでとりあえずは俺達はお役御免ってとこかな？」

「そうね。その管理局ってところが後の事を処理してくれるでしょうし。私たちはのんびりまったりしときましょ」

「そう言いつつ命君に抱きつかない！アークルさん離れて！」

「まあまあ。何にしてもホンマにこれが私達に関わる最後やな。向こうも無理にはこせねえなのはさん。そこにカミナミコト君とアラシヤマフーカさんっている？」・・・ゴメン。何か私の台詞がフラグやった感が・・・」

・・・ははっ、いいさ別に…グスンッ

「あなたたちがそうね？私はこの艦の艦長のリンディ・ハラオウンという者です。君たちにもなのはさん達と一緒にこちらに来て欲しいのだけど・・・」

「ま、待って下さい！彼らの力は危険なんですよ！？彼らの力は魔法とは違って…！！」

「ええ。フェイトさんから報告は受けているわ。魔導具のことでしょう？それについての話も伺いたい。わかってくれるわね、ユーノ君？」

「……わかりました」

ユーノも渋々だが納得してくれた。なのはなのは俺達と一緒にに行くことができるのが嬉しいのか風花の手を取って喜び、風花もそれを見て困ったように笑っていた。

「なんか面倒な事になってきたなあ〜みこっちゃん。じいちゃんには伝えておくから、相手に迷惑かけんよーに。じつと話を聞くんやで？」

「お前は俺の母親かよ」

「姉や」

・・・俺に拒否権は無かったので、そのまま次元艦アースラへと転送されていった…

．．．激しく今更なんだがこの物語って原作の流れだとどうな  
っていたんだろ？

場違いな事を考えつつ転送される俺であった。



第十話 「魔法少女たちの邂逅 +」（後書き）

やっちゃいましたアークル実体化。これにより新たな能力に目覚める・・・

という訳では無く、能力自体は変わらないけど、少しリリな世界風アレンジされます。

なのは「どこういう風になっているの？」

それはまた次回！ってことで。それではまた！

第十一話 「アースラの中で・・・前編」(前書き)

前回、アークルの能力にアレンジを加えるとか言っていました、  
気がつくとも魔改造っぽい感じに・・・

これはあれですね、クウガを見直していて、アメイジングマイティ  
に惚れ直した作者の妄想がビートチェイサー！って感じに暴走した  
結果ですね。

ご都合主義満載ですが、それでも気にしないって方はどうぞ！

第十一話 「アースラの中で・・・前編」

S I D E クロノ

「ユニゾンデバイス？」

僕は今、とある一室で彼、ミコトとその傍らにいる魔導具の意志の具現化した姿という女性アークルにあるデバイスの説明を行っている最中だ。

「ああ。適合者と融合<sup>ユニゾン</sup>することで、その者の能力を底上げする事のできる物でな。適合できる者も少なく、このデバイス自体数があまりなくてな。おそらくだがその・・・アークルはそれと同じようなものであると予想される。あくまでも僕の推測だがな」

・・・何故このような説明をしているのかというと、まず彼ら現地の協力者をこちらに転送してきたところまで遡る。プレシア女史が彼を見るやすぐに、

「やっときたわね。フェイトのお友達<sup>わたしのモルモット</sup>!!」

「あれ!?!何か変なルビ振ってません!?!お友達のなかに危険を感じるワードがあっただんですが!?!」

「男の子がそんな細かい事気にしないっ!それじゃリンディさん。この子の検査は私に任せて残りの子にでも事情を聞いておいて……ふっふっふ。さあ、坊や?あなたの秘密、隅々まで調べさせて貰うわよ?さぁリニス、準備なさい!」

「すみませんミコト君。君には何の恨みもありませんが、あんなったプレシアは止める事ができないので………大人しくしてくださいね?きっと命に別状は無いと良いですよね」

「そこは無いと断言してくれえええええっええええ!」

「……一応、彼を調べる事はプレシア女史に一任していたのだが……」

その後は一応彼の保護者らしい女性「相棒ですよ。生涯の……アークルという女性にはついてきてもらい、かあさゲフンゲフン、艦長と他の子たちはそのまま話し合いのため艦長の私室<sup>じんたいしつげん</sup>へ連れて行かれ、僕とエイミィとアークルの三人で検査<sup>じんたいしつげん</sup>?をしている検査室へと向かった。

その途中で彼女が人間では無く、彼の所有している魔導具の人

格が実体を持った存在だという事を教えて貰い、魔導具の得体に知れなさに頭を悩ませているうちに検査室にたどり着いた。

一応自重してくれていたらしく、プレシア女史は血液と細胞のサンプルを採取した後はそのまま彼を放置し、半ば彼女専用となりつつあるデバイスルームという名の研究室に引き籠もって、「うふふふふふふ」と怪しげな笑い声を発していた。

彼は何やら「注射怖い注射怖い注射怖い注射怖い注射怖い……」以下エンドレスで呟いていたが……何があったのかはいくら僕でも聞けなかったな、あれは……

その後正気を取り戻した彼をつれて模擬戦ルームに行き、彼の持つ魔導具を見せて貰った。

……それにしてもふざけた能力ばかりだなと思わずにいられない。薙刀、鎖鎌、大鋏、ブーメラン、弓、そして最終携帯でもあるオールレンジ攻撃が可能という”型の無い型”の六つに変形するというその武器。名を 鋼金暗器 という。これだけの形体に変化するデバイスはまず無いと言っても過言ではない。デバイスは精密機器と変わらないため、そのように武器としての性能を高めるならばAI部分を削らないといけないため、魔法補助が疎かになってしまっただ。これではデバイスの意味を為さず、そのまま武器として造った方が遥かに効率が良いし、例えばアームタイプのデバイスであろうともこれほど多彩な変形機構を積むと、今度は強度が足りなくなってしまうだろう。

しかしこの武器は元々魔法を使うなどコンセプトに無い。それ故に武器としては最高級の強度を保ちつつ数多くの変形を可能としているのだろう。

その他にも、装備者の力量次第で自由に扱う事ができるという鎖鎌を発展させた嘴状の武器 嘴王

モノの大きさを自由に操る事ができる杖 夢幻

装備者の意志でどこまでも伸びるトンファー状の剣 神慮伸刀

極め付けに、重力を操る能力を持ち、+と-の能力を反発させる事で極小サイズのブラックホールをつくることもできるという 帝釈廻天

その他にも飛行を可能とする翼状の物や服用することで体を鉄にすることで防御力を上げる物、動くモノになら何でも反応して捕縛する鞭等・・・よくもまあここまで豊富な種類があるものだ。

(その時の会話の一部を抜粋・・・)

「(ボソボソ)な、なあ。ひよっとしてその夢幻とやらを使えば、身長を伸ばしたりできるのか?」

「(ボソボソ)できないこともないけど……これあくまでも拡大、縮小だけですから身長は伸びるけど、単にそのまま大きくなるだけだから……使用しない方がいいですよ?」

「(ガーン)……そ、そうか。・・・(ボソッ)畜生……」

・・・声に込められた感情から、彼のコンプレックスの程を窺い知り、心の中で涙を流す命がいたらしい。

—— うん？何か間が空いたような気が・・・

気を取り直して続きた。最後に彼はアークルの説明をして、実際に使っているところを見せて貰う流れになったのだが・・・

「あれ？そーいやアークルが実体化してる時って何故か腕輪が無いんだけど？アークル。腕輪に戻って」

「????どうするのかしら？私も今日この体になったばかりだから勝手がわからないんだけど……このままの状態じゃあさすがに無理よねえ〜強化」

「よねえ〜……ってあーた……。それじゃ俺このまま？」

「うん？何かそちらに不都合が？」

「いや〜。それがねえ〜……」

何でも、実体を持ったのは今日が初めてで、しかも自らの意志では無く今朝目が覚めたらこうなっていたらしい。だから腕輪への戻り方もわからないとの事。

それにしても、融合していた？確かデバイスでもそれに似たような感じの物があつたような・・・

「！そうか！ユニゾンデバイスだ！！」

と、ここで冒頭に戻る訳なんだが・・・彼らにユニゾンデバイスの詳細を説明していると、

「ふ〜ん。ユニゾンねえ〜？命ちゃんと合体する訳ね？でも…それならやつぱり命ちゃんがもつと大きくなってからじゃないと…  
／／／／／（ポッ）」

「ははは！違うよ〜アークルさん。合体っていつてもそんなR指定を受ける方じゃなくて、どっちかっていうとヒージョンだよ」

「エイミィ。それを言うならビューじゃない。フューだ、フュー」





S I D E O U T

S I D E 命

「おい！？アークル！！これ一体どうなってんの！？俺なんか大きくなっちゃったんですけど！？しかも格好もなんか変わってるっばいしー！」

俺の趣味といふかなんというか、具体的に言つと紅麗の服そのまま。その黒Verで、心臓の上の部分には金の刺繍のプリント文字で『ミコト』とあしらわれている・・・自分にこのような子供じみた（厨二とも言つ）願望があったことに驚きを……って今さらか。

『（ポケ〜）…ハツ！？命ちゃん！』

「どうした！？なんかわかったのか！？」

「すっごい私好みだわ〜。今の命ちゃんの姿ならあんなことやじんなこと…／／／／きやつ」

「話を聞いて!？」

ユニゾンには成功したみたいで、ちゃんと身体強化されているのはいいんだけど、

「(何故に大人状態ですか俺!?!しかも何故に初っ端から黒状態アルティメットの強化!?!それに、炎以外にもなんか変な力が俺の中にあるような…)」

まさかと思い、手から火を出す時とは違う感覚で右手に意識を集中させると、

バチバチィ!

そこには、金の力の能力である放電現象ライジングが起こっていた。しかもだ、

「(原作と違って電気の圧がパネエんだけど!?!ビリビリがゴロゴロになってるよ!?!?)」

それはもう手から雷出せるんじゃないかって勢い(色は黒かったが)。近くで見えていたクロノさんやエイミーさんも最初は俺の姿が変わっていた事に驚いていたようだけど、今度は俺の手から出る電気を見てさらに驚いているようだった。俺だって腰が抜けそうなくらいびっくりしている。

・・・その後なんとか落ちついたクロノさんに一体どうしてこ  
うなったのかの説明を求められたのだが、こちらが聞きたいぐら  
いだ。俺の服装については「バリアジャケツト？いやでも魔力が…」  
とか言っていたが。

・・・もしかして、俺が身体能力以外で選ばなかった力が  
全部、放電に変換されてるなんて事……無いよね？だって多分だけ  
どこの服装、ドラゴンロットとかタイタンソードと同じような感じ  
で造られているのだろうし……でも武器は変換できないし、自然  
発火とかはできないみたいだけど……

一人自身についての考察を考えているとクロノさんも「何かわ  
かったら教えてくれ」と言ってこの場での追及はしてこなかった。  
・・・しかしこの人、魔導具や俺の変貌ぶりを見て驚いてもすぐに冷  
静になれるあたり、この若さでいろんな経験を積んできたのではな  
かるうか？

こういったあたり、ユーノとはまた違った知性を感じる。膨大  
な知識量からくるそれでは無く、自身の経験からくる予測、あらゆる  
視点から物事を見る柔軟な思考、それによってどのような事態に  
なってもすぐに冷静になって分析したり、この人にはきつとコロン  
君のような名探偵になれる才能があるに違いない。

後でわかった事だが、アークルによるとこの状態以外にはなれな  
いらしく、普段の状態の白以外にはこの黒グロインクしかアルティメットなれないという超両  
極端な性能になったそう。しかもその度に融合しないといけない。  
ぶつちやけこの状態で戦うとしたら人以外とじゃなきゃ手加減でき  
そうに無いし、うっかり大怪我で済まないぞ、これじゃ。

これじゃ迂闊に戦う事も……って戦いたくないから別にいいのか。

その後、なんだか俺の成長？した姿を見て「僕だって……あと五年もすれば……」と何やら呟いていたクロノさんだが、エイミィさんに茶々を入れられたらすぐに我に戻り、恥ずかしかったのか少し顔を赤くしながら、

「それじゃあ、一通り君の能力も見せて貰ったことだからな、そろそろ話し合いも終わっているだろうしそっちに向かうでしょう」

とすぐにその場から離れていったので俺はそれを追って模擬戦ルームを出た。

「命ちゃんくん？せっかくだし、このままの格好で行きましょう？きつと風花ちゃんたちもびっくりするわよ」

……皆の反応がおもしろそうなのでその提案、吞ませて貰おうかな……はやてに見せると馬鹿にされるだろうが

第十一話 「アースラの中で・・・前編」(後書き)

次回！ユーノ君の過去、そして彼がこのようになってしまった理由とは！？

・・・を書いたら良いよね。頑張るので、また次回！

第十一話 「アースラの中で・・・ 中編」(前書き)

今回のお話は

・長くね？

・ユーノ君が・・・ユーノ君が・・・

成分が含まれております。作者独自の設定や改変などもあるため、  
それらが気に障る方は【戻る】をクリックすることをお勧めします。

それでも構わないという方、中編をどうぞ！

第十一話 「アースラの中で・・・ 中編」

S I D E    なのは

「・・・・・・・・以上の事が僕たちの今の状況です」

命君が連行？された後、私達はこの艦の艦長さんのリンディさんに連れられて、和室っぽい部屋に招かれました。

そこでリンディさんが、

「そういえばユーノ君？いつまでそのままの姿なのかしら？もう戻ってても良いと思うけど」

「ああ。そうでしたね。この姿でいることがほとんどでしたから忘れてました」

ふえ？ユーノ君ってその姿以外に変身できるの？とか思っているとユーノ君が光に包まれ、そこから出てきたのは、



「……ふう。この姿で顔を合わせるのは久しぶりだったね、  
なのは」

……そこに居たのはさっきまでのユーノ君ではなく、クリー  
ム色の髪に翡翠色の目をした顔立ちのきれいな若い年ぐらいの男の  
子でした。

「いやあああああああ！？嘘！？ユーノ君ってあれ？フ  
エレットだったんじゃないの！？」

「違うよなのは。僕たちが最初会った時、僕はこの姿だったで  
しょ？」

「何言ってるんだかこの本格的な似非イタチモドキは？あんた最  
初から最後までずっとその姿だったじゃない」

「似非ってなんだ！モドキってなんだ！しかも本格的とかつい  
て言葉としてもおかしいだろう！僕はれっきとした人間だ！！」

辛口な風花ちゃんにまけじと反論しているユーノ君だけど私が  
風花ちゃんの見解にうなずいてみせると、しばらく考え込んだ後、  
手を合わせて「そういえばそうだね。すっかり忘れていたよ」と言  
っていました。

そっか、ユーノ君ってフェレットじゃなかったんだね、と納得していると徐にフェイトちゃんが口を開きました。・・・でも、なんでデバイスを構えているんだろ？

「……………ねえ〜ユ〜ノ〜？まさかあなた、自分が小動物なのを良いことになのはの着替えを覗いたり、女風呂に入ったり、女性にセクハラ紛いの行いを働いた。な〜んて事、無いんだよね〜？（ゴゴゴゴゴゴゴ）」

「ノノノノなっ！？そ、それは……………」

「そ〜いえば〜、なのはちゃんと一緒の部屋なんだって〜？それならいくらでも覗き放題じゃなかった〜？」

「そそそそそっそ、そんな事している訳無いだろっ！！！！」

「「じゃあ今日のなのは（ちゃん）のパンツの色は？」」「

「知るわけ無いだろっ！そんな事！！！」

風花ちゃんとフェイトちゃんの二人が異様な雰囲気ですユーノ君に詰め寄って、ユーノ君がとても焦っていたのでそこで私は、

「二人ともやめて！確かにユーノ君と一緒に風呂入ったりしたことあるけど、その時ユーノ君がフェレットじゃないなんて知らなかったんだから！」

「なのはちゃんは気にならないの？一応、異性に裸や着替えを見られたんだよ？」

そんな事は別に気にしないよ、と言ってその場はなんとか収まったけど、何故かユーノ君が微妙な表情で「それって僕、異性として意識されていない…？」と呟いていました。うん？ユーノ君はちゃんと男の子だよ？それでも風花ちゃんは喰い下がって、

「だつたら！例えばだよ？全く、一切、欠片ほどの可能性も無いことだけど、もしも命君に着替え見られたら嫌でしょ？」

うゝん……命君がもし私の着替えを目撃したとしたら……  
・？

ホワンホワンホワーン……

「お、なのは。着替え中だった？」

「にやにやっ！みみみみ命君！？」

「いや〜ワリイワリイ。ノックするの忘れてた・・・恭也さんとかには内緒な?じゃあね〜」

・・・何故だろう?まず異性として見てもらえていないどころか私の下着を見ても、焦ってる命君が全く想像できない……あれあれ?これは女の子としてはヒジヨ~~~~に屈辱的なのでは……ッ!

「な、なのは?なんだかすごくおっかない顔してたけど、やっぱり下着見られるのいやでしょ?」

「・・・そうだねフェイトちゃん。これは由々しき事態なの。ここはなんとしてでも私の女の子度を上げて目にモノ見せてあげないといけないの!」

私の決意に二人は「?」と、首を傾げていたけど、私はその時お姉ちゃんやお母さんとの秘密会議を開く事を決意していました。

「あの〜(汗)、そろそろ本題に入りたいのだけど・・・」

……ハッ!?いけないいけない。私達はここにお話をしに来たんだっただけ。

ここで話は冒頭に戻って、そこでユーノ君がこれまでの経緯、私がユーノ君から魔法を教えてもらった日から今日までの事を話して、今まで手に入れたジュエルシードのほかに新たに封印した物が3個、フェイトちゃん達が封印した物が4個で、合計で15個。残すところ後6個になり、これからの事について話すことになったのだけ、

「今まで本当にありがとうね、なのはちゃんにユーノ君。ここからの事は管理局が責任を持ってこの件に当たるから、あなたたちは日常に戻って、今回の事は忘れてください」

「こう言われるのはちょっと予想外……いや、でもこの人が言うてることも理解できる。」

私自身がジュエルシードに関わったからこそ、あれがとても危ない物ってことは身を持って理解しているつもりだ。それを管理局、警察のような人たちがいくら魔法が使えるといったって、自分達が守らないといけない人達を危険な目に合わせるような事はしないだろう。

だからこそ、リンディさんが私達のことを考えてこのように言ってくれているのだろう。でも……

「リンディさん！私、この件が終わるまではまだ日常（せいじつ）に戻ることはできません！！私にこの事件のお手伝いをさせてください！！！」

でも、私はここで手を引いて、知らぬ存ぜぬするつもりは全く無い。日常が大切なものだからこそ、あんな危険な物を放っておくことなんてできない！

私の意見に同意してくれたユーノ君も一緒に手伝うと言って、リンディさんをお願いしていると、フェイトちゃんが真剣な表情でリンディさんに、

「あの、リンディさん？私に提案があるんですけど・・・？」

「何かしら？フェイトさん。何か良い案でも？」

「はい。なのはと私が模擬戦をして、彼女の实力を見てから決めるのはどうですか？」

それはつまり、フェイトちゃんと戦って、私の实力を認めてもらえたら手伝わせてくれるって事？だったら！

「お願いしますリンディさん！！その模擬戦やらせて下さい！！」

しばらく考えた後にリンディさんはOKしてくれて、明日こい

の模擬戦ルームで勝負することになりました。

「頑張つてね！なのはちゃん！応援してるから！！」

『ついでに僕もね』

……あれ？気のせいでしょうか？風花ちゃんの頭に何やら白いリスのような生き物がみえるのですが……

「あれ？白ちゃん？いつの間に……って、そういえばここに来る前に着けてたつきりそのままだったの忘れてた……」

『まあそれもあるけど、僕も魔法合戦には興味あるし。なのはちゃんが僕達と別れてからどれだけ強くなつたのか気になるしね』

向こうは私の事を知っているようだけど……

「あの～あなたは？会った事ないよ～な気がするのですが？」  
おそろおそろ尋ねるとその子はどこか可笑しかったのか、くふふ、と笑ってから、

『ご主人が隠してたからねエ、君が知らないのも無理は無いか。

それじゃあはじめまして、僕は魔導具 風神 名前は白しろ。よろしく  
ね』

・・・その子は風花ちゃんちゃんの腕うでについている籠手の精霊せいりやうのよう  
なものだそうで、風花ちゃんちゃんが 風神 を使いこなせるようになった  
時に、主人として認めて姿を現したようです。それにしても、

「か、可愛い……。ふ、風花？その子触らせてくれない？」

「だめなの！フェイトちゃん！私が先にモフモフさせてもらっ  
の！！」

・・・その後二人で白ちゃんをモフモフするべく、ジャンケン  
勝負をして、何とか勝ったのに、白ちゃんは『飽きたから帰るね』  
と言って私達が勝負している間に実体を解いていて、すでに姿は見  
えなくなっていました。

・・・その時の私は、ユーノ君の暗い表情を見る余裕な  
ど無く、これから起こるアノ事ことなど知る由も無かったのです・・・

S I D E O U T



僕は世間一般でいうところの孤児になる

スクライアー族の族長に捨てられていたところを拾ってもらったのが、僕の始まり

両親こそ居なかったけど、一族のみんなは温かい人達ばかりで、族長も僕を大事に育ててくれていた

そんな中、僕に魔法の素質がある事がわかり、ミッドチルダのベル力領にある有名な魔法学園に入学した。その時は一族のみんなで学費や必要な物を用意してくれて、これはしっかり学んでこないと決意を新たにして、僕は学園の門を叩いた

その中、僕には普通の人よりも物の覚えが良く、成績も常に上位をキープし飛び級など、その年の生徒のなかでも一際優秀な成績を修めていた

しかし、僕にはあるコンプレックスがあった。攻撃魔法の適正がほとんど無かった事だ

どんなに頑張っても誘導弾2、3発しか制御できず、結界魔法やバインド系とは違い、こちらは一切上達することは無かった

普通に考えれば、そこで攻撃魔法を諦め、結界魔導師としての適性だけに絞って勉強した方が効率は良かったのだらうが、僕には

それを良しとすることができなかった

捨てられていた僕に才能を見出し、一族のみんなが期待して僕をここに送り出してくれたのだ

ここであきらめる訳にはいかない

僕は一族のみんなの期待に応えるため、これまで以上に魔法を学ぶ事に貪欲になった

勉強して、勉強して、僕は期待に応えないといけない。優秀にならなければいけない

・・・そうしているうちに、目標が変わったのはいつからだっただろうか

いつしか僕は一番優秀でいなければならないと思うようになっていた

結局僕は、学園を飛び級により最年少で卒業することとなった

そして一族のもとへと帰ると、みんな笑顔で迎えてくれた

「お前はスクライアで一番の魔導師だ」とか「ユーノは一族の誇りだ」と言ってくれて、これまでの頑張りが認められた事を喜んだ。しかも族長から、今度の遺跡発掘の指揮を任せられ、僕の嬉しさは有頂天だった。その時心の底から思った、ああ、魔法に出会えて良かった、と。魔法が無ければここまで優しくされることは、孤児の僕には無いだろうから...

・・・そして、その任務こそが僕とジュエルシードとの出会いであり、すべての始まりでもあった…

ロストロギアを発掘した事でさらに自分の事を認めてもらえる、そう浮かれていた時だった。次元航行中に原因不明の事故・・・リンデイさんによるとエンジントラブルだったらしい・・・が起こり、それがジュエルシードを保管していた部屋の壁に穴を空けてしまい、ジュエルシードがそこから流れて行ってしまった

・・・失敗？せつかく任されたのに…ロストロギアも発掘できて文句なしの成功の筈なのに、こんなことで僕は失敗してしまうのか・・・？

それだけは絶対に嫌だった。もしも失敗してしまったらみんなに期待してもらえなくなるかもしれない。優しくしてくれなくなってしまうかもしれない

そう考えると、僕はすぐに艦を飛び出した。一族のなかでも特別優秀な魔導師にしか使う事の許されないデバイス「レイジングハート」を固く握りしめて・・・

だが僕はそこで絶望を思い知らされる事となった

まともに発動させることが出来ないデバイス。僕には適正も発動させるために必要な魔力の絶対量すら足りなかったのだ

それでも諦めず封印を行ったが、命懸けで頑張ってみてもたったの一つが限界で、僕は瀕死の状態になり、魔力を体に循環させ、回復に努めるためスクライア秘伝の変身魔法を使った後、この世界に居るかもしれない魔導師に向けて念話を飛ばしたところで力尽き、

倒れてしまった

・・・その後の紆余曲折を経て、僕は自身に一人は羨望を、一人は嫉妬を与える者と出会った

一人は、高町なのはという少女。僕を最初に助けに来てくれた少女で、しかも魔法を使って初めてだというのに、ロストログアを封印してみせた。当初はその圧倒的な魔力をレイジングハートのアシストもあつてやっと扱えている物と思っていたが、その考えは覆される事になる

彼女に魔法の事を教えていたのだが、吸収スピードが半端な物ではない。それはもはや才能という言葉では表せず、まるで生まれただばかりの鹿がすでに立ち方を知っているかの如く、魔法を使う事が当然のように魔法を覚えていくのだ

僕はそのあまりの才能に羨望を感じていたが、同時にそんな彼女に師事する事が出来る事に喜びを感じていた。彼女が教えてもらった事ができた時に見せてくれる笑顔。それがとても眩しくて、僕はそんな笑顔が見たくて、気がつけばいつも彼女との訓練を思い出している訓練メニューを考えていた自分がいた

なのはは間違いなく管理局の中でも5%にも満たないAAAに届く逸材だ。そんな彼女に師事できることも、彼女と一緒に居ることすらも誇りに思えるようになっていた

しかし、彼は違う

神名命という少年は、僕が今まで築き上げてきた価値観を塗り

替えてしまった

最初出会った時、彼には何の魔力も感知できず、ただの一般人だと思っていた

しかし、蓋をあけてみると、彼の能力は常軌を逸していた。何の魔力も無しに起こす事のできる炎。レアスキルでもなければESPでも無い、まさしく「異能」。そして、彼の所持している魔導具。どれも僕の居た世界では見たことも聞いたことも無い、また、なのはに聞いてみてもこのような異能や武器を所持している事は普通ではあり得ないという事実。それらが僕に一つの疑念を浮かび上がらせた

……ひょっとして、彼はジュエルシード、若しくはなのはを狙って近づいてきた者ではないのか・・・？

だが、実際。彼はそもそもロストロギアも魔法についても全くの無知。嘘を吐いている様子も無かったのだが、彼の事を知れば知るほど僕の中で黒い感情が大きくなるのを感じるようになった

それは嫉妬。彼も両親がいない身だが、共に暮らす祖父と家主である少女と暮らしているらしい。僕と少し似たような環境だが、全く違う

彼は何の苦勞も無く家族の一員となることができている、その幸せを当たり前のように享受しているのに対し、僕は学園で血の滲むような努力を重ね皆の信頼を得る事ができた。僕が必死になって繋ぎとめているそれを、彼は何の苦も無くただそこに居るだけで維持している。しかも彼には異能、努力も無しに得た強大な力がある

彼の存在は僕の中でのなとは同じ様に大きくなっていったが、その感情のベクトルは逆方向と違っていい。なのはに抱く感情が+なら、彼に抱くそれは-だ。些細なことでも彼にあたる事が多くなつて、彼の近くにいる少女、風花やなのにもそれを諫められるようになったが、日々大きくなる感情を抑えることが出来ず、なのはが二人の援護無しで封印作業が出来るようになってすぐに彼らの協力を断り、ようやく感情が静まってゆくのを感じていた

しかし、それでも彼らとの関係は終わらなかった。彼が僕らとは別にジュエルシードを回収していた少女と繋がりを持ち、こちらとの連絡役になったのだ

この時話が来たときは、内心穏やかではいらなかった。どうしてっ！アイツは何の苦労もせず、事に進められる!?こちらが苦慮していた事案だったことが彼がいたら即解決。なんだこれは。僕がどんなに頑張っていたのか知っているのか!?

まるで僕を嘲笑うかのよう、いとも簡単に事態を收拾してしまふ

今回のアースラ行きだって、最初彼らを信用していなかった僕を信用させるため、彼が提案したものだ。リンデイさんへ今回の推移を話している時でさえ、僕は彼への嫉妬、いや、もはや憎悪にも近い感情を燻らせていた

・・・どうすればいい?どうすればアイツを見返す事ができる?・・・

そんな事を考えていると、話はなのが模擬戦をするところだった。

「（模擬戦か……確かにそれなら確実にアイツを見返せるけど、僕にそんな力は……）」

自分の非力さが嫌になる。どんなに僕が誘導弾を使ったところで、なのはにも劣る威力のそれでは彼の結界を壊す事などできない。僕にもっと魔力があれば……

「（魔力？…ああ、あるじゃないか。すぐ側に！なのはをも超える膨大な魔力を持ったモノが！！）」

……そうだ。魔力が足りないなら増やせばいい。幸いな事にそれを可能にするモノが近くにあるじゃないか。

「そうだよ、ジュエルシードを使えば……」

これでアイツに負けない。きっとなのはだって僕が勝てば微笑んでくれるに決まってる……

## S I D E O U T

そして、少年は行く……

その道が自分にとって最良のモノだと信じて……

……後にその選択を後悔することも知らないまま……

……



第十一話 「アースラの中で・・・ 中編」(後書き)

ユーノ君はこんな感じになっていて、次回とうとうヤラカシテします。

にもかかわらず、うちのオリ主(仮)のとする意外な行動とは!?

次回、「命、太平洋に沈む」おたのs「ふっざけんなああああああああ!!」オウフツ

命「変なタイトルつけんな!勝手に殺すなあー!!」

・・・まあ嘘ではありますが、痛い目を見てもらう事になるかと

・・・戦闘描写か、他者様の作品読んで勉強しよ。それでは次回!

第十一話 「アースラの中で・・・ 後編」(前書き)

今回も前回に引き続き独自の設定改変が含まれます。

そしていよいよ無印も大詰めのVSコーナー!!

・ちゃんとかけてるかなあ

それでは、後編、スタート!

第十一話 「アースラの中で・・・ 後編」

S I D E 風花

話し合いが終わり、今日はここに泊まる流れになり、それぞれ家の人には予め事情を説明していたのですんなりと許可が下りた。で、今はアースラの中にある食堂で検査？を受けていた命君を待っている。

先にプレシアさんが来て、「ああ、久しぶりに当たりを引いたわ。ふふ、血液を見ても・・・」と一人でぶつぶつ呟いていたけど、あまりに怖かったので話しかけられなかった。・・・フェイトちゃん以外。そうして待っていると、

「クロノさん。食堂っていうと地球じゃ食べられないような食材とかもあつたりするんですか？異世界の料理とか、すっげえ楽しみなんです」

「君が何を期待しているのかはわからないが、一応同じ人間だぞ？食べる物にもそれほど差は無いさ」

そこに現れたのは、先程アークルさんを連れて、命君の検査の様子を見に行った人と、

「あ、あれ？命君はどこですか？アークルさんも見当たらないし……」

私がそう言って周りを見てみると、さっき話をしていた人のうち、大きい人の方が私に声をかけてきました。

「お〜い風花や〜い。誰をお探しかな？」

「いや、その、私と近い年ぐらいの格好をした男の子なんですけど……って何で私の名前を？」

「あります。やっぱり気づいてもらえないのね、俺だよ、風花」

そう言つて、その人が突然光だして、それが収まるとさっきの人がいなくなつて、代わりにそこにあたのは命君とアークルさんでした。

あまりの事に驚いていると後ろで見ていたなのはちゃんも驚いたのか、こちらに駆けつけてきて、命君達はそれを見てニヤニヤして、

「お〜。なかなか驚いてくれたようだねエ。良いリアクション  
でおいさんも嬉しーぞー」

「そ〜ねえ〜。やっぱりいきなり大人版の命ちゃんを見ても、  
誰だかわからないわよねえ〜」

「「大人版!?!」」

・・・びつくりしたあー、まさかあれが将来の命君の姿とは…  
…アークルさんの能力が多少変わった結果、二人がユニゾンするこ  
とでさっきの姿になるらしい。でも今さっきの大人の命君…

「「(すごく、カッコ良かった…)」」

今の命君の顔から幼さが消えて、大人の男の人の雰囲気があっ  
て……うん。凄く良い。

「でしょ〜?さっきの命ちゃん、物凄〜く私の好みど真ん中で  
ね。でもねあの姿の間は融合してないといけないから、向き合っ  
て姿を見れないのが残念なのよね〜(涙目)」

「でもでもっ、大人になった命君はあんな感じに成長するんで  
すね!?!」

「そうそう 今の可愛い姿も良いけど、大人の命君と大人な関係、そして・・・うふふ（ウツトリ）」

「お、大人の関係……（ゴクリ）」

「人置いてけぼりにして、何言ってるんだコラ」

命君が何か言ってるけど・・・大人の関係かあ。私が大きくなって、今のアーケルさんみたいに綺麗になって、胸も大きくなったら、私も命君とそんな関係になれるのかな…？

隣のなのはちゃんは何やら「私も大きくなればきつといまより女っぽくなって命君をアツと言わせるぐらい綺麗になってるの…：そして命君をギャフンと言わせるんだから（ボソボソ）」と言っていたようだが…：なんで対抗意識を燃やしているんだろ？

そうしていると普段絶対に声を掛けてこない奴が声を掛けてきた。

「ねえ、ちょっといいかい？」

口調こそ穏やかだがフェレットの時とは違い感情が良く読めるようになったその瞳に浮かんでいたのは、明らかな敵意だ。命君は

それに気づいていないフリをして、

「うん？お宅だね？初対面だし、制服きてないところから見ても管理局の人じゃなさそうだけど」

「この姿で会うのは初めてだね。ユーノだよ」

命君は心底驚いたように「マジでかー！ー！ー！」と叫んだが、淫獣がそれを鬱陶しそうに遮って話を続けた。

「いやさ。ちょっと、君が戦っている姿ってあんまり資料にも無いそうだね。そこで提案なんだけど、僕と模擬戦しない？そこで君のデータ収集も兼ねてね」

やけに真面目な内容に驚いた。てっきりまた嫌味を言ってくるものと思っていたが、その話自体は至って普通の内容だ。いや、普通では無いが、命君は普段から戦う事を嫌がるし、私の場合はアルフさんとの戦闘のデータがあるが命君には対人での戦闘のデータは取っていない。

以前フェイトちゃんに模擬戦を挑まれた時なんか、フェイトちゃんのバリアジャケットのあまりの破廉恥さに「破廉恥はゆるしまへんでー！」と食堂のおばちゃんのようになりながら、小一時間説教したため、データ収集は適わなかった。だから今回のこれはそれなりに正当性があるので、リンディさんから頼まれた事というのも手伝って、命君もそれを二つ返事で了承していた。その後妙に気

落ちしていたクロノさんを見たけど…どしたんだろ？

S I D E O U T

S I D E 命

突如降って湧いたユーノ（人間Ver）との模擬戦。俺の戦闘データが欲しいという事で、別に魔導具の提出を求められた訳でも無かったのでOKしたまでは、まあいい。

しかしこの状況はなんだ？模擬戦をいざ始めようって時にユーノが懐から取り出したモノ。それは

「待てっ！それはジュエルシードじゃないか！？何故君がそれを今所持している！？一体どういふつもりだ！！」

「落ちついて下さいよ、執務官殿。今からこれの使用法を皆さんに見せてあげますよ」・・・妙なる石・・・奇跡の石・・・その大いなる力を我に・・・」

クロノさんの言葉を無視して、呪文のような言葉を発した次の



瞬間、

ビカッ!!!

!!!!!!

莫大な力の奔流とともに、目を灼くような光が辺りを包んだ

「ツツ!?アークルツ!!!」

「ええ、わかってるわ。この力……かなりまずいわね。本気で  
行かないと……」

「まさか早速使う事になるなんてな、しかも相手は化け物じゃ  
なく人間って何の冗談だよ……」  
「たたく、とりあえず最大戦力でアイ  
ツを止めるっ!行くぞ、アークル!!!」

「ユニゾン・イン!!!」

そして俺は身体強化を最大の状態にした後、神慮伸刀を片方だけで持ち、いつでも火竜の印を結べる状態のまま光が収まるのを待っていた。すると

「くくく、くふふふ、アーハツハツハ！！！！凄いい！！なんて  
凄まじい力だ！！これならだれにも負けない！！僕は今！！君を倒  
す事のできる力を手に入れたぞっ！！ミコトツオオオオオオオ  
！！！！！！」

・・・そこに居たのは、優しげな表情の似合う少年の面影など  
無く、その顔には狂気そのものを浮かび、翡翠の瞳はジュエルシ  
ードの色と同じ青色になっていた。

S I D E O U T

「まさかあの子！？ジュエルシードを体内に直接取り込んだ！  
？」

「どういうことですか？あれは確か、持ち主の願いを叶えるた  
めに必要なだけの魔力を放出するモノだった筈。持ち主を取り込ん  
で暴走することはあってもその逆を行うなんて事……本当に可能な  
んですか？」

「答えはYESよ。でもあれを生身で制御するなんて体が持つ  
筈が無い。あのままの状態が長く続くようだと、彼、死ぬわよ。間  
違い無くな」

「そんなっ！？ユーノ君を助けることはできないんですかっ！  
!？」

「暴走体を封印する時のようにすればできないこともないけど……あの魔力は尋常じゃないわ。ランクに換算しても純粋な魔力量だけでSランクオーバーしてるでしょうし、彼、デバイス無しでもかなり精巧な術式を構築できるようだし、多分この場に居る魔導師のだれよりも強いわね」

「そんな！？母さん！！何とかならないの！！？」

「今私達が出て行っても彼の足手纏いにしかないわ。見なさい、あれを」

プレシアに促され皆がその戦闘の様子を見て、愕然としていた。

飛んでいるのは翡翠の弾幕。その一つ一つに必殺の威力を持たせたそれを向かい撃つは、同じく必殺の威力を伴う炎弾。方や幻想的な風情すら漂う翡翠を、暴力を象徴するかのような炎が呑み込む。

それが幾度か行われると、青年の左手から刃が飛び出してきた。弾幕の中に隠れて迫る刃を狂気の少年のシールドが防ぐ。

一瞬、シールドを張って動きの止まった少年の隙を見逃さず、青年は右腕より炎刃を出し斬り付けるも、シールドはそれらの猛攻を受けてもヒビ一つ入らず、青年は舌打ちして背後から迫る誘導弾を斬り伏せ、再び距離を取り両者睨みあう形での膠着状態となった。

「伸刀と碎羽で斬ってもヒビはいらねエってどんだけ堅いんだよそのシールド。今までの比じゃねエぞ全く……しかもお前、あんなに威力のある弾幕張れるとか……あれ、なのはのそれより遙かに強いぞ？本気の崩でも相殺がやっとだったしな」

「ふうん。今の口ぶりからすると今まで見せてきた能力も全部手加減していた訳？君こそ大分ふざけた能力じゃないか。ジュエルシールドの魔力供給で今の僕はSSランクはあるっていうのに、それを相手にまだ軽口を叩けるなんてよっぽどの余裕でもあるのかい？・・・つくづく君は僕を苛立たせるな。その力も、その存在も！」

「余裕なんかあるかバーカ。今だって逃げ出したいくらいだチクシヨー。・・・でもなあ、せつかくお前が漸く本音でぶつかってきてくれたんだ、それに応えられないってんじゃあまりにも友だち甲斐が無いだろ？」

そう言って青年は持っていた武器を戻し、次に取りだしたのは翼状のもの。それが背に装着されて、少年を見降ろす高さまで飛翔すると、

「それじゃ俺も空戦仕様になったことだし、行くか。第二ラウンド―」

その言葉を合図に再度、青年と少年の攻防が始まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それを呆然と見つめる事しかできなかったなのはと風花。

なのはは自分の友人である二人が本気で争っている事を嘆き、風花は自身の想い人である青年の力のなれない自分に齒噛みしていた。

彼女たちは、確かに強くなった。

しかしそんな彼女たちですら、あの二人の戦いに介入するなど自殺行為である。本人達もその自覚があるからこそ、あの二人を止める事の出来ない自身を呪った。お互いに多少の違いはあれど、彼女たちは自身の大切な者を守るために力を入れたのだから。

なのに今。その大切な人が戦っているのに自分には何もできない…そんな思いが頭の中を埋めていく中、フェイトが声を掛けた。

「二人とも。今は辛いだろうけど、きっと命がユーノを止めてくれる。私達にはあの戦いに入ることはできないけど、信じることはできる。だから信じよ？二人がちゃんと無事に帰ってくるって…」

…」

少女たちは、それでも納得しきれなかったが、今はそうすることが一番だと思い、ただひたすらに祈った

うに……どうか。命君がユーノ君を無事に止めてくれますように……

……どうか。私の大事な人が無事に帰ってきますように……

少女達が祈り続ける中、彼らの戦いはまだ、終わらない……

第十一話 「アースラの中で・・・ 後編」(後書き)

戦闘今回じゃ終わらなかった・・・

今回のユーノ君の呪文なんです、アレ一応ジュエルシールドを制御下に置くために取り込む際、意識とジュエルシールドを遮断して純粋な魔力タンクとして機能させるために創ったユーノ君オリジナル魔法です。

いよいよ次回決着！命はユーノを止められるのか？ではまた次回！！

命「・・・前回の嘘予告みたいにならんよう、本気で止めるかつ」

第十二話 「共に歩くために」(前書き)

今回はいつにも増して駄文の予感がひしひしと！  
やっぱノリと勢いだけでは駄目ですね。

こんな考えなしの作者ですが、これからもお付き合い宜しくお願  
いしますと言ったところで本編をどうぞ！！

アークル「お願いするならキチンとしなきゃだめよ？」



## 第十二話 「共に歩くために」

### S I D E 命

俺が 飛斬羽 を発動させ飛行し、再び戦いは始まった。

魔導具では殺傷力が強すぎる事もあって、神慮伸刀をしまい、本格的に火竜を使用する事を決意する。一応火力の調節ぐらいはできるが、ユーノの張るシールドは生半可な炎ではビクともしない。ならばっ！

「（武器をしまった？）この期に及んでまだ余裕のつもりかい？魔導具無しで今の僕に勝てるか？」

「お前の力なんてドーピングもイイところだろーがっ！いばんなー！！・・・それに別に余裕かましてる訳でもないさ。見せてやるよ、火竜の応用版ってやつをよお！」

そして俺は、火竜の印を書く…一文字のそれではなく、複数を  
続けて

「碎羽！崩！！・・・行けえエエ！！」

式式の碎羽、壹式の崩の合体技。それは炎のブーメランとなつて、ユーノの弾幕を斬り裂き迫る。本来は複数のブーメランだが、これらを一つに束ねたこれならあいつの防御だって抜ける筈！

「（炎のタイプを融合させた！？）クツ！？ラウンドシールド！！！」

予想外の攻撃に驚いた表情を浮かべるもすぐさまシールドを展開するが、従来の炎と違い合体して威力も上がっているそれを完璧には受け止めきれず、シールドの向きを逸らし受け流すようにして攻撃を凌いでいた。

「まったく、今でも決まらねエのかよ……。結構自信あったんだけどな、それ」

勿論、密度を下げて切断能力はダウンさせているが、それでも今の攻撃で決めるつもりだったので少々気を落とすが、ユーノがこちらを射殺さんとする様な視線をぶつけてくる。正直なところ、あんな視線は心臓に悪すぎる。さっさと止めたいところだが・・・

「そういえば、君にはそれがあつたね。合体火竜？……つくづく魔法をバカにした能力じゃないか。君はなんの苦労も努力も無しにそんな力を手に入れているなんて……」

「俺が何時魔法の事を馬鹿にしたよ！？しかも苦労ならそれなりにしてるわ！死にそうになるほどな！！」

いやま、実際は一度死んでるんだけどね？と心の中で付け加えておくと、さらにユーノは気に障ったようである

「ならどうして君ばかりがそんなに強いんだ！僕だって頑張ったんだ！一族のみんなの期待に応えるため、学園でも常に上位の成績をキープして、血の滲むような思いをして魔法の勉強に励んだ！それなのに僕には一切、攻撃魔法の適性が無かったんだ！一族のみんなはそんな僕でも優秀な子には変わらないと言ってくれて、ジュエルシードの発掘の責任者という大役を任せてくれた！！」

……それはユーノが今まで感じてきた想い。

「それなのに、事故には遭うし、命懸けで挑んだジュエルシードの暴走体でさえあった一体だけしか封印できなかつた……これほどまでに自分の無力を呪った事は無かつた。そこに君が現れた！！君には魔法の才能も無ければ魔力も無い。それなのにどうして君ばかりがそんなに強いんだよ！

しかも！僕と同じ両親のいない君が何故なんの苦労も！努力も

しない癖してのうのと幸せを享受している！！？力を持つてる癖にどうしてそれを使わなくても君は幸福でいられるんだよっ！？僕は精いっぱい頑張っているっていうのに……どうして君は僕が欲しい物ばかり簡単に手に入れられるんだ！！？」

「……………」

ユーノはつまり、自分は孤児なんだから優秀じゃなかったらまた捨てられてしまう、そういう考えがあるんだろう。だからこそ自分が一族に認めてもらった魔法って存在はこいつにとっては価値観の最上級という訳が。

それが今回の一件で自分の力が及ばなかった事に絶望し、さらに俺という本来ならばこの世界に存在しない者が現れて、そいつの境遇が自分に似てるクセしてそいつは何の苦勞も無しに自分が求めてやまないモノ……仲間や家族からの愛情……を持っていて、それが気に喰わない。

さらにいえば多分だがあいつが好意を抱いているであろう少女と仲良くしていて、懸念していた別の魔導師、フェイトたちとの和解にいたるまで俺が居た事がユーノの苛立ちに拍車をかけてしまい、このように思いつめてしまった、と。

……しかも今ユーノが使っているジュエルシードはなのはに内緒で集めたものでその数は6個。

何気にこれでジュエルシードはこの場に揃っているという本来ならば嬉しい状況の筈なのだが、そうも言っていられない。

……………でもなあ、家族の愛情を受けるために頑張る。

うん。素晴らしいことだとは思いますがそれにしたってこいつ……

「なあユーノ？お前はさ、魔法の素質があったから拾ってもらったのか？」

「……いや、長老が僕を拾ったときはまだ僕の中にリンカーコアがあることは知らなかった筈だけど……」

「じゃあさ、お前を拾った時、その人はお前に魔法が使えるようが使えまいが関係なく拾ったってことでいいんだよな？」

「……ああそうだよ。さっきから何が言いたいんだ、君は？」

「なら別にお前が優秀であろうが無かるうが、その人がお前の事を大事にしない訳無いだろ？それともあれなのか？お前の一族の人は魔法が使えないやつを吊るし挙げて「役立たず」とか言って捨てたりするような極悪人なのか？」

「……ツツ！ふざけるなツ！！今の言葉、撤回しろ！！一族のみんなは優しい人ばかりだ！！孤児の僕を家族に迎え入れてくれたんだ！そんな事、する筈が無いっ！！」

「じゃあなんでそこまで優秀でいようとするんだよお前は。そ

んなに怒ることができずくらいお前が好きなら、例えお前に魔法の才能が無かったとしてもちゃんと受け入れてくれるはずじゃないのか？お前を見てるとまるで優秀じゃなければ捨てられるって怯えてるように聞こえんぞ、さっきの言葉」

その言葉に何か思うことがあったのか、ユーノは俯いてさっきのように嘔みつかなくなったのだが、俺は構わずに自分が思っている事をそのまま言葉にした。

「そもそもだ。家族相手にお前は優秀じゃなきゃ、とか、見た目が良くないといけないうって要求するか？しないだろう？それは相手だって同じ筈だ。

家族ってのはさ、互いに何かを要求することはあっても、「こっちは強くないから強くない」って強制をする間柄じゃない。そりゃ優秀なら嬉しいに決まってる、何たって自分の家族の頑張りが実を結んだ結果でもあるし、そいつの才能でもある。家族ならそれを喜んで当然だろ？

でもな、別に優秀じゃなかったって良いんだよ。ただ一緒に過ごすことができて、感情を共有しあって、互いが元気でさえいれば、な。だから…そんな事をしてまで優秀であろうとする必要なんて無いんだ、ユーノ」

これはあくまで俺の中の家族論であって、世間一般のものとは違うものだろう。

でも、家族の間に有能だの特別な才能なんかは必要だろうか？俺はそうは思わない。前世で虐めを受けて、自身の価値を見出せなくなった俺を助けてくれたのは紛れも無い家族の言葉だった。

—— 何の才能もいらぬ

—— 特別なものなんて何一つとして必要無い

—— 私達は尚久と一緒に暮らせる事が、あなたに笑っていてもらう事の方が何よりも必要なんだ

……と言って、父と母は俺を抱きしめてくれた。弟も照れくさそうにしながら「兄ちゃん居ないとゲームする相手減っちゃうしね」と言って笑ってくれた。

例え名が変わり、世界が変わっても、この事だけは絶対に忘れない。

この言葉に俺がどれだけ救われたかを、この家族の優しさを決して俺は忘れない、忘れたくななどない。

だから俺はユーノにもわかって欲しかった。優秀じゃなくたっていい、ただ、一緒に暮らしてお互いが笑いあえる、たったそれだけの事で幸せになれることに……

S I D E O U T

S I D E なのは

—— 優秀である必要なんてない ——

そう言った命君の言葉は、頑なになっていたユーノ君に向けられたものだったけれど、その言葉は、私が常に抱いているある感情すらも否定した様な気がした。

—— 私がまだとても幼かった頃の事だけど、一時期お父さんが昔の仕事関係で大怪我を負ってしまったときがありました。

その時期はやっと翠屋の営業が軌道に乗った頃だったので、みんな忙しく、誰も私に構ってはくれませんでした。

なので私は、ずっと良い子でいなければいけない、そう決意し今まで生きてきました。



なのに、命君はまるで私の決意をまるごと否定してしまうようなその言葉を発していたのです。

・・・どうしてそう思えるのだろう？...どうして良い子にしくてもいいだなんて思えるのだろう？

そう思った私は後で命君にその言葉の真意を尋ねることを決心したのでした。

S I D E O U T

288

S I D E 命

・・・ふう、やっとか……

俺の言葉を聞いて、ユーノは打ちのめされたかのように膝をつき、

「ねえ…？ミコトはさ、あの家族に受け入れてもらった時になにもしなかったの？」

「うんにゃ。今思い出しても恥ずかしいけど、二人には頭を下げて「俺と家族になってください！」って。アレ今思い出してみても無いわあ。普通に言葉として可笑しいもの。これじゃ告白してるようなもんじゃんか。あつ。ある意味告白か」

俺が一人ごちているとユーノは呆れたように溜め息を吐いた後、

「なんか、今まで君の事を恨んでいた事がなんだかすごく馬鹿馬鹿しい事のような気がするのが不思議だよ。こんな単純なこと、どうして今まで思いつかなかったんだらう……」

「坊やだから、じゃね？」

「いや、意味分かんないから…でも、そうかもしれないね。僕はあまりにも魔法以外の事に目を向けなすぎだったんだ。これじゃあ視野も狭くなって、考えが変なところに行ってしまうのも当然かな…？」

そういつて苦笑しているユーノの顔はさっきまでの狂気の浮かんだものではなく、俺が初めて見る、穏やかな表情がそこにはあった。きつとこれがユーノ本来の顔なんだろうなと感慨にふけっ

ると、突如ユーノが苦しみ出し、ユーノの体から取り込んだ筈の6個のジュエルシードが浮かび上がった。

「!?どうしたユーノ!?!? 一体何が……」

「くうっ……。た、多分、ジュエルシードを抑えていた術が解けたんだ……このままだとこの場で次元震が起きてしまう……」

「（何だその如何にも危険な香り漂うワード!?!）な、なあユーノ。その次元震ってやつつてももしかしなくともヤバい?」

「……もしこの場で次元震が起きようものならここに居る人全員が次元の裂け目に巻き込まれるし、下手したら地球にも影響をあたえてしまうかも……」

「ハアアアアアア嗚呼嗚呼ア!?!?!?それって滅茶苦茶やべえ事じゃねえかつ!?!」

だからそんなアブナイ物を保管しようって言ったのお前じゃねえかアアアアアアアアア!?!などと怒鳴ってる場合では無い。こいつを早いとこ処分しないと……

「ユーノッ!それをもっぺん封印とかできないか!?!?」

「無理だよ！今からじゃなのは達がこちらに来る前に暴走が本格化してしまうー！」

「だったら！こいつと俺をこの艦からどこかに転送させることは！？」

「それだったら今の僕でも何とか…って君は一体どうするつもりだ！？封印もできないんじゃない危険過ぎるー！」

「別に封印する訳じゃない。ジュエルシードを焼却処分して、暴走を力づくで止める」

「なっ！？」

「流石に今はビビってる場合じゃない！俺ならこいつを跡形も無く消すことが出来るから、どこかの海上にでも転送してくれ！」

俺のこいつを消すことが出来るという言葉聞いて驚きを隠せないユーノだったが、すぐに冷静になると、「わかった！任せる！」とすぐに転送の準備にはいつていった。

「命君ッ！！」

風花がこちらに必死に呼びかけていた。でも、ここでもたついていたら取り返しのつかない事態になってしまうので、俺はその場にいる全員に聞こえる声で皆を安心させるための言葉を発した。

「これより神名命！！ジュエルシードの暴走を止めるべく、ちよっと思ってきまーす！！」

……何故だかクロノさんたちがその言葉を聞き、余計に取り乱していたが、俺はそれを尻目に、完成した転送魔法の光に包まれつつ、これから行う事に向け気合いを入れていたのでその事に気付けなかった。

第十二話 「共に歩くために」(後書き)

戦闘は中途半端ですが、うちの命は知り合いをボッコするような性格ではないので、自身の過去を思い出しつつ緩めのお説教。本格的な戦闘はいつの頃になるのやら・・・

命「俺はそこまで戦闘楽しみにしてる訳じゃないからな？怖いし」

・・・ハア。それではまた次回ー

命「何故に棒読み!？」

第十三話 「あれからしばらく経ちまして」 (前書き)

今回時間がかくなり飛びます。

それと、もう一つ。

みなさん、熱中症にはほんつゝつゝつゝとうに気をつけてください。

クロノ「お前が罹っただけだろうが・・・」

第十三話 「あれからしばらく経ちまして」

S I D E 風花

「ハアアアアア~~~~~」……」

「……いい加減元気出さないよ風花、見てるこっちまで気が滅入ってきそうなんだけど。アイツが居なくなっただぐらいでそのままで気落ちすることでもないじゃない。ちゃんと3カ月したら帰ってくるんでしょ？だからそんなに凹んでんじゃないわよ」

「ハアアアアア~~~~~」……」

「……もう……別に良いわよ……」

「どうも、風花です。あの似非フェレットの暴走事件？からそろそろ2か月が経とうとしています。」



あの後、暴走したジュエルシードを処分すると言ってアースラから出て行った命君。

リンディさん達が探查魔法で転移先を割り出してサーチャーを飛ばして、その映像が映るとそこには、「次元震？何時でも起こしてやんよ」と言わんばかりに暴走しているジュエルシードが命君の創りだした従来のサイズよりも巨大な円で覆われていて、その結界の基点である火球一つ一つからこれまで見たことも無い程の威力の炎というよりレーザーが放たれて、直後、物凄い爆発が結界内で起こりました。

爆音が止み、煙が晴れて視界が露わになって映ったそこにはもうジュエルシードは跡形も無く消滅していて、命君だけがその場に佇み、「もう…無理…」と言って飛斬羽の制御が切れて、そのまま海に落下していこうとした瞬間に何とか転送魔法が間に合い回収することができました。

急いで命君が運ばれた部屋に行くと、そこには死んだように眠っている大人姿の命君が居ました。何でも魔導具の連続使用+あの巨大なレーザー掃射、虚空+円+崩の三体の合体火竜の負担が大きかったらしく、アークルさんと融合した状態でも二日は休まないといけないそうで実際にその後二日間、何をしても目覚めること無く、気持ちよさげに「ふはははは、わしのおぜうは世界一〜ZZ」と訳の分からない寝言を呟いていました。

その後まず行われたのが似非フェレット、ユーノへのリンディさん+クロノさんのSEKKYOUでした。無断でのロストログリアの使用は重大な犯罪で、今回こそ何も被害は無かったものの、一歩間違えば世界クラスの次元災害が起こるところだったのだ。それに

ユーノ自身もジュエルシードを取り込んだ後遺症か、瞳の色が片方だけ青色のまま、魔力の総量もなのはちゃん程ではないにしろそれでもAAを軽く凌駕するほどのものだそうだ。

ユーノの処分は、一度管理局の本部のある世界「ミッドチルダ」でプレシアさんらによる本格的な検査を受けた後、管理局への無償奉仕が言い渡されました。管理局では万年魔導師の数が不足しているので、本人の意思さえあれば、しばらくは無償奉仕で罪を軽くすることができそう、そのまま管理局に入って働けば事実上は無罪のように扱われることになるそうです。

・・・どうせなら罪状に痴漢罪も追加してくださいとはフェイトちゃんの弁である。よほど小動物を装い痴漢紛いの行動をしていたことが許せなかったそうだけど……フェイトちゃん？あなたのバリアジャケットの格好も際どいと思うな、私。露出度的に。

そう。これだけならば私が今このようにアリサちゃんの話スルーする程の事など無かったのだ。ユーノへの処分を言い渡し、命君が目覚めるのを待ってからリンディさんが私にとってとんでもない話を命君に持ちかけてきたのだ。

「命君。君のあの時の行動なんだけどね。今回の一連の事件の資料の一部として送ったら本部の人が大騒ぎしちゃってね。」「魔力も持たない人間がこれほどの力を持つなど危険過ぎる」とかなんと

かで君の身柄を何としてでも押さえて来いって命令がきてね」

「俺ってつくづくその手の魔法至上主義者の連中に危険視されるのね……でもここは管理外世界の筈でしょう？そんなところの間捕まえてもいいんですか？」

命君の疑問にリンディさんは苦笑を浮かべながら答えた。

「普段ならそうなんだけどねえ、向こうとしては何としてでも君の身柄が欲しいみたいでね……だからこちら側である程度それを抑えるためにある提案をしたの」

「ある提案？」

命君が尋ねるとリンディさんは持っていたお茶（大量の砂糖とミルクを入れたものをそう呼ぶのは不本意だけど）を飲みほしてから、

「ええ、今から命君には三カ月という期間限定でこのアースラで働いてもらって、その間の君の調査などはプレシアさんが担当、監視の意味も込めて君にはクロノの補佐をしてもらう事。これが君の身柄を拘束する代わりにこちらが提示した条件よ」



が……  
……とまあ2か月前にこんなやり取りをしていたのだ

……さすがに3カ月は長すぎるよう。毎日顔を合わせていただけにその寂しさたるや、声を掛けてくる人の事も一切気にならないほど。

命君がいないことをいい気に、私に声を掛けてくる有象無象がだいぶ増えたけどそれなんかはアリサちゃん達を見習い、適当にあしらっている。

そういえば、命君が居ない間に八神家では新しい家族が増えました。

はやてちゃんの誕生日を祝うために私と私達のなかで唯一顔を合わせているのはちゃんを呼んでパーティーを開くことになった時のことです。

命君が居なくなった当初ははやてちゃんも少し落ち込み、雪而さんはそんなはやてちゃんを慰めていたけど、どこか元気が無い様子でいたけど、このパーティーで少しでも元気になれるようにと、私は白ちゃんと一緒に練習した風を使った空中切り紙を披露し、なのはちゃんは砲撃魔法の応用で空に花火のように綺麗な光を打ち上げていました。そのどれもはやてちゃんは喜んでくれて、その日は二人ではやてちゃんと一緒に寝ることになりました。



しばらくするとボロボロになった4人が現れ一斉に、

「「「「夜分遅くにすいませんでしたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」」」」

「」

それはそれは奇麗にハモツた声&土下座だった。

・・・ピンクの人、シグナムさんの話だと自分達は「闇の書」と呼ばれるものの中にある守護騎士プログラムでヴォルケンリッターという存在で、闇の書の主を守るために存在するらしい。この本の持ち主であるはやてちゃんが主にあたり、この本に与えられている能力「蒐集」で他の生物より魔力を集めて、666ページを埋める事ではやてちゃんに莫大な力が与えられるとのことだが、そんな話などどうでもいいかのように私たちはこう言った。

「なあなあ。一気に家族が増えて、しかもうち二人はなかなかのモノをもつとるみたいやし…これは天が私に齎してくれたプレゼントなんやなあ、と思う私やけど、二人はどう思う？」

「にははは…まあそれはともかく、今はあの人達の服の事をどうにかしてあげようよう。あのままの格好はフェイトちゃんのバリアジャケットより過激なの…」

「当面は新しい服を買ったり、食器とかも買わないといけなんじゃない？」

「そうやな、よっしゃ！明日はみんなで買い物や！二人もつきあつてな？」

「は〜い」

「え、ええ〜つと、主？あの、先程から一体何を……？しかもその二人からは魔力を感じます。主を狙っているm「ほほう」。主である私の友達を信用できないとでも言うんか……？」い、いえっ、そんなことはありません！！」

「なんだかこちらの様子に着いてこられていないみたいなので、補足しておくことにした。」

「ああごめんね？勝手に話を進めちゃって。要はあなたたちにその格好をさせておく訳にはいかないから服を買おうってことだけ」

「いやでも、私達には必要ありませんし……」

「そんなことは無いよ？これからはここで暮らす家族になるわけだし。でしょ？はやてちゃん」



「そつや！家主にして闇の書の主でもある私からの命令や。今から4人とも我が八神家の一員や！」

「せやから明日皆の服を買いに行ったりせなな！」

・・・はやてちゃんの言葉を聞き、口をポカンと空けている4人の姿が中々に面白かったことをここに記そうと思う。

その後しばらくは今までの主とは一味も二味も違うらしいはやてちゃんの行動に戸惑っていたヴォルケンさん達だったけど、次第に打ち解けていくようになりました。

シグナムさんは雪而さんに負けて以来、度々挑んでは負けを繰り返していて今では稽古をつけてもらう感覚なのか「今日もお願いしますっ！師匠！」といったの間にか師弟関係が築かれていた。それ以外でも将棋や囲碁を教わるなど、結構ベツタリしているけど・・・まさかね？

金髪でおっとり系のシャマルさんはよく家事などを手伝ってくれていて、たまに料理もするそうなのだがその際、雪而さんかはやてちゃんの監視が絶対になっているらしい。ヴィータちゃんいわく、

「シヤマルの料理は二人の監視が無エとギガやべえんだよ。じっちゃんとはやてとは逆の意味で」

と言っていたことから、かなり不味いであろうことが予測される。

そのヴィータちゃんだけど、最初はツンツンしていたけど次第にこちらに心を開いてくれて、今ではなのはちゃんや私に魔法で訓練をつけてくれている。

ヴィータちゃんの使う魔法はベルカ式という接近戦主体の魔法でカートリッジシステムという物で一時的に魔力を爆発的に上げてそこからの一撃で勝負を決めるのがこの魔法での基本的な戦い方らしい。

実力もかなり高く、なのはちゃんの防御を簡単に抜いたり、私の鎌鼬ですら破れないバリアとか最初は全然勝てなかった。風の爪とか 風魂 や 疾 を使ったりすればまだわからないけど、これは命君にも言われたことだけど、かなりの殺傷力を誇るので不用意には使えない。ヴィータちゃんも魔導具の事をしきりに尋ねてきたのだが、詳しくはもうじき帰ってくる人に聞いてと言ってその場は逃げた。

ちなみにヴィータちゃん。最初の爺発言とは180度変わって現在、雪而さんにかゝなり懐いている。アイゼングラフを片手に雪而さんを引っ張って近所のゲートボールに参加したり、買い物なども雪而さんが行く時はいつも手をつないで着いて行っている。その様子は見事に孫とそのお爺ちゃんという構図そのままだ。たまに雪而さんとシグナムさんが一緒にいると必ず割り込むあたり、独占欲も相当なものだとはやてちゃんは睨んでいる。

そして狼で盾の守護獣であるというザフィーラさんは、はやてちゃんの抱き枕など愛犬としての扱いを受けていて、たまに雪而さんに晩酌を付き合ってもらって愚痴やこづいづ時はどうすればいいかなどを話し合っているそうなの。

……こんな感じで八神家も私も元気で。

命君。あなたは今どうしていますか……？

第十三話 「あれからしばらく経ちまして」(後書き)

次回から、命君のアースラでの出来事やユーノ君との和解つーかを  
書いて行きたいと思います。それではまた！

## 第十四話 「もう一人の転生者」(前書き)

今回のオリキャラ登場で打ち止めです。

彼女はこの世界の事も元々の原作もこれっぽっちも知りません。  
では何故彼女はここに転生したのでしょうか？

アリサ「なんで私にそれを聞くのよッ!！」



それは、ユーノとテストロッサー一家をミッドチルダに送り、今度の航行に備えての資料整理や補給を行っていた時の事だった。

「補充人員？」

「ああそうだ。今度このアースラに所属することになった新人がいてな。それも、資料によると魔力量もなのはやフェイト並にある将来有望株だそうだ」

「何でまたそんな子がここに？確か各艦ごとに保持しているランクで考えるとここっていっぱいいっぱいだったと記憶しているですけど？」

クロノさんの手伝いをするにあたって、ここ管理局の制度も多少覚えたのだが、確か過剰な戦力を保持することを防ぐためにある程度定められたランクの人間で各隊を編成しているとか。現在ここアースラにはニアSランクであるクロノさん、今は居ないけど後で合流する予定のフェイト、アルフさんもそれぞれAAAとAAランク相当の実力を持ち、他の隊員だってAには届かないものの連携や支援要員として各々の経験が豊富があり、とてもそんな高ランクの魔導師が宛がわれる理由が無いどころかこれは立派に過剰戦力となってもおかしくないだろう。

俺の疑問にクロノさんは肩をすくめながらこう答えた。

「いや何、それもある意味君に対する措置の一環ってところだよ」

「???余計に分かんないんですけど?」

「まあなんだ、むしろ君の抑止力としての戦力ということだよ」

クロノさんいわく、俺が何らかの形で管理局に牙を剥いても対処できるようにするための戦力増加らしいが・・・

「それでもたかがAAAでしょう?もし俺を本気で抑えるならこのランクの人間を近接、中距離援護、後方支援で揃えてやっとなんと戦いになるくらいじゃなかったんですか?」

以前のユーノとの戦い、データ上のランクはお互いSSオーバー。しかも俺はその際刹那、虚空を使用していない。従来魔導師ランクというものは絶対の基準であり、Bランクの者が決してAランクの者には敵わない、と言った風にその考えは絶対の物である。それがオーバーSランクの者となってくるともはや戦略兵器扱いである。それなのに何故送ってくる戦力がAAAたった一人なのだろうか?俺のそんな疑問にクロノさんもそれは知らないようで、

「確かにミコトの戦力で考えればそうなんだが……なんでもこ



れは、その送られてくる新人が自ら志願してしかも一人で行かせてくれと直談判したそう。よっぽどの自信家か、それとも馬鹿なのか、こちらでもよくわかってないんだ。これがその人物に写真なのだが見てみるか？あと、その人物なんだがどうやら君の事を知ってるようだぞ？」

「何故にWHY？俺、ミッドチルダに来るの初めてですし、そもそもこんなところに知り合いなんていませんよ？」

「ふむ、だが向こうの方は君の戦闘を見るなり確か…「なおくん」とか言っていたそうだが君の渾名かなんかじゃないのか？」

「……HA？イマナント？なおくん？あれ？それって……」

「あの〜クロノさん写真、見せてもらっていいですか？ちょっと確認したいんで……」

「あ、ああ。構わないが……どうした？顔が真っ青だぞ？」

「いやいやそんな馬鹿なことあるわけ無いよ大体アイツが死ぬわけ無いものこんなに早くってあれ？向こうとこっちとじゃ時間の間隔でも違うのかならわかるけどいやでもまさかほんとに……」

「お〜い命ちゃんや〜い……だめねえ〜、なんか自分の殻に籠もっちゃってるみたい。悪いけどクロノ君、その写真ちよつと貸してくれる〜?」

いやそんなでも……と俺が自身から浮かび上がるある仮定を必死で否定していると、横からアークルが「じゃあ写真で確かめてみないとねえ〜」と言ってきたので、俺は意を決して写真を手に取った。そこに映っていたのは……

「なかなか可愛い子よねえ〜……ってあれ?命ちゃん、どうしたの?今度は震えてるわよ?」

「あ、あははははははは……魔王からは逃げられない、ってか。ふざけんなよ、なんでこんなとこまでお前は来るんだよ……  
……神楽」

青髪の長い髪に、琥珀色の目。そこに映っていたのは俺のよく知る顔で本来ならばこの世界には居ない筈の人間。俺の前世でお隣さんだった女の子の姿が、そこにはあった……

S I D E O U T

ようやく補給作業が終わってフェイト、アルフ、そしてミコトについてまだ調べるといつて聞かないプレシア女史の三名が合流、残すところはミコトの抑止力としてこちらに送られてくる少女、名をカグラ＝シロタエという今年管理局に入局したての新人であるのだが……

「ミコトー？だいじょぶ？何か顔がすっごく怖くなってるよ？嫌なことでもあるなら私とも「却下」うう、せめて最後まで言わせてよう〜」

「俺と模擬戦したくばあの破廉恥な格好を改めて来いつて何度も言っただろうがよ。それにフェイトが言った通り今機嫌がサイコーに悪いんだ。俺は部屋に戻ってるから挨拶は抜きで。あとこっちには会いに来なくていいって言つといてくれ。そいじゃ行くぞーアークル」

「ゴメンねエ〜フェイトちゃん。命ちゃん、今から来る子とはどうしても会いたくないって聞かなくて…」

「そうなのアークル？でもあんな露骨に嫌そうな顔してるの初めて見たよ。それだけこれから来る子が嫌いつてことは、やっぱり知り合いなのかなあ？」

「それはわからないが…おや？そろそろ到着したようだな。僕は出迎えに行くが、どうする？」

「私達は囑託魔導師として乗船している身だし、後で艦内挨拶のときに会えればいいかな。私と母さんとアルフは先にアースラに戻ってるよ」

そう言つてフェイト達が戻り、この場に残ったのは僕とエイミイだけになった。するとタタタツ！と走ってくる音が聞こえてきて、

「すいまつせー！ー！ーん！！！！少し寝過ぎちゃいました…」

「大丈夫だよ。ちょうど時間ピッタリだったし。私はエイミイ、この艦のオペレーターだよ。よろしくっ！」

「は、はいっ！私は此度の異動でここ、次元航行艦アースラに所属することになりましたカグラ。シロタエ三等空尉です！こちらこそ宜しく願いますッ！！」

うーん、今のところミコトがあそこまで嫌う要因が見当たらないんだが……とてもあそこまでの嫌悪を向けるような相手では無いよなあ。容姿は抜群と言っても良いし、性格も明るそうで後ろめたそうなどころなんてどこにも……」

「クロノくん？途中で声がダダ漏れだよ」

「なっ!？」

しまった。僕とした事が……

「あはは、別にかまいませんよ。そう言っていただけのも悪い気はしませんし」

そう言うと彼女は少しはにかむように笑った。ホント、この子のどこがあんなに嫌う要因になりえるのだろうか？

そんな疑問を頭の片隅に押し込めつつアースラ内を案内した後食堂に向かい、皆への自己紹介を済まし、そのままの流れで軽い歓迎会を開く流れとなった。発起人は母さんとエイミイの二人だ。全く……こういう時の行動力をもっと現場でも生かしてくれと助かるのだが……

会が始まってしばらくして彼女を見てみると、どこかキョロキョロしていて何かを探しているようなそぶりを見せていた。誰かを探しているようだ。

「カグラ三等空尉。もしかしてカミナミコトを探しているのかい？」

「カミナ…？えっと、はい。その、例の少年なんですけどここにはいないみたいで…どこに居るのか知りませんか…？」

そう言つて上目遣いでこちらを見てくる彼女。元の容姿が良かったため物凄く、その、可愛い……

「あ、ああ。彼なら部屋にいるよ。何やら挨拶したくないって聞かなくてな……君にも別に挨拶しに来なくても良いと言付かっているが……」

僕がミコトの言葉を伝える度に彼女はその表情を加速度的に曇らせて、終いには涙目になって「やっぱりなおくん、僕のこと…」と呟いていたが声が小さかったので最後の部分は聞きとることが出来なかったがやはり……

「ミコトの反応を見ても思っていたが……君達は知り合いなのかい？彼はミッドに来たことは無いと言っていたが」

「はい。その～なおく、違った、ミコト君とはずっと古い前か

らの知り合いです」

そう言った彼女の表情はどこか無理をしているような、そんな笑顔だった。

S I D E O U T

S I D E 神楽

「やっぱりなおくんだったんだ……最初映像で見た時まさかと思っ  
てここに志願したけど……本当になおくんなんだね」

歓迎会が終わり今は自室で一人今日の事を思い返していた。

私の名は白妙神楽。これはこのミッドチルダに来る前からの私  
の名前でもある。彼とはこの世界に来る前では所謂幼馴染だった。

それが、中学でのある日を境にぱったりと会わなくなった。彼  
が意図して私から遠ざかろうとするのだ。理由もわかってる。だか

からこそ私は彼に謝りたかった。でも、結局彼は中学を出ると遠くの高校に行ってしまった、私は彼に会う事無く謝ることさえできなかった。

それから何年も経って、彼の事を忘れようと大学の合コンに行こうとした時だった。家の電話が鳴りだして、私が出ると相手は彼の弟で、とても沈んだ声で内容を告げた。

——なおくんがしんだ

話のあまりの内容に私は愕然として、心が理解を拒絶しても理性がこの言葉を理解してしまった。合コンの事なんて忘れて急いで奈央崎家へと足を運んだ。

死因は隕石が頭に当たったの即死。頭は勿論、衝撃で上半身が丸々千切れ飛び、最早人体の面影すらあやしい無惨な姿だった。

どうして？私はこの事ばかりを考えていた。しかし、そんな私を時間は待ってくれず、葬儀も身内だけで行われて、私が中学以来初めて見た彼の顔は……私が久しく忘れかけていた、彼の本当に楽しそうに笑っている顔が写っている遺影だった。

そこで初めて気がついた。何故これほど彼に謝ることのできなかった事を後悔しているのか、何故彼の笑顔を見る事が出来なくなってしまった事にこれほどまでの喪失感を味わっているのか。

答えはシンプルなものだった。私が彼の事が好きだった。これだけ。たったこれだけの気持ちを含んで今まで気づかなかった自身を激しく呪った。



彼を喪失してしまったショックのせいか、周りを確認もせず  
道を歩いていた時に私はトラックに撥ねられてしまい、そのまま死  
んだ。

死ねば彼に謝ることが出来ると思い、私が死を受け入れようと  
していた時だった。私の守護をしていたらしい人が目の前に現れて  
今回の事故はこちらの不手際とかで私の願いをなんでも三つ叶える  
と言ってきた。私が最初に望んだ事は彼への謝罪だったが、彼も私  
と同じで担当の人の過失で死んでしまったらしくて、その人の提案  
で別の世界に転生しているとの事だった。そこで私は二つ目の願い  
でその世界への転生をお願いし、最後の願いは特に無かったのであ  
ちらがサービスで私が向こうで生活する上で困らない程の能力を与  
えてくれた。

そして転生してすぐに管理局に魔力の高さを見出され、そのま  
まスカウトされて現在に至る。管理局にいれば様々な世界に行ける  
ため、彼を探しやすいと思っていたのだが案の定、彼は見つかった。  
異常能力保持者として。

今度こそ彼にあの時の事を謝って、そして……………私の想いを伝  
える。

きっと彼は拒んでしまうだろうけど、これは私が転生してでも成し  
遂げたいと思っていることだ。少なくともこの艦にいる間はいくら  
でもチャンスはある。

「許してくれなんて言わない……………でも、あなたには知って欲し  
いんだ。僕の……………」

「この気持ちを」

そう決意を新たにして私は明日に想いを馳せ、目を閉じた。

#### 第十四話 「もう一人の転生者」(後書き)

今回は命君が前世で受けていた虐めの一部がでてきます。

彼が以前風花を虐めている相手に大人気無く炎を使ったのにもそれなりというか、彼自身に起因しているある理由があるんです。

それではまた次回！

閑話 「八神家の平穏な朝？」（前書き）

今回は本編ではなく、番外となっております。

ヴォルケンズが八神家に慣れてきたある日の朝の風景ですが、若干シグナムさんのキャラが……  
凛々しい口調って難しい……

それではどうぞ！

なのは「私の出番は!？」

閑話 「八神家の平穏な朝？」

S I D E シグナム

「師匠！今日も稽古をつけていただけてもらって、ありがとうございますッ！ー！」

「いやいや。こちらこそお蔭で毎日早起きできるのです。それにシグナムさんは剣の騎士じゃったかの？それを言うだけあって実力も申し分無い上にそれを鼻に掛けずに日々の努力も怠らん。毎日成長しておるようじゃし、こちらもうかうかしておれんの、フォッフオ」

そう言うつと師匠はタオルで汗を拭き、家の中へと戻っていった。今から主の作る朝食の準備だろう。

「ふうー。それにしてもプログラムである私が成長…か…」

そう。我らは本来闇の書の守護騎士プログラムであり、それ故に肉体的な成長などは無い筈なのだが……ここ最近の稽古の中で私自身、驚く事に日々自分の成長を感じるのだ。

強者との戦いは私も望む処なのだが、師匠との稽古はそれとはどこか違う様な気がする。何と言えば良いか……こう、稽古中にもこちらを気に掛けた発言や型の乱れなどを的確に指摘してくれるのだが、そのどれにも私を想ってくれていることが実感でき、それに応えようと頑張れば頑張る程、動きが洗礼されていくのがわかる。

師匠自身は剣を極めている訳でもなく、基本的な事しか言わないのだが、今のところ、一撃を入れるのにも大変苦慮しているのが現状だ。彼は相手の動作を見て瞬時に動きを先読みしてこちらの攻撃をかわし、受け流す。それを繰り返すうちに避けられない様、動作の無駄を省く様に心がけて稽古してうちにこちらが攻撃する際、無駄な力が抜け、剣を振る鋭さも以前とは比べ物にならないだろう。

確かに肉体的な成長の無い身だが、経験や自身の感覚を見つめ直すことで、技のキレを向上させることができる。

これを身を持って私に教えてくれた師匠には頭が上がらない。それでも師匠は私に良くしてくれて、将棋やお茶の淹れ方も教えてくれる。……いつかちゃんとした形で、何かお礼をしたいものだが……

「シグナム、そろそろご飯できるから戻ってきてー」

「はい、その前にシャワーを浴びさせてもらってからそちらに参ります」

さて、お礼も大事だが、まずは主達を待たさぬよう急がなくてはな。

私がシャワーを浴び終わって来てみるとすでに食事が用意されてた。ふむ、今日は鮭の塩焼きに味噌汁にあさりか。やはり朝食は和風に限るなど一人思っていると、

「はやて、じっちゃん。おはよ〜」

未だに寝ぼけている鉄鎚の騎士。もう朝もそんな早い時間じゃないというのに・・・

「おい、ヴィータ。最近弛み過ぎじゃないのか。主や師匠よりも起床が遅いなど・・・」

「アーアーキコエナーイー」

「貴様という奴はッ」

「二人とも朝から騒がんと静かにしーやー。味噌汁のあさりを

やどかりと替えさせて貰うで?」

「はっはっは! 喧嘩なんてしていませんよ(ねえよ)」

・・・何気に主はこの手の嫌がらせを仕掛けてくるから困る。  
しかもそのうち6割は本気のため油断ならない。

「それならええんよ。ほなみんな、いただきます」

「「「「「いただきます」」」」」

そうして食卓につく私達。キッチンにテーブルがあるが、それはほとんどおかわり用の鍋や炊飯器置き場と化していて食卓としては機能していない。ならどこで食事をとっているのかというと、

「こらっグイーター! いつもいつも師匠の膝の上に座って食事するなど言っているだろうが! 師匠の食事の邪魔になるだろう!

「!

「うつせーな、別にいいじゃんか。じっちゃんも気にしてねえーし、私はここからじゃ箸届かないんだからじっちゃんに取ってもらえるこの形が一番良いんだよ」



「それなら、こつち側に座ればいいだろっ！態々中央から離れたところではなく、私の隣に座れば師匠に取って貰わず自分で取ることが出来るだろっ!？」

「バカだな、それだったら今度はじっちゃんの膝の座れねエじやんか」

・・・居間に大きい卓袱台を設置してそこで食事をとっている。これは主の、

「やっぱり大家族の食事の光景といったらこれしかないっ!」

という発言からこうなっているのだが、ヴィータは最近いつも師匠の膝の上の座って食事をとっている。たまに主が座る以外はほとんど座っている。最初こそいつもツンケンした態度をとっていたヴィータだったので、そのような行動をとることに微笑ましさを感じていたのだが、最近は何故だか見ていると落ちつかなくなってしまう。

「あらあら、ヴィータちゃんも最初の方とは違って変わって大分おじいちゃんに懐いたわねえ。もうほとんどおじいちゃんにくっついちゃって、可愛いわあ、ねえはやてちゃんもそう思うでしょ?」



ていると、目敏くそれに気づいた師匠が、

「いや、すまんのうシグナムさん。わしの事を気遣ってくれてのことじゃし、その気持ちは大変嬉しいんじやが、許してやってくれんかの？この子は今までずっとこのように誰かに甘える事を知らずにいたんじやろう？わしなどで良ければいくらでも甘えさせてやりたいんじや、それに・・・」

そう言うと、師匠はヴィータの頭を撫でて、くすぐったそうにしているヴィータを見て微笑みながら続けて、

「わしらは家族じや。一緒に笑って、互いの事を認め合って傍にいる事が当たり前の存在。命の受け売りじゃがな、わしはこの言葉が大好きじや。何もいらぬ、何も望まない、ただただ一緒にいたい。そう思う事は悪い事では無いんじや、これくらい苦になるところかむしる元気を分けてもらってる気分じやよ」

師匠はそう言ってくれた。きっとこの人にとってはプログラムだからとか、人間じやないからなんてこと、気にする価値も無いのだろう。一緒に暮らす、お互いが一緒にいることだけを望む。そんな気持ちを察したからこそヴィータも主や師匠に心を開いたのだろう。勿論、私や他の守護騎士達も同じだろう。シャマルは涙ぐんで主に頭を撫でてもらっていて、ザフィーラも何処となく嬉しそうな雰囲気が漂っている。

「そうですね……。そう言っていたら私もうれしいです」

「別に大したことじゃないぞい、わしはヴィータちゃんだけじゃなくシグナムさん達にも甘えてもらっても構わんと思っておるぞ？何でも言ってくれて構わん、なんせ、子の我儘を聞くのはおじいちゃんの役目みたいなもんじゃしの」

「まあ、ホントですか！？だったら私、今度はちゃんとした料理を作りたいので何か教えてくれませんか？その場で味見とかもしてもらえると……」

「こらシャマル！お前の料理食ったらじっちゃんが死んじまうじゃねえーか！」

「ひ、酷いわよ！？私だってやればちゃんとした物ぐらい余裕よっ……」

「そういつて完成された物は後にこう呼ばれる……P・Cと……」

ボイズンクッキング

「はやてちゃんっ！！混ぜっ返さないでよ！？」

涙目のシャマルが騒いでいるが……

「（我儘を言っても良いだ！？いつも朝稽古に付き合ってもらっているだけでも忍び無いというのにこれ以上の事を許されるとっ！？）」

私は絶賛混乱中である。これ以上厚意に甘えてしまってもよいのだろうかいやでも師匠もあ言っていることだし……

その後、ヴィータは今度お揃いのクラブを買ってもらうこと、ザフィーラは次回の晩酌にビーフジャーキーの極太版を用意してもらうことになり、次に私の番になった。

「シグナムさんは何かあるの？模擬戦でも将棋の相手でも何でもよいぞ？」

「（ううー、何故か私だけ味気無い物ばかりな気がする…うれしいけども）あ、あの…：…それではその、毎日朝稽古に付き合ってもらっているじゃないですか？それで、私がその…：師匠から一本取ることができたら、あ、頭をその、ヴィータのように撫でてほ…：ハッ！？」

しまった！！？混乱のあまりに先程のヴィータが思い出され、つい「羨ましい…」などと思っていたことが出てしまった！？急いで否定しようとするも、主やシャマルがここぞ！とばかりに茶化してくるために二の句が継げずにいると、

「????何じゃ?そんなことで良いのか?シグナムさんは謙虚じゃの〜」

・・・なんか、普通にOKしてくれた。もう少しこう、「シグナムさん、いい大人が…」的なことを言われると思っていたのだが、あっさりOKしてくれた。ヴィータが凄い睨んでるが、頭を撫でてもらっている自身を想像すると自然と顔が緩んでしまう、そうそうこんな感じの暖かい手が……って!?

「ししししし師匠!?!一体何を!?!?/!/!/!/!/」

「うん?いやの、別に条件など無くともそれぐらいならいくらでも構わないと思って、今こうしてる訳なんじゃが……嫌じゃったか?」

「とととととと、トンデモナイ!!ただ、撫でてもらうという目標があった方が私も稽古により一層の励みになりますし、いえ決して嫌とかじゃなくてですね!?!ちよつと吃驚しただけなんですよ!?!?」

・・・なんか言わなくてもいいことを言ってしまった気がするが、師匠もそれならと手を引いてくれた。少し名残惜しいが、一本取れさえすればまた/!/!/……

そんな決意をした後、途中になっていた朝食を再開して、また今日も騒がしくも平穏な一日が始まるうとしていた……

P・S

あの一件以来、より一層の気合いで稽古に励む私だったが、次の日からは何故かヴィータも参加してきて、あまり構ってもらったことが少なくなつて微妙にしょげていたのだが、その後で師匠が模倣戦に誘ってくれたのがかなり嬉しかったことをここに記そうと思う。……ちなみに、まだまだ一本は遠い。もっと頑張らねば……！

閑話 「八神家の平穏な朝？」（後書き）

ちなみに作中ではまだですが、ザッフィーはじいちゃんのことを翁おきなと呼んでいます。かたっ苦しい呼び方の方がらしいかなと。

それと・・・命君がヴォルケンスにフラグなんてことはありません！だってもう・・・

雪而「なんじゃ？」

・・・イエ、ナンデモ。ではまた次回！

閑話だけどね

・・・次回も



閑話 「短編・あの娘の理由」(前書き)

今回のお話はアースラ組と地球組での二本立てでお送りいたします！  
それではござ！

はやて「まったく関係ないけど、みなさんはクーラーのつけすぎで  
風邪ひかんよう気をつけてな！」

閑話 「短編・あの娘の理由」

S I D E    フ ェ イ ト

それは、ミッドチルダに帰る途中でミコトが発したある言葉から始まった。

「すみません、プレシアさん。すこしお尋ねしたい事があります……」

「何かしら？あなたから尋ねてくるなんて珍しいわね？」

「それはあなたが以前マッド全開で彼を怯えさせて以来、一切近寄ってもらえなかったからでしょう……」

「ふ、ふんっ、それは単にこの子がちょっと私の事を避けていただけであって別に私が恐れられているわけじゃないわ！」

「・・・はあ、まあそれはいいとして「スルー!？」静かにしてくださいプレシア…ごほん、ところで御用とは？」

「(ボケー)…で、あ、はい。ちょっとフェイトのバリアジャケットのことで相談がありました…」

「フェイトのバリアジャケット？」

ミコトが母さんに切り出したのは私の話だった。でも、なんか気になる事でもあるの？と尋ねてみたところ、ミコトは目をクワッ！と開いて演説をするかのように叫びだした。

「あるに決まっておろうがー！ー！ー！ー！ー！いくら幼い幼女とはいえなんだあの破廉恥の上極まりない格好は！！スカートなんて有って無いような物だし、そもそも格好自体露出が全然控えられていねえだろうが！！一目見て思わずコレなんて痴幼女？って口にしなかった自分を褒めてあげたいわ！娘っ子があんなはしたない格好なんていけません！！あんな格好はユーノヤクロノさんや他の局員さんに見れば恰好のオカズものですよ！！実にけしからん！！幼女に欲情するとは何事だ！！！」

「……………勝手に妄想して勝手に人を性犯罪者に陥れるな！！！！！！？」

「……あなた達、うちのフェイトをそんな汚らしい目で・・・  
(サンダーレイジスタンバイOK)」

「……………冤罪だあああああああああああああ  
!!!!!!!!!!!!!!」「」「」「」「」「」「」

母さんが他の局員さんたちを蹴散らしている様子をしり目に、  
リスとミコトは真剣そのものといった表情で意見を交わしていた。

「やはりあなたもそう思いますよね!? 大体、プレシアもアリ  
シアもおかしいんですよ! 速く動きたかったら、服を脱げばいいじ  
やないってこれはあんまりな意見だと思いませんか?!?!?」

「確かに身軽になれば動きが速くなるのは理解できます。しか  
しっ! あれじゃだめでしょ。一番駄目なのは本人にはあれが恥ずか  
しいって認識が皆無なところです。あのままあんな格好で魔導師を  
続けると思うともう、将来が心配で心配で…一体テストロッサ家の  
情操教育はどうなっていたんですか?」

「それについてはもう本当に弁解のしようもありません。それ  
もこれも二人の暴走とフェイトの天然を御しきれなかった私が招い  
てしまったことなんです……ヨヨヨ(涙)」

「落ち込まないでください。誰も彼女を止めることなんてできやしませんから。ほら、見てください。武装局員の皆さんがまるでゴミのように散っていく様を……あんな人、たった一人で止めるなんて台風のように風に向かって自転車を扱ぎ出そうとするくらい無謀なことですよ……」

「……………試した事が…?」

「ええ。我ながら馬鹿な事をしました。……まさか自転車に乗ったままバク転をする羽目になるうとは……」

話が逸れてミコトの意外な過去が明かされていく中、制裁を終えすつきりした表情の母さんが二人に近づいていった。

「二人とも、心配しすぎよ。もしフェイトが道を違えてHENNTAIに墮ちるようなことになったら私自らがとめてみせるわ。何ていったって私の娘ですもの！わが身に替えても更生させてみせるわ!!」

「(ブワッ)か、母さん!!」

「フェイトッ!!!」

ガシッ！！

私たちが感動の抱擁を交わしていると、二人は米神を押さえながら下を向くとガバツツと顔を上げ、

「「だったら今すぐあの格好をやめさせる（なさい）！！！！！！！！」」

・・・その後姉さんも交えて4時間にも渡る交渉の結果、「ちよつとスカートのを長くしましよ、2センチ程」という母さん側の最大限譲歩した形で話がまとまり、リニスとミコトはなんだか白い灰のように燃え尽きていて、「俺達/私達は……無力だ……」と呟いていた。

「二人とも？私なら大丈夫！二人に心配されなくても私は立派な魔導師になつてみせるよ！！」

「（そういう問題じゃない……）」

・・・励まそうと思つて声をかけたのに二人は崩れ落ちてしまつた。どうしたのかな？

S I D E O U T

S I D E なのは

「これより！第1回「命君に子供扱いされない方法を考えよう」  
会議を始めたいと思います！」

「パチパチパチ」

「3人とも反応が棒過ぎて感情が全然籠もっていないの！！」

只今私達は翠屋のテーブルを借りて重要な会議を開いています。

「重要って…要はアンタが命に子供扱いされてばっかで、自分の事を女の子として見てくれないことが腹立たしいから見返してやるって事でしょ？私達には全然関係無いじゃない」

「私のモノローグに反応した！？じゃなくて、甘いよアリサちゃん！命君が子供扱いしているのは何も私だけじゃないの。よく考えてみて？例えば命君が私達の着替えを偶然目撃したとして、慌てている姿が想像できる？」

私がそう言うと三者三様に想像して、三人とも同じように暗い表情を浮かべていた。どうやら経緯は違っても内容は私と変わらな  
いみたいだ。

「確かに…見たとしても普通に「あっ、悪い」で済ませちゃい  
そうだよ。しかも「すずかん家って金持ちだったっけ？それにし  
てもプリント物とは庶民的な…」とか言ってるきそうな気がする…」

「私なんか「お前、その年でよくそんなモン穿けるな…さすが  
はバーニング」ってうんうん頷かれながら謝りもせず出ていくとこ  
ろしか想像できないんだけど…ッ！」

「にやはは…ところで風花ちゃんはどうだった？」

「いや、うん…私って結構前から命君と付き合いあるじゃない  
？だから「お、お前そんな下着を…そういうええ以前うちに泊まった  
時は確か…」とか言ってる成長したな…ってほのぼの言われるところ  
しか思い浮かばなかったよ…」



みんながどのような趣味の下着を着けている事が意図せずに分らかになってしまったけど、これでみんなも如何に自分たちが女の子として意識されてないのかを実感して四人で真剣に話し合う事になりました。

「ていうかアイツにそういう異性をどうこう思うだけの思慮が無いんじゃない?」

「でもアリサちゃん。命君、お姉ちゃんに話掛けられていたときなんか目合わせて会話出来ないほどガツチガツチに緊張していたの。これってやっぱり異性としての認識はできてるってことじゃないの?」

「うっ…でも!それって美由希さんがワザと相手が緊張する風に仕向けたんじゃない?ほら、美由希さんってそういうところあるじゃない?」

「うんにゃ、普通に話しかけられていただけだったよ…長い事命君といるけどあんなに落ちつきが無い命君見るの初めてだったよ私や」

「うっん、ていう事はつまり、命君は年上で女性っぽさのある美由希さんには異性としての反応をしまうけど、美由希さんよりに子供な私達はそういう対象として意識する相手では無い、こういうことかな?…言ってる少しショックを受けるよ…、だってそれ

なりに私達って男の子に人気あるんだよ？」

「うにゃ？そっなの？」

「あんたはニブチンすぎるから知らないでしょうけど、結構男子の間では私達って人気あるのよ？この前だって靴箱に手紙とかテンプレにもほどがあるベタな事があつたぐらいなんだから。ていうか、これだけの美少女達と一緒にいてアイツもアイツで何か思つたりしないのかしら？」

「うーんとね、もっと年相応に可愛いところがあればなあって思うことならばしばしば。だってチミ達、ホントに小三？て疑うくらい大人びているときがあるから可愛げ無いんよたまに。からかえば面白い反応返してくれるけど、やり過ぎるとアリサバーニングの刑じゃん？だから加減が難しくくて……」

「人の名前を刑罰にしてんじゃないわよ！……って！」

「……何でここに命君アンタがいるの（よ）！！！！？」

「うん？番外だし、次元とか抜けてきちゃいました。すぐに帰るけどもその前に……すいませーん、シュークリーム十個くださいー  
い」

・・・私達の疑問に答えてはいけないワードを使って答えていた気がするのですが…？

「ていうか命君！どうしていきなりここに居るの！？確か用事でしばらくいないんじゃないか…？」

「そだけど？今日はここにシュークリーム買いに来ただけですがに帰らないといけないし」

「って待ちなさいよアンタツ！さっき聞き捨てならないこと言っただけだった？可愛いだの可愛げが無いだのと…」

「だって君らの年齢じゃ考えられないくらい思考が大人だもの。なのは以外」

「にゃあああああ！？なんで私だけそこには含まれないの！？」

ちよつとこれは馬鹿にされているのでは？と思い、尋ねてみると彼は何食わぬ顔で、

「だってなのは子供っぽくて可愛いところが他の三人より多いしな…」（ボソツ）頭

の弱い子的な意味で」

「最後の眩きが無ければ完璧だったのに!!…ってあれ?可愛  
いって思われてるけど結局は子供扱いのまま…?」

「H A H A H A!そういうところだよなのは!では俺はこれを  
クロノさん達に持って帰るので、さらばっ!(スッ)」

「あはは…またどっか行っちゃったね…って三人とも?」

「あんの…バカ命があ…!いいわ!上等よ!アイツが帰って来  
たらその何たらバーニングってやつ、やってやるうじゃないの…ッ  
!」

「可愛いってのは褒め言葉だよな?でもそれは子供扱いの結果  
であって女の子としての可愛さじゃなくて自分より小さい子を可愛  
いって言うのと同じなのでは…?…つまり私は同世代の女の子とし  
て認識されていない!?!」

「…いいなあ…なのはちゃん可愛いって言ってもら  
えて…。私もなのはちゃんみたくにゃ〜とか、語尾になのなの言っ  
たりして子供っぽくしたら可愛いって言ってくれるかなあ…?」

「・・・みんな、思い思いに自己の世界に入ってるね……ってあれ？こついう第三者的な見方をするのって実は子供っぽくない？だから命君はああいう言い方をしていたんだね、よく見てるなー私達のこと」

・・・その後、それぞれの世界からの帰還を果たした私たちは命君が帰ってきたらギャフンと言わせる事を決意して、その日は解散となりました。・・・にはは、覚悟しててね？命君…？

---

その頃のアースラでは・・・

「リンディさん、例のシュークリーム買ってきましたよ」

「ごくりつさま。あなたから話を聞いて是非一度食べてみたかったのよね」

「艦長…そのために一度出た世界にもう一度戻るのは止めてください！！」

「まあまあクロノ君、これなかなかおいしーよ？食べないの？」

「誰も食べないとは言って無いだろ…ちゃんといただく」

「母さん！これ、すっごく甘いのにしつこくなくてとってもおいしいよね！」

「そうね、これ程の物を作るなんて…管理外世界の住人もなかなかやるじゃない…私も負けてられないわね」

「そう言って、化学薬品オンリーで調理するのだけはやめてくださいね」

「……………皆でおいしくシュークリームをいただきましたとね」



閑話 「短編・あの娘の理由」(後書き)

あれだね、暑いですね、ホント。執筆に影響はないけど暑いのが苦手  
でして……

まあ次回書くのには関係無いんですけどね？

リニス「ああ、フェイトの明日はどっち……？」

……これでソニックフォームなんて見た日じゃ卒倒するんだろう  
な——



第十五話 「俺のトラウマ/私の…」 (前書き)

ふう…この小説を書く時に自分が聞いている作業用BGMの中に「明日の笑顔を守るために」という曲があって、私はそれが大好きなのですが・・・

皆さんは何の曲かご存じですか？

命「ちなみに、このアニメの主人公たちって確か今年還暦だっけ？」

そうそう…って、それで分かる人何人いるのか……

第十五話 「俺のトラウマ／私の…」

S I D E 命

……例えばこんな経験をしたことがあるだろうか？

自分一人しか味方はおらず、まわりはみんな敵だらけだったこと。

誰もかれも見えて見ぬふりをして、助けてはくれなかったこと。

……そして、信頼していた人物が自分を助けてくれなかったこと。

俺にとって、その頃の記憶はもはやトラウマのように俺の中に刻まれていて、未だにその時のことを思い出す度に体の震えが止ま

らなくなってしまう。

それ故に俺はアイツ、白妙神楽に会うのが堪らなく怖い。不機嫌にしているのも、嫌悪を抱いているように振舞っているのも、すべて虚勢を張っているのに過ぎない。

アイツの存在は嫌でもあの時を思い出させる。たった一人で大勢に囲まれた時のことを、罵詈雑言とともに殴られ続け、蹴られ続けた時のことを。その時の記憶を、俺は一生忘れる事は無いんだろ。一度死んでいる身だが、この身が「俺」のままであるのなら多分忘れられはしないんだと思う。

だからアイツと関わらないように艦内にいる間も常に気配を讀んでアイツと鉢合わせしないように細心の注意を払っていたというのに……っ！

「リンディさん…っ、後で絶対夢幻で縮めてパンで挟んで食ってやる…っ！」

「食べるなよ？艦長だつて別に悪意を持ってこの編成を組んだ訳じゃないんだ。今回の任務では少数精鋭で当たるのが一番なんだ。それでこの編成が一番いいと判断されたんだ。これ以上の戦力は望めない」

「だったら、俺やシロタ工空尉の代わりをフェイトに頼めばいいじゃないですか。AAAだし戦力的にも問題ないでしょう？」

「それもそうだがな、一応彼女は囑託扱いになっているからできる限りは僕ら管理局員だけで対処するに越したことは無いんだ」

「俺局員違います」

「君は僕の補佐扱いだ。まあ、悪く思っなよ。これも任務だと思って割り切ってくれ」

「ハア~~~~~」

今回任務としてとあるロストロギアの奪還が言い渡されたのだが、それはある犯罪組織に運び込まれていて、他の武装局員の皆さんは現在進行形で組織の構成員と交戦中である。

現在、敵の首領と思しき人物が数人の護衛をつけロストロギアを持って逃亡。それを追跡するメンバーとして宛がわれたのがクロノさん、俺、そして神楽の三人である。・・・こんなことになるぐらいなら一人で先行してさっさと犯人ふんじばって終わらしたるか？

「先行しようとか考えているんじゃないだろうな？言っしておくが君を先行させる訳にはいかない。戦力は申し分無いが君には経験がほとんど無いだろう？何が起るかわからないし、敵がロストロギアを使用する可能性だっ低くない。なるべく最善で事に当たるためにも複数でいた方が都合が良いんだ」

・・・先にクロノさんに釘を刺されてしまった。仕方ない、こうなった以上犯人の方がたには憂さ晴らしの贄になってもらうとしよう。例えば帝釈廻天の重力結界で押し潰した犯人に最近習得したての雷を使った技の練習台になってもらうとかで。

「クフフフ……すぐに捕まえて泣いたり笑ったり出来なくしてやるからなあ〜?」

「（なんか黒いが触れない方がいいんだろっな…）」

「（な、なおくんが凄く怖いよ〜（涙）前はあんな笑顔じゃなかったのに〜）」

「命ちゃん命ちゃん。二人が凄く怖がってるから、そのサディスティックな笑顔止めて頂戴。でも、結構ゾクゾクする笑顔よねえ〜うふふ」

何を考えているのか、ユニゾン中のため表情を知る事はできないが、きつと碌でもない事だと思っので無視して犯人を追っている、と、漸く観念したのか足を止めてこちらに向き直った。

「こちら時空管理局の者だ。これ以上の抵抗をせず投降する

のなら、あなた方の身柄を保証することは約束する。おとなしく投降しろ」

クロノさんが使い古された説得を試みているが結果を期待していないんだろう、相手が何をしてきても大丈夫なようにいつでも動ける態勢のままだし、神楽も柄と刀身がほぼ同じ大きさの両手剣「ロンパイア」と呼ばれる形のデバイスを構えて臨戦態勢を崩していない。すると相手は憤怒の表情を浮かべながら、駄々を捏ねるように喚きだした。

「ええいくそつくそつ！役立たず共目が！管理局の連中の足ども満足にできんとは！！」

「もうあなた達は包囲されています。大人しく捕まって下さい」

そんな神楽の言葉に耳も貸さずに喚く……………いい加減うぜえーぞーら

「誰がきさ」「うっさい」「何だと!？」

俺が言葉を遮ったことでその場にいる者が俺に注目する。もうとつとつと終わらせ。

「今虫の居所が悪いんだ、てことで 刹那」

ポフッ！！

焼き加減はミディアムレアで表面はこんがり、バリアマジャケット中身はジューシーなままの犯罪者の姿焼いっちょ上がりっつと。

「じゃクロノさん、後処理よろしく！（シュダッ）」

「ってこら！待たないか……もう見えなくなった……」

後の事はぜんぶ、やってもらおう。アイツがいるんじゃないもの。ウマ何時思い出すかわかったもんじゃないもの。

S I D E O U T

S I D E 神楽

「（やっぱり私、避けられてるなあ……）」

犯人たちを更迭し終わって先の事件での彼の行動が問題視されていて、クロノ執務官がさっきの炎についての説明を求めていたのだけど彼は「後でレポートで提出するんで今は勘弁して下さい！」と頭を下げた後、転移魔法並の速度でその場を脱していた。

彼は頑なに私と会うのを拒んでいる。部屋に行っても大概留守だし、食堂でも微妙に時間をずらしているのか一度も顔を見ていない。……それ以前に今回の任務で初めてお互いの初顔合わせだったんだけど……私が挨拶をする前に、

「初めましてシロタ工三尉。ここアースラで三カ月の間ですが一応武装局員でクロノ執務官の補佐代理を務めさせてもらっている神名命という者です」

と、簡単な挨拶だけをして後はずっと押し黙ったままだった。

……あの日以来、もう十年以上経つのだろうか、久々に聞いた彼の声はとも他人行儀なものでした。それに名前。前世の名残が一切含まれていないその名はまるで、前世の自分からの決別であり、あの頃の事をすべて忘れようとしているんじゃないだろうか？ そう思っては必死になってその考えを振り払った。



しかし、そう一度でも考えてしまうと居ても立っても居られなくなってしまう、急いで彼を探し始めた。

あの頃を忘れる……それはつまり私の事も忘れてしまう、彼の中から完璧に私という存在が消えてしまうということだ。それだけは嫌だ。私はまだ謝れていない。自分の想いさえ伝えていない。おそらく嫌われているし、告白したところで十中八九フラれるのは目に見えている。それでも私は、彼に会う、ただそれだけのために転生してまで彼を探しに来たんだ。

彼の部屋に行ったけどやっぱり留守で、食堂、艦内廊下、クローノ執務官の部屋、行きそうなところはすべて探したけど彼は一向に見つからない。

「どこ……？一体どこに居るの……？出てきてよ……遊んでいた時みたいにまた声を掛けてきてよう……」

内心の焦りから、声に不安が混じりだし、とうとう涙を湛えながらも探していると模擬戦ルームに「使用中」を示すランプが灯っているのに気づいた。今の時間帯なら局員の訓練は行われてはいない筈。

私が意を決して扉を開けると、そこには部屋の中心で佇んでいる彼がいた。

「……ふう。一応形としてはこんなもんか。この雷も崩とか

砕羽みたく形状を自在に替えれると良かったんだけど、できて放出が拡散と集束、後は圧縮するぐらいしかできそうにないし」

『順番にザール、○ケルガ、○鳥ね』

「いやそんな形だけどき、いくらなんでも身も蓋も無い言い方過ぎんだろ!？」

誰かと会話しているようだったけど、彼を見つけることができず安心してしまった私にそれを気にする余裕などある訳もなく、私は謝罪と自分の想いをぶつけるべく、大声で彼を前世で呼んでいた名で呼んだ。

「なおくー………ん………!!!!!!!!!!」

「……ん?てええええええええええええええええええええええ!!?!?かかかかk、神楽アアアア!!?!?なんでここに………!!?!?」

着けよう。

———  
今こそ前世からのこの想いに決着を

ら前に進むために。

———  
互いに、あの日か

第十五話 「俺のトラウマ/私の…」 (後書き)

アークル「前書きの続きなんだけど、私はこのアニメを見るたびにデビチルを思い出すわ。何となく」

ゲートオープン!! ○界へGO!! ですね? 漫画が怖かったのが記憶に新しいですね

風花「お話に関する話題は!?? ってもう終わりっ!?? そ、それじゃ、また次回!」

第十六話 「転生者、二人 前編」 (前書き)

皆さんは電子タバコというものをご存じでしょうか？

灰は出ない、ニコチンもタールも副流煙も無い。

最近試しに買って見たのですが、これが中々………

フェイト「でも、ちゃんと喫煙マナーは守らないと駄目なんだよ。」

それは勿論です。



打ち気味な来訪は予想GUYですよ！？ちゃんとミーティングの時間を狙ってここにきていたというに……っ！

「……っつて、ねえっつてば！なおくん大丈夫？急に叫びだしたりするもんだからどうしたのか凄く心配したよ」

まあ、おかしくなったのは九割九分あなたのせいですからね？  
などというシッコミはさて置いて、

「その前に。今の俺の名前は神名命だ。その渾名で呼ぶのはやめてくれ」

「う、うん、ごめん。でもどうして？名前を変える必要なんてないじゃない」

「ああ、それはな、こっちに来るときにじいちゃん、俺の守護を担当していた人の家族としてこっちに来る事を望んでな、それでその人の名字を貰って新しい名前も付けてくれて、それが改名の理由ってところ」

簡単に改名した理由を説明すると、神楽は神妙な表情を浮かべながら尋ねてきた。

「あ、あのね？名前を変えたのって・・・前世の頃の事から決別して全部忘れるため？」

——何を尋ねてくるものかと思っていたらそんな質問が飛んできた。確かに、虐めの記憶が残っているといつまでもトラウマ残ってそうだし、忘れたい記憶もあるけれど……

「いや、別にそう言う訳じゃない。名を変えたのは新しい家族と生きるための一種の願掛けみたいなもんだよ」

「じゃ、じゃあ前世の事は全部覚えて……？」

「じゃなきゃ今こうして前世の知り合いのお前との会話なんてできんだろ。忘れたい事はあるにはあるけど、忘れたくない事だってある。それに、全部を忘れてしまうのは嫌だしな」

そう答えると安心したようにホウと溜め息を吐いていたが……どうしたんだろ？忘れていたら前世の話とか、聞いた瞬間お笑い話にしかならんようなものだし、俺が本人であることが確信できたから安心したとかか？

そんな事お考えしていると、意を決したように「うんっ！」と小さく気合いを入れるような素振りをした後、



「なおくん……違うね、今は……みことくんだね。あの……  
…あの時の事は本っ当にごめんなさいっ!」

……急に謝って来た。

「……なあ、それはあの時の事を言ってるのか?お前はアレ  
を知らなかったんじゃないのかよ」

「……うん、当時は知らなかったよ。なおくんのお  
葬式の時におばさんから聞いたんだ。私はあの時の事を謝りたくて、  
この世界に転生したんだから」

……あの時。

それは俺が神楽と一切の関係を持たなくなってしまったあの日  
の出来事

その日、いつも一人で昼食を食べていた俺の周りを十人以上の  
男子が囲んできて、「ちよっと面貸せ」と言われて、校舎裏に連行  
された。

そこで、俺はさらに待ち構えていたヤンキー風の男数人を加え  
た大勢に囲まれて戦々恐々していたのだが、リーダー格の男が一步

前に出てきて一言、

『お前、生意気なんだよ。だからこうなっても仕方が無い…  
っ！』

そいつは俺の前に立って、一言喋ると同時に一発、思いつきり腹を殴ってきた。堪らず俺が倒れ込むのを合図に、その場に居た奴全員で俺に襲いかかって来た。一体、俺が何をした？そんな疑問を考える余裕などなく、蹲っている間に全身を蹴られ、殴られ、踏みつけられて、俺は、昼休みの間約三十分ずっとそれを耐えていた。

チャイムが鳴ると全員がさっさと消えて行って、最後にリーダーの男が、

『これに懲りたら、もう二度と調子に乗るような真似、すんじゃねエぞ』

と、顔を踏みつけながら吐き捨てて教室に戻っていったが、俺はあまりの痛みと恐怖でその場から動くことができなくなって、最後には体中に鈍痛を感じながら意識を手放した。

——訳が分からない。普段目立つような事をしない俺が調子に乗る？いや、俺はいつもと変わらない生活を送っていた筈だ。それなのに何故？

意識を取り戻した俺が最初に思ったことがこれだった。気がつくと、もう太陽が大分傾いていて、放課後になっていたので、制服についた土を払ってから教室に荷物を取りに戻って帰宅した。その際、暴行を受けた痕が体中に出ていたので、それを隠すようにジャージを羽織って帰り、所々汚れが目立つ制服は鞆につめて持って帰った。

その帰り道の途中で神楽を見つけた。クラスが違うので帰りの時間がまばらで、さらに神楽は部活に所属しているので、こうして会う事は滅多に無い事だが、こちらの状況を知られるのは嫌だったので適当に挨拶して帰ろう、そう思い声を掛けようとして喉から出かかった言葉を飲み込んだ。

何故なら、先程までは確認することが出来なかったのだが、神楽の隣には俺に暴行を加えて連中のリーダー格の男が並んでいて、神楽と楽しそうに談笑していたのだから。

「（ああ・・・そういうことが・・・っ！）」

その様子を見て確信した。アイツは俺と神楽と一緒に居る事が嫌で嫌でたまらなかったのだろう。自分が想いを寄せている相手に俺みたいなしょーも無い人間が隣に居るのは許せんと、そう言うことだろう。神楽は知らないだろうけど、その男は元々の顔立ちも良く、成績優秀、スポーツ万能と絵に描いたようなイケメンのだが、男子の間では何かと黒い噂が絶えなくて、町の権力者である親が後ろだてをしているため、悪い事をやっても金で揉み消しているという噂が実しやかに流れていた。

実際、俺が中学を卒業するまで受けていた虐めのほとんどが、先生に伝わっていても親からの脅迫によって教育委員会に伝わることも無く、それに憤慨したうちの両親が影響を受けずに済む遠くの高校への進学をサポートしてくれた。

話が変わってしまったが、つまりこの男が言っていた『調子に乗るな』発言とは、神楽に馴れ馴れしくするな、そういう脅迫だったのだ。当然、その時は親友であると思っていた神楽にそんな奴が近づくことを許せないと思って、二人に近づいた。

「神楽ッ！！」

「あはは、そうなんだー…って、あ、なおくん。おーいー緒にかえるー！」

神楽は暢気に返事をしていたが、隣の男はこちらを向くと一瞬嫌そうに顔を歪めたけどすぐさま元の顔に戻って、わざとらしく声を掛けてきた。

「奈央崎君、昼休みからどこに行っていたんだい？皆、心配していたんだよ？」

「なっ！？ふざけんなっ！！お前らが……ッ！？」

あまりにわざとらしい発言に文句を言おうとしたが、その時不意に嫌な予感がして後ろを振り向こうとしたその時……

ゴスッ

背後にいた不良に殴り飛ばされてしまい、途中で言葉をきられ  
てしまった。するとアイツは血相を変えた振りをして、

「ここは危険だ！！白妙さん、僕と一緒に逃げよう！！」

「でも！！なおくんが！！早く助けないと！！！！」

「わかった。でも、ここは危険だから白妙さんは離れてて。  
大丈夫。ちゃんと助けてみせるよ」

そう気持ちの悪くなるような笑顔でのたまった。——何を言  
ってやがる！？この不良、昼休みに俺を殴っていた奴じゃねえか！！

その後ソイツは苦も無く不良共を撃退していた。金でも貰っていたのだろうか、かなりあっさり引き上げていった。その事に怒りを感じていると、奴が胡散臭い笑顔でこちらに手を伸ばしてきた。

「大丈夫だったかい？大変だったろうけどもう大丈夫だよ、僕が追い払ったからね」

「すっごーい！凄いなだね〇〇君って！あんなに簡単に不良をやっつけちゃうなんて！普通は怖くて近寄ることだって物凄く勇気があるのに、あんな堂々としているなんて」

「いや僕だって怖かったさ、でもクラスメイトに手を出されちゃうとどうしても我慢できなくてね。それに、白妙さんにいいとこ見せたかったしね」

何笑ってやがる、自作自演の演技で自分の株を上げようってか？・・・ふざけんよ、そんな事のために俺は何度も殴られなきゃいけなかったかよっ！！！！

思考は一瞬、怒りが頂点に達した俺は思いっきり奴を殴り付けた。盛大に転がっていく様を見ながらさらに追い打ちを掛けるべく動こうとした瞬間、

パチン！

俺の頬に鋭い衝撃が走って、気がつけば俺は、神楽に叩かれたのだと気づくのに少々時間を要した。

「…痛っ、てめえ！！何すんだよ！！！」

「なおくんこそ！！助けてくれた相手を殴るなんて最低だよ！！何考えてるの！！！！！」

「最低だと…、ふざけんなっ！！俺があいつに何されたのか知ってるのか！！！？さっきの不良だってアイツが仕掛けた自作自演なんだぞ！！！」

何度もアイツがしてきた事なんだと主張するも、神楽は信じてくれず、そんな言い合いをしていると奴が起き上げてこちらに近寄り、

「もういいだろ、白妙さん。こいつはこういう奴なんだよ。」

「こんなのほつといて僕と帰ろう」

「……うん、そうだね。なおくんもちゃんと頭冷やして反省して、謝んなよ」

そう言っただけで二人は帰っていき、残ったのは呆然と二人の後ろ姿を見送った俺だけだった。

—— どうして!?! どうしてあんな奴のことを信用して俺の言葉を信じてくれない!?! 俺たちは親友じゃなかったのか!?!?

……それも、俺が勝手にそう思っただけ……………?

375

その日を境に俺は神楽と一切話さなくなった。たまにこちらを見掛けて話しかけられそうになってもすぐに逃げ出していた。もう、顔を見る事すら嫌だった。

……神楽と関わればまたアイツらに殴られる

……何度言っても神楽は俺の言葉なんか信用してくれない

そう考えると、ほぼ毎日受けるようになった暴行にさえ何の感情も持てなくなっていた。痛いし、怖いのも変わらない。だけど、





え  
た。  
・  
・  
・  
・  
・  
俺がそう言った瞬間、  
神楽の顔から一切の表情が消

第十六話 「転生者、二人 前編」 (後書き)

一応、こういう風に書くって大まかな流れを書いたものはあるのですが、書けば書く程、文章が増えていく……！

何とかしたいものです。程良く短く、内容もきちんとまとめてある文章。

これが最近立てた目標です。

命「あくまで目標は目標で……なんてことにならないようにな〜」

勿論です。あなたとは違うんです！……って言ってた人元気かなあ今頃。

それではまた次回！

第十六話 「転生者、二人 中編」(前書き)

何故だ…？前後編にしようと思っていたのにまさかの三部構成？

こゝ、これが計画不足の為せる技かっ！！

クロノ「何か凄っぽいように言っているが、前回の目標はどうした？

短く、内容のまとまった文はどこへ行った？」

・・・それでは、本編をどうぞ！

クロノ「・・・逃げたな」

第十六話 「転生者、二人 中編」

S I D E 神楽

俺の事なんて何とも思っ  
て無いんだろう

?

彼から出てきた言葉には何の感情も読み取れなかった。その言葉の意味する通り、彼は私が自分に興味を持っていない、それを当然の事であるように言った。

しばらくの間呆然とした私だったが、気を取り直して、

「違うっ！私にとってあなたはどうでもいい存在なんかじゃない！！どうでも良かったらこんな所までわざわざ会いに来たりなんかしない！！」

私はあなたの事をどうでもいいなんて思っていない・・・  
これだけはわかって欲しいと懇願の意志すら乗せて叫んだ。

それでも彼は私の大声に驚いた後、苦笑混じりで、

「それはお前が優しい人間だから。謝る事もできずに死んだ俺と偶々近い時期にお前が転生して、葬式で聞いた俺の過去の事を思い出して偶々こっちに来る事を望んだ、態々死んだ俺なんかのためにお前がこっちに来たのは単なる罪悪感。

それも、もう俺はとっくの昔にその事に関しては割り切って考えるぐらいだし、お前も一々俺の事なんか気にしないで天国にでも行けば良かったのに」

まあお前を恨んでいた時もあったけど、そんなのは逆恨みだしな。最後にこう締めくくって彼はお茶を飲んで、一息ついた。

彼はあの時、○○君が助けしてくれた事を自作自演と言っていた

のに対し、私は助けしてくれた相手を殴った彼に怒り、そのまま〇〇君に促されるままに帰った。

その時からだったように思う。彼が私から距離を置きだしたのも、〇〇君がいつも私の近くにいて『二人ともお似合いだね』と周りに言われ、自分でも何となくそれを喜んでいたことも。

でも、その裏を私は一切知らなかった。彼の過去を聞いた時なんか、彼の亡骸に縋りついて謝りたい衝動に駆られた。〇〇君が私と居る間ずっと、彼は虐めを受け続けていた。私はそんなこと知らなかったし、彼が通信制に切り替えたことさえ聞かされるまで知らなかったのだから。

そして高校だって、こちらにいる事でまた虐められるような事にならないようにするために遠くの高校を受験したことにさえ気づかなかった。

私は本当に彼の事を何も知らなかったのだと思い知らされた。あの話を聞いた後、私は彼に恨まれているモノとばかり思っていた。だけどそれさえも、私が抱いた独りよがりの考えに過ぎなかった。

彼はあの時の後にこう思ったという。

『あん時はさ、自分が親友だと思っていた奴に裏切られた、信じてもらえなかった、そう思ってお前の事めっちゃ恨んでた。でもさ、お前とアイツが笑っている裏でさ、虐めを受けていたら、そんな事どうでも良くなっただ。』

俺がお前と居るのが気に喰わない、アイツらはそう言ったけど確かにそうだったんだ。俺はお前の優しさを勝手に勘違いして親友とか

思っていたんだ。

バカだろ？そんな金魚のふんみたいな奴が、自分の好きな娘の近くに居たら嫌にもなるさ。まあこっちはそのせいで虐めを受けた身だし、そんな理由で死にかけたと思っただらぞつとしないんだけどさ』

つまりはこういうこと。彼にとって、私が抱いてる罪悪感などどうでもいい事、とうの昔に清算しきった感情であって、今さらそのような物はいらぬ。そういう事なのだ。

「そ、それじゃあ、みことくんはもう何とも思っただけなの？私の事恨んだり、憎かったりしないの？虐められた時の事はどうだっただけなの？」

彼の話聞いてるうちに、彼がこの事に関しての執着を持たない事はわかった。でも、だとするならば、あの頃の事をすべからず「どうでもいい」、「こいつが思っている事に他ならない。

虐めを受けていた事さえ、私と一緒に居た頃のことさえもどうでもいいと……

私の一縷の望みが込められた問いを、彼は事もなげに答えた。

「ハァー、別にお前が気にする事か？トラウマあるし、今だっただけに夢にあの時の事が出てくる事だっただけ。でもその何処に恨む要素があるよ？」

俺が勝手に親友だと思っただけだっただけ、それを裏切られたと思っ



た事だつて全部俺の責任じゃねえか。何でお前を恨む必要がある？ それに何もかも前世の相当昔の過去の話だし、わざわざ転生してまで思いつめる必要なんてありゃしないよ」

・・・今度こそ本当に泣きそうだった。

彼は私との記憶さえも自分の勘違いとして割り切っていたのだ。だから私がどんなに謝っても、彼にとっては虐めの傍観者に謝られたような感覚でしかないのだ。

何で関係無いのに謝るの？・・・まさにその通りだ。虐めを受けている者がわざわざそんな者の事を気に留めておく必要があるのか、少なくとも彼にとっては傍観している者はそこの石となんら変わらない、風景の一部でしかない。誰だつて石に「虐めを見ていただけで止めもせずごめんなさい」と謝られたところで何とも思わないだろう。

つまり私と彼の関係など彼にとってみれば、虐めの原因にこそなりはしたが、所詮は大勢いる人間の一人としてしかカウントされない、その他大勢でしかないのだ。

これほど出来の悪い喜劇は無いだろう。自分が悪い事をしたのだと思い、どうしようもなくすべてが終わった時に初めて気づいた好意と、今さら過ぎる謝罪を伝えるべく転生し、彼と再会できたのに、その彼はすべての出来事に関心を無くし、ただ残ったトラウマで私の事を避け、話をすれば私にも虐めの相手にも何の関心も感情も無く、どうでもいい、一言だけで済ませてしまう。

一体、私は何がしたかったんだろう。彼に謝って、自分の気持

ちを伝えて、それでフラれたとしても構わない、そう思っていたのに。

蓋を開ければ、何一つ満足にすること無く、ただただ自身の無知ばかり思い知らされ、理解していたと思つて人の事さえ何も知らなかったという事実。こんな私が彼に何かを言う資格なんてあるのだろうか？そもそも何とも思っていないと思つていた人物が目の前にいて、しかもそのせいでトラウマが甦りそうになる始末。本当に何一つとして彼にしてあげることなど無かった。これならまだ手違いで彼を殺してしまったという人の方が遙かにマシだ。私と違つて彼の力に、支えになれるのだから。

バカだなあ……ホント、何にも知らなくて、勝手に罪悪感なんて感じてさ……なんとも思われて何かいないっていうのに。

私にとつてのあの人が大事な存在だと思つるように、あの人も私の事は大事じゃなくてもそれなりに大きい存在だと思つていたのに、ただのその他大勢と変わらないなんて……ホント、バカみたい……

「……………つておい！？話聞いているか？おゝい、返事しろ」

いつの間にか思考に耽つていたのか、みことくんが少し心配そうな顔で声を掛けてくれた。……本当はこうして私と話すのも嫌

な筈なのに……

「…うん、問題無いよ。ちょっと考え事があったただだから」

「そうか？まあ、俺の気にすることじゃないわな。まあ、あの時の事はお互い水に流して、さっさと忘れちまおうぜ？前世の記憶なんてここじゃ知識以外使い物にならないし、お前とももつこれ以上そんな事で悩むんじゃねエぞ？」

どこまでも私とは何でもない風の彼。それがどうしようもなく寂しくて、本当なら言う資格すら無いのに、私はこの言葉を言わずにはいられなくなった。

「あのね？最後に一つだけ言いたかったことがあるんだ。いかな？」

「……それは謝りたいという気持ちとは違う、彼に伝えられた言葉。」

「うん？別にいいけど、それで神楽の気が済むなら」

「……どうしようもなく気づくのに時間が掛かって、結局死後になってようやく伝える事のできる想い。」

「ありがとう……あのね、さっきあなたは何とも思っていない、そう言っていたけど、確かにそうだった。あの頃は何にも知らなかった、今でもそんなに変わらないけどね。」

「……だから、なおくんが死んだって聞いたときはあんな寂しさを感じるなんて思わなかったんだ。」

今さら過ぎるよね……死んで初めてわかったなんてね……私がおくんの事をどう思っていたのかなんて……」

「（何故だろう……こつから先の話を聞いたらなんか、何か知らんがやばい気が……）」

「もう、折角だし言っちゃうね。私、白妙神楽は……」

……前世の、奈央崎尚久君のことが好きでした……」

泣きそうな顔を見られたくなくて、歪みそうになるのを必死で堪えて何とか最後まで言い切る事ができた。

それを聞いたみことくんはポカンとだらしなく口を開けていて、ブンブンと顔を振ると今度は、真剣な顔を浮かべながら切り出してきた。

「お前さあ、あの後の事は高校違つたから知らないが、アイツと付き合ったり他の誰かに告白されたりとかしなかった？

普通に考えて俺、お前に好意を寄せられる覚え何か無いし。それにもしそれが本当だとしてなら何故あの時俺を助けてくれなかった？俺の事なんか気にも留めてなかったせに良く言えるよな。知ってるか？一人が大勢に蹂躪される気分つてのを。たった一人を一方的な暴力で押しつぶす」

「……最初は疑問から始まり、段々と言葉から熱が無くなっていった、それは最早氷のように冷たく投げられていく。そして一旦言葉を区切ると置かれていたテーブルをバンツ！と叩いて立ちあがり、先程の冷たさを感じさせない程に紅潮した顔で、

「ぶざけんじゃねえっ！！どんだけ苦しかったと思ってたんだ！知り合いも全員アイツの事を恐れて助けてなんかくれなかった、先生でさえ親が怖くて見て見ぬふりをしていたんだ！！それをいまさら好きだア？大概にしるよテメエ！！俺が一番必要としていたときに自分が何をしていたのか分かってて言ってるのか！！

「……忘れてんなら思い出させてやる。お前は俺の事なんか露ほども気にかけないでアイツと笑って、それはそれは楽しい学園生活を送っていたんだよなア？」

「・・・やめて」

「俺が殴られていた時も、蹴られていた時も、お前は充実した青春つてヤツを満喫してたんだろ？」

「良いよなお前は。顔が良くて、性格も明るくて、多少のバカっぽいところさえご愛敬で済ませられる程みんなに好かれていてさ。俺とは正反対だよな。」

「つくづくお前は恵まれてるよホント。きっと何があっても周りの人間がフォローしてくれたんだろ？」

「俺とは大違いだ」

彼の言葉とは思えない、先程どうでもいいと言っていた事が嘘のように猛るその姿は、未だかつて見た事の無いものだった。

「・・・正直限界だ、もう耐えらんねエ。お前と話しているだけでトラウマだけじゃない、あの理不尽への怒りも思いたしそうだ。割り切っていたかと思っていたが……どうやらそんな簡単な感情じゃねえみたいでな、お前のその幼稚さ？いや、無知さ加減？…どっちでもいいや、とにかくお前を見ていると正気でいられなくなりそうだ。」

「だからさ、消えてくんねえかな？目障りだ、視界に映るだけで燃やしたくなる」

……正直、本当に彼が喋っているとは思えなかった。私の中のどの彼も、こんな口調で話したことなんて無かったし、怒ったときでもここまで乱暴では無かった筈だ。

その彼が、今私に何と言った？目障り？燃やしたい？

「え、う、うそ、だよね？だって、なおくんはそんな事い（ピシッ）ひいっ！？」

私が喋ろうとした瞬間、頬を何かが掠めるような音がしたのでふと見てみると、そこには彼の手元から伸びていた剣が私の後ろの壁を貫通していた。

あまりに急な出来事だったせいで、腰が抜けてしまいその場へたり込んでしまったが、そんな事お構いなしに彼は私の手を引き部屋を連れだした。

「あア？言ったら、さっさと消えろって。お前が俺の事好きだとか、んなこと知るか。今さらトラウマ掘り返す気はさらさら無エんだよ、お前だってどうせフラれる事前提で言ったことだろ、だつたらはつきり言ってやる。」

……俺はな、お前の事はどうでもいいだなんて思っていない。他

の連中はともかく、お前だけは例外だ。別に恨んでる訳じゃねえ、ただな？俺はお前の事はあの時から今に至るまでずっと・・・嫌いだった」

S I D E  
O U T



第十六話 「転生者、二人 中編」(後書き)

風花「最後の方、命君がすごい口調だったんだけど……」

はい。確かに今までは相手が自分の事の無関心だったから気にも留めてもらえなかったと思っていたところでの告白。好きだったならどうして何もしてくれなかったんだ、という少し八つ当たり気味な怒りが沸いてしまった、とこんな感じかな？  
少し無理やりだった感が否めないけど……

それではまた次回！

第十六話 「転生者、二人 後編」(前書き)

ヤッホオオオオオオオオオオオ!!!

はやて「どないしたんや!? ついに気でも触れてしもったか!？」

失敬な。そうではなくて、久しぶりに感想がきてたから嬉しさが有頂天だっただけですよ。

相変わらずな感じでやっておりますこの小説。それでも感想をいただく、読んでもらってる実感が湧いてきて励みになります!

それでは作者だけがテンション高めですが、本編をどうぞ!

第十六話 「転生者、二人 後編」

SIDE 命

「あああああああああ！！！くそっ！！腹立つ！！  
イライラするーーーー！！」

……さっきの出来事は自分でもかなり非道かつたなとつ  
くづく思う。

神楽に告白された時は、頭が真っ白になった。何とも思われて  
いなかったところにいきなりの爆弾発言、これだけでも俺の思考を  
止めるのに十分な威力を持っていた。

実際、俺自身幼少時に神楽に抱いていた感情であっただけに、  
当時の俺なら歓喜していたのかもしれない。

でも今は違う。あの時の虐めに端を発した俺と神楽との間には  
溝ができている。俺が勝手にそう思っているだけなのかも知れない

けど、少なくともアイツからの告白を聞いたときに真っ先に浮かんだものは、最初に驚愕、そして憤怒だった。

好きだった？俺なんかの事がか？おかしいな、だって神楽は俺の隣じゃなくて、アイツの隣に居たじゃないか。それなのに？

アイツと付き合っていたんじゃないのか？だからどうでもいい俺の事なんか気にも留めていなかったんじゃないのかよ。だから俺もあの時はお前の事を素直には言えないけど諦めることができたんだ。

それなのに俺の事が好きだったって……一体何の冗談だ。馬鹿馬鹿しい。唯一の親友に何とも思われていないと思っただからこそ、俺は自分を殺してあの当時を耐え抜いていたのに、それを……ッ！

正直に言おう。あれは全部、あの時誰にも言えなかった鬱憤のすべてを神楽にぶちまけてしまった、要は八つ当たりだ。

本来であれば俺が神楽に文句を言う筋合いなんて無い。知らないのだからアイツが神楽に虐めの事を知られないよう情報の隠蔽をしていたのだろうと思うし、実際、神楽は俺の過去を知った後、こうして転生までして想いを伝えに来てくれたのだ。

それに対して俺は一体何をした？神楽が知らなくても仕方のない事を上げ連ねて、どうしようもない恨み言をのたまひ続けた拳句に、

「嫌いだ？燃やしたくなる？……俺は一体このチンピラだああああああああああ！！アホか！？アホなのか！！？」

ああ、時空流離の術で過去に戻れたらいいのに……そしたら、ついさっきの自分を虚空でブツ飛ばすのに……！！

……今はユニゾンを解除した状態で、俺は先程の事を死ぬほど後悔してのたうち回っていて、アークルはそれを呆れながら眺めている。

俺がいい加減閻水で自害しそうになったところで、アークルが割って入った。

「はぐいドードー。落ち着きなさい命ちゃん。ここで死んだってどうにもならないでしょ？」

「確かにそうだけどっ！……そうだけど、それじゃ一体どうしたらいいんだよ？俺、あんな非道いこと言っただけぞ？神楽は態々転生してまで俺に会いに来てくれたっていうのに……俺

はそれを丸々すべて否定した上に脅迫紛いの真似までしたんだぞ？  
……きつと、今度こそ本当に神楽に愛想尽かされた。  
それだけならまだいい、  
でも、俺の言葉のせいで傷つけてしまったと思うと……」

……神楽を部屋から出した時、アイツは今にも死ぬんじゃないかと思われても仕方のない程、暗い表情をしていた。それを見た瞬間にハツとなって、自分がしでかした事の重大さに気付いたのだ。言い過ぎどころでは無い、明らかに言う必要が無かった事まで言ってしまった。

それを思うと、悔やんでも悔やみきれない。そう思っていると、アークルが俺の正面に立って胸に抱きすくめてきた。こんな時にふざけるなど言おうとしたら、不意にアークルが頭を撫でながら優しく語りかけてきた。

「あのね？命ちゃんがあの子に悪い事をしたと思って、それを後悔しているのなら、する事は一つしかないでしょ？」

「……何だよ？」

「うふふ……それはね、とっても簡単で、うまくいけば仲直りだってできるわよ？」

それは…もう一度神楽

と昔と同じような関係に戻れるのか？

もしそうならどれ  
だけ良いだろうか、トラウマの事や、虐めを受けていた頃の事は無  
かった事には出来ないけれど、もしもう一度、親友のような間柄に  
戻れるのなら、俺は……………

「勿体ぶつてないで教えてくれよ。頼む、俺はもう一度だけ  
でいいんだ。アイツと……………神楽と話がしたい」

「やっと素直になったわねえ。いいわ、教えてあげる。そ  
れはね……………」

S I D E O U T

S I D E 神楽

彼もあの時はこんな気持

ちだったのだろうか……

みこと君から部屋を追い出された後、私は自室のベッドで泣きに泣いた。

ぶつけられた言葉のあまりの容赦の無さに、あそこまでの感情を抱きつつ今までそれを押し殺さなければならなかった彼の心情に、そして何よりも彼から投げつけられた感情の大きさに今まで気づくことができなかった自分の不甲斐無さに涙を流さずにはいられなかった。

「（ホントバカだ。あんなにも苦しい思いをしてきた人に、何にも知らない私が何かを言う資格なんて………ましてや、好意を持つなんて………どうかしてるって思われても仕方ないよね……）」

あの人は気付いていなかったのかもしれない。私に心情をぶつける度に、怒りをぶつける度に、彼の顔には苦痛の表情が表われていた事に。

……だから気づけた。あれは本心から出た言葉では無いと。今まで我慢し続けた感情が、行き場すら無かった怒りや恨みが発露されたものだ。

つまりは八つ当たり。唯一あの頃に接点があった私の言葉は、何とも思われていないと思っていた彼の感情を刺激するトリガーに



なってしまった……つまりはこういう事。

結局私が彼に出来た事は、トラウマを刺激して最後には愛想尽かされるようなことを言っ………何がしたかったのかな、私。

あんなに嫌いって言われたのに、自分  
があの人にとって邪魔な存在でしかないってわかっているのに……  
………まだ彼の事、好きだって思ってる……

例えどれほど拒絶されたって私の想いは変わらない。手遅れにも程があるけど、ようやく気付くことが出来たんだ。私には彼が、どんなに嫌われていたとしても、それでも彼という存在が必要なのだ。

………だからこそ、彼に拒絶された今、私に生きる理由なんて無い。

そう思い、私のデバイスである『春風』を起動させ、切っ先を

喉元に突きたてようとしたその刹那、

「なんだかデジャビユウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
ウ！！！」

血相を変えた彼が部屋に飛び込んできて、デバイスを蹴りあげた後すぐに、

「俺は自殺志願者に縁でもあるのか？風花の時もそうだったし……って、言ってる場合じゃねえや。おい、神楽。どこも怪我してないか？薬とか飲んでないだろうな？」

心配そうな、けどどこか安心したような表情で尋ねてきた。  
あれ？どうしてここに？

「う、うん。別に怪我也無いし、睡眠薬だって飲んでいないけど……どうしたの？私の部屋にくるなんて……さっきあんな事言って私を追い出したじゃない」

私が言葉を重ねる度に顔色が青くなっていく様子を見て、まるで昔に戻ったような口調で話しかけてしまっただろう……また「馴れ馴れしくするな」とか言われるよね、と思って彼を見ると、どこか恥ずかしげにしながら、何故か私と同じくらいの身長になっていて顔が正面から見れるようになったその顔を首筋まで赤く染め

て、何回かの深呼吸の後、私に話しかけてきた。

「いや、あの、そのな？さっきのことなんだが……」

「（ビクッ）う、うん。それがどうしたの？」

先程の事を思い出し、少し声が震えたがそれでも聞き返してみると、頬を叩く彼特有の気合いの入れ方で気を取り直して真剣な雰囲気を作ると、

「さっきは本ッ当にごめんっ！トラウマとかストレスやらでどうしようもない事言ったり、言う必要の無い恨み言まで言っちゃまって……今度こそ本当に愛想尽かしたのかもしれないけど、これだけは言わせてくれ……嫌いだとか、燃やすとか言って本当にごめんなさいっ！……」

「……………」

彼の言葉を理解するのに数瞬とはお世辞でもいえない時間を要した。それでも、理解してなお私は間抜けな顔をせずにはいられな

かった。

あれほど怒りに震えていたのに、今では背もさつきより低くなつて子供っぽくなつてることに加えて、羞恥のせいか顔が火照つていて、返事を待ち不安げに揺れるその瞳は私にある感情を抱かせるのには十分な破壊力な訳で。

「（か、可愛いよっ！今でこそ大人視点の感情を持てるからこそわかる！子供の時のなお、違つた、みこと君はどこか捨てられた犬を連想させて私の母性にクラスター爆撃級の衝撃を与えるっ！ベタだけこの台詞を言わざるを得ないっ！！）」

そう、それはど○する？　○イフル のチワワのような彼を、  
私は……ッ！

「おつ持ち帰りイイイイイイイイイイイイイイ！！！」

「ハッ！？何トチ狂つてんだお前は——————！！！」

……その後、暴走した私をみこと君が先に嘴のようなものが付いた鎖状のもので私を縛り、何とか私を落ちつけさせた後、溜め息をついていかにも苦労人な雰囲気醸し出しながら、

「いや、さすがに暴走は予想外すぎるわ。せつかく真面目に

話そつと思つたのに、これじゃ緊張してんのがアホらしくてやつてらんねえーって気にさせるんだけど……」

「うう〜だつてだつて、さっきのはみこと君が悪いよ。あんなに可愛いだなんて反則だよ〜お姉さんの母性に〇撃のファーストブリットだよ〜」

「……………さっきまでのシリアスな雰囲気を返せ。なんかもう……………色々萎えるし、ツッコミする気も失せたわ……」

さすがにこれ以上ははぐらかせそつに無かつたので真面目な表情を作つて改めて尋ねてみた。

「……………ねえ。私の事嫌いつて言つてたよね？それなら何で謝つてくれるのかな？」

彼が何を言いに来たのかはさっきのでわかつた。それでも、彼の口から聞きたいのだ。先程の言葉の真意を。

「今さら真面目に聞かれてもなあー…まあ、その、あれだ、もし良かったらまた俺と友達になつてくれないかと思つてさ。……………本当は嫌われてるんじゃないかかってビクビクしてたつづのにさっきのアレだろ？何かもうどうにでな〜れ〜って感じ。それにさ、あん時はああ言つたけどさ、お前の事嫌いじゃないよ。恨ん

だ事は勿論あった。でも、やっぱり俺にとっては初めての友達だったんだ。嫌いになれる訳が無いだろう？」

あぁ、

私は今、夢でも見ているのだろうか

ついさつきまでは自殺する一歩手前の絶望しきった心情だったというのに、こうして彼と話しているだけですべての事ががどうでも良くなっていく。

ただこうして会話するだけで私はこんなにも満たされる。この人の声はこんなにも私を幸せな気分にならせてくれる……

「ふふっ。やっぱりそうだ」

「うん？何がさ？……ってなんでこっちに<sup>チュ</sup>クムグツ！！？」

彼がこうしてまた私と一緒に居てくれると言っている。友達になつて欲しいと言ってくれる。

・・・ならば私は今度こそ彼とともに歩もう、一度と手を放さないように。

「友達じゃないよ！親友でしょ？私たち！」

・・・とりあえず今のところはその位置で満足しておこうと心の中で呟きながら……………

「とてついでにきふーかって言ってたよね？誰それ？」

「風花？…ああ、俺がこっちに来てから知り合った……  
親友、かな？多分」

……何気にライバルがいそうなので、警戒はしてお  
く事にしよう。うん。



第十六話 「転生者、二人 後編」 (後書き)

ふうーこれで一通りのシリーズ(笑)は書いたかな

ヴィータ「ちょっと待て。A'S編はどうすんだよ?そっちはシリーズっぽくなるんじゃないのか?」

それは

……

ヴィータ「あ!こら!待て!!--フェードアウトしながら逃げんじゃねエー!!--」

それではまた次回!(シユタツ)

第十七話 「触れてはいけないハラオウン家の秘密」(前書き)

いやー、世間は夏休みですねー

命「でもお前んとこの大学はまだなんだろう？」

バカアアアアア！！折角の気分がああつあああああ！！

・・・ごほん、それでは本編をどうぞ・・・

第十七話 「触れてはいけないハラオウン家の秘密」

S I D E 命

「にしても……まさか二カ月ちよいで地球に戻れるなんてなあ〜」

「確かにそうだな。君の仕事への貢献が功を奏したのだろうさ」

俺がアースラで働き始めて早二ヶ月、管理局への従順な奉仕が認められ、地球への帰還が認められた。……まあ、管理局つてよりはこの艦のクルーの皆さんにお世話になってるお礼的な感じで頑張っただけなだけだよ。

ただ、期間が短くなったその代りに俺の監視という名目でクロノさん達ハラオウン家と、プレシアさん達テストロッサ家、それと・

・・・

「なあなあ神楽？お前、ホントに着いてくんの？本局の方に戻らなくてもいいのか？」

「ふふん！無問題だよみこと君！私は元々あなたの監視という役割も兼ねてここに来ているんだし、あなたの監視をするためにもお世話になってるっていう八神家にもちゃんと挨拶しなくちゃ！」

「?????何で挨拶が必要なんだ？」

「愚問だね、将来のお嫁さんとしてはきちんとごk」「誰が誰の嫁かー！ー！ー！」あたつ。……酷いよう、二人して叩かないでよう（涙）」

「ふふふ……ねえ神楽ちゃん？私、二人が仲直りするのとは手伝ったけど、何も二人の関係を認めたって訳じゃないのよ？そもそも命ちゃんには私という唯一無二の相棒がいるんですもの、お嫁さんなんて私の目の黒いうちは絶対に認めないわ（ゴゴゴ…）」

……一応、上層部の辞令としてちゃんと俺の監視をハラ

オウン家の人達とするように言われているんだけど……以前の一件から、神楽の中では俺は未来の旦那様的なポジションらしくて、さっきのように暴走するのだが最近はアークルがそれを抑える事が多くなってきた。

ていうか神楽。お前そんなにバカっぽい事言うタイプ……だったな、昔から。

そんなこんながありました、只今はミッドチルダで最後の補給を行っている最中です。

なんかユーノも地球に行くのなら僕も、と言っていたらしいのでこちらはテストアロツサ家が監視という形でユーノの身柄を預かる事になっている。

……ちなみに何故局員でもないプレシアさんにこのような事が認められているかという事

「ああ理由？……そんなの簡単よ、昔ちよつと管理局のサーバーを弄ったことがあってね？

そこから不正を揉み消したデータの残りとか、予算の無駄遣いしている局員のデータとかをばら撒かれたく無かったら……っていうちよつとお茶目な発言を……ってあ、あれ？どうしてそんなに引いて『駄目だこの人、早く何とかしないと……』って顔しているの!？」

……この日。絶対にこの人には秘密を握られないようにしよう」と心に誓った。

4、5時間くらいで補給作業も終わり、一路地球への帰還となったわけだが……

「ふっふっふ……良かったねエ、君は。そんなに可愛い子に言い寄られるなんてさ……」

「お前……やけに嬉しそうだな？」

「そんなそんな、君にそういう相手がいればなのはが僕の事を意識してくれる可能性が出てくるだなんて、そんな事思っていないよっ。」

「でもユーノの場合、なのはの着替えとか覗いたって話だけど、なのははあんまり気にしてなかったんだろ？それってさ、もう既にお前に気を許してるからって訳で、俺よりもお前の方が好きだと思っぞっ。」

「違うんだよミコト……彼女が気を許していたのはあくまでフェレットとしての僕であって、人間としての僕じゃないんだ……」

……そう言ったユーノの背中が煤けて見えたので、それ以上の言葉を重ねる事ができなかった。

そして今は自動航行モードになっていてリンディさん、プレシアさん、リニスさん、アリシアさん大人な四人は現地での生活に向けての書類等の準備を、俺とアークル、神楽、フェイト、アルフさん（狼Ver）、クロノさん、エイミィさん、ユーノ（フェレットVer）の六人と二匹は暇を持て余しているので食堂で駄弁っている。

「そついやミコトは結局私と模擬戦してくれなかったよね。何回もお願いしたのにいつも断ってその代わりにカグラとかクロノとかに相手してもらったけど……」

「あんな格好している奴なんかと戦えるか。そもそも俺の場

合は非殺傷できない攻撃がほとんどなんだから、当たったら怪我じや済まねエて何度も説明したでしょうがよ」

「君はそういつて僕との模擬戦も断っていたな。最初は嘗められていると憤ったものだが、これまでの戦闘データをみると正直戦わなくて良かったと思ってるよ。

あんな出鱈目な炎や武器と向かい合うのはちょっとな。帝釈廻天：だったか？ユニゾン時の君の黒衣とあの凶悪そのものの見た目は死神とか悪魔とかって単語が浮かぶくらいだしな」

「そうなんだよねー、実際、ミコト君が捕まえた犯罪者皆揃って火を見るだけでガクガクしてるらしいしねえー。刹那って言ったかな？あれを受けた人なんかバリアジャケットのお蔭で大した火傷せずに済んだけど、いきなり前触れも無く燃やされたものだからトラウマが一番酷いんだって」

「なんか、俺が凄い勢いで情け容赦の無い人間に仕立て上げられそうなんて言っときますけど、刹那だって帝釈廻天の重力結界だっていつも力を大分抑えて使ってるんですよ！

本気で刹那使ったら灰すら残さず燃やし尽してしまっただろうし、重力結界でミンチ状に潰すことだってできるんですからかなり有情なものですよって、これは」

俺がそういつと皆顔を真っ青にさせていたが、その後も他愛無い話をしている。今はロストロギアの話になっている。



「そういえばユーノは無限書庫って場所でロストログアのデータとかを調べて前線の人達に情報提供してるって話だよな？そこんとこの仕事ってどんな感じなんだ？イマイチ想像できんのだが…」

「そうだね、あの場所を見た事の無い人なら簡単な仕事って決めつける人が多いんだけど実際はその名前の示す通り、まさしく無限とっていいくらいの蔵書を誇っているからね。

あの場所を完全に整理するとしたら、少なくとも見積もっても十年はくだらないね」

「はえ〜。相当なモンだなそりゃ、でもこっちはその情報のおかげで楽させてもらってる訳だし、頑張っただけで欲しいところはあるな。って、もう俺働かなくて良かったんだっただけ」

「ははは。でも、苦勞に見合うだけのことはあるよ。聞いた事の無いロストログアの情報とか知る事ができるしね。この前なんか闇の書っていう……」

ユーノが発した「闇の書」という単語に敏感に反応したクロノさんが、ユーノの言葉を一旦遮ると、

「ストップだ。これ以上その会話を続けるのはヒジヨクにま  
ずい。できればもうその単語を艦内ではk「闇の書ですってえ」？  
……遅かったか」

クロノさんが真剣な表情で話を止めさせようと喋っていると、  
不意に幽鬼のような面持ちのリンディさんが現れた。その雰囲気た  
るや、以前暴走したジュエルシードの比じゃない。怖すぎてフェイ  
トとアルフさんは抱き合って震えてるし、神楽とアークルも俺の後  
ろに隠れるようにして蹲っているし、ユーノはユーノでリンディさ  
んに威圧されて泡を吹いて気絶している。クロノさんとエイミィさ  
んに至っては、悟りを開いたかのような表情を浮かべて、ただただ  
アハハと乾いた笑いをあげている。

立ち位置上の関係で俺以外誰もこの異様なリンディさんに質問  
できる状態では無かったので、怯えて腰が引けつつも何とか声を振  
り絞って質問出来た自分を褒めてあげたい。

「あああああの、リリリリンディさん？どうしてそのような  
雰囲気であらうしゃるのでしょうか？私どもが何か粗相でもいたし  
てしまったでしょうか？」

地に着く程の低姿勢で恐る恐る尋ねてみると、それはそれは見  
る者すべてを誘惑するような美しい笑顔を浮かべながら答えてくれ  
た。

おかしいな、描写としては間違った表現では無い筈なのにどうしてここまであの笑顔に生命本能がけたましく警鐘を鳴らしているのだろうか？どうして俺の周りの人々が軒並み気絶しているのだろうか？……羨ましいぞこの野郎、俺だって気絶できたらどんなにいいか

「うふふ、確かさっき闇の書っていったかしら？あのロストロギアはね……私から愛する夫を奪ったにっくき敵なのよ……！」

……うん。夫が死んでいるからそんな雰囲気を出してまで怒りを現していらっしやるのですね？ですがあなたからは悲哀の感情が窺えないのは何故でしょうか？

そんな疑問に般若の形相で答えてくれました。近くで威圧を受け過ぎたせいで気絶が一切できなくなっただよ、どうしょ。怖くて今すぐにも光界玉で感情消したくなってきた。

「闇の書には守護騎士プログラムというものが存在しているね、その中でもおそろくリーダー格の女性タイプの騎士がいるんだけど、うちの人ったらその女を見た瞬間、『巨乳美女キター……俺だ……結婚してくれ……』」

「……………！！」って求婚したらしいのよ。ホント、困った人よね？」

「……………それってつまり、リンディさんがそこまでお怒りになっているのは、夫の浮気が許せないから……………そういう事ですか？死んだとかじゃなく？」

「勝手に人の夫を死んだ事にしないで頂戴。あの人は今頃、そのロストロギアを追って次元世界を探しまわっているんじゃない？勿論離婚している訳だし、全然関係ないけど、やっぱり人の夫を奪うようなガラクタなんて消えてしまえば良いのに……………ねえ、ミコト君もそうは思わない？」

何でも、以前闇の書が暴走した際に現れた守護騎士に一目ぼれしたその人は、その後すぐに管理局を辞職、「待つてるよ……………！！俺のプリティエンジェル！！絶対見つけてやるから……………！！」とふざけたことをのたまいながら、飛び出して逝ったとか……………

……………今はこの場にはいない元夫に一言言ってやりたい。

「(こんのつ、阿呆亭主がああああああああああああああああああああああああ  
あああああ!……!」

とりあえず、その場に居たクロノさん、エイミィさん以外の全員は、もしそのマダオを見つけるような事があつたらとにかくクリンデイさんに突き出そう、そう固く誓った。

……差し出す前には全力全壊の一撃を叩き込んで、この日味わった恐怖を思い知らせてやる事も忘れず決意した俺達なのであつた……

第十七話 「触れてはいけないハラオウン家の秘密」(後書き)

今回の壊れキャラはクライドさん！彼には反面教師としてクロノ君に認識されています。尊敬なんて地の底ですよ。

なのは「これは大変なのは……？八神家的に」

まあでも、彼は別に一人だけを狙って闇の書を探している訳じゃ……  
…ってこれじゃ余計に八神家の女性陣ピンチじゃん(汗)

……まいつか。それではまた次回！！

ヴォルケン女性陣

「……まいつか……じゃなああああああああいいいい！！

！……」

第十八話 「意外といえは意外な再会」 (前書き)

今回もいつものようにグダってますがそれはさておき、

・・・頭痛エエエエエ・・・

皆さんは夏風邪には十分気をつけてくださいねー

すずか「それじゃ今回は私が……それでは本編をどうぞ！」

第十八話 「意外といえど意外な再会」

S I D E    アリサ

てこんな事に！！

ああもっっ！どっし

今私たちは非常に危ない状況に陥ってしまっている。

理由は簡単、私とすずかの二人が誘拐されてしまったのだ。おそらく目的は私たちの財産目当てだろう。幼少の頃から気をつけるようにしていたのに、今日は迎えが無く徒歩で帰宅していたところにいきなり大柄の男が現れて、私たちが驚いてる間にあっという間に攫われてしまった。

そして今は町はずれにある廃工場（なんつーベタなモンがあんのよ！！）に連れ去られ、すずかは別室に連れて行かされてしまい、私以外には誘拐した男たちが五人、工場で待機していた人を含めて十人以上のグループに囲まれている。状況は最悪と言っていいだろ



う。

「しかしよぉ〜目的は月村んとこのガキだけなんだろう？な  
んでまたこんなガキまで誘拐したんだよ？」

「へっへ、ソイツはよ〜、かのバニングスのご令嬢だ。正直  
言って今回の依頼の金だけじゃ物足りなかつたんでな、コイツの身  
柄を預かっているからって脅して身代金せしめようってな」

「そいつはいいや。さぞかし大金積んでくんじゃねえか？が  
っはっはっは！」

・・・男たちが勝手な事ばかり言っても今の私は後ろ手に  
縛られていて身動きが取れず、口も猿ぐつわを噛まされているため  
ろくに文句を言う事もままならない。

あまりの悔しさと連中の所持している銃器に怯えて震えている  
と連中の一人がギラついた、けれどどこか濁った目でこちらに近づ  
いてきた。

「げへ、ぐへへ……なあ、俺アもう辛抱たまんねエンだよ。  
いいだろ〜このぐらいの幼女の悲鳴ってものスゲエゾクゾクすんだ

よゝ…へへへ、怯えてる怯えてる。こういうガキを犯すのってのは本当にたまんねエなあゝ」

「おいおい、折角の人質を汚すんじゃないよ」

「大丈夫だって。ひと足早くお友達より大人になるだけさ。げひゃひゃひゃ」

そういうと男は私に近づいてきて、自分のズボンを下ろすと欲望で濁りに濁った目で私を嘗めまわすように眺めてきた。

いやっ こないでっ

私がどんなに嫌がっても身動きは取れず悲鳴すら上げられない。段々と男が近づいてきて私の制服の上を無理やり引き剥がして、より欲望の色を強めながらにじり寄ってくる。

「ぐへへ……そいじゃあ幼女の処」ぎゃあああああああああ  
ああ…!?!?」

いよいよ襲われる、そう諦めようとした私だったが、その心配は杞憂に終わった。

「（何っ！？いきなり頭上から人が降ってきた！？）」

丁度襲おうとしていた男に、上から人が降ってきて激突。そのまま男は気絶してしまった。

降って来た人はどうやら男のようで、見た目の年齢からして恭也さんと同い年ぐらいだろうか、特徴的な黒衣を纏っていて「あなたた……神楽のヤロウ……」と、頭を擦りながら周りを見回して、最後に私の方を見るとひどく驚いたように顔を引き攣らせ、すぐ私に駆け寄って縛っていた紐と猿ぐつわを外してくれた。

「おいアリサ！大丈夫か！？何にもされてないか！？怪我とかは！？」

……とりあえず目の前の男性が誰なのかはわからないし、何故私の名前を知っているのかとか疑問は残るが、この人は少なくとも私の味方だ。そう思うと安心して笑みが零れそうになった。

「おいっ！テメエどこから降ってきやがった！！」

「どこからって……空からとしか答えようが……」

「ふざけてんのか！！野郎共！！あの餓鬼をやっちまうぞ！

！！」

そういうと連中は一斉に銃をこちらに向けてきて、数人がナイフを持って接近してきた。

「やっぱこの状況みるにお前ら誘拐犯な訳ね…だったら、人権は無しだな。殺しはしないし、アリサに刃傷沙汰や血を見せるのは気が引けるから、特別にこれだ」

そう言っつて黒衣の人は指で何かを書くと、ボウツと彼の右腕から炎が飛び出してそれが鞭のような形をとると誘拐犯たちに向かって一言、

「友達にここまで事されたんだ。機嫌も悪いし、端っから本気で行かせてもらっぞコラアア!!」

・・・そこからは一方的な展開だった。

ナイフを持って斬りつけてきた連中を炎の鞭でまとめて薙ぎ払い、銃弾が飛んでくるとその鞭状の炎を持つ右手とは別の左手でまた字のようなものを書くと、今度は自分と私を包むように赤いバリアのような物を張って銃弾をすべて防ぎ、銃弾が止むのと同時に集団に向かい突撃、鞭で牽制しながら目で追えない速さで動きまわって炎を纏わせたパンチで全員を戦闘不能にしていた。それにしても・・・

いくら何でもパンチ一つで4、

5人をまとめて吹き飛ばしたり、壁や地面にめり込ませるってどんだけ馬鹿力なのよ!?

その後彼は一通り片づけた連中を近くにあった鉄筋で縛る（だから!なんで!人が鉄筋を紐のように軽々と曲げてんのよ!）と私に声を掛けてきた。

「ふう〜、これでもう動けないだろうし骨も何本か砕いたし大丈夫かな?・・・しっかしアリサ、いくらお嬢様なお前とはいえ

誘拐とか…あまりにもベタじゃね？」

「今それを言う！？普通ここは私の身柄を心配して『怖くなかったか？』とか『もう心配いらないよ』とか優しくするとこじやないの！？しかもっ！アンタみたいなおおかしな格好の奴にベタだとか名前を呼び捨てにされる覚えなんてないわよ！！」

私がそう言つと彼はやれやれといわんばかりに肩をすくめて見せてきた。……なんつー腹立つ顔ですんのよ…ッ！

私が内心で怒りを抑えていると、その男は真面目な顔で質問してきた。

「まあまあ、後で俺の事は説明するから置いておくとして。他に連中に仲間っている？」

「置くなっ！……っつて仲間？………ああっ！そうだわ！まだすずかが捕まっただまだわ！！」

「はあ！？すずかまで誘拐されてんの！！？何ソレメンドクさっ…！！」

「面倒って何よッ！！私の親友になんて事言って……って、  
何でアンタがすずかのことまで知ってるのよ!？」

「それも後でまとめて教えてやっから今はすずかの事だろ？  
今アイツはどこに捕まってるんだ？」

……何か釈然としないけどコイツの言う通りなので、上の階にいることを伝えると私を残して行こうとしていたが、親友の事が心配だった私は無理を言っかけて着いて行く事にした。その際の事件として絶対自分の後ろから顔を出したりするなと釘を刺された。

-  
待っててす

ずか。すぐに助けに行くから!!

S I D E O U T

S I D E すずか

「くそが！！所詮は人間、役には立たんという事が……………」

「…………私とアリサちゃんの二人が誘拐されてから少しした後、状況が変化したらしい。」

下の階では見張りを兼ねた他の誘拐犯とアリサちゃんがいる筈なのに、つい先ほど連絡が途絶えてしまったらしい。

「早すぎる！もう御神の剣士がこちらの動きを嗅ぎつけたとでもいうのか!？」

確かに銃で武装したあれだけの数の人間をどうにかできるとしたら恭也さんのような凄腕の剣士か私の血族の者か、それにまつわる技術で造られる自動人形くらいのもだろう。しかし、いくら何でもこちらに来るのが速すぎる。多分なのはちゃんや風花ちゃんが警察に連絡したり、風花ちゃんの家の事を考えれば嵐山組経由で月村の家にも連絡がいくだろう。それにしただってこれ程まで早くこちらに駆けつけて、ものの数分もかからずにあれだけ大勢の銃を持った人達を無力化できるのだろうか？

もしも恭也さんたちじゃなかったらアリサちゃんの身に危険が……そんな事を考えていると、私たちがいる部屋の扉から炎が飛び出



て、まるで刃のようなそれは扉ごとその近くの壁ごと斬り裂き、それらを払うように一人の青年が出てきた。

「やつほーすずか。元気？」

その男の人は、場違いなほんわかした空気でその場の剣呑とした雰囲気を取り払いました。

「アンタってヤツはどうしてそう場の空気を読んだ発言がでないのよっ……！」

「いや、これはな？俺なりに考えた発言で、きっと一人こんな暗い部屋で閉じ込められて恐怖に染まったであろう女の子を安心させようとあえて明るく声をかけた事だというに……まったく、だからアリサはバーニングなんだよ。もっとお前こそ空気を読むんだバーニング。お前なら出来る筈だバーニング」

「バーニングバーニングうっさいわ……ってその言い草といい、このむかつく話し方……まさかアンタ……？」

……なんかアリサちゃんも空気を読まずに会話してるよね(汗)

それにしてもこの人……どこかで会ったことのあるような……？

「ええい貴様！何者だ！御神の剣士か！！？」

「御神？いいえ、自分は神名であってそのような……ちよつとカツコいいな、その名字っぽい。御神命………やっぱ駄目だな、イニシャルM・Mとか恥ずかしすぎる………どんだけMなんだ俺ってことになってきつとはやてにポロクソ言われて笑われるに決まってる」

-

はい？

みこと？それってまさか……

自分の考えに集中しているみことさん？に痺れを切らせた男は激昂して、

「貴様ツ！下等な人間風情が夜の一族たる俺を無視するとは………こんり「ちよい黙ってて」なっ！？」

激昂している相手を軽くスルーすると、その人をバリアっぽいもので閉じ込めて私に近寄ってきて、

「よおすずか。怪我とかないか？何か変な事とかされていない？」

「えと、はい。縛られていただけで特に問題は……ってアリサちゃん！！どうしたのその服！？」

「これ？ちょっと襲われそうになっちゃってね。そこをコイツに助けてもらっただけよ」

「（あれは助けたというよりも単に俺の転送が失敗しただけなんだけどな）まあ不幸中の幸いってやつだったな、アレは。ホント、あの場面で落ちてきて良かったよ。少しでも遅れていたらと思うとぞつとする」

そう言うとその時の事を思い出したのか、アリサちゃんが震えるのを堪えて、それでも我慢し切れずに泣きそうになっていると、男の人はアリサちゃんと視線を合わせるように屈みこむと、頭を撫でながら、

「怖かったよな？でも親友のために怖いのが我慢したんだよな？偉いぞ」

それだけを言うと今にも泣き出しそうなアリサちゃんを私に預けるとその人は立ちあがって、

「今多分下の階に助けの人が来たっばいから先に降りて待っててくんない？俺はこの男とちょっと話があるから後で行くよ」

そう言って、私の頭を撫でると出口の方に向かって私を押し出した。

「ちょ、ちょっと待って下さい！ひょっとしてあなたは……」

あり得ないけど、何となく、彼と同じ雰囲気とする男性。もしかしてこの人は……

「まあ、概ね想像通りだと思うよ。その辺の事もちゃんと話

すからさ、今は行った行った。アリサをそのままにしてるのもまずいだろうし」

そういつて彼は、私の胸の中で泣きだしたアリサちゃんを指さして軽く笑って見せた。

「うん……………それじゃ、ちゃんと後で話してね……………  
……………命君」

それだけを言って、私はアリサちゃんを連れだってその場を後にした……………

……………大人姿の命君があゝ悪くないかもね

と、思わず私さえもその場の雰囲気ை台無しにするような事を考えていたのです。

第十八話 「意外といえは意外な再会」(後書き)

急展開……かな？まあカッコ良く登場なんて命君らしくないかなと思いいこのような登場に。

体調悪いんで今回はここまで！

それではまた次回！

……やべえー頭いてえーよー……

シヤマル「皆さんはしっかり体調管理を怠らないようにしてくださいね」

第十九話 「事件・・・そのあと」(前書き)

はやて「なあなあ、いつになったらA、S編でスーパーはやてタイムが始まるん？」

スーパー？はて、そのような予定があつたかな…？

はやて「しばくどコラアアアアア！」

すいまつせん！それでは本編をどうぞ……つておまつ！土星の環装備でそんな物振り回しちゃ……GYAAAAAAAAAAAA

第十九話 「事件……そのあと」

S I D E 風花

攫われた二人を救出するために私はすぐに月村家に連絡をとった。

奴らの狙いはおそらくすずかちゃんだ。アリサちゃんは身代金目的だと思うけど、すずかちゃんの場合、お金以外でも攫う価値はある。

それは月村の家の人達の血筋、『夜の一族』という言葉に関係がある事だと推測できる。パパは知っているようだけど私には詳しく知らされておらず、時が来たら告げるとしか言われていないのだけど、今回の誘拐は月村という家そのものを狙った可能性が強い。

連絡を取った後しばらくして忍さん、恭也さん、メイドで戦闘能力も高いらしいノエルさん、ファリンさんが応援に駆け付けてき



て、すずかちゃんの持っている携帯から発信されている電波を辿って追跡を開始した。

私となのはちゃんは当初残す予定だったけど、二人が心配だからと強引について行き、なのはちゃんと念話で危なくなれば魔導具や魔法の使用も頭に入れながら二人が捕まっているはずれにある廃工場へと向かった。

「何、これ……………？」

……………忍さんがそう呟くのも仕方ないことだと思つ。

「全員が戦闘不能……………か。しかも動けないように鉄筋でまとめて縛つてある。……………鉄筋で？」

明らかにこちらの想定していたものとは違う状況に戸惑っていた私達だったが、上の階から誰かが下りてくる音が聞こえたため身構え、そちらに注目してみると、

「！アリサちゃん！、すずかちゃん！良かった、二人とも無事で……つてえ！？アリサちゃん！！服！服どうしちゃったの！！？」

「・・・本当に人がいたわね……。それとなのは。別に何もされていないから安心なさい。制服は破られたけど、一応は何とも無かったわ」

上の制服が破れていて、上にちよつと大きめの黒い外套のようなものを羽織っていたけど、すずかちゃん共々怪我も無いよう心安したなのはちゃんと二人は抱き合つて喜びを露わにしていた。

そこに忍さんが未だ呆然としながらも、一体何がどうなっているのかをすずかちゃんに尋ねると、少し悪戯っぽい笑顔を浮かべた後にこう答えた。

「ふふつ。あのね？私たちを助けてくれた人はここにいる誘拐犯を全員倒して今は主犯格の人と話があるからつて上の階に残つてるよ」

それを聞くと恭也さんとノエルさん達は確認に向かい、忍さん





「ハアー、ハアー、なんでこう、高町家の皆さんは話を聞いてくれないんだろう……肉体言語が主流の戦闘民族じゃあるまいし……」

「……………前のお父さんの事もあるし否定できないよ  
う（涙）でももっ！私は少なくともちゃんとお話するよ！戦闘民族じゃないの！」

「……………（どうしてだろう…お話がOHANASSIって脳内で変換されるんだけど…………）」

「じゃ？どうしてみんなして首を傾げてるの？」

「「「「「やっぱりなのは（ちゃん）も高町家の一員なんだな  
あ〜っつて」「」「」

「四人そろつてとつても失礼な気がするの！！！」

恭也さん達を落ち着かせた後、命君に事情を聴くために車で月村家に向かっている最中、車中では暇だったのでとりあえず皆でなのはちゃんを愛でながら（さっきのやり取りも立派な愛情表現です）暇を潰しているとあつという間に到着していた。

そして現在、月村家の客間で命君が忍さんに当時の状況を説明している。といってもその話のほとんどは彼の事を知らなければ信じられないものばかりだと思っただけ。

実際何度か実物で見て確認したいという忍さんの要望で炎を出したり、ノエルさんが持ってきた鉄くずを引きのばしたり、丸めたりと自在に変形させていた。本人曰く、「炎の熱で温めてから弄っているからガラス細工感覚だぞ、こんなもん」との事。いくら何でもそれは無いだろ、と皆ツッコミたくて仕方無かったけど実際にそれを行っている命君を目の当たりにしている訳で、誰も口に出して突っ込む事はしなかった。

イマイチ納得がいかないといった表情の忍さんだったけど、二

人を誘拐犯から助け出したということもあり、その場できちんとお礼を述べていた。

それらが一通り終わると、今度はアリサちゃん、すずかちゃんの質問攻めが待っていた。「アンタ本当に命なの?」「どうして大人になっているのかな?」……と次々と質問され、受け答えが面倒になった命君はユニゾンを解除してすべての事をアークルさんに丸投げして狸寝入りしてしまった。

そこからがまた酷かった。急に光ったと思っただらそこには元の大きさの命君と見た事の無いような美人さん。驚くなど言う方が無理だろう、アークルさんを知っている私となのはちゃんとはもかく、他の人達はいきなりでできた女性に驚いていたけど、アークルさんはどこ吹く風とのほほんと寝たフリをしている命君に膝枕をしつつさっきの質問に答えていった。

「風花ちゃんとなのはちゃん以外の人とは初めてお会いするわね。初めまして、私、アークルという者です、よろしくねえ」

「……………あつ、はい。こちらこそ……………じゃなくて!あなた一体どこから現れたんですか!?しかも命君縮んで元の大きさに戻っているみたいなんですけど!?」

「ああ、それはね、私は人間じゃなくて魔導具という特殊な武器の一つでね？私の機能で命ちゃんと融合して身体強化をするものがあるんだけど、その際何故だかわかんないけど姿が大人と変わらなくなつて、服装も元の服を交換してさっきみたいな恰好になつちやうのよ。これでいいかしら？」

「……………（呆）……………」

デスヨネー——

——（汗）

あまりに突飛な話に皆さん強制フリーズ。順次起動していった順に怒涛の質問ラッシュが始まって、アークルさんはそれに終始にこやかな笑顔で答えていた。

あれだけ質問されてどうして平気な顔していられるんだらう？きつそうどころか嬉しそうに笑っているような………  
…そうか、命君を膝枕できて嬉しいんですか。そうですか#幸せそうに頭なんて撫でちゃってまあ……ッ#

……みんな一通りの疑問をぶつけ終わると、それぞれの思惑



に浸っているようだった。

忍さんは早速魔導具に興味を示している様子で、アークルさんに夢幻や式髪を使っている様を見せてもらって、「一体どういう原理で……」とすでに研究者モードに入っていた。

アリサちゃんとすずかちゃんは私となのはちゃんが既に魔導具の事を知っていた事に少し怒っていて、

「私たちを蔑ろにするなんていい度胸してるじゃない……？」

「ふふふ……私たち、親友だよねえ？隠し事なんてひどいなあ」

「……私たちはただひたすらに謝るしかなかった。」

S I D E O U T

SIDE 　　すずか

話が一段落ついた後なのはちゃん達を先に帰して今は私のほかにお姉ちゃん、ノエル、ファリン、恭也さん、あとは命君とアークルさん。今回の誘拐の裏の事情を知っている者が集まっています。尤も、命君は主犯から話を聞き出しただけであり詳しい話を知らない。なので今はお姉ちゃん夜の一族についての説明をしている最中です。

一通り話を聞き終えての命君の第一声、

「あつ、そうなんですか」

ズコー――

それはもう盛大にこけました、内心だけで（汗）。お姉ちゃんとファリンは実際にコケていて、比較的冷静なノエルや恭也さんは

コケてこそいけないけど、目を見開いて珍獣を見るような目で命君を凝視している。

「あ、あのね君？そのリアクションはあんまりじゃない？普通もつと怖がったり吃驚するものなんだけど………」

「？そうなんですか？俺なんて手から火や電撃出せますし、そちらは血を飲む事でいろいろな事ができるって話ですけど、俺は血で剣とか楯とか作れるし姿だって変わるんですよ？どっちの方がより化け物っぽいかで言ったら断然俺じゃないっすか、ハッハッハ」

そう言っで軽く指を噛んで血を出すと、それを扇のような形に固めて仰ぎながら笑っていた。

そりやまあ確かにそんなことができる命君に比べたら誰だっで一般人みたいなもの……っでいやいや！

「でもね命君、私は人の血を飲みたくなる衝動だっであるし、今だっで命君の血が飲みたくなっでるんだよ？……やっぱり私、b「ストップ」「……？何？」

「自分が化け物だなんて思う必要は無いぞ。世の中にはな、吸血衝動を病気として持っている人もいるし、女性の胸を揉まなきや暴走する小娘だっているんだぞ？それに俺の血ぐらいだったら死なない程度なら飲んでもらってもかまわんし。あつ、できれば感想とか貰えると嬉しいな、コクとかあるのか知りたいし」

「……………何故だろう？真面目に話している筈なのに向こうはこちらの思惑なんか知ったこっちゃないと言わんばかりの振舞いだし、何よりも血を飲んだ感想を聞くとか……………」。

「命君……………私の事、怖くないの？」

「……………今まで親友であるアリサちゃんやなのはちゃん、風花ちゃんにもまだ話していなかった秘密。きつと知られたら怖がられる、離れて行ってしまおうと思っていた。」

それなのに、彼は本当に何でもないように、

「いやいや、むしろさすがこそ俺の事怖くないのか？見た目

は変わるわ、火が出るわ、鉄筋折り曲げるわ、血を飲む事よりもこっちの方が怖くね？それをすずかは怖がらないで普通に友達として受け入れてくれたる？だったら男の俺がそんな君を怖がってどうするよ？」

・・・なんだか馬鹿らしくなってきた。今までばれないような気を付けていたのが無駄だったような気さえしてくる。

そんな命君に毒気が抜かれたのか、可笑しそうに笑ったお姉ちゃんはまだ少し可笑しいのを我慢するように月村家の者がその正体を知られた者に対しての措置を説明した。種類は二つで一つは記憶の除去、もう一つにその者の事を口外せずに一緒に生きていく事。

少し悩んでから彼は、

「じゃあその一緒に生きる方で。それって要は一生モンの友達になれって事でしょう？つまり俺とすずかは親友も同然、それ以上か？まあいいや、これからもよろしくな」

「あれあれ？君、こんな可愛い子と一緒に生きるってことはつまり結婚もOKって事忘れてない？すずかも君の事気にいってるみたいだしその気があるなら〜」

「お姉ちゃん／＼／＼！恥ずかしいからやめてっばっ！！  
／＼／」

「あはは……まあさすがの場合月に十回は下らない程の量のラブレター貰ってますし、きつと俺よりも良い相手なんてより取り見取りですよ？俺なんかで満足せずにもっと上のイケメン狙った方が良いですよ、恭也さんみたいな、ね？」

「／＼／＼／＼なななな何で命君がその事を！？それに命君も十分カッコいい方だと思っし……」

言っつてて恥ずかしかつたけど彼は「いや恭也さんと比べれば月とゾウリムシだって」と笑い飛ばされてしまった。・・・むう／＼確かに恭也さんみたいな凄いイケメンって感じじゃないけど、なんかこう、安心できるっていうか、大人姿の命君は見てて不安が無くなっつていくような妙な安心感がある。今の子供姿でもハツとなる容姿では無いけど、見ればそれだけで和む、まさに私にとっての猫のよくな安らげる存在。命君と話しているとたまに疲れるけど、基本的に大らかな気持ちになれる。

……まだ恋とは言えない感情だけれど、きつと私にとっ

ての彼はアリサちゃん達とは違った意味で大切なお友達なんだろう。

そう思うと少しだけ、少しだけ胸が暖かくなったような気がした。

第十九話 「事件……そのあと」(後書き)

おまけ

話が終わって一応契約の証し？という事で命の血を飲んだすずかの  
反応、

「……………(うつとり)。甘くて、コクがあつて、濃厚な  
味わい……輸血パックとは天と地ほどの差があるなんて……ねえ、  
もう一回いい？」

「……………あれだけ飲んでまだ足んないの！？いい加減貧血で  
……てええええええ！？言ってる傍から近づくんギイヤアアアアア  
……………」

……………翌日、妙に艶々した顔をした者と、げっそりした者が月村  
家にいたそうな……誰が誰とは言いません。



アークル・風花・神楽

「ひよつとして、また……………?」

お目汚ししてすみませんでした。本編で書こうと思ったのですがそしたら一万の舞台がチラ見えたもので……………(汗)

それではまた次回!

## 第二十話 「これからの八神家」(前書き)

どうも、作者です。

最近大学の先生に殺意を覚えて新しいこのごろ、皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

ザフィーラ「言葉遣いが丁寧でも物騒な単語でぶち壊しだぞ」

だってあの人！今までテストの度に範囲をある程度絞れるようプリントとか出すのに、今回のテストは教科書全部とか出しもしないクセして範囲馬鹿みたい広げやがったんですよっ！？

ザフィーラ「お前がしっかり勉強すればいいだけの話だ」

・・・ザッフィーが冷たい……絶対出番で弄りぬいてやる……

それでは、本編をどうぞ！

第二十話 「これからの八神家」

S I D E はやて

みんなっ！お久しぶりの美少女、疾風、違う、はやてちゃんや！！

なんか乗っけからテンションが高いやって？それはな、そうでも  
せんと場の空気に押しつぶされそうになるんやもの、仕方あらへん  
もの。だって今……………

「……………（怒）」

「……………（涙）」

……………無言で怒りの形相のじいちゃんが涙目で震えているシ

グナムとヴィータを正座させているんやもん……………（汗）

その後方では、

「痛てエエエエエエえエエ……………目ん玉潰れた……………」

「もうほんつとー……………に御免なさい！！あの二人も決して悪気があった訳じゃないんですよ！初対面だったものだから不審者だと思って……………一応治療魔法しときましたし目も潰れてはいませんし、許してあげてくれませんか？」

「いや、別に怒ってる訳じゃないんで……………見慣れない恰好で驚かせようと思ったのは俺の方だし。それでもこれはやり過ぎだとは思いますが……………俺以外の人じゃなくてよかったですよ本当。一般人なら無くなりますよ？頭部」

「重ね重ねすいません。二人にはちゃんと行って聞かせるので……………」

……目の上を真っ赤に腫らして片目が完全に閉じている状態のみこっちゃん（大人Ver）がシャマルの治療を受けていた。

この状況に至るまでを簡単に説明すると

・昨日の晩にみこっちゃんからの連絡が私宛に来ていて「明日そっち帰るんで」と素っ気なさすぎるメールでの連絡にしばらく憤っていた私だったけど、冷静になった後家族にこの事を話して明日私と同じくらいの背格好の男の子と綺麗で巨乳（ここ！最重要事項！！）なお姉さんが帰ってくるのでちゃんと出迎えるように伝える

・翌日の朝、玄関から「ポンポーン」とチャイムが鳴ったので、で……あああああああああああああああもっつ！！何で私の久々の出番でこないな回想はさまなあかんねん！！

もうこっからは○ンクリヤ！キンク○！要は出迎えに行ったシグナム、ヴィータの二人が大人Verのみこっちゃんを不審人物と認識してブツ飛ばした！！以上！！

「はやて〜。あまりにもやつつけ過ぎじゃね？久々の仕事なんだしちゃんとこなさないと……」

「甘いっ！その考えは攻撃を仕掛けた後に『やったか！？』という見通しの甘い台詞よりなお甘いでみこっちゃん！！」

「いや、それ死亡フラグだから。見通しの甘さとかそんなんじゃないから」

「うっさいポケエ！こっちはなあ、何や彼方此方でフラグ建設してきたみこっちゃんに制裁考えんのにいそがしいんやつ！知らん間に二人ほど落としてきたんやろ？きりきり吐いたらどくや？今なら多少の手加減も考えてやらなくもない事は無いな」

「それってどちらに転んでもシバかれる事が決定してるよね！？  
・はあくフラグ？別にそんなどこぞのイケメンじゃあるまいし……  
……あつ、でも告白っぽいのならさ」「ほほう？告白とな？」お  
おおつ。管理局で働かされていた時に偶然……」

「偶然なあ？……つて、どないな偶然があれば告られるシチュになるんや！！？みこっちゃんはアレか！？エロゲ主人公ばりのフラグ体質なんか！？」

「アホぬかせチビ狸！！だれがフラグホイホイかつ！！しかもエロゲてお前、それって確か十「そおい！」ウオアー……………」

ふう、危ないところやった。もう少しで近所で天使の笑顔と評判の私の裏の顔が露呈するところやった……………何？今さらやと？……………ちよつと前に出てきい、異次元に幽閉したる。

「（主が……………黒い……………）」

こちらを見るザツフィーの視線が気になるけど無視する。いい加減頃会いだろつと判断してじいちゃんか二人に正座を解かせて軽く説教しとる。まあ、ボディーランゲージじゃないし軽くで合ってるやろ。そろそろ時間が1時間超えるけどな……………

「……………ううう。酷い目に遭った……………」あのう、みこと……………さん？「はい？……………えっと、どなたでしたっけ？それと別にさんは要りませんよ。（ポワン）……………よっと、これでいいか。見ての通り子供ですし敬称も敬語も要りませんよ」

「（融合騎！？でも魔力を一切感じないところをみると……風花ちゃんの魔導具のような物？）ええっと、そうですね。ならみこと君と呼ばせてもらいますね。私はシャルotteがいいです。ところで先程管理局と言ったみたいだけど……何か関係が？」

シャルotteが真剣な雰囲気で質問をしていた。「管理局」というワードに反応してか、残りの皆もその話に集中しているみたいやけど……

みこつちゃんも真剣な空気を感じて、しっかりと自分が管理局で働いていた理由を説明している。

一通り説明が終わると今度はみこつちゃんが逆に質問を返していた。

「……まあ以上が俺が管理局で働かされていた理由です。ところで、ずっと気になっていたんですけど……あなた達、何者ですか？多分、魔導師ですよね？」

その言葉に驚くヴォルケンの皆。それは確かにそうやる。みこつちゃんは魔力も無いのに魔力を感じとって相手を魔導師と判断した



んやから。話によると魔力を持たない人間は普通、魔力を感じとれないらしいし。

そんな疑問を読んでいたように、みこっちゃんは頬を掻きながら、

「ああ、そのですね？俺、この二カ月の間で山ほど魔導師の犯罪者や魔法生物と戦わされていたんですけど、その際魔力の流れ読めない結構厳しかった場面が何回も有ったんですよ。だから具体的に魔力を感知出来る訳じゃないんですけど、何かこう、何となく読めるようになったとしたか言いようが無いんですけど……」

その言葉にヴォルケنزは全員口をあんどり開けている。今のそんなにすごい事なんかなあ？

「なあシャマル？今みこっちゃんが言ってた事ってそんなに凄い事なん？私も魔導師ちゃうけど何となく魔力を感知はできてるけど？」

「いや、凄いやあ凄いですけど……普通リンカーコアを持たない人間が魔力を感知する事なんて不可能とされていたんです。それを勘のようなものとはいえ感知できるなんて事、普通あり得ませ

んよ」

「ヴォルケンスはみなウンウンと頷いているけどみこっちゃんとおクルさんは、

「あらあらまあまあ、命ちゃんって凄かったのねえ。よしよし  
(ナデナデ)」

「子供扱いはいい加減やめろってば……でもまあ今まで第一線で働かされていた訳だし、きっと第六感的なモノが覚醒したんじゃないか？」

と至ってノー天気。世の魔導師の人からすれば卒倒モンなんやろうな。とか思っている。と気を取り直したシャマルが自分達が魔導師ベルカ式を使うから名称的には騎士だという事を明かして、闇の書の守護騎士プログラムである事を話していた。何でもみこっちゃんの境遇に同情したシャマルの独断だったみたいでシグナムが陰しい目つきで睨んどったけど、じいちゃんに気付かれて「明日の稽古は無しじゃ」と宣告されてこの世の終わりのような顔になっていた。

シャマルの話聞き終えたみこっちゃんやけどどうしたんやろ？





その後その局員さんは闇の書を追うために管理局を辞め、今でも次元世界を飛び回っているとか。その話を聞いて過去の出来事を思い出したのか、シグナムは青い顔して震えだしてヴィータやシャマルに慰めてもらおうという珍しすぎる様相を呈している。

「じゃあ、今度みこっちゃんの監視に来る人がその人ってことになるん？でもその人辞職してるんやからそないな事ならんと思うんやけど……」

私の言葉にシグナムが心底ホツとした様子だったが、みこっちゃんはまだ暗い表情で、

「いや、まだこの話には続きがあるんだ。実はその人既婚者なんだ。なのにシグナムさんに一目惚れしたせいでその奥さんとは流れるに離婚になってしまったらしくて……」

そのせいで、奥さん。もはや人間とは思えない嫉妬心や憎悪を闇の書に対して抱いているんだ。もしそんな人にシグナムさんの事ばれてみる、多分この世に一片の分子すら残さず消滅させるぞ？アルカシエルも辞さない構えだし、下手したら地球ごと抹消されるかな俺達」



「それは前にモニターみたいなので顔だけ出てきたあの人やな？  
よっしや了解。それなら皆、これから私たちが気を付けるべき最優  
先事項とは？」

「『『『『』絶対！リンディさんに闇の書の事を隠し通す事ッ  
！……』』』』」

「……方向性としてはどうかと思わなくもないけどと  
りあえず！我らの家族を守るため、そして、地球を守るため、八神  
家の皆の心が一つになった瞬間やった。」

あっ、そや。

みこっちゃんの折檻も忘れずやらんな

「ぎにやああああああ最近叫ぶ事増えてませ  
んかああああああああ！……！」





## 第二十話 「これからの八神家」(後書き)

いや〜八神家の中で

リンデイさん>>>(越えられない壁)>>>その他大勢  
の構図ができてしまいました。たまに訓練して実力を知っているな  
のは様よりも遥かに恐ろしい存在・・・女帝？

なのは「ていう事は、ここでは私、白い悪魔とか冥王とか怖い渾名  
で呼ばれないの!！」

いやいや大丈夫ですよ。カートリッジ付けた日にゃあもうちぎって  
は投げちぎっては投げの天下無敵の魔法、魔砲少女が……

なのは「それってどういう意味なの!!?!」

魔王様(称号)からは逃げられない。そういう事ですよ、きっと

それではまた次回!



第二十一話 「さらなる受難の日々へ・・・?」

S I D E 命

「転校生?」

「はい。そうなんすよ。何でも今日からうちのクラスに三人程転校してくるとの話が・・・」

例の八神家の団結から一晩経った今朝、何故か元・虐めっ子だった児玉が舎弟的な感じでそう報告してきた。こいつ、何故だか知らんが俺の事を「兄貴ッ!」と尊敬するかのよう呼びだして、しかもそれが他の男子にも伝播してしまい、今ではこの学年の男子のほとんどから兄貴呼ばわりされています。

児玉のヤロウ、以前炎を出して追っ払った一件で俺の事怯えるのではとか思っていたんだが、

「好きな女を守るために身を呈するなんて………すごいや兄貴！俺も兄貴みたいになりたいっす！」

いきなりこの発言。コイツの言葉で俺が風花の虐めを止めさせた張本人であることが露見してしまい、その結果、尊敬的な眼差しを受ける羽目に………

正直言つてむず痒過ぎる。前世虐められっ子ですよ？それが兄貴呼ばわりとか……何の冗談だと叫びたくなる。アレか？名字に力ミナがついてるからか、天元突破な破天荒を期待されているのか？はつきり言おう、んなことできるわきゃ無い。そんなキャラでも無ければ、あんなカツコいい口上も思いつかないしね。

しかしいくら言つてもコイツの喋り方だけは直せなかったのでもう諦めている。直に炎を出す瞬間を見た連中は全員俺を慕っている、とゆうか、畏敬を持って接している。マジで止めてください。こちらが恐れ多いわ。しかも風花の事は裏で姐さんと呼んでいる。確かにキレたアイツの口調を知ったらそれも頷けなくもないが、それだと俺と風花くつついてるみたいじゃん？悪い気はしないんだけど風花なら俺なんかよりも良い相手を見つける事ができるだろう。なんせ普通にアリサとかと並んでいても見劣りしないしなぐらい可愛い訳だし、将来はきつと美人さんだろう。そんな人と恐れ多くて付き合えるかという話だ。



それでもこちらの文化とかもまだ分からない事が多いので教えてくれると嬉しいです！これからよろしくお願いしますっ！！（ペッコ）

「……………ヒヤッハーハー！！美少女だぁー……………」

「……………」

緊張していたのか、普段の調子よりも声が強張っていたがそれがクラスの男子にはバカ受けしたみたいだ。フェイトも受けがよろしいのを確認していると小さくガッツポーズしていた。……………まさかっ！？先程の緊張しいのはすべて演技！？ありうる！母親がアシな分、ネタに走る可能性は十分に考えられる！！

実際、この後確認してみたら案の定プレシアさんの提案だった事が判明。本当なら教室に入った瞬間にコケてドジっ子アピールもする予定だったそうだがリニスさんの必死の抵抗でなんとかその案は却下されたとか。……………リニスさん、相変わらず苦労してんだなぁ（ホロリ）

そして次に自己紹介したのは……………

「初めまして皆さん。僕はユーノ・スクライアといいます。まだ



「皆さん初めまして！私、白妙神楽つていいます！名前こそ日本のものだけど生まれは向こうの方なので一応は外国人です！趣味は日本の漫画と家事全般です！将来の夢はみこと君のおよ、「言わせねエよ！！？」おっ、みことくん やっほ」

不穏当な発言が聞こえそうだったのでマイホームな三人組のネタで何とか阻止する事に成功したはいが、神楽がこっちに満面の笑顔で手を振ってらっしゃるし、男子数名が殺気立った視線を送ってくるし、隣の風花に視線が痛いし、離れた席からの無言の圧力が異様に怖いし！あの馬鹿アアアアア！！余計な事してくれやがって  
エエエエエエエエ……！！

「うん？神楽さんは神名君と面識があるのかな？」

ヤメテ！先生！これ以上状況を悪化させかねない  
発言は控えて！？燃やすよ！！？

そんな俺の錯乱も知ったこっちゃ無いのか、神楽は先生の問いにモジモジしながら恥ずかしそうに………だから誤解を招きそうな行動すんなよお前もっ！！

「／／／／／えつとですね、みこと君とは………その………特別な幼馴染ですっ！！キャツ／／／／／」



「……………ハハハ…それは転生した者同士という意味での「特別」  
ですよ？おじさんは信じているからな」（棒読み）。

「ただ周りはそうは受け取ってくれず、男子の殺気は倍以上、風  
花の視線は咎めるモノから捨てられた子犬のような俺の良心を抉り  
だすモノへとシフト、後方からの圧力は物理的に俺を潰せそうな勢  
いで増し増しの倍ブツシュ……………俺が何をした

「（キュピーン！）……………ハッ！？」

「？…どうしたんじやはやてちゃん？なんか電波を受信したかのよ  
うな反応をしようじやが」

「何でそないに具体的な例なん？……………何かとてつもなく不愉快  
な事が私の居ぬ間に起こったような、そんな気がしたんや」

「不愉快とな？一体何じやろうな？」

「うん、それはわからんのやけど………とりあえずみこっち  
ゃん帰ってきたらシバいて鬱憤を晴らそう。うん、そうしよう」

「……ハッ！？何故か急に帰りたく無くなったぞ？具体的  
には身の危険を感じる意味で！」

俺はライフ（バー的な意味で）がガリガリと削られたのでその場  
に突っ伏し、後に来るであろう不幸をやり過ぎるためにシエスタを  
開始した。……現実逃避と言わないでっ

S I D E O U T

S I D E 神楽

「みこと君みこと君！こうして一緒にお昼なんてすっごく久しぶりだよねっ！」「

「ソーデスネ」

「みこと君みこと君！そのお弁当って家族の人に作ってもらったの？おいしそうだね！」「

「ソーデスネ」

「……私の婚約いつにする？」「



「だいじょぶだよなのは。いざとなったら得意の魔砲で…」スト  
ップなのフェイトちゃん!!」「あれ?言ってる無いの?」

今は昼休み、二度めの小学校の授業もなかなか懐かしさを感じ  
るけど、やっぱり休み時間だよな!

てな訳で、みこと君達と一緒に屋上でお昼御飯を食べています。  
やっぱり良いよね〜こうして好きな人と一緒に食べるご飯。前世でこ  
の幸せを当たり前だと思っていた自分をはり倒したい。彼と居るだ  
けで味わえる幸福感を何故大切にしなかったのか、悔やんでも仕方  
の無い事だけど、

「今が幸せなんだし、この幸せを大事にする事の方が大事だよ、  
うん」

「何か言ったか?」

「ううん、今度こそちゃんとした告白でみこと君を落としてみせ  
るって決意してただけだよ」



風花ちゃんが凄いい剣幕でみこと君に詰め寄って、すずかちゃんはとても綺麗な笑顔なんだけどどこか嫉妬神リンディさんを彷彿とさせる笑顔で質問している。他のみんなはそれを見て見ぬフリをしている。

「落ちつけ、頼むから、一生のお願いだから落ち着いて下さい。答えるから、ちゃんと答えるから。……一応告白はされたけど、別に付き合っているとかさそんなんじゃないぞ？以前は好きだったという意味での告白であって恋愛感情のそれじゃないからな？」

「ええ、何言ってるのみこと君。私は前世も今も」頼むから状況悪化させんな！「ブーブー」

なんだかわかんないけど私が告白した事があの二人が気にいらな  
いみたい。ハッ！？もしかして！？

「まさか風花ちゃんもすずかちゃんもみこと君の事が好きだとか  
！？」







貰うっ！！

「命、アンタ。あの三人どうにかしなさいよ」

「知ってたかアリサ？男つてのはかくも弱い存在なんだ。俺はとつても小さい存在だから、あの三人を止めるだなんて不可能だよ。．．．．．俺は、無力だ…（涙）」

．．．．．その頃の八神家は

「ねえねえはやてちゃん。なんだかとっても嫌な予感がするの。胸がざわつくというか、大事なおやつの隠し場所がばれてしまったような、とっても嫌な予感が。なんでかしら？」

「私もや、アークルさん。きつとこの胸騒ぎもみこっちゃんが帰って来た時間き出せばわかる筈や。そやから、帰ってくるまで抱っこしてくれへん？その豊かな山脈に私を溺れさせてえ」

……… 案外、いつも通りでした

第二十一話 「さらなる受難の日々へ・・・?」 (後書き)

何かやっちゃったZ E ってな感じが否認ませんが、この後一人だけラバーズは増やす予定・・・なの？

命「聞かないでくんない!?それに俺よりユーノやらクロノさんやらのイケメンにくつつけるや!!」

そこまで言いまするか貴方は・・・

でもまあ、予定は決まって無いから予定という訳ですし、どうなるんでしょうね？

それではまた次回!

命「さらっと流すなああああああああああ!!!」

番外 PV15万とユニーク1万ということで(前書き)

今回は嬉しい事にPV(未だに原理はよくわかっていない)とユニーク(最近漸くこれが人を表している事に気が付いた)がかなり多くなっていたので、それを記念してこのような形になりました。

ちなみにオリキャラしか出ていません!それでも構わんツ!  
という心の広いお方はどうぞ!

雪而「ちなみにわしの出番はここだけ……って何でじゃアアアアアアアア!?!?」

番外 PV15万とユニーク1万ということ

命「あり？今回は話は進まないのか？」

風花「うん。なんでも「地の文より台詞書いてるほうが楽なんよ」という訳で、今回は座談会形式でやらせてもらいます」だって」

命「うん。手抜き感とか気にしちゃダメだな。ところで面子は俺達だけなのか？」

風花「いやねー、私たち二人だけでも十分間に合ってるんだし他の面子なんて必要n」『ちよ~~~~と待った~~~~!!』……  
・ちっ、もつきやがった……………」

神楽「じゃんじゃじゃ〜ん やっぱり真のヒロインたる私がない



命「あの惨状は無視すんのね……………（汗）・・・と、ああ。それなら作者からお題が出るからそれに倣って進めようかと。でもまあ、あそこで殺りだす連中もいるみたいだし俺らだけでできる事でもやっつくか」

アークル「（ふふ）ん。まだまだ若いわね二人共。こうゆうところから差は開いて行くものなのよ（そ）ね。それじゃ早速・・・（ご）ご（ご）とこれね。・・・ええと何々？え、あの二人の紹介だつてよ」

命「自己紹介やらせれば一瞬なのにな。しゃーないから俺らで紹介しとくか。まずはあそこで暴れてるショートカットの方の女の子、嵐山風花だ。

アイツの家は嵐山組っていう由緒正しい極道で月村の家からの後ろ盾もあつて海鳴の町の裏の用心棒的なお仕事をしているらしい」

アークル「うんうん。しかも薬とか怖い事は一切しない「クリーンな極道」をスローガンにしている近所でも顔は敵ついでいい人達だつて評判はいいわね。これホントに極道かしら？」

命「あくまで任侠道を極めるための組らしいし、そこらの暴力団とは一線を画しているな。ちなみに本人はその家の一人娘ということもあつてかなり大事に育てられていたみたいだな。だからそんな親に心配を掛けまいと虐められていた事を隠していた訳だ。やっぱえ



え子だなあ〜風花」

アークル「そうよね〜。命ちゃんに自殺を止めてもらった事が切欠で友達になつて虐めグループを追い払った事でさらに好感度アップ、今では命ちゃん>>>越えられない壁>>>家族や組の皆>>>その他

みたいな図式になつてるくらいなものねえ〜。性格も明るくて友達思い、組の皆に護身術や剣、暗器、銃の扱いなんかを教わっているから基本スペックもかなり高くて、アリサちゃん以上の運動能力で瞬発力ならずかちゃんに迫るものがあるわね〜」

命「風花つて何気にお嬢様だもんな。いろいろ習っているからできない事つてほとんど無いし、強化されていない元の体だったら手も足も出せねえもん。しかも怒りのボルテージが上がると口調とともに身体能力も上昇するという・・・何と言う主人公属性」

アークル「ホントね〜たまに滅茶苦茶熱い台詞なんて言うものだからお姫様タイプのヒロインとゆる〜かヒロイック物の強いヒロインだものねえ〜」

命「もう主人公変わらね？って思う時もあるしなー。……さてと、次は神楽か」

アークル「そうね。もう一人の青髪をポニーにしている子が白妙神楽ちゃん。ミッドチルダに居た時はカグラ・シロタエの名前で生活していたわね。転生した時すぐに管理局に保護されているから特に家族と呼べる人はいないわね。ああでも、拾ってくれたクイントだったかしら？その人の家で少しの間過ごしていた時があったみたいね」

命「へえーそーいや神楽の家族とかこっちじゃどうなっているのかわかんかったけどそんな感じだったのか。ちなみに転生した時の望みは「俺との再会」のみだったので他の二つについては担当守護霊の独断でつけたものらしい。一つは魔力資質。ランクで言うとAAぐらいの魔力を貰っていて、空戦適正もあったので魔導師としてのスペックははやてやなのは達と同じくらい。もう一つは能力はレアスキル扱いらしい」

アークル「それって何？」

命「それは本編を進めてから出す予定だそうだが、神楽の趣味である漫画の能力の一つらしい。アイツ少女漫画とか一切読まないからな、少年誌とかの単行本しか持ってねえしな」

アークル「命ちゃん的能力の切欠になった漫画も神楽ちゃんの紹介



命「ちよっ！？わかった！わかったから泣くな！距離置かないし離れるとか言わんから泣きやんでくれ、悪かったよ、ゴメン」

神楽「……………本当？」

命「ホントに本当、それに今度も虐めがあるとは限らんしな。そうすれば距離を置く必要も無くなる訳だし」

風花「……………おもしろくない」

アークル「まあまあ風花ちゃん、今は仕方が無いわ。わかってあげて、ね？」

風花「……………うん」



る能力は他の世界での魔法関係の能力の予定だつてさ。これを読んでくれているであろう読者の皆さんにも何か良い案が無いか聞きたいそうだけど………」

命「？聞きたいけど……何だつて？」

神楽「『私なんかのために態々そんな心優しい方々が現れる訳が無い』って質問する勇気がないんだつて」

風花「あははは……凄く後ろ向きかつネガティブな発言だなオイ。読んでくれている方がいらつしやるからこそPV15万いった訳なんだし、きっと案出してくれる人だつていると思うな………1、2人ぐらいなら多分、きっと、おそらく、きてくれるとイイヨネ」

命「まあ、きてくれることを切に願いつつ………皆さまにお願いがあります！

魔法関係でなにかしらの能力があつたら是非案を下さい！！

作者は型月の能力とか某10歳が先生をやっている世界の魔法とかは二次創作や他のSSで見た程度の知識しかないので、できればその能力の詳しい説明、もしくは「このサイトやこのSSを読めばお

K「などの情報をいただけると幸いです！魔法魔眼魔術何でもOK！『こんなあったら良くね？』的なアイデア、是非とも感想板にてお待ちしております！！」

アークル「ふう、今回はこんなところかしらね？」

神楽「そうですね。もう話すネタも無いし、お願いも終わっちゃったし」

風花「それじゃ命君！最後の言葉宜しくっ！！」

命「お、おう。・・・ゴホン、これをお読みになってくれている読者の皆さん、この「ヒーロー」にはなれないけど「をお読みくださって本当にありがとうございます。まだまだ稚拙な部分が多いです

が、PV15万、ユニーク1万と、かなり大勢の方々がこの小説を見てくれていて大変喜ばしい限りです。  
今後この作品を気にかけてくれると俺達も作者もかゝり嬉し  
いです。

それではまた、次回の更新で！！」



番外 PV15万とユニーク1万ということで(後書き)

は・す「3人だけ出てて私たちがでていないのは不公平やっ／だ  
よっ！！！！」

仕方ないんです。私の技量ではアレぐらいの人  
数ぐらいいしか捌けないので・・・

次回はちゃんと本編を進めたいと思います。ちなみのアイディ  
アは土曜の正午までを期限とさせていただきますので、できれば何  
かい案をいただけたら・・・いいよね

はやて「いや、そこはしっかりお願いせいや」

すずか「ちなみにクロスさせる能力のほかにも何かアイテムとかの  
案もあればドシドシ送ってください!」

は・す「お便り待ってま〜〜〜〜す!!」

第二十二話 「覚醒！新たな力・・・かも」（前書き）

いよっしゃアアアアアアアア！！

神場 司様！早速アイディアをくださってありがとうございます！  
感想の返信でもお礼を述べさせていただきましたが、ここでもう一度言わせて下さい！！

アリス「ただ単に前書きのネタが無かったともいうわね」

余計なひと言は出番を減らすという作者特権の発動を促しましたからね、もう知りませんからね。それでは本編をどうぞ！

第二十二話 「覚醒！新たな力・・・かも」

「ハアーーーー！！！」

裂帛の気合とともに振り下ろされるは炎の魔剣、そしてそれを向かい撃つものもまた、

「（動きやべえー、流石じいちゃんに毎日稽古つけてもらってるだけあるなコンチクショー）でも、だからってええええ！！ 壱式！ 碎羽ッ！！！」

炎の魔剣とぶつかり合う炎そのものの刃。激しく火花を散らしぶつかり合う様相は互いの闘志が目に見えているかのような錯覚すら起してしまうほど。

それから数度切り結んだ後、互いにバックステップで距離を取って体勢を立て直す。

「ハア、ハア…… 流石は師匠の実孫だけのことはあるな、ここまで私に剣で対抗できるとは……………」

「いやいや、そっちだって元は人とそんなに変わらない身体能力の筈なのに、半ば魔改造されている半化け物みたいな奴とここまで実力が拮抗してることだし、よっぽど凄いのはそちらですよ?」

「ふ、謙遜はいらんど。第一、お前はアークルとのユニゾン無しでここまで私を追い詰めているのだ、ユニゾンした状態だと流石にこのような状況は作れんさ。

……さて、そろそろ時間も危ういだろうし、次で決着としようか（ガシユン）」

そう言ってカートリッジをロードし、魔剣にさらなる魔力を注ぎ込むシグナム。

「そうっすね。そろそろ終わりにしましょうか」

対する命も腰を低く落とし、右手を弓を引くように構える。

そして、互いに様子を見ながらの刹那、

「紫電……………一閃ッ!!」

「だらアアアアアア

アアアアア!!」

一陣の風とともに一斉に動いた二人の剣がぶつかり合った。

「そこまでっ!!……………二人共、今日の早朝訓練はここまでじや……………にしてもものう、二人とも、ちとヒートアップしすぎじゃな(汗)」

審判役をしていた雪而の合図をもって戦いは終わりを迎えた。しかし、いかにせん熱くなり過ぎたのか、いくら結界の中とはいえ、近所の塀を破碎したり、そこらの道路や壁に焦げ目を作ったりと、二人の試合の傷跡を見て、一人ごちる雪而であった。



「ただ？（ニヤニヤ度上昇中）」

「あ、そ、その……じつちゃんに構ってもらえるのが嬉しい……  
…つてええええ！何言わせてんだ／＼／＼／＼！！（顔トマト）」

「キヤー ヴィータちゃん！！照れてるところ、かぁいいよー）  
MAXニヤケ）」

「だあああああ／＼／＼／＼！！てめえそこになおれ！！  
アイゼンの頑固な汚れにしてやるうううううう！！！！」

シグナムさんの早朝訓練を終えて、今は食卓にて朝食待ちである。暇な時間をヴィータを愛でる事で潰している最中でもある。

この子はすぐに手が出てしまうこと、口がちよつと乱暴などこ  
以外は普通に良い子で、このようにじいちゃん関連の話題でおちよ  
くるとオーバーな反応を返してくれるので、我が家では最近マスコ  
ットとして扱いを受け始めている。本人は嫌がっているが、アイヌ  
をあげたりお菓子をあげると途端にご機嫌になっってくれるため、難  
無くマスコットキャラとしての道へと誘導されている。ちなみに主  
犯は勿論はやて、こつという事に関しては右に出る者はいないとまで

言われる（八神家限定）その手腕はあらゆる悪戯でいかななく発揮される。くだらん事のため注ぐその情熱と努力を他の事に向けると思わなくもない。

その後朝食を運んできたシャルさんと一緒にヴィータの暴拳を止めて（オーゲンダッツ吉個で買収）朝食を食べ終わると同時にじいちゃんにとある事を尋ねてみる。

「ねえじいちゃん。アークルの調子どうだった？」

「ふむ、それなんじゃがな、少し調べてみたところあやつの中に確認できないブラックボックスのような物が見つかったの。それが影響を及ぼしているのじゃろうと当りをつけてはいるのじゃが……」

今朝の訓練でアークルとユニゾンしなかった理由、それはアークルの体調不良によるものだ。昨晚から気分が優れないようだったが今朝は目を覚まさない程までになっている。命に別状は無さそうなのが元が魔導具ということもあって安易な結論を出す事が出来ず、今は交代しながら看病している。

「じゃあ今から俺が見てくるよ。学校には休みの連絡も入れとい



たし」

「おう、わかった……………つてええちよつと待てえええええええええ！？何さらりと欠席宣言してんねん！？がっこ休む気満々かい！？」

「おうともさ。アークルは俺の大事な相棒だからな、やつぱ自分で看病したいし。そいじゃ、昼になったらまた降りてくるから簡単なお粥でも用意してねえ〜（バタバタ）」

「待たんかい……………行つてもうたか……………。まあしゃーないか、後で玉子粥でも作って持ってこか」

「そうじゃの。命もああいうところは前世から全くかわつたらんわ。近所の子供が風邪をこじらせて親御さんに看病頼まれた時も平気で大学サボつとつたからのう」

所変わってアークルの部屋。

「大丈夫か？・・・やっぱりまだ寝てるか」

いつもなら平気な顔してのほほんと返事を返してくれるところなのだが、やはり目を覚まさない。良い夢でも見ているのだろうか、時折「ふへへ・・・いただきま〜す」とか幸せそうに呟いてる。食べ物関連なのだろうが、「やっぱり子供より大人の方が食べ甲斐というか食べられ甲斐があつていいわ〜」とか言っている。何故だろう、食べ物の夢の筈なのに激しく身に危険を感じるのは？ まあしかし、

「早く起きろっつんだ。お前がいないと調子でないんだよ、相棒さん」

幸せそうな寝顔を見ると、なんだか心配してんのがアホらしくなってきたのでアークルが寝ている布団から少し離れたところで情眼を貪る事にした。次目が覚めたら当たり前のように笑っている、

そんな風に思いながら……

S I D E O U T

S I D E アークル

「キヤーー 聞いて聞いて 今、命ちゃんが私の事撫でながら『相棒さん』だつて〜！ やっぱり命ちゃんにはわ・た・しが付いてなきやだめねえ〜」

「クツ……！ いえ！ 決してそんな事は無いと思いますっ！ 頭領はいつも私や碎羽を使ってくれています！ したがって私が頭領にとつて必要とされている筈です……！」

「崩よ……途中から完璧に俺の事退けたよな？ お前の気持ちもわからんではないがな、少しは落ち着きを持ってだな……」

「そうよそうよー！いくら使われている頻度が高いからってそれがイコールで好感度に繋がるってのは安直過ぎるんじゃないのー？  
ここはやっぱりオトナの魅力溢れる私が命の側にいるってことで

」

「お前は話を混ぜっ返すんじゃない！！」

「そつだぞ罍！確かにそういった事はお前の方が向いているのやも知れん、しかしだ、アイツは精神的にはまだまだ子供だ。前世でも結局は○貞のままだったし、お前はあまりにも刺激が強過ぎるだろ？」

「そうですね！焰さん、もっと罍さんに言っつけてやってください！  
」

「そして意外なところで柳ちゃんの攻勢…つと。中々おもしろえなあ主のヤロウはよお。刹那は相変わらずみてえだし、列神の旦那も姿を顕わさねエし、虚空のジジイといやあ…」

「オツホツホーイーイ！！崩に墨にアークルちゃん！ここは美女天国かいのぉー！イヤツホオオオオ！！」

「ちよつと待つてください！？今そこで何で私の名前が拳がらないんですか！！？」

「ええええええ？ だって〜柳ちゃんは〜足りないんじゃないかも〜ん。こ・こ・こが（ジェスチャーで胸の辺りに手を山をなぞるような形で動かす）」

「ふえ〜〜ん（涙）」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何この空間？

そう思わなくもないような空気が展開されてるのは、どういう訳なのか私の夢の中らしい。最初は命ちゃんとキャツキャツウフフでムフフの展開な夢をみていたというのに、気が付いたら薄っすらと茜色に光る空間に召喚？されてしまった

そこで会ったのがこの八名。みんな人の姿をとってはいるけれど、ユニゾン中に発動される力をそれこそ身体で感じているからこそわかる。この人達は間違い無く火竜なのだ。

崩さん、碎羽さん、焰さん、墨さん、柳ちゃんは結構人が良いというか竜がいい方だったので、普通に打ち解けて話し合う事ができた。柳ちゃんは使ったところを見たことが無いのだけど、それは命ちゃんの実力ではまだ列神さんともども扱う事ができないそうなので、リミッターが付けられているのだそう。

円さんはどこか人？を食ったような態度で飄々としていて、さり気なく毒を吐く油断のならない人。

刹那さんはヘビメタな格好のまま空間の端の方で知恵の輪で遊んでいる。口調や見た目こそ怖いけど、そういうところが可愛いわ〜などと言ってみたらすっごい勢いで遠くの方へ行ってしまった。案外人見知りしやすいタイプなのかしら？

そして虚空のおじいちゃん。この人は本当に油断のならない危険人物。刹那さんなんて目じゃないわね。だって気が付けばいきなり私の胸を鷲掴みしてきて一言「おおー！何と言うスイートな感触！これは過去最高のおっぱいじゃああああああ！」なんて叫び出す始末。……グスン、まだ命ちゃんに触ってもらったことなかったのに……私、汚されちゃった…… と冗談2割殺意8割の本気の演技をしたところ、碎羽さんと焰さん、それと何故か刹那さんが現れて変態を丸焼きにしていた。特に刹那さんの瞬炎は最

高だったわ。あの変態が「ちよっ、おまつ！？お主の炎は一番マズイってええええあぢいいいいいいい！！！」と断末魔の叫びをあげていたときなんか少し気が晴れたわ。

そして今、私たちは一同に会してとある事を話しあっている。

「大体、何故虚空翁だけが何の制限も無しに人型で実体化できるのですか！？そんなの不公平です。私だって実体化して「頭領といちやいちゃしたい」ですよ……って／＼／＼／＼、何言ってるんですか墨！！別にそのような疚しい事など考えていませんっ！！／＼／＼」

そう、話は今「私たち（火竜）だって実体化したい！！」という虚空以外のすべての皆の要望にどうやったら応える事が出来るかという話になっている。

元は意志を持つだけの魔導具だった私が身体を持つことが出来たように、自分たちも現世で肉体を持つことができるんじゃないかということ、皆でどうすればいいか考えている。元々、火竜の力はそれだけの物、意志などは無く、只の力としての形だったものなのだけど、ずっと使い続けているうちに自然と意志を持つようになっていたらしい。虚空さん曰く、

「この世界が元々架空の世界であったことにも多少起因していると思うのじゃが、多分あやつが持つわしらのイメージが元になってこのような人格を得たのじゃろう。まあ、付喪神のような存在で捉えてくれればいいじゃろ、わしも詳しくは全くわからんしの、ヒョッヒョッヒョーーーーー!!!!」

らしい。物を大事に使い続けるとその物にも意志が宿するというアレと同じように、火竜の力に慢心しないで訓練を積んできた命ちゃんの意志に感応して人格ができたってことで一先ず落ちついた。

それにしたってここまで性格が細分化されているなんて……普通これだけ完成された人格を持つようになるまでには軽く百年以上かかるというのに、それをたったの数カ月でしかも九体全部に意志を宿らせるなんて………よっぽど好きだったのね、命ちゃんは。

それならば、きつと命ちゃんの意志次第で自分達も実体化できる筈！ と火竜のみんなは思ったらしく実体化の先駆者である私を夢の世界へと招き、相談に乗ってもらおう事にしたらしい。皆純粹に外に出てみたいという願望のほかに、碎羽さんや焰さんは命ちゃんを鍛えたいって言うてるし、崩さんや墨さん、柳ちゃんは命ちゃんと直に会って話をしてみたいらしい。刹那さんは無口だったけど他の皆にしてみれば相当珍しく自分から殺人以外の要望を言ったみたい。虚空さんは言わなくても良いわね。



「それじゃあ、皆の意見をまとめると」「とりあえず雪而さんに頼んでみよう!」「って事で良いわね?」

「はいっ!本当にお願ひします!アークルさん/殿!」「」

「はいはい、二人共落ち着きなさいな。多分なんとかしてくれるんじゃない?命に今の力を与えたのもそのおじいちゃんだし、きっと私たちの実体化ぐらい出来る筈よ」

結論としては、私の実体化に一役買っている雪而さんにこの事を話してみよーという話になり、本格的に実体化するのはまた後日という事になった。

ちなみにこの事は命ちゃんに  
は秘密でいようと思う。きっと火竜のみんなが意志を持って出てきたなんて知ったらびっくりするんでしょーねー  
うふふ



第二十二話 「覚醒！新たな力・・・かも」（後書き）

今回のお話では早速いただいたアイデアを採用させてもらいました！

未だどのような形になるかは私ですらわかりませんが、納得のいく物が書けるようにしたいですね。

崩「いよいよ次回からは私たち火竜の痛快娯楽活劇が始まるんですねっ！」

・・・気が早いです、姐さん。それにそうなる予定もあんまり「弾炎！！」ぎにゃあああああああ.....



第二十三話 「邂逅と……」

SIDE ????

「うっ、うっ……んしょ……と。良く寝た……ん？  
寝た？」

いつものように目が覚めたことに思わず思考が止まってしまった。

私は「自分」という意識、人格を持って以来人と同じように起床するという事をほとんどしなかった。それなのにだ、自分は今こうして当たり前のように睡眠から目を覚ましている。

「あ、あれ？ここは……あの場所じゃない……？ それにこの場所は……まさかっ！？」

慌てて自分のいる部屋を確認する。そこは誰かの部屋なのか、所々に見覚えのある物が置かれた机や、寝台の近くにある書棚にはこの部屋の住人が使っているだろう教書が置かれていて、中には勉強とは関係の無い書物も見受けられ、小説のようなものから絵がふんだんに使われている書物など、教書の数よりも多いところを察するに勉強が苦手、もしくは関心が薄い印象を受ける。

しかしこの部屋、みれば見るほどに既視感を覚えずにはいられない。何故なら、

「ここは……頭領の部屋ッ!? 何故ッ!? 私は身体の中に居た筈だ! ……いや待て、それならば何故このように現実的な感覚で物を感じられる? これではまるで……ッ! ?」

そこまで考えて漸く気が付いた。今の私には身体があるのだ、しかもあの空間のそれではなく紛れも無い生身の体が!

私は喜びのあまり思わず声を上げてしまいそうになった。しかしここは敬愛する頭領の部屋なのだ。逸る気持ちを鉄の精神で抑えつけ、お顔を拝見しようとしたときにふとある事が気になった。

「（あれ？私ってこんなに目線低かった？これじゃまるで子供の目線じゃないですか。しかも手足も短くなってるみたいですし、一応鏡で姿を確認しておきましょうか。やはり現実の肉体とあの場所での肉体には齟齬があったのやもしれませし）」

そう思い部屋に置かれていた手鏡（アークル殿がよく部屋を訪ねてくるのでその時の忘れ物）で自分の顔を見てその場で硬直してしまった。

「え？嘘？だって、え？これって……あ、あああああああ！？」

……そのとき、鏡に映っていた顔は見紛う筈の無い、自身の敬愛する頭領、神名命の顔が映っていた……

「嘘だあああああああああああああ！……！」

……その日の朝、近所にも響き渡る大声のせいで命（IN??）は八神家の面々にお説教を受けた後、罰として朝食抜きで登校

する羽目になってしまったのはどつでもいいだろう……

S I D E O U T

S I D E 命

「なんじゃこりゃあああああああああああああ……!?!?!?!」

朝一発目の声は「最近よく叫ぶね、喉大丈夫？」と心配されたのが記憶にも新しい大声だった。

俺は確か、アークルの看病とかしていたときに寝てしまって、次起きたら普通に目を覚ましていたのでとりあえず安心したあと、また眠くなってしまったので自室に戻ってサボリ最高ー！とか言いながら寝ていた筈だ。

それなのに気付いてみると目の前に俺がいた。……うん、





その後混乱している俺（仮）を宥めて、それまでの経緯と今自分が置かれている状況について話し合った。

その結果、今度は俺（真）の方が驚かされた。なんでも火竜が独自の意志を持つようになっていて、この人はそのうちの一人？で崩だという。これには大層驚かされた、前もって火竜に意志は無いと聞かされてショボンな感じになったというのについて最近になって意志を持つまで至ったと聞かされたらびっくりもするって。一応俺が火竜を率いていることから崩さんはやたら「頭領！」とこちらに低頭してくるものだから焦ったのなんのって………

「本当にすみませんっ！頭領の身体を私などが使うなどと……」

「いや、お互いどうしてこうなったのかもわからない訳なんだしそんな謝らなくても良いですってば。それよりも、その状態のまま他の火竜と話とかできませんか？ひよっとすると何か知ってるかもしれないせんし」

「！　そうですね！早速試してみます！……」

そう言って崩さんは自身の内面へと意識を飛ばすために瞑想を始

めた。

.....十分経過.....

「.....！、ふうー。頭領、みなに確認が取れました」

「おっ！ で、どうなってるんですか？」

「はい、それなんです.....」

簡潔にまとめると、今の状態というのは普段のアークルとのユニゾンとは逆の状態であるという事だ。あの状態の時は俺が主人格として身体を使いアークルは俺の中にあるのだが、この度の現象は崩さんが俺の体の主人格となり、俺は身体から魂が飛び出している状態、所謂背後霊のような存在になっているらしい。魂だけの状態なので見た目も精神年齢に引きずられて大きくなっているとの事。

まあこの状態のままでも特に問題は無いそうなので別にいつか、とか思っていたのだが崩さんはそうはい神埼！とばかりに、

「駄目ですよっ！私なんか頭領の御身体を使うなど恐れ多い！一刻も早く御身体を……！」

「いや落ち着いて（汗） どうせ身体には害が無いってわかってることだし、しばらくは生身の感触とか確かめたらどうですか？」

「ですがっ！やっ！それと、もっ」・・・はあ……？」

「今から俺に対して敬語禁止。話すときは自分の素で話す事、これは全部他の火竜のみんなにも伝えといて下さい、以上」

これは俺の精神衛生上の問題である。今は俺の身体だが、実際には大人な姿の皆さんが子供の俺に敬語使ったりするのはとても忍び無いつーか恥ずかしいつーか、兎に角自分がそこまで敬われる立場の人間などでは無い事を十分に理解している身としては、敬語を使われるに激しく抵抗があるのだ。

女の人に傳かれるのに慣れた

くないってのも理由ではあるが……（何となく変な気分になりそうなため）

崩さんはこれに目茶苦茶反対してきたが、そこは頭領特権を発動。無理やりにも素で話させる事にすれば打ち解けやすいと思っからだ。その際、

「な、ならば、こちらからもお、お願いがあります」

「はい、何ですか？」

「それです！　とう……み、命も私たち相手には敬語は不要です。そうでなければ私はこの先もずっと頭領と呼び続けますからっ！」

こちら側にも敬語を使うなどのお達しが来たが、大人相手に敬語無しって……

結局は押し切られる形でそれを容認してしまって、さん付けで名前を呼ぶなくなり崩に呼び捨てで呼んで欲しいと言われたのでこっ恥ずかしいのを堪えながら「な、崩。これでいいか？」と、頬を紅潮させながら呼んでみたところ、

「（ああっ！一々恥ずかしがるところがまたっ！）はははははっ  
はいっいいいいいいいい！！もちろんですともっ！！！」

……若干反応がおかしかったが概ね問題は無いそうなので、  
この後他の火竜と入れ替わる事も出来るとわかったので、その人た  
ちとも挨拶をしておくことにした。

しかし、火竜に意志がねえ  
嬉しいは嬉しいが……何でだろう？ 何か嫌な予感がするんだが……

……その予想は大いに的中することになり、俺の体を介し  
て虚空の工口爺が八神家の女性陣にセクハラを敢行しようとしたり  
（他の火竜総掛かりで無理矢理意識を身体から引っ剥がした）刹那  
が俺を見た瞬間斬りかかってくる等（霊体だったので意味は無かつ  
たが……）、大変な大騒ぎだったのだが、実際に騒いでいたのは俺  
の体一つだけであり、火竜や俺が必死で虚空から皆を守っていたと  
いうのに「やかましいっ！」とはやてからハリセン＋土星の輪の重  
いお叱りを受けた時なんかは世に不条理さを大いに嘆いた俺なので  
あった……

「なぐに、気にすることはないぞい。落ち込んだ時は迷わずおんにゃの子達に突貫じゃああー!!」

「…………だからっ!!お前はちったあ自重しろやエロ爺があああああああああ!!…………!!」

…………とりあえず俺にはこのアホを何とかせねば嘆く暇すら与えてもらえないらしい………………  
チクシヨウ(涙)

第二十三話 「邂逅と……」（後書き）

碎羽「しかし、前書きでは思い切った事をのたまったものだな。お前の場合、『どうせ来る訳ねエし……』とか言っているものとばかり思っていたのだが」

その気持ちが無いとは言いませんが少しぐらいなら期待したっていいと思うんです。99%の冷たい現実の中に1%の優しい嘘を期待したっていいじゃないですか

焰「嘘でいいんかい……」

くれるものなら何だって。誹謗中傷は傷つくけれど、それでも読者の皆さまがそう思っているのなら受け止めるのは当然でしょうし、泣きそうになってもお酒は私を裏切りませんから！

それではまた次回！



外伝 「次元浮浪者ぶらり旅？」（前書き）

ZENZEN話の案が浮かばない今日この頃、暑くて仕方ないですね。

今回のお話は本編とは一切関係ないお話となっています。

今までの物と同様、駄文ではありますがどうぞ付き合ってくださいと幸いです。

それではどうぞ

外伝 「次元浮浪者ぶらり旅？」

俺がこの世界に転生してからもう何年経ったのだろうか、何かのアニメの世界らしいのだが結局5歳児の姿で転生してから今の今まで何の事件にも巻き込まれなかった。

いやね？別にだからと言って何も無かったといえはそうじゃないんだな、これが。

次元世界間を移動するのに次元航行艦に無断で忍び込んで旅をしている内に二人ほど家族が増えた。二人ともまだ子供なのだが、中々しっかりした子たちで、俺の旅にも何の文句も無しについてきてくれる。

「父さーん！！ そろそろ着きますよ。次の世界ってたしかミッドチルダっていうところだよな？僕楽しみなんだ！あそこには管理局の本部があるっていうし、本場の魔導師と戦えると思うとわくわくするよねー！！」

「エリオ？別に局員に喧嘩売りに行く訳じゃないんだぞ？あそこに行くのは単に『魔法世界の都会ってどんな感じかなあ』っていう好奇心を満たすためであって、腕試しとか面倒な事をするためじゃねえんだぞ？」

「ああ、確かベルカっていう魔法体系は近接戦に強いって話だったし、僕の鋼金暗器がどこまで通用するか、楽しみだなあ」

この人の話を聞きちゃいけない活発な男の子はエリオ・奈央崎。艦の貨物の中に紛れ込んでいた際、運び込まれた研究所のような場所で見つけた子だ。その場所はどうにもきな臭いところで、後にエリオから聞いた話では、そこは人造魔導師の研究所だったそう。元はクローンだったエリオに何故リンカーコアが発現したのかを調べていたそうなのだが、その実験の過程で人間不信に陥ってしまったところに俺が出くわしてしまい、エリオが暴走するも何とかその場を収め、あまりに不快だったためその場所を刹那で燃やしてそれ以降、妙に俺に懐いてきていつの間にか父と呼ばれていた。その時からモンディアル姓から俺の前世からの名字である奈央崎姓を名乗っている。

そしてもう一人の子がこの子、

「おとさん、おとさん、ミッドに着いたらいっぱい遊ぼうねっ！  
遊園地行ったり、有名なデートスポット巡りしたり！ わあ〜早く  
着かないかなあ」

「あれ？途中までは良かったんだけど、何故にデートスポット巡りがあるの？」

「キャツ　もう〜おとさん！そういう事を女の子に聞いちゃだめなんだよ？そこは」そうだね、キャロとデートに行くの楽しみにしてるね』ぐらいの甲斐性を見せてくれなきゃ〜」

「いやいや、娘相手にそんなこと言う父親がいたらまずいだろ。  
世間的な意味でも」

若干思考がおませな女の子、この子はキャロ・奈央崎。エリオの時と同様に貨物船に乗りこんだ時に行った世界で出会った子で、何でもルルシエという一族の中でもかなり危険な力を持っているからという理由で放逐されてしまったところではったり出くわし、歳の近いエリオという存在のお蔭で割とすぐに打ち解けてくれた。この子は自分の力を恐れていて、そのせいで人と距離を置こうとしたり一緒に旅をするようになった当初は他人行儀な姿勢のままだったが、子供のうちはやっぱり我儘を言ったり大人に甘えるべきとい

う持論を持つ俺としてはその考えをする事が気に喰わなかったので、必死で説得して、

「俺はさ、例えどんなにキャロの力が危険だったとしても離れたり嫌ったりしない。当然だろ？だってもう俺達は家族なんだ、一緒にいることなんて当たり前」

の一言で何とか今のようになりなってくれた。・・・  
・しかし、この台詞。よくよく考えると自分でもようこんなクサイこと言えたなと感心する、しかも何気に告白っぽいしね。この先何があるうとも絶対に口外したくない秘密だ。

「……………で、何故かこう面倒な事に巻き込まれると、最近なんかめつきり不幸な出来事に遭遇する確率がってね？」

「あはは……（汗）たしかに最近よく旅先で見かけるようになってたよね、このロボット」

「エリオ君！そんなこと言ってる暇があるならこれ片付けるの休まないで！おとさんも！」

「イエス、ママ、アイ！」

ミッドチルダに到着した途端、俺達を出迎えてくれたのは視界を埋めつくさんばかりに現れたロボット達だ。以前遺跡のような場所でこいつ等を壊して以来、ちよくちよく付きまとわれるようになってしまった。蜂を殺したら仲間がやってくる的なのだろうか？とかくどの世界に行っても湧いてくるので行く先々でこいつ等を壊しているうちに、我が子たちはメキメキと強くなってしまった。

「もう、いい加減雑魚ばかりで飽きるよ。こいつ等機械のク

セに以上に装甲薄いんだもん。何か魔力に干渉する結果みたいなものを出してるみたいだけど、体内で魔力を流している分には干渉されないみたいだし、僕が使ってるのって魔法じゃないしね。それ！  
式の型！ 龍！」

「確かにね、AMFっていったかな？AAA級の結界魔法だったと思うけど、これって魔導具には何の影響も無いもんね。・・・  
・全く、私とおさんのデートの邪魔するなんて…………纏めて薙ぎ払ってやるんだから！龍魂召喚！！フリードッ！五分で片付けよ！！！」

「ゴアアアアアア！！！」

「…………皆遅いよつで、お父さんは嬉しい…………ておおっと、あぶねえなつと…………ほい、崩」

エリオは鋼金暗器を器用に使いこなして、身体には常に電気変換した魔力を流して身体強化を行っている。キヤロは自分の力への恐怖心が拭えたおかげか、フリードを元の姿に戻すことができるようになったって、最近は龍騎召喚といったか、ヴォルテールという目茶苦茶強そうなドラゴンも召喚できるようになっている。…………ぶっちゃけこの二人ならそこらの魔導師程度なら問題無く勝

てるのでは？そう思うこともある今日この頃。

……結果、キヤロは五分とか言っていたが、三人＋一匹の錬度が日増しに増えていつてるおかげで三分程度でカタが付いた。

今回は早かったなー、雑魚過ぎてつまんないー、全く余計な時間が……、と三人で思い思いの感想を述べあっていると、空から痛い子が降って来た。

「ちょっと！？何で初対面の人にそんな辛辣なこと言われなきゃいけないんですか!？」

「人の心を読むなよ。あとな？痛い子発言に関してだけど、多分あなたは俺と同じ年ぐらいでしょ?？」

「はい？まああ、私一応19ですけど……あなたもそれぐらいですか?？」

「うん。それにしただって19でそのファンシー丸出しの格好……」



…あなたに羞恥心は無いんですか？うちの子の情操教育的に悪そうなのでそのバリアジャケット解除してくれませんか？」

空から降ってきた人だが、感じからしておそらく管理局員だろう。格好には些か疑問が残るがおそらくは悪い人ではないのだろう。ちやんとエリオ達を見つけると『私の格好……そんなにおかしいのかな…？』としよぼくれながらもバリアジャケットを解除して、制服っぽい服装になってくれたし。

「おかしいっか、あんな格好じゃまるで魔法少女ですよ？イイ歳こいてあれは無いでしょ、19にもなって魔法少女気どり？夢見がちな方なんですな！」

「最後だけ爽やかに言っても他の言葉に棘がありすぎます！それに私は別に魔法少女だなんて思っている訳じゃありません！それ以前にあなたたちは…」「高町隊長…！！」「ああ、二人とも、やっと来たね」

俺の意見に反論して何かを言おうとした時に、高町と呼ばれた女性の後方から二人の女の子がやってきた。片方は頭に鉢巻きを巻きたいかにも元気な感じがする女の子。もう片方はオレンジ色の髪をツインテールにした利発そうな子で、こちらにきてロボットの残骸

を見つけると驚いた様で、高町さんに何事かと尋ねていた。

「この数のガジェットがこうも短時間で……………これは隊長が？」

「ううん、私が来た時にはもうガジェットは全部破壊された状態だったよ。一気残らず全部」

「うっそー！ー！！？でも、この辺りで大規模な魔力反応は確認されて無かった筈ですよ？一体誰が……………」

鉢巻きっ娘が驚いていると残りの御二方がこちらを凝視してきた。その目に浮かんでいるのは疑念。厄介そうなので早々に退散しようとしたのだが、

「ちょっと待って下さい。このガジェットを倒したのはあなたですか？」

うん、エリオ達を頭数に入れてないのは二人が普段から自分の魔

力を隠しているから気づかれていないのかな？俺には欠片も魔力は無いし、相手も魔導師ならそれぐらいわかってるだろうけど……

……

適当なこと言って誤魔化そうとしようとして口を開いた時、キャロがやっちゃってくれました。

「そうですね！このロボットは全部私たちで片付けたんです！おとさんが43機、エリオ君が38機、私とフリードで34機壊したんです！二人共生身でもすっごく強いんですよっ！！」

「「キャロのバカあああああああああああああああああああ

！！！！！！！！」

何言ってくれてんのこの子！？面倒だから逃げようと思っていたのに！それはエリオも同じだったらしく二人して思いつきりシャウトしたのだが、肝心のキャロはその意味を理解していないのか、えっへんという感じで高町さん達に胸を張っている。その様は可愛い一言なのだが、生憎と他の三名の視線がこちらに釘付けになってしまったので親馬鹿してる暇は無かった。



「やかしいわ！？第一、模擬戦なんぞしなくともシユミレーションでさつき戦ってみせたるうが！！これ以上追いまわすってんなら魔導師の一般人への魔法使用で訴えんぞコラアアア！！！」

「「だつたらこつちは無断の次元艦搭乗の罪でしょっ引くが／けど？」」

「汚いっ！さすが管理局員汚い！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・管理局でも指折りの戦闘狂に何度も模擬戦を挑まれたり、

「だああああかああああああああ、うちの子たちを管理局にやる気は毛頭無いっつてんだろぅが腹黒チビ狸がああああ！！！」

「何やと！？そつちこそイイ歳こいて無職でニートの分際で偉そうなことぬかすなボケええええええええええ！！ おたくみたいな浮浪者のところに置いておくよりも、私らで引き取って立派な魔導師として育てる事の方が数倍マシって何べんもゆるゆるーがあああ

ああー!!」

「そうやって育てた子供を現場に連れていく気か？管理局つてのは子供にすらそんな労働させるほど腐ってんのか？だったら尚更渡せねえ、いくら優秀な魔導師つてだけで子供に危険な事を平気でやらせるような組織なんぞ信用できるか」

「子供にだって意志はある！その子供たちが自らの力で犯罪者を捕まえようつていうのをおたくに止める権利があるとでも？」

「意志……ねえ？ どうせ魔導師としての教育の過程でこういうこと言っただろ？ 『我ら管理局は次元世界の平和を守る正義の組織だあ』つてな、だから優秀な魔導師は須らく局に所属しないといけませんとか言ってるんじゃないやねえの？それって本人の意志云々の前にただの洗脳じゃねえか、そこに子供の意志があると？」

「……………チビ狸の執拗な勧誘を受けたりなど、やっぱり管理局なんかに来るんじゃないかった……そう思う俺なのであった。」

続かない

外伝 「次元浮浪者ぶらり旅？」（後書き）

命「もし本編の方でもこの子たちが出てきたらこんなキャラになんの？」

いいえー、今回はふと思いついたネタを文章化しただけなんで多分違ってくるんじゃないかと、そもそもSTS編までやるのかも未定ですし

それではまた次回の更新で！





## 第二十四話 「日常の終わり」

### S I D E 命

「新しい魔導具を作るだあ〜〜?」

「なんじゃい、その『ただの助平爺のクセに』的な視線は。本当じゃぞ?わしがちよちよいと本気を出せば新しい魔導具の一つや二つ、女子の乳を揉むよりも容易いわい」

「で、作ってやるから八神家女性陣の風呂を覗くのに協力しろと? ふざけんな、何でそんな致死率100%のミッションインポッシブルな事をやらなきゃいけないんだよ。新しい魔導具とかいらんからやめとけて、死ぬよ?」



「今何かすげー物騒な事考えとったじゃろ？背筋に氷柱を入れたような悪寒が走ったぞい（汗）」

「ソナナコトハナイヨ？僕はただ、虚空にはゲイに囲まれた素晴らしくこゆい世界に旅立ってもらいたいだけなんだから。精々背後に気を付けながら生きるがいいさ。すまんっ、わしが悪かった！」それが嫌なら大人しく覗きは止めとけよ？度々老人が死にかける様なんて精神衛生上大変よろしくないんだから」

阿部さんのな人が大勢いるところの話をしたらローリング土下座をしながら謝ってきた。どうせ明日にはまた何かしらのセクハラをするのだろうが、俺ではこれが限界だ。

自分の尻が天元突破される様でも想像したのか、虚空は顔を真っ青にさせながらそれでも真面目な表情を作って話しかけてきた。

「おほん、冗談はこれぐらいにして、別に見返りとかじゃなくお主には新しい魔導具を授けようと思っていたんじゃない」

どうしてまたそんなことを？と尋ねてみた。すると虚空は、

「うん、なんつーか、久々に作ってみたくなった、みたいなの？  
てへっ」

「よし、キモいから二丁目に強制転移といこうか。はやて、影  
界玉で転移よろしく。またはシャマルさん転移魔法でこの爺をゲ  
イの巣窟に〜」

すると虚空は今度はトリプルアクセル土下座を決めてきた。身体  
能力すげーなオイと思っていたら泣きそうな顔で許して許してと懇  
願されたので、これが最後の猶予だからな？と念を入れておいた。

「お主最近老人愛護精神に欠けておらんか？・・・それは後々  
語り合う事としてじゃ、まあ理由としては孫に玩具を与えるナイス  
シルバー的な理由じゃな、うんうん」

エロの権化が全国のシルバー世代の皆さんに対して激しく失礼な  
事を言っていた気がするが、貰えるのなら貰っところと思いい頼んで  
みたのだが、新しく作ってやる代わりに……

「新しく作るのにあたって必要なものがあつての。それを渡してくれんかの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・アーケルのパンツなら持つてないよ？」

「やめてくんない！？わしだつてたまにはマジで話すから！エロい事抜きで話しできるから！ だからそんな信じられないモノ見るような目で見るのやめてくんない！！？」

「冗談だつて（二割ほどだけ）。じゃあ何が必要なんだよ？」

「それなんじゃがな、今所持している魔導具、全部渡すんじゃ」

HA？

「新しく魔導具を作るためにそれらを一度溶かしてから、新しい

材料にするんじゃ。じゃから閻水、鋼金暗器、神慮伸刀、嘴王、帝  
釈廻天、飛斬羽、夢幻、その他諸々全部よこせい」

……その後駄々をこねた俺だったが、火竜全員に止められ  
てしまい結局全部の魔導具をとられてしまい、唯一心臓として機能  
している血種だけを残すのみとなってしまうた。

「安心せい、これらを使ってできるだけ覗きに使えるERROアイ  
テムを作ってみせるぞい、おっひよっひよ」

……渡した事を激しく後悔しそうになる言葉を残し  
て虚空は何処かへと消えてしまった。願わくは、あの爺により多く  
の災難と男難が有らん事を……掘られてしまえコンチキショー

「ところで虚空、ほんとのところはとうゆう理由なのですか？  
あなただって気づいているのでしょうか？　ずっとこちらを監視して  
いる者がいることを。だというのに命の戦力を今の状態で削ぐのは  
賢明な判断とは言えないのでは……………」

「それぐらいわかつとる。しかしな、どうにも胸騒ぎがしての、  
今の命でさえも手も足も出ない状況が訪れそうな予感が……………」  
「そうなった場合、あやつの事じゃ、どんなに勝算が無かるうが  
恐怖を感じようが身内に害が及ぶようなことがあれば自分の命すら  
投げ出しかねん」

「ですが……………今の命は私たちの力も十全に使えますし、魔導師  
についても大抵の相手なら後れを取る……………」

「正面から来る相手ならば、な。それが奇襲不意打ち裏切り人質  
を取られる、正攻法以外の方法だって取られるやもしれん。その場  
合、あやつは間違いなく手も足も出せなくなるじゃろうて。だから  
こそ、最悪の状況を想定して少しでも命の力となりうるような、命



専用の魔導具を用意しておこうと思つての」

「そうですね……、ならば私はなるべくならそのようなことにならないことを祈っておくでしょう。あなたに変な魔導具を渡されて命が困ってしまうのも大変そうですね」

最後の言葉を冗談めかして笑う崩。しかし、悪い予感というものは総じて的中するものである。……そのほとんどが想定されたものの上を行く形で……

それは、八神はやてが倒れたことから始まった一つの悲劇の始まりを予感したものだっただのかもしれない。。。。

## 第二十四話 「日常の終わり」(後書き)

命「うううううう、魔導具があ”あ”あああああああ」

まあまあ、オリジナルの物を作ってもらえる訳なんですし、いいじゃないませんか

命「・・・それってもうどついつ物が考えてんのか？」

まあ、三種類ほどを考えています。鉄丸のように服用するものと、後の二つはもうちょい考え(厨二な妄想)をまとめてからですかね。

それではまた次回の更新で！

第二十五話 「悲劇の始まり」(決意) (前書き)

ドラゴンボール〇って、別段昔のモノと変わらないような気がするのは作者だけ？

焰「伏字の意味がなーーーーー!!!」

……ご覧の通り、うちでの焰さんのポジはシッコミです。

それでは本編をどうぞ！

第二十五話 「悲劇の始まり 〱決意〱」

S I D E 命

「それでは皆さん、帰りには気を付けてくださいねー！それじゃ、さようなら」

「……………なら……………！！」  
「……………！！」

「それじゃ、私たちはこれから塾だけど、アンタ達はそのまま帰るの？」

「うーんとね、私とカグラはお夕飯の材料を買って帰らなきゃ

いけないから先に帰るけど……」

「私も今日は華道の先生が久しぶりに来るから迎えがきてるし……」

「……わかったから、お前たちの気持ちは何となくわかったからとりあえずその『一人で帰るなんて寂しそう』みたいな顔すんのやめてくんない？泣きそうになるんだけど、むしろその視線で」

「じゃ、じゃあユーノ君と一緒に帰ってあげれば……！」

「ごめんねなのは。僕も用事があるから方向が違うミコトと帰るのはちょっと……」

ちよつととか言いつつ本当は俺と二人で帰りたくはないのだろう。少しは刺々しさも無くなったと思っていたのだが、今度は恋敵として見られているため今のところの俺はユーノにとっては敵でしかないのだ。以前のような暴走が無いだけマシなだけどね……

まあ最近はこうして一人になれる事が滅多になかったので（今でも体には火竜がいるが）たまにはこんなのもいいかなと思ひ、未だ渋る四人？を宥めずかしてさっさと帰路についた。

「うゝゝゝん。こうして一人になるのもたまには良いかなあゝ。さすがに毎日女子に囲まれていたらロリコンになりかねんしな」

『そういつて、実際は好きな人があの中に居たりしてゝ』

『ほ、本当ですかっ！？命っ！正直に話さないと痛い目に合ませますよ！ 具体的には朝稽古で私たち火竜を四対一で相手してもらいますよ！』

「死ぬよね！？それは明らかに俺への死刑宣告だよね！？・・・  
・落ち付けてば崩。別にアイツらの事は好きだけどそういう感情の好きとは違うモノだから」

心の中へと精神の一部を飛ばし、表面的にはただ無口に歩いてい

るだけに過ぎないが、内面では夕焼け色の世界で火竜と会話するという微妙に使えるスキルを会得しているので、一人だろぅがそこまでの寂しさは感じない。一人芝居のようだが、そこは一切気にしてはいけない。気にしたら負けだ。何に負けるかは知らないけど。

そうこうしてる間に家まであと十分とかならない位置に差し掛かった時にそれは起きた。

「でさあ……………ツツ!!!? 危ねエツ!!!」

突如として現れた魔力弾。数は少なかったものの、その分威力が底上げされたそれを間一髪で躲かし、さらに追尾してきたものを焔を使って叩き落として辺りを見渡す。

「ほう、今のを避けきるか。やはり、貴様は危険な存在のようだ……………」

「あアン!? お前かいきなり魔法ぶつ放してきやがったのは!! しかも殺傷設定って殺す気満々じゃねえか!!!」

前触れもなく目の前に現れたのは仮面を付けた男。転移魔法かなんかだろうか、一切気配の類をかんじられなかったぞ今の。

「貴様の存在は我々の計画には必要ないのでな……………ここで死んで貰うっ!!」

その声を合図にこちらに疾走してきた仮面男。

「真正面からとか……………舐めてない？ 甘くみてる足下掬われるよ?……………ほらっ!!」

「何っ!?!」

バカ正直に突っ込んでくるとか、やっぱり魔導師って輩はどうしても非魔導師を甘く見る傾向でもあるのかな?

先の問答の間に地面に埋め込んでおいた崩を起爆させ、足元の地面を抉りだして粉塵を巻き上げる。その隙……………



「貰ったっ！ 弍弍イ！ 碎羽アアア！！」

俺は粉塵に紛れて碎羽で斬りかかるっ！ 多少は手加減しているが先に殺傷設定を使ってきたのはコイツだ。手足の一本ぐらいは貰わないと気が済まん。

そして、俺の鋭敏化された感覚で視界に捉えずとも気配で位置を特定し斬りつけようとしたその時、

「ゴフツ！！？！！？！！？」

背後から放たれた殺傷設定の魔力弾に胸を貫かれて、走り込んだ勢いをそのままに転がってしまい、その先に待ち構えていた仮面男に蹴りあげられてしまい、俺は抵抗もできないまま道路を転がっていく。

「ゲホツ、あ、ああ、ガフツ……………」

何かを喋ろうにも胸を貫かれた痛みのあまり声を出す事さえできない。荒い呼吸を続けていた俺だったが、相手がまだ戦える状況である今、下手に寝転がってはいけないので立ちあがろうとするも体に力が入らない。傷口を血種の力で血を固めて無理矢理塞いでいるが傷が治療できていく訳でもなく、また出血の量が半端無かったので固め損ねた血が大量に溢れていた。

「ふん、他愛もない。所詮危険といえども子供は子供、ちょっとフェイントをかければすぐに引つ掛かる」

「まあ、先程の地面を爆裂させた手際の良さは認めるが、敗因は敵が一人だと思い込んでいた事」だ。そのまま死ぬが良い」

「（ふ、二人いた……のか……よ……）」

振り向くとそこには”二人”仮面の男が立っていた。すなわち、先に突っ込んできた奴は囷、本命は完璧に油断していた俺の背後からの攻撃か……ッ！

二人は俺の出血量が致死量であると判断し、そのまま転移魔法の

光に包まれながら消えていった。残されたのは血まみれの俺だけ。  
・  
・  
・  
ちいーーーーーっつとやべえかも・

『命君ッ！！急いで私を呼んで！ 私の力なら傷を塞ぐ事が出来るからっ！！』

内面より聞こえてきた柳の悲痛な叫び。俺は血が足りなくなり震える指を左手で抑えながら何とか印を描き呼びだす事に成功した。実際、今まで呼びだせなかったのだがどうやら死の淵に立った今、火事場のくそ力なるものでも発動したのかもしれない。

「あ……………か……………」

『後の事は任せた』と伝えようとしたのだが、口がうまくいって動いてくれず、自分でも不思議なぐらい痛みを感じないまま俺は意識を手放した……………

S I D E O U T

SIDE 風花

「ねえ!?! どういう事!?!? どうして命君がこんな目に!?!?」

「落ちついて風花ちゃん。大丈夫、ちゃんと柳ちゃんが治癒してくれたおかげで命の方には別状はないわ」

「だからって!?! ..... だからってどうしてこんな.....」

家に帰った後しばらくした後のこと、アークルさんからの電話よくとママに呼ばれて電話に出ると、アークルさんの口から聞こえてきたのは命君が大怪我をして病院に緊急搬送されたという信じられないものだった。

急いで病院に駆けつけるとそこには既に手術室の前で泣きながら名前を呼び続ける神楽ちゃん、すずかちゃんとなのはちゃんが震え

ているのを抱きしめながら大丈夫と諭しているアリサちゃん、八神家のみんなもじっとしてはいるが気が気でないのだろう、特にはやてちゃんや雪而さんは泣きだしそうになるのを必死で堪えるように口を真一文字に結び、縋りつくような視線を手術室の扉に送っている。

その光景を目の当たりにし、漸く事態を真の意味で理解できた私は思わずアークルさんに当たってしまい、一応命に別状はないとのことだが、それでも予断のならない状況であるのは変わらないらしい。

その後何とか落ち着こうとしているときに、クロノさんとフェイトちゃんとユーノが駆けつけてきた。

「すまない、少しミコトの襲われた現場の検証に手間取った。ところどころ……？」

「ええ、命ちゃんなら今はまだ手術室よ。一応応急処置はしていたみたいだから大丈夫だとは思っただけど………」

「そうか………」

そういつてクロノさんは一度手術室の方に目を向けると「死ぬなよ…」と小さく呟いていた。だけど、今の私にはさっきの言葉のなかでどうしても聞き逃せない単語があった。

「……クロノさん、襲われたって、一体どういことですか？」

先程まで必死で落ち着こうとしていたことが馬鹿らしく思える程、今の自分が冷静になっていくのがわかる。いや、これは最早冷静なわけではない。

冷たいものというのは冷たくなるほどに熱く感じるものと聞く。それは低温火傷のようなもので、つまりは冷たくなればなるほど、それは熱を持ったものと変わらない現象を起こす。

今の私はまさしくそれだろう。あまりの怒りで逆に冷静にならざるを得ないのだ。真に冷たいものは炎よりも熱い。

「ああ。僕があの場合に駆けつけたのは、そこで結界の張られた気配がしたからだ。到着したときには既にミコトは血まみれになって倒れていて、その場には僅かにだが魔力反応が検知できた。そして

火竜の話聞いたところ相手は二人、不意打ちで殺傷設定の魔法攻撃を行い胸を貫き助からないと判断した後転移魔法で消えたそうだが、巧妙にジャミングされていた魔法だったみたいで追跡することができなかった。本当にすまない、もっと早く気が付いていれば……ッ  
「！」

そう言っただけクロノさんは壁を思いつき殴り付けた。握った手から血が滴っていてその悔しさが窺える。私の知らない二カ月間、この二人はコンビのように仕事をしてきたそうなので、お互いの事を親友だと思っているらしい。それだけに今回の件はその親友が殺されたのに何もできなかった事が相当に悔しいのだ。

許さない

クロノさんの話を聞き他の人達も怒りを顕していたけど、私と神楽ちゃんだけは全く違う表情をしていた。

多分、この中で最も彼に依存して惹かれている私たちだからこそこの感情を共有しあえる。

自分の、他の何を全て投げうったとしてもかまわないと思える存在を消されかけた。しかも自分たちには何もすることができなかった。

絶対に、許さない

それは誓いであり、呪詛であり、戒めだ。

何もできなかった自分が許せないのなら、決して傷つけさせないようにだれよりも強くなってみせよう。

傷つけた相手が許せないのなら、どんな手を使っても、どんな状態になろうとも、ソイツに復讐してみせよう。

今度こそ、大事な彼を守るよう、この事を忘れぬよう生涯胸の中に刻みつけよう。

言葉を交わさなくともわかる。今私たちは全く同じ誓いを、呪詛を、戒めを、自らの心に刻んだのだ。

ここに、私、嵐山風花と白妙神楽は生涯違わないと誓った約束を



刻み、未だ手術中である彼を待ち続けるのであった。。。

第二十五話 「悲劇の始まり」 〈決意〉 「（後書き）」

さて、これからはしばらくは主人公が戦線離脱！

次回からは二大ヒロイン視点でのA、S編がいよいよ……！

は・す「私たちはヒロインじゃあらへんの／＼なの………？」「

い、いやですね？ここは依存度がMaxの二人の方がシリアス書きやすいですし、すずかちゃんはまだ魔法の事は知らないですし、はやてちゃんは原作A、Sの主人公だからここは我慢してもらえないかな？なんて……

……二人が怖いので今回はここまでっ！それではまた次回で！

第二十六話 「守るべき者のために」(前書き)

はい、今回のお話は今までに比べると少し短くなっております。

墨「それはあなたのやる気が無くなったから？」

チガああああああうっっ!!

……再試が決まったのでテンションが駄々下がりで……

それでも息抜きと現実からの逃避のために小説は書くんですけどね  
!

第二十六話 「守るべき者のために」

S I D E 風花

・・・命君の手術は無事終わって何とか一命を取り留めたようだった。だけど、胸を貫かれた痕だけは消すことが出来ない傷跡となっていて、心臓付近の胸から背中まで貫通した痕には本来の肌色とは違うものへと変貌していた。

意識こそ戻っていないけど精神リンクしているアークルさんが確かめてみると、どうやら火竜のいる内面世界の深層で何かをしているそうなのだが、命君の了承無しではユニゾンすることができないアークルさんにはそれ以上の事はわからなかった。

それでも彼が無事に生きていてくれて本当に良かったと心の底から安堵する。もしもいなくなってしまうたら………

何度も浮かんできた嫌な想像を振り払っても拭いきれなかったものだっただけに、私はその報告を聞いて緊張の糸が途切れてそのま

ま病室で寝込んでしまった。

その時の夢は一緒に遊んでいた命君がいきなり背後から襲ってきた黒いナニカに飲み込まれるという悪夢以外の何物でもなく、私は何もできずにただそれを見て泣き叫ぶことしかできなかった……………

「うわあああああああああ！！！！・・・はあ、はあ、今の……………夢……………」

最悪の目覚めだった。

よりによって守ると誓った次の日の夢でこんなものを見せられる事になるなんて……………  
大分治って来たとは思っていたが、虐められていた頃の、物事を嫌な方向に考える癖がまた表面にでてきてしまったようだ。

「大丈夫。今度こそ、絶対に……………」

病室で眠り続ける命君の頬を撫でながら自分にそう言い聞かせた。守らなくっちゃいけない、この人だけは絶対に失いたくない、例え自分の身がどうなっても彼だけは、命君だけは……

その後が続々と他の人達も目を覚ます中、急にはやてちゃんの様子がおかしくなった。

「……まだ眠い……ZZ、………ツツ!?!?」

「はやてっ!?!?」

いきなり叫び出したヴィータちゃんに何事かを聞こうとしたとき、視界には胸を抑えて苦悶の表情を浮かべていたはやてちゃんが映った……

それから三十

分ほどしてから、はやてちゃんは何とか体調を整ったのか「ごめんな皆、みこっちゃんがこんな時に……」と少し申し訳なさそうに謝ってきた。

その時に、シグナムさんたちが示し合わせたように病室から出ていった後、念話で病院のロビーまで来るようにと言われて、最後に命君とその隣のベットで安静にしているはやてちゃんに何か飲み物買ってくるねとだけ言ってその場を後にした。

S I D E O U T

S I D E シグナム

とっつとっつ恐れていた事

態になってしまった……

こうなる事は予測が

ついていた筈なのにッ！

「落ち着いてシグナム。今焦る気持ちもわかるけど、それだけじゃはやてちゃんも助けられないわ」

「しかしッ！今回の主の不調は明らかに我らのせいなんだぞッ！！

今回、主が倒れた原因は我ら闇の書の存在のせいだ。蒐集行為を行っていないために、未だリンカーコアが未発達な主には我らヴォルケンリッター全員分の魔力供給は負担が大き過ぎるのだ。

主の体が不自由なもの、足りない魔力を生命力で補おうとする闇の書の一種の防衛反応が発動しているためだ。従来であれば蒐集した魔力を用いて供給をしていたので、いくら主の魔力量が桁はずれのものだとしてもいつかは無理が出てしまう。それが下半身が不随



である理由であり、倒れたのもそのせいだ。

「・・・シグナムさん、はやてちゃんを助けたかったら蒐集するしかない。そういう事ですか？」

それまで閉口していた嵐山が確認するような口調で訊ねてきた。蒐集して、闇の書を完成させれば莫大な力が得られる。それを利用すれば主の病を治すことは可能だろう。だが……

「だが、我らは主に蒐集行為を止められている身、一体どうすれば……」

人に迷惑をかけてはいけない、最初主に蒐集行為を勧めたときに言われた言葉だ。騎士として主の命に背く事は……

「なら、人じゃなければ問題はありませんよね？ 確か命君がアースラにいた間魔力を持った生き物と戦ってたって言ってたんで、そいつらから蒐集すればいいんじゃないですか？ そうすれば犯罪行為としても咎められないし、例え捕まっても相手を殺す訳じゃないんだから罪だって軽く済む筈ですし」

「！　そうかつ！　それならばやての約束を破ることも無いし、助けることだって！！」

「うん、一応私にも魔力はあるみたいだから蒐集してくれて構わないし、いざとなったらなのはちゃん……は駄目か、どうせユーノ辺りがいちゃもんつけてきてまたロストロギアがどうこうって五月蠅いだろうし、管理局の人にもばれたらいけないから神楽ちゃんとかにも内緒にしないと……」

そういつて嵐山はいくつかの注意点を挙げつつも蒐集に向けての具体案をみなと話しあっていた。みなとについても他はシャマルと師匠ぐらいのもので、私とヴィータは蚊帳の外だった。……別に戦闘しかできないとかじゃないからなっ！？　将としてまとまった意見を聞き確認するために一歩引いている訳であって、話についていけない訳ではないっ！

「シグナム………言い訳したって皆お前が戦闘以外じゃあまり役に立たないってことぐらい知ってたんだし、氣い落とすなよ」

「っ、うるさいっ!」

……その後話し合い（結局参加出来ず）が終わり、二人二組でそれぞれ無人世界での蒐集することが決められ、メンバーはその時々で組み替えたり体調を鑑みながら考えていくことで話はまとまったようだ。

……その時になって初めて私が会話にいない事に気付いた師匠とシャマルが慌てていたが、私と同じくハブラれていた筈のヴィータの一言に傷ついた私は体育座りでの字を書いていたため、二人の慰めるような言葉や謝罪は一切聞こえてこなかった。……  
……グスンっ（涙）

第二十六話 「守るべき者のために」 (後書き)

シヤマル「なんか最後のシグナムのせいでシリアスな前半が一気にシリアルになっちゃったような…… (汗)」

私も書いてて気づいたのですが、凜々しい彼女って書くのが難しいんですよ

これも私の偏見ですかね。

ヴィータ「将があんなんでいいのか？」

大丈夫！戦闘ではちゃんとカッコ良く書けたらいいよね！

シヤ・ヴィ「そこは言い切ってくださいノれよ……！」

すみません……

それではまた次回！

## 第二十七話 「乙女たちの戦い」(前書き)

ひゃっはー再試再試再試再試再試再試再試再試あqwse drfgyふじ  
こーp:.....

砕羽「追試の勉強のあまり発狂してしまったか、なら今回は俺がま  
えh」

崩「それでは本編！ スタートですっ」

砕羽「貴様崩！何故俺の出番を！！？しかもキャラ違っぞ！！！」

崩「甘いですね砕羽。出番のために手段を問わない、それが私です  
！！！」

第二十七話 「乙女たちの戦い」

S I D E 神楽

「はあ~~~~~」

この日何度目の溜め息だったっけ？ もう数えるのも嫌になるぐらいついていたように思う。

それもこれもせ~~~~んぶみこと君が怪我したせいだ。いや、正確には襲われた、か…

今も現場に残留していた魔力素からどの術式が使われたのかを魔導の運用の専門家であるプレシアさんに調べてもらっている最中な

んだけど、

「ふふふ……………私の実験材料……………いや違う、フェイトのお友達に手を出すなんて……………これは私に対する挑戦状と見たわっ！」

「母さん、馬鹿なこと言ってないでさっさと術式の特定済ましちやいなよ」

「そうですねよプレシア。あなたに対しての挑戦状で何故彼が襲われないといけないんですか……………  
そもそも魔法関係者であなただに喧嘩売ろうなんてするのは後にも先にも存在しませんよ。誰も怖くてあなたに近寄らないじゃないですか」

「うう、アリシアとリニスが最近冷たいわあ〜（シヨボーン）  
後でフェイトと一緒に風呂入って癒されよう、うん、そうしよう」

……………正直、頼る人間違ったかなー？って、思わなくは無  
いんだけど、腕は確かだから困るんだよねー。何とかと天才は紙一  
重って、本当の事なんだね。

ちよくちよく思考が暴走するプレシアさんの扱いをマスターしている二人が手綱も握っているのではなんとか作業の方も順調のようだ。

「ところでさあ、あなたも管理局員ならあつちの仕事とかあるんじゃないの？ほら、最近無人世界で出没するっていう謎の魔導師のことか」

「そんなものはクロノ執務官にでも任せておけばいいんです！私の元々の任務はみこと君の周辺の監視と調査です。だからこうやって襲撃犯を特定してとっ捕まえて市中を裸で引き摺り回してから一生モノのトラウマを植え付けてやるんですよっ私は！！」

声高々に叫ぶ私を見てちよっと引いてるアリシアさん。

しか〜し！ そんなのは知ったこっちゃんないのですよ！ よりにもよって私の大事な人を傷つけてあまつさえ殺そうとしたその所業！！万回、億回斬っても私の怒りは収まらない。みこと君と同じ目に合わせてやらなければ気が狂いそうになるのだから、死なないだけでもこちらの温情をくみ取って欲しい。



絶対にとっ捕まえて、豚のような悲鳴を  
あげさせてやるわ。クッククク……………

「ねえリニス。何かあの子からどす黒い瘴気が漂い始めているん  
だけど……………（汗）」

「あれは……………ッ!?プレシアのマッド状態の時よりもお酷い  
瘴気!？」

……………何か失礼なことを言われているようだけど、復讐の殺  
り方を考えてテンションが天辺入った状態の私には聞き取れなかつ  
た。

S I D E O U T

SIDE 風花

「いくよっ！ ヴィータちゃん！！」

「ちょ、ちょっと休憩はさませ」

「いくよー！ 鎌融ッ！！」

今回の蒐集を終えて、転送されるまで暇な時間ができたのでヴィー  
ーたちちゃんとの特訓中。

今は少しでも強くなっておきたい。まだ命君が生きている以上、  
また襲われる可能性も否めない。そんなときに今のままの私だった  
らおそろしく、守ってあげられない…

もっと強くないと……！

最近はずっと八神家の皆さんに頼んで毎日模擬戦の相手をしてもらっている。雪而さんは私が無理をしているのではと心配してくれているけど……

「（駄目だ！こんなんじゃない……ッ！）」

私はまだまだ弱い。最近、単身じゃあなのはちゃんに勝つのも危なくなってきた。彼女は運動神経が絶望的な代わりなのか、魔法に関するセンスはかなりのもので、シグナムさんでさえその才能の非常識さに舌を巻いている。

一度、模擬戦の最中に大破してしまったレイジングハートを雪而さんの何でも技術とシャマルさんが持つベルカ式のデバイスの基礎知識を合わせて新しくなった『レイジングハート・エクセリオン』。

カートリッジシステムを装備したなのはちゃんは、前から堅かった防御がより一層堅くなり、誘導弾や砲撃魔法もパワーアップして、今では私との戦績も7：3だったのが五分五分になってきて

いる。

空から魔力弾で牽制、それに対処してようものならデイバインバスター、しかもこちらの攻撃のほとんどが防がれる。風塊などの枝技を使えば破れないことも無いけど、それはまだ私の制御が未熟なので白ちゃんが使わせてくれない。結果として、空中要塞と化したのはちゃん相手にこちらはゲリラ戦法を取らざるを得ない。

でもそのおかげで段々と魔導師との戦いにおいての自分の弱点が見えてきた。

……それは“決定力不足”。

鎌鼬ではサークルプロテクションさえ傷つける事は難解で、疾だと中の人間まで斬り裂いてしまう。これが命君を襲った相手ならば容赦しなくて済むのだが、これは精神の負担や技の後の硬直が大きいためそう何度も連発できない。だからこそこうして模擬戦を繰り返し返して新技のヒントを探しだすしかない。

「だああああ、もっつ！ いい加減にしやがれっ！！」

気合一閃、ヴィータちゃんの奮うハンマーに吹き飛ばされ距離が空けられてしまい、そこからまた風を撃ちだすが、それもシールドで防がれて、

「ラケーテンツッ！！ ハンツツマアアアアアアアア！！」

ヴィータちゃん渾身の一撃の前に倒されてしまった。……  
また今回も何にも得られなかった……

気落ちしている私にヴィータちゃんが話しかけてきた。

「風花さあ〜、お前、焦ってる気持ちもわかるけど少しは冷静になれよ。ここ最近ずっと模擬戦続きで碌に休んでないだろ？さっきの一撃だって普段のコンディションなら躲わすなり、風守で防ぐなりしてただろ？それができないほど疲れてんだよお前。今度の蒐集は空けとくからしっかり休んどけ」

「……ツッ！！……大丈夫だよ、さっきはちょっと油断してただけだしそれに」

「みことが何時狙われるかもわからないから少しでも強くならなきゃ、か？」

全くその通りだ。まさか、グイータちゃんに読まれていただなんて………そんなに余裕無さそうにしてたかな、私。

「お前の心配もわかる、けどな？アイツにはアークルがついてるし、勿論シグナムやシャルマルやザフィーラやじっちゃん、それにアタシだってついてんだ。病室にははやてもいる事だし、風花だってアイツの事守りたいんだろ？だったらアタシらも頼っていいんだぜ？」

グイータちゃんは照れくさそうにそう言ってくれた。

ははっ、そうだった

そうなのだ、命君には何も私だけしか味方がいない訳ではないの

だ。雪而さん、はやてちゃん、ヴィータちゃんにシグナムさん、シヤマルさんにザフィーラさん、こんなにも優しい家族がついている。

何も私だけが頑張る必要は無い。

みんなで守ればいい、ただそれだけのことにすら気付けなかったなんて……………

一人じゃない、その嬉しさがこみ上げてきて泣きだしてしまった私を見て慌てたようにヴィータちゃんが、

「あわわわわわ……………き、気にすんなよ!? さっき負けたからって落ち込まなくてもいいってば!! また次の模擬戦も付き合ってるからさ、風花が強くなるのを八神家が総出で手伝ってやる!!」

引き攣った笑顔でサムズアップしてくれる私よりも小さくて、それでも頼りになるお姉さん。本人には絶対に言わないけど、ここで感謝の言葉は言っておかないとね?

……………私は流れていた涙を拭って笑顔で返事をするのでした。

「うんっ！ありがとう！  
ヴィー  
タちゃん！！」



第二十七話 「乙女たちの戦い」(後書き)

はい、今回はぬこ達への復讐のために動き出した二人の一步でした。

フェイト「あ、元に戻ったんだ」

H A H A H A ! お嬢さん！ お酒の入った人間には嫌な事なんか記憶する能力なんて皆無なのですよ！！

なのは「でもそれってお酒が抜けたら一気に記憶が蘇るんじゃない？」

知らない！知らない！追試のほかにもレポートがあるなんて聞いてないもん！

それではまた次回いいいいいいいいいい！！！！！！

フェ・な「壊れた……………」

## 第二十八話 「優しい少女」(前書き)

最近、サブタイ考えるのも大変になってきた私です。

前のタイトルと被りそうになって何回やりなおしてきたことか・・・

すずか「それってネタが尽きてきたって事？」

まあ、基本的に話の骨子はできているので、サブタイはその話の中から私のインスピレーションでこうゆう感じかな？って勢いでつけてますし、ネタは尽きないんですけど語彙の貧弱さを実感させられますね(汗)



それに学校が終わるとすぐに帰っちゃってるので何があったのかもわかりません。でも、何でああなっているのかには心当たりがあります。

「(フェイトちゃん、やっぱり命君のあの怪我。只の事故ってわけじゃないんだね?)」

そう、二人がああなつたのは丁度命君が入院した頃からでした。ということは、二人が裏で何かをやっているとしたら私たち、もつと言えば魔法の事を知らないアリサちゃんやすずかちゃんに知られたくないことをやっているが考えられる。

やはりあの胸の怪我には魔法が関係している...? そう思いフェイトちゃんに念話で話しかけてみたのだけれど、

「(・・・ゴメンなのは。これはなのはに言う訳にはいかないことなんだ)」

「(どうしてっ!?! 私だって魔法の事なら無関係じゃない筈だよ...!)」

「(ならばのはは『ミコトの怪我の原因が殺傷設定の魔法を受け  
たせい』だって言ったらどうするの?)」

その時私は思わず内心の驚きを顔に出しそうになってしまい、も  
うちよつとで動揺していることが二人にばれてしまうところでした。

殺傷設定。私が普段使っているのは非殺傷設定といって、これは  
対象に魔力のみのダメージを与えることで外傷をあたえること無く  
対象を無力化できるというもので、この設定の魔法には物理的干渉  
が出来ないのが特徴なのだが、殺傷設定はこの物理干渉をONの状  
態にして魔法に物理的な破壊力をもたらすことが可能なとても危険  
なものだとユーノ君に教わったことがあります。

そんな魔法で攻撃されたということは、それすなわち、真正正銘  
殺されかけたという事実そのものだという事。なんで命君が!?  
そんな私の内心を見透かすようなタイミングでフェイトちゃんが、

「(なのは、先に言っておくけど、今回の件についてあの二人は  
襲撃犯にミコトと同じ目に合わせてやるって息巻いているからあん  
な調子だけど、なのはにできる?“相手を傷つけてでも罰を与える  
覚悟”が)」

体が冷えていく。私はそんなに付き合いが長くないからよく知らないけど、それでも風花ちゃんも神楽ちゃんも優しい人なんだってことぐらいはわかってるつもりだった。

それがどうしたことだろう。二人は命君を襲った相手に全く同じ事をやり返そうとしているだなんて、絶対にそんなことはさせちゃいけない、二人に誰かを傷つけて欲しくなんかない！

「（どうして止めないの！？二人が誰かを傷つけちゃうかもしれないんだよ！？二人に言ってる）」

「（なのはに二人の何がわかるっていうの？）」

私の言葉を遮るようにフェイトちゃんの口から出てきたのは冷たい言葉。私はその意味を問い返そうとフェイトちゃんの方を見つめると、彼女は少し憤った表情のまま念話で、

「（私だってあの二人のことはまだ知らない事の方が多いし、理

解できてるなんて言うつもりは無いよ。でもね、二人がどれほどミコトの事を大切に想っているのかぐらいはわかっているつもりだよ

「（それぐらい私だって知ってるよ！二人が命君の事を大切に想っていることぐらいっ！）」

「（いいや、なのはには多分理解できていないと思う。試しに聞くけど、なのははミコトが傷つけられたって聞いてどう思ったの？）」

「（え？…それは…やっぱり許せないとは思っけど、けど！やっぱりだからって人を傷つけるなんて！）」

「（ほら、やっぱりわかっついていない。二人はね？ミコトが襲われたって聞かされた時に許せないと感じた。それはなのはと同じなのかもしれない。けどね、あの二人はそれが何よりも辛かったんだ。わかる？自分の何よりも大切な人が傷ついているのに何もできなかった悔しさが！絶望が！）」

念話に中の声の筈なのに、段々と感情が昂ぶってきているフェイトちゃんの声が大きくなっていつてそして、

「（なのはにはわからないよ。自分よりも大切な人が傷つけられた二人の事は。だって、本当に大切に想っていたのなら相手の事を気遣うようなことは絶対に言えないよ、少なくとも私はね。私だつてもし母さんや姉さん、アルフやりニスに傷つけられるようなことがあるのなら絶対に許してなんかやらない。なのはがそう言えるのは優しいからだろうけど、それだけじゃあ二人は止まらないよ、絶対）」

あまりの言葉に打ちのめされそうになった。

あの二人にとっての命君とは、それほどまでに大きな存在だったなんて、私と彼女たちとは感情の温度差が著しすぎる。少なくとも、私に二人を止めることなんてできない。フェイトちゃんがそう言っていることだけは理解できる。

「（なのはには辛いかもしれないけど、それでも二人を止めるなんて私にはできない。やるうとしていたことは確かに褒められるような事じゃないかもしれない。そうと知っていてそれでも二人は許せないんだよ、犯人を。だから、私は二人を止めない）」



最後にそれだけ言うと、フェイトちゃんは念話を切り上げてしばらく黙っていたことを不審に思っていたアリサちゃん達のフォローをしていた。

・・・私は一人取り残されたような思いをしながら、その様子を眺めることしかできなかった……

「やっぱり許せないのかな、自分よりも大切な人が傷つけられるって」

家に帰った後、一人ベットに寝転びながら今日のフェイトちゃんとの会話を思い出していた。

私にも大事な家族がいる。その人達が傷つけられると思うと、確かに許せないと思う。ただここで復讐を良しとできないのは、やっぱりそれだけ私が家族を大切に想っていなかったということになってしまふのだろうか。

「ううん、そんな訳ない。私にとってお父さんもお母さんもお姉ちゃんもお兄ちゃんもとっても大事な人達だもん。復讐はできないかもしれない、だからといって大切にしていない訳じゃない」

なのはは、人を傷つける行為自体を容認することに抵抗を感じている。それが幼い頃より良い子であろうと自らを律してきたせいなのか、無意識下での想いなのかはわからない。

それでも、人を傷つけないという思いは嘘偽りの無い彼女の本心からの想いだ。

だったら、高町なのは迷わない。己の本心を見つけた彼女は止まらない。輝く星に向かうように、自分の意志を貫くために、彼女も一歩を踏み出す。

「わかってくれないかもしれない、だけどこんな事を認めることなんてやっぱり私にはできないよ。それに命君が二人に復讐をして欲しいなんて望む筈がない。優しい二人にそんな事をして欲しいなんて思ったりしない。だからっ！」

少女は決意する。例え理解されずとも、優しい少女たちを止めるために。

「風花ちゃん……………神楽ちゃん……………」

## 第二十八話 「優しい少女」(後書き)

いよいよ原作主人公も動き出し、事態は私の手を離れて進行していく……！

アルフ「ダメじゃん！？アンタの手を離れたら誰がこの小説進めるのさ！？」

いや〜書いてるとキャラクターがあっちへ行ったり、こっちへ行ったりして文が思わぬ方向に行きがちで……

大まかな流れからは逸れていないけど、前後を繋げるのがしんどくてシンドクテ。

それでも事態は進みます！進むったら進むんです！

それではまた、次回の更新で！

第二十九話 「放たれる魔弾・動き出した計画」(前書き)

疲れる~~~~~……………

暑さ厳しい今日この頃、他の作者様はどのようにこの猛暑を乗り切  
つておられるのでしょうか？

私はクーパッド無しには執筆できない体たらくですよ(涙)

命「ほほ〜う。おのれは今も瀕死で意識の戻らない主人公さしおい  
て暢気にアイス棒なんぞ食べてんのか……………」

おわああああ！！？出てきたら駄目でしょう！！君は怪我していて  
意識が無いって設定なんだからっ！

命「俺にもアイスウウウツウウウウ！！」

暑さで頭がやられたかつ、それでは本編を……………ってえええ！！？やめて  
！？碎羽は……………

第二十九話 「放たれる魔弾・動き出した計画」

S I D E    ? ? ?

「で、その非魔導師の少年の方はどうなっている？」

「はい。致命傷を与えていた筈なんですけど、どうやらしぶとく生き残っているみたいですよ。・・・止めを刺してきた方が？」

「いや、それはいいだろう。おそらく闇の書の覚醒までには目を覚ますことも無いだろう。それよりも蒐集の方はどうなっている」

とある一室、そこには重苦しい雰囲気がいっぱい詰まっています、先の発言

のように殺害など物騒な言葉が出てくるあたりこの会話が平和的でないことだけは確かだろう。

「はい。騎士たちもようやく蒐集に本腰を入れたようですが、未だ魔導師からの蒐集は行っておらず、魔法生物のみからの蒐集しか行っておりません」

「ですが、協力者の少女の存在もあって効率の方も悪くない様子で、この星の暦でいうならば12月頃、その後半辺りには完成する見込みです」

全く同じ容姿の仮面の男二人の報告を聞き終えた壮年の男性は、大きく息を吐いた後、虚空を見つめながら呟く。それは話の中に出てきたあるロストロギアに対するもの、

「闇の書……。我が友の人生を狂わせたロストロギアであり、私のすべてを砕いた忌々しい存在よ……。私は決して貴様を許さない。例え罪無き人の犠牲があろうとも、貴様だけは絶対に……」

男は止まらない。幾人の犠牲を以ってしても止める事の敵わない

狂気を宿すその者は、不退転の決意を秘めて報告書に書かれている子供たちを眺めていた。その報告書の一部にはこう書かれていた。

『現在の闇の書の主 八神はやて

その関係者と思しき者は二名、老人一人と子供が一人。

そのうち、少年の方には未確認の能力が確認できたため、排除を試みるも失敗。けれど、重傷を負わせることに成功し、現在のところ警戒する必要性は皆無である。

老人の方には未確認だが、特に能力等を持っている様子は無いが、少年の例を考慮して早めの排除が望ましい』

男の命令を受けて、その使い魔たちは再び動き出す。

そして、その矛先はその少年達家族にとって柱とも言える存在へと向けられるのであった。



S I D E O U T

S I D E 雪而

「では、今日の蒐集に出かけてきますので、留守の事をお願いします  
ます師匠」

「うむ、今日の当番はシグナムさんとヴィータじゃったな。二人  
共、心配はいらないと思うが努々油断せぬようにな」

「わぁーってるって！アタシとシグナムならそんじょそこの怪  
物なんてへっちらだぜ！」

「ふふふ、あんまり無理しちゃ駄目よ？最近は風花ちゃんとの訓練が大分堪えてるんじゃない？模擬戦の後で息切れしてたじゃない」

「うっせー。風花だって頑張ってたからこんぐらいどうってことねえーよ。早くはやてにも良くなってもらってさっさと命が目を覚ますまでのんびりしてえだけだよ」

そう言っつて、シグナムさん達は無人世界へと転移していき、シヤマルさんとザフィーラは夕飯の買い物へと繰りだして行った。蒐集を始めてから丁度一カ月というところ、ページも半分程埋まっており順調ではあるのだが、

「（わしが蒐集に参加できればよかつたんじゃが……）」

神族としての制約がそれを許してくれない。本来の物語の流れに我らの力が介入するのはルール違反とされている。

つまり、今こうしている八神家の皆もこの物語の世界の中では登場人物、役者であり観客席からきたわしは異物でしかない。異物が

混入したことに對しての副作用というものが存在していて、命の怪我がそれにあたる。

本来であればわしにしか効力の無い【神罰】が下されたという事は、やつがわしの一部を使って体を構成しているためで、この物語からわしらは追い出されようとしている事に他ならない。

おそらく、命を襲った犯人もこの物語の中の登場人物であり、わしと命をこの世界から消すための目的が与えられているのだろう。そうなると次に襲われるのはわししかおらん。

元々わしは命の守護担当を外された時点で神格を失い、輪廻の輪の中に組み込まれること無く消滅をまつのみだった身なのだ。今さら死など怖くは無いのだが、わしらが介入したことによって生じた歪みが原因ではやてちゃんやシグナムさん達に何が起ころのかもわからない。家族としてこれを見過ごすことのできないわしは、他の家族には内緒である事を進めていた。

それは、命の精神世界を覗いた際に火竜に頼んでおいた“ある魔導具”の作成。以前虚空が新しく魔導具を作ると言ったのはわしが頼んだ事で、このような事態を想定しておいた上で、とある能力を付加する魔導具を作るのに、わしが作った命の想像の産物であった魔導具の中からわしの神族としての力を抽出し、それを一つのものに集めることでより能力を強化するために今までの魔導具すべてを材料とする必要があった。風花ちゃんとはやてちゃんが持つ物については数的にも命の持つものだけで事足りたのでそのまま渡してお

いた。

これではわしが消されるのを待つだけ。その、はずだったんじやがなあ、

「これでも千年近く生きてきたというのにおう。わしはどうやら、まだ死ぬ気にはなれんようじやて」

「何を訳のわからないことを………貴様はここで死ぬのだ」

前触れ無く現れた仮面の男。顔が仮面に隠れているが、殺気が溢れて来ていてどんな表情を浮かべているのかぐらいは容易に想像できる。

「まああ、一応はシグナムさんの師匠をやらせてもらっておる身、そう簡単には殺らせてはやらんぞ?」

死ぬのはいい。ただ、自分が居なくなっただ場合に残った八神家の皆、風花やなのは達、そして命がどうなってしまうのか、ある程度

想像がついてしまう。まだ早い。彼らが自立した精神を持つにはまだ若過ぎる。ここで自分が抜けようものなら、風花はより大きな傷を負うかもしれない、ヴォルケンリッターの皆が思いつめてしまうかもしれない、何よりも嫌なのは目を覚ました命の暴走。

自分の価値を低くみている癖にその何倍も家族や友人を大切にしようとする彼ならば、もし自分が殺された原因が己にあるものと判断した場合、間違い無く彼の心は壊れてしまう。

「（無駄に人の気持ちを汲もうとするくせに自分に向けられる好意とかは素直に受け取らんちうのに、つくづく手にかかる孫じゃよ、……命）」

命は、自分に寄せられている好意に気付かない程鈍感な男では無い。彼は彼女たちと自分の間に決して踏み越えてはいけない一線を引いている。彼女たちを大切であると認識し、その好意に気付いているがゆえに、

『自分なんかでは駄目だ。もつと他に素晴らしい出会いがある筈だ。彼女達は、あんなにも綺麗なんだから』

強くこう思ってしまう。彼女たちが持つ魅力に、自分という矮小な存在では荷が勝ち過ぎていると勝手に捉えているのである。

「（なんであぁなってしまったのか…。あぁ、あれかの）」

その理由はトラウマに起因する。『虐めを受ける自分イコール大した存在ではない自分』という公式が無意識のうちにこのような発想をもたらせてしまっているのだ。謙虚が美德だからといって、これではあまりに彼を想う少女たちが報われないだろう。

故に雪而は最後の手段を講じる。

自分と命の両方を存命させるための唯一の策を。

これには代償も多少必要ではあるのだが、

「まぁ、いいか」

「こう考えてしまえる辺り、やはりこの老人が少年の祖父である」



「死ねえ！ ブレイズカノンツツ！！」

「むっつ！？砲撃かっ」

「逃がさん！ ストラグルバインド！」

背後からの砲撃魔法を避けようと動いたその隙を寸分違わずに突いてきたもう一人の仮面の男。

本来であれば、この一撃で身体が消し飛ばされるのだから恐怖を浮かべる以外では気が狂うような場面である筈なのに、雪而はふっと、軽く鼻で笑うと。

「そうじゃな。これで漸くすべてが揃ったわい。老体に鞭打って頑張ったからのう、しばし休憩と行くかの、フォツフォツフォ」



あまりに暢気すぎる最期だった。

そう言った直後、雪而の居た場所には上半身を無くしその下も焼け爛れた肉塊が残るのみという惨状しか残っておらず、男達も雪而の笑いの意味するところがただの虚勢だと当りをつけてその場から撤退した。

・・・そう、これでいい。

体を失い精神体になった状態の雪而は確信する。

己の策の最後の締めが見事に成功したことを。今回の作戦最大の肝とは、自分の霊体を作ること、それが可能でありなおかつ敵にその存在を察知されないという部分が重要になっていて、今回、雪而はその賭けに見事勝利した。

「まあ、簡単な事情は手紙に書いて八神家の皆には伝える算段じやし、しばしの別れと思うとちと辛いが、これもまたみんなで暮らすため、わし自身の我儘のためじゃ」

流石に死んだようにみせる必要があつたので犯人相手には死んで見せたが、冷静さを欠かすことの無いように、ヴォルケンスにはある仕事を任せてある。これさえできればおそらく、奴らを出しぬき家族全員を助けることができる。闇の書を解析して初めて気づけたとある事実を皆に伝えて、自分の状態を伝えておいた手紙には、最後の締めの文章にこう書かれていた。

『親愛なる家族たち。これが今生の別れと嘆くこと勿れ。』

わし達は家族。例え肉体を失おうとも心は消えない、死してもなお残った者の心の中に生き続ける。

さすれば復讐など必要無い。

何故ならば、心が残っている以上、貴方達は何も失ってなどいないのだから。

神名 雪而』

……こうして賽は投げられた。後は主役を欠いた物語が終演に向けて進み続けるのみ。

その先に待つの果たして幸福か、それとも絶望か……

第二十九話 「放たれる魔弾・動き出した計画」(後書き)

シグナム「じじよおおおおおおおおお(滝涙)」

ヴィータ「じつぢゃあああああああん(滂沱の涙)」

・・・てへっ やりすぎちゃったんD A Z E

シ・ヴィ「ふざけるなあああああああ!」「」

待ってっ!?!ちゃんと手は打ってあるって本編でも描写が・

シ・ヴィ「問答無用!」「」

不味い!それでは今回はここまで!またじ

シグナム「紫電一閃ッ!」

ヴィータ「ギガントッ!シュラーーク!」「」

ザツツアオーバーキル!?!?!?

### 第三十話 「葛藤」(前書き)

とうとう三十話ですかあ。ここまで長かったなあー

命」でもまだA、S編終わりがちつとも見えてこないよな」

それは私も自覚しているのですが、どうしても心理描写がぐどくな  
ってしまって・・・

もったいなく短い語句でも心理描写できないかなー？

それはともかく、本編の方をどうぞ！

## 第三十話 「葛藤」

S I D E ヴィータ

蒐集から帰って来た後、家でアタシらを待っていたのはじつちやんの手紙だった。

それにはシグナムだって知らなかった闇の書の本当に名前と本来の使用法が書かれていて、自分はしばらく用事があるので命の精神世界に籠もっているので心配はいらないというような内容が書かれていた。それには今後のアタシ達の活動で気を付けておくことと、一人ひとりにアドバイスを残した文が綴られていた。

シグナムには戦闘中決して心を乱さず冷静でいるように心がける

事、シヤマルには料理する時にレシピに書かれている材料以外を使わないこと、ザフィーラには犬扱いされてもめげないで盾の守護獣としての矜持を忘れない事、そしてアタシには、

「『風花ちゃんや神楽ちゃん達が後戻りできないような事態になった場合にはわしや命の代わりに助けてやってほしい』・・・か。なんつーか、やっぱじっちゃんはじっちゃんなんだって感じがするよなこれ」

「ああそうだな。個人に書いている内容も真面目に書いてるのどうかも少し怪しいしな」

「本当ですよっ、私最近はお料理失敗しなくなってきたじゃないですか！全く失礼しちゃいます！」

「いや、シヤマルの場合未だに四割の確率で大当たりがあるだろうに」

「そーいやこの前それに当たったのってシグナムだったっけ？確かカルボナーラが・・・」



「・・・思い出させてくれるな。見た目はともかくどうして人を昏倒させられる料理が作れるのか、ある意味我らの中で最強なのはシヤマルかもしれないと本気で思ったぞ」

「うんづん」

「いいもんっ！おいしい料理作ってもみんなには食べさせてあげませんから！私一人で全部食べちゃいますっ！」

「そんなこと言うからシヤマルは近所の人達から『ふとましい』って呼ばれるんだよ、ちっとは運動した方がいいんじゃないの？」

「うづっ、ヴィータちゃんのバカあああああああああー！」

「・・・確かにじっちゃんは今居なくなっちゃったけど、不思議と寂しさは感じなかった。」

またいつか、それこそ命の怪我やはやてに罹っている呪いをさっさと解いたらまた会える気がする。だからアタシ達は暗くならず、これからも今まで通り蒐集を続けることができる。

そんな折、久しぶりに八神家のチャイムが鳴らされたので新聞の勧誘ならブツ飛ばそうとアイゼンを握りながら出ると、そこには、

「お〜う、高町にゃのはじゃねえーか。久しぶりだな、朝の訓練以外でこっちに遊びくんの」

「にゃ！？にゃのはじゃないよ、な・の・は！またそうやって私の名前間違えるー」

「だってお前の名前って噛みそうになるんだぜ？ 命なんてしょっちゅう・・・」

「命君は未だに間違えるの！？」

「『何かイイ渾名ねえかな』って模索してたぞ。にゃのは以外にもなのちゃんとか、砲撃撃つてるところから抜つてなのcannonとか、アタシの一押しはバインドしてからの容赦無い砲撃にちなんで白い悪魔なんだけど、どうだ？」

「私は連邦のモビルスーツじゃないよう、それに悪魔って女の子につける渾名にしては酷いと思うの!」

「え、小悪魔的な女の子ってモテるってこの前立ち読みした週刊誌で言ってたぞ?」

「その悪魔とヴィータちゃんの思ってる悪魔の間にはかけ離れた認識の齟齬があると思いますっ!」

一通り高町を弄つたので少しすつきりしていると、高町の方から恨みがましい視線を向けられて「いつか絶対お話して変な渾名つけるの止めさせるんだから……!」と呟いているのが聞こえた。

「……どうしてだろう、一瞬、背後に炎を従えた高町が見えただけど……。しかも何かすげー寒気を感じたんだが(汗)」

とりあえず先の悪寒は置いて今日はどうしたんだ？と尋ねると、  
気の抜けたさつきとは違い真剣な表情を作ると、

「ちょっと風花ちゃんとお話ししたくて・・・」

と言っていた。・・・風花、死ぬなよ……

S I D E  
O U T

S I D E  
風花

「お邪魔しまーす……ってあれ？なのはちゃん？」

「あつ……、風花ちゃん……」

一応今日の蒐集は終わっている時間だけど、少し様子が気になったので八神家にお邪魔してみたんだけど、そこで思わぬ珍客がいた。

「今日って確か塾じゃなかったっけ？どうしたの？」

「うん。塾はお休みさせてもらってね、今日は風花ちゃんとお話ししたいことがあるから」

……一瞬、なのはちゃんから異様に怖い雰囲気が顕れたと思っただけど、気のせいだったみたいだ。うんそうだ。だから背後から聞こえてくるゴゴゴ……！なんて音は幻聴なんだ！疲れてるんだな私

って。

私がないのはちゃんから発せられるオーラに吞まれている様子を遠巻きから眺める八神家の面々。助ける気は無いようだ。やっぱり我が身は可愛いものだよね。

軽く現実から目を背けた思考を展開していると、なのはちゃんが話を切りだしてきた。

「今日はね、風花ちゃんに命君の仇打ちを止めてもらうために来たの」

何だって？

「それ、どついつ意味？」

一瞬で沸点に達した怒りを抑えながら尋ねる。声に若干抑揚が無くなっているけどそれにも怯えずなのはちゃんは続ける。

「確かに命君を襲った犯人を許せない気持ちはわかるよ。でも、だからって風花ちゃんや神楽ちゃんが誰かを傷つけるなんて命君が望む筈無いよ！」

この子は何を言っているんだろう。では何か？命君を殺しかけた相手をみすみす見逃せとでも言いたいのか？…………ふざけんなよ

「風花ちゃんが優しい子だって知ってるんだから、そんな人に自分の復讐を任せるなんて命君が」

「黙れ」

その一言でなのはちゃんは沈黙して、周りの人たちも私の雰囲気  
に呑まれたのか息を飲む音が聞こえてくる。ああもう、何言っ  
たこの子は、まるで自分の意見が正しいみたいに言っ  
てさ。そんなことをアンタよりも近くにいた私がわからない訳無い  
だろう。それをアンタなんか語るなよ。

「言われなくたってそんな事とつくにわかってるんだよこっちは。だからって許せるのか？あんなに痛々しい傷跡を残されて、今だって意識が戻らないような状態で眠らされているっていうのに、そんな相手を許せと？復讐はいけない事だからヤメロ？ハンッ、私の気持ち何か知ったこっちゃんいなだね、なのはちゃんはさ」

「ち、違っよっ！私は復讐なんかしたって命君がよろ「黙れッツ！！」…………ツツ！？」

「知った風な口をきくなっ！お前なんか何がわかる！？大好きな人が傷つけられて、何もできなかったのに、私はその相手に仕返す事さえ許されないとでも！？ふざけんなっ！そんな事で私の気が収まるものか！何もできなかった！力を持っていても大切な一人守ることさえできなかった！お前なんか私の悔しさがわかってたまるかっ！！」

激昂。胸の内に溜まっていた負の感情がここにきて暴発してしまっただよりに溢れだした。

ああそうさ！言われなくたってわかってる！命君は私たちが復讐することなんて望まない、むしろ私を止めようとするのはちゃんに同調するだろう。だからといって自分の感情を制御することなどではしない。許せるものか、許してたまるもんか、絶対に、犯人



達に命君が味わった苦痛や恐怖を倍にして返してやる！

「なのはちゃんが言いたいことはわかったよ。でも、私は絶対に止まらない。死んでも復「バチンッ！」……………」

私の言葉を遮ったのは、今にも泣き出しそうな、いや、もう既に涙を流しながら私を叩いたなのはちゃんの手だった。

「このわからず屋っ！どうしてそんな事言うの！？自分が死んでもだなんて、それこそ絶対に認める訳が無いじゃない！！もっと自分を見てくれている人の事を考えてみなよ！それがどれだけ他の人達を傷つけることになるのか、そして風花ちゃんが復讐することによって一番誰が心を痛めるのかちゃんと考えたことがあるのっ！！？」

「……………五月蠅い」

私はその場にいる事が我慢できなくなってそのまま八神家を飛び出していた。

一心不乱に走り続ける私を見て周囲の人が驚いているようだけどそんな事は気にならない。私の胸の中にはなのはちゃん言葉がずつと残ったままだった。

— 一番誰が心を痛めるのか考えたことがあるの!?

彼女にそんな事を言われなくなっただけでわかってる。きっと命君は自分のせいで私や神楽ちゃんが危険な事をしようとしていると知ったら全力で止めようとするだろう。そして、止められなかった自分を悔やみ続ける。そんな人なのだ、神名命という男の子は。

「（教えてよ命君・・・私、どうすればいいの……？）」

答える声がある筈も無く、私はただただ走り続けるしかなかった。

・・・

### 第三十話 「葛藤」(後書き)

ふうふう、明後日の追試さえ乗り切れば後はビバ！サマーバケーションが私を待っている！

神楽「やっぱり夏ということで海とかキャンプとか行ったりするの？」

・・・い〜え〜。学校のボランティアに参加して一泊二日の夏祭り準備以外で外出する予定は無いですよ？あ、食糧の買い出しを忘れてました。

風花「不健康というか不健全過ぎない？それ」

いいんですよ！そうせ内気で友達も少なくて遊びに誘ってもらえなかっただけですから！

・・・あれ？おかしいや、目から塩水が溢れて来て止まらないぞ？

それでは次回の更新で！

ご意見ご感想ご指摘等あれば是非！

ハルノヲ喜ビシトシテ、ハニ。

第三十一話 「お久しぶりです主人公（仮）」（前書き）

追試のレポートが増やされた……この小説書きながらやったせいでやつつけ感丸出しだけどまっ、いつか。

命「良くないだろ。それに相変わらず（仮）取れないんだな俺」

うん。他の作品とかの主人公に比べて人格的に不安定だしね（私の  
実力不足ですが）

命「今、なんか変な事考えてなかった？」

いいえ（汗）それでは本編スタートです！

第三十一話 「お久しぶりです主人公（仮）」

S I D E  
神楽

皆さんこんにちは、この作品の真のヒロインこと神楽です。異議は認めません、風花ちゃんなんて目じゃないですっ。

……唐突にこんなことを言うのにも一応理由があるのです。

「オイイ！？誰が真のヒロインだってえ！？そんなの私に決まっているでしょーが！！」

「ふんっ！ファーストキスも済ませていない雛鳥など私の敵じゃないね！」

「したの！？命君とキスしたのっ！？なんて羨ましいッ！」

只今、風花ちゃんと誰が真のヒロインかを討論しているのですが、その場所がなんともおかしいですってこれが。

「で、軽く私の勝利が確定的に明らかだから話を元に戻すけど、さっきまで私たちはお互いの家にいた筈だよな？」

「決まって無いっ！……でもま、さらに言うなら私はついさっき寝たばかりの筈なんだけど……」

私たちはさっきまで自分たちの家で就寝していたのにいきなり目が覚めると、何故だかパジャマ姿の風花ちゃんがいて、場所が私の部屋ではなく黄昏色の広い空間の中にいた。

お互いに全くこうなってしまった事情もわからず、とりあえずデキトーに会話していたのだけど突如、

「おゝい、二人とも、こつちじゃ〜」

「」「雪而さん？」

そこにふわふわ浮いて登場してきた八神家のおじいちゃん。どうしてここに？というかここ何処？と二人で質問攻めをすると、一つずつ答えてくれた。

「まあまあ、とりあえずどうしてここにいるのかと聞かれたらわしがこの空間の中に二人を呼んだのであって、ここが何処かという問いの答えは“命の精神世界の深層”の一步手前の世界としか言いようがないのう」

はははー、何言ってるのかさっぱりだー（汗）



「ってことはここに命君の意識があるってことですか!？」

「何だっつてー!?!?!?」

全然話が分からなかった私だけど、風花ちゃんは今ので大体把握していたみたいで、この世界のどこかに命君がいるのではと質問していた。

よくよく考えてみればすぐわかる事だけど、ここが命君の内面だとするならばここは夢の中のような空間で、だからこそ夢で私たちをつなげてここに呼び出せたのだろう。それより今は一刻も早く命君に!

そう思い期待に満ちた眼差しを向けていたのだけど、おじいちゃんには困ったような顔をして、

「済まんのう、確かにこの世界の最深部に命はいるのじゃがそこにアクセスできるのは命以外だと火竜しかおらんのう、だからここから先に行けないわしらは会う事はできないんじや」

「「そんなあああ」（涙目）」

そんなのあんまりだよ。すぐ其処まで来てるのにいと二人して愚痴ってるよ、

「それでじゃ、二人をここに呼んだのは他でもない。命からの伝言があるからなんじゃ」

その言葉に反応して落ち込んでいたのからすぐさま傾聴モードに入る私たち。彼の言葉だと思つと気持ちにも湧が入るような感覚がするのだから不思議なものである。

「（何だか凄い変わり身の早さじゃな・・・）でじゃ、伝言といふのはな、ほいっと」

ボンっ！

気の抜けるような爆発音がして、煙幕でおじいちゃんの姿が消え

たかと思うと、その場に薄っすらとみこと君が現れた。どうやら煙をスクリーン代わりにした映像のようなもので、触ろうとしてもすり抜けるし話かけても返事しないところからみて、録画映像みたいだ。夢だからって無駄に凝った仕掛けだなあ。するとみこと君（映像）が話し始めた。

『ええ、マイクテスマイクテス、あああ、本日は晴天なり、とよし、マイクの調子は良好つと。』

オッス、これを見てるといふ事は俺がまだ起きていなくて状況もあまり好転してないってことでいいだな？まあ、これを見せるのを風花と神楽に限定したのはお前らが絶対に暴れ出しそうな気がしたんでな。どうせなのは辺りが止めようとしても聞きそうにないしな。』

「ギクツ!？」

「風花ちゃん……」

『まあこれはどっちにも言えることだけど元はといえば油断して怪我した俺のせいだし、お前らがあんまり気にかけてんじゃねえと言いたい訳だ俺は。』

それにだ、俺が敵わなかった相手だぞ？そんな危険な奴らをお前らに任せるのも俺が嫌だし、そいつらじいちゃんも襲ったって話だしな、俺自らが人誅下さにな、気が済まん。アイツら絶対俺が殺す一歩

手前まで燃やすからお前ら、絶対、ぜったいに！手エ出すんじゃないぞ？』

「……だつてさ神楽ちゃん」

「は、ははっ……何か拍子抜けといつかなんと……」

自分が倒されたつて悔しさみたいなのはあるみたいだけど、何か妙に軽い様子で肩透かしを食らった気分の私だけど、風花ちゃんはどこか浮かない顔をしている。

『今は訳あつて起きる事ができないけど、後でちゃんとじいちゃん共々戻ってくるのであんま心配すんなって他の人にも言つといてくれると助かる。最後に一言、元気で無理せず頑張れよ。じゃ！』

それだけを言うつとさつさと消えてしまい、そこにはおじいちゃんの姿がまた現れただけだった。

「ていつか雪而さん！襲われたって本当ですかっ!？」

「いや、あれは中々に手ごわい相手じゃて。それでも心配無用じゃわい。こつみえても元は神族、体には元々それほどの依存しておらんし、霊体で命の中におるから復活するのは命が目を覚ます時ぐらいになるかの」

それだけを言つて「じゃ帰るからもうちょっとだけこの空間で我慢しておくれ」と言つて、私たちを元の世界に帰す準備をするため消えていった。

残った私たちは手持ち無沙汰にすることが無くなつてしまつたまま互いに無言になつてしまい、そのままぼけーつといていたのだが、不意に風花ちゃんが声をかけてきた。

「ねえ、神楽ちゃん。私、命君を襲つた犯人を絶対に許さないつて思つてた」

「……うん、私も」

「だから絶対に復讐してやるんだって、そう思ってた」

「許せないもんね、やっぱり」

「だからさ、命君はああ言ったけど、自分ができるとはしてお  
うじと思っ」

「そうだね、私にもやらなきゃいけないことができたよ」

言葉を交わす私たち。もう以前のよ様な復讐心はそれほど無いけれど、それでも私たちができることだってある筈だ。それは、

「「今度こそ！命ノみこと君を守れるぐらいに強くなるっ！！！」

」

「それにはやっぱり訓練が必要だよな！私明日から八神家の朝の訓練っていつの参加させてもらってもいいかな？」

「うーん、明日とりあえず聞いてみるけど……それなら先に言っておくことがあるんだけど……」

説明中

いでって命君が」

「わかってる！絶対にあの人には言えない……………（ガクブル）

」

……………みこと君がああ言っていた事だし、とりあえず、復讐は置いておくけど、もしも会ったりするかもしれないし、その時はその時だよな？



第三十一話 「お久しぶりです主人公(仮)」 (後書き)

今回は時間が進んで、管理局側がとうとう闇の書の実在に気づいて  
しまいます。

どうなる！？シグナム！？

シグナム「師匠……………助けて下さい…………… (滂沱の涙)」

……いや、そこは騎士らしく立ち向かってください。

それでは次回の更新で！

**番外編 二人の特訓！（前書き）**

今回のお話はいつも感想を下さっている月光閃火様のキャラをお借りした番外編となっております！

閃火様、許可してくださって本当にありがとうございます！

それでは番外編、どうぞ！

## 番外編 二人の特訓！

さあやってきました番外編！今回はちょっとしたゲストの方に登場してもらおうかとっ！

やけに威勢のいい少女、歳の頃は14〜15ぐらいだろうが、如  
何せん背が低いのが特徴的だが。

658

「あゝ、今回のお話ってもしかして……………？」

はいっ！…ご想像の通りだと思います！

「ゲッ……………（汗）ということはある人達が……………」

風花、神楽共に怯えた様子だがそんなことは全く気にしないのか、少女は変わらないテンションで次の言葉に繋ぐ。

では登場してもらいましょう、月光閃火様の作品の主人公輝刃さんです!!

「……どうも。こうやって直接話すのは初めてか？閃火の小説で一応主人公をやっている輝刃だ。よろしく頼むぞ、お二人さん？」

「（どうするよ？あの作者のせいバカで本当に来ちゃったよ、しかもこっちは主人公病欠という何とも失礼な気が……）」

「（だだだ大丈夫だよっ！何かびっくりする見た目だったりちよつとワイルド感が半端無いお兄さんだけど話し方も紳士的だしきつと私たちのような幼女に厳しくするような事は無い！……といいよね）」

「（せめてそこは断言しようよ！？安心しかけてた心が一気に不安で一杯だよコノヤロー!!）」

混乱している御二方ですがっ！ここでゲストの軽い解説を  
したいと思いますっ！

本名は月臣輝刃<sup>つくのみきは</sup>、人狼の血を引いていて見た目年齢17歳ですが実  
際のところは100歳だとか！

180センチと高身長でワイルドな出で立ち、ぶっきらぼうな性格  
だけど意外な優しさをみせる、うくん、うちのししよーとは違い純  
主役感バリバリのオーラな方ですねっ！

「ちょっとストップそこな解説少女。今は私より年上みたいだけ  
れどー！」

はい〜？何ですか神楽さん？

「ししよーって誰よししよーって」

いやだなー、私のししよーはししよーだけですよ。それ以  
外の誰でもありませんっ。

．．．このまま行くと話が滞りそうな気配がするのでカット、  
カットカットカットカットカットオ！

「落ち着いたか？まさかゲストを放っておいて三十分も話しこむとは思わなかったぞ」

「すみません……」

全くもうー、私の出番はまだまだ先なんですからそんなに慌てなくてもちゃんとわかりますって。それでは輝刃さん、今回こちらにお越しにいただいた理由をどうぞ！

「お前もちょっとは自重した方がいいと思うがな。それで、俺が今回ここに来たのは一つ。君達は前の話で強くなりたい、そう言っていたな？」

「はいっ！私は今度こそ後悔しないように、命君を守れる力が欲しいっ！」

「私だって同じです！もうあんなみこと君は見たくありませんから」

「……………うむ、目はまっすぐなままだな。よろしい、ならば俺が今から訓練をつけてやる」

「ハイハイハイハイハイ！？」

一応デバイス、魔導具の使用はOKで、一人5分の組手を10セットやってもらいま〜す

「待つて!?!それはきつくない!?!」

だいじょぶだいじょぶ、これが終わったら今度は二人掛りでの組手が同じ時間で5セット、お昼休憩をはさんでもう一回同じメニューをやってもらうのが今回のお題です!それでは輝刃さん、よろしくお願いしま〜す!

「そうか、相手が無手でないのならそれなりに力を出しても良いという事だな……!」

「輝刃お兄さん!?!背後にオーラが見え隠れしているのですが?!?!ちゃんと手加減してくれるんですよねっ!?!」

「なあに、久々の戦いというだけで少しばかり気が抑えられんぐら이다。それに、これしきのことには恐れを為しては守りたい者も守れないぞ……?」



風花の場合・・・

「……ツツツ!?・・・上等、やってやる!本気でいきますよっ!  
!白ちゃん!初っ端からマジで行くよ!」  
『OKご主人。久々に枝技本気で撃てるいい機会だしね』

輝刃の軽い挑発に乗って初撃から風神による枝技、【風塊】を発動させ呐喊する風花。荒れ狂う暴風を目の前にしてもなおも揺るがない姿勢のまま待ち受ける輝刃。

「(動かない?ならっ!)」

相手がある場から動かない事を利用し一撃で仕留めるべく新技をぶつけようとする風花。

風塊・零<sub>ゼロ</sub>

本来ならば投擲する筈の風塊をぶつける直前まで己が手に収縮させて、要は風遁・○旋丸を放つ技としていたため、風花自身の身体能力如何で成功率が大きく変わる超接近戦用の技だが、

「ほう、なかなか速いじゃないか」

おそらくは成人男性のそれよりもなお速い疾走。それを可能にしているのは魔導具韋駄天の力によるものも大きいが、それを使いこなした上で限界超過の動きを可能としているのは風花自身の力だ。

それほど距離をとっていたわけでは無かったとはいえ、ものの一瞬で輝刃の懐に踏み込み一撃を入れようとする風花に対し、輝刃はただ一言、

「なかなか思い切った動きだが、まだ遅いつ」

「なっ!？」

突き出された風塊を持つ腕を掴み、飛び込んだ勢いをそのままに

合気の要領で投げ飛ばす。

「驚くことも無い、あんな直線的な動きなどいくらでもカウンターがとれる。初撃から決めに行くその姿勢はいいが、それでは俺は倒せんぞ?」

「くっ! このおおおお!!」

神楽の場合・・・

神楽の戦闘スタイルを一言で表すとするのなら、単純明快、この一言に尽きる。

なのはやフェイトらとさほど変わらない魔力量を持ちながら、攻撃用の魔法はベルカ式の三種類のみ。それ以外の補助魔法は飛行用の アクセルフィン、防御用の ラウンドシールド、後はマルチタスクの大半を使った身体強化。それだけの魔法で、彼女はA A Aの域にまで達した珍しい魔導師である。

本人曰く、

「ベル力式の方が何か攻撃には向いていたし、それに私ってあんまり数学できないからさあー、あんまり多くの魔法って覚えらんないだよー。私は量より質ってやつだし。それに魔法が多ければ強い訳じゃないし」

事実、烈火の将の攻撃パターンも剣、連結刃、弓の三パターンだけだが、彼女にはそれを補って余りある経験があり、並の魔導師ではまず歯が立たないだろう。

神楽にはまだそこまでの戦闘経験は無いが、彼女本来の奔放な性格からくる太刀筋の読めない斬撃、ロンパイアという両手剣の形状を利用する棒術や薙刀術、どちらかと言えば魔導師というよりは騎士に近い戦い方なのだが、神楽にはそういった考えなどなく、本人が「使える」と思った魔法を習得した結果としてのこの形であり、拘りは無いので戦い方も騎士道に沿っているとは言い難い。何故なら、

「わひゃあああああ、いくらこっちのリーチが短いからって無手でこつもあしらわれると流石に自信無くすなあー……」

「おいおい、そんな簡単に弱音を吐く暇があったらとっとと攻めてこないか」

「ハァー、そうは言っても……………隙ありっ！」

不用心に近づいてきた輝刃に石突を水月目がけて放つも、

「……………そこで声をだしたら駄目だろう」

神楽の目論見などお見通しだった輝刃にあっさりと柄を掴まれて投げ飛ばされてしまう。割と手加減はしてくれているのだろうが、打撃系の技こそ撃たないものの投げ技で大きく投げ飛ばされてしまい何回も倒されるものだから、頭を打って視界がグラついてしょうがない。

「も、もうだめ……………（バタッ）」

「ふー、まだ時間まで三十秒残っているのだがな……………まあこれがラストだし目をつむっておいてやるか」

連続で受け身を取り損ねたため、バリアジャケットの恩恵はある

ものの衝撃が何割かは伝わってしまい、未だ少女の身である神楽にはそれが耐えきれなかったようだ。

「まあ、今回の訓練はここまででいいだろう」

あれ？お昼からの予定はいいんですか？輝刃さんから渡されたメモによるとまだまだあるんですけど？

「ああ、それなら……」

~~~~~二時間経過~~~~~

「……う、うん……っと。あれ？私たしかさっきまで輝刃さんと組手……ってええええええ！？やばいつ！？そーいや気絶してそ

れっきりだったんだっけ？やばいよ、碌にお昼もとれてないのに  
いゝ」

あつ、それなら心配ご無用ですよ神楽さん。輝刃さんがお  
土産に持ってきてくれた特製アイスがありますから！

「お、起きたね神楽ちゃん。このアイス輝刃さんとあつちの作者さ  
んが作ってくれたらしいんだけど、翠屋のシューアイスにも負けな  
いおいしさだよ！」

「なんですとっ！？それはリンディさんに次ぐ甘党としては是非味  
見しなくては！」

えーっと、ここで輝刃さんから預かったお手紙を読みます  
ね、食べながらでいいのでそのまま聞いて下さい、ではゴホン、

『今回の訓練では中々に有意義な時間を過ごすことができた。そこ  
に置いてあるアイスは俺と閃火で造ったものだが、安心して食べる  
といい。味には少々自信があるのでな、君達の舌を満足させられる  
一品だと自負している。』

今回の本当の目的としては君達を見定めるといふ目的もあったのだ  
が、どうやら杞憂に終わったようだ。復讐に囚われたままで得た力

など、純粹な想いから生まれた力に比べれば微々たるものだ。以前の君達には危なげな雰囲気があったのだが、やはり想い人の言葉が響いているようだ。今なら良い方向で力を付けることができるだろう。それでは、これからも君達がますますなまま強くなることを祈っているよ』

「だそうです。くうく澁い！流石100歳以上人生経験を積んだ人の言う事は違いますねっ！」

「そっか………ありがとうございます、輝刃さん。これからも私たち、ちゃんと頑張るので見守っていてください！」

「お礼言えず終いだったしなあ、もし次に会う事があつたらちやんとお礼言わないとね」



そうそう、そういう気持ちは大切ですよー。あ、後P・S  
が残っていたのでこっちも読みますね、

『P・S

どちらがなるのかは知らないが、想い人は一人だけなんだ。しっか  
り捕まえておかないと誰かにとられるかもな』

何故でしょう？一瞬黒い笑みを浮かべた輝刃さんが見えた  
気が・・・

「命ノみこと君は私のものだー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

あーあー、喧嘩しちゃいましたよ……。これも企み通りな  
のでしょうか？

番外編 二人の特訓！（後書き）

神・風「「づがれだああああああ……」」

お疲れ様でした。どうでした？輝刃さんの実力のほどは？

風花「もう全然歯が立たなくて、圧倒的って感じ……」

神楽「しかも、人狼の形体にすらなっていないかったんだもん。あれでかなり手加減されていたかと思うとまだまだだっと思って思い知らされるよ」

それでも諦めるつもりはないんでしょう？

神・風「「当然！！」」

元気になったなあー。良かった良かった。

それではまた次回の更新で！

今回他作品のキャラを書いてみて思ったのですが、キャラの口調とか性格を把握しないと厳しいものがありますね。執筆が楽しかったから気にはならないんですけど、しっかり把握しとかないと先方に失礼ですしね。

第三十二話 「衝突！ 前編」(前書き)

私です、最近スランプやとです・・・  
私です、暑さとダルさと頭痛が酷くて執筆意欲がガリガリ削られる  
とです・・・

シヤマル「何がチで熱中症に罹ってるんですか・・・。しかもス  
ランプて・・・」

流れは組めていてもいざ文章におこすと・・・て感じになるのよね  
量が少なくなつて進行も遅々としたものになつていくかと思いき  
が、どうか見続けてください。

それでは本編スタート〜

第三十二話 「衝突！ 前編」

S I D E クロノ

「ふうー、しかし、これはまた面倒なことになったものだな……」

「はは、仕方ないよクロノ君。なんて言っただって今回は絡んでるものがものだけにねえ」

最近頻発に起こっている無人世界での謎の生物衰弱。地球に程近い世界ばかりで起こっているのでこのアースラにその事件の捜査が命じられたのがミコトが倒れてから少し経ったところだ。

衰弱した生物を調べた結果、リンカーコアが異様に弱っている状態で、これは他のどの生物たちにも共通しているところであった。つまり同一犯の犯行の線が一番疑わしいし、それに何よりこの現象はある行為の結果と非常に似通っている。

「うふふふふふ……とうとう尻尾を出したわね闇の書……。覚悟してなさい……」

ゴトゴトゴトゴト

……ッッ！

母さんの後ろから聞こえてくるものは幻聴として、この事件にはおそらく闇の書が関わっているというのが僕たちの間で出した結論だ。（決して艦長のオーラに怯えて文句が言えなかった訳じゃないからなっ）

そして今回は犯人たちの行動をこちらが予測して、定期的に場所を変える彼らだがそこに一定のパターンがあることに気が付いた母さんが「絶対ここにくるわっ！」と断言し、とある無人世界、砂漠だけが広がる土地に当たりをつけ、そこにサーチャーを放ち今は様子見をしている状態で、僕をはじめとする武装局員はいつでも出られるよう待機している。

「それにしても艦長の感でここに張り込んでいるわけだけど、本当に来ると思う？」

「それは思ったけど、犯人達の動きに一定のパターンがあるのは確かだし、当てが無い以上こういうのも悪くは無くないか？」

僕がそう言うときさも意外そうな顔でこちらを見るエイミー。何かおかしいことでも言ったのだろうか？

「うん、最近のクロノ君ってば段々とミコト君と似たような事言うよね？今までだったら今回みたいなテキストな考えで動いたりしないのに、反論するどころか肯定的な意見が出ちゃうし…何気に影響力強い子だよな、うん？子というか彼？ちよくちよく見た目が大人になるからよくわからないや」

「ふっ、確かに彼の思考に多少なりとも染まっているのは否定しないよ。それにアイツは年下というよりも同世代のように思えるしね」

執務官として今までの人生のほとんどを勉強や魔法の訓練に費やしてきた僕にとってミコトという存在はかなり貴重なものだったのかも知れない。

いつもこちらの出す難題も、文句を言いながらだがしつかりこなすし、僕の仕事の補佐もかなり上達してきて、書類面での注意も日を追うごとに減っていた。

それに何より、彼とは同等の存在として僕の中では位置づけていて、これは僕の勝手な思い込みかもしれないが彼の事を親友だと思っっている。

彼の生き方は酷くチグハグで、怖がりのくせに誰かのために動く時には一切の逡巡も無く、相手に対しての容赦も無い。彼は誰かが虐げられる事を激しく嫌悪していて、それを見る度にこちらが震えるような怒気をまき散らすかと思えば、普段の艦内生活では割と気さくに話しかけてきて、彼とその相棒のやり取りなんかは一時期アースラの中でも有名で、彼らが騒ぐ度に見物客が現れるくらいだった。ムードメイカーという訳ではないが、居れば安心でき、いなく

なるとどこか空虚というか淋しさに近いものを感じるようになった。

それが一番顕著だったのが、彼を慕っている、というか自称愛しているカグラだった。管理局の任務を放りだして地球で何かしているようだし、そもそも管理局に入った理由がミコトを探すためだけだったというのだから気持ちは分からなくもないが、もう少し仕事をしている人間としての自覚を持って欲しいと思う。

しかし僕も彼女のことばかり言えないか。例の犯人たちの残留魔力をプレシアが辿っていたように僕も独自で調べているのだが・・・

「クロノくん？いい加減回想から戻ってきて〜。アラート鳴ってるよ〜」

「ばっ！？そついう大事なことは先に言ってくれ！！」

どうやら回想している間に警報が鳴っていたようだ。モニターで確認してみると、そこには桃色の髪の女性と赤いゴシック調のバリアジャケットの少女……って何イイイイ！！？



「（あれは確かミコトの病室にいた人達じゃなかったか！？その人たちが何故ここに！？）」

見知った人間が現れたことに驚く僕だったが、その時背後ではもつと恐ろしいことが起きているだなんて僕には知る由も無かった。

「出たわね……人の夫に手え出した阿婆擦れがああああ  
あああ！！！」

「クロノ君！！お願いだから艦長止めるの手伝ってっ！！！」

「……………クロノ・ハラウン、  
出動する」

「逃げるな卑怯者おおおおおおおおお！……！！！」

……すまないエイミー、僕には何にも聞こえな  
かったんだ……（遠い目）

S I D E  
O U T

第三十二話 「衝突！ 前編」(後書き)

短い……そして、駄文……

暑さのバカやる——————!!!!!!

命「そーいや好きなアイスがコンビニから姿を消して苛立ってるんだっけ？」

第三十二話 「衝突！ 中編」(前書き)

スランプって一体何なんでしょう？

ネタが浮かばないこと？

文章が書けないこと？

その両方ともが揃った状態のこと？

・・・ちなみに私はこれらの他にもう一つありますね。

まあ、私のトラウマなんてどーでもいいんです。

それでは本編スタート！今回はとうとうあの方が！



「ふん、我らヴォルケンリッター、死ぬ時は一緒だと誓いあった仲ではないか。今さら私たちの間に遠慮などいらん。さあ、私と一緒にどこまでも逃げようではないかH A H A H A！」

「シグナムが壊れたあああああああ！？」

蒐集のために訪れたとある無人世界。一通りノルマを完了してさあ帰還しようとした時だった。

突如結界の中に閉じ込められた私たちの目の前に現れたのは管理局の魔導師たちだった。行動が読まれていた！？ 私が驚いているとその中から一人が前に出てきて、

「こちらは時空管理局だ。君達の行為は管理局の定めている法に反している、よって拘束して事情を問いたいところなんだが……」

おそらくはこの魔導師達の中でもかなりの実力者と思われる少年いや、以前命のお見舞いに来て襲撃された事実を教えてくれた少年

だ。

「名前は確か……クロ？」

「ノを忘れてる、クロノだクロノ。それで君達は確かあの時いたミコトのご家族の方ですね？」

向こうもこちらを覚えていたようだ。しまったな、このままではこちらの正体までバレる可能性があるし、万が一闇の書の事が発覚しようものなら主にも危害が及ぶかもしれない。ならばここは即離脱が望ましいのだが結界の中ということで転移魔法がうまく発動できない。

「（拙いな……あまり長くいると我らが人間でないことが分かってしまう……）」

サーチャーなどで調べられればすぐにでもバレてしまう、そんな危機感を覚えた時だった。クロノの近くからウィンドウが現れそこには……





」

「いやいやヴィータよ、別に私は怖がっている訳では無くここはまずお前に先手を打たせてやろうと……ってこらっ！話の途中だ！私を置いて逃げるなああああ！」

ヴィータと揃って敵前逃亡。本来であれば少し痛めつけてから余裕を持って退けばよいのだが……

「（無理だ！もしアレが本当に命の言っていた夫に逃げられた女性だとしたら、私は立ち向かっていける勇気が無い！）」

騎士として恥ずべき行為だが、背に腹は代えられん。ヴィータなんかは全速力で逃げているしな、うん。私だけが怖がっている訳ではないとわかって軽く一安心していたら、

「コラアアアアアアアアアアア！何逃がしているのクロノツ！さつさとあのピンクの騎士を捕まえなさい！きつとソイツがクライドさんを誘惑した奴よっ！」

背後から聞こえてくる般若の声。あちらは既にこちらの正体に当たりをつけていたようだ。いや、いや重要なのはそこでは無い。

「おいやっばお前が狙われてんじゃねええかあああああああ！  
！何で同じ方向に逃げてんだよっ！？離れるよこっちくんあああ  
あああああ！」

「何を言っているんだヴィータ！我らヴォルケンリッター、生まれ  
た時は違えども、死ぬ時は一緒だと誓いあつた仲ではないか！あの  
稲園での誓いを忘れたか！？」

「誰もそんな歴史になぞつた誓いなんかしてねえよ！勝手に過去を  
捏造すんなっ、それにももだ、桃！それだとただの田んぼでの誓い  
になるだろが！カツコ悪すぎだ！」

………そして冒頭に戻るつと。ふむ、どうやら混乱  
している時の私は口調が一定にならないようだな。普段言わないよ  
うなことが平然と口から出てしまう、これも落ち着こうとする防衛  
反応なのだろうか？

「テメエ何勝手に思考の海に沈んでやがる！現実を見る！管理局の奴ら大分距離詰めてきた……つてええええええ！？」

「どうした？まるで食がシヤマルスペシャル（残り物適当炒めma de inシヤマル）でも出された時のような……つて、何いいいいいいい！？」

ヴィータにつられ後ろを見るとそこには……

「頼むから捕まってくれええつえええ！」

「このままだと俺達が艦長に殺されるうううううううう！！！」

「ていうかアルカンシエルで塵も残さず消されちゃうううううううううううう！！！」

「落ち着くんだ皆！全員で掛かればおそらくあの背の高い方の女性ぐらいなら捕まえられるはずだ！狙いを絞って一斉に飛びかかるぞ、いいなっ！」

『『『イエツサー!!』』』

……そこには一つの修羅がいた。

あの女性のオーラに中てられた局員たちは、クロノの指示の下、私に狙いを定めて一気に加速してきた。

「長い付き合いだったけど……お前のことは忘れないぜシグナム  
！（敬礼）」

「貴様ヴィータ！見捨てるつもりか!？」

「はやてとじっちゃんのことなら全部私に任せとけ、命と三人が無事に戻ってきたらちゃんと『シグナムは犠牲になったのだ……未亡人の犠牲にな……』って言うてやるから。そして落ち込んだはやてとじっちゃんを私が慰めて今以上に甘えられるように……でへへ／／」



.....

「おい.....シグナム.....プツ.....エンジェルって.....プフッ！」

「.....」  
「.....」

「ハアアアアアア.....、あれが身内だったと思うと死にたくなる.....。そうだ、アレと僕との間には血縁なんて無いんだ、そうだから。だからミコト、今僕もそっちへ行くよ.....」

『クロノ執務官ンンンンンンン！？やめて！？殺傷設定のステインガースナイプを喉に突きたてようとしないでっ！！』

.....  
それまで雰囲気完膚無きまで破壊し、むさ苦しく現れたのは.....

谷さんのなマスクを付けた変態だった……マントにタキシード、古

第三十二話 「衝突！ 中編」(後書き)

出ちゃいましたねクライドさん。格好は勿論タキシードでマスクな古谷さんです。

何となくヒロインを助ける格好でベタなものを考えたらこれしか浮かびませんでした……

そして次回はさらにぬこも加わり作者の手を越え話は何処かへ行ってしまおう！

命「いや制御なさいよ？」

キャラが多くなってくるとすっげえ勢いでプロットから離れていく……不思議！



第三十二話 「衝突！ 後編」(前書き)

今回、この話を書くにあたって一つ思いました。

何コレ？ と

話のうまい締め方が全く思いつけずぐだぐだなまま終わってしまった……

後半なんて無理矢理終わらせた感が酷過ぎて……

それでも構わないんだぜ！という豪気な方はどうぞ！

第三十二話 「衝突！ 後編」

~~~~~前回までのあらすじ~~~~~

・シグナム危機一髪！

.....以上

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

S I D E    ヴ ェ イ タ

・・・・・・・・・・・・・・・・あれは悪夢のような光景だったと思う。

・・・・・・・・・・・・・・・・シゲナムにとっては。

「やっと会えたねマイスウウウイイイイトツ！エンジエ  
ルツッ！！僕はこの時を一日千秋の思いで待っていたよ！

さあ！結婚しよう！」

爽やかに求婚するタキシード仮面。（おっさん）

無駄に魔法で歯を煌めかせる演出が心底どーでもいい。はやてに  
○ーらーむーんを無理矢理視聴させられてそれ以来カッコいいと思





目の前にいきなり変な仮面を付けた男が転移してきた。見るからに怪しさ爆発なかんじだけどどうやら服装からして局員の連中ではないらしい。

「何モンだデメエ？」

「俺の正体などどうでもいい。貴様らの離脱を手伝ってやるからとつとつと将を正気に戻してこい」

睨みつけてみても全く反応しないで愛想無く命令してくる。何なんだコイツ？……あつ。

ここにきて余計なことを思い出してしまった。それは命と話していたある日の事だ。

『なあ、ヴィータは何でいっつもそんなに目を吊り上げてんの？疲れ  
ないそれ？』

『意識して吊り目にしてるんじゃないやねえよ、元からだ。いきなり何だ、  
変なこと言いやがって』

『ああ、ほら、ヴィータって小さいじゃん？だからワザとそうやって  
睨みつけるような目をして戦闘中とかそうやって少しでも相手を  
委縮させようとしているのかな、と。じいちゃんに言わせると背伸  
びしているみたいで可愛らしいけど、できれば見た目相応に笑った  
りした方が似合うからそうして欲しいってよ。まあ、もともとそん  
な目つきならしゃあないわな』

アタシはその話を聞いて愕然としたのを覚えてる。

可愛いつてそんな／＼／＼・・・あ？でも待てよ？『睨んで  
いるみたいなの目つきをしていることが背伸びしているみたいに見える』ってことはだ、じっちゃんからアタシは完璧な子供扱いをされているってことじゃねえか！？（本人は日頃自分がいかに雪面に甘えているかを考慮にいれていません）

騎士としてそれは流石に拙いんじゃないか！？近頃はシグナムの奴がじっちゃんに構ってもらおうとあの手（将棋）この手（盆栽の手入れ）で迫っているっていうのはいいゝ！

ハッ！？シグナムのヤロウゝ、さてはじっちゃんを一人占めにしようか！？（騎士として危ないと言ってる割に思考のほとんどが雪面にいかにして構ってもらおうかの一点のみ）

くそつ、どうする！？アタシにはシグナムみたいな胸も無けりゃ、趣味が一緒なことって言っても偶に近所のゲートボールに参加するぐらいで家の中で一緒に楽しむことが無い。

それはつまり、八神家内におけるスキンシップを図る機会がシグナムより少ないということであって、じっちゃんがシグナムに傾く可能性が増えていつちまう！

ちきしょー、アタシにもシグナムみたいな胸や身長があれば・・・  
・！

（もしそんなことになったらなつたで、膝の上に座る、一緒に寝



る、手をつないで買い物、等など子供体型であるが故に雪而も気にしていなかったことが、大人スタイルになってしまふとそれらすべてができなくなってしまうことに彼女は全然気が付いていない。むしろ大人になっても膝の上に乗ろうとしたり一緒に寝ようとするつもり満々である。

「……そのような場合、雪而の心労がストレスでマッハになってしまうのだが……まあ、ヴィータ本人がそれに気づく筈が無い。南無」

「……おい貴様、聞いているのか？」

「（ブツブツ）やっぱり書のデータを改竄してアタシの身体データをシグナムみたいにボンツキュツボンツになるしか……うん？何だよ、まだ用があんのか？」

「だから将を元に戻してさっさと離脱しろと言っている！」

「あ……わりい、忘れてた」

命の言葉を思い出している内に変な思考を展開していたようで、何時の間にか事態に動きがあったようだ。

変態タキシードは何故か半泣きの局員たちにバインドを仕掛けられていて「離せー！ー！私の愛を妨げるならば管理局といえど吹っ飛ばすぞー！ー！」「艦長が死んでも連行しろって言うんですよっ！だから暴れんなこのマダオ！」等々凄いことになっている。

相変わらずシグナムは震えてししょーししょー連呼してるし、自殺しようとしていた黒いのも正気は取り戻したようだけどもまだ虚ろな目のままで変態を連行する局員たちを指示している。逃げるなら今のうちだろう。

「ていうかこんなんでもいいのか管理局……？」

敵の筈の組織に、何故か同情してしまうほど連中が可哀相に思えてきた。上が目茶苦茶な奴だと部下は苦労すんだな。よかった、はやてが普通に優しい主で。もしあそこの変態仮面や鬼艦長のような人間が主だったら……やめよう、この考えは不毛過ぎるし恐ろしすぎる。

連中の注意がこっちに向いていないうちにシグナムを右斜め45度の角度からアイゼンでぶん殴り正気に戻した後、何時の間にか結

界が消えていたので（タキシード仮面（笑）が乱入してきた際に破られた）転移魔法を発動させてその場から離脱した。

「ヴィータよ、先程お前の近くにいた仮面の男は一体何者なんだ？  
見覚えの無い筈なのに、一瞬殺したくなる程の殺意が芽生えたんだ  
が……………何故だ？」

「知るかよそんなもん。でもまあ、怪しすぎる事には違いないし、  
アタシもギガントで潰したくなったもんなあの男。こっちの事情を  
知っているいだし気を付けた方がいいんじゃないかねえか？」

「そつだな」

帰って来た後、シグナムとそんな会話をしながらシヤマルの用意していた夜食という名のトラップをスルーしたアタシ達は仮面の男は信用しないことを他の皆に伝えてそのまま寝た。

・・・仮面の男を無視したことを後悔するところになるとは夢にも思わないまま……

### 第三十二話 「衝突！ 後編」（後書き）

命「最近更新毎日しないのは何で？夏休みで暇でしょ？」

それは……

命「それは？」

もう一つの小説を自分勝手な理由で打ち切ってしまったのが心に引っかかっていて、そのせいかこっちを書いている時もどうしてもその時の事を思い出してしまって……

この作品を読んでくださる方々には大変申し訳ないのですが、ここ最近の自身の勝手な理由にせいで更新が疎らになってしまって本当にすみません。

まだしばらくは更新が遅れがちになると思いますが、偶にこの小説を気にかけてくれると嬉しいです。

それではまた次回！次のお話からは時間がまた一気に進みます！いい加減にしないとA`Sだけで五十話越えしそうなんで……それでもいいんですがね

第三十三話 「カウントダウン」(命side) (前書き)

今までで一番遅れての投稿！

なのに内容はイマイチ！

本気でスランプ気味です……

とりあえず書かない事には始まらないし完結できないので少しずつでも思い今回の投稿。

それではどんなものでも

「かまわん、いけ」

という方はどうぞ！

第三十三話 「カウントダウン」 ～命side～」

S I D E 命

「行きますよ命。これが修行の最終頂です」

「わしら七竜全員を相手に戦ってみせいっ！さすればお主の前に敵はいなくなるじゃろって」

目の前には柳、烈神を除く七竜がそれぞれ戦闘態勢のまま佇み、俺はそれを見ながらどうしようもない絶望を抱きながらも叫ぶ。

「ねえってば！俺って何時の間にこんな〇悟空も喜びそうなマゾい

訓練してつたっけ！？怪我治して魔導具できたら意識を戻すって言つてたけどさあ、なんでこんなルナティックでバイオレンス極まりない状況になつてんのさああああああ！！」

おかしい、俺は何時の間に最強を目指すようなシチュに陥つてしまつたのだろうか？

「決まっているであろう。主が不意打ちや背後の相手にも気付けないう未熟者故に今回のような怪我を負い、あまつさえ自身が大切にしているという幼子たちを危うく修羅の道に墮としかねなかつたのだぞ」

「しからは我ら火竜、情けない主がため、このような修行を課しているっわけ。わかつたか小僧？」

「うん、碎羽の言葉は痛い程わかつているつもり。確かにアレは俺の油断だ、そのせいで風花達に危険なことをさせそうになつてんだもんな。次起きた時はこんなこと二度と無いよう鍛えてくれるんだもんな、すまない、あまりにも厳しい内容に思わず叫ばずにはいられなかつたんだ」



碎羽の言葉は痛みいる。じいちゃんが精神世界に来て事情を説明してくれなかつたら今頃アイツらの暴走も知らないままだったろうしね。ただし円、テメエは言い過ぎだ。情けないのは自覚してるから言わんでいいわい。

「ふあいと〜！ これが出来たらもうすぐ現実に戻れる頑張って！」

「・・・・・・・・」

外野では応援してくれる柳に静観している烈神。ここにきて二週間ぐらい訓練しているうちに顔を出すようになり、俺も自分の意志で柳と烈神の炎を使えるようになったのだが、見たまんま柳は戦闘向きの能力では無いので訓練には不参加。ポロポロになる俺の治療が仕事である（精神世界でも怪我すると痛いので）。烈神はといえば訓練内容を決めると、後はずっと見てるだけで終わった後にここがダメ、あの対応は拙い、等々辛口ながらも的を得たアドバイスをしてくれる。

・・・・・・・・一つ思ったのだが、そのポジは本来虚空の爺ではなからうか？見た目の年齢的に。

何々？俺の能力は戦闘向きでは無いからそこは翁と変わってもら

っているよ、さいですか。

襲われてからそろそろ二カ月を迎えようとしている中、世間は近々クリスマスで騒ぐ頃合だというに俺は未だ寝込んで精神世界でスパルタ教育を受けている。

「ハア……。もういいや、今日こそ全員ぶちのめしていい加減目を覚ましてやる！流石に二カ月絶食は堪えるんだよ精神的にイイイ！」

半ばヤケクソ気味に七竜に突っ込む。手には未だ完成していない魔導具の代わりに持たされている野太刀を肩に担ぎながら全力で斬りかかる。一番に潰すのは……

「成程、まずは遠距離タイプを潰しにかかる。大分戦闘における状況把握ができるようになりましたね」

それはそうだろう。七竜相手にまず警戒すべきは離れた位置からの攻撃を可能とする崩と虚空だ。俺には遠距離攻撃の手段は持って

無いし、今ここで距離を置かれると一方的に狙い撃ちにされる。近づこうとすると碎羽や焔の援護に罫の幻炎、円の防御となかなか隙が無い。

「ふっ！ 我らを忘れていないか命よっ！」

「目の付けどころはいいが視野が狭くなっているぞ！」

俺が崩に呐喊しようとするやと当然碎羽と焔が割り込んでくる。だがしかし！

「んなこたあ端っから承知の上だよお二人さん！」

これが初めてという訳ではない。予めこちらの動きに対しての反応が読めていれば二人の動きを誘発するのは難しいことじゃないんだよ！

進行方向に割り込む形でこちらと向かい合う二人に対して俺は肩の野太刀を躊躇なく薙ぎ払う。何の特性も無い鈍らだがそれなりの

速さで振り抜けば切っ先のトップスピードも相まって骨の一本は平気で断てる。俺の腕力で振り抜けば両断は無理でも大人二人を吹き飛ばすくらい訳無い。

「碎羽っ、焔っ！ ……やるわね命。崩を狙う素振りでおびき寄せた二人を……」

壘が驚いたように俺を見つめているが、正直言っただけで身体能力ならば俺はこの中の誰にも負けないつもりである。だがそれでもこいつ等相手に油断なんか欠片も出来ない。俺の想像で形作られている火竜たちは、総じて俺のイメージでその強さが決定されている訳だが、まず火竜たちは原作ではそれぞれが優れた炎術師として名を馳せた火影忍軍の英雄たちである。そこには炎術師としての才能は勿論、それ以外にも技能、経験、忍びとしての才能もあつたものだと俺は思っている。

そんな俺の抱くイメージ通りの生まれた火竜は、生まれて間もないというのに百戦錬磨の忍びとしてのすべてを内包しているのだ。これではいくら身体で勝っていてもそれ以外の業の部分ではどうしても差が出てしまう。これがタイマン勝負ならば力押しで何とかするのだが、複数が相手になると途端に勝率が四割程度になってしまう。それだけ俺と火竜の間には確かな実力の違いがあるのである。

故にこいつ等を相手にする際、俺はありとあらゆる手段を用いな

ければならない。力だけでは駄目、その力を十全に發揮できるようにした上で相手には実力を出させないような状況を作りだしてようやくまともな戦闘に持ち込める。

この思考ができるようになるまでに結構な時間を要した。何せこちららとはこと戦闘に関しては素人も同然、効果的に相手を攻撃するよきな思考など初めから持っている訳など無く、訓練を重ねた上で培ってきたこれは未だ未熟者の域を出ないが、だからこそ相手の油断を誘える。さつき碎羽と焰を倒せたのはアイツらが“俺が崩を狙う事しか考えていない”と決めつけていたから、俺が“崩を倒すより先に二人を倒す”とは考えなかったために思考の裏をかかれてしまったという訳。

「ふうん。お主も大分忍者の戦い方というものがわかってきたようじゃな」

「普通の忍者はこんな派手な攻撃手段なんて持っていないだろうけどさ。まあ、それはともかくとして爺の言いたい事なら何となくわかったよ」

「ほう、ならば言ってみい。わしがお主に何を教えたかったのかをの」

こちらを試すような視線を投げかける虚空。俺はその視線を真正面から見据えながら俺の答を伝える。

「『裏の裏をかけ』、かな？相手の思考や行動、あらゆる所作から次の動きを予測して反撃、あるいは相手の行動を読んだ上でそれを敢えてさせることでこちらの意図した通りに動かせる。つまり真正面からのゴリ押しじゃなくて、忍者なら搦め手を使ってやつと一人前ってことだろ？そもそも俺は忍者じゃないけど、火影の技術を使っている以上はその戦いの方がやりやすい、こんなところだろ？虚空」

まだあんまり言葉としては纏めきれないのだが、それでもここでこの経験を持つて俺が考えた答だ。虚空はその答にそれなりに満足してくれたのか、「ふむ」と一息ついた後、笑いながら合格だと言ってくれた。これにてここでの長く辛さしかなかった訓練が終わり、やっと現実に戻れると思ったのも束の間、背後から放たれた殺気に反応して太刀を背負うように構え衝撃に備える。

ガキイイイイイイ！

甲高い金属の擦れる音が響き、受け止めたそれを弾きながら襲ってきた張本人に向き直る。やっぱ今ので終わりじゃ収まりがつかないよなあ、コイツ。

「おいおいおいおいおいおい、俺との決着はまだ着いちゃいねエだろぅがあ…さっさと構えな主よお。じゃなきゃ俺がうっかり殺しちまうぜえ〜？」

「お前はそういう奴だもんな。……仕方無えなあー………そいじや、最後の“殺し合い”といくかあ！」

「ヒヤハツハツハツハツハツハ！いいいぜいぜええええ！やつとテメエも馴染んできたじゃねえかあああああ！」

「誰が好き好んでこんな殺伐とした喧嘩するかよこのアホ！お前が、一々突っ掛かってきたおかげで殺気にもかなり敏感になるどころか、好戦的などこまで似たじゃないかこのボケ火竜ウウウウウウウウ！」

・・・刹那。こいつとだけはあまり仲良くできなかったといえ  
ばそうではない。ただ単にこの野郎が戦闘時には馬鹿みたいにハイ  
になっているのでこうやって俺が毎度のように訓練の締めになると  
殺し合いという名のクールダウンに付き合わされる羽目になるのだ。  
そのせいとか、戦闘を好むようになってしまったし、生傷が絶えな  
い。ここが精神世界で本当に良かった。

「それが終わったらでいいから後でこっちや来いよ。新しい魔導  
具の説明した後で意識を戻すからなあ」

そんな声を聞きながら、俺は刹那との最後になるであろう殺し合  
いに勤しんでいた。



時は12月23日。

事態が混沌へと動き出すまで……あと、僅か……

第三十三話 「カウントダウン ～命side～」 (後書き)

今回は同じ時間軸で現実の風花視点でお送りします。

つまりもう闇の書は完成寸前、はやては倒れて入院、病室は命とは別室、管理局メンバーはヴォルケンよりもクライドさんを抑えるのにかかなりの労力を使っています。よってかなりお話に無理が出てくる可能性が大いにあるのですが・・・

命「何を今さらって感じだよなその辺は。初心者だからっていう理由だとしてもいろいろなムラはとくにでているし、実はフェイトのデバイスも既にカートリッジシステムが積んであるとかも書かなかったし、そこら辺に気付いたから最近書かなかったんだよな？」

ははー、全く仰る通りでございます。

それでも完結させたいのでこのままつきりうかなって、最近少し思えるようになってきました。

それではまた次回！

第三十四話 「カウントダウン ～otherサイド～」 (前書き)

今回のお話は今までのなかで最長のものとなっております。その理由は、

・ここで悪役サイドの簡単な事情と原作との差異を明らかにしようとしたら馬鹿みたいに量が多くなってしまったこと。

・そのため本来風花サイドだけで済ますモノが神楽サイドを使わなければならなくなってしまったため。

以上二点です。

しかも内容的に受け入れられない方が多い気がするグレアムサイドの理由付け。どうしてもこのような考えしか浮かばなかった私の文才の無さに絶望したっ！

それでも構わないという方は本編をどうぞ！

第三十四話 「カウントダウン ～otherサイド～」

S I D E 風花

どうも皆さんおはこんばんちは。どの時間帯の人でも対応できるこの言葉を考えた人は偉大だと思う風花です。

それはさておき、とうとう蒐集もあと数ページを残すのみとなり闇の書、いや、夜天の書だっけ？とにかく、これではやてちゃんを助けることができます。それに、

「管制人格の人と会話できるようになったんだよね？その人何だっ  
て？」

「うーん、こつちをあんまり信用してねえーつつか、じつちゃんが言ってた『魔導書とはやてを同時に救う方法』なんて在り得ないって聞かないんだよ。それで思い出したんだけど、管制人格の奴つてめがっさカタブツでな、昔っからこうだつて決めたら梃子でも考え方変えなかつたんだよアイツ。どうにかなんないかなくなつたく、はやての事もそうだけどアイツも仕方なく助けてやらなきゃいけないっていうのに…」

「仕方ないって言ってる割には真面目にその人の事考えてるよね？素直にどつちも同じくらい助けたいって言えばいいのにー」

「うっさいっ、じつちゃんの手紙とかはやてが言つてたから仕方なく助けるんだよっ、別にアタシはこれっぽちもその気は無かつたんだ。だからめんどくせーけど助けてやるんだよ、序だ序」

相変わらず素直じゃないなー、口では雑な事を言っているヴィーたちやんだけど私を含めて八神家の全員が知っている。彼女はこの家の中で誰よりも今の生活を大事にしていることを。

今までのどの主よりも優しく自分達騎士に接してくれたはやてちゃん、プログラムである自分達をのことなど歯牙にもかけず家族と言ってくれた雪而さんに命君。ヴィーたちちゃんもそうだけど、他の

ヴォルケンズの皆もこの生活の切欠をくれた三人には感謝しているし信頼もしている。だからこそ雪而さんの手紙に書かれていた内容も素直に受け止めることができたのだから。

「まっ、そういうことにしておいてあげるよ。それにその管制人格の人を助ける事が出来たらまた家族が増えるしね、あ！　そういうえば私はその人に会ったことないんだけどどんな人？見た目とか性別とかさあ、皆みたい綺麗だったりするの？」

ふと思いついたこと、それは管制人格の人が男性であるか女性であるかである。ザフィーラさん以外はみんな綺麗どころが揃っている守護騎士のみなさんだし、ザフィーラさんも堅気のイケメンって感じだし。うちの組の皆と会わせたら目茶苦茶似合いそうな気がするな。ドスを持って着流しに唐笠を持つザフィーラさん……やばい、すっごくリアルに想像できるよ、しかもVシネに出してもいいぐらいの真に迫った演技が期待できそうだし……ッ！

……いけない、話が逸れた。とりあえずこれ以上命君の周りに女の人が増えるのはあまり嬉しくないのだ。どうか男の人であってほしい、でないとママが言っていたきせいじつとかいうものを作らないといけなくなってしまふ。パパがこれに異常なまでに反対していたけどそんなに危ないのかな？それでも命君を渡さずに済むのならそれも辞さない覚悟はあるけどね。何するのか知らないけど……

「（オーラが怖い…（汗））ええつとだな、見た目はシグナムくらい  
の大ききさで・・・」

シグナムさんサイズだとオオオオ！？それは背丈のこと  
とだよな！決してあの女性特有だけど平均より明らかに逸脱した大  
きさを持つシグナムさんのアレと比べて言っている訳じゃないよね  
！？

「（ますますオーラが黒くなってく…）それで髪は長髪で色は銀、  
瞳が紅眼で…：…うん、それぐらいだな。あんまし話した訳じゃない  
から性格とかはよくわかんねえけど多分根暗っていうかネガティブ  
っていう感じだな」

つまりアークルさんのように朗らかに抱きついたりと  
か過剰なスキンシップは取らないと、まあまだ命君のことを好きに  
なっている訳じゃないんだしそんなに心配しなくてもいいよね。

「（でもな〜）。私の時みたいに落ち込んでいる人に声を掛ける要  
領で変なフラグを建てるかもだしな〜、どうする私！？これ以上の  
ライバルは正直いらないよ！作者だってこれ以上増やすときっと捌  
ききれなくなっって苦労するよ！だから増やすな〜！）」

「なあなあシヤマル。風花が言っではいけない発言をしているところか、誰かに呪いをかけるような勢いで虚空を見つめててすっげえ怖いんだけど。何考えてんだアイツ？」

「うーんとね？ヴィータちゃんがもつと大人になったらわかると思うわよ、きつと。あれは恋する乙女特有の、一種の病気みたいなものだから、ほら、アークルさんだって命くんと話しているとたまにやけることがあったでしょ？あれと同じようなものよ」

「ああ、あれか。シグナムがじつちゃんと話しているとにへらへらっただけだしねえ顔する例の。なるほどなるほど、確かにそれと似てるよな。人の話を一切聞かない辺り」

「……ヴィータちゃん、それ、絶対にシグナムの前で言っちゃ駄目よ」

「？ どうしてだよ？」



「私もそのネタで一度シグナムをからかったことがあったんだけどね、・・・まさか照れ隠しでレヴァンティンの鎧にさせられそうになるとは思わなかったわ……  
絶対にあのとき私を亡き者にしようとしてたもん！すっごく怖かったもん！」

「わかったから思いだし泣きは止めるって、見た目大人のクセに……」

ヴィータちゃんとシャマルさんが何やら話していたみたいだけど、今の私はママの言っていた最終手段を使うべきかどうするべきか、来たる日に備えての構想に忙しく隣のシグナムさんが二人に近寄ってデバイスを起動させているのを伝える暇など無かった。

・・・その後聞こえてきた断末魔に少しだけ罪悪感を感じたので後で白ちゃんを思いっきりモフモフさせてあげることにした。二人共物凄く癒されていたようなので良かった良かった。

~~~~~  
~~~~~

S I D E 神楽

「犯人はわかった、だけどこれはな〜」……」

プレシアさんに頼んでいた調査が終わって一カ月。私なりに局のデータを漁って犯人の特定をしていたんだけど、思わぬ発見をしまいました。

「カグラ」。何か進展でもあったの？」

「犯人の特定ができたって？それはいいけど、復讐に走って勝手に動いちゃ駄目だからね？君もフェイトもなのはも、僕の知り合いの女の子はみんな決めたことは一人でする傾向があるからね」

「あつはつはー、ユーノ君。以前ジュエルシードで暴走した君に言われたくは無いなー。それに一人で犯人を捕まえには行かないよ。みこと君が直々に人誅を下すって言うてから」

以前の事件をネタにからかってみるとユーノ君は顔を逸らして、フェイトちゃんがさういう事は言っちゃ駄目的な視線を投げかけた後、ユーノ君に気にしちゃだめだよと声を掛けていた。

何を隠そうこのお二人、もうできてんじゃない？ってぐらい熱々に付き合っただけに見えるのだ。見えるというだけで実際にはどっちも告白していないんだけど。

ユーノ君はなのはちゃんが好きじゃなかったっけ？と以前質問してみたら、

「いくらアピールしてもちっとも気づいてもらえなくてね、それでフェイトに応援されているうちに何時の間にか・・・」

つまりは遠くの花より近くの花を取ったという訳か。普通近場で済ます場合は花って表現はしないんだろうけど、どっちも美少女だからね、この場合。

フェイトちゃんは以前はユーノ君に対してつつけんどんな態度だったんだけど、彼の真面目で優しく実直なところに母性をくすぐられたらしい。なんでも放っておけないホルモンが彼からは分泌されているんだってさ。流石は男の娘、保護欲を掻き立てるその容姿は伊達じゃない。

「って話が違うでしょ。何か溜め息ついてたみたいだけど、どしたの？」

「(やっぱりフェイトちゃんの声ってあれだね)ドジっ子神子を彷彿とさせる癒し系ヴォイスだよ。中の人と一緒になのかな?」ってそうじゃねえや、いやまあ、犯人がさ、実は管理局の局員っぽくってさあゝあははゝ」

驚愕を顕わにする二人。そうだよ、まさか正義を掲げる組織がいくら危険な能力を保持しているからって殺害を許可するような組織だと思わないし。かく言う私もとある点に気付かなかったら二人と同じリアクションを取っていたと思う。

「まあでもさ、私の予想が正しかったら・・・これは多分個人レベルでの判断で行われた事だと思うよ。もし組織だってみこと君を殺すつもりならもっと暗殺向けの部隊を寄越すだろうし」

「暗殺向けの部隊？」

「そ。私もプレシアさんに確認をとって調べた事なんだけどね、管理局には秘密裏に危険人物の排除や重要人物の護衛とかを影で行う部隊があるんだって。人員も規模も極秘中の極秘らしいんだけど、Sランク以上の犯罪者とか、それぐらいの危険人物とかにしか動かない部隊という事しかわからなかったんだけど」

まさに管理局の闇を背負ったといえる部隊なんだけど、みこと君を狙うとして確実に消そうとするならこの部隊を使うのが適切である。暗殺専門なぐらいなんだし、証拠を残すようなへまはしないだ

ろつし、殺すなら胸を貫くのではなく頭を吹き飛ばした方が遙かに効率的だ。

・・・自分で言っていてアレだけど、よくもまあこんなに危険なことを考えつくものだと思う。これは実際にゲームとかで出てくるような暗殺部隊のイメージがそうさせているんだけど、何かね……

「で、普通そんな部隊の人間が魔力を辿らせるようなドジをするのは考えづらいし、普通そういう人のデータって照会できないようになってるものの筈なのにこうやって簡単に特定できる人物が暗殺を主にするような仕事をする訳ないしね」

つまりは指令などではなく私怨などで動いた可能性が高く、独断で動いた線が一番濃厚だろうというのが私の見解。そして風花ちゃんから聞いた八神家の秘密と特定できたとある人物、これらを総合して考えると一つの答が見つかったのだ。

「・・・で、犯人の正体は？それに何が目的なの？管理局の人間がどうしてこんな……」

将来は執務官として働くことを目標としていたフェイトちゃんだ

けに受けた衝撃はかなりのものみたいだ。ユーノ君が後ろから支えていて目で話してと訴えてくる。

「襲った実行犯は使い魔で、黒幕はギル・グレアム。地球出身の魔導師で元ストライカー級のエースだった人。

・・・そして、とあるロストロギアに人生を狂わされた人でもある」

その昔、といつても十五年ほどなのだが、まだグレアムという人物が全盛期のまま現場で活躍していた時。彼はとあるロストロギアの封印を命じられていた。

その名を闇の書といい幾多の転生を繰り返して数多くの災厄を撒き散らした最悪のロストロギアであるその封印を命じられた当初、彼は恐怖よりも歓喜で震えていたそうだ。

最凶最悪の名で知られたロストロギアをの封印を任せられるということはすなわち、自身の実力が高く買われているということであり、成功させればさらに名を上げることができ、自分はさらなる高みへと昇ることができるだろう

男は自身の力に酔いしれていた。魔法という未知の力、それが自身に備わっていてさらには並の魔導師とは一線を画す實力を持っていた彼が暴走するのは、決して想像できないことではないだろう。

そして迎えた闇の書との決戦。

蓋を開けてみれば酷いもので、部隊の武装局員のほとんどが死亡、その中には親友とも呼べる人がいたそうで、三隻あつた戦艦も一隻しか残らず、結果は言うまでも無く失敗。彼はその時初めて人生の挫折を味わうこととなつた。

その後の彼は以前にも増して自分が強くなることに貪欲になり、あらゆる任務をこなしては成功させ、局の中でもその實力を認められて提督の地位にまで登りつめた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・二人のはあんまり話したくはなかつただけだね、この話調べた過去の事件から私の推測で大分穴埋めをしている不確定要素の強い話とはいえ、言つてて気持ちいいものじゃないし。それでもここからが今回の事件に繋がることなので話さなきゃいけない。リンドンさん達には手を借りられない以上、テストロッサ家とユーノ



君には事情を説明して、八神家と協力してもらおう必要がでてくるかもしれないからだ。何故か最近アースラと連絡が取れないので、私の独断専行になるけど、これも全部は私と、みこと君の生きる日常を守るためだ。クビになっただって構うもんか。

「それじゃ続きを話すね・・・」

男は確かに実力を付けた。地位も名誉も手に入れて、他人から見れば成功者のように映っただろう。事実、彼に憧れる者が続出したこともあり、その最たる例がクロノである。父がアレなため、自分の目標としてはオールマイティで遠・中・近距離に対応できる戦闘をこなす彼に並々ならぬ羨望を抱き、才能が人より毛の生えた程度だったクロノだったが、死に物狂いの訓練の末に、ニアスランクの実力を手にして若くして執務官にまでなったのだ。それほどまでにギル・グレアムという男が残したものは多く、後に続く者たちの目標であり、士官学校の教科書にも彼の活躍は書かれているものは数多く存在している。

だが、それらが彼を満たす事など無かった。

彼は自身の唯一の失敗、闇の書という辛酸を嘗めさせられた相手に復讐しなければ自身の誇りを取り戻せないと考えていた。

だが相手は転々と世界を渡る、特定するのも困難である闇の書を見つけるのは並大抵のことではなく、八神はやてを見つけたときなどどれほどの歓喜に震えたことだろうか。

そこからは簡単だ。早くに両親を失った彼女の身元を引き取ると、彼女をなるべく周囲からの目にさらされないよう認知阻害の結果を張り、使い魔であるリーゼアリア、リーゼロットに監視をさせて、覚醒の時を待っていた。だが、そこでイレギュラーが発生してしまった。計画に大きな障害をもたらすであろう存在が八神はやての前に現れたのだ。

「それがミコト、そしてあの老人というわけか」

「そう、非魔導師でありながらロストロギアであるジュエルシードを破壊しうる力を、彼は危険視していたんだと思う。私の監視命令も本来であれば使い魔にやらせて暗殺させようとしていたかもしれないし。私の方がランクが高かったから上層部が認めなかったんだらうけど、普段なら嫌気のおさず魔法至上主義がここにきて役立つとは思わなかったんだけどね」

そうして焦った彼は使い魔に命令してみこと君を襲わせた。だけど、いくら経験豊富だといってもそこはエリートを通してきた魔導

師たるせいだろう、胸を貫いた程度で死んだものと仮定し見逃してしまつた。これが殺しに慣れている者ならば絶対にしない筈のミスなのだ。つまり、殺しになれていない、あくまで相手を『倒す』のが主だつた彼らに『殺し』のことなどわかる筈なかつたのだ。

「……カグラ。何でそんなこと詳しく知ってるの？ていうか殺し屋の心理をどうしてそこまで理解できるの？」

「勉強してたからね、犯罪者心理っていうのは。一応執務官を目指して頑張っていたからこんなことも勉強してた方がいひかなつて」

「……実際は前世の大学での専攻が心理学だつたからその分野の本を片っ端から読み漁つたのを覚えていただけなんだけどね、と心の中で付け足しておく。」

「つまり、闇の書への復讐のために邪魔になるからミコトを殺そうとしたんだね。……許せないよ、そんなこと。しかも自分の都合のためにミコト達が来るまではやてを独りぼっちにしていただなんて……ッ！」

「これはもっリンディさんには？」

「いや、最近何故かアースラと連絡が取れなくてね。それに言ったところで如何こうできるレベルじゃないし、だからここは私と二人、そしてできればプレシアさんに協力をお願いしたいんだ」

多分八神家の皆と風花ちゃんも何かしらは感じて警戒はしている筈。だったら私たちは影から手助けをしてあげればいい。きっと動き出すタイミングは覚醒の瞬間。書には管理者、つまりははやてちゃんしか干渉できないから、狙うとしたら覚醒する直前の無防備なところだろう。

そして偶然遊びにきたなのはちゃんとプレシアさん達にも事情を説明した後、この事を伝えるべく風花ちゃんに念話で連絡を取り合いながら情報を交換しあい、蒐集が完了する予定のクリスマス当日、はやてちゃんへのサプライズが企画されているその日を目途として、はやてちゃんもみこと君も助ける方法を話し合うために魔法関係者全員で念話によるネットワークを繋げて擬似的な作戦会議を行うのだった。

あと、僅か……

運命を左右するその日まで、

第三十四話 「カウントダウン ～otherサイド～」(後書き)

やっちまった・・・クロノさんとぬこ姉妹の関係を無くしてしま  
った上にクライドさんとグレアムの関係性までチャラに・・・

でも、そうでもしないと命君が彼らを袋叩きに出来ないんですよ。  
身内の知り合いになるとどうしても本気出せないので、彼。

ですから今回のお話で読者様が離れていったとしても私に後悔は無  
い！こうすることは割と初めから決めていたことなのでっ！（でも  
離れたら離れたで酒に逃避する用意をしているチキン。チュウハイ  
以外に手を出してみようかな？）

いくら復讐のためとはいえ子供ひとりに苦しみをぶつける彼の行動  
はあまり好きじゃなかったの。仕方の無いからって理由でもそれ  
は納得できないものだと思うのです、私は。

ですから今回、彼らには完璧な悪役サイドに堕ちてもらったためにこ  
のような駄設定をつけてしまうことに・・・

原作ファンの方に一言、

勝手に安っぽい悪役にしてしまったって本当にすみませんでした！

第三十五話 「オリ主は遅れてやってくる」(前書き)

今回のサブタイ、気づく方はわかると思いますがとあるアニメのサブタイに倣っています。アレ好きなんですよね〜

チエエエエストオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

の掛け声と万丈ヴォイスに一目惚れしたのはいい思い出です。

それでは本編をば!

第三十五話 「オリ主は遅れてやってくる」

S I D E 命

「俺、復活！………一人でも淋しさが増すだけだ、これ」

二カ月ぶりの現実世界。これだけ言うとは何か変な印象なんだけど、内面ですつとスパルタなんて言葉が温く感じるようなシゴキを受けていたのだ。目覚めと同時に思わず叫んでしまったんだけどシヨウガナイ。

まあ本当ならもっと早くに目覚めていてもよかったそうなのだが、俺の中にあるクウガとしての力を魔導具に移し替える作業に多くの時間が掛かってしまったのと、修行自体があまり順調とは言えなかったことで、一カ月も予定を延ばすことになってしまったわけだが・



「点滴二つも点いてんのかよ、これじゃまるつきり重病人みたいだな」

『少なくとも重傷人ではあったんですけどね……』  
「やれやれといった調子の崩の声と、」

『命よ、何やら外界の様子が変ではないか？ 異様な雰囲気を感じる……』  
警戒を促すような碎羽の声。

「え？……あつ、ほんとだ。多分結界かなんかの中かな？ でも何で？ 何の魔力も持たない俺が無意識で結界に閉じ込められるなんて……」

意識的に結界の中に割り込むことはできるのだが、その際はアークルとのユニゾンが必須だし、もしこれが俺を狙ったものだとしたら範囲が広すぎる。

「……と、いうことは……！ やべえ！？ 外だ！ 多分外で誰かが魔法を使ってるんだ！」

おそらく俺は広範囲の封時結界に巻き込まれた形でこの空間に取り残されているのだろう。それにさっきから町の方がピカピカ光ってるし、それに見たことある光だしなあ。あれ。ピンクに金色はなのはやフェイトだとして、銀は観たことねえし…あれがはやてか？とするともう覚醒は起こっちゃまってる!？

「うわひよっとして寝過したか!？こんな一大事に何寝てたんだよ俺のバカ!」

『バーカバーカ』

円、うっさい。

俺は急いでベットから飛び起きると、手術着のままだった格好からシャツとジーパンに急いで着替え、上にジャンパーを引っ掛け、じいちゃんの実体化を待たずに屋上へと急いだ。

「くそっ!いくら内面世界での経験があるつっても体の方は二カ

月も寝たきりだったからな、思い通りに動かねえ！アークル呼び出して無理矢理ユニゾンで動かすしか！」

そこまで考えてから、走っていた足を止めて内面に意識を沈める要領でアークルの心に呼びかける。

「（おいアークル、聞こえてたら返事してくれ！今何処にいる！？）」

「（命ちゃん！？目を覚ましたの！？）」

「（話は後だ！とにかく今俺は病院の屋上に向かっているんだけど、お前今どの辺にいる？）」

「（大丈夫！命ちゃんが私を求めるのならその場に召喚されるようになっていくから！だからそのまま屋上に向かって！このまま今の状況を説明するから！）」

話はこう。

はやての病室で談笑していた八神家＋聖祥のメンバー。そこに突如として大きな魔力の反応を感知した魔導師組が退室して、非戦闘要員のシャマルさんとアーケルが残ってアリサとすずかを誤魔化すことに徹していた。

そしてアリサたちが帰ろうとした時、忽然とはやてが消えてしまい二人がパニックに。何とか落ち着けた後、シャマルさんも消えてしまつて転移魔法が何かだろうと当りをつけたアーケルが二人を連れてなるべく遠くに逃げようとしたところに俺から思念通話が届いたという訳である。

「（それにしても、ここまで大規模な結界があるのにアースラの皆は何やってんだろ？いくらばれないように事を進めていたとはいつても、普通ここまででかい魔力反応、見過ごさないと思うんだけど・・・）」

「（ああ、それなら多分、帰ってきた駄目亭主のせいだと思うわ）」

「（ハ？・・・って、まさか……）」

「（そう、クライドって人、この前戻ってきたみたいなのよ。その尋問か何かで今アースラはほとんど機能してないってプレシアさんが言ってたわ。ハッキングして艦内カメラで確認したから間違いないわ）」

帰ってきてたの例のマダオ!?

めっさ気になるけどもここは我慢。管理局の介入が無いのなら遠慮無くアレを使うことが出来る。アレを使う際、多分ロストログリア並の反応を起こす自信があるし。

『下手したら次元震でばかぐん、だもんねえ』

何故にあなたは楽しそうなの壘姐さん？そこは緊張する場面とちやいまつか？・・・聞いて無いし…

『無駄話はそこら辺にしておくんだな。そろそろ屋上だ、心の準備をしておけ』

『『『了解』』』』

『……気が抜ける……』

ゴメンね裂神。でも、何でか知らないけど皆さん緊張感とやらが欠如しているみたいなんだ。俺でさえこれからする事に何の気負いも無いのに驚いているくらいだし。

『大丈夫！あれだけ一生懸命修行したんだもん！絶対にうまくいくよ！』

ありがとう柳。

そして屋上に到着した俺はすぐさまアークルを呼び寄せ、ユニゾンしようとしたのだが……

「命君！……良かったあ、無事に目を覚ましたんだねっ（ガバ

ッ」

「……………何でするかとアリサまで居るんだ？」

「知らないわよ。いきなりピカアアって光ったら何故かここにいたのよ」

「私の呼び出しに巻き込んだじゃったみたいね」

「暢気すぎやしないかあんさん……」

これから結構大きめの戦闘に行くつつうに何て厄介な……

「ハアアアアア……、しゃーねえ。アークル、ユニゾン」

とりあえずはこの二人を安全圏に連れていくのが先か、ユニゾン

していつもの大人Verになった俺は二人を俵持ちにして、ビル群の間を跳びながら結界の外の方へと駆けていった。二人からものっそい勢いで文句を言われていた気がしたが、途中から何の声も発さないようになっただので落ち着いたかと思いついそのまま戦闘の余波がない位置に二人を置いて現場へと急いだ。・・・二人が妙にくつたりしていたけど、きっと二人はジェットコースターとかのアトラクションに弱いんだろうという事にしておいた。

~~~~~

~~~~~

所変わって市街地。ここに二組の魔導師が激突していた。



「目を覚ましてっばあっ！ アクセルシューター！」

『All light accelerate shooter』

「こつちも行くよ！バルディッシュ！」

『Yes ser photon lunser』

白と黒のバリアジャケットを纏った二人の少女と対するは漆黒の羽を翻す呪われた存在と謳われた魔導書。

「盾よ」

その一言と翳した片手だけで少女らの魔法を防ぎ、圧倒的ともいえるその差に真っ向から立ち向かう少女たち。もう一組の方は、

「クツ、貴様らアアアアア！邪魔をするなアアアアアアア！」

「私たちの悲願！お前ら如きに邪魔されてたまるかアアアアアアア

「!!」

苛立たしげに咆哮する二人の仮面の男。そして、

「ねえ、神楽ちゃん？何か言ってるみたいだけど聞こえる？」

「さあて？私、みこと君以外の男の人の事は知り合い以外は無視するって決めてるから」

「いいねそれ、私も今度からそれしよ」と

「舐めるなツツ！小娘共がアアアア！！」

そんな二人を嘲るような調子で話している二人の少女。

片方は飛行魔法で飛翔して魔力弾を搔い潜っているのだが、本来であればもう一人の少女は飛行手段など持ちえていない。それなのに何故飛んでいるのかというと、

「にしても凄いやねそれ。風神で作った竜巻を足下で固定して、それに乗って飛ぶなんて……まさに風神少女」

「私別に天狗じゃないから、確かにあれをヒントにしたけどれっきとした人間だから」

風魂を作る要領で小型の竜巻を固定し、それに乗ってサーフィンのように飛ぶ姿はある意味魔法以上に魔法らしいといえる。

「（それにしても何時までこんな事続けなきゃいけないの。いい加減イライラしてきたんだけど、アイツらに一発ぐらい反撃したいんだけど）」

今現在、なのは達と違って彼女達がしているのは戦闘というには少し違う、ひたすらに仮面の男達の猛攻を躲し、防ぐ、それだけの単調な作業のみなのである。流石に「自分達が命を殺そうとした」発言には心底八つ裂きにしたい衝動に駆られたが、そこは命との約束を思い出し何とか堪えた。だが、目の前で守護騎士たちを消され、命や雪而を殺される幻影を見せられたはやはり悲しみに狂い、書を暴走させてしまった。

そこで彼女達は当初の計画からは離れてしまったが、書の管理者であるはやてを呼び起こすのをなのは達、仮面の男達を引きつける役を風花達が受け持ち今に至る。この振り分けは純粹に力量から判断して、一体二であればまだ多少有利だと判断し、風花達よりも実力で劣る二人が管制人格を相手にすることになり、二人の相方であるユーノとアルフは後方からブーストやバインドなどで支援して、二人の隙を庇っている。こうして何とか実力的には拮抗できているのだが、風花達の方はというと、先程命が目覚めた事を感じし（命に関してのみこの二人は人外の反応をします）、命がこちらに来るまでの間の時間稼ぎをしている。

「（！ もうすぐだよ風花ちゃん！）」

「（わかってる！）」

急に逃げる体勢から向き直り、自分達にニタァ〜と笑いかける少女達。不審に思いその場で身構えてしまった男達。しかし、それが彼女達の狙いであった。

チヨンチヨン

「ん？なん……………ッッ！？」

振り返って何かを言おうとしていたようだったが、最後まで言う事無く地面に吸い寄せられるように落ちていった。

「なっ！？アリ……………」

そして片割に呼びかけようと隙を見せてしまったもう一人にも、背後から鉄拳を喰らわせて地面に叩きつけた人影。それは少女達が一番待ち望んでいた姿……………

「よっ、遅れてゴメン。すずか達の避難で遅くなっちまった」

神名命の姿が、そこに在った・・・

第三十五話 「オリ主は遅れてやってくる」(後書き)

はい！めがつさ中途半端なところで切った感がありますが、長くなりそうだったので戦闘は次回に持ち越しということにしました。

次回では一応オリ魔導具を出す予定なんですけど・・・

命「何か問題でも？」

いやいや、オリつつつてもアニメ作品からパクるんですけど、その際わかりにくいものもあると思うんですよ。私的にカッコいいと思っただけの黒歴史扱いの作品だったりするもので・・・

それではまた次回！

哲章さんヴォイスはカッコいい！異論は聞きません！！

### 第三十六話 「死闘の幕開け」(前書き)

気が付けばこれで50オーバーなんですよね、投稿数。

長く続いた記念と言う訳で、これを書く合間に酒屋で割と珍しめの  
チュウハイを買ってみたい。

この小説を書いている事を友人等には話していないので一人で祝っ  
ていました。

……べ、別に一人だからってさみしくなんか……

一人でツンデレしても虚しかったので本編をどうぞ！

今回もgodgodだっぜ！



第三十六話 「死闘の幕開け」

S I D E 命

「遅れた上に申し訳無いんだけどさ、なのは達の援護に行ってもらってもいいか？ここは俺一人でやるから」

「なっ！？何言ってるの！只でさえ病み上がりなんだからここは三人で・・・」

慌てて共闘を申し出る風花に、それに同調するように何度も首を縦に振る神楽。いても問題は無いかもしれないけど……

「いやな？これから周りの被害とか無視した戦いするから巻き添えにしたくないんだよ。まだ完璧なわけじゃないんだ今から使うヤツだから怪我したく無かったらあっちの海上付近の戦闘に参加してくれ」

じゃあこれが終わったら何でも言う事一つ聞いてもらおうからねっ、と捨て台詞を残して何とかここから離脱させることができた。ふう、これで心おきなくアイツらを……て、あり？

倒れていた男達の仮面が剥がれると、そこには猫耳尻尾付きの女性性が！

「変身魔法か……関係無いけど」

相手が女だからって手加減なんて微塵も考えるつもりはない。俺もじいちゃんもそれなりに痛かったんだから腕の一本ぐらいはぶつた切るぐらいいしないと気が済まん。主に俺の中の刹那が。

『女だからって容赦スんじゃないやねエぞ？あの駄描共には灸をすえてやらねえとなあ〜？』

怖ええよお前。頼むから内側から殺気出さないで、俺も怯みそうだから。

そんな事を考えていると、猫姉妹（今命名）が射殺さんばかりに睨みつけてくる。おお怖っ、こっちもいい加減に準備するかね。

取り出すのは鉄丸のような緋色の玉。新しく作った魔導具その一その名も 燈眼<sup>ひがん</sup> そのまんまですねーミング。これの使い方はいたって簡単！これを一飲みすればあら不思議！

「何だ？自分の炎で焼かれている……のか……？」

そんな声が聞こえてくるが、これはそんな自殺用の物では無いので悪しからず。燈眼の能力は炎術師としての開花を促す事。それはつまり、俺自身の炎の型を創るというものだ。つまり今俺を包んでいる炎は暴走も火竜の力を借りているのも無く、俺の意志でこの形を維持しているものということ。

「そんなじゃま行きますか、竜ノ炎拾式イ！」

文字を書く必要など無い。これが俺の炎ならば力を借りるための手順を踏む必要は無い。ただ命じる、それだけで炎は応えてくれる！

俺を包んでいた球形の形から徐々に形を変えていき、やがて大きな竜を形作る。それは火竜の度の姿とも違う、西洋の伝承などで出てくる羽根が生えて手足も付いているそれは竜というよりもドラゴンといった方がしっくりくる。そして変形を終えるのと同時に名を叫ぶ、背後のドラゴンの咆哮に合わせて。

「焼き尽くせ！ 創龍ウウウウウウ！」

……そして俺は背後の龍を従えて眼前の敵へと飛翔した。

S I D E O U T

S I D E    リーゼアリア

「このっ！父様の邪魔をするなっ、貴様のようなガキに構っている場合じゃないんだ！！」

私が繰り出す魔力弾に微動だも反応しない目の男。データにある通り本気で戦闘をする際は子供の姿から大人へと変わるといのは本当だったらしい。だがそれでも単体でSランク相当の実力を持つ私とロツテなら以前のように圧倒できるものとはばかり思っていた。だがこれはどういう事だ？

「無駄つつてんじゃんかバーカ」

男はこちらの行動に飽きてきたかのような態度で空中に佇んだまま。それなのに私の攻撃が奴に当たることは無かった。何故なら・

『何回やっても無駄なのがわかんねえか？やっぱ猫が物覚え悪いっていつのマジだったんだな』

背後の龍が侮蔑を含んだ声で喋ると、男の周りにバリアが形成されて一切の攻撃を弾く。だがこの攻撃は囷！本命は後ろからの、

「バインド&砲撃でどっか〜ん、だろ？読み読みだよ」

そんな事を言ったがもう遅い。既に砲撃魔法は放たれているし、バインドも効力を失ってなどいない。だというのにコイツ、どうしてそこまで余裕が……？

疑問が晴れる事は無く、魔法はそのまま直撃。殺傷設定でしかも魔力の6割近くを使った真正銘、必殺の一撃。これで跡形も無く消えているのを確認してそのまま闇の書が戦闘している現場に向かおうとした、その時だった。

創龍…

炎縛の陣

「ッ!? 馬鹿なッ!?」

「クッ! これは……炎の……糸?」

離脱しようとロツテと転移しようとしたその時、無数のナニカに体を拘束されて身動きがとれなくなってしまった。よく見てみるとそれはさっきまで戦っていて止めを刺した筈の男が使っているような、赤い色をした炎の鎖だった。

「まさかそんなッ! さっき消滅を確認したばかりだぞ!？」

それって何かの見間違いなんじゃない？

声が聞こえてきたのと同時に私は左腕を、ロツテは右足を切断され、声も出す暇も無く目の前に現れた炎弾を防ぐべく痛みを堪えながら何とかプロテクションを発動させたが痛みのせいでいつもよりも構成が甘くなってしまう、簡単に破られるとそのまま怒涛のように押し寄せてくる炎に呑みこまれて私たちは為す術も無く再び地面に叩きつけられてしまった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

俺の炎、創龍の能力とは名前の通り“龍を形作る”ただそれだけの能力だ。だがこの能力、かなりの応用が利くのだ。

炎で龍を創る、それは火竜も伝説上のドラゴンであろうとも例外では無く、俺の想像がしつかりとしたものであればその能力を引き出すこともできる、投影魔術の竜Verとも言える能力である。



先程猫達に俺がやったことはいたって単純なもの。まず大型のドラゴンを創造したときにその中に円と崩を予め移しておく。これは合体火竜と同じ要領で、それぞれ火竜達の任意で能力が発動できる、いわば独立型のビットのようなもので、これのお蔭で陽動が思いの外楽にできた。

俺はと言うとアイツらの片割が死角を突いてくるのを読んでいたので、円が攻撃を防いだ時に墨との合体能力で『実像を持つ炎の幻影』と入れ替わり、その場から退避、そして油断しているところに碎羽でスパン。

『いや、中々卑怯な戦い方じゃないか命よ？』

「否定はしないけど、これをするように叩き込んだのは紛れも無いお前だからな？円」

卑怯？……そういえばそうかもね。シグナムさん辺りに見せたらかなり怒りそうではある。

……かと言ってもやめるつもりは毛頭無いけど

「馬鹿な……」

「この化け物め……ッ！」

「猫又妖怪みたいなアンタ等に言われる筋合いは無いよ」

そもそもそつちが喧嘩を売ってきたんだろくに、恨むのは筋違いだ。それよりも聞きたい事があつたんだつた。

「おい、お前らの背後にいる親玉。今この町にいるか？」

ビクッと反応する処を見るにどつやらこの様子もどこかで見物しているみたいだ。だって……

「自分の部下の危機には現れる……か。何とも情に厚いことだ……つと」

上から降ってきた氷の弾丸を避けながら新魔導具その二を握る。こいつは猫とは違う、そんな予感が俺に危機感を与え、それが本当に危険なものだとすぐにわかった。それはこの攻撃がさっきまでの魔力弾の弾幕に勝っているとかではない、

「グハツ!?……………何故……………?」

「嘘……………でしょ……………?父様……………(ガクツ)」

『酷い……………味方ごと攻撃するなんて……………』

柳の言っている通り、先の攻撃は俺を狙っていたものだったが、その際にこいつ等のの存在を無視してきたのだ。おそらくこの猫達の主だというのに、だ。

「ふん、この役立たずが……………満足に私の命令を遂行することも叶わんとはな……。私のプライドを穢すだけの貴様たちなぞに用は無い。疾く消えろ」

まるで塵を捨てるような、何の感傷も感じられない声音にこの世の終わりのような顔を浮かべる二匹。必死で、チャンスをとるか、今度こそは！と叫ぶも、その声を聞くことすら嫌悪を示すように、

「囀るな、これ以上は時間の無駄だ。お前達の最期の仕事はこれだ」

「おい……」

そこから声を紡ぐ事が出来ない。目の前の老人が二人にデバイスのような杖を翳した瞬間、悲鳴すら残さずに二匹の魔力が吸収され、そこ残ったのは先程俺が切断した箇所が綺麗に無くなっている猫の死体だけであった。

殺した。

その事実だけが頭にこびり付いて他に思考を回す事が出来ない。

……どうして？何故？味方だろ？それを何で殺す事が出来る？あんなにも無感情な顔でどうして殺す事が出来るっ！？

別に同情している訳じゃない。でも、どうしても理解が及ばない。未知の物への恐怖、そして胸の奥から湧き上がってくる苛立ちを込めながら俺は老人に叫んだ。

「おいっ！どうして殺す必要があった！？そいつ等はアンタの事を“父様”って呼んだんだぞ！アンタにとってあの二匹はそんなに価値の無い存在だったとでもいうのかよっ！！！」

俺の激昂も意に介さないとばかりに肩を竦めて見せる老人。その行動の一つ一つが癪に障る。人間がこれほどまでに濁った目をすることができるのだろうか？俺はどうしても目の前いるモノを人間として見る事ができなくなっていた。

「彼女達は私の使い魔、私にはソレの生殺与奪の権利がある。役に立たない道具に存在する価値など無いだろう？」

「なっ……！！？」

「私の誇りに塵一つでも着けられるのは我慢ならぬのでね。私は人生での唯一の汚点である闇の書をこのデュランダルで封印し！そうして初めて私は私を取り戻せる！あの時から止まっていた私を！クハハハハハハハ！」

・・・瞬間、俺の中の全ての感情が消えて、俺は目の前の喋るナニカに向けて崩を放った。

「・・・やはり君は邪魔な存在のようだ。以前君がジュエルシードを破壊したところは見せてもらった。中々に興味深い能力を持っているようだ。所詮は炎。私のデュランダルの氷結魔法は何物をも凍てつかせる。それがあの時に使っていた極大の炎であってもね。これはあの闇の書を永久に封印するために私が作り上げた最高のデバイスだからな」

崩を氷のシールドで防ぐと謳うように自身の優位を話す。もう喋るな、口をきくな、動くな。

これ以上、アレから発せられるモノ全てを許容することなどできない。生きている事すら許せない。

「・・・それじゃ聞くけど、アンタは自分のプライドなんかのために全く関係の無いはやてを殺すために、俺やじいちゃんを殺そうとして、あまつさえ自分を父と慕ってくれた使い魔すら手を掛けた、と?」

はやてが俺達に会うまで孤独だったのも、すべてはお前の下らない見栄を守るためだと言うのか?俺の問いにどこか苛立ちを感じさせる声で答える老人。声を聞きたくは無い、けれど、これだけは確認しておきたい。もし・・・

「プライドなんか...だと?貴様のような若造に何がわかるというのだ?私は闇の書に出会うまでは成功者の道を邁進していた、それなのにだ!

あの忌々しいロストロギアのせいで私はすべてを失った!

仲間も!

親友と呼べる者も!

何もかもだ!!

そして無様にも生き残った私には何も残らなかった!

だから復讐する!私の人生を狂わせたすべてに!

関係無い者が死のうが知ったことかッ!!」

「そっ」

俺はそれだけを答えると意識を切り替える。今から始めるのは戦闘なんかじゃない、だからこそ戦闘思考から別のものに切り替える。

『わかってますね？今から始まるのが何なのかを』

『……正直言うと、私はあんまり薦めたくないんだけど。でも……止めないわよね？命ちゃんは』

崩が確認をして、アークルが俺を宥めようとしたようだけど俺との意識がリンクしている以上止めようがないことはわかりきっているようで、仕方無しといった感じだ。

柳も同じように心配しているようだけど、もう歯止めが利かない。コイツの存在を俺が許す事が出来ない以上、することは決まっている。

……腹は括った、覚悟もできた、さあ始めよう。



「悪いね、もうアンタの夢は終わらせるよ。だから

殺す」

殺意。純粹にまで殺すという事だけを思考して、それ以外のすべての感情を消す。

俺の発する殺気に応じるようにデバイスを構える老人      ギル

「グレラム

ここにアイツらが居なくて良かった。

その思考を最後に、俺は炎の全てを握った魔導具      宝玉の

姿のままのそれに注ぎ込む。そして・・・

「行くぞ・・・ 魔神器 十束剣」

・・・今ここに、狂気の男との死闘が始まった。

### 第三十六話 「死闘の幕開け」(後書き)

一応出しましたオリ魔導具、燈眼！

命君自身の炎術師としての能力を覚醒させる目的で作られた魔導具。急ごしらえのために副作用として目の色だけが緋色になってしまっている。中二感がパないっすね！

次回も新魔導具登場！んでもってグレアムさんとの決戦！

あ、序に言つときますと、この戦いが決着する頃にははやては現実に戻っていて、闇の書の闇へのフルぼっこタイム直前ということになっています。

クロノが居ない代わりにオリキャラ3人組と雪而さんに頑張ってもらおうかと。

管理局組は結局手出しできないまま終わるという、空気感。

………決して私が扱いをオチにしか持っていけない程度の文才しか無かった訳では無いんだからね！？勘違いしないでよねっ！

うわーーーーー、自分でやっててあれですけど、無いですね。

お目汚ししませんでした。

それではまた次回の更新で！

第三十七話 「許すことのできないこと」(前書き)

ヒヤッハー！

と、最初からテンションがおかしいですがこれも仕方無いんです。

何とも言えない文章しか書けず、スランプ(元からでは?)というツッコミはスルー)脱出を図りテンションを高めに執筆した結果、今までと変わらない駄文に！

・・・本当にすみません。

それでもOK!という方はこの先もどうぞ！

第三十七話 「許すことのできないこと」

S I D E 命

「ふっ、大層な名前の割にはただの剣のようだが？そんなもので私を止められると思うなよ小僧オオオ！」

俺の呼び出した魔導具、魔神器 とつかのつるぎ 十束剣。これを見た老人 ギルII グレラム は恐れる事は無いと言わんばかりにその年齢からは考えられない速度で飛行して牽制用の魔力弾を複数発射してくる。

命の知るところではないが、彼の实力は確かにストライカー級のものではあるがそれはあくまで全盛期の話。彼が若かりし頃の事ではあるのだが、では何故今も変わらない動きができる

のか？

「・・・・・・・・」

弾の制御も速度もなのはが使うそれよりも遥かに勝っている。込められている魔力だけなら引けをとらないだろうが、そこは熟練の魔導師の面目躍如といったところ、制御に一切の隙が無く以前ユーノがジユエルシードで実力を水増ししていたものとさほど変わりないように思える。

だが知ったことではない。相手の実力が高かろうが俺のすることは変わらない。俺は手にした剣の腹に手を当ててコイツの能力を解き放つ。

「超力招来……天馬！」

その一言で俺の周囲に爆発的な風が巻き起こり、それが迫りくる攻撃を相殺し、その渦の中心の俺に変化が起こる。

虹彩の色が碧色へと変貌し、手持ちの剣が姿を変えてボウガンの

ような形態を取る。そう、これが十束剣の能力、創造変化。

予め元となる武器を造った上でそれを溶かして全てを混ぜ合わせた一つの武器を造りあげる。TCMと同じような原理だが、剣以外にも形態を変えることができる。

そのうちの一つがこの天馬である。はっきり言ってペガサスボウガンと変わらないのだが、そこに少しだけ違う点がある。

「ふんっ」

俺が使いどころに苦心していた金の力の片鱗の雷撃、これを武器に流し込むことでライジングの時のような形態へと変化して、その性能を飛躍的に向上させることができる。

「（成程……今使用した武器の能力は形態を変化させることか）」

「こちらの様子を窺う敵。おそらくこちらを警戒しているのだろうが、天馬の前でそんな悠長なことをしている余裕など無いと言うのに……」



相手へと銃口を向ける。奴はこれから放たれるものをただの矢だと高を括っているようだが、

「死ね」

紫電を纏い眼前の敵へと翔ける矢は、悉くバリアを撃ち貫いてグレラムの頬を掠めた。頭を吹き飛ばすつもりが、どうやらバリアで方向ぐらいは逸らされたようだ。酷く狼狽している奴を尻目に飛行用の炎の翼を展開、奴の居る空中へと躍り出る。

そして視線を合わせる位置で滞空すると、怒りに満ちた目で何かを叫んでいる。

「何なんだ今の攻撃は！？ 影一つとして目で追えないどころか私のシールドを易々と突破するだっ！？ ぶざけるのも大概にしる！」

知ったことか。

まだ物足りないとはかりに吠えるのが鬱陶しくなったので、もう二、三発撃ちこんで牽制しておく。

「もうお前、喋んなよ」

「餓鬼がつ、少しばかり優勢だからといって図に乗るでない！！貴様が私を邪魔するという事はこの星を消すことと同意義だということに！！」

そうして語りだしたのはあのロストログアがいかに危険であるか、自分の持つデバイス以外では決して封印することが適わないものを自分が封印してやるのだから邪魔をするな、こちらに従えば俺を危険視している管理局の上層部の監視命令を取り下げて部下にしてやってもいい、との事。

「私、ギル＝グレアムが闇の書を封印すれば上層部の輩も私の意見を無視できなくなる。そうすれば君にかかっているあらゆる嫌疑を撤回することなど容易い。さあ、私に協力してくれ。共にあの忌まわし」

「ハア……超力招来　　白虎　　」

長々と語ると思えば、何と下らないことだろう。グダグダと喋っている間にとっとと撃つときゃよかった。

「ッ！？貴様、今の話を聞いてまだ私の邪魔をするというのかつ！  
？この世界が滅んでも構わないとでも「構うか妄言癖付きの糞碌糞爺が」何だとッ！」

「何度も言うけど、お前喋んなよ。お前が手え出そうが出すまいが知ったこっちゃねえんだよ、家族の不始末ぐらい家族で着ける。他所モンの、しかも俺を殺そうとするような、自分を慕っていた使い魔すら潰す下の下以下のクズに頼る必要性なんて皆無なんだよ。理解できたか？

「だったら死ね」

姿を変える。今度の創造変化は服装すらも変わり、黒衣から青みがかった白色の尾の付いた鎧へと変わり、ボウガンもその姿を剣へと戻すが、先の野太刀の形態とは違い片手でも扱える大きさの洋剣となっている。

未だにこちらの変化に戸惑っている爺に手を翳して、

「白虎、氷雷拳！」

冷気と雷が渦を巻くように絡み合い、強大な竜巻となってグレアムに襲い掛かる。

「（何だこれは！？デュランダルの氷結魔法と同格の冷気だっ！？）クツ、防ぎきれんか」

張っていたバリアにひびが入ったと見るや、すぐに短距離転移を行いその場から離脱。

そのまま様子見のために近くのビルへと退避して状況も整理し直す。

「（何なんだあの力は？報告されたデータで確かに水を操る剣があるとは聞いていたが、あの剣は水で形成されたものでは無かった…それどころか私の魔法を紙同然のように打ち破る破壊力など無かった筈…ッ！では何なんだアレは？これではまるで……）」

……かつて闇の書と戦闘していた時と同じではないか……

頭に浮かんできた記憶を振り払う。……いや違う、今の私はあの頃とは違う！魔力は先程使い魔から取り込み全盛期と比べても遜色無い筈だ。デバイスだって量産型とはわけが違う、今まで得た全ての魔法知識を使い造り上げた現役最高を誇るものだぞ！臆すなギル!!グレアム!

自身を叱咤して、冷静に戦況を分析しようとしたその時、

「 四方より交わりて万象を凍て尽かせ、  
 氷結界 氷  
 葬刃ッ！」

刹那、壮絶な悪寒を感じて外へと飛び出そうとするが、遅い。

コンマ三秒もしない一瞬で自身の居るビルが凍りつき、壁という壁から氷柱が無数に飛び出してきた。窓から脱出を図っていたグレアムだが、氷柱に行く手を塞がれてしまい、足元か生えてきた氷柱を破壊するのに余計な手間を食ってしまった、脱出できたとはいえバリジャケットに多数の切り傷がつけられていた。

「へえ、大言言っただけのことはある…か」

そして頭上から降ってきた声に確信する。今の攻撃は彼がしたものだ。

「今のは何だ！？データではあのような大規模な氷結系の攻撃はできなかつた筈だっ！」

「だあかあらあゝ、口きくなつて言ってるだろうが、耄碌してるからってついさっき言ったこともう忘れたのかよ」

会話の余地などはとうに無い。グレアムの叫びを切って捨てる命。

……話すことなんか無いし、いい加減ウザいし目障りだし  
何より……

こいつは自分

の身内を手にかけた。

俺にとってそれは禁忌と同義だ。

前世では家族に支えられ、こちらに来てからも血が繋がっていないとはいえ家族と変わらない関係を築くことのできた人達と出会い、風花をはじめとした前世では得ることさえできなかった人達との繋がりを得た俺にとって、例え敵だとしてもあの行為を許容するなどできない。

あの猫達は素直に許せないし、同情するつもりなんて無い。だが、

それでもアイツらはアイツらなりに主人のためを思い今まで頑張ってきた筈だ。それをにべも無く捨てた上に“役立たず”と罵ったこの男はそれ以上に存在すら許せない。自分の手が汚れることなど関係無い。

……今ここで、この男を、殺す。

「さてと、もうあんま時間かけられないし、あっちも状況が変わっているみたいだし……」

こちらの意図に気が付いたのだろう、デバイスを構えなおして呪文の詠唱に入ったようだ。しかも妨害できないようにオートで行動するスフィアをこれでもかと設置してある。強行突破も無理じゃなさそうだがそれよりも余力を残せる方法を取った方がよさそうだ。

それでも時間はかけられない。海上から響いてきていた爆発音が次第に小さくなってきている、これが管制人格を静めている兆候なのか、それともこちらがやられているのか判別できない以上、ケリをつけるのならば次の一撃で決めるべきだ。

敵を見据える、呪文を妨害したとしてもおそらくは対処してくるだろう。だったら一番隙が出来る瞬間、魔法を放った直後を狙うの



み……！

滞空した状態のまま姿勢を屈め、片手を地につけるような姿勢をとり剣を逆手に持ち替える。

そして、

「喰らえッ！」

「白虎ッ！紅・

竜・剣！」

『eternal coffin』

・  
・  
・  
・  
瞬間、世界から音が消えた。

### 第三十七話 「許すことのできないこと」(後書き)

解説と言う名の言い訳的なナニカ・・・

・超力招来〜

この台詞は超魔神英雄伝〇タルの主人公が話数が進んでいく毎に手に入れた各階層にいる者の力を借りて機体を強化するとき最初に叫ぶ言葉。例で言うと、

超力招来！ 獅子龍神〇！

みたいな感じで、クウガの武器を出すにあたり今回使用した天馬以外は、ドラゴンが青竜、タイタンが剛毅といった感じですよ。

・超力招来 白虎

これは同じ作品で出てくる龍神〇の形態の一つからとっています。読みはびゃっご。

氷の力を司り、私が作中の変身の中で二番目に好きな姿でもありません。

原作では雷の兜というものを装備して、設定とOPでしか姿を見せなかった銀狼龍神〇の雷の力を使うことができるようになるもので、金の力の電撃にこの設定が使えそうだったので即採用した次第であります。

ちなみに、本来の必殺技では白虎登竜剣なのですが、火竜を使っているんだし折角だから名前変えてみようかなと思って勝手に改変してしまいました。

もし原作ファンの方がいらっしやったらごめんなさい！  
止めてっ、石を投げないでっ！

すみません、つい取り乱してしまいました。  
それではまた次回！

### 第三十八話 「私たちのやり方」(前書き)

皆様~~~~!!大変長らくお待たせしましたっ!

待って下さっていた方もそうでない方もお久しぶりにございます!

まだPCの方が本調子で無いというか、扱いに難がありました執筆スピードがなかなか上がりませんが、

最新話、どうぞ!

第三十八話 「私たちのやり方」

S I D E    アークル

命ちゃんと今回の一連の黒幕との戦いの幕引きは、

「ぐ……あ……か……は……つ……」

上半身を切り裂かれて死に体になっている敵。そして……

「……………」

その様子を眺める命ちゃん。勝敗は明らかだった。

最後の瞬間、発動した魔法を紅竜剣で諸共に切り裂いて、冷氣と合わさった斬撃はまさしく必殺の一撃となった。

「……やっぱり……やるの？」

先程までのやり取りを思いだしながらも聞かすにはいられない。

命ちゃんにとってはこの人がしたことなど到底許せるものではない。人が人を裁くという正義感からくる行動じゃないことはわかってる。これはただの怒りであるとわかってはいるからこそ、殺しなどして欲しくは無い。

殺してしまえばきつと、もう二度と家族の前で素直に笑えなくなってしまうから。

だから無駄かもしれないと思っていても聞かすにはいられなかった。人殺しなんて、彼にできる事では無い。もししてしまうとしたらそれは心が壊れてしまうことに他ならないのだから……

「なあ・・・」

未だに苦しげに息を吐きながら死んでいない敵を見つめながら誰ともなく声を掛ける彼の声は、どこか自虐の響きが乗せられたものだった。

「俺さ、さっきので殺すつもりだったんだ。間違い無く、俺が、この手で、ソイツを、殺そうとした、自分の意志で。」

・・・それなのに、殺してやるって思っていた筈なのに・・・コイツが生きているのに安心してている自分があるんだよ。

許せないのに・・・どうしようもない程に殺してやりたかった筈なのに、なぜ？笑えねエ・・・

結局俺にはそんな覚悟もできなかったんだ……家族を殺そうとした相手すら止めをさせない、放って置いたら余計なことを招くかもしれないのに……」

彼は殺意と捨てきれなかった甘さの中で葛藤していたのだろう。彼にだってわかっていている筈、手を汚す事はできても自分の今の生活を捨てることができなかった。放って置けばまた狙われるかもしれないというのに、彼女たちと笑い合うこれからを諦められなかった、だから最後の一撃の時にワザと手加減したんだろう。



不謹慎かもしれないけれど、私にはそのことがとても嬉しかった。前に風花ちゃん達に復讐するのを止めた命ちゃんが、今度は自身が復讐のために命を狩ろうとしていたのだから、これを彼女達が知れば悲しむことだろう。

本当に良かった…最後に踏みとどまってくれて、最後の最後で彼は修羅へ堕ちず人として踏み止まってくれて。

ユニゾンを解除して彼を抱き寄せる。小刻みに震えているのは寒さから来るそれでは無い。私は抱きしめる力を強めながら頭を撫で続け、彼が落ち着くまでそれを続ける。

「俺って中途半端だよなあ……結局真つ当にできたことなんて何一つ無えじゃねえか。死にそうになって心配かけるわ、黒幕に止めを刺すつもりがこの様だわ……ホント、情けねエ……」

「いいのよ……。私は嬉しいもの。命ちゃんがあそこであの人を殺さなかったことが。やっぱりあなたにそんなこととして欲しくなんて無いもの、私も火竜の皆も他の皆だつてそうよ。誰もあなたを責めたりなんてしないわ、むしろ私は誇りにさえ思つわ」

「　　ッ、冗談よせよ、俺は決めたことだつてまともにはできなかった意気地無しなんだ」

「　　いえっ！違いますっ。最後に命ちゃんは人として一線を踏み越えなかった、それは今の生活を捨て切れなかったからでしょう？それだけ私たちを大事に想っていてくれたんですもの、嬉しくない訳が無いわ」

「　　ッッ！！」

命ちゃんは顔を私に押しつけて声を殺して泣き続けた。その心境はわからないけれど、これで彼の心にシコリが残らなければいい、そう思いながら私は彼を抱きしめ続けた。

すると、喋れる程度に回復したのか、さっきまで死に体だった男がこちらに声をかけてきた。どうやら胸の傷だけを魔法で塞いで一命は取り留めたらしい。これで命ちゃんが人殺しになる心配は無くなったと思ひ、命ちゃんには悪いけど彼にはほんの少しだけ感謝しておくとする。

「ふ・・・そのような年端もいかない子供に、私が破れ去る事になるうとは・・・これではまるで私が馬鹿のようではないか……」

「ええ、その通りだわ。あなたは自分を慕ってくれた人を消してまで力を得て復讐を為そうとしていた。そんな人の望みが叶うなんて在り得ないわ」

「何故・・・そう言い切れる…？私が、この私の半生を賭けてまで為そうとしたことが無駄だと言うのかッ！！」

「当たり前よ。今日が何の日なのか知ってる？」

この日でなくともそんな下らない事防ぐことはできたのだから、ど…なんてったって今日は特別な日なのだ。今日この日に限り絶対に悪者の望みは叶うなんて事は在り得ない。だって…

「今日はクリスマス。子供の願いが叶う夢の日なんだから、どの道あなたの願いが聞き届けられることなんて無いのよ。悪い子のお願いを聞く程、サンタさんは暇じゃないんだから」

S I D E  
O U T

S I D E  
風花

「私、復活!!」

「……主、せめてここぐらいネタに走るの止めてもらえませんか  
……」

「いやや、A・S編やつちゅーのに私の出番が少なすぎるのは納得いかへん。せやから私は自由に生きると決めたんや」

命君と別れてなのはちゃん達と協力して何とかはやてちゃんを書から解放することができた。管制人格っぽい人にツツコミを受けているのはご愛嬌、涙目になっている八神家の面々と顔を合わせるのが少し気恥ずかしいんだと思う。顔真っ赤にしてるし。

「後はアレをみこと君が何とかすれば万事解決だね！」

「おー！で、その肝心の命はどこにいった？まだ眠ったままじゃなかったのか？」

神楽ちゃんが分離した夜天の書を見ながら一安心していて、その言葉に相づちを打ちながら疑問を口にするヴィータちゃん。私が高は目覚めていて仮面の男達と戦っていると話すと自分がぶっ飛ばしたかったのにーと駄々をこねていた。

「まあまあ、皆の分まできっちりぼっこぼっこにしたいから気にしないでね」

「そういふことなら……っっておいっ！？」

「アーケルさん！？　ということば……」

振り向いたそこには久しぶりに気の抜けるような笑顔のアーケルさんと……

「アレが闇の書の闇か……。今からやることを考えるとぞっとしないんだけど……」

「みこっちゃん！　目え覚めたんやな！」

「ううー、良かったようー。二ヶ月も目を覚まさなかったから心配してたんだよ」

「して命、師匠はどこ？」

「シグナム…気持ちもわからなくは無いけどその発言は……」

「じつじつのをKY発言って言うんだよねアルフ？」

「うん、そうだねフェイト。でもね……」

「その発言の方がよっぽど空気が読めてないんだけどね……」

命君の登場に皆ほっとしている様子で、私と神楽ちゃんは気配がした瞬間にはもう突撃を開始、左右に抱きついて久々の命君成分を補給させてもらった。

「(はふう〜癒されるう〜)」「」

そんな私達の様子に苦笑を浮かべながらもどこか嬉しそうで、いつもなら嫌がるハグもそのまま受け入れている。それが気に食わなく杖を握る力を際限無く強めているはやてちゃんに、どこか面白くなさそうに見ているのはちゃん。はやてちゃんならわかるんだけど何故になのはちゃんも？

……まさかね…？

そうこう和んでいると闇の書の間が蠢き始めた。蒐集した生物が全部混ざったようなゲームなどで出てくるキメラを連想させる。

「さ、和むのはその辺で止めてはようアレを何とかせな！」

「そそそそっだよっ！確か作戦では命君がどうにかするんだっよねっ！？なら早く！」

「ちえっ」

二人に無理矢理引き剥がされてしまい、補給が七割程度しかでき



なかった。まあ今まで全くできなかったんだし、今は引き下がるけれど後で覚えているがいい！

そして私達から距離をとって闇のカメラと向き合った。

「主、彼は本当に大丈夫なのでしょうか？」

「心配性やな〜リインフォースは」

「しかしっ！」

管制人格　リインフォースさんは最後までこの作戦に反対していた。それはそうだろう、今まで幾人もの科学者や魔導師があらゆる手を駆使してもどうにもできなかった呪いを・・・

「（火竜を使って取り込もうって言われればそりゃ反対もするか…）」

火竜のうちの一体、裂神という死者を炎に変えるという何とも恐ろしい能力を使い、防衛プログラムを除いたバグを含めたプログラムを無かった事にするというのが今回の作戦。これって作戦とは言わないような気もするけどそこはスルーで。

ちなみに守護騎士プログラムは予めリインフォースさんが分離させていたから害は無いそう。だからあの闇さえ消してしまえば孟万体：じゃなかった、無問題なのである。ちなみにうじゃうじゃしている触手のようなものや、四層からなるバリアをどうするかという問題があり、それは私たちが受け持つと言っただけど命君が、

「それも俺だけで何とかなると思うからできれば下がってくれ。今から使うヤツは多分次元に断層作りかねないから」

その一言でも納得しなかった私たちに嘆息すると、

「じゃあこれ見て危険じゃないと思っただら残ってていいぞ。でも本当に危険だと思っただら無理矢理にでも下がってもらっただけからな……」

超力招来…剣王!!」

『『『なあああああ！！？』』』』

” 剣王 ” と叫んだ瞬間にはもう既に私たちは吹き荒れる風に吹き飛ばされて後方へ無理矢理下げられてしまっていた。そして彼の方へと目を向けると、黒い鎧に赤いマント、そして何よりも印象的なのは右手と一体化しているかのように手甲と合体しているニメートルはゆうに超える大剣だった。その姿は騎士とは違う、まさに王の名に恥じない威容を放っていた。そして、

「 剣王ッ！ 紅竜剣ッッ！！ 」

裂帛の気合と共に振り下ろされた刃は命君が言った通り、私達の協力など必要で無かったことを証明してみせてくれた。

迫る触手を意に介せず、本体の八割すらも消し飛ばした斬撃の前にはバリアも紙屑同然だった。

『 『 『 …… (ポカーン) 『 『 『

一同がまるで夢か何かを見ているように呆然とする中、幾多の悲劇を生み出した呪いはその幕を閉じたのであった……

『 『 『 そんなあっさりでいいの——！？ 『 『 『

……そんなものだよね、悲劇の幕引きなんて。私達にはこれぐらいが丁度いいんだよ、あー疲れた。あっ、命君が墜落した…

### 第三十八話 「私たちのやり方」(後書き)

一応前に使っていたものの代わりを手に入れたのですが(中古)、何分使い勝手が違っているので扱いに慣れないのなんのって・・・

ペースは少し遅くなるでしょうがしばらくは不定期になるかと。

どうかご了承下さい。

それではまた次回!次でA' S編は終わりです。

・・・時間がまた一気に飛びますが、それはきつと神父のスタン  
ドのせいなのでお気になさらぬよう……ではっ!

第三十九話 「待ち続ける人たち」 (前書き)

アチイ・・・死ぬる・・・

第三十九話 「待ち続ける人たち」

S I D E 雪而

「（とぼとぼとぼ・・）ゴクツ。はあくまたお茶を淹れるのがうまくなつたのう」

「そつ、そうですか！ スーパーで限定十個の目玉商品でしたので、そつ喜んでいただけると苦労した甲斐があつたというものです／＼」

「限定のう……それはさぞかし厳しかったじゃろつ？主婦の波は相  
当なものと聞き及んでおつたのじゃが……」

「……（遠い目）」

「……すまん、思い出したく無いことじゃったか？」

「いえ……お気になさらず。でもまあ、アレはどの戦場にも劣らない戦士の巣窟だったとは思いますがね……」

ここはミッドチルダという世界の中の都市クラナガンから少し離れた住宅地。地球の家を売り払いこちらに引越してきて六年、闇の書の事件が終結してからそれくらいの月日が流れた。

裂神で一時的に火竜と同等の存在と化したリインフォースをはやてちゃんに移し変えて、二人のつながりを断つこと無く書の呪いを消し去る事に成功した。火竜となったことにより従来のユニゾンデバイスとは異なり恒常的に融合状態であることと、魔法の代わりに命ほどの火力は出ないが炎が扱えるようになったことぐらいじゃろうかの、ああ、後にリインフォースの代わりに新たなユニゾンデバイスとしてリインフォースツヴァイ、通称ツヴァイが新たに家族に加わった。

「主、今日は仕事も休みなのですしあまり練習しなくとも……」



「うーんでもなあ、みこっちゃんみたいに色んな形に変形できる  
と思うたんやけど、あんましうまくいかへんなあ」

「あれは火竜の力を借りたものですし、主が使えるものは私の固有  
能力の『凍てつく炎』だけかと」

「炎やのに凍るって……私の変換資質もろに影響しとんなー（汗）」

そう、今はやてちゃんと守護騎士の皆は管理局で囑託として働い  
ている。そのためにこちらに引越してきたというのも理由ではあ  
るが、それだけではない。

「あー！ヴィータちゃん！それは私のアイスです！横取りなんてず  
っこいですー！」

「妹が姉にアイスをあげる、素晴らしい姉妹愛っーことでここはア  
タシにくれたっていいじゃんか。仕事帰りで疲れてんだしこれぐら

「い見逃せよ」

「むうー！駄目ですっ、それはリインが大事に大事にとって置いた至高の一品！何人たりとも手を出す事は許しませ〜ん！」

ツヴァイの方もヴィータちゃんやはやてちゃんと特に仲が良く、  
本当の姉妹のように接している。

・・・忘れていた訳ではないがファイラはこちらではほぼ番犬として働いていて、本人もその事を気にしなくなったのでわしも口にするのを止めて夜の酒盛りではビーフジャーキーを常備するようになった。

あれから六年、わしらは元気でやっておるぞ……………  
命よ。

S I D E O U T

S I D E 風花

あの事件から六年、私は今前にはやてちゃんが住んでいた家を借り受けて、そこに神楽ちゃんと一緒に住んでいる。はやてちゃんは管理局で働きある目的のために向こうに引越しているのです、私たちがここに残って彼の居場所を守っている。そう、向こうにもこちらにも命君はいない。

闇の書の闇を消したとき、結局管理局は干渉してこなかった。帰ってきたクロノさんのお父さんの処分のために一時的にミッドに帰っていたらしく、帰ってきたときにはもう既に事件は終わっていたのだ。

ある意味それはそれで好都合だったので復活した雪而さんと命君がでつち上げた事実でアースラクルーを誤魔化して、八神家の面々への罰は三ヶ月の管理局への無償奉仕で済んだ。魔法生物だけを狙っていたので法的にも軽めの罰で済んだみたいで何よりだった。

「それで話が終われば万々歳だったんだけどなあ」

「全くっ、これだから管理局の連中は…ッ！」

「元局員の神楽ちゃんが言っても説得力無いけどね」

はやてちゃん達についてはこれで大体解決していたのだけど、雪而さんと命君の計画には一つ問題があった。

それは今まで誰も封印もできなかつたロストログアを単体で消去してしまった命君への管理局の懸念が膨れ上がってしまったということだ。あの事件が原因で命君は管理局に身柄を拘束されて、そのままあちこちの研究所をタライ回しにされて、つい三年程前から行方が分からなくなってしまったのだ。

原因は不明で、護送中に何者かの襲撃を受けてしまい、両手両足を針付きの拘束具で封じられていた彼は何の抵抗おできないまま連れ去られてしまったのだ。

そもそも連れ去られる時でさえ猛反発した私達だったが、この件でそれまで溜まっていた怒りが一気に噴出して、唯一連絡を取れるプレシアさんを通して管理局への抗議文を送りつけた。管理外世界の住人の身柄の不当な扱い、その後の対応の遅さなど徹底的に文句を言ってやったのにも関わらずあいつ等は慰謝料だけを渡すのみで何の対応もしてはくれなかった。

これには怒りを通り越して失望してしまった。つまり奴等は私達に金を渡すから忘れろと、そう言ってきたのだ。ぶち殺したくなる衝動を皆に宥められて、アースラの面々も交えた協議の末、このように決まった。

・魔導師として有能な者は形だけ管理局で働いて命君の情報収集。

・私やすすかちゃんのような非魔導師組は地球からそんな彼女たちを支援する事。

と、このようになった。

最初クロノさんが管理局を変えるから云々という話をしていただけ、私と神楽ちゃんがそれに猛反発。命君を蔑ろにするような組織ならとつと腐って滅びてしまえというのが私達の共通認識だったので、正直そんな組織を救うなど考えられない。だからクロノさんには悪いけど新たに組織を立ち上げるか、そのための人員確保ぐらいならほんのちょびつとぐらいなら協力するという妥協案を出しておいた。

それから神楽ちゃんは管理局を辞めて、今では私やすずかちゃん、アリサちゃんと一緒に高校に通っている。なのはちゃんとフェイトちゃんは中卒でそのまま嘱託で管理局で働いている。最初こそ高校に行きながらと考えていたけど、はやてちゃんが、

「高校行ってる暇があるなら私はみこつちゃんを探す手がかりを探す！」

と言ってそのままミッドに一時移住して、なのはちゃんはそのまま八神家に居候して、フェイトちゃんはクラナガンの実家の方に戻って魔導師の仕事を頑張っている。土郎さんや恭也さんは渋っていたけど桃子さんとなのはちゃんのO H A N A S H I Iによって強制改心を強いられて、桃子さんが言うには、

「あら 別に高校に行かなくなっただって問題ないわよ？ いざとなったら責任を取ってもらえば済む話ですもの」

……との事。なのはちゃんが行き遅れになる前に見つけ出

さなければっ、というのが私達命君に好意を抱いている女の子の注意事項である。」

「それにしても神楽ちゃんさあ〜」

「何かね風花ちゃん？」

「どうして魔導師辞めたの？向こうではやてちゃん達と一緒に働けば良かったのに。A A Aランクの魔導師って貴重な戦力なんじゃない？だったら出世も早いだろうし、それだけ多くの情報に触れる機会も増えるんじゃないの？ そりゃ情報で言えばユーノとアルフさんが無限書庫とかいう情報の最前線らしい場所で働いているそうだけど、一人でも多い方がいいんじゃないの？」

私にも魔力は多少あるようだったが、結局魔導師として目覚める事は無く、もし魔導師になれていれば私も向こうに行きたかったのに。言外にそんな事を思いながら質問してみたら、あっさりと返答を返してきた。

「それはそうなんだろうけど……私はこれ以上命くんを苦しめた連

中の下で働きたくなかったんだ。 我が侂だけど、こればかりは  
…ね」

はやてちゃん達には悪いけどね、と最後には苦笑混じりで話して  
くれた。

未だに何の足取りも掴めないまま、時ばかりが過ぎてゆく。

忘れることも叶わず、ただただ彼を想い続ける日々。

今度逢ったら絶対に想いを伝えるのだと何度も自分に言い聞かせ、



今日も、また・・・

第三十九話 「待ち続ける人たち」 (後書き)

この暑さは駄目だって… 残暑とかのレベルじゃないって…

愚痴はこころら辺で、

それでは次回で……

全裸扇風機でもこの暑さは耐えられないって……

第四十話 「そして、物語は動き出す……」 (前書き)

連日投稿…

新たなオリキャラ……

そして、何よりアツい……

クーラーエ…

第四十話 「そして、物語は動き出す……」

とある管理世界のうち、凶悪な犯罪者だけを  
収容する惑星がある。

その名をデザイアといい、そこに送られた犯  
罪者は皆が異常な思考を持つ異常者であったり、その力の強大さ故  
に歪んでしまった者たちが蔓延っていて、そこには秩序などは無く、  
『力無き者に生きる価値など無い』という暗黙の了解の下、今では  
管理局も匙を投げた無法地帯である……

そして、その無法地帯の中でも特に危険視さ  
れていてそこに送られてきた幾人も殺害してきた殺人鬼ですら裸足  
で逃げ出す場所がある。

## 最終層、ジユデツカ

地獄の名を冠するその場所は、最早人ではない人外のその中でもとりわけ触れてはいけない者達の巣窟となっていて、

曰く、百年以上を生きる人の形をした吸血鬼

曰く、たった一人で古龍種のいる惑星を滅ぼした狼

曰くetc.....

等々、おおよそ人とはかけ離れた者達が存在していると実しやかに囁かれて、誰もその層に踏み込もうとはしない。

しかし事実時は時として人々の想像を大きく逸脱する。

その層には生きている者は今では三人しかおらず、噂で囁かれているような『常に死臭が漂う地獄』ではなく、その場所はひどく平

和で、一人を主人として二人の小間使いとメイドが穏やかに生活している。

例えその主人が五百年を生きている“魔王龍”と呼ばれ、それまでに数えきれない程の血肉を喰らった者だとしても、

例えそのメイドがかつて滅びたとある文明の遺産であり、また、その強大な力を以て数多の生物を『主への献上物』として首を献上してきたとしても、

彼らは平穏な今という暮らしを満喫しているのだ。

その足元の無数の屍を踏み碎き、蹂躪してもなお、彼らは平和である。

紹介されなかった小間使いも勿論含めて……

S I D E    ? ? ?

「ん、良く寝たなっ」と

疑似太陽に明りがつき始める。それがここの朝の始まりを意味している。

地下深くにあるこの階層には中にいる囚人達の時間感覚を外とずらさない様にするために天蓋に太陽灯を数個設置していて、それを時間毎に点け替えることで朝日や夕日を作り出している。ここに来た当初は慣れなかったが、メイド長（一人しかいないから当たり前だが）が言うには、

「習うより慣れる。いい言葉よねこれって、確か管理外世界の言葉

だっ たかしら？」

と投げやりかつ助言にもならない助言を戴いた。嬉しきなんかちつとも湧かなかったけど、三日で慣れてしまふ辺り彼女はこれを見越して心配せずとも良いと判断したのかな？ と前向きに考えてメイド長にその時の言葉の真意を聞いてみたら、

「別に何も考えていなかったわよ？ あなたは旦那様がお連れした人間だからこれしきのことどうとでも無いだろうと思っていたし」

「いやあん…メイド長、それは信頼してもらっていたということでおk？」

「いいえ。単に気に掛けるのが面倒だっただけですが？ 旦那様以外の者など路傍の石にも劣る低能愚図と認識しているから、私」

……その晩、メイド長の暖かさに枕を濡らした。



そんなヒエラルキー最下層の俺の朝の仕事は特に無い。有能で完璧で瀟洒なメイドが朝食の準備、旦那様を起こす仕事を全部一人でやってしまうため俺のやることなどテーブルについて飯を待つのみである。さらに言えば俺の仕事はこの屋敷では一切無い。一人でやってしまうメイド長の実力が高すぎるからでもあるが、俺には俺の小間使いとしての仕事がちゃんとあるのだ。

「ふむ、して今日の朝食は何かね？」

「はい。本日も朝食は先日取ってきた鋼龍クシャルダオラの丸焼きと、その生き血で作ったゼリーがデザートとなっています」

「何時もながら美味そうだ。褒めて遣わそう、アル」

「恐縮に御座います、旦那様」

「……………うん。何時見てもアレには慣れない。何だよ古龍の丸焼きって、しかも鋼でできた身体を持つクシャルダオラをそのまま丸焼きって…誰も食べられないって普通。」

「お早う御座います。旦那様」

「ああお早う。今日もいい天気だ、朝食後の運動もさぞかし気持ちよからう」

「はは……毎回それで旦那様が喜んでいるようで何よりですよ」

「お前は人間にしておくにはあまりに惜しい力を持っているからな。今までの小間使いは皆撫でるだけでいなくなってしまう。やはり小間使いは丈夫なモノに限る。そうは思わないか？」

これが朝俺と旦那様との間で交わされる普通の会話。褒められているようでその実目が一切笑っていないどころか殺気がバンバン押し寄せてくる。ここ数年で流石に慣れてきたがこれは人間が出せるものじゃないだろう。圧だけで心臓が握り潰されるヴィジョンが今なお鮮明に浮かんでいる。慣れてきたというのは、このヴィジョンを見てもなお戦意を保っていられるというだけで、気を抜けば足が震えてくる。

「以前暇つぶしに捕まえてみた人間は面白かったな。アルの攻撃を退け、あまつさえ私の手から逃げ果せるとは……………クツクツク、久しぶりに奴と会いたくなってきたな。アル」

「はっ。何なりと」

「今日の仕事はもういい。お前は今からあの男を連れてこい。偶には“本気で”戯れなければ体が鈍ってしょうがない」

……今話題に登場している男。俺も直接メイド長と追跡したことがあったのだが、その際何もできずに逃げられてしまったのを今でも覚えている。SSSランクの魔導師としての実力の俺とそれ以上の戦闘力を持つメイド長、そしてそのメイド長が「絶対に私じゃ勝てない」とまで言う旦那様を相手にしてその男は手錠をつけた状態のまま逃げ切って見せたのだ。

あの時はマジでヤバかった。旦那様は狂ったように笑い出して、

「面白いっ！　面白いぞお！　アツハツハツハツハ！！」

その後一週間、毎朝の仕事はハイテンションな旦那様の相手でも死んでは無理やり蘇生させられた。きっとあれを生き地獄と言うに違いない。

メイド長はメイド長で、いつもの無表情とは違ったどこか嫉妬するような、何かに焦がれるような貌をしていて、見ていて思わずちびりそうになるほどの雰囲気醸し出していた。

「無論お前を相手にするのも悪くは無い、ただ・・・」

そう言って俺に本当に笑っているのかもわからない、正に魔王という言葉を体現するかのような。そんな得も言えぬ表情を浮かべながら、

「私の殺意を受けてもまだ戦意を保てるお前も十分に素晴らしい。ただな？」

.....私が殺意を向けられる相手はお前では無い。

あの小僧だ

……俺はその時になってようやくある事を認識させられた。

ここに俺が居られるのはただ単に気に入られているだけ。未だに息をされているのも中途半端の状態で止めを刺されないのも、一重に手加減されていたから。

それも、小さな赤子をあやすような感覚で。

本気でぶつかれば簡単に壊れてしまうから、駄々漏れしている殺気だけで失神しそうになる俺など前菜にすらならない水と同じなのだということに。

そして狂笑を浮かべながら丸焼きに食らいつく旦那様と、何時に  
なく興奮して顔が上気しているメイド長を見て、顔も覚えていない  
男に同情せざるを得なかった。

「(すまない、名も知らない人。俺じゃこの方達は止められない。  
できれば見つからないよう遠くに逃げてね)」

.....

「へっくし!.....誰か俺の噂でもしてんのかな?」

「「いや、それは無い（ッス）」

・

.....

こうして、未だ青年の行方も分からない中、個々の思惑を胸にそれぞれが動き出した。

青年の与り知らないところで、青年の思惑を無視して、時はまた流れていく……

第四十話 「そして、物語は動き出す…」 (後書き)

今回、語り部としてでてきたSSSランクの魔導師君ですが、単に第三者からオリキャラを簡単に紹介したかっただけなんで出番は無いです。

次回は番外編、行方不明の彼は何処に？

乙女たちの午後

とあるメイド長の冒険

以上、三本立てでお送りする訳はなく、気が向いた物を書こうかなと。

あつ、番外編を書くのは本当なので本編を楽しみにして下さい  
る方には申し訳ございません。

そろそろPVが四十万近くになってきたのでそれ記念で何かしたい  
なあ〜って。



特別編 アクセス件数四十万記念の皮を被った何か（前書き）

PV四十万です！

ユニークも三万人を超えて少し混乱をきたしている私です。

それでは今回は特別というか、楽屋裏的な感じで書いたつもりなのですが……

気付いたらおかしなことだ……

何時もの事？ それもそうですね。それではびびびびび

特別編 アクセス件数四十万記念の皮を被った何か

命「祝!!」

風・神・ア「「「アクセス件数四十万突破記念!!」」」

全員「テキトーに駄弁ろう会~~~~~!!」

命「いや、適当は不味いだろ」

風「余計なツッコミはNO THANK YOU!」

神「そう！　ここは記念として私達がテキストにダラダラズグズグするだけの空間なんだからテキストでいいんだってば」

命「……………いいんだ、それで……………」

風・神「「いいですともさっ……………」」

ア「二人とも乗りノリねえ。で？　記念ていったって只の座談会なんだし、気楽に行きましょう。ここに卓袱台もあることだし」

命「マジで……………？……………本当にあるよ。うん？　これは……………手紙？  
作者からみたいだ」

神「何て書いてるの？　また愚痴とか弱音ならそこから辺に捨てていいんじゃない？」

風「そうじゃないみたいだよ、これ」

命「じゃっ、読むぞ。え〜とどれどれ・・・

『この度は、四十万アクセスに到達したということで、この場をお借りしましてこれを読んで下さった方々にお礼を申し上げます。』

ここまで書き続けることができたのも一重に読んでくださる方々の存在のお蔭です。

これからようやくお話も佳境に入る訳ですが、以前のように途中で投げ出したりなどせずに、きちんと完結させたい次第です。

つきましては今後ともこの作品を読んで、

・・・・・・・・・・・・・・・・くねると嬉しいです。

暇な時にも読んでやってくださると、喜びます。私が。

それではこの辺で筆を置かせていただきます。

イイ日旅

立ちより、皆様へ感謝を込めて』

命「途中まではそれなりに真面目な感じもするけど……途中のあの間は何なんだ？」

ア「あんまり責めないであげて。いざ書こうとしたとき、「あんまり調子乗ってるかと思われる」とまた中傷が……」って言ってたから多分そのせいじゃないかしら？」

風「前のトラウマまだ残ってたんだ……」

神「まあ、あれからその手の感想は送られなかったみたいだけど……最近の作者は感想が来た時のユーザTOPに表示される赤文字が怖いって言ってたしね」

命「アレ見ると一旦目を閉じて「大丈夫だ俺、中傷きても怖くない」

って三回心の中で唱えてからじゃないといざ来たときの心構えがでないとも言っていたな」

ア「チキンね」

命・風・神「」「チキンだな（だね）」「」

命「まあ作者のチキンハートっぷりはこんな感じでいいだろう。それよりも何か他に言いたいことがある奴いるか？」

風「あつ！　じゃあ私から……この前のお話で出てきた新キャラの二人だけど、設定とかはちゃんとできてるの？」

命「お答えしましょう。……ていうかできてなきゃおいそれと出せないだろうし……っーわけで直接本人にきてもらうことにした」

三人「」「ナンでスト？」「」

命「それでは登場してもらいましょうー

囚人惑星デザイアの最下層、ジュデツカの主！

“魔王龍”こと、ゼノン＝アレハンドラ＝ドラグニアスとっ！

アルという愛称で皆（作者だけだが）で愛されているクールにヤンデレるメイド長！

“白銀の狼”こと、アウレリア＝シリウスの登場です！！俺はこの辺でっ！（バツ）

風「ああー！ 逃げたあー！？」

神「全く……ちゃんとゲストの紹介し……て」

風「????? どしたの神楽ちゃん？」

ゼ「クッククク……先程こちらに小僧の気配を感じたのだが……その小娘、何か知らぬか？」

風「（コワッ！？何この人！？ 見てるだけで足が……っ！）」

シ「僭越ながら旦那様、こちらのお嬢様方は旦那様に威圧されて萎縮しているようです。私が応対するのでこちらでお待ちになって下さいまし。本日は紅茶に古龍酒を一滴加えた特別製に御座います」

ゼ「ふむ。そうか、最近はどうも気配を消すのを忘れがちになってしまっているようだな……許せよ、そんな人間。どうにも殺気を抑えるのがうまくいかないのではな、やはりあの小僧が近くにいるせいか興奮しているようだ。後の事はこのアルに任せるので私はあちらで控えているので用があるのならば呼ぶがいい」

風・神「イエッサーー！！（断つたら　される！絶対　されてしま  
うっー！！）」

シ「では私が……先程こちらに男性がいらっしやっと思ったのです  
が……どちらかご存知ないですか？」

風「（ホッ……この人は普通っぽい……）ええっと、ついさっきまで居  
たんですけど……お二人を呼んですぐにアークルさんと何処かへ行  
ってしまっ……」

シ「そうですか……では先程までは確かにこの場にいたのですね  
？」

神「は、はい。でも呼ばれたということは居たの知ってたんじゃない  
いんですか？」



シ「いえ、私共は作者にここに来れば想い人に会えると言われたものですから……」

風・神「おおおおお、想い人オオオオオオオオ！？」

シ「？ 何かおかしいことがありましたか？」

風「いいいいいいや… あのですね、想い人というのは……？」

シ「ああ。そういう事ですか。ええ、私はあの方を懸想していますわ」

神「んなはつきり仰るとは……！」

シ「当然ですわ。私の牙から逃れるだけならばまだしも……旦那様から逃げおおせる人間などあの方が初めてだったものですから……」

風・神「（あれ？ 何か変じゃね？）」「」

シ「ですからあの方は旦那様の御眼鏡に適う稀有なお方。是が非でも捕まえて旦那様のダンスのお相手をしてもらいたいですし……」

それに「

風・神「それに？」

シ「……………私も是非ダンスのパートナーとして指名したいですし。あの方ならば私も久しぶりに本気で踊れそうですし……………ふふふ（ジュルリ）」

風「……………うん。何となく命君が逃げた理由がわかったような気がする」

神「……………そうだね。ダンスって響きがこんなに背筋を凍らせる程だもん。絶対ただのダンスじゃないよ。『死の』って接頭語が必須だよ」

シ「あああ……………思い出しただけでもこの身が震えてしまう……………早く逢いたい……………逢って私と踊りましょう……………」

風・神「……………」

くしばらくお待ちください」

シ「……それでは私共はこれで」

ゼ「うむ。行方こそ分らぬままだったが、名はしかと刻ませてもらった……」

神名か「……クツク、次に会うときが楽しみだよ……」

アア「ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！」

それでは少女達よ、また何れ会う時もあるう」

シ「では私も……」

風「？何かあるんですか？」

シ「いえ、もしあの方に会うことがあったら伝えて欲しいことが…」

神「いいですよ（断れる雰囲気でもないし…）」

シ「それでは『旦那様共々、貴方が屋敷にお越しになるのを心よりお待ちしている』と。もし来なくとも私自らが赴いて見つけ出すことも付け加えておいて下さい」

風「はあ……（何でこんな物騒な人と関わっちゃったんだろう命君…?）」

シ「それでは本日はこれにて……」

風「彘？・・・・・・・・・・・・今のが締めなのっ！？」

神「結局は新キャラの独壇場じゃないのばかぁー！！！！！！！！」

ゼ「・・・・・・・・それにしてモアルよ」

シ「何でしょうっか？」

ゼ「よもやお前がああも他人との会話を楽しむとは思わなかったぞ」

シ「そうでしょうか……？」

ゼ「まあお前も小僧が絡むと多少なりとて正気ではいられなくなるのであろう？ お前が小僧を“あの方”と呼ぶ時の眼………中々の狂気が浮かんでおったぞ。やはりお前も私と同じく血を求め死肉を貪る獣、獲物を前に興奮するその姿………それこそが我等の本来の在り方。お互いに良い獲物を見つけたものだとは思わんか？」

シ「……私などが旦那様と同列とは恐れ多い。ですが、私もやはり血が騒ぐと言いましょか？ あの方の肉を裂き、血を啜ることを考えると得も言えぬ興奮が身体を駆け巡り、疼いてしまう………これも私が獣という証なのでしょうか？」

ゼ「ふっ……女としても獣としてもか……やはりお前を従者にしてよかった。その歪んだ愛情、しかと小僧に受け止めてもらつといい。私はその後で構わん」

シ「はい。ありがとうございます」

命「あれ？ 逃げた筈なのに何でこんなに鳥肌が……？」

特別編 アクセス件数四十万記念の皮を被った何か（後書き）

ちなみに新キャラの容姿についてですが…

ゼノン・・・旦那呼ばわりからも想像できる通りの蔵ついお方。  
ぶっちゃけスレイヤーズのガープを想像していただければ……

アル・・・名前に一文字もルなんてありませんが愛称なので気に  
しないでください。ちなみに見た目は某瀟洒なメイドそのまんまで  
PADなんて必要の無い体型の持ち主です。

それでは今回はこの辺で。次回も本編ではなく普通の番外編をお送  
りします。

題して、「クライド、元嫁からの逃亡

シグナム、ストーリーカーから追われる

はやて、それらをおもしろがる」

嘘ッス。でもクライドさんのお話になるのは本当なので…



それではまた次回！

番外編 「神父クライドの相談室」 (前書き)

遅れることが普通になってきたなーと感じるようになってしまった…

しかもそれを何とも思わなかったり…

それもこれも全部残暑が悪いんじゃないや ああああああああ

今回は番外編です、では……

番外編 「神父クライドの相談室」

．．．．．そこはとある教会。

そこには迷える子羊が集い、今日もまた、神父クライドの下に新たな相談者が．．．．．

匿名希望 白い魔法少女く悪魔じゃないから怖くなんてないもん  
っくさんの相談。

「…実は、最近私のお友達みんながおかしくて……………」

「おかしい…？ といいいますと？」

「はい…………別にY君とFちゃんがいちゃいちゃしてたり私や他の  
人がいるのに関係無くラブラブ空間を発生させようがそれがあんま  
りすぎて砂糖を吐きたくなるのもう諦めました。あの二人いくら  
注意してもどんなに叱ってもいつも結局は名前を呼び合ってまた  
ループするのが目に見えているので」

「それはまた…………もげるといいましょうか…リア充爆発しろとで  
も言いましょうか…」

「はい、正直友達として二人を応援する気持ちはあるんですけど…  
…もう少し自重してもいいんじゃないかなって、そう思うんです」

「つまり…今回の相談内容はそのお友達の事で？」

「いえ違うんです。問題なのはその……………」

「おや？ 何か言いにくい事なんですか？」

「その、話そうとしてつい言っただけのものかと……」

「構いませんよ。ここは迷える子羊を教え導く場所、私たちも今壁を隔ててお互いの顔が見えない状態なのですから個人情報が見えぬことなどありません。気にせず話すだけ話してごらん下さい。それだけでも違うものですよ」

「は、はいっ！ 実は私たちの間で彼氏のいない組の皆が最近血走っているみたいなんです」

「……………血走っている？」

「はい！ その、みんなして共通の好きな人がいるんですけどその人がとある理由で行方不明になっちゃって……だから私も他の皆もその人を探すために管理局で働いて色々な次元世界で行方を追っているんですけど中々情報が集まらなくてストレスばかり溜まっていつてもみたいでして……」

「ほお、お友達思いのいい方々のようですね。それでその想い人を探すのに皆がムキになりすぎているのが心配と？」

「そうじゃないんです。その……こんな事言うのもどうかと思うんですけど、私達って今みんなお年頃というか、何と言うか……と、とにかくっ！ 皆そういう恋愛とかに興味が湧いて仕方ないんです！」

「そうですね、声からして貴女は十代後半……いや、この若干の幼さを感じる高さから鑑みて高校生ぐらいのお年頃ですね？  
ともすれば恋の恋する乙女というのも頷けますが……」

「（何だろう…今変な寒気が…？）そんな可愛いものじゃないんです！ 皆同じ相手が好きだからってもの凄く競い合うように奔走してしまっていて……それこそ相手を蹴落としても私が見つげ出さずって勢いで何かと危なっかしいんです。私がいくら注意してもあんまり聞いちゃくれないし、お話ししようとすると皆私の事『悪魔がああ』とか『冥王k t k r!』とか言っって一目散に逃げちゃっし……」

私は皆で協力してその人を探そうって言いたいだけなのにどうして皆私の事を避けるんでしょうか？

どうやったたら皆私のお話を聞いてくれるんでしょう？ 神父様、神父様なら何かいい方法を……」

「（何故だ……『お話』って平和的な解決方法で在る筈なのに何故悪魔とか物騒な事を言われているんだこの子は？ 声から判断してもこの子が美少女であることは間違いない筈、私の長年“彼女”を補足するために鍛え上げてきたBリーダー（アホ毛、おっさんなのに、アホ毛。因みにBとはbeautiful）がガンガン鳴っ

ているところをみるにそれもかなり高水準の女子の筈ッ！」

「あの〜？ 神父様？ どうかしたのですか？」

「…ハッ！？ いかんぞ私 私には既に魂に誓った天使がいるじゃないかっ！ ここは冷静になって彼女の悩みを解決しなければっ！」

「……………どうしてだろう、この人からはどうしようもないオーラを感じるの…」

「さあ少女よ！ 貴女のお悩みは確かに聞き届けました！ズバリッ！ 貴女に必要なもの……………それはっ！！！」

「あ、はい（この人に聞いたのが間違いだったのかな？ でも一応何か助言をくれるみたいだし…）」

「貴女に恐れを為す輩を排除するための圧倒的な武力！

己の意志を貫き守り通すための圧倒的な力！

要はパワーが必要なんですっ！！！」

「……………h a？」

「haではありません！ パウワーですよパウワー！ 決してパウワーではありません、発音にはお気をつけて」

「…一応聞いておきますね、私は『何故皆から怖がられるのか』を質問して『どうやったら皆を説得させられるのか』であって、別にそんな力なんて」

「何を仰るうさぎさん！ 貴女は何か勘違いしているようですが、私はその『説得させる方法』を言っているのですよ」

「それがどうして武力とか物騒な話に繋がるんですかっ!？」

「Non! Non! 力では無くパウワーですよ。皆が話を聞いてくれない、それは何故？」

答は簡単、貴女に皆が服従しようとしなからですよ」

「何で説得する方法の話から服従なんて言葉が出てくるんですかっ!？」

「自分の気持ちを聞いて欲しいのに相手がそれを拒んでしまっ…」「無視っ!？」 私の発言は無視なの!？」…お静かに、話の腰を折ら



ないで下さい。

……………ゴホン、では続きを話しましょう。

自分のお話を聞いてもらうためにはどうすればいいのか？……………逃げられないように動きを封じてから聞いてもらうなり相手の逃げようとする心を押し折って無理矢理してしまえば否が応でもお話を聞いてくれる筈です」

「それって最早お話しじゃないですよね！？ むしろ単なる恐喝或いは拷問の果てに服従を強制する奴隷商じゃないですかっ！  
私はそんな、

両手足をバンドで封じてから全力全壊のスターライトブレイカーとか、

大勢で寄って集って一人をフルぼっことか、

教え子に問答無用で砲撃するとか、

実の娘にリミッターぶっちぎりで砲撃をするような残虐なこととはできませんっ！」

「……………一つ、よろしいかな？」

「何ですかっ!?!」

「どうしてそのように具体的な描写で語られていたのです? それではまるでご自身が体験してきたかのような説得力が…」

「そんな事実はありません! 例えあつたとしてもそれは平行世界の私であつてこの場にいる私じゃありませんっ! 本家様に失礼ですっ、それにもしそんな人がいるのならきつとその人は二十歳越えてもまともな恋愛なんかしない百合っ娘として世間に認知されてしまいそうです!」

身も蓋も無い台詞、でも結構この小説の中の世界観でも百合疑惑は浮上しています。ちなみに相手は風花、ショートカットでボーイッシュな彼女との会話が周りからはそう認知されているようです。Lillieが彼女の運命と書いてさだめと呼ぶのかはさておき、

「まあ……その話はこの際触れません。ですが、貴女がお友達にどうしてもお話を聞いてもらいたいのならば、ある程度の凶行もあつていいと思いますけどね私は」

「そうですね……? 確かに強硬手段っていうのもありかもしれませんが……」

ここに凶行と強硬の同じ読み方をするのに字面が違う二つの言葉、お互いの意志に齟齬が発生しているがそれはどうでもいいだろう。だって、

「……そうですね、自分の意志を伝えるのにも時にはそういう強引なやり方もアリですよっ、わかりました！ 私、やってみます  
「！」

……だって、結局はこの帰結に納まってしまっただから。

こうして、一人の少女は悩みを吹っ切って教会を去っていった。神父が「少し離れたて過ぎたかなー？」とか言っているけど、気にしてはいけない。

だから、後日管理局のとある訓練室から少女達の悲鳴が聞こえてきたこととか、その様子を見ていた他の局員の方々から畏怖と敬意を持って“笑顔の悪魔”とか言われていたとしても全くこればかりも気にしてはいけない。

「気にしたら負けっというぐらいだしな、彼女には少し不名誉な名

前かもしれんがそれもまた彼女が意志を貫くためにも必要だったと  
いうことにしておこう。それでは私も自分の意志を貫くことに……」

「何ですって……？」

「（ギクウ）ややややややありンディ？ どうしたのかな？ 離  
婚届は出されたってクロノからは聞いてたんだけど……どうして僕  
をバインドで縛っているのかな？ それもこんな……」

所謂亀甲縛りというやつ。どうしてそんな器用にバインドできる  
のか、流石はSランクの魔導師であるといったところか。

「あら？ 確かに離婚届を書いた覚えはあるけれど……私、それを  
まだ持つてるわよ？ ほらこれ」

「あ、あああああ！ それを速く役所」

ポウツ

（紙をライターで燃やした音）

「はい。これで私達はもう何の問題も無い夫婦に戻ったと…」

「待つてくれリンディ！！ 私には既に魂に誓った相手が…！」

「それってシグナムさんの事でしょう？ それだったら諦めなさい」

「何故だ！？ 相手がプログラム体だろうと私の愛は不変だ！」

「そうじゃないわよ、ほら。これを見て」

そこに映し出されたのはサーチャーから届いた映像。クラナガンの郊外にある一軒家。その庭先で…

『ふう〜、今日も良い天気ですね師匠』

『そうじゃなく、でもこの暑さじゃちと外での庭いじりはきつい  
う』

『でしたらっ！』

『んっ？』

『あつ、いや、その……これが終わったら街の方へ行ってみませんか？ テスタロッサから聞いたのですが、最近街でおいしい甘味がある店ができたそうなので、宜しければこの後……』

『いいのう、それじゃヴィータちゃんも誘って行くのかな。はやてちゃんやシャマルさんは今日は仕事でおらぬし、ザフィーラもはやてちゃんの護衛で今はおらんが……まあ、またの機会にでも行けばいいじゃろ。…うん？ どうしたのじゃ、何か萎れている様じゃが？』

『……いいんです。どうせそんなことだろうって思っていましたし……』

……映像には、クライド自身が焦がれて已まない想い人ことシグナムと、その隣にいる四十代ぐらいの見た目ダンディな男性の姿

勿論彼は雪而その人なのだが、体を再構成する際、家族の強い要望もあつて見た目を六十代から四十代レベルに、つまりシグナムと並んでいても老人とヘルパーではなく年の離れたカツポオに見えるなくもない様子がそこには映し出されていて、それを見たクライドは膝をつきいい歳してる筈の大人なのに泣いた。それはもう盛大に。

「うわあああああん！！？ 誰だ私のマイスイートビューティ  
イホーエンジェルとあんなにも楽しそうにしている奴はあああああ  
ああ！！！！？」

「これでわかったでしょ？ あの女には既に想いを寄せる男がいるのよっ！」

「そ、そんなあああああああああ……」

「さあクライド？ これで諦めがついたことだしあっちへ行きますよっ！」

「……………（へんじがない ただのマダオのようだ）」

「……………まあ本体が使いものにならなくても別働体の方はちゃんと働くでしょうし……………いつか」

魂の抜けた屍となったクライドを引き摺ってリンディの向かった先はネオンの輝くとある一角。

そこには対称的な表情が印象的な二人の夫婦の姿が……………

「こんなオチはいやだあああああああああああああああああああ！！！！」

どんどんはね



番外編 「神父クライドの相談室」 (後書き)

こういうのって大丈夫ですかね……………ネタ的に…

まあ十五禁していることだし多分大丈夫ですよねっ！

でも今回書いて結構楽しかったのでまた書こうと思います。

次は誰をネタにしようか……………

そうそう、まだ本編には入らないで、次はメイド長視点での命君の過去辺りを書いてから本編に入ろうかと……………

レリックとか聖王とか……………どないしょ？

原作なんてもう無いようなものだしいつか

過去編 「メイドとして、女として」(前書き)

今回のサブタイに大した意味はありません。

何も思いつかずに、本文を見ていくうちに思いついたのがこれだったんです。

難しいなー、サブタイ考えるのも。

それでは過去編スタートです

過去編 「メイドとして、女として」

S I D E  
ア ル

「おいおいメイドのねえちゃんよあ〜？ そんなシケた面してどこ行くんだい？」

「そうそう！ そんな顔してるなんてもったいないぜえ〜。おっ！  
そうだ、俺達と一緒に遊ばね？」

「俺達と一緒に楽しいことしようぜ〜？ きつと病みつきになる」と間違いないからよあ」

「……………ハア」

今日はツイていませんね、前回折角名前を知ることのできた神名様を探さないといけないというのに……………何ですかこの方々は。まるで汚い、礼儀もなっていないではありませんか。

それに……………

「気安く触らないで頂けます？ 貴方々といっても私に何の益も無いと思いますので、これで失礼」

「おいおいおいおい、気の強ええねえちゃんだなあ、だけどそういうのもk」

スンっ……………ボチャ

「先程言った筈ですが？ 私は、失礼すると言ったんです」

煩わしかったので思わず埃を払いのけたのですが、相手方はそれがどうも受け入れがたいようで、

「うわあああ！？ いきなり首が飛んだ！？」

「なな、何だ何だ！？」

………五月蠅いですね。

「それほど気になるのであれば貴方達もその塵と同じように払ってあげますわ」

「ヒイツ！？」

「く、来るなアアアアア！」

「………自分達が先程仰っていたこととまるで違うではありませんか」

「まあ貴方方と私とでは“遊ぶ”ことなど到底できはしないのですか………」

では、疾く消えてもらおうとしましょうか。

「起きなさい、《グラウ》」

……私の牙によって。

数分後、そこには夥しい血液の水たまりができていて、あちこちにはもう原型を判別することのできない肉片が散らばっていて、まるで猛獣が食い荒したかのような凄惨な様相でありながら、そこ

に佇む女性の顔色は微動だにせず、その顔には色濃い失望の念が見えた。

「……………やはり、埃程度を払うぐらいでは何一つ満たされませんか」

返り血を浴び、その雪のような肌を鮮血に染めているのにも関わらずただただ平然と、まるで周りの事を気にしないような素振りで手に持った異形の武器　　その細身の体からは想像もできない程の大剣にこびり付いている血を払いのけて一言。

「やはりあのお方でなければ……………この飢えは満たされないのですよ、ようね、神名様？」

転送魔法を発動させ、その場から離脱する女性の目には、恍惚とも狂気ともとれぬ様な光が浮かんでいた。例えるのならそう、極上の獲物を前にした肉食生物のような……………

神名様と出会ったのはホンの偶然に過ぎないかった。

それは私が旦那様への食事の材料を求めて、とある次元世界へと赴いた時でした。

そこには管理局の実験施設があり、そこでは非合法での実験が行われているようでしたが、特に気にならなかったなのでそれを無視して食材を求めているのですが、

ドゴオオオオオオオオオオオ.....

.....どうやら施設が爆発したようで、折角の獲物がそれに驚いて逃げてしまい、抗議しにいくとうと現場に近づいた時でした。



そこには二つの異形が立っていました。

一つは人の形を為さない不定形の怪物で、どうやら擬似リンカーコアの移植を原住生物で試していたようですが……憐れですね、そんなものに頼るとは。管理局も愚かなモノです。

ですが、もう一つの方はというと何の変哲もないただの人間でした。いえ、ただの人間というのは訂正しましょう。

腕には魔力を封じる鉱物で作られていると思われる拘束具を付けられていて、恐らく内側には神経毒の塗られた針が仕込まれているのでしよう、彼の腕が一向に動く気配を見せません。動かす必要が無いという訳ではなく、麻痺して動かすに動かせないといったところでしょうか？

しかしそんなもの、私には関係ありません。旦那様の食材を逃がした罪は許せません。死を以って償わせなければ…

私は一息で怪物の懐に飛び込むと同時にグラウを展開、とりあえず頭と思われる部位を潰して動きを封じた後、拘束具の男性へと斬りかかったその時、

「うおっ！？ 危なっ！？」

「なっ！？」

手が動かないという予想は当たっていたようですが、彼は私の踏み込みと同時に上から放たれた斬撃を、剣の腹を蹴りつけることで剣の軌道を逸らしたのです。

………信じられないことでした。

私には旦那様の従者としての矜持があり、旦那様以外の者には私の牙を防ぐことはできないと自負してありました。強固なシールドを張る者ならば力で押し潰し、目にも止まらない速さで動く者ならばそれ以上の速力を以って斬る、ただそれだけで今までの者ならば簡単に終わっている筈なのです。

それなのに、それなのに目の前の方は私の速力以上の速さで迎撃した。これまで旦那様以外には触れることさえ敵わない筈の私の牙を、腕が使えないというハンディを持っているのにも関わらず。

「……………ぶ、うぶぶぶぶ……………」

相手方の実力を想像した途端、胸の内から込み上げてくる感情を抑えることができずに笑い声が漏れてしまった。それほどまでに私は高揚し、この方ならば旦那様を満足させられると思った私は先程斬りつけた非礼を詫び、腕の拘束具を外せる技術があるからついてきて欲しいという私の誘いにしばらく考えた後、「まっ、いっか」と楽観的にお返事を返してくれました。

……ああ、楽しみです。食材の代わりに新たな娯楽を見つけることができましたようです。旦那様。

「あれ？ メイドさん？ 何かすごい笑顔してるけど、どうかした？」

「いいえ。何でもありません」

いけませんね。メイドたる者、お客人の前で不格好を晒してしまふなど。私もまだまだなようです。

そして屋敷に転移した私は、早速腕に仕込まれていた拘束具の封印を解呪し、長い間麻痺していたであろう腕にも治癒を施し、大事を取って2、3日の休養を取るように聞かせた後、旦那様に今回の件について報告しました。するとどうでしょう、常日頃倦怠を感じていた旦那様が見る見るうちに怖気の走るような笑みを浮かべて、件の男性との戯れを楽しみにしていると仰っていられました。

主の喜びは従者の喜び。あんなに嬉しそうにしている旦那様を見るのは実に100年ぶりでしょうか？

嬉しそうで何より。それではしっかりと彼には休養してもらって、体調を万全にしてもらわないとね。逃げ出せないように別の手錠でもつけておきましょう。

・・・そして、それは起きてしまいました。

腕の調子も戻ったということと旦那様がお会いしたいと言っておられるので着いてきてくださいと伝えると、

「そこで俺はその旦那様って奴と殺し合いをすると……物騒だねえ」

「……………何のことでしょう?」

何時の間に気付かれた? その疑問を顔に出す事無く切り返してみたのですが、彼は一切の迷いも無い眼差しを私に向けて、

「俺さ、ちょっと帰りたいたい場所があるからお暇させてもらうことにするよ。そんじゃあねえ」

暴力的なまでの炎の津波を切り払い、もう一度男性がいた場所を見てみるとそこにはもう人影は見当たらず、

「逃げられた? この私がオメオメと逃がしてしまった……?」

先日の剣撃を躲された時以上の衝撃を覚えた私は、小間使いを呼び出して探索魔法で位置を割り出して追跡を開始した。その時私から逃げおおせたということで態々旦那様まで出向かせてしまったのは私の失態だ。何としてでも捕まえなければ……ッ!

そしてようやく捕捉して追いついた先はもう既に転送ポートのある階層で、私達が全速力で追いかけたというのに、そこまでの逃走を許してしまった。

もうこれ以上の失態を見せる訳にはいかない…ッ！

それまで以上に鋭く振るった剣を躲わし、旦那様の放つ嵐を思わせるような拳撃でさえ全部を見切り、手錠の拘束から攻勢には移れないというのに、私達は攻めあぐねていた。

そうして彼を逃がしてしまい、旦那様に謝罪しようとする声をかけるその刹那、

「くっくっく……アーハッハッハッハ！！ まさか！ まさかこれだけ追い回した獲物に逃げられるとは……面白い、面白いぞ人間……」

……私はその歓喜に震える声を聞いて喜ばしい気持ちを感じると同時に、私にはどうやってもできなかったことをやってのけた男性に嫉妬を覚えずにはいられなかった。

だから殺す。

私の牙から逃れ、私のメイドとしての矜持に傷を付け、あまつさえ旦那様の心に深く根差したあの方を、私は殺す。いや、殺したい。

きっと彼を殺せば、次は旦那様は私を見てくれる筈。そして私は旦那様に殺されるのだろう。それこそ私の望み、主のために命を果たすことこそ従者の本願。

……少し熱く語ってしまいましたね。

ですが、私は彼に一人の男性としての感情も持っているようだ。この前旦那様にご指摘されてしまいました。

きっと殺そうものなら後悔な苛まれる、けれど、その時どんな気持ちを抱くのか、私はそれを知ってみたい。

従者としてではなく、一人の女性として神名様を殺す。

これもまた私の目標の一つだ。

ああ……

早く、早く会いたいものです。



過去編 「メイドとして、女として」(後書き)

次からはようやっと本編ですが、

漸く出番であるSTS勢に登場してもらおうと思います。

といっても、このお話では原作無視の進行&設定のオンパレードになるので、階級とかも違ってくると思います。

何と言っても起動六課建てる気零だもんなあゝ

彼女らはあくまで未だに囑託ですから。

それではまた次回の更新で

第四十一話 「犯罪者でも無いのになー、俺」(前書き)

一応本編に入っている訳ですが、

今回は一応命君の現状をば……

それでは本編スタート！

第四十一話 「犯罪者でも無いのになー、俺」

S I D E 命

「おっちゃんーん！ 替え玉、お願い！」

「おっつー！」

お食事中に失礼します、とある次元世界でもってこの世界の名物「白銀麺」とかいうのを食べてるんだけど、これが結構イケるんだよね。どう考えても人の食える食べ物の色をしていないのに、どいう訳かバカウマなんだな、これが。

周りからは奇異の目で見られているけど、そんなもんはここ3年の間で慣れ切ってしまったので全く気にならない。今の俺の格好は

前に着こんでいた黒衣とはデザインが違い、某復讐者のようなタキシードをより簡易にしたような感じのものになっていて、これは旅を続ける中で動きやすさと趣味を混ぜ合わせたものである。後悔なぞ微塵もない。さらに俺をより一層目立たせているのは、両手についている簡素なデザインでありながら決して外すことのできない手錠と、首に取り付けられているナンバー付きの首輪だろう。

手錠の方は以前とあるメイドに付けられていて、どうにも彼女以外では外すことは叶わない独自の封印式が組み込まれているらしい。厄介なもんつけやがってあんのヤンデれメイドめ。

首輪は以前管理局に捕まっていた際に付けられた認識用のもので、俺のように異能扱いされるようなレアスキル持ちと認定された者の首輪には特別にある程度動きを抑制するための魔法が掛けられているのだが、これはメイドが解除してくれたので、その心配は無い。

つつても、問題無い訳じゃないんだよなあゝゝ…

捕まっていた時、十束剣は取り上げられてしまい使えない。アークルとはユニゾンを常時していたために引き取られこそしなかったが、長い事ユニゾン状態で逃げ続けたせいで解除の仕方を忘れてしまった。掛け声は覚えているのだが、そこからどうするんだっけ？ てな感じで、専ら火竜と同じようになってしまっている。

つまり、今までの俺は魔導具が無い、手錠で動きが制限されているという状態のまま3年もの間逃げ続けなければならなかったのだ、管理局とかメイドからとか。

「マジで炎と身体能力人外じゃなかったらとつくの昔に死んでるもんなあー俺」

『そうねえ、2年ぐらい前に会ったラオシャンロンとか、もう駄目かと思っただものよ』

「いやいや、それよりもっと怖かったのがあったって。それと同じくらいの時期に出会った白い昆虫！ 何アレ最早虫じゃねえじゃんとか思ってたなら、いきなり虫の大群率いて襲ってきただろ？ アン時の恐ろしさときたらもう……」

『アレ以来虫が怖くなって仕方なかったものねえ……』

ていうかアレは絶対虫じゃなくて別の何かだって、等々過去の恐怖体験を語り合っているうちに麵を完食。なんだか魔導師の持つマルチタスクのような感じで、内面での会話と現実での行動をほぼ同時進行で出来るようになった。魔導師は本当、便利なスキル持っているなあとつくづく思う。

そして勘定を支払って店を出るとそこには、

「ようよう兄ちゃん。また会ったなあ〜？」

「よお暇人。態々俺がここで飯食ってるのを調べた上で多勢に無勢でのお出迎え、誠に感謝するよホント」

そこには店を覆って余りある数のチンピラ……もとい、管理局員の成れの果てどもが。

「てめえを逃がし続けること5年……今日でその因縁に終止符を打たせてもらうぜ！」

「どうでもいいけどおっさん、クビになった今でも俺を追うのやめてくんない？ 正直だりいんだよムサイおっさん達の相手すんの」

これが若い子だったら大歓迎なのに……あれ？ 思考がおっさん染みてる？ そりゃもう精神年齢だけを言えば40間近のアラフォ

「だかんね、俺ってば。

俺を連れ戻す、或いは殺すように命令された方達だが、態々そんなものに悠長に付き合ってやる義理もその気も無いので毎回テキトーにあしらっていたのだが、そのせいで彼らの仲間とかは局を辞めさせられたり、出世街道から外されたりしたそうなので、俺はその逆恨みを買っている訳だ。

「はあーやれやれ……………」

「てめえはここで終わりだあ！ やれ！」

『『『』』』『おおおおおおおお！！！』』』

……………こんなことしてる場合じゃないんだけどなあ〜

群がるマダオ達を片付けるのもこれで何回目だろうととりとめの考えをしながら連中の手を翳して、

「  
龍ノ炎、漆式！  
虚空ッ！」

割と手加減しない一撃でもって吹き飛ばした。何人かはこれで戦闘不能になるのだが、最近になると俺のパターンを研究した特別製の耐火性能に特化したシールドを開発したらしく、これで吹き飛ばせる人数は減ってきている。

「そんだけの熱意を次の就職先にも向けるよ……俺の所なんかに来てる暇があったら」

どうしようもない事だが、別にこいつ等が困っても知ったこっちゃないしいつかと思いなおして次の攻撃に移る。手錠されていても印を書けるのは唯一の救いである。

「そらっ！ 崩+創龍！ 名付けてッ！ 「火竜百龍覇ッ！」」

崩で作った炎弾に、創龍の特性を加える事で一つ一つにドラゴンの形状を持った即席のチビ龍軍団を創り上げ、名前なんかは適当なものか思いつかなかったので紫龍さんの技からパクってみました。本当にすいません。



「また訳のわからなげやあああああ!?!」

「あちい!?! 死ぬツ! 死ぬぞクソガキヤあああああ!?!」

「いや、死なんだろ。バリアジャケットしてるくせに」

虚空や刹那でも無い限り、余程の炎でないとバリアジャケットつて貫けないんだよな。砕羽とかみたいに圧縮させた密度の高い炎とかも有効的だがあるが、多勢に無勢ということもあり、あまり接近戦とかしたくないんだよな、さっき飯食ったばっかで動きたくないし。

ていうかおっさん。さっきから俺を殺そうとしているくせに自分達がそうされると怒るとか……自分勝手すぎだろ。

そうしてまた半数近くを吹っ飛ばして残ったのは顔なじみのある、年季の入ったストーリーカー共である。

『『『ストーリーカーって言うなツツ!?!?』』』

だまらっしゃい！ アンタ等5年も追いかけてきてんだろっが！  
いい加減顔も覚えたわっ！

「おらかかってこいよ、3人掛かりなんか指先一つでダウンだぜ」

『『『ぬかしやがったな糞餓鬼イイイイイイイ！！！！』』』

冷静さを完璧に欠いた特攻。計画通り過ぎてつまらねえな

「そら食え、グラトニ【暴食】」

創龍の形態変化の切り札の一つ。巨大な龍の顎を模した炎を以つて対象を呑み込み、その中で煉獄火炎並の炎を味あわせる回避不能防御不能のエゲツナイ技である。実際に炎の中から断末魔が聞こえてくるが、多少は手加減しているので死ぬことはあるまい。せいぜいバリアジャケットが真っ黒になる程度の火力だし。

『相変わらず手加減してるわねえ』

どう見ても手加減しているとは思えないような光景なのだが、まあアークルの言っていることは事実でもあるので苦笑いを浮かべることができなかった。

確かに創龍の能力はかなり汎用性に優れているし、強力な炎ではあるのだが、これに例えば刹那を足したら……………

「まあ、いいさね。殺すのは嫌だし、それでもこいつ等はウザいし、憂さ晴らしを兼ねた食後の運動ってことで」

『でも、今回はちょっと派手に動き過ぎちゃったんじゃない？　こんな街中で戦うの初めてじゃないかしら？』

そういえば、今までは大抵姿を眩ますために無人世界を渡り歩いてきた訳だが、こういう人の居る場所で戦うのって初めてだったよ  
うな気が……………

「……………通報される前に逃げるか」

『もう手遅れだろうけどね』

それでもここに居るよりはマシだろそれはそうね…と適当なところで会話を切り上げて、正規の局員が駆けつけてくる前にトンずらする事に決めた。

「そんじゃ逃げるか、開け、【次元龍】」

炎を用いて創りだすは次元の狭間を生きるとされているドラゴン。思いつきりドクエ出身の存在なのだが、個人での次元間の移動の際、転送魔法が使えなかった俺は前世のゲームの記憶を掘り起こして何とか異次元を移動できる龍を思い出して、創りだす事に成功したのだ。この能力こと龍を創る事に関して言えば相当のバグ技なので、体が炎で構成されている以外の能力の再現度はハンパ無い。

これでまた追跡が厳しくなるなあ〜と若干憂鬱に思いながら次元の穴を潜りぬける。

この先はランダムなのでどういいう世界に行くのかはわからないけ

ど、いつかは帰りたい場所もあるので、立ち止まってはられない。

「これで3598回目の転移。いい加減海鳴に帰れないかね？」

翠屋のシュークリーム食べたいな！。

所変わって、ここは管理局の食堂。今日の仕事を終えたはやてとシャマル、今回の任務を手伝っていた風花と神楽の4人は早めに仕事が片付いたこともあって、街に繰り出して遊ぶことになっていた。

「いや、二人がおってくれれば仕事がはよう終わって助かるわ」

ホンマ」

「まあたかが無人世界での迷子犬の搜索ぐらいはね……」

「ていうか何でそんな仕事引き受けてるの管理局は……」

「ははは……これも人員不足ですから」

いや関係ないでしょと3人からツッコミを受けてしよぼーんな感じのシャマルだったが、つい先ほど得たとある事を思い出して、3人にそれを伝えた。

それは別の世界での『元局員達が引き起こした暴動事件』のこと。

しかし重要なのはその局員達ではなく、その局員達を一蹴したという“黒ずくめの青年”の話。

現場に駆け付けた局員の聞き込みによれば、

歳は二十歳前後

黒髪燈眼の改造タキシードを着込んでいて、手錠と首輪が印象的だったとの事。

そして3人を釘づけにしたのは、

「そして、話によればその青年は炎を操って元局員W」

ガタッ！！

椅子が倒れる音

シャルの言葉を最後まで聞くこと無く3人娘は椅子から跳ね上がるように立ち上がると、我先にといわんばかりの勢いで駆け出して行った。その様子を偶然見かけた幼馴染の少女Fは次のようにコメントしていた。

「食堂で知った顔を見掛けたので声をかけようとしたら、突然血相を変えて出口に走りだして声をかけたら鬼のような形相で

『そこをどけえええ！！』

って、まるで道を譲らなかつたら〇すぞゴリアって雰囲気で……その後でシャルさんに事情を聞いて納得したんですけど、まさかあんなになるなんて……」

その後、その話の最後に青年が転移魔法とは違う技術で次元転移を行ったことを、その時転送ポーターの管理をしていた眼鏡の青年から聞いた少女達は意気消沈しながら食堂に引き返したらしい。

その際、本人達は自覚がなかったそうだが、失意の3人には縦線が入りそうな程陰鬱なオーラが漂っていたそうなの……

「ハア……………」



第四十一話 「犯罪者でも無いのになー、俺」(後書き)

ちなみに捕捉をしておく、転送ポーターの管理をしていた眼鏡の青年というのはグリフィス君です。機動六課を立ち上げる予定の無い拙者にはこのような出し方しか思い浮かばなかったでござる……無念ッ……！

でもまあ主要人物は多少設定変えて出すので、その辺はご心配なきよう……

何？ 誰も心配なぞしておらぬ……だと……

じゃあ書くだけ書いたということぞ。

それではまた次回の更新で…

第四十二話 「次から次に……！」（前書き）

もうPVとか感想とか増えなくてもOTTティー気にしない！

それ〇か〇こわ〇ち〇ー！

てな訳で、自由に書く事にしました。シリアスっぽいやつを暫く書く予定が無いんでこうでも思わないとモチベーションが上がらないのなんのって……

それでは本編でござい

第四十二話 「次から次に……！」

S I D E 神楽

この前やつとみこと君の目撃情報が入ったということで、私と風花ちゃんは地球の家を開けてクラナガンにあるはやてちゃん宅に拠点を移すことにした。その時にすずかちゃんも一緒に来る事になって、結局ライバル勢ぞろいになってしまった。

「本当に命君の情報があつたの？」

「間違いないと思うで。入院中の元局員から話を聞きだしたから」「うんうん、何やら知られたく無かつた事柄だつたみたいで中々話してくれなかつたけど……」

「そこはなのはちゃんと風花ちゃんによるアレがあつたからね」

「……うわあ」

「「それ、どういう意味なの?!?!?」」

二人に『そりゃ無いわ〜』的な視線をすずかちゃんが投げ、二人はそれに憤慨しているようだけど…

……普通、怪我人を相手にデバイスチラつかせたり風で服を刻みながらのお話は普通あり得ないでしょ。いや、むしろそれは尋問から既に拷問になっていって…

て、  
なのはちゃんは最近になって考え方がかなり過激になってきてい

「邪魔をするならお話ししてもどかせろの!」

という超体育会系の思考を持つようになってるので分からなくは無かったけど、まさか普段はストッパーになる役割の方が多かったのにあんな……ガクガクブルブル

と、とりあえず!

みこと君の無事がわかっただけでも僥倖だったと思う。いなくなつてからもう十年も経つて、みんなも口にこそ出さなかつたけどこれだけ探して見つからなかつたのはひよつとしてもう……という考えが頭のどこかにあつた筈。だから最近のはやてちゃんも碌に取らないで仕事を続けてあちこちの世界に赴いていたし、風花ちゃんも虚ろに空を見つめることが増えてきていたので、今回の情報はそんな彼女たちに希望を与えてくれた。

私達がいくら彼を追つても情報の一つも捕まらなかつたのは、私達の探している人物像と彼が一致していなかつたからだつた。

私達は彼がアークルさんと二人でいるものだと考えていて、探すときはいつも『一組の男女』という聞き込みしかしていなかつたし、まさかみこと君がお尋ね者になつていたなんて知らなかつた。いや、知らされていながつたのだ。

管理局は私達が彼を見つけるまでの間だけ働くと明言しているため、彼の情報を極力私達の耳に入らない様にしていたんだと思う。彼も追われているから姿を隠して移動しているみたいだし、それなら私達一囑託扱いがその情報を掴める訳が無かつたのだ。

ところが今回、彼は初めて衆人の目の前で動きを見せて、その結果大きな噂になるほどの騒ぎを起こしてしまい、余計に管理局にその存在を警戒されてしまった代わりに、その情報が末端の私達にも

伝わってきたという訳だ。

そうしてその情報から彼の今まで経緯を調べる事に成功したんだけど……

「にしてもみこっちゃんの見境の無さには呆れるちゅーかなんつーか……」

「行く先々の世界で可笑しなことに巻き込まれている……」

「あはは、命君らしいのかもね。私が誘拐されたときも偶然そこに落ちてきただけだったみたいだし」

「にやはは……多分、転移すると余計な事件に関わっちゃう体質なんじゃないかな……?」

「それにしたってこれは酷い……」

伝説の食材として、またその捕獲が困難とされている危険度S指定の龍種を倒して、その世界で偶々お世話になった孤児院にその龍を預けたらそのまま消えたとか、

一度士官学校に現れた時なんかはその学生と教官相手に無双ゲームさながらの大立ち回りを演じたそう。しかもその時一切炎を使っていなかったとか。

何かこの十年の間にまた無駄に強くなっているんじゃないだろうか……？

しかも格好も少し変わっているらしく、返り討ちにあつた局員さんのデバイスのデータを見させてもらったんだけど、

あれってもしかなくても○アンの格好だよね……？

改造タキシードのキャラを教えたのは私だったけど、まさかその格好を好んでしているとは…

「でもこれはこれで…（ジュルリ）」

「すずかちゃん？ キャラおかしいからね？ 貴女はそんなキャラじゃなかった筈だよ？ もっとお淑やかな令嬢だった筈だよ？」

「なのはちゃん？」

「な、何？」

「引いてちゃこの戦いは勝ち上がれないんだよ…？」

「だからってこの映像をUSBに態々記録することなんて無いと思うの……」

「あれ？ それじゃ『デフォルメVer、命君人形』は要らないってことでいいんだね？」

「」「買ったアツ……！ いくら(だ)(や)……!」「」「」

「あれっ!？ おかしいのは私なの!？ 皆が正しくて私が間違ってるんでも言うの!？」

首に巻かれている金属製のマーカーが私のナニカをくすぐってし  
ようがないんだけどオオオオオ!

私ってひよつとして女王様気質でもあったのかな?とか思いながらも注文は忘れない。何やら叫んでいたなのはちゃんを無視して有頂天な私たちだった。

S I D E O U T



S I D E 命

「コラアアアアア！！ 待ちなさいその指名手配犯！」

「待てと言われて待ってみる気は無いな！」

この前、しつこかった連中を追い払ったはいいが、そのやり方が拙かったようだ。

極秘扱いだった筈の俺の情報を隠しきれなくなった上の連中は、そうやら俺を大々的に指名手配をしたようで、そのせいであちこちの次元世界で局員との追いかっこを強制させられる羽目になった。

今も逃走中なのだが、相手の女性が履いているローラーみたいな奴、あれカッケー。

「何で私がウィングロード展開して追っかけてるのに、どうして追いつけないのー！？」

「……坊やだから？」

「私は女の子ですっ！！」

「すみません」

髪が短かったからつい。でもそう言われてみれば確かにそうか。

「男が腹だしとか無いな。見ても苦痛だ」

「まさかさつきまでそんな目で私を！？」

「安心して下さい。今女性だと判明したので眼福でした！」

「なっ！？」

途端にお顔を真っ赤にしているところを見ると、どうもこの手の台詞を言われたことが無いようだ。それならラッキーこの隙に……

ダッ！

「何やってんのよバカスバル！！折角ここで指名手配犯を捕まえるチャンスなんだからボケつとしない！」

「あつ、ティアア！！」

「あちゃあ、援軍の到着か」

（面倒ねえ、しかも女の子相手には炎使わないだっけ？）

（もち。例外はあのヤンデれぐらいで、それ以外のはどうもな。何となく風花とか思い出して…）

逃げようとした瞬間に魔力弾が数発放たれ、狙いが正確だったのか寸分変わらず俺の足下に着弾したため、動きを止めざるを得なかった。背後を見てみるとバイクに乗った男らしき人物と、先程から俺を追走してた少女に説教しているオレンジの少女。ってまた女の子が増えたのかよ…、余計に反撃しずれえ…

次元転移した途端にこれだもんなー、しかも後一週間はしないと【次元龍】での転移は不可能だし、どうしたもんか……

「おいティアナ、スバル！ 標的ほしを前に何やってるんだ！」

「は、はいっ！ すいません！」

「ったく……」

……これなら案外なんとかなるやも。

「おゝい、へボ魔導師どもー！」

「……何だと(だつて)!!」「」

「お前ら三人友何やってのさ? 俺が凶悪犯だつたら今の際で確実に攻撃してたよ? それを俺が声かけるまで漫才してるなんて……プフッ」

「……笑うなアアアアア!!!」「」

キレた三人がこちらに突撃してきた。まるで周りが見えていないかのような……よし、掛った!

「あ、足下」

「へん! もうそんな嘘には騙されませんよ!」

「そつよここで貴方は……っつて」

「人の忠告を無視するチミ達にはお仕置きが必要なようだねえ〜？」

「何ッ！？ お前何時の間に!？」

「気づくのが遅せえんだよ、魔導師」

これだから相手を見くびる輩は……俺が以前それで酷い目にあつたからよく分かる。敵前で注意散漫とか……まな板の鯉と同義だぞ？ あれ？ 鯛だっけ？

三人が話している隙について予め放っておいた創龍【モノブロス】。地中を潜行できるコイツに足下の地面を陥没させるだけの穴を開けさせて、踏んだ瞬間ドボンとなる訳だ。頭に血が上っている奴らがよく引っ掛かる罠の一つだ。

「お前ら魔導師はどうして“相手が魔導師じゃない”っただけで油断するかね？ 魔導師じゃなくなつて強い奴なんかごまんというんだぜ、世界中。それなのに肩書だけの認識しかできねえとは……この未熟者め」

まあだからこそ俺が逃げやすいのだが、あからさまに嘗められて

いると思うと良い気はしない。俺が魔導師を返り討ちにした情報も伝わってる筈なのにこれだもんな〜。

つくづく魔導師って輩は自分達が特別だと信じてやがる。まるで魔法が使えない人間は自分達には敵わないとでも言うのだろうか。そんな傲慢は海鳴にでも行けばすぐにぶっ飛ぶだろうけど。

あそこは俺が回った色々な世界の中でも有数の人外魔境だと思う。脳のリミッター外すとかあり得ない事を平然とやってのける人もいるし、吸血鬼の末裔とかいるようなところだし。

ずっと前に土郎さんが言っていたけど、他にも超能力者とか妖怪の類もいるとか。底知れない故郷に思わず身震いしてしまったのはいい思い出だ。帰ったら是非探してみたい気もするが、会ったら会ったで面倒そうなんでやっぱいいや。どうせまた土郎さんとか恭也さんに戦いを吹っ掛けられるだけだろうから。

「これを教訓にして、慢心せず頑張る様に。それじゃあね〜」

別に助言してやる筋合いは無いけれど、今まで見た魔導師の中ではそれなりに素質がありそうな子だと思っし。今までアホみたいに魔導師と戦ったせいも、素質のようなものを見る目が勝手に養われてしまった。

魔力無いからどうでもいいけどさ。

「キィー！ 何よあの変態！ 良い気になって説教なんかして！」

「まあまあ落ちつきなよティア。あの人が言った事も間違ってたなかつたんだし」

「そうだな……あの程度の挑発に乗ってしまうとは……普段ならスルーできる程度の物の筈なのに相手が魔法を使えないからってそれで余計に火が付いてしまった。冷静に考えれば俺達がどれだけ馬鹿だったのかはお前も分かるだろう？」

「もっつ！ 分かってるわよそんな事！」

……元気だな。アイツら。心配せんでも勝手にまた復活して追いかけてきそうだ。特にヒスッ娘。あの子からはアリサと似たような何かを感じる……。

「もしや……あの子もツンギレ……？」

そんな益体も無いことを考えながら、その場を後にする俺だった。

「・・・ドクター。例の対象を発見しました。どうしますか？」

『そうか。では、できればこちらに招待してくれないか？』

「はっ、では力づくで」

『トーレ、そんなんだから君は姉妹から脳筋呼ばわりされるのだということを自覚した方が良いと思うよ……』

「なっ!？」

『それにできれば丁重に持て成してくれ。彼はお客様なんだからね』  
『?』

「……………了解（私そんなに脳筋なのだろうか……………）」

……………俺を監視していた、金の双眸に気が付くこと無く……………



第四十二話 「次から次に……！」（後書き）

今回はさり気なくスバル、ティアナの登場！ ついに命君はミッドチルダに乗り込みました！ ランダム転移の結果だけどね！

ちなみに、バイクを運転していた方はまた次回ということ……

まあオリキャラじゃないんですけどね。

それはそうと、最近は朝も肌寒くなってきて、やっと残暑が終わりを迎えたようです。

過ごしやすい気温になって何よりです！

それではまた次回の更新で！

第四十三話 「腹が減っては戦はできぬ…これって真理だな 前編」(前書き)

微妙なサブタイ微妙な内容！

いつも通りですね。

それでは本編をどうぞー

第四十三話 「腹が減っては戦はできぬ…これって真理だな 前編」

「へえ、フエイトとユーノの付き合い始めたんだ。よくプレシアさんが愛娘を手放せたもんだなあ」

「でこつちの記事は……おー！ スゲエー、『クラナガンに地球食の専門店が！』……やっぱここ、ミッドチルダだね……」

この世界での追跡を振り切った翌日のこと、路地裏に潜伏して夜を明かしたのだがその際寝袋に使ったチラシヤ雑誌を読み直したのだが、まさかここが管理局のお膝元だったとは。

「やべー、まだ六日もあるのにこんな危険しかない世界に流れ着くとは……、とりあえずは都市部から離れた方がいいか」

まあ気休め程度にはなるか、と、その前に……

「（ギョルル〜）……………まずは腹ごしらえ、だな」

昨日は一日中追われていたせいで何も食べなかったんだよな、  
あんの少女魔導師どもめ…！

といってもさつき集めたチラシの中に俺がかなり大々的に指名手配されているのが分かったし、あんま気軽に飯屋にはいけないし、かと言ってこんな文明が進んだ世界には野性の獣もそうはいないし自給自足は難しいだろう。本当に困ったもんだな。

（じゃあどうする？　いくら創龍でも食べ物は創造できないわよ）  
「そうだけどな〜、マジでどうしよ」

今まではどうにかなって来たが流石の俺も、飢えには勝てません  
しな、しゃあない。

「どうせもうお尋ね者なんだし、泥棒でもすつか」

(ええっ!? いくら何でも開き直りすぎやしない!?)

「構やしないさ、背に腹は代えられない!」

ていうかもう腹減って限界なんだよ! 水すら飲んで無いんだよ!  
! だからっ!

「その誰か! 監視してるぐらいなら何か食い物寄越せエエエ  
!」

崩ッ!

「ちいっ! 気付いていたのかっ!」

「たりめえだこの野郎! 昨日の夜辺りからネチネチした気配を感じていたが、まさかてめえみたいな変態だったとはなっ!」

「誰が変態か!?!」

だって見た目綺麗な女性なのに何だそのピッチリスーツ。本当にありがとうございます。ってそうじゃない、そんなはしたない格好する奴なんてどう考えても変態だろ、常識的に考えて。

「このオオ…ッ！ 言わせておけば」

「はいそこまで」

いくら俺でも変態を相手にしたくないので、自身の出せる最速でもって懐に踏み込んで手錠を首に宛がう。丁度柔道で言う所のはがい締めというやつだ。

「貴様………！」

「はいはい、大人しくしてないとこのまま首折るかな？」

「……………何が望みだ」

「おっ、話が早くて助かる」

「こういう理解の早い人は大好きです。これで変態じゃなかったらなあ……残念だ。」

「今また何か失礼な事考えただろう!？」

「気のせいです。それじゃお願いなんだけど……」

俺の朝食宜しくね〜

S I D E  
ト ー レ

しまった……私とした事がまさかあんなに簡単に背後を取られるとは……!

油断していたという訳ではない。昨日の戦いを見ていたというの

に、アレも全く本気では無かったということか。

「それにしたってどうして私がこんな……お使いのような事をしなければいけないだ……！」

『ちやんとお前の言うドクターとやらの所に行ってやつからとりあえず食い物買って来い』と言われた私は今こうして街に買い物をしにきた訳だが、

「何だってアイツはこんな服を用意したんだろう？」

言われてすぐに出かけようとする私に対象は慌ててこれを着るよ  
うにと言って渡してきたのだが、何故アイツは私に自分の着ていた  
コートを渡してきたのだろう？

S I D E O U T



「ふう、あれ着ておけば何とか怪しまれないだろう」

（あのままの格好じゃ恐ろしいことになりそうだしね）

男の視線的な意味ですね？ 俺も何気に眼福だったと言わざるを得ない。普通に美人だったからあの格好でうろついた日にゃ男共が黙ってないだろうし、あれぐらいはするさ俺だって。

（でもあの服に気付いた誰かが命ちゃん存在に気付いたりとかは無いかしら？）

「それで見つけられる人間って……：どんだけ俺の情報を覚えてんだよソイツ。いくら指名手配されているとはいえ流石にそれは無いだろ」

（そつよね～いくらなんでも考えすぎよね～）

「「あっはっはっはっはっは」」

……後で気付くことになるのだが、こつこつって後

タフラグになったりするらしい。

S I D E 風花

「もう一回言って！ 本当にミッドチルダにこの人が居たのね！？」

「ははは、ハイイツ！ 昨日確かにこの人を追跡してたんですけど逃げられました！ はい！」

食堂で何か騒いでいた子達の話を知ったら、何とこの世界に彼が来ているというではないか！

こうしてはいられない！ 幸いにもこの話を聞いたのは私だけ、ならば皆よりも一足先にこの情報を掴んだ私が一歩リードってことで！

「ありがとっ、それとこの話は他の人には絶対に言わない様に！  
良い！？」

「サー！ イエッサー！」

「うむ、それじゃー！」

そう言って出かけたのが今朝のこと。今の時間は昼前だということに一向に見つからないって何…

そりゃ見つからない様に隠れているんだろうとは思っけどさ、このところはほら、愛の力とかシンパシーとか運命的なサムシングとかでばったり出くわすんじゃないかなって、いいじゃない、そんな夢見たって……

「ああもう！ 何処に居るのよーー！！！」

思わず路上で叫んでしまう。周囲の人の視線が痛いけど……っ  
て、アレは！？

ふと視線の先にとある人の背中が見えた。別に誰かという訳では

無いけれど、その人が着ている物に見覚えがあった。以前すずかちゃん経由で貰ったデフォみこ君が着ていたコートが確かあんな形状だったような……！

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

私はその人に声をかけずにはいられなかった。振り向いた人は念願の彼じゃ無く綺麗な女の人だったけど、それでもこんな特徴的なコートを持っているということは何かしら彼と関係があるのかもしれない。そう思った私はコートについて訊ねてみることにした。

「すみません、そのコートって貴女の持ち物ですか？」

「あ、いや、違う。これはある男が着ていけと言って貸してくれた物だ。どうして渡してきたのかは分からないが……」

最後の方は何を言っているのか聞き取れなかったけど、これが借り物だという事はその人が彼である可能性が上がってきた。これはもう着いて行くしかないっ！

「あの、もし良かったらその人のところまで案内して貰っても…？  
ひよっとしたら知ってる人もかもしれないんですっ！」

向こうの女の人は少し悩んだ後OKしてくれた。よし、これで命  
君に会えるかも…！

（まあ、魔力反応はそこそこ感じるがリンカーコアが未だ未覚醒状  
態。それほど危険視する必要は…いや、それで先程失態を呈して  
しまったではないか。ここは慎重に様子を見てみるか…）

相手の探るような視線が気になりはしたけど、会えるかもと舞い  
あがっていた私はそれに注意を払う事無く案内に従って、コート  
の持ち主の待つ場所へと向かった。

命君……………だといいなあゝ

……………一方その頃、

「.....」

(命ちゃん？ 生きてる？)

　　昼まで待たされて空腹のあまり喋ることすら億劫に感じている青  
　　年が一人使いつ走りの帰りを待っていたそう。

「め.....飯.....つま(ガクッ)」

(命ちゃん！？ それは何となく言っちゃいけない気がする！！)

第四十三話 「腹が減っては戦はできぬ…これって真理だな 前編」(後書き)

そついや前回でバイクを運転していた男の正体云々とか言っていた  
ような気がしましたが……

素で忘れてました。

という訳で後編に続きます。

それではまた！

第四十三話 「腹が減っては戦はできぬ…これって真理だな 後編」(前書き)

今回かゝなり好き勝手にしちゃったせいで色々と不快な思いをする方もおられるかもしれませんが……

何が辛いつて現実に付き合っている相手がない私がこんな文を書くことが辛い。

何でもこいやー！と仰ってくれる剛の方はこの先の本編をどうぞー



第四十三話 「腹が減っては戦はできぬ…これって真理だな 後編」

「じ……じぬー……」

(み、命ちゃん!? そろそろ本格的に空腹で大変なことに!?)

「オレサマオマエマルカジリイイイイイイイイイイイイ!?!」

(落ち着いて!! それは食べ物じゃないわ! ただの段ボールよ!?)

「大丈夫だ! 世の中には段ボール肉まんというものがある!?!」

(それは胸を張れる食べ物じゃないってええ〜!)

お使いが中々帰ってこない。昨日から引き続き朝そして昼まで何も食べないというのは案外辛いものである。この身が人外スペック

を誇っているとしても全力で逃走したままで何の栄養も補給できないのは死活問題なのだ。

だから昨日寝具に使った段ボールすら食材に見えてくるほどの空腹に襲われた俺はそのまま段ボールを咀嚼するべく口に……

「おい、言われた通り食べ物を買ってきたぞ。ん？ どうして段ボールをそのように握りこんでいるんだ？」

「あ！ あっー！ー！！」

「やかましいわ！ 飯持ってきたんならさっさと寄越さんかい！！」

ガツガツガツガツムシャムシャムシャムシャ……………  
……………ゴックンツツちよ。

「ん~~~~~」 正直拙い栄養食ではあったけど今の状態ならどんな高級ディナーよりも美味しく感じられたぜ！ ごっそーさん！！」

美味かった……どれくらい美味いかって言うと初めて食べたはや

てのカレーの次の次くらいには。空腹が最高のスパイスっていうのも領けるといふものだ。

……まさかカ○リーメイトのフルーツを俺が美味しいと思うだなんて……俺はメープル派なのに。

使いつ走りに行ってもらった女性      トーレさんに何度も頭を下げてお礼を言い、トーレさんは俺のテンションの起伏の激しさに戸惑っていたけど、「そ、そこまで言われると悪い気はしない」と言っ先程の強奪に近い俺の蛮行も許してくれた。

そして気になるのは先程から俺にもものっそいキラキラした顔を向けてくる女性。どことなーく知っている顔の面影があるような気がするのだが……

「命君！！ 命君だよねっ!?!」

「おおおおお。如何にも神名命とはお」

「命君——————!!!!!! (ガバツ)」

相手の名前を確認する間もなく俺が神名命であると分かった瞬間に女性にタツクル、もとい、抱きつかれた。それはもうすっかりと、擬音で表すとするなら、

ムギユウウウウウウウウウウとフニイイイイイイイイイイイ  
イって感じ。

「あれ！？ ちょっと待って!？ 女性がそう簡単に抱きつくもんじゃないとオジサンは思いますよっ!?!?」

「命君……………ひっく……………やっとみづけだ〜」

「泣いた!？ どうしよ俺!？ 俺この人に何かしたっけか!？」

もう混乱の極みである。振りほどこうとしたら急に相手が泣きだした。しかもそのせいでこちらに余計に抱きついてくるものだからもう柔らかいやら暖かいやらこれが女性の匂いなんだねえとか場違いな妄想が頭を駆け巡るうとしていて、理性でそれを抑え女性をとりあえず引き剥がして顔をよく見てみる。

泣きじゃくっていたせいで目元は赤く腫れているが、普通に美人の部類に入る顔立ちであり、トーレさんと比べると幾分かは幼さがあるものの凛々しい美人だと思う。

抱きつかれていたので分かったのだが体の方もかなり華奢なよう  
でいて、その実鍛えられているような印象を受ける無駄の無い体つ  
きであった。

「……いや、無駄が無いつつてもあるもんはあるんですけどね  
？ それも結構な大きさで。」

「イカン、マジでおっさんっぽい。」

それにしたって見れば見るほど誰かに似ている気がするんだが……  
……うん？

「あのー、すいません。そろそろ離れてもらってもいいですか？  
ていつかさつき引き剥がした筈なのに何時の間に俺の懐に……」

戦慄を禁じ得ない早技。これが戦場だったら俺は間違いなく彼女  
にやられていた。いくら考え込んでいたとはいえ……

「……もしかして、私が誰だか分かっていない……？」

「（ギクッ）……………そんな事」

「今の間は何!?!?」

やばい、いくらなんでも忘れてるってのは失礼過ぎるか。ここは土下座でもして許しを乞うしか…

「そっか、それじゃ私は昔と比べても誰か分からなくなるぐらい成長したってこと……………で良いんだよね?」

「昔……………つすか?」

「うん。それで……………私に抱きつかれた時……………ドキドキ……………した?」

「〓（）’&%\$#!”#\$%&’（!?!?!?!?!?!?!?」

おうおうばアアアアふりイイイイイイずツツ!!!! 俺の頭は硬直の後瞬間沸騰。何でそんな上目遣いですか貴女はっ!!!!?

しかも頬を上気させている姿は何処となく扇情的というか蠱惑的というか、物凄く魅力的に見えてきてもうアツアツってな感じだ。俺、昔こんな美人になりそうな知り合いっていたっけ?

馴染なら。しかも結構沢山。

いたじゃん、美人になりそうな幼

「……………もしかして、風花……………なのか…？」

探る様に質問する。でもまだ顔が赤いままなのでどことなく気恥かしいままなのは変わらないが。

すると相手の女性ははにかむ様な笑顔で、

「やっと思い出してくれたんだ、酷いんだあ、今さら思い出すなんてさ」

「いやいや！まさかミッドチルダにいるだなんて思わなかったしそれにお前が……………」

「うん？ お前が……………何？」

「……………いや、まさかお前がここにいるだなんて思わなかったな  
「って」

「それさっき言ったでしょ」

おグツ!? 鋭いじゃないか風花、十年前なら簡単に引っ掛かってそんなものを……!

「ねえねえ、さっきなんて言おうとしたの?」

「さあ? 私は何か言おうとしてましたっけ?」

「……………」

「すいません! 無言で抱きつかないで!? その、いい歳した大人がこれじゃかつこ付かないでしょう!?!」

「別に? だってここ路地裏だし人の目も無いし」

「見られてる! そのトーレさんにがつり見られてるウウウウウ!」

「すいません。しばらく幼馴染として大事な話があるので外して貰ってもいいですか?」

「ああ構わない。こちらとしては後でドクターの下に連れていく了承をとっている以上、対象の行動の妨げはしないさ」



「逃げた！？ 待ってトーレさん！ 俺を助けて……ってもういねえ！？」

何か呟いたと思ったたら超スピードで何処かに飛んでいってしまった。おのれエ……！逃げおつたな……ッ！

「ふう、これで二人つきりだね？ さあさあ、キリキリ吐いてもらおうよ？」

「いやだからなんにも……」

フニイイイイイイ

「分かりました！ 言いましょう！ だから無言で胸を押しつけるの止めて下さい……！」

「……………チッ」

舌打ちイ！？とか思ったがツツコミは入れない。もし刺激してまた抱きつかれたら色々ヤバイ。理性とか一気にはち切れそう。

「それじゃ、さっきはなんて言おうとしたのかな？」

「……………が……………って……………かった」

「聞こえませんか。もっと大きな声で！」

無理言うなよ！？ これ本人を目の前にして言うような台詞じゃねえんだよ！！

「言わないともっと抱きついちゃうよ、言わなくても抱きつくよ」

「わあーったよ！ 言いますよ言えば良いんだろ！」

「お前があんまり綺麗になつてたもんだから最初誰だかわかんなかった」だ！ これで良いんだろチクショー！！」

「恥ずかしっ！ 今なら能力とか関係無しに炎が出るよ！ 口と顔から！！」

本当はこれの続きに『綺麗になったもんだな』とかお父さんじみた思考もしていたがそれは言わなかった。これ以上恥の上塗りは御免だ。

叫ぶように言い放った後まともに顔が見れず背を向けて黙っていたのだが、風花から何のリアクションも返ってこない。これはアレか？ 想像以上に寒い台詞に絶句したとかか？ 泣くぞ。

「（わわわわわ、わた、私が……美人……それってもしかしくなくて私が命君にちゃんと異性として見て貰ってるってことだよ……？ さっきの慌てようもそうだったけど、前なら抱きついててもあんな反応しなかったのにさっきは口調が変わっちゃうぐらい驚いていたみたいだし……）」

いい加減反応が気になる。意を決して振り向いたら、

「ねえ、命君」

そこには以前とは違い、大人の女性の姿をした、

「ちっきの続き……………したいって言ったらどうする……………?」

……………?

「……………(プシュー)」

「ああっ!?! 命君の頭から煙が!」

幼馴染は俺の想像の斜め上を華麗にセスナ機で飛んで行った。続き  
きっておま……………約四十年近い童貞のおっさんには刺激が強すぎるわ  
……………。

俺が居ない間の情操教育は一体どうなっていたのだろうか? 最  
後にそんな事を考えながら俺を意識を闇に落とした。

「あちゃ〜、命君つてばこんなに初心だったんだね……………。こりゃ神  
楽ちゃんやすずかちゃんと会ったりしたら……………拙い、絶対に籠絡  
される。はやてちゃん辺りなら絶対におちよくりまくる筈……………! だ  
もまつ、今は私の役得ってことで」

「おい、用事はもう済んだのか……って、どうしてその男が気絶しているんだ？　そしてどうして膝枕なんてしている？」

「いやはや、少しからかいがすぎちゃったみたいなんで……それにそのまま寝かせておくのも悪いかなって思いました」

「そうか。それにしても貴女は幸せそうだな。この男とはどんな関係で？」

「……今はただの親友兼幼馴染ですよ。それと、この後誰かのところに行くんですね？　それに私も連れてもらってもいいですか？」

「少し待ってくれ、今確認を取ってみる……………」

OKが出た。別に構わないそうだ」

眠っている間に二人の手によってドクターと呼ばれる人物のところに運ばれる命であった。

……一方その頃、

「ハッ!?」

「にやっ!? どうしたの三人とも? 急に親の仇を見つけたような顔なんかして…?」

「何でそないに具体的な表現かどうかはこの際つつこまんけど……」

「そうだね、今重要なのはそんなことじゃない……」

「すずかちゃん、一体二人には何が起きている……ってすずかちゃんスプーン! スプーンが捻じれ曲がってる!」

「うふふふ……まさか、ね……? まさか風花ちゃんが抜け駆けしてるなんて……ねえ?」

「これは協定違反やな」

「我らの血の盟約に背く者には厳罰を与えなければ……!」

「ちよちよちよっと!? 抜け駆けとか厳罰とか言葉が物騒過ぎるよ!?! 風花ちゃんが一体何をしたって言うの!?!」

「うーん、何となくなんだけどね? 私達の勘がこう告げている気がするんだ……」

「「裏切り者がいるって」「」

「逃げてー! 風花ちゃんとかく何処か遠くに逃げてー!」

「まさかっ!?! そのままみこと君との逃避行なんかしちゃったりとか!」

「許す訳にはいかへん!! 即刻見つけ出して袋にするんや!」

「風花ちゃん………覚悟、しておいてね……? うふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

何処かで愛の亡者達<sup>パーサーカー</sup>が覚醒を遂げていたという……

第四十三話 「腹が減っては戦はできぬ…これって真理だな 後編」(後書き)

一応自分なりに甘い展開というのを書いてみたつもりだったので  
が……

如何せん恋愛経験皆無の私の引き出しと云えばラノベか母親の持つ  
ているハーレー女王様しか！

こんなんでまともな恋愛描写なんて……

ってハーレーの恋愛描写なんて真似した日にゃここじゃ書けないよ  
うな言葉を使ってしまう…！ あれ？ そしたら参考はラノベだけ？

まあ、他作者様の書いたものを漁りながら勉強していくしかありま  
せんね。

それではまた次回の更新で！



第四十四話 「悪友とは、手加減無用と見つけたり」（前書き）

今回新たにオリキャラを出すにあたって、キャラクターのアイデアを下さった月光閃火様、この場を借りてお礼を述べさせていただきます。

だというのにどうして私の文章はうまくならない…っ

仕方ねエ、見てやんよという不器用な優しさを持つ方はこの先の本編をどうぞー

第四十四話 「悪友とは、手加減無用と見つけたり」

え、トーレさんに連れられて（運ばれたとも言つ）（ドクターとやら）のところに行ったんだが……

あまり思い出したくないのでダイジェストにアイツが放った一言だけを回想しようと思つ。

~~~~~

「君の体は実に興味深い！ 是非とも私自らの手で心ゆくまで調べ尽くしたいものだよ……」

ところで君？

男同士は初めてかい？」

~~~~~  
「いやあ、あ、あああああああああああああああああああ  
あ………！」

「落ち着いて命君！ そんなに炎振り撒いて暴れると危ないよ！  
主に私が……！」

………分かって貰えたと思う、どうしてダイジェスト  
で説明しようとした訳が。

だって会っていきなり「やらないか？」って何処のつなぎのイイ男だよお前は!？」

あまりの恐怖に崩+虚空を屋内であったのにも関わらず発動させて、風花を円で守りながら脱出した。追手も来なかったので一先ず安心だが、今までの手の変態を対処したことが無いのでまた次があるんじゃないかと戦々恐々している。……………あとコンマ五秒発動が遅れたら薬を投与される寸前だったのでマジで危険だった。

「あんの変態白衣が……………ッ！ 私の命君の貞操を狙ったあイイ根性してんじゃねえか……………」

「風花、その発言は色々アウトだ。そもそも何時俺はお前の物になった？」

逃走中にこんな一幕もあったりしたが、今は落ち着いたもののでさっきの台詞を思い出し恐慌状態に陥っている俺を宥めてくれている。

「落ち着いてってばあ！ もうアイツのところからかなり離れたしアシだけシバけば多分もう来ないって!！」

「……………本当に？」

思い出したかつて無い悪寒というか寒気に声が震える。以前会ったヤンデれや“アイツ”でさえここまで怖く無かつただけ……………

「（涙目！？ これはもうっ！！（ヤルっきゃないツツ！）」

「何をだ何を」

風花から感じる異様なプレッシャーに突っ込みを入れることで落ち着きを取り戻す事が出来た。

「あ、あれ？ 急に正気に？」

「おう、それにちよおおおおおおとした復讐をしに行かなきゃならないし」

「それって今向かってる場所の事でしょ？ ミッドに知り合いで居るの？」

「まあ会った事があるのはミッドじゃないけどな。ソイツとは何回か一緒に仕事っーか、俺がソイツの仕事現場に偶々居合わせただけ

「なんだが……」

「……………それって、勿論男  
ダヨネ…？」

「ん？ そうだけど？ 名前は御厨神夜みつくりかみやっていつてここじゃ読みは  
逆なんだけど、まあ俺からしてみればこう呼ぶ方がしっくりするし  
な。……だからその視線で人を殺しそうな殺気を出すな……」

会話の途中から龍種も引くんじゃね？ってぐらいの殺気を放出す  
る風花に敬語を出さずに話せたのは奇跡だったと思う。膝ガクガク  
いつてるし。

なあんだ、それなら早く言ってよおとすぐに殺気を収めたが、  
正直もう二度とあんな怖い風花は見たくない。

この時点での俺では知る事も叶わないことだが、今  
感じた殺気ころもの四倍近いものを受けることになるうとは夢にも思わな  
かった……

「おっし、何だかんだで着いたな」

「こんなスラム街のお店の知り合い？ 結構危ない人だったりする  
？」

「能力は反則的だけどそこまで危険視することもねえさ。“コイツ”も買ってきたし」

「それさつきスーパーで買ったものでしょ？ 何でそれが役に立つのさ？」

「まあ復讐の際に必要な処刑用アイテムとだけ言っておこう」

頭上に？マークを浮かべているが、後で嫌というほど理解できると思うので放っておいて、ミッドのスラム街の一角に店を構えている何でも屋『ALL MASTER』の扉を開ける。

一度だけアイツに店の名前無駄にカッコつけてんのなって言ったら顔を真っ赤にして怒られた。意外と自分でも自覚あつたらしい。

「おい！ この野郎居たら返事と誠意ある謝罪を要求するぞコラアアアア！」

「入っていきなり恫喝紛い！？ 一体どういう関係！？」

同じ釜の飯を取り合うためだけに周囲を焦土にし合う程度の仲良

しただけど？ それが何か？

「うっせえぞバカ野郎、叫ばんでも聞こえとるわアホ命」

「相変わらずのぐで〜フェイスで安心したぜクソ神夜」

「え？ 出会い頭に罵倒？ ねえ本当に仲がいいの？」

「え？ 俺達こんなに仲良しじゃないか？」

「そこだけ声ハモってるんじゃない！！」

そして現れたいつも通りのやる気の欠片も感じさせない顔、見る角度によっては七色に見えるヘッドが特徴的な悪友のような存在。ていつかその頭って俺の燈の眼と同じくらい厨二っぽいよな。

「それにしても久しぶりだな。最後に会ったのが第28管理世界でのクック掃討の時だから……彼此2年ぶりになるのか？」

「あれか〜、お前と〜どっちが多くての先生を狩れるか勝負しようぜ！」って言って勝負したんだっけか？アレどっちが勝ったんだっけ？」

「俺だろ？」



「はいはいお前の勝ちお前の勝ち」

「………何かやけに棘のある言い方だな。ところでお前アレなんだ？ 管理局から大々的に指名手配くらってるじゃねえか、どうしたんだ？」

「それはな………」

（青年説明中）

「………って訳さ。連中も形振り構ってられなくなっただらうさ、自分達で捕まえるのが理想だとしても今の管理局の現状じゃ俺に回すだけの人材を確保するだけの余裕が無い。だからお前とかみたくない傭兵とかフリーの魔導師の手も借りざるを得ないんじゃないか？」

「えっ！？ じゃあこの人も命君を狙って!？」

風花とも一応お互いの現状を話しあっていたが、今の話をしていなかったたので神夜が俺の敵になる可能性に気付き身構えるが、

「ちょい待ちお姉さん、俺は何も『命を捕まえる』とは一言も言っ

て無いぜ？」

「だけど貴方が傭兵で、いつ局に雇われるかもわからないのは本当の事でしょう？ 警戒すると言われて引ける訳、無い」

「…………お前随分といい娘に好かれてんなあ」

「まあ、悪い気はしないよな。こんな美人にそこまで言われるのも」

「にやに言ってるのっ！？ この人がもし命君の敵になったら…………」

最後まで言い切る前に神夜が風花に近づいて、警戒心を露わにして風神を構える事も気に留めず話しかける。

961

「安心してくれ、俺は、絶対、コイツの敵にやならねえ」

「…………それを信用しろと？」

「ああ」

「……………」

永い沈黙の後、風花が風神をしまい込んで溜め息を一つ。

「……ごめんなさい。これ以上命君に何かあったらと思うとつい……」

「それも仕方ねえさ。俺もコイツの話を聞いて以前から気に食わなかった管理局が輪を掛けて嫌いになったぐらいだし」

「ッ!? 貴方も管理局に何か……?」

「いやいや、コイツみたいに実験施設をたらい回しにされた訳じゃねえよ。そもそも連中の思想自体嫌いだしな。コイツの事で中身も嫌いになっただけさ」

そこまで言って胸元にあるタバコに手を伸ばしたが、

ボウッ

「熱ッッ!? てんめえ何しやがるコラ!」

「はてさて、一体何のことやら」

「今の刹那だろ! 刹那で俺のタバコ消し炭にしただろ!!」

「酷い言い様だな」

ボウッ

「アチイイイイイ！ てんめ、胸元に火をつける奴がいるか！！」

大丈夫大丈夫、お灸的な感じだと思えば。それに刹那の瞬炎は一瞬だから問題無く対象だけを灰にしたただけだぞ？

「まったく、煙草は百害あって一利無しって言っただろ？ 何まだ吸ってんだよ」

「これは俺の嗜好品なんだからお前の指図は受けねエ！」

重傷だなこりゃ。もっと他の誰かが言ってやれば結果も違つかもしれんが……

「っとそうそう。忘れるところだった、俺お前に用事があったんだった」

「そーいやお前の転移ってランダムで行き先が指定できなかったんだっけ？ よくここにこれだな」

「きつと私に会いたい一心の為せることだと信じていますから！」

「（とか言ってるが真偽のほうはどうだ？）」

「（……ノーコメント、という事をお願いします）」

あながち間違っていないので否定しづらい。海鳴の皆に会いたいとは思っていたけど流石に個人に限定したとあっては家族に向ける顔も無いし。

「何かなかなか話が進まねえな。さっさと用件を頼む」

「ああ、勿論だとも。それじゃ立って話すのもなんだし、その椅子にでも座ってからにしようか」

きつと今の俺の顔は素晴らしい笑顔の筈だ、今のタキシードと相まってオリジナル笑顔といっても差し支えの無い顔だと自負できる程に。

椅子に座った愚か者に焰の鞭で縛り固定し、創龍の能力で複製したさらに複数の龍の鞭で能力を発動させないようキツキツに縛る。

「み、命オオオオオ！！？ これは一体何の真似だっ！？」

「……………神夜、これに見覚えはあるか？」

そうやって俺が取り出したのは一見ただのピアスのように見える輪っか。風花もそれが何だという風に見ているが、アイツはこれに覚えがあるので普通にこれが何なのかを知っている。

「そりゃ俺がお前に“作って”やった魔力の無い人間でも念話可能になるピアスじゃねえか！」

「ああそうだ。お前の魔力に反応してお前に対してしか念話を送れないものだが、同じ世界にいればどんなに遠くからでも念話が聞こえる、確かそんな能力だったよなあ〜オイ？」

スーパーで購入したとある物を懐に入れたままにじり寄る。神夜は未だ俺が何を言いたいのかわかっていないようだ……………

「確かにそういう能力を付与した記憶はあるが……………それが何だつてんだ？」

「……………俺がこの世界に転移して早々にこれを使ってお前に念話を飛ばしたのにお前は一切返事を寄越さなかったなあ……………それは

何でだ……?」

にじり寄る度に殺気を放出して俺の感情をぶつける。てめえのせいで俺は……俺はッ……!

「え〜と、それは確か俺の作ったもう一方のピアスが送受を可能にしてたと思うんだが……あっ」

「どうした?」

「……………スマン、確かもう片方のピアス無くしたんだった。あれから二年も経ってる訳だし、しょうがないよな!」

「ああそつだな。しょうがない奴だよお前は」

「はっはっは! スマンスマン!!」

「HAHAHAHA!!」

……………ちて。もっねぐらいでいいだろ。

「そしたらこの炎を解除してくれないかなあ〜と思う訳なんだけど、そこんと」どつ?。」

「ふふふ……………安心しろ、お前はもうじきそんな事を気にしてられなくなるから」

「は? お前一体さっきから何を……………ツツツ?!?!?!? この、この世の物とは思えない匂いはっ!?!?。」

大当たり。

「あつ、それってここに来る前に私が買ったお土産のカマンベール」

「そうそう、量産品で悪いが……………お前にはこれで十分だよな……………?。」

「ちよつ、ちよつと待て!?!? お前俺の苦手な物を知っててそれを買ってきたな!?!?。」

何を当たり前のことを。親友である君の嫌いな物はちゃんとオポエテイルヨ?



「匂いを嗅ぐだけで気が遠のく、唇に触れただけでみつともなくもがく、口に含んだら暴走する、君がこれだけ面白いチーズアレルギ―を持つてることぐらい僕は知ってるよ。何たって親友だからね！」

少し口調が可笑しくなってきたが、そこはいい。ちょっとハイになっただけだから。

「じゃあなんだってそんなものを!？」

「……俺が腹を空かして何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も……念話を飛ばしたのに返事をしてくれなかったせいで、一時は人間の尊厳を捨て去る行動を起こしかけたし」

(それは段ボールのことかしら……?)

「それにお前が前に『ミッドに来たら俺の作った飯食わせてやんよ』とか言っただからすっごい期待してたのにお前の返事が無かったせいで変な奴らに因縁つけられる羽目になるわ最終的には貞操の危機に晒されるわ!！」

「お前後半何言ってるのかさっぱりわかんねえんだけど!？」

「それもこれも全部お前のせいじゃあああああああ!！」

喰らえ！ 乳酸菌と発酵食品の力を借りて！ 今必殺の！！

「カマンベエエエエエエエル、クラアアアアアアッシュツ！  
！」

「\* + P L O ( K I ) J U ' H Y & G T % F ? ? ? ! ! ! ! ? 」

ふっ、これにて一件落着。

「……………ねえ、あの人泡吹きながら痙攣してるけど……………ほっと  
いて大丈夫なの？」

「心配はいらん。どうせギャグ補正でアナフィラキシーショックも  
なんのそのだ」

「だからって躊躇い無く人の弱点を責めるのはどうかと思うよ……………  
？」

咎める声に耳を貸さず、俺は気絶しながらピクピク震えている神  
夜を見て胸がスカツとする感覚を覚えていた。

俺って案外Sの素養でもあんのか？

ま、いいや。

第四十四話 「悪友とは、手加減無用と見つけたり」(後書き)

最近朝晩冷えてきて秋をようやく実感できるようになってきました。

過ごしやすい季節って何を始めるのにも良い季節ですよね？

だからどうしたって話なんですが…

それではまた次回の更新で……

第四十五話 「帰ってきた……よな？」（前書き）

寒っ！ 朝の冷え込みはエエエエエエエええ！！

風邪引かない様にしないと……

！ それでは本編をスタート！ 文章の脈絡とか考えないんD A Z E

第四十五話 「帰ってきた……よな？」

S I D E 風花

「これから何処行くんだ？ 俺は神夜のところに厄介になるつもりだっただけだ……」

「ふふっ、きつと驚くと思うよ……それはね？ クラナガンの郊外にある八神家だよ」

劇画風の顔になって驚きを表す命君。そういえば八神家の皆がこちに移住していること言うの忘れてたっけ。

先程命君の知り合いの人が意識を取り戻したので、軽く拷問器具カマンベールをチラつかせながら

「お前宛てにくる情報で俺に関連するものがあつたら逐次連絡をくれ。しばらくはミッドにいるからこのピアスの圏外になることは無いだろうし。もう二度とうつかりやらかすなよ……？」

……あの時の相手の青褪めた顔は印象的だった。

そして今、命君を他の皆に会わせるべくこちらにある八神家に移動している訳なんですが……

折角の二人きりだということのにあまりに色気が無い事に少しがっかりしています。

さつきまでは私が近づいて腕を絡ませようとするだけでオーバーな反応を返してくれて実に可愛かったのだけど、それってつまり、恋人同士がするようなことが出来ないという訳であって、良いムードとかにはなれないままだったりする訳で。

私の十年にも及ぶフラストレーションはそろそろ限界に近い。

漸く、ようやく探し求めていた人に会えたのだから普通キスの一つでもして再会の喜びを分かち合い、そのまま二人は……

てのがお決まりだとは思うけど、残念ながらこのイベントを起すためには障害が三人もいる。

こと男女の関係については小さい頃から姉の対朴念神用のアプロ―チ術を身に付けているすずかちゃんが私達の誰よりもその手の知識に詳しいし、序に言えば私達の中で一番大きい。何がとは口が裂けても言わない、何時か絶対に越えられると信じているので。

はやてちゃんも家族同然に生活した経験があるのでその分命君の好きな物を分かっているため、お得意の料理でポイントを稼ぎに来る筈。胃袋を掴んだ者は色々征するとはフェイトちゃんのお母さんの言葉だ。

そして、目下最大の障害と私が睨んでいるのが神楽ちゃん。命君と同じ転生した存在であり尚且つ、本当の命君の幼少期を知っている人物。その利点を発揮して命君に過去の郷愁を誘い、真の幼馴染フラグを建てる可能性が非常に高い。これでは私に幼馴染（仮）の称号がつ！

という訳で、少し積極的に行動して意識をこっちに向けさせてみようと思う。

ムニッ





おおぅ、顔がすっごく赤い。照れてるのぅ〜愛い奴じゃのぅ〜

「ほれほれ〜」

「だっ！？ だから懐に潜り込んで動くんじゃねえってば！？ 俺が反撃出来ないの分かっててその位置にいるだろお前！！？」

「あつたり前田の風来坊は二期の活躍はイマイチだよな」

「いやいや、きっと最終回で魅せ場が………じゃねえよ！」

手錠がついてるといふことは、常に腕が前の方にある程度固定されているという事であり、腕の輪の中に潜り込みさえすれば相手はこちらに干渉しにくいどころか常に抱きしめる形になるという何と  
言う私得な状態。

つまり！ いくらイヤイヤ恥ずかしかっていても私はこうして彼の胸の中に居座れるということなのです！

「ふにゃ〜これ八神家に着くまでずっとね」

「ふざけんな！？　もし人目につけばお前だって変な目で見られるんだぞ！？」

「その時は責任とってもらうにゃ」

「お前どんだけふやけてんの！？　さつきから何処の〇れパンダだよってぐらいたれやがって……………（でもまあ、そのお蔭でコイツがマスコット程度にしか認知されていない分マシか）」

八神家まで徒歩であと一時間、その間私は十年ぶりの命君を存分に堪能できて多少気が晴れたのだった。

「おい、着いたぞ。だからいい加減腕から抜けてくれ」

もうこっちは柔らかさと女の子特有と言われる甘い香りに頭がヤ

ラれそつで限界なんです。

たれ風花を腕から引き剥がし深呼吸、正直自分の自制心に喝采を上げて褒め干切つてあげたい。よくぞ反応しなかった我が息子、お前はきつと賢者になれる。

そして目の前には海鳴にある八神家と寸分違わぬ形の家が。いくら思い入れがあるからとはいえここまで見事に再現させるとは……

「皆、ここで命君が普通に暮らせるようにってそのままの形にしたんだよ。それに地球の方の家も私の家の組の者に管理させてるし」

「……………そっか」

「どれだけの時が経つても、いつか絶対見つけるんだって、そう誓つて私もみんなもこっちでの仕事をすることに決めただよ」

十年だ。それほど長い間も風花達は俺の事を心配してくれてたんだと思うと涙が溢れてくる。心配そうにこちらを見てくる風花に心配はいらないと言って涙を拭う。それでも嗚咽が止まらなかったのはそれだけ感情的になつていふことなのだろうか。風花が肩を支えてくれる暖かみを感じながらしばしの間、みっともなく泣き続けた。

俺が年甲斐も無く泣き続けていると玄関が開く音が聞こえた。

「つたく、人ん家の前で泣いてんのは誰……………だ」

「お……………おう、久しぶりだな、ヴィータ。相変わらずちっこいままか」

まだ声がどもっているけど、なるだけ昔のような口調を意識して話しかけた。少しの間硬直していたヴィータだったが、硬直が解けると同時に神速の速さで家の中に戻っていった。

「た、たたたた、大変だあああああ！！　み、命のお化けがでたあああああああ！！！！」

俺はアイツの中で死人になっているようだ。じゃなくて

「誰が幽霊だこのアホ！　ちゃんと足ついとるわボケェ！！」

「あ、そこはちゃんと突っ込むんだ」

いやほら？ お約束的……………みたいなの？ そんな感じで。

家の中からドタバタと騒がしい足音が聞こえる。何だかこれも懐かしい気がする。昔Gが出てきた時なんか八神家総出で追いかけて回した拳句、はやてに全員叱られたっけ。その日の夕飯はやてが一人だけでビーフステーキ食うもんだからヴィータが涙目で涎を垂らしてたなあ、そういえば。かく言う俺も血の涙を流して悔しがっていたけど。

「おのれ化生めっ、我らが家族に化けて出るとはっ……………このレヴァンティンの錆に……………できるのか？ というより幽霊に実体があるのか？」

「いやシグナム！？ 今はそんな疑問を持つてる場合じゃないでしょ！？ とりあえず今は塩を撒くのよ！」

「それって幽霊に効果あんのか？ なあじっちゃん、どうなんだ？」

「まあ清めの塩というぐらいじゃし無いよりはマシじゃろうが……………それより本当に命の幽霊なのか？」

……………相変わらず、だな。ていうかシグナムさん、貴女そんなキャラだったっけ？ もっとこう、お堅いイメージがあ

「っただけど……？」

「ホントだって！ 玄関開けたら大泣きしてた命に隣に風花だっていたんだ！」

「……………風花ちゃんがいる時点で幽霊は無いと思うのじゃが……？」

「……………あっ……………」

「……………ヴォルケンリッターの皆さん、何時の間におっちょこちよいスキルを身に付けた？ それはシャマルさんだけのスキルじゃなかったのか？ この十年で八神家に伝染したとでも言うのか？」

「じゃ、じゃあ開けて確認するからな？ ということでシグナム、将なんだから先頭はお前な」

「ちよっ！？ 先陣を切るのはいつもお前だったではないかヴィータ！」

「二人で行けばいいじゃないですか……………」

「もう、わしが行くから開けるぞい」

「「ちよ、ちよっと待って!?!?」「」

悲鳴のような二人の声。そんなに俺を幽霊だと思ってるのかアン  
タ等は。

「いくら十年間も行方知れずだったとはいえ、幽霊はちょっと酷い  
んじゃないかな？ お二人さん」

「で、でたああああああ!!?!?!?!?!」

「いや、二人ともちゃんと見るんじゃ、しつかり足がついとる。本  
物の命じゃ。……………よく、帰ってきたな」

「うっ……………ヒック……………よかったですっ、はやてちゃんも皆も  
すっごく心配してたんですからね？」

「たはは……………その辺は何と謝ればいいのやら……………」

「いや、何もお前が謝る必要なぞ無い。こうしてお前は無事に帰  
ってきてくれた。それだけでわしは嬉しい。お帰り、命」

「……………っ！ ああ、ただいま、じいちゃん」

序にシャマルさんとシグナムさんとヴィータも。また涙が出そう  
になったので慌てて顔を背けながら言う。



「はい、おかえりなさい」

「うむ、これでもう管理局で働く必要も無くなるというものだ」

「お前またそんなこと言って……このニート騎士」

「何を！ 貴様何の根拠があつてそんなデタラメを！」

「可能な限り仕事を休んで家にいてはじっちゃん二人つきり出かけようとしてんの知つてんだぞ？ その上最近はテストタロツサとかと一緒に服を買いに出かけるそうじゃねえか、一体『騎士が着飾る必要など無い！』とか言つてたのは誰だつたかねえ〜？」

「ぬなツツ!？」

「……………二人は変わらず仲が良さそうだな」

それにじいちゃんの体を再構成し直す際、肉体年齢を40前後に設定したのが、シグナムさんの何かに拍車を掛けまくってしまったようだ。以前よりもアプローチが女性っぽくなってる。そしてヴィータのグランパコンは未だ健在らしい。見た目的にはファザコンか？ どっちでもいいけど。

十年経っても変わらない家族を見て、改めて帰ってきたんだなと

実感する。

「やっとか……長かった」

「そつえば……その手錠、どうしたんですか？」

……うちの問題も解決しないと拙いか……

第四十五話 「帰ってきた……よな？」（後書き）

帰ってきました！ ちなみに大人編の進行は遅々としたものになるので、STSのキャラと絡ませるのは遅めになります。

個人的にはどうやってエリオやキャラの性格を弄ろうか、また変態の烙印を押されたドクタースカはこれからどうなってしまうのか？

書きたいことが多いので、展開が進まなくてイライラされるかもしれません。

……え？ それっていつものことじゃん？だと……？

……それもそうですね。それでは次回の更新で～

第四十六話 「相変わらずのよつで……………orz」(前書き)

どうでも良いんですけど、DIO様と赤バラ王。

どっちが強いんでしょうね？

時止めか、惑星すら破壊できる魔力か

この小説に何の関係も無いんですけどね。それでは本編スタート

第四十六話 「相変わらずのよつで……………orz」

「何々？『熱愛発覚！？』 高町なのは囑託魔導師の恋人は男装の麗人だったッ！！」

「違うからっ！？ 私となのはちゃんはそのような関係じゃないから！  
！ その日はたまたま二人でいただけで偶然にも私がシャツとネクタイとジーンズの組み合わせっただけで！」

「そうなのっ、私達は健全に男の子に興味のある女の子なの！だから女の子同士なんて非生産的な考えなんかないもん！！」

八神家に帰ってきて、仕事を終えた他の皆が帰ってきてひと悶着あったのだがそれは割愛して、今ははやてが腕によりをかけて作る料理待ちだ。もういいにおいがどうしようもない程胃袋が刺激される。

俺の居なかった十年で神楽やすずかも料理を覚えたそうで、今は

はやてと一緒にそれぞれの得意料理を作っている。

ちなみに、今俺は暇つぶしに家においてあった『週刊管理局！』という飾りっ気の欠片も無いネーミングの雑誌を読み漁ってる訳なんだが、幼馴染達の変わりように驚愕することしきりだ。

「……………まあ、その、あれだ。俺は世間とか関係なくお前たちの仲を応援するからな？」

「「うわああああん！！？ 誤解なのにiiiiiiii！！」」

まあ世間的には認知されづらいかもしれないが、きっと魔法を使えば解決するさ！ 超便利だな魔法。

「それ以外は……『鉄壁の女八神はやて！ 巨乳！癒し系！ロリ！マツチヨ！を従えた彼女に死角は無いのか！？』……………何だこの一面は。セクハラもいいところだぞ……？」

ウンウンと頷く騎士達を見ながら改めて思う。なんて特徴を捉えた表現なのだろうと、口が裂けても言えないが。

「それにしてもはやて、通算フツた男の数が20人を突破したそうだが……まさか…ツ!？」

「ちゃうで!？ 私は別に前の二人と違って別に同性愛に興味あるわけと違うからなっ!？」

「私達だって興味なんてないよっ!！」

……よし、落ちつけ俺。今まで色んな世界を巡って色々な文化を見たじゃないか。それに比べれば同性愛なんてまだマシだ。犬と結婚する文化のところよりはマシだと思えッ!！」

「気を取り直して次いこう…」氷の微笑! 月村すずか、視線で男を殺す!！」

流石に言葉を失った。いくらなんでもこれはデマすぎるだろう。

鼻で笑おうとせずかに声をかけようと台所の方に顔を向けるとそこには

修羅がいた

「ねえ……まさかそんなデタラメだらけの記事なんて信じないよね……」

「勿論です！ 貴女のような見目麗しい方の笑顔にこんな表現はあんまりですよ！ 今から編集部行ってきて焼き土下座させてきてやりますよっ……！」

怖かった。使った事の無いおべっかまで使うほどにすすかかんの笑顔が怖かった。

「そんな……見目麗しいだなんて本当の事をそんな大声で言わなくても……ポッ」

「あ、あははははは……」



正直自画自賛だとは思いますが突っ込まない。いや、怖くて乾いた笑いしかできない。

後で神楽から聞いた話なのだが、この週刊管理局！というのは地球にもあるような三流ゴシップのようなものらしく、ある事無い事出鱈目に書いてありはやてが面白半分で購入しているらしい。

「良かった……俺のいない間に幼馴染に特殊な性癖ができたのだとマジで焦った……」

（いくら何でも安易にそんな嘘臭い記事を真に受けちゃだめでしょう？）

「……猛省します」

とりあえず、皆変わりにようでミッドにしながら海鳴にいたときのよな郷愁を感じる俺だった。

「どつや？ 久しぶりの八神家の味は？」

「凄く……美味しいです……」

待つてました御夕飯！！ 十年ぶりの八神家の食卓の味はやっぱり最高だと言わざるを得ない。

むしろ十年ぶりに食べたせいか今まで食べたどの飯よりも美味しくできてる気がする

「へっへーん！ どつや？ みこっちゃんが帰ってきたら美味しいもんたらぶく食べさせようと思ってな、お料理の勉強もしたんや」

「こゝ、これも美味しいよっ！ 私の自信作！」

はやての料理の腕は最早鉄人レベルなのではないか？ 俺がリアクション芸を覚えていればきつとジャぱんの黒柳みたいなリアクションが取れていたと思う程に美味しい。神楽のから揚げも普通に美味しいし

「二人ともこれだけ料理できてりや学校とかモテモテだったんじゃないか？ きつと良いお嫁さんになれぞこんだけ美味けりやつてめえそれは俺の春巻きだ！」

「へん！ 早い者勝ちの八神家の食卓ルールを忘れたか！？」

手錠付きというハンデも何のその、熾烈なおかずの取り合いをヴィータとしていた俺ははやてと神楽の顔がニヤリとしていた事に気が付かなかった。

「命君、こっちのパエリアも食べてみる？ 私の特製」

「おっ、食べる食べる」

結局十年のハンディは大きかったようで、ヴィータに春巻きを三個も多く取られてしょぼーんな感じになっているところにはさすがが皿にこれまた美味しそうなパエリアを盛ってきた。

「でも以外だな、すずかの家っていやあ大豪邸だったし、まさかお嬢様の手料理を食べられる日がこようとは……」

「うふふ、やっぱり料理のできる女の子の方がいい？」

「うん、俺が料理スキル皆無だからなあ。もし嫁さんを貰うならやっぱり料理が美味しいに越した事は無いな」

「そっか」

練習することを禁じられた俺のスキルはシャマルさん以上と言っても過言じゃない。ていうか俺は台所に立ちいることすら許されていないのだからポイズンなんて可愛いもんだ。俺なんて生物兵器呼ばわりだったし……

「はい、じゃあ……あ〜ん」

「……………へ？」

「だから、あ〜ん ほら、口を開けて？」

そう言いながら徐々に距離を詰めてくるスプーン。小学生の姿のままなら気恥かしさを抑えることもできただろう、駄菓子菓子！

見た目がもう既に女の子、ではなく女性としての風格が出てきているすかのかあくんは正直恥ずかしいなんてものじゃない。悶死レベルの拷問に近い。

「「「「.....」」」」

四対の視線が突き刺さる。物理的に威力のありそうな視線を感じつつ何の抵抗もできないまますかのスプーンを受け入れてパエリアを食べる。

「どう？ 美味しい？」

「.....うん」

正直、視線が怖すぎて味がするとかしないとか分からなかった。空気が変わった事を察した八神家の面々は即座に行動を開始した。

ヴィータが持てるだけの料理をもって茶の間に避難して、じいちゃん、シグナムさん、シヤマルさんもそれぞれの皿を持って移動。その際ザフィーラさんがお酒とビールジャーキーを持って行ったことに犬っぽいなと思ったのは内緒だ。

ていうかこの状況で一人にしないで!? アンタ等逃げ出し方がよく訓練された兵士並に迅速だったぞ!?

「さあ、まだまだあるからもっと食べてね?」

「なっ!? これ以上の狼藉は見過ごせぬ! みこと君! このミートボールも食べてみて!」

「それなら私はこの肉じゃがやっ!」

「まさか料理が出来ないことでこうも差が広がるつとは……………ッ!」

「にははは、風花ちゃん、これはもう翠屋でお菓子の練習をしてそっちで攻めるしか無いね」

……………五人が……………怖いです……………。

この時ほど手錠による拘束を恨めしく思った事は無い。碌な抵抗

もままならずには俺は終始幼馴染たちに振り回され続けた。

「ハァー……まさか飯を食べるだけの事がこんなにも疲れるとは……」

あゝんhell&heavenを耐えきつて、精神的に疲れ切った俺は一番に風呂に入らせてもらう事にした。今まで一週間に一度ぐらいでしか機会が無かったのでさっさと入ってこいと言われたからなのだが。

しかも、この八神家には何故か男湯と女湯の二つのお風呂がありとても驚いた。はやての要望らしいのだが、あいつは何を考えて態々二つも風呂をつけたのだろうか？

(気にしても仕方無いんじゃない?)

「それもそうだな。さっさと風呂に入って疲れを流すとするか」

服を脱ぐ作業が手錠のお蔭でできないので、最初ははやてが脱がす手伝いをするといって目を血走らせて、それに何人かが続こうとしていたがそれを全部拒否して今は一人だ。

「よいしょ……っと。やっぱり能力で服の構築をしたのは正解だったな。まさか手錠でこうなるとは夢にも思わなかったが」

今着ている服は全てユニゾン状態の時の黒衣の形を変えたものなので、俺の意志で自在に脱着ができる。まあ、一度分解して、また着る時には下着から順に構成し直すという面倒な手順を踏むのだが。

そうして、一人で入るには些か広すぎる風呂に軽く呆れながら体を洗う。手が繋がっていても何とか洗えるのだから人体とはつくづく可能性に溢れているなあと思う。



「そーいやあ、テスタロッサ家の話は残念だったなあ……」

（皆で有給取って家族旅行だもんねえ〜）

「結婚したってんならお祝いに虚空+創龍でオリジナル花火でも上げて祝砲にしてやるのに」

二人共軽いワーカーホリックのようで、人事部から有給取れとの催促が五月蠅かったらしい。だから一カ月程の旅行にテスタロッサ家を出かけているから今回八神家にはこれなかったのだ。

「まあ通信でさっき軽い挨拶といたからいいんだけどさ」

（そーいえばユーノ君、前にも増して女の子っぽくなってたわねえ〜）

「それを言ったら凹んでたけどな」

髪が腰まで届きそうなくらい長くなっていて、それをリボンでうなじ辺りで括っている髪型だったのでびっくりした。何時の間に性転換したんだと言ったら本気でしょぼくれたので誤ったが、職場で男に狙われたこともありその手の話は禁句らしい。

多少なりとも襲われそうになった経験があつたので俺も二度とその事は触れないと答え、俺の心情を読みとってくれたユーノが

「今なら君と心友になれそうな気がするよ……」

とどこか煤けた風情で言っていたので、今度呑みに行こうとだけ伝えて通信を切った。

「ふう……」

湯船につきりながら思う。

変わっていない事と変わった事。十年もあればそれは変わるだろうが、今とりあえず何か言つとすれば

「とりあえず風呂を覗いじつとするのは止めよう……?」

ドアの隙間からサーチャーを仕掛けている連中に釘を刺す事だった。

第四十六話 「相変わらずのようであ……orz」（後書き）

女顔の男ってどんな感じなんでしょうね現実だったら。

実際女っぽい人が襲われるという訳ではなく、案外普通っぽい人でもBLで描かれていたりしますし、この場合はユーノ君が下手な女性より魅力的に映ったって事で。

それでは次回の更新で……

第四十七話 「一日長くね？」（前書き）

サブタイの命君が仰る通り、私がたんに遊び過ぎてしまったがために三話も遊びに使ってしまいました。

書いてて楽しかったから別に構わないですかね？

それでは

第四十七話 「一日長くね?」

起きてみると、そこには愛しい人の寝顔があった。昨晩は久しぶりということもあり、付き合い始めたときのように互いを求め合っていた。

「俺もそろそろ30なんだがなあ」

そうは言っても俺は結局コイツには勝てないんだよなあと嘆息する。昨日だって一週間ぶりの帰宅ということもあつてか玄関を開けて早々にキスをせがまれて大変だった。

「……………んっ……………すう……………」

昨日の乱れっぷりが嘘のような安らかな寝顔。見ているだけで昨日の疲れも吹っ飛んでしまうと思う辺り、大分俺も重傷なんだと思う。

「おい、そろそろ起きてくれ。流石に腹が減ったんだ」

「むう〜……………なら……………」

寝ぼけてはいないだろう。その証拠に背に回された手に籠められた力はかなり強い。

「あのな〜、昨日あれだけやったんだから今日はもういいだろう？  
ていうか30近い人間があそこまで頑張るもんじゃないって」

事実少し体がダルい。仕事疲れも相まって本当ならまだ眠っていたいのだが体は素直なもので、腹を鳴らして空腹を訴えている。このままでは寝るに眠れない。

「だったら早く〜ね、ね？」

「……………ハア」

コイツには一生勝てないな、諦めにも似た感想を抱きながらも口元には知れずに笑みが浮かんでいた。

「……………じゃ、キスだけな？」

「むー、それじゃ朝食食べたら……………しよ？」

おねだりをするような声音に苦笑しながらも「ああ」と返す。そして……………





「……………とりあえず、そのやたらデカイ箱を置くなら卓袱台退かすな」

はやてが魔法で浮かしながら持ってきたのはクリスマスツリーでも入ってんじゃないかってぐらいの大きさの段ボール。その中にはお茶の間の床面積をすべて埋める程大きい見慣れたマス目が。

「ミッドの人が地球のオリジナルを元に面白半分で作したジョークグッズでな？ 偶々ネットオークションで安かったから買ったんやけどこうして大人数で集まっている今こそ遊んでみようおもってな」

対象年齢15歳以上、対象人数二人から二十人までというかなりの大人数でも遊べる仕様となっているこのゲーム。マニアの間では賛否両論らしいが、はやては結構ゲームは選ばない性質だから気にしなかったようで、大人数で出来るゲーム⇨家族や友達とも一緒にできるゲームという事で購入したらしい。

しかも中身も流石魔法文化の最先端のミッドならではのというか、これ作った奴の正気を疑うほどの高スペックだった。

ゲームの参加者はそれぞれ専用のゴーグルを装着して遊ぶのだが

「おおー、すげー！ はやてやじっちゃん達が小っちゃくなってる  
ー！」

「うおっ、しかも俺達の視界がコマとリンクしてるぞコレ！」

「うわあ……コマが無いのってこうやって立体映像ホログラムを使っているか  
らなんだ……何て無駄に高性能なんだろう」

「すずかちゃん、だからって手にドライバーとか持ってボードに近  
寄っちゃ駄目だから！？」

「ゴーグルを通して参加者の意識をマップ上に投影することで、ボ  
ードの中の出来事イベントをかなり本格的に体験できるという、画期的なの  
か多分画期的なんだろうシステム？だ。

「実体の俺達がゴーグルについているボタンで視界上のルーレット  
を回し、数字が決まったら分身体であるもう一人の自分がマスを  
移動してそれをプレイヤーはイベント毎に分身体と意識をリンクす  
ることによりリアルなイベントを体感できるのだ。」

「それじゃ！『第一回！ ドキッ！？ 八神家大人生ゲーム対決！  
ー！』 ポロリもあるで？」を今ここに開催しまー！ー！す！ー！」



「……………何つーボードゲームだこれ。それじゃまるで恋愛ゲームみたいじゃないか」

しかも何だその昼ドラばりの設定は。一人の教師と二人の生徒の愛憎劇って……………しかも先生女だぞ？

「アーハツハツハツハ！ 我が軍は無敵だぁー！！！」

「どうしたのシグナムは？ なんか狂乱してるみたいだけど？」

「ええっと、『侵攻してきた敵の軍隊を自分が指揮する部隊のみで迎え撃つ』だそうです。しかもシグナムさんの職業『次元世界防衛機構』の幹部だって……………」

「……………やけに高笑いが板についている気がするのわしだけかう…………？」

体感している間、本人と他の人間の間ではこのような感じのやりとりがあり、これが原因でこのゲームがマイナー化してると言っても過言では無い気がする。

「よし、じゃあ次は俺の番だな」

そしてここで、冒頭にあった謎の会話の原因が。

「みこと君のマスは……………ッ!? こ、これはっ!」

「(ゴクリ) よっしゃ、皆、ここはわかっとなるな?」

「『勿論』」

俺の止まったマスに書かれていたのは……………

「『結婚五年目のバカップル夫婦の朝の営み。ここでの貴方の働き次第で配偶者が増えるかもっ!』……………って何だこのマスは」

「そーいえば命は結婚までいってたんだけ?」

「ああ、だからってこのマスはなあ……………」

そう。このゲームのもう一つのマイナー化した原因がコレ。製作者のセクハラ紛いのマス目に消費者の多くがクレームを出したのだ。

ちなみに、肯定派の意見の多くが『だが、それがいい』の一言。きつと恥ずかしいところを見られて悦ぶマゾい連中なんだと思う。・・・はやては違う……よな？

「ふっふー、そいじゃみこっちゃん？」

「わあーってるって。さっさとイベント始めりゃいいんだろ？ポチっとな」

「ゴークルのボタンを押してイベントスタート。ここで冒頭に戻る訳だ。」

「ハアー……ハアー……何だ今の？アレマジでリアルっーかやり過ぎだろあのマス！」

しかもさっきの会話の殆どが他の連中にもダダ漏れである。死にたい。恥ずかしいってレベルじゃねー

「……………命、お前……………意外と愛妻家というか惚れた弱みというか」  
「言わないでくれ！ 俺だってまさかあんなにベツタベタするような生活を送るだなんて思わなかったさ！」

グイータの言葉が突き刺さる。きっとアレは製作者の遊び心であつて俺がああなる訳じゃない……………のか？

「でも、さ？ 将来命君が誰かと付き合つて結婚するとかになったら……………」

「うん。さっきみたいなやり取りがあつたりするんだろうね……………」

「しかもさっきの時のみこっちゃん、もの凄く幸せそうにしてたなあ……………」

「……………これは是非ともその相手の女性の顔が気になるかな？ かな？」

アレを聞かれていたかと思うと自害したくなって堪らない。だつてあれは朝の様子だけじゃなく夜の……………つてもう思い出すだけで死ねるわ！！



羞恥心で人は死ねるのだとマジでそう思う。今から一緒に、これから一緒に、自殺しに行くこうか？てなもんだ。

「……で？ 相手はどんな人？」

「ここぞとばかりに迫る女性陣。しかしなあ……」

「スマン。相手の顔は覚えていないんだ」

「……ハアアアア！？」

これは嘘だつたりするが、正直に話してしまうと何かもの凄い敗北感で死ぬそうなので全力で拒否する。

「本当やろうなあ？」

「マジです」

「本当に覚えていない？」

「本当に覚えておりません」

「……………嘘はよくないよ……………」

「お、脅されたって覚えてないもんは覚えて無いっ」

「それは私の眼を見てもそう言い切れる？」

「無論だ！」

顔を覗き込んでくる神楽の顔。顔が赤く酒の匂いが漂ってくる、お前結構酒好きなのな。

「ジ

」

「……………」

「隙ありッッ！」

不意に顔を急接近させてきたが、それは後ろの悪魔に遮られていた。

「……何をしようとしたのかな……？」

「い、いやっ!? そのですね!? 私のキスには何と! 相手の嘘を見抜く能力が」

「無いでしょ……?」

「……………ハイ」

今まで見た事も無いような威圧を放つのは様。心のモノローグですら様付けで呼んでしまうほど、今の彼女は恐ろしい。

それと神楽。嘘を見抜くのならせめて舐めるだけに……いや、  
ハイスイマセンダカラコツチヲニラマナイデナノハサマ……

「何でそういうことをしようとしたのかな……? 今は皆で楽しくゲームをしているのであって不純な行為に至っていい時じゃないんだよ……?」

それを自分勝手な意志でそんなことしようとしちゃ駄目じゃない

……

……………私の言ってること、どこか間違ってる……?」

「めめめめ滅相も御座いませんっ、なのは様の仰る通りです、ハイ！」

するとなのは様は瞬時に魔力を集束させる。デバイスも展開していない筈なのにかなりの圧縮率って……

「……………少し、頭ヒヤソウカ……………？」

片言の言葉の最後とともに放たれた暴虐なまでの魔力の奔流。それは家の中にいた全ての者を蹴散らす威力で、もの見事に全滅した。まるで某竜の冒険の七作目の裏ボスに二回連続で煉獄火炎を喰らった勇者パーティーのように俺達は身動きがとれなかった。

第一回 ドキッ!? 八神家大人生ゲーム対決

くポロリもあるで?の結果

のなら

優勝者無し。強いて言う

「……高町なのは様の虐殺……」

しかもその張本人は砲撃の後即就寝。どうやらアルコールのせいでまともな判断力を失っていたらしい。

我々は次なる悲劇を防ぐため、もう二度と酒の席でなのは様の前でふしだらな真似はしないと心から誓った。

それにしてもよかったあ、結局俺の騒動の  
事は全員忘れてくれてたみたいで。

第四十七話 「一日長くね？」（後書き）

次回からは一応話を進めようと思います

具体的には今の状況と今後の行動の如何について、とかそんな感じの説明会チックな感じで。

……語彙の乏しい人間にはちとキツイ仕事はじまるお……

それでは次回の更新で……

第四十八話 「やっぱり寝るのは布団に限るわ」(前書き)

・・・今日から後期がスタート……金が無いから参考書買えない……

…



第四十八話 「やっぱり寝るのは布団に限るわ」

S I D E 風花

「それではこれより！ 神名命と私達の今後の動向についての会議を行いたいと思います！」

なのはちゃんの悲劇（被害者は別）の翌日、今までの心労と緊張が解けた命君が死んだように眠っている中、八神家と私、神楽ちゃん、なのはちゃんですれまでの情報とこれからどう動くのかの話し合いの場が開かれた。

昨日のうちに命君の大まかな事情を私が聞いていたからそれを話して、手錠の原因であったり彼をつけ狙う人外の話についてを話した。

「うーん、囚人惑星デザイアかあ」

「噂にしか聞いたことが無かったけど、本当にあったんだね…」

「はやてちゃんも神楽ちゃんも何か知ってるの、その事？」

囑託ながらも様々な部隊に顔が知れていて色んな噂や情報を集めていたはやてちゃんと元局員だった神楽ちゃんが複雑そうな顔でその単語に反応していた。

「私も噂程度でしか聞かない話だったんだけど、確か管理局に属す気の無い凶悪かつ更生の可能性のない異常者が送られる犯罪者の巣窟って聞いてたよ」

「それでその惑星自体がもう犯罪者を取り仕切るようになって、管理局も迂闊に手を出せなくなったっていったなあ。しかも唯一ある転送ポートも現在は使えへんようになってるせいで益々内情が掴めなくなってるって」

以前命君はその最下層、ジュデッカという所に連行されてそこで会った人達に解除できない手錠をつけられて、危うく殺されかけたらしい。

以前番外で会ったあの二人なんだろうけど……正直もう関わり合いたくない。

「話を変えるようで恐縮なのですが……危険、と言ってもソイツらが命を捕捉できるとは限りませんし、今はいつ来るか分からない敵の事よりも管理局への対応を考える方が先決では？」

シグナムさんの意見は尤もだと思う。確かにその人達への対応も大事だけど、数ある次元世界の中で個人を特定するのは砂漠で宝石を見つけるのと同等の難易度の筈だ。それよりも目の前の管理局への対応を考えた方がいいのは自明の理というやつである。

「そこら辺はアタシらが黙っていけばいいんじゃないかねえのか？」

「そもいかないわよヴィータちゃん。私達が命ちゃんと関係があるって事はもう上層部には知れていることだし、もし怪しまれでもしたら厄介よ？ 何と言つても、ここは管理局のお膝元なんだから」

「そうじゃのう、とりあえずあの格好は目立つから外出を禁止したとしても局内で不審がられたらサーチャーなりで監視されるやもしれん」

ヴィータちゃんの言う通り、私達が命君のことを黙っていればあまり問題は無いのだろうが、それでも100%安心できはしない。

シヤマルさんや雪而さんの懸念もあるし、何よりこの世界での目撃情報があの子たちから齎されている以上、いつか私達が怪しまれることだって十分にあり得る。

「一応家には俺や翁殿も常駐しているからそれなりに用心することはできるが、主やお前たちの態度でバレル可能性とて否定できん」

「なんやとザツフィー！ 多分初めての台詞のクセに生意気なこと言いよって！ なんで私らの態度でバレルちゅーんや！」

吼えるはやてちゃん。どうでもいいけどはやてちゃん、今の台詞でザフィーラさんが途轍もないダメージを負ったよ？ 影がこゆーい感じになってるよ？

何とか立ち直ったザフィーラさんが私達を見渡しながら言う。

「では訊ねるが主、主達が仕事から帰宅する時、たまたま他の局員に『今日合コンあるんだけどこない？』と聞かれたとしよう。その時風花、お前ならどう答える？」

「家で命君が待つてるからバイバイッ！ って」

「……神楽は？」

「他の男なんて知るか！ 私の決めた人が家で待つてるんだ！」と

「……………これで大体分かって貰えたと思う」

当たり前前の事を答えた筈なのに、皆の顔が曇るとはどういうことなんだろう？

同じく意味が分かっていない神楽ちゃんと私にすずかちゃんから説明が入った。

「あのね二人共。ザフィーラさんが言いたいのは、『どう考えてもいつもとは違う態度になってしまふ以上そこから勘ぐられる可能性が高い』ってことなの」

「態度が違うぐらいでそんな」

「なのにどうしてそんなにあからさまに嘆息するのさすずかちゃん？ さり気に傷つくよ？」

「……あのね、普段の二人の態度をよ～～く思い出してみて。二人は勤務中、普段からどんな感じ？」

言われて考えてみる。今までの仕事上での態度ねえ……………

「基本寡黙……………だね。命君絡みの事件以外は特にやる気も無かつたし、さつさと終わらせたかつたからササーっとクールな感じだったのかな？ よく人からクールとか言われてたような気もするし」

「私はそうだね……………、ぐちぐち言いながら仕事してたと思う。何で辞めた職場でまた働いているんだろうつて。だからかなり消極的になってたと思う」

「なら分かると思うけど、例えば命君が家で二人の帰りを待っているとして、二人の勤務態度は変わるかな？」

考える。今までは流し流され～な感じではやてちゃん達の手伝い感覚で局の仕事を手伝ったりしてきた訳だが、それが今度からは命君が私の（ここ重要！）帰りを待っていて……………

「「仕事めがっさ頑張つて褒めてもらえるように頑張る!!」」

神楽ちゃん……………考えることは同じようだね…！ 流石は私が目  
下一番の危険人物に認めただけはある。

「……………この二人には最低でも一人は見張りをつけて私達がフオ  
ロ―に回る方向で……………」

「そやな、そうでもせんと二人がはっちゃけそうやし……………」

「……………どうしてこの二人はこんなに目先の欲望に忠実なんだろう  
……………」

それは人として当然の行動だと思うよ、なのはちゃん。

「まあ私もそれには十分注意するとして、この辺やろうかな大体の  
行動としては……………」

「あまり決まっていらないようなもんじゃがの……………」

「それは仕方ないでしょう。元々命が帰ってきた時点で少なくとも……………」

「二人は思考が完全にシフトしていますから」

「あの二人一時期マジでうつ病になりかけてたもんなー。見た時は焦ったぞ、二人が虚ろに命の名前を連呼していたときなんかホラーものだったし」

八神家の皆さんは失礼だ。私はただの命君が好きで堪らない恋する乙女だというだけなのに。

「なのはちゃん、いざとなったら砲撃してでも二人を止めてね？大丈夫、昨日みたく冥王モードになれば例えドラゴンだってひれ伏すよ」

「私そんなに怖くないもん！ 私だって普通の女の子だもん！」

「……普通の女の子は家の中で砲撃魔法を放つものだろうか……？」

「……本人が聞いたら即砲撃ものの発言は控えた方がいいわよザフイーラ。私はもうアレを味わいたくないわ……」

……少しは自重することも覚えた方がいいのかもしれない。青褪めた表情のシャマルさんと、直接裁きを受けた神楽ちゃんの怯えぶりを見てそう思った。



でも、何かこの場に足りないような……………？ あっ

「ねえはやてちゃん」

「ん？」

「リンちゃんはどこ？ そういえば話し合いの間ずっと見なかったけど…………？」

ちっちゃいから見逃していたとかじゃなく、このリビングにいない彼女は何処に行ったんだろ？

返答は私が予想しているものとは違っていた。

「リンならみこっちゃん部屋の部屋に居るで？ リンからしてみれば初めて実物を見る訳やし、会議の前に様子を見に行くっていったまま帰ってこんかったけど…………」

「ふうん…………」

まあ、小動物チックなリンちゃんだし、気にする程でも無いか。

「それじゃ私がみこと君を起こす序にリンちゃんも連れてくるよ  
っ」

「って待てやコラ！ それは私の役目！！」

神速で部屋へと直行。神楽ちゃん何かにか負けませんよわたしや！

「……………出遅れたみたいだけど、二人ともいいの？」

「ええってええって。それぐらい認めるのも一号の懐に深さっても  
んや」

「一号って……………」

「そつだよなのはちゃん。それにそんな事よりもお昼の準備をして  
いた方がポイントは高いしね？ 命君は花より団子派みたいだし」

「……………食事で餌付けしようとしているの……………何この幼馴染達怖  
い」

「（それはなのはちゃんに言われたくないなあー）」

久しぶりの布団の寝心地は最高だった。思わず昏過ぎまで寝過してしまっただけだし、相当気疲れしてたのかね俺も。

1034

起きあがろうとして気付く。はて？俺は掛け布団を被って寝ていたのかと。

体にはしつかりと布団が掛けられていて、俺をすっぽり覆っているが、俺は確か寝る時そのまま布団にダイブして就寝したから何も掛けなかった筈。ではこれは……

「すう……………すう……………」

「（誰かの……寝息……？）」

部屋の中から誰かの寝息が聞こえるが、音が小さいせいで位置が特定しづらい。かなり近くから聞こえてきている筈なの姿が確認できないとなると……

「……イヤイヤイヤ！ それは無い、いくら何でもそれないってばあ！」

浮かんだ最悪のヴィジョンを払拭して顔だけを動かして辺りを確認する。するとすぐに犯人は見つかった。

「むう……それは私のプリンですう……」

「……妖精……じゃなかった。確か……リインフォース、ツヴアイだったっけ？」

顔のすぐ側で寝息を立てていたのは三十センチの小人、八神家の新たな一員だった。

昨日初めて顔合わせした時は驚いたものだが、俺が火竜としてし

か助けられなかった管制人格の力を引き継いだ存在ということ、何となく闇の中で垣間見た女性と似ているような気がした。

こんな小さなりの彼女ではあるが、魔法は一通り使えるようなので、きっと彼女が布団を魔法で持ち上げて掛けてくれたのだろう。

「ありがとな」

もつ日は完璧に登りきっている。窓から穏やかな陽光が差し込んできて俺を眠りに誘っているような気がするの、は錯覚だろうか？

「……もつ一眠りと洒落込むか」

彼女を引き寄せて布団の中に迎え入れた俺は、そのまま日に誘われるように眠りについた。本当に久しぶりに穏やかに眠ることができた。

まです、二人は穏やかな顔で眠り続けていた……  
……この数分後、けたたましい足音が聞こえてくるその時

第四十八話 「やっぱり寝るのは布団に限るわ」(後書き)

・・・奨学金を心待ちにしつつ。

月曜からの講義も頑張ろう。

それではまた次回の更新でー

第四十九話 「変わってないってのも考えもの」(前書き)

最近のマイブームとして、子供の頃に見ていたアニメをネットで漁っています。

その中で陰陽大戦記やらベイブレード(整形疑惑のある二期以降)などを見つけては当時を思い出して懐かしさに浸っております。

でもやっぱり昔になればなるほど見つけにくいもので全話見れていないのも事実。近所のレンタル屋でも中々見つからないものも多く、いつそDVDでもまとめて購入……！

それでは本編をゴォ……シユ、じゃなくて、どうぞー



第四十九話 「変わってないってのも考えもの」

「ウマー…こんな朝食食うのも十年ぶりだわ」

「正確にはお昼やけどな」

異様に怖い風花と神楽に起こされて目が覚めた俺はリンフォースを抱えてお茶の間に向かった。その途中で目が覚めたリンフォースが慌てていたが、今では普通に頭の上に乗って髪の毛を弄っていた。八神家の大半の人間はさらさらヘアーなので俺のツンツンした硬質な髪は珍しかったらしい。

「ふわぁー、命さんの髪の毛ってはやてちゃんの髪よりもずつとツンツンしてますー」

「そりゃそつだろうな。今まで一週間に一度でも風呂には入れれば

良かったぐらいだし、シャンプーなんて高級品はしばらくお目にかかれなかったから」

大抵は世界間を移動する直前にバイトで貯めたお金を使って銭湯に入るか、水を買ってそれを浴びる程度しかできなかったので、髪の毛を弄って暇なんて無かった。

そのせいか髪質はかなり硬くなった気がする。寝ぐせさえもできないレベルの硬さは異常だと思う。

「そーいや今日は他の連中は皆仕事か何かか？」

俺を起こした風花達もすぐに仕事に出かけたし、今家にいるのは俺とはやてとリンフォース、じいちゃんとザフィーラさんは散歩に出かけていて今はいない。

「まあ今日は昼からの出勤ってとこやね。囑託やけど結構自由が効くし、魔導師としてランクが高いと優遇されやすいしな。そもそも立場が民間人扱いやから正式な局員とちゃうし」

「管理局　　ていうかこの世界にいる人には根本的に魔法至上

主義が根付いているしなあ。そーいうところで優遇が効くってのは分かるけど、何かやだな、それ」

ランクが低くたって頑張っている人間はいるし、むしろそういった局員の方が圧倒的に多い筈だ。それをたった一握りの高ランク魔導師だけが優遇されてそうでない者にしわ寄せがいくってのはあまり好きになれない。

はやても思う所があるのか、そうやなと答えると思案顔を浮かべてそれつきり会話が途絶えた。はやては何だかんだ言って職場の知り合いがそうだった現状にすることに不満を覚えているのだろうし、きつと何とかしたいとか考えているのだろう。

ぴたっ

「ん？ なんや急に人の頭に煎餅なんか置いて」

「別にい？ たんに休みまでそんな眉間に皺寄せて悩んでいたら老けるのが加速度的に……」

「(チャキ)……………老けるのが……………なんやって?」

「悩んでいるはやては似合わないと思いました！ サー！」

折角和まそうと思っただ行爲もはやてには受け入れられなかつたよ  
うだ。剣十字の先端を向けられた俺は軍人もかくやの姿勢で敬礼を  
した。なんか最近こんなのばかりだ。

「何が悩んでるのが似合わないや。私だって年頃なんやから色々悩  
む事だつてあるわ」

「でも今考えている事は少なくともちよつとやそつとじゃどうしよ  
うもないことなんじゃないか？」

「それはまあ……………そうやけど……………」

まあ昔から何かと自分に負い目を感じやすいのが欠点なはやてだ、  
高ランク魔導師としての自分の立場にさえも悩み事を抱えるような  
無駄にネガティブなところは一切変わっていない。

「言つとくけどな、お前一人がいくら頑張つたつて現状は何にも変  
わらない。今悩んだつてしょうがないだろ？」

「せやかて」

「だからそういう悩みは他の奴とかにも話してみたらどうだ？ 一人なんかよりもよっぽどそっちの方が効率が良いし、他の人の意見を聞くことも結構大事だぞ。自分には考えもつかないような意見とかってのは見識を広げるのには有効な手段だし」

ズズーと茶を飲みながら思う。組織の中では個人というのは全くと言っていい程力が無い。

ならば諦めるのか？ 所詮は無駄だと思うのか、しかしはやてはそんなタマじゃないだろう。

それならどうすれば良いのか？ 簡単だ、昔から何かを変えたいと思う者の側には常に人が集まっていた。

志を同じくする者、最終的な目標こそ違えど辿る道が重なる者、何かを変えようとする者には必ず力を貸してくれる同士や仲間がいた。歴史を紐解けば革命家や大事を為した人物の周りには優秀な人材がいたことがよくわかる。

「お前にはヴォルケンリッターっていう昔からこうだった現状を見てきた家族がいるんだから意見を聞くには持ってこいだし、風花や神楽、なのはにすずかみたいに同じ職場で働いている奴なら同じような考えを持っているかもしれない。それにフェイトやユーノ、職

場が違うからこそその視点でも意見するのは貴重だ。

お前にはこれだけ恵まれた環境があるんだから、一人で考えるぐらいなら皆巻き込んで皆で考えろよ。きつと喜んで巻き込まれてくれるだろつね」

皆さん心底お人好しの気があるので。

「あ、あはは………なんや久しぶりによう喋ると思ったら何か説教された気分や」

「お前の昔からのクセが抜けて無いからな。こういう考えもあるんだって覚えておけよ？ もうこんな事言わないからな」

偉そうにモノを言うのは慣れない。それにはやてとは普通にチャラけて話している方が好きだし、こういうのはこれが最後だ。

あとははやてが何とかするだろ。コイツは弱くないし。

「……………ありがとうな」

「何、気にする事は無い。一人で何とかせなアカンと思いがつていた関西風味の魔法少女を説教しておじさんは満足でした」

「……ここはもうちょい真剣になって欲しかったなあ」

そんな雰囲気は俺らには似合わない気がする。十年振りにこうして会話をする訳だけど、やっぱり楽しく会話をする方がお互い楽しいと思うし。

そんな俺の心情を何となく察したのか、ふうんと一息ついた後、煎餅を齧りながら卓袱台の上で器用に携帯ゲームをプレイしているリンフォースにちょっかいを出していた。

「……平和だねえ」

「……平和やねえ」

「ふ、二人してそんなたれきつていますけどリンのハイスコアの邪魔をしたという重罪は消えませんよはやてちゃん！」

「……平和だなあ」

S I D E    なのは

「じゃ、この書類はこんなもので大丈夫ですか？」

「あ、ああ……。問題無いが、どうした嵐山？ 今日は何だか調子が良さそうというか何と云うか……」

「え？ 仕事なんですからそりゃ頑張りますよ？」

「……風花ちゃん、それはあまりに説得力が無さ過ぎるの……」



私達は囑託として管理局で働いているので、その職業形態は一般局員のそれと違って、例えばアースラのような時空航行艦に乗船してそこで武装隊として働いたり、私たちが今しているように一般事務や魔導師としての仕事など、ざっくり言えば囑託というのは都合のいい派遣のような扱いになっています。

それでも私や八神家の皆、神楽ちゃんは高ランク魔導師として分類されているのでかなり優遇されている方だし、すずかちゃんと風花ちゃんは主に地上部隊への出向が多いけどかなり有能なので重宝されていました。

だけど勤務態度がよかつたかと言われると決してそんな事は無く、特に風花ちゃん、神楽ちゃんは命君の事しか頭に入っていないようなものなので今まで意欲的に働いてたということはありませんでした。それでも私より事務能力が高いのは納得できませんけど……

「それじゃ今日は108部隊への出向は私と白妙さんですね。では行って参ります。行くよ神楽ちゃん！」

「オツケイ任せな！ 今の私はネタも仕事もこなせる阿修羅だつぜ！」

……今日の二人は多分、今まで職員の方々が見た事も無いような笑顔&ハイテンションで仕事に取り組んでいました。

二人共、命君の寝顔を見れたという理由だけで今日一日を張りきれると言っただけ、本当にそれだけのことで通常の三倍近い能率で仕事を行う姿は神楽ちゃんという言葉を借りるなら鬼気迫る修羅のようでした。

「……………なあ高町、二人に一体何があった？ 白妙は以前ここで働いていたときのようなハツラツさだし、嵐山なんか今までYシャツにレディースもののジーンズだったのが普通にスカートを穿いた女性っぽい格好になっているし……………何がどなったの？」

「にははは……………さあ？ 何ででしょうね……………」

普段二人にやる気が無いと叱っていた上官も口をあんぐり開けて呆然としていました。その気持ち、良く分かります。

『おいおい、神楽ちゃんってやっぱすっげー可愛いよな。今までのだらけた態度じゃなくてやっぱああいう感じがいいよな！』

『おい馬鹿何言っただけだ。どう考えても風花嬢のあの変貌ぶりの方が萌えるだろ！JK』

『俺、改めて風花ちゃんのファンになったわ……………。帰ってきたら声

掛けてみよっぜ！」

『今なら合コンに参加してくれるんじゃない？』

『『『いいよっしやあああああああ！！ 我が世の春が来たアアアアアア！！』』』』

「お前ら仕事せんかバカ者がアアアア！」

……これがギャップ萌えというものでしょうか？

普段より明るい二人は話しかけられても普通に笑顔で対応するので他の職員さんから見ればそれは異常事態として認識されても不思議じゃないのかもしれない。

元々顔立ちの良い二人にはファンが多かったけど、それが今日の二人のせいで一気に表面化した感じが……

「やっぱり露骨に態度変わったね……まだマシな方かもしれないけど……」

「そっだよねえ、まだ名前が出ていないだけマシ……なのかな？」

「すずかちゃん共々フォローをすることを考えると頭が痛くなってきたそうです。お願いだから二人とも変な暴走しないでね……」

「でも」

「うん？ 何かな、なのはちゃん」

「すずかちゃんも命君のこと好きだったよね？」

「なのにどうしてこの親友は平素と変わらないでいられるんだろう？ 今頃は今日休みのはやてちゃんと家でゴロゴロしていることに気が気でない二人がいるというのに……」

「その点は大丈夫。ちゃんとリンちゃんに可笑しな行動に移らないように見張っててってアイス三個で頼んでおいたから」

「心を読まれた！？ じゃなくて！ 既にもう手を打っておいたの！？」

「恐ろしい……すずかちゃんはかなり頭のキレる方だったことは分

かっているけど……って、だからそうじゃなくてえ！

「私が聞きたいのはそれじゃなくて！ どうしてすすかちゃんは二人みたく嬉しそうにしないっていうか、普通にいつも通りでいられるの？」

私の疑問が意外だったのか、少し驚いたように目を見開くと薄く微笑んで

「そんな事？ まあ、なのはちゃんが気になってるなら答えるけど……」

「うんうん、それでどうしてなの？」

「それはね？ 別にあの命君のことだから滅多な事でも無い限り間違いないか起こさないって確信があるからだよ」

「……………ふえ？」

何でしょう？ 一瞬幼馴染の瞳が紅く光ったような……………？

「はやてちゃんの事が気になって二人も仕事で忘れようとしているみたいだけど、それはリンちゃんに任せてあるし、イザとなったらちゃんと仕掛けておいたアレが発動するようになってるし……」

「アレって何!? 貴女そんな危険そうな物を人の家に仕掛けたの!?」

この人もやっぱり普通じゃなかった。前に夜の一族についての話を聞かされた時にも思ったけど、すずかちゃんはある意味誰よりも行動的なのがあるように思うの……

「そもそも、命君にそういう事をするのは私の役目だしね」

……今はつきりしました。この人も十分浮かれているのだと、それが単に表面に出ないで脳内で発禁がかかるような妄想をしているのだと。

流石は朴念神のお兄ちゃんを落とすとした忍さんの妹だけあります。

はあ、ここはやっぱり普通の私が頑張って皆を諫め

ないと……！

「そういえばなのはちゃん。今日は今から訓練生の模擬戦の相手をするんじゃないの？ もうそろそろ士官学校行きの車が出るみたいだよ」

「にゃああああ！？ そういえばそうだったアア！」

話しこんでいたらすっかり忘れちゃってました。私はすぐに訓練生の資料をハンドバッグに入れて車が待機している玄関に向かって駆けだした。うにゃああああ、間に合ってえ〜〜！

「……なのはちゃん。自分はまともだっと思ってるかもしれないけど……」

それなら普通、格下の訓練生を相手にするとき全力

で吹き飛ばしたりなんてしないと思っけどな」

無意識にだろっけど、きっと同じ穴のムジナだろっと思っすずか  
であつた。



第四十九話 「変わってないってのも考えもの」 (後書き)

ガスが止められた……………早いところお金払おう。

第五十話 「子を思う親の心に偽りなし、だと思つ」(前書き)

懐古厨という訳では無いんですが、今のベイブレードより昔のタカ才達の奴の方が私は好きですね。

Gレボリユーションはとても好きでした。

では本編を昔持っていた自分のベイを思い出しながらどうぞー

ちなみに私はドラグーンGTまで集めてしました。それ以降は欲しくても買えませんでしたorz

第五十話 「子を思う親の心に偽りなし、だと思っ」

とある世界の片隅で、今日も今日とて研究に励む科学者が一人。

「  
ア  
」  
ハ

．．．．． 励んで．．．．． はいないようだ。まるで魂が抜けた屍ライクな感じで、戦闘機人用の調整ポットを眺めている。それでいてコンソールを打つ手に何の淀みも見られないのはやはり彼が一流以上の科学者である証拠か。

「ああ、あのドクター？」

「……うん？ 何だねウーノ？」

「その……あれからもう一週間も経過しているのですし、そろそろ引き摺るのも止めた方が……」

暗に諦めるというニュアンスが込められたその言葉は、“無限の欲望”の名を持つ彼にとっては認めざる言葉だ。彼が名の通りの人物ならば、諦めるなどありえない、妥協なんて以ての外。

「私はねウーノ、未だかつて自分が手に入れたと思ったモノをいかなる手段を持ってしても手に入れてきた。私を慕ってくれる12人の可愛い娘達や、スカリエッティ一家が全員伸び伸びと暮らせる様にミッドに埋まっていた方舟だって甦らそうとして、後は聖王の器さえ見つければそれも完成する」

「はい。それは重々承知しております。中には反抗的な妹達もいますが、概ねドクターを慕っておりますし（私はそんなちやちな感情ではありませんけど）、方舟の事も私達のためを思っしてくれていることも分かってるつもりです（私的には白い家に私とドクターと子供と大型犬というのがベスト何ですけど）」

二人の様子を傍から見れば、上司と従順な部下のように見えなくもないが、何やら感情に差異が見られるのは気のせいだろうか？

しかし、愛娘の言葉を受けても尚、無限の欲望は止まらない。

「だがしかし！ 私でさえも手の届かなかった者が二人いる」

一人は自身の不倶戴天の敵といっても過言では無い女性。一時期は懸想していた時期もあったがそんなものはとうの昔に消え去った幻想だ。ていうか思い出したくも無い身の毛のよだつようなあの白い牙はトラウマものだったりする。

そしてもう一人。

「まあ彼女の事はもう虚数空間にでも追放するとして、問題は彼だ。私が手を伸ばそうとするといとも容易くその手を払いのける気まぐれな猫のような彼」

まあ出会い頭に殺す気満々マンの炎をかまされて尚このように言える彼はある意味大物である。



「あゝ、面倒クセー。なんであんな変態のためにアタシが働かなきゃなんねえんだよ」

賑やかなスカ家の、とある日常の二コマだった……

「はっわっ！?!？」

「どっしたのさ急に奇声なんて?」

「いや………（何かトンでもない出来事が俺の知らない間に起こっていたような気が……?）」

しかも余計なフラグまで立ったような気もしたが、きっと気のせいだろう。

「それにしてもお前がなのは以外とくっ付いたのは予想GUYだったぞ」

「そう……かな？ でも確かに君からしてみればそういう考えがあつても不思議じゃないよね。アレは本当にゴメン」

「今さら謝るなって。お前も今幸せそうだし、俺からは特にリア充氏ねぐらいしか送る言葉は無いし」

「……………そう言って貰えるだけで十分だよ」

今日は仕事で八神家には人っ子一人としていない筈（じいちゃんとかザフィーラさんは例の如く近所で開かれている盆栽の剪定教室に行ってます）だったのだが、有給の最後ということでテストタロツサ家が遊びに来てくれた。

相も変わらずの女顔が、髪を腰に届くように伸ばしたしで余計に女に見えるユーノや、プロのモデルも裸足で逃げ出すような美貌を持ったフェイト。大きくなったなと思う反面、どう考えても可笑しいのが二人。



「ふむふむ、この手錠の施されている術式は見た事も無いものよ  
うね」

「母さん、これってひょっとして……？」

「ええそうよアリシア。失われた筈の技術、アルハザードのもので  
ある可能性があるわ。ふっふっふ、ミコト貴方……良い仕事をして  
くれたわね」

誘拐されて実験されて殺されかけて、その何所が良い仕事だっ  
たのdarou? しかもこの手錠をつけられた時が恐らく一番の危機  
だったんじゃないかって思う。

それをそんなイイ笑顔で言われても嬉しいどころか怖くてしよ  
ーがない。

しかもこの二人、十年前と見た目が全く変わってないってどうい  
う事?、アリシアさんなんてフェイトと顔立ちが似すぎてる分双子  
にしか見えない。これも魔法の一種か?

「（リニスさん、あの……）」

「（聞かないで下さい。私にも分からないですから）」

最早視線だけでの会話ができる苦勞人おれたちの間での視線のみでの会話。

まだ使い魔の彼女はともかく、本当にこの二人は何なんだろう？  
女性はやはり謎だらけだ。

それでも一つ特筆すべき点が。

「そ、そのうゝ……」

「ほらキャラ、見た目は不良だけど根は良い人だからそんなに怖が  
らなくても大丈夫だよ」

「おいコラユーノ。不良って単語で余計に引かれたぞ今」

ずっとユーノの後ろに隠れてモジモジしている桃髪の少女と

「初めまして！ 僕、エリオ＝テストロツサって言います！ フェ  
イト母さんからお話は聞いてたけど、思ってた人よりかなり細い  
ですね！」

「……………ちなみに、話では何と聞かされていたのかな？」

「フエイト母さんの魔法よりも速く動けて、一人で大型の動物も持ちあげられる怪物みたいな人だつて！」

だからゴリラみたいな人ですかつて聞いたら『うん、そうだね』つて！」

「……………ふえいとお？」

赤毛の少年の背に隠れて顔だけ出してゴメンねと舌を出しているが、そんなんで子供に余計な偏見を持たれたことを許すつもりは毛頭無い。

最初は二人にこんな大きな子供がつ！？ などと驚いたが、聞けばこの二人はそれぞれ已むに已まれぬ事情があつて、そこを二人が保護責任者として名乗り出て結果、二人を自分達の子供として引き取ることになつたそうなの。

桃髪の子がキャロル・ル・テストロッサと言って召喚士という珍しい部位に入る魔導師の素質があり、先程エリオと名乗った少年は、フエイトと同じ電気の変換素質を持っている近代ベルカの魔導師としての訓練を受けているらしい。

コーチは両親とスパルタに定評のあるプレシアおばあ

「何か不愉快な気配がしたのだけど、気のせいかしら……？（チャキ）」

「ハハハハ、キノセイニキマツテルジャーナイデスカー」

まさか内心のモノローグに反応してデバイスを頸動脈に押し当てられるとは思ってもみなかった。ていうか刺さってる刺さってる、血が出てるってば。

……とにかく、魔法に関してはかなり優れた三人の教えもありこの子らはかなり伸びているらしい。

「だから俺にこの家にいる間ぐらい模擬戦の相手をしろと？」

「そうなんだ。できれば管理局には二人の事をあまり知られてくないし、できる事ならちゃんとした実力がついてからじゃないと安心して送りだせないよ」

今日遊びに来た理由は二人を一時八神家に預けて、何故か地下にある訓練場で俺と模擬戦をして欲しいというものだった。



「……手が早いなオイ。でだ、この子たちはそれを承諾してるのか？」

いくら何でも子どもの意志が無ければ意味の無いことだろう。そもそもどうして対象が俺なのか意味が分からんし。

「はい！ 僕もあまり父さんや母さんに迷惑をかけたくないですし、八神家の皆さんは優しい人ばかりですから大丈夫です！」

「わ、私も、その……………」

対称的な二人の態度ではあるけど、それでも二人にはちゃんと意志があることが分かった。それならもう俺から言う事は無いな。

「それに指名手配を受けて家でニート状態のミコトさんならそれぐらいするだろうって母さんが」

「まっ、エリオなんて余計な事をつ！」

「……………キレても、いいよね？」

「ふえ〜い〜とお〜〜？ 覚悟はいいか……………？」

「無いです！ そんなものはあります」

「問答無用じゃポケエ！ お前とも決着つけたるからはよ地下に行くぞオラア！」

「いやいや叫ぶフエイトの首根っこを掴みながら引き摺っていく。なあに、手錠が付いていようがコイツぐらいなら燃やせるぞ。」

「ミコトさんの戦いかあ〜、楽しみだねっ、キャロ！」

「え、えと、母さんが危ないんじゃない？……………？」

「大丈夫だよキャロ。……………焼き土下座くらいで許してもらえると  
思うから」

「助けてよユーノ！ このままじゃ私が消し炭に！」

「安心しろ。俺の炎をレアからウェルダンまで火力の調節が可能だ。外はこんがり中身はジューシーに仕上げてやんよ」

「キヤアアアアアアアアアア！」

使い魔二人の溜め息と、データデータと年甲斐…ゲフンゲフン！  
………麗しい容姿をより弾ませながら戦闘データを収集しようとする二人見送られながら俺は訓練場にスキップで向かった。

………何か憂さを晴らしをここでしとかないとさっきの悪寒が消えてくれそうに無いんで…



第五十話 「子を思う親の心に偽りなし、だと思つ」(後書き)

何だろつ……エリオ君のキャラが元気つ子になってしまった……

第五十一話 「言っなよ？絶対に言っなよ？ フリじゃないからな？」(前書き)

遅れて申し訳ありません。

ちいっとばかりアルが立て込むようになってきました、しばらくは不定期での更新になりそうです。

それでは本編スタート

第五十一話 「言いなよ？絶対に言いなよ？ フリじゃないからな？」

エリオ達が八神家に居候するようになって十日が経った。

エリオは持ち前の明るさと元々知っている人が居たというのもあってすぐに順応していて、それに対しキャロの方は俺という不穏分子の存在のせいで人見知りをしていたけど、それも最近はようやく緩和されてきて顔を合わせても普通に挨拶を返してくれるようになった。

そして

「うっし、今日はいいまで！」

「は、はこ……」

「あ、ありがとうございます……うございました……きゅー」

元々フェイト達に頼まれていた実践稽古。

普段エリオ達が練習しているメニューに加えて、朝から二対一の模擬戦を行って昨日までの訓練の成果を測っている。

俺はただ手加減をしつつある程度の時間、身体能力と炎は崩まで使って応戦するだけであって、データの管理などはずかずかや風花がやってくれている。

「にしても二人とも呑み込みはええなマジで」

「いえ、シグナムさんとか雪而お爺さんの教え方が上手だからですよ。凄く分かりやすく体捌きを教えてくれますし」

「それにシャマルさんやヴィータさんも魔法の構築とかの教え方がすっごく丁寧で覚えやすいんです！」

まあ経験だけならそんじょそこらの魔導師の比じゃないし、ヴォルケンの皆は先生としては申し分の無い人材だということ差し引いて考えても、二人の成長速度は目を見張るものがある。

昨日今日で成果が出るとは思っていなかった朝の模擬戦でも、一日経っただけで次の日にはもう別人のような動きになるのだ。

言われた事を忠実に再現する。それが出来るというだけで十分過ぎる才能を持っているということだ。伊達に魔導師一家に育てられてきた訳では無さそうだ。

なので八神家では主に戦闘思考に重きを置いたメニューが組まれていて、より実践的な魔法の構築だったり、エリオなら槍捌きの訓練やインファイトの格闘をじいちゃんに、キャロも後衛ということだが、最低限の護身術を風花に教わっている。合気だったり、キャロの小柄な体軀でも威力を出せる技などを重点的に教えているので、俺はその練習台として相手をするだけだ。

「俺も最近あまり楽しせてもらえなくなっただしな！。そろそろ他の火竜も解禁してやってみっか」

「はいっ！ 他のさいはって言うのやほむらって言うのも見てみたいですー！」

「私もフリードの技の参考に見たいです！」

「そう？ なら今度からは四式を除いた、崩、碎羽、焰、円まで使って戦うとするか。そんでお前らもデバイスを自分の物を使って良

いことにする！」

やっと自分達のデバイスを使える事と、映像を見てカッコ良かったという火竜を見れるという喜びでさっきまでの疲れが嘘のように舞い上がっている二人。

今まではデバイスに頼らない自分の戦闘スタイルを確立させるために、管理局の支給品の量産型デバイスを使わせたのだが、こちらも相応の力を使うのであちらもそろそろ自分達がどれだけ成長したのかを知るのにも良い機会だろう。

・・・そんな事を思っている時だった。

「そういえば……」

「お？ どうしたキャラ」

不意に何かを思い出したようにこちらに向かってくるキャラ。

「私ずっとみことさんに聞きたかったことがあるんですけど……  
いいですか？」

「いいぞ。俺に答えられる範囲だったら何でも聞いてくれ」

……この時の俺には、次に発せられる言葉を予想すること  
など出来る筈も無く、例えば次に発せられる言葉が地雷をパイルバン  
カーで撃ち貫くようなものだったとしても、それを止める術などあ  
る筈も無かった……

「みことさんって、あの中で誰が一番好きなんですか？」

誰が一番好きなんですか誰が一番好きなんですか誰が一番好きな  
んですか誰が一番好きなんですか……

「み、みことさんっ!?!」

「どっしりキヤロ! ミコトさんの頭から黒煙が!?!」

……予想をジャンボ機で飛び越えていくような問いかけに、

俺は答える事が出来ずにただただ現実から目を背けて自ら気絶する  
のだった……………

「で、誰に聞けと言われたんだ？ 怒らないから言ってみ？」

二人を連れて自室に連行。誰にも盗聴されないよう円で結界を張  
って防音もバツチリである。



俺の鬼気迫る形相にかなり引いている二人だけど、今はそんなことを気にしてる場合じゃないんだ！

「あ、あの、さっきのは私が気になっただけで誰から頼まれたとかじゃ……」

「風花にも神楽にもはやてにもすずかにも誰からも頼まれて無いんだな！？」

「あれ？　なのはさんは違うんですか？」

「エリオは黙ってる！！！！？」

ただでさえヤヤコシイ状況なのにそこにこれ以上人員が増えるものか増えてたまるかお願いだから増えないで……！！

コクコクコクと首が落ちそうな勢いで何度も頷くキャロを見てとりあえずは一安心。

「それでえい、結局のところ誰が一番好きなんですか？」

「……………君もやっぱり女の子なんだってことを再認識したわ」

幼かるうが女性は女性、色恋沙汰には興味をそそられるのだろう。

ていうかあの連中は子供に何吹き込んだんだ？

「普段のみなさんの様子を見れば一目瞭然ですよ？」

……別に吹き込んでいたわけじゃないみたいだ。むしろ  
子供に見透かされる己らをちったあ恥じて欲しい。痛切に。

にしても一番好きな人ねえ……

「……言わないと、駄目か？」

「コクコク」「

「……口に出して頷くんじゃねえ」「

二人して俺の好きな人が気になるらしい。キャラはともかくエリ才までとは意外だ。

「……それじゃ、お前らだけには言うけどさ、一つ約束してくれ」

「「約束？」」

「そつだ。これを守ってくれるなら教えてやる」

まあコイツらなら言っても問題無いし、それにどうせまだ告白できないしなあ。

「俺にはどうしても片付けなきゃいけない懸案が二つほどあってな、それを片付けねえと告白も儘ならないしまともに恋愛にうつつを抜かしてる場合じゃねえんだわ」

だから、少なくとも俺の懸案が終わるまではお前らの中だけで留めておいて欲しい。

「これを守ってくれるなら名前を教えるけど、どうだ？ 守れるか」

「？」

「勿論ですっ、私、絶対に内緒にしますっ！」

「僕もです！」

二人が良い子でおじさんは嬉しいです。

「それじゃあゴニョゴニョ……………」

「かくかくしかじか」

「まるまるつまつま」

「そんなに長くねえだろうが」

何で二人が日本の言いまわしを知っているのかはさておき、これで俺の秘奥中の秘奥がまた知られてしまった。コイツらを除けば後は火竜とアークルだけだ。

「へえ〜…………他の人も魅力的だとは思ってますけど……………」

「まあ、それは否定しないし、実際俺には荷が勝ち過ぎている気が満々なだけだよ」

「それでも好きなんですネ！ その感情、分かります！」

「そ、そうか？」

何時にも増して押せ押せムードなキャラに気後れしながらも励ましてもらったのは素直に嬉しかった。

「きっとその人だってみことさんの事好きだと思います！ だからそのやる事が終わったら絶対告白して下さいね！ そしてその時の台詞も是非！」

「言うか！？ 一世一代の告白を易々と教えてたまるか！！」

まだ考えてもいないけど、それでも多分一生に一度しか言わないであろうプロポーズ。出来ればその人の胸の内だけに留めておいて欲しいと思うのは、我儘では無いと思う。

それをいくらキャラとはいえ、教える訳にはまいりませんなあ

そんなやり取りをしつつ、朝食を食べるのを忘れていたので思いっきり料理当番のすずかに絞られた。

「罰として二人の監督責任のある命君には、今日一日私の言う事をずっと聞いてもらうってのはどうかな？」

「明らかにエリオ達の『デザートお預け』よりも難易度がなまら高くなってんじゃないかねえか!？」

人それを無理ゲーという。もしくは業界の人にはご褒美だろう。俺には分からない世界だけだな！

「大丈夫　今日は私非番だから、一日中家でのんびりするだけだし」

「……………不安しか浮かばないのは俺だけか？」

すずかの紅い瞳がマジ怖い。アレは捕食者の目だと本能が告げている。

「駄目だからね？ 二人も子供がいる家で発禁かかるようなことしちゃ駄目だから。分かった？」

「もう、ほんの冗談だよ、風花ちゃん」

なら手をワキワキさせんな影で舌打ちをするな怖いから！

「……はあ」

子供たちからは思わぬ襲撃に遭い予想だにできなかった好きな人バシが起こってしまったし、今日は一日すずかに遊ばれそうだし。

幻想殺しの少年では無いけれど、叫ばずにはられない。

大声を出すと思惑がかかるので心の中の大海に向かって大声で叫ぶことにした。

「（不幸だあああああああああああああああああああああああああああああああ！）」

．．．．．あと、この日エリオ達がホームステイしてから通算  
百回目の電話がフエイトからかかってきた。この親馬鹿の鏡め。



第五十一話 「言つなよ？絶対に言つなよ？ フリじゃないからな？」（後書き）

施設実習……………ダルイわあゝダルビっ シュやわあゝ

第五十二話 「炎の竜VS白銀の狼」(前書き)

日が空いてすいません！

ネタが無く散々書けなかった日々が続いておりましたが！  
まだまだネタ不足は解消されておりません！

故にしばらく更新は不定期です！申し訳ありません！

そしていつも通りの出来………それでもよければどうぞ

第五十二話 「炎の竜VS白銀の狼」

「何？ 僕もいまじんぶれいかーが欲しいだと？ アホぬかせそんなん俺の方が百倍欲しいわっ！」

ガチャンっ！

「どうしたの命君？ 誰からの電話だった？」

「いや、作者がな、『ネタ不足と言う名の幻想をぶち殺すための右手が欲しい』って言ってきてな」

「え、何その右手怖い」

「まったく、ネタ不足なんて元々の実力不足が招いた結果じゃねえか  
あのアホ」

「それでネタは思いついたって？」

「いんや全然」

「……………駄目駄目だね作者さん」

「……………だな」

「だったら！」

「？」

「今日は皆も居ない事だし……………」

「うん？ まあ確かにこうして俺とすずかしか今いないけど……………  
オイ」

「何かな？」

「その手に持ったどー見ても拘束用の鎖と瓶は何だ？ そしてどうして俺ににじり寄って来てるんだお前は!？」

「……………命君」

「……………何だ？」

「……………既成事実って言葉、知ってる？」

「さらばだっ！」

休日の昼下がり。俺は全身に感じる悪寒に従って居間を飛び出した。いくら何でも襲うって何だよすずか!？

どうしてしまったんだすずか!？ 君はそんなエロチックなキアラだったっけかすずか!？

……………命の知りうることでは無いが、彼に想いを寄せる異性で一番その手の造旨が深い。

一族的にもすずかはそういった知識を仕入れるには適した環境であつたし、何より同じような手段で朴念神を射止めた姉がいる以上、すずかに歯止めをかけるのは同盟を結ぶ他の乙女達の監視しかなかつたりする。

「待つて命君！」

「あア！？」

「痛いのは最初だけだから！ 私ちゃんとお姉ちゃんのテク」

「止めんか！？ それ以上は聞きたく無いっ！！」

それ以上の言葉を聞きたくなかつた俺は一目散に家を飛び出た。その時の俺は指名手配とか管理局の魔導師なんかよりも、何よりもすずかが怖かつた。

紅い瞳の奥に燃えている炎が、とてつもなく恐ろしかったと後に命が述懐していた・・・

~~~~~  
~~~~~

「ぜはあー！」

精一杯全速力で家を飛び出して幾星霜……ってそんなに経ってねえよ。せいぜい三十分ぐらいだ。

自然公園のベンチに座りながら乱れた息を整える。

最近、女性陣のアプローチが激しさを増してきているように思う。以前エリオ達に話した事は絶対に漏れいしていないはずだが、もしかしたら……

「盗聴器？ いやいやまさかそんな……」

一応それなりに好かれているという自覚はある。だからこそ告白するまでは誰とも特別な雰囲気にならないように留意しているし、特にフラグをおっ立てるような出来事も回避している。

だというのにアプローチが激化しているということは、何かしら引き金になるものがあつた可能性がある。

それが何なのかはサッパリだが、これはもうゆっくりしている場合じゃないのかもしれない。

「早いトコあの狂人どもと決着着けて管理局のゴタゴタも終わらせないとなあ……」



実はこのどちらもある程度どこにかできる術ならば分かっている。

囚人惑星デザイアで出会ったメイドと変なオッサン、あの後御厨に調査を依頼して素性を調べてもらったことがあり、実はあの惑星の裏ボスとして名を馳せているということが分かった。

つまりそんな物騒極まりない奴をふんじばって管理局に引き渡す材料にして交渉を持ちかける。

あちらが俺を捕まえたいのは、被検体としての価値を未だに俺に見出していることとそれを俺が口外するのを防ぐためである。

ならば俺と同じくらい不思議生物であるあのオッサンを差し出す代わりに見逃すように要求すればどうだろうか？

情報にしたって御厨を使えばそれなりに集められるだろうし、交渉の材料としては申し分ない筈だ。

メイドの方は多分主人の方を無力化すればあまり役に立たないと思う。万が一にでも捉えられた主人を助けるために動くかもしれないけど、それは多分何とかできる。

「……………あんまし使いたく無い手段なんだけどなあ……………」

御厨が調べてくれたメイドの素性にあつたとある事実。そこをついたこの方法なら確実にメイドさんを無力化できるどころか、以降もその行動に制限をつけることができる上にリスクゼロ。

……………いや、多分俺の心労にはリスクがあるんだけどね……………しかもめっさ。

「……………鬱やー」

折角前向きにこれからの事を考えようと思ったのに、あまりにも自分の展望に壁が多いことを知るだけとなり目の前が真っ暗になりそうだった。

「……………寝よ」

昼ということもありお日様は天高く昇っていて、秋も目前の季節だというのにその陽気には強烈な魔力が宿っていた。

今の格好は……まあ、長袖にジャージの上下（無論能力で創造したもの）であるし、手錠を隠すように腕を枕にすれば問題無いだろうと判断した俺はそのまま眠りについた。

~~~~~

~~~~~

「ミツケタ」

それは偶然だった。

「ミツケタ」

たまたま息抜きにやってきただけの世界、そのはずだった。

「ミツケタミツケタ」

そして偶然にも足を止めた公園。緑が美しく、芝生を駆ける子供  
の音が耳朶に優しく響く、おおよそ自身には縁も所縁も無い場所。

だけど、そこに彼は居た。

初めて見た時とは違う。その身にまとう雰囲気は獣を思わせるも  
のではなく、穏やかなそれこそそこらにいる人間と何ら変わらない  
雰囲気だった。

……違つ。貴方はこんな場所で寝ているような方では無い  
でしょう……？

一歩。また一歩と、芝に寝転がっている青年へと歩を進める。

ああ、この瞬間を幾度待ち望んでいただろう。

何度彼と牙をぶつけあい、踊り「踊りたい」と願ってきたことか。たいたいと願ってきたことか。

だが違つ。

私に知る彼はこんなものではない。

だったらどうする？……簡単だ、あの時と同じ条件を整  
えてやればいい。

周囲は炎に包まれ、世界には血の匂いが充満し、その身を真紅に  
染めた虚ろな貴方。

素晴らしい、実に素晴らしい。旦那様以外の殿方をここまで素敵だと思ったことは一度たりともなかったことだ。

だから

「始めましょう？」  
“殺劇世界”

ブラチナムロンド  
「白銀の円舞」

始めよう、私達だけの世界で、私と貴方、たった二人だけのダンスを

「  
ツツツ!？」

公園でうたた寝をしている時だった。不意に感じた途轍もなく嫌な予感に無理矢理覚醒させられて、本能の赴くままに跳び起きて服装をそれまでの私服Verから戦闘用のタキシードに換装する。

そして周囲を見渡して

「なっ!？」

その異様な光景に目を疑った。

遊んでいた子供、それを微笑ましげに見守っていた両親、夫婦そ

ろって日向ぼっこをしていた老夫婦、公園で放し飼いにされていた動物達。

公園の和やかな雰囲気を作りだしていた人間その全てが……

「……………何だよこれ……………」

……………地面から生えた軀に貫かれ絶命していた。

首が無い者、胴から二つに別たれた者、原形すら留められておらずにバラバラな肉塊と化した者。最早誰一人として生きている面影を残してなどいなかった。

……………地獄

その言葉通りの世界があるとすれば、間違い無く今目の前に広がっている世界の事を言うのだろう。



だが、俺はそんな光景を目の当たりにしてもそれ以上取り乱す事は無かった。何故なら……

「……………成程な。対象に対して、視覚、聴覚、嗅覚、そしておそらくは味覚や触覚にさえ及ぶ幻術結界。それもこの結界を張った外と中には何の因果関係すらも遮断する……………か」

つまり、目の前に広がっている肉塊は限りなくリアルに近い幻覚で造られた人形をバラバラにしているだけであり、この光景自体、ただの舞台でしかない。そういう魔法なのだこれは。それに気が付けたのも内面にいる幻術特化の罫がいてくれたお蔭だ。彼女がいてくれなかったら間違い無く発狂していた自信がある。

「誰だ？ こんな趣味の悪い発禁映画みたいなもん見せやがったのは……………」

「私ですよ」

気配には気付いていたけど、まさかこんな大それた術式まで使えるなんて……………

「昨今のメイドさんってのはそんな物騒な大剣を所持してたりこんな悪趣味な幻術を使えなきゃ駄目なのか？ 初めて知ったぞ」

「これぐらい、旦那様の従者をする者としては当然ですわ」

「いやいや、普通五感全てに影響を及ぼす結界なんぞ無いから。これもメイドさんの故郷の魔法の一種かな？」

「……よくご存じで」

「アンタ俺を探すためにあちこちで無茶苦茶やってただろ？ それを見てた奴もいればその戦いを見て何かに勘付く奴もいるってね」

「実際、これも推測の域を出ないものだが、さっきのやりとりではつきりした。つまりコイツは……」

「なるへそ、真獣のDNAを混ぜて作られたアルハザード製の人造魔導師、いや、人造兵器の方が正しいか？」

「正確には“第二次次世代人造魔導師製造計画”その出来損ないであり最高傑作が、恥ずかしながら私ですわ」

計画名はサツパリだけど、ちゃんと調べてもらった情報にはその計画と思しき記述があった。

真竜と同格であり、またアルハザードにしか存在しなかったとされる真獣。人間と同サイズのリンカーコアを持ちながら、人間とは異なる神経を持ちそれを用いることで全身から魔力を吸収して身体強化、そして人間を遥かに超える頭脳をもった彼らからデータを採取し、それを人間体に定着させることができれば、それは今までにない魔導師の可能性ではないだろうか？

そんな子供の考えの様な実験の末に生まれたいのが、完璧な人間体でありながら獣じみた思考により研究者諸々を殺し尽した被検体。

その被検体はすぐに封印されて虚数空間に送られたそうだが。

「それがメイドさんだったりする？　もしかしなくても」

「ご明察ですわ。私は確かに虚数空間に追放され、そして流れ着い

た先で今の旦那様と出会ったのです」

まさかお伽噺でしか無かったとされるアルハザードがこんな物騒な生物を創りだしていたとは。子供には知らせちゃいけない事実である。

「して、いつまで私は待ち惚けを続けねばよいのでしょうか？ もう手錠にかかっている封は解除しましたし、今なら自力で外せますよ？」

「へ？・・・・・・本当だ」

言われて腕を目一杯引つ張ってみたところ、まるでぢやちなカプセル玩具に付いているキーチェーンのようにあっさりと切れた。今まで必死こいて外そうとしてたのがバカみたいな一瞬だった。

そしてメイドさんかというと、何となく八神家の女性陣を彷彿とさせる潤んだ瞳で見つめてきてらっしゃるが、その瞳の奥に浮かんでいる感情は殺意と狂気。

「さあ……………始めましょう？　今この世界において役者は私と貴方の二人だけ。」

そして舞台に色を添える血の香り。

もうこのままでは疼いて仕方無いのです……………」

「驚いた、いくら幻覚だったとはいえこれだけの惨状を舞台装置か飾り程度にしか認識してないのかアンタは？」

いくら幻覚だと分かっているても、少なくとも俺にはあんな謳う様な言葉は出せない。今出せるような平坦な声しか出せない。

「本当でしたら現実で試したかったのですが、ここは管理局のお膝元。下手を打って私達の邪魔をされるのも不愉快でしたので、些か安い会場ではありますが、どうです？　私達が初めてお会いした場所を思い出させませんか？」

「……………あー、あれか。アンタ態々アレを再現したいがためにコレを？」

頷くメイドさんは華麗だけど、悪趣味ここに極まれりだ。SAN  
値直葬とはこういうことを言うのだろう。

「態々あんがと。そんじゃま……」

久しぶりに両腕を解放した感覚を確かめるため、そしてせめてコ  
イツが望んだ場所……

「アンタが再現したかったあの世界をここに出してやるから、そこ  
で

龍ノ炎 漆式 虚空

龍

ノ炎 拾式 創竜

合体火竜 紅蓮焦土……………

ッ！」

腕のみならず俺の全身から炎が噴出し、白銀の軛を幻術の肉塊諸とも灰燼にする。

そして世界を銀から真紅へと塗り替え、丁度初めて出会った時のような光景をこの場に現出させる。

「ああ、本当に貴方は素敵ですね。よもやこのような場所で死合えるなんて……………夢のようです」

「あ、そう。だったら夢心地のまま痛い目見てみるらうぜ？」

碎羽を右手に、相手は銀の牙を下段に構え、そして

」「ッッッ！」「」

刹那の交差とともに死合いが始まった・・・



第五十二話 「炎の竜VS白銀の狼」(後書き)

禁書22巻読みました。原作を未だ読んで無い方もおられるかもしれませんが、ネタバレになる発言はしませんが言つなれば一言。

アレイスター氏ね。

以上です。ではまたいつになるかは分かりませんが次回の更新で〜

第五十三話 「炎の竜VS白銀の狼 その2」(前書き)

この前よりは早めに投稿できました！

そねどはぶひんぐ

第五十三話 「炎の竜VS白銀の狼 その2」

命とアウレリアが交戦を始めた頃、自然公園で起こった不可解な次元のズレを感知した管理局は、現場に数名の魔導師を派遣させた。

とはいえ

「……どこにもおかしなところなんて見当たらないんだけど……」

「それどころか平和そのものって感じだよな……」

その時空にいたのがたまたまなのは、風花、神楽の三人だけで、暇を持て余していた神楽の提案により無茶を通して三人だけで現場に来たのにも関わらず。

「レイジングハート、本当にここであつてる？」

「Yes my master」

「うん……封時結界のようなものが張られているっていうのは分かるんだけどなあ」

そうなのだ。三人は異常が確認された自然公園に到着して、それぞれが持つデバイス（風花の場合は武装隊に支給されているストレージだが）にも、ここに間違いは無いとデータが示している。

それなのに異常が見当たらない。

詳細は単純だ。

結界があるということだけは認識できる。だがそれが従来のミッド式の封時結界やベルカ式の閉鎖式の結界では無いというのが問題

なのだ。

使われている術式そのものが違う場合、解析にかかる時間が増えるのは勿論なのだが、この場合さらに厄介な事情がある。

「何で公園には人がいるのに結界だけが独立して展開されているの！？」

なのはの疑問は当然と言えた。

従来の結界であれば魔力を持たない人間は自然と結界外に弾かれている筈なのに、結界が展開されている自然公園の中には一般人が存在している。つまり・・・

「結界の中をまるごと写し取った空間を形成して全く別の位相に移動させる……………これってランクに換算したらどれくらいの魔法なんだろうね……………」

「いやいくら指定した空間を限定して転送させる魔法があるっていても、これだけの広域をカバーできてさらに疑似空間まで維持しながらだなんてそんな真似……………」

なのはが呟いた言葉をあり得ないだろうと言おうとした神楽が、不意に言葉を止めた。

ミッド式でもなければベルカ式でも無い、魔法。

自分達は当然そんな存在は知らない。だけれど、もしそれが出来るとすればそれは。

「まさか……ロストロギア!? でも何でこんな場所でそんなものが!?」

「分からない! けどもしかこれがロストロギアが原因でだとしたら……」

「とりあえず一般人を避難させよう。そうしないと結界を破壊することも出来ないし」

破壊はあくまで最終手段。通常のものとは違うものなのだから慎重にことを運ぶのは当然と言える。幸いなことにこの結界、外部か

らは魔力を張った空間を包んでいる以外の効力は皆無であり、結界の中に居る一般人を結界外に出すのは容易であった。

避難にはまだ時間がかかるが、完了次第別の結界を展開し、なのは持つ結界破壊能力が追加されたスターライトブレイカー+で現在張られている結界を破壊、それによって引き起こされる可能性のある二次災害を防ぐためにも予め別の結界を張っておくというのが三人が決めた流れであった。

『今緊急でシヤマルさんと呼んでるから、避難が終了するのも合わせてあと十分ぐらいかな？』

『了解つと、それじゃ私は南口周辺に勧告してくるから神楽ちゃんは北口、なのはちゃんは集束魔法のチャージよろしく！』

『うんっ！ 任せて！』

そして念話による確認を終えてそれぞれの仕事へと移行する。

そして。

「うううあああああー!!」

「フッ」

方や両腕に装備された碎羽を振るい白い大牙を押し折るべく、方やその白き牙を以って黒きタキシードの男を斬殺せんとその牙を振るう。



開戦して五分と経たない間だが、刃を交えた回数は既に百を軽く越え

「まったく、昨今のメイドさんはこんぐらい武力なきやなれねえのか？ どれだけ敷居の高い職業だよチクシヨー」

「ふふ、まだ軽口を叩けるんですね」

「いや、それはアンタも同じそうだし」

軽口ともとれる会話を続ける両者にはそれぞれ無数の傷がついていた。

それでも二人は止まるどころか

「ああ、これならまだ力を出しても良さそうですね」

「力の出し惜しみ？ そういつの嫌いだなあ、俺」

「これは失礼を。しかし安心して下さい」

不審に思い男が一瞬動きを止める。それを歯牙にもかけずにメイド調の服を着た美女は薄く笑い

「  
グラウ、行きましょう？」

自身が持つ大剣を分解、そして

すとんっ、と

先程までの耳朵を撃つ剣戟の激しい音とは程遠い軽い音をたて、

命が気づいた時にはもう遅く、左腕が地面に転がっているのをただただ他人事のように見る事しかできなかつた。



腕を失ったことよりも、失血により動きを阻害されることを疎んだ俺は即座に右手で展開していた碎羽を切断された左肩にあてる。

今更のようにやってきた切断の痛みと細胞が焼け焦げていく激痛を咆哮でかき消し、意識が飛びそうなほど痛いのに痛みが強すぎて逆に気絶出来ないという矛盾に何とか助けられて今やっと立てている状態だ。

（命ちゃん！）

「（大丈夫………じゃないけど、とりあえず意識もあるし体も動く）」

剣が分解されるところまでは確実に見えていた筈なのに、それからの事はまるで見えなかった。

姿がかき消えたとかでは無い、そこにいた筈なのに、微動だにしていなかった筈なのに、俺の左腕を方からバツサリやられたのだ。その時に相手の様子を見るために構えを変えようと動いたのが功を奏した。でなければ俺は肩ではなく上半身を切り取られていただろうから。

それだけの高速移動。フェイトの動きの比じゃないその動きは、本当に人間ではなくまさに獣のような人外（ヒューマン）の速度だった。

「うふふ。運がよろしいですね、今ので致命傷を与えるつもりでしたのに……やはりこうでなくては」

背筋が凍りつきそんな狂気の笑みでこちらを見やる彼女は、先程までとは明らかに違う様子だった。

「な、コスプレかよ………」

「ええ。ビーストアーマーズ獣化兵装、これが私の牙であるグラウの本当の使い方ですわ」

「……………厭味もさらりとスルーな訳ね……………」

メイドさんの身の丈よりも大きかった大剣の面影は微塵も無く、メイド服の代わりに金属質な狼を彷彿とさせる軽鎧を纏った獣の姿

がそこにあつた。

両腕にはアサシンプレードのような短剣が装備されていて、それ以外の部位は露出などもそれなりで出すとこに出せば目茶苦茶売れそうな写真を撮れそうではあるが、今の俺にそんな思考を展開できる余裕は無かつた。

まるで今までの剣戟がお遊びだったかのような、今の彼女から発せられる狂気と殺気はそれほどまでの濃く、また異常だった。

「この姿をとるのはもう何年ぶりでしょう……………近頃は旦那様にも使わなかつたのですが」

「それをこんな半分以上二トな男に見せるのはいいのか？」

今はまだ回復に専念したい。碎羽に柳を合体させた刃を左肩に突き刺して会話を続行させてはいるが、向こうがそれに気づいていないと考えるのは甘いだろう。

「それでどうです？ 片腕を失ってもまだ貴方は踊れますか、神名

様？」

「そうだなあ……デュエットはちと無理かね。踊るんなら是非個人で創作ダンスでも踊ってみない？」

「あら、これほど楽しいのですから一人だなんて勿体無い……」

どうしても俺を殺したいのかこのアマは。俺の回復待ちという余裕まで見せつけてくるのには腸煮えくりかえりそうになるが、今のままではあの尋常ならざる速度にはどうやってもついていけない。

「（少なくとも今のままじゃ……）」

こういう状況を見越して用意していた筈の魔導具立って今ではどこにいったか分からない。拉致られて速攻で取り上げられたから既に処分された可能性だってあるし……万事休す、か。

「では神名様の回復を待っている間に少しここに至るまでのお話でもいたしましょうか？」

あまりの余裕っぷりにキレそうになる内の火竜総勢で宥められ、今は未だ回復に努めるためにその話を聞くことにした。

「では、実はここに来るまでに神名様の匂いを追ってとある世界に行っていたのですが……」

「ちよ待てや。匂いっておま……」

何だろう。前はテキトーにヤンデレとか言っていただけなのに、それが現実味を帯びてきた感がパないんだけど……？

「そこで確かに神名様の匂いの元を見つけたのですが」

「……………へ？」

俺の匂いがついた物って……………



「こんな何の反応も示さない透明の球しか」

『それだあああああああああああああああああああ……!』

「はい？」

内の火竜ともども都合主義としか言えないこのチャンスに歓喜する。もうこの際だから細けえことは気にしない、それさえあればまだ何とかなる!

「焰 アアア！」

「ほっ……………どうなされたので　　ッ！」

先に崩と合体させた焰を放ち、ビット状になっている焰十機と俺自身が放った炎の鞭で十束剣の奪取する。言えば渡してくれそうではあったが、どうせならこのメイドの鼻をあかしてやらないと左腕を切られた仕返しはできない。

……無論それだけで仕返しを済ませる心算など脛毛の先ほども考えていないけど。

そして久しぶりの魔導具の感触に感動を覚えながら発現させる。

「超力招来………青竜ツツツ!!」

着ていたタキシードの上着だけが弾け飛び、代わりに肩が出るタイプの青い軽鎧が装着されて、宝玉だった十束剣は棍へと姿を変えてその両端には雷の意匠の槍が。

高速戦を目的に作られた形態であり、この状態での俺のスピードは……

ドスっ!!……!!……!!

「がぶっ!!」



一応気は抜かずに片手だけで構えているが、両腕が使えないハンデイは大きい。本来片手で振り回す用途では無いのだからそれは当然だが、右手一本だけで棍を操るのはちょっと無理がある。

それにこちらの消耗だって馬鹿にならない。

立っているだけでクラクラするし、今だって切断された場所が灼けるように痛む。これ以上の戦闘は明らかに不利過ぎる。

剣王では動きに対処できない、白虎を使ってもいいのだろうか、あのスピードについていくためにはどうしても青竜でなくてはならない。

「（破壊力がどうしても足りない………それでもやらなきゃ死ぬってどんな鬼畜ゲーだよ……）」

しかもこの人を殺してはいけないという制限付きだ。俺の計画の重要なファクターである以上、生かしたまま捕える必要がある、だからこそ一番パワーの無いこの形態が向いている訳なんだが……

「では参りましょう！ ああ神名様神名様！ もう旦那様だつてどうでもいい！ 今ここで貴方を殺すのは私ツツ！」

「こっちは殺されるつもりも、殺すつもりだって毛頭ねえよツツ！」

「……こんなバーサーカー相手に片手で勝てんのか？」

弱気な考えが浮かびそうになりながら両手に爪を迎え撃つべくドラゴンロッドを突きだそうとして、

バリッ

．．．．．世界の割れるような音とともに、俺にとっては最悪な事態が目前へと迫ってきた。

第五十三話 「炎の竜VS白銀の狼 その2」(後書き)

ご都合主義で魔導具復活！

それでも彼女相手に無双はできず、苦戦を強いられる状況でさらなる困難が降りかかる！

次回、「ヌーオルトキオシティ最期の日！」

・・・・・・・・・・・・・・・・何言ってるんでしょうかね、私？

無論嘘予告なのでお気にならばす〜

第五十四話 「炎の竜VS白銀の狼 その3」(前書き)

過去最高の空白・・・その間の私は一体何を・・・？

はいたんに忙しさとスランプと私な状態だったただけでした。駄目な作者ですいません！



第五十四話 「炎の竜VS白銀の狼 その3」

「だあもうやりづれえな畜生！」

唯一残った右腕だけで身長程もある棍を振り回すのはいかんせん戦いづらい。

「ふふふ、確かに素早さは格段に上がっているようですが、立ち回りがさっきまでと格段に劣って見えますよ？」

「んなもん現状見ればわかんだろうが！ こっちは片手で応戦してんだからちったあ手加減しろよ！？」

「手加減？ 何を御冗談をつ！」

繰り出される左右の爪撃をいなすのだけで精一杯。とても反撃に回る余裕なんてありやしない。

しかも、不利に働いている要員がもう一つ。

「（くそっ、片手塞がってる状態じゃあ印を描けやしない……！）」

両手が使えていればちょっとした隙を突いて火竜をけしかけて攻め方のバリエーションを増やせるのだが、今はドラゴンロッドで右腕が塞がれているし棍を離れたところで碌に防御もとれやしない。

ぶっちゃけ手詰まりだ。しかも失血による体力の減衰だって馬鹿にならないって言うのに……！

「（何か、何か現状をひっくり返す手段は……！）」

必死で対応策を考えてはいるのだが、血が頭に回らないし攻勢が激し過ぎて集中なんて出来ない。何かこう、ピンチになったら秘策とか浮かぶのが主人公補正って奴じゃないのかよオイコラ作者あ！

「あら？ 何をよそ見してらっしゃるのですっ！！」

「いいじゃんかよ別に現実逃避するぐらいっ！」

「それは困りますわ。今は私だけを見ていただかないと、今の貴方には私以外見えないでしょう？」

「場所がちがけりゃ情熱的な告白だったんだろうなッッ！！」

「どーでも良いけど、それはもつと雰囲気のあるところでアイツとやりたかった場面ベストテンに入ってたんだけどこのアマどうやってメよう？」

現状の劣勢とは裏腹に殺る気だけは満々だ。今なら神様だって殺してみせる！ いややっぱ罰あたりそうだからやんない。

何にも考えが浮かばずにいよいよ進退窮まりそうな感じになりかけたその時、不意にメイドさんの動きが止まり、顔に明らかな不機嫌さが滲み出ていた。

何となく、二人つきりになる状況を邪魔された女性陣の顔に似ているような……？

「……困りました。まさかこの結界が破られるなんて」

「は？」

「こちらの意見をまるつきり無視しながら口から出る言葉は独白のようで、そこには明らかな苛立ちが含まれていた。」

「何方かは存じませんが、今の私は非常に不愉快です。まさか神名様との逢瀬を邪魔するとは……」

…ん？ あれれ？ 何かどす黒い靄が噴出しているような……？  
あれじゃまるでいつかの神楽か風花みたいだ……ってことは  
!..?

「オイコラ呆けメイド！ テメエの相手は俺だろう！？ だったら結界破った奴なんか気にしねえで俺と戦え！！ 好きなだけ戦ってやる！！」

多分コイツは結界を破ってきたであろう魔導師を殺しに行こうとしてた筈だ。別に管理局員であろうとフリーの魔導師だろうと生き死にに興味は無いが、それでも無闇矢鱈と死なすのは駄目だ。目覚めが悪過ぎるし、そんなところを見つかれば後々いらん罪状を追加されかねん！

俺の必死の呼び掛けに目を見開いて驚いたような表情を浮かべるメイドさん。俺から積極的に戦う意志を見せる機会が無かった筈なのでこれで興味を惹ければ……

「嬉しい……」

「……ナヌ？」

……… (・3・) ？ まさかね？

「初めてですわ……誰かにあんなにも情熱的に求められたのは……」

「あ、あの」

「いいでしょういいでしょうええいいでしょうともっ!! 今より私の全ては貴方のものです!」

何か振り切っちゃったよあの人!!?

「旦那様からもあんなに求められたことは無かった……」

「おゝい、トリップしてないで俺の話を」

「神名様が初めてですわ。こんなにも私を満たしてくれて、なおかつ私の飢えを満たしてくれるのは」

(どーなってるの、アレ?)

(フム、あれが噂に聞いたヤンデレという奴じゃな)

(虚空様！ 今すぐ私にあのうつけに火葬許可を！)

(崩、いくら久しぶりの出番だからといきなり物騒なことをぬかすな。それに今の命では印を描けん以上我らを呼び出すことさえも出来んし、それに今の極限状態ではとても我らの声など...)

( (主/命君/主様  
/出して!!) )  
!!! いいから私を出しなさい

(……聞いちゃいねえな)

「(テメエらあああああ!! 人ん心の中で好き勝手言ってんじやねええええええ)」

内も外もやかましいことこの上無い。特に崩と墨と柳の声がハンパじゃ無かった。耳では無く脳がヤバかった。いくつか血管切れて無いだらうなマジで……

「いいでしょう。神名様のお望みとあらば私などで良ければこの身果てるまでお相手しましょう」

眼を煌々と輝かせちゃってまあ嬉しそうにしゃがって……恨むぞ  
今までメイドさんの欲求発散させてこなかった旦那様……！

「もうツッコマナイかな俺は。とりあえず！」

「そうですね。私達は言葉を幾度重ねるよりも」

互いに得物を構えて体勢を整える。一方には凄絶で蠱惑的な笑みが浮かびもう一方には深い諦念と倦怠が浮かんでいる訳だが、どちらがどちらと言つ必要は無いだろう、むしろ自覚したくない。

そして互いに死の間合いへと神速で踏み込み、





「てんめえこのポケ！ 命君に何しやがったあァ！？」

たぶんそこらの極道の妻にも引けを取らない形相で睨みを利かせている幼馴染一名に、

「うっうっうっう、腕が、左腕が無いってどっしょどっしょどっしょ  
！？」

「落ちついて神楽ちゃん！ ここは落ちついてタイムマシンを探そ  
うー！」

「うんっ！」

俺のスプラッター歩前の惨状に健やかに正気を失っている同じく  
幼馴染二名。ていうかお前らかよ風花に神楽になのハッサン。

「あれ？ おかしいなあ……ここはシリアス一色だった筈なのに何  
故か不愉快を感じたよ……？」

「ととと、とりあえずお前ら！ いいからこっから離れてろ！ 今  
は俺の戦いだ！！」

まあシリアス一色では無かったけど、俺が死にかけてるといっ点  
においてそこはあまり間違っていない。ただまさか胸中のなのはに  
つけた渾名三号を読み取られるとは思わなんだ。アイツどうしてこ  
ういうところだけ鋭いんだろ？ だから魔……おっといけね。多分  
これもバレるから言わんどこ。

しかし連中もこの十年で多少はこっいう怪我にも耐性が出来てい  
たのか、少しするとすぐにこちらに駆け寄ってきた。

「ってこっちくんだったでしょうがもっつ！」

「でもっ！ 命君が！」

「だから俺一人で何とかすっからどっか行けっばよあ！！」

「ッ！ この……バカア！！」

正直このままだとメイドさんの怒りが再び臨界突破しそうなので必死で遠ざけようとしていたというのに、風花に思いつきり殴り飛ばされた。序に風神の風のブースト付きでかなり痛かった。怪我人を少しは労わって欲しいんだが……？

「何で！？　なんでいつも頼ってくれないの！？　私達が弱いから！？　足手まといでしか無いから！？」

「い、いや、そうじゃなくてだな？　アイツはちょっと普通じゃないから危険だって」

「なら尚更一人でしかもそんなになってまで戦う必要なんてあるの！？　何で助けてって言うてくれないの！？」

それは悲鳴にも似た叫びだった。ただひたすらに思いの丈を、胸の内に溜めこんできた鬱憤を全て晴らすかのように風花は続ける。

「この十年でどれだけ私が命君のことを心配したのか分かる？　管理局に捕まってあまつさえ人体実験までされた命君が今度は行方不明って聞かされて、私が一体どれだけ心を擦り減らしたか！　それだけじゃない！　大嫌いで仕方なかった管理局で態々働いているの

だって、これまでの事全部命君に繋がることだと信じて私は十年待って来た!!」

「ふ、風花……」

「いつか命君の力になれるように！ もうあんな事が無いように今度こそ命君を守る人になって、隣を歩くんだって！ それなのにッ!!」

最早声は涙で掠れ切っていて、膝も崩れ落ちている。

それでも風花の勢いは止まらず、しゃくり上げながらも言葉を続けた。

「何で……なんで、命君は、私を、私達をひっく、頼ってくれないの……？」

何も言えなかった。

確かに俺が今立てている計画というか企みに神夜は巻き込んでい

るが、それらをまだ八神家に居る誰にも話していない。そんな俺がここでそんな筈が無い等口が裂けても言える筈がなかった。

場には風花の泣き声だけが響き渡り、なのはが風花を宥め神楽が近づいてきた。

「……風花ちゃんに先越されちゃったけどね、私も勿論同意見だしみんなだって心配していることに変わり無かったんだよ？ ちゃんとそこんとこ分かってた？」

「……分かって、無かったんだと思う」

「ハアー、そうだと思った。昔っからそうだもん、自分で出来る無茶はトコトンまでするクセして人には何にも教えない。悪い癖だよ」

思えばそうかもしれない。

限界まで溜めこんで、その末に俺は虐めの時に自殺まで考えていた。両親が止めてくれなければ今の俺は無かっただろうし、神楽が言う通り俺はあまりに家族を蔑ろにし過ぎたんじゃないだろうか。

自分の問題だから自分で解決する。だから家族に負担をかけたくない。何と響きだけは綺麗に聞こえる言葉だろう。

けどその実、それは家族を信用していないからととれる行動だし、何より家族に心配かけまいとしていながら友人である神夜には迷惑を掛けっ放しだ。これで自分だけで問題を解決しようなどと言っていたのだからお笑い者だ。

「……………なあ風花」

未だ泣き続ける風花に構わず続ける。今ここで土下座して謝りたいところだが、現状でのベストでは無い。今ここで俺に出来る最善、それは。

「あのさ、やっぱ俺は戦いにお前らを巻き込みたくは無だよ。怪我して欲しくないし、折角皆綺麗なんだからさ、下手に傷でも付いたら大変じゃん？」

「……………」

「だから、さ。今だけは俺に任せておいてくれないか？　これが終わったら多分、いいや、絶対迷惑だっと思って思うぐらい頼らせてもらうつもりだ。だから今だけは俺の我儘を許して欲しい」

謝れというならいくらでも地面に頭を擦りつけるし、死ぬのは無理でも心配してくれた十年を奴隷のように働いて返したって構わない。

でも今は、この時だけは俺がやらなきゃいけないんだ。

「……………」

「自分勝手に悪いんだけどさ、頼むよ」

「……………本当に、本当にこれが終われば頼ってくれる？」

「勿論だともさ」



まだ泣き腫らした跡が見えるがそれでも精一杯の笑顔を見せてくれたことが嬉しかった。直視するのが恥ずかしくて顔を背けて不機嫌MAXなメイドさんに向き直りながら最後に一言、伝えたかったことを口に出す。

「あのさ、これが終わったら二人で話したいことがあるんだ」

「へ?」

「ちよっ、おまつ!？」

「これが終わったらちゃんと話す! だからちよっとの間離れてる!?!」

言葉尻は恥ずかしさから強い口調になってしまったがちゃんと伝える事は出来た。後は勝って目的その一を達成するだけだ。

(ねえねえ命ちゃん)

「(何さねアークルさん?)」

(今のって死亡フラグっていうのじゃ……?)

何だそんな事が。

「(心配ご無用! 敢えて立てるフラグは成立しないってのは最近のテンプレだぜ!!)」

《そんな身も蓋も無い!?!》

珍しく、本当に珍しく火竜総勢からのツッコミだった。無論キララでは無い筈の刹那や裂神までもが。過去十年でこれが二度目じゃなかったっけ?

「……無粋な連中ですこと。あの結界を破れる者ならば相應の強者だと思っていたのですが、喚くだけの小娘」

ビュンッ!!!

「悪いな、待たせて。そいじゃさつさと終わらそうか」

「……何かあったので？　まるで先程までの突きの勢いとは比べ物になりませんが…？」

「なあに、メイドさんが空気を読んで待っててくれたお蔭で色々と頭を冷やすことが出来たからな。勝つ算段が立ったもんでね」

体力なんて底を尽きかけてるし、目だって結構霞みだしている。

でも負けない。負ける筈が無いと胸を張って言える。

「どうやら待って正解だったようですね。一体何があったのか、具体的に聞きしても？」

俺が調子を取り戻したことが嬉しいのか顔を歪ませながら問いか

けてくるので。シヤリと言って返してやる。

「お恥ずかしながら……愛の力ってヤツだよッッッ!!」

「まあ……それはそれは……!!」

そして、戦いはいよいよ決着へと傾いていった

第五十四話 「炎の竜VS白銀の狼 その3」(後書き)

次は何時更新できるのだろうか……？

スランプエ……

第五十五話 「炎の竜VS白銀の狼」決着」(前書き)

四回にわたって続いた戦いもついに終極!

やっとこを書けましたー!ー!

ではではさよー!

第五十五話 「炎の竜VS白銀の狼」決着

さっきまで苦戦していたのが嘘のように、俺の心境は冷静になっていた。

「おらあっ」

「…ッ」

「まだまだいくぜメイドさんよお！」

「それは嬉しい限りなんですけど……ねっ！」

・・・まあ、ちょっとばっかし熱くなっているように見えるのは幻覚だ。うん。

一旦風花達と会話できたおかげで考えがまとまったというか何と  
言うか。とにかくさっきまでの防戦とは違い今度は俺が攻める番で  
あった。

ドラゴンロッドを突きだし、左の爪で防御されると同時に右足を  
繰り出す。それを敢えて防御させることで棍を引く隙を作ってさ  
らにもう一突き。そして。

「さらに追撃イ！」

炎で出来た翼を展開させて羽撃たく勢いで叩きつけるように攻撃  
する。

「ッ！ 腕が使えなければその炎を使えないのでは無かったのです  
か？」



「明らかな驚愕を浮かべるメイドさん。やっとひと泡吹かせれた、かね？」

「その判断はあなたが間違っちゃいないんだけどさ。コイツは例外なんだよッッ！」

そう。一度冷静に考えてみればすぐに思い出せそうなことだった筈なのに、頭に血が上っていた状態では全く気が付けなかったこと。

距離を詰めに接近してくるメイドさんをさらに迎え撃つべく、今度は翼から竜の顎を作りだし棍とともに繰り出して双撃を防ぐ。

「今までは使っていなかった筈ですが……!!」

「俺も馬鹿なものでさ。コイツまで他の火竜と同じ感覚で扱いそうになってたよ。元々これは火竜が作ってくれた俺固有の炎だったのになぁ！」

元々この炎創竜に関してだけは九竜とは勝手が違うのだ。

魔導具 燈眼 によって開眼することができた俺だけの炎、よって印を描く必要等は無い。だからこそ刹那や崩は出来なくもこれだけは発動させることができるのだ。

・・・なして今の今まで気が付かなかったのか。常に冷静だとかそんなレベルじゃねえ失態だぞオイ俺。

内心自分に毒づきながらも攻勢を続ける。いくらこれで攻め手が増えたとはいえこちらの体力に余裕が無いという事実になんら変わりはない。

しかも炎を使う度に余計に体力と精神力が削られるからしんどくてしゃーない。いい加減に指先の感覚も薄くなってきたように思えるし。

このまま青竜の状態では埒が開く前に俺の方がダウンする可能性が高い。

だったら、一撃無いし強烈な一撃をもってしてメイドさんを静め

るよりほかに手段は無い。手持ちの札としては創竜と魔導具だけ。合体火竜による捕縛炎術は使用不可、序言うとあまり派手な能力を行使するとそれだけ精神の摩耗が激しくなるので、特殊能力付与の炎の創造は出来て一度つきり。形態変化だけならばあと十分は継戦可能、と。

「・・・こりゃ、ちよつと運任せになるかな…」

ちまちま戦ってるだけでは駄目だ。ここはいつちよ、俺の運を試すでしょうか。

「なあメイドさん」

「はい、何でしょう?」

鏢迫り合いからお互いの五歩以内の距離を保ちつつの会話。もう視界がグラついて輪郭が二重に見えているけど、だからどうしたという話だ。

「もうさ、俺体力的に限界近いからさ、次で決めるよ。だからメイ  
ドさんも次の一撃は

決死でかかってこいな？」

殺すなんて生易しいもんじゃなくて、

今まで遊びのような感覚で戦ってきたであろう相手に、次の一撃  
で戦闘おとじを終わらせようとの提案。案の定彼女はつまらなそうな顔で  
まだまだ戦いたいと表情いっぱい訴えてきたが俺はその視線を受  
けて敢えて青竜を、解いた。

「……一体、どういったおつもりで？」

「言つたる？ “決死” で来いつて。だから俺も決死の一撃のために  
構えるだけだ・・招来、 剣王」

蒼の軽鎧が一瞬で漆黒の重鎧へと変貌し、左手から落としたドラ  
ゴンロッドはその形態を俺の背丈ほどもある金と黒の大剣へと姿を  
変えて地面に突き立った。

「グッ!? があああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああ!!!」

そして両手を揃えるために創竜の能力で右手を擬似的にだが創り  
だす。尋常じゃ無い熱量にさっきの痛みがぶり返しそうになるが、  
それを気合いで押し伏せる。さあてと、これで決着と行こうか。

「……………お見事。それほどまでの闘気を見せつけられては、答えな  
い訳にはいきませんわ。私も全霊を賭して次で神名様を確実に

・・・殺

します」

俺が剣王を構えるのと同時に膨れ上がるメイドさんの殺気。俺は  
もうメイドさんを人間と認識できなくなっていた。

それほどまでの殺気、密度、威容。まさに餓狼という比喩が彼女のためだけにある言葉なのだと思うほどの寒気が彼女から放たれていた。

「よし、お膳立ては済んだ。正念場って緊張するなあ〜やっぱし」

賭けというのはいたって単純。

向こうが本気でかかってくるところにカウンターで剣王をブチ込む、これだけである。

決死の一撃であれば二の手を考えない筈だし、その一撃さえ乗り切れば勝ったも同然。

……ただ、それが出来ればという大前提がある訳だが。

当然のように青竜を解いた以上俺に速さで彼女に勝つことは出来ない。

これは、相手が間違いなく自分に突っ込んでくるという前提の元、  
『相手は俺に突貫してくる訳だし、最初から相手がどこに突っ込んでくるのか分かってるなら一振りだけ剣が振ればいいんじゃない？』  
という作戦にもならない拙い考えによる、無謀にも等しい行動だ。

まあかく乱されたらそこまでだが、口で煽ることで一撃ということ  
を強調しておいたので多分向こうも空気を読んでくれることだろう。  
そうじゃなかったら知らん。俺が死ぬだけだろうが賭けの代償  
なのだし割り切る。

「……………訳ねえだろうが……………！」

火竜の皆からは全員から止めると抗議の念話が殺到している。だ  
けど止めない。これだけがメイドさんを倒せる唯一の手段だ。少な  
くとも俺にはこれしか思いつかなかった。

ふと遠くに離れている筈の風花や神楽達の方に目を向ける。

俺とメイドさんの戦いの跡で結界の中が見るも無残になってい  
る公園のはずれの方で、神楽が心配そうにこちらを見ている様子や、  
なのはがいつでも飛びだせるようにレイジングハートを持っている

様子が窺えた。

「（アイツは……そんなに俺って信用無いかね……）」

そして。

「……………」

ひたすらに手を組んで祈ってくれている風花が視界に止まる。アレが俺の無事を祈ってくれているものだと思うと、何故だか剣王を持つ手に力が入るような気がした。

そつだ、俺はここで死ぬ訳にはいかない。戦いで死ぬなんざ戦士の役割であり俺みたいなもんがそんな大層な死に様など似合う訳が無いのだし。

それにだ、俺にはさっき風花に言った約束だってある。俺は……



「（もう一度死んでんだ……このまま一度も誰かに告白も出来ないまま死んでたまるか！！）」

気合いは十分、剣を振るのぐらい余裕。要は突っ込んできた相手にいっぺんだけ剣を振ればいいのだからさっきまでの攻防より遙かに楽だ。

勝つ。勝って当たり前のように思え、負けるなんて微塵程も思わない！

メイドさんが姿勢を低くしているのを見て、そろそろ来るのかとこちらも剣を中段に構えて待ちつける。狙うはカウンター一閃のみ！

「今まで楽しいひと時をありがとうございました、神名様」

折角こちらが気合いを入れていたというのにメイドさんから出てきた言葉は拍子抜けするのに十分に魔の抜けたものだった。

くアルSIDE

神名様との死合いは本当に楽しかった。

髪の毛の先から足の指の爪先にまで血が流れているような感覚、彼の突きが、炎が、蹴撃が、そのすべてが私の魂を魅了して止まない。ああこれほど生を充実したことがあっただろうか……

が。

『愛の力ってやつだよッッ！！』

アイツらだ。

折角の逢瀬を邪魔した小蠅共だ。アイツらが神名様と話した時から、彼は変わった。

確かに彼が自信ありげに言う通り、攻め手に炎を用いることで片腕というハンディを感じさせない程の苛烈さを魅せていた。

それが余計に嬉しくて、私はただ彼とただ二人だけの世界での死合いを強く望み、彼が強ければ強い程にその望みは際限無く膨れ上がっていく筈だった。

・・・彼が次で決めようと言っていた時、最初こそもう終わりなのかとメイドにあるまじき不満げな表情し出してまで抗議したが、彼から迸る闘気に感化されて、神名様が本気で私と向き合っているのだと知りそれが嬉しかった。

それなのに……ああそれなのに！！！！

何故貴方の視線はアイツらに向くのですかッ!?

どうしてこの期に及んでまであの喚いていた女の方に顔を向ける!?!?

何もかもが腹立たしい。何故苛立っているのかすらも自分で把握出来ない、ただただ神名様の視線を、それに込められているであろう想いを受けている女が、

この上無く殺したかった……

しかしと思ひ直す。

ここでもし私があの子を殺しにかかれば、おそらくものの刹那であのうるさく泣き喚いていた首から上を刎ねることなど造作も無いだろう。

だが、それを彼が見逃すとは思えない。

きつと彼の事だ。自分の命すら投げ出して助けようとするのだから。今の自分にはそのことが何故か簡単に予想でき、それがまた、どうしようもない程に癪に障った。

これからが、これからが漸くクライマックス終幕だといつののに、彼との戦いを前にしても尚この燦るような苦い思いは消えてはくれなかった。

だから、私はいざとばかりに構えている彼に声をかけた。どうしてもかけたくなくなってしまった。

「今まで楽しいひと時をありがとうございました、神名様」

「へ？ あ、まあ、いや、その、どうも？」

「私が作られたから、起動して彼此数百年ほどの間ですが、これほどまでに楽しい時間を送ったことなど今までありませんでした」

自分でも何故このようなことを言っているのかさっぱり分からない。その証拠に神名様も私のあまりに場違いな発言に先程まで充実させていた闘気や体に込めていた筈の力が一気に抜けた様な、拍子

抜けした面持ちで私の言葉を聞いていた。

「旦那様にお仕えしてからですとぎつと二百年ほどでしょうか？  
私はその中で初めて旦那様以外の異性で・・・異性で・・・」

「？」

そこまで言葉が出るのに、どうしてもその先が言えない。言ってしまうえば、私はこれから彼との決着を付ける事が出来なくなってしまう。私では無い、聞いてしまった彼がほぼ間違いなく動揺してしまうだろうから。

ああ、今初めて旦那様が仰っていた言葉の意味が理解できました……

ならば、ならばこそ本気で彼を殺しにかかろう。その感情は私には不要なものだ。

折角の旦那様のお言葉を無視するようで気が引けるような気もす

るが……まあいいだろう。これぐらいの我儘ならしても良いと思う。

「ふふっ」

「……さつきから何さ気色の悪い。言いかけた言葉を言わないと思つたら急に嘔き出すし……」

「いえすいません……まさかメイドである私が我儘を言うことになるなんて思いもしなかつたものですから……」

「我儘だあ？」

「ええ。私の生涯で一度っきりの我儘を、どうか聞いてはくれませんか？」

これから先、私がこのようなことを言う機会などあり得ない。まさしく、私の全霊を懸けた“お願い”だと思う。

数秒程軽く硬直した彼は何度か頬を抓って私が発言したことの真偽を確認していたようだが、ならばもう一度。

「もしも、もしも次の一撃で勝敗が私に傾いた時、私の我儘を聞いて下さい」

「おいおい何だよそりゃ？ 俺は決死でこいつて言っただぞ？」

「無論、そのつもりです。ですが、それは関係無く、です」

「意味が分からんが……別にいいぞ？ メイドさんの言うことぐらいなら死んでも叶えてやるさ」

まあ俺が勝つから無理だろうけど、と最後に締めくくってこれ以上の会話は要らないと右手の作りだした炎の腕で大剣を構える。

死んでから……ですか……ジュデッカに死体を持ちかえつて  
アルハザード  
故郷の蘇生術でも試してみましようか？ そうすれば私の願いを聞いてくれる筈。

……そうすればもう誰の邪魔も入らない。あの女も、例えば



那樣であることも。

私と、神名様だけの世界  
でたった一度の我儘。

これが私の望みであり、生涯

「ではグラウ……今こそ貴方の真価を示しましょう？  
名に恥じぬ一撃を……！」

神狼の

ともに全霊、ともに全力。

なれば、決着は互いの一撃によって決せられる……！

「………参りますッッッ……！」

「  
ッッ！！」

そして、世界の終わりを告げるような静寂の後、炎の竜と白銀の狼との戦いは静かに幕を閉じるのであった……

第五十五話 「炎の竜VS白銀の狼」 決着」 (後書き)

そーいえば合計評価の点数が何時の間にか五百を越えていました。今まで怖くてあまり見なかつたんですがその日すっげえ嬉しくて一人宴会をしました。

第五十六話 「こんな時だけの主人公属性なんていらねえ……」 (前書き)

最近、遅れることが常となってきました感が……

しかもこれからは実習に年末で身入りの良いバイトでさらに更新が

……

第五十六話 「こんな時だけの主人公属性なんていらねえ……」

あ~~~~~

……

「消えてえ〜……」

そんな後ろ向き加減MAXな発言をしてしまうほど、今の俺は滅

入っていた。

まああんだだけの戦いの後で死ぬとか冗談じゃないんだけど、それでも現状があまりに嫌過ぎる。

「ねえメイドさん？　なんで貴女が命君の看病とか言っただけで同じ病室にいるのかなあ？　邪魔だから消えてくれませんか？　もしくは死んでくれませんか？」

「嫌ですわこの駄猫。私は先日に戦いの勝敗により命様の忠実なるメイドとなったのですから、従者が主を労わるのは当然でしょう？」

「それがこの前まで腕を切り落として悦に浸ってたバーサーカーの台詞とは思えないんだけど私？　アレかな、メイドさんは頭がメイドインヘブン状態だからきつと脳内ハッピーなんだよね。うんうん、それなら仕方ないよ」

「ああああ、レディーたる者そのような口をきいてはいけませんよ？　……あゝ、いえ失礼しました。所詮駄キャットには高尚な私達の主従を理解など出来る筈がありませんわね」

「」  
「」  
ツー！  
「」  
メンチのきり合い

……あの戦いから一週間が経過した。

勝敗は俺の剣王がメイドさんの肩に峰打ちが決まり、戦闘不能にしたことで何とか勝利。

しかし代償として俺はまた体に風穴、しかも両手をまんま腹と右肺に喰らってしまった。

その後風花達の迅速な処置により何とか俺は一命を取り留め、現在は神夜に紹介された管理局に知られていない裏の病院に入院している。

「……なあお前ら」

「何ッ!? ていつか命君からも言っただけだよ! お前を見る  
と妊娠しそうになるから消えろって!」

「風花、それ女の子の言っただけいい台詞じゃ」

「命様。この者の殺害許可を。今すぐこの世から一片のDNAすら  
残さず、魂すら浄化して消し去ってごらんにいれましょう」

「アルさんも物騒なこと病院で言っただけじゃねえよ」

「……どうしてこうなった？」

俺が目覚めたのは戦いから三日した後だった。

目を開けると視界には風花と神楽とはやてとすずかの顔がドアッ  
プで広がっていて、目を覚めた瞬間に押し掛かれそうになった  
ところをなのはと包帯を巻いてはいたが、元気そうなメイドさんに



助けてもらった。

さんざん心配をかけたということで今度一人につき、一日奴隷な  
る罰ゲームをやる羽目になった。鬱だ。

そして、その中には何故かメイドさんもいて。

『私は戦いに敗れました。ですから私の身は全て神名様、いえ旦那  
様のものです。ですからこの者達から恥ずかしめを受けた際はぜひ  
私で……』

是非、その続きが激しく気になったけどそれは他の五人にせき止  
められたので聞く事が出来なかった。一体メイドさんは何が言いた  
かったんだ？

それはともかく。

まあ目論見とは少し、ほんのちよ……っただけ、計画

に支障が出た様な気もするがまあメイドさんにこちら側の言う事を聞かせるという目的は果たせそうなので多目にみることにした。

そして以降、毎日一日二十四時間全て俺が腕を片方使えない代わりに、メイドさんが俺の面倒をみるようになった。曰くこれもメイドの仕事とか。

そしてそれに猛反発したのがうちの幼馴染達。

殺し合いしてた奴を信用できるかと猛反論し、何時に無くすまで熱く弁を振るっていたのはちょっと驚いた。

しかしそれらをメイドさんは一蹴。何を言われても顔色一つ変えずに粛々と俺の世話をやいて、俺がお礼を言う度にありえないリアクションを返してくれた。

・・・頬が赤らむってどゆことなの……？

俺は間違っても殺し合いをしていた奴を相手にフラグなんて立てられない。敵にまでフラグを立てる、某ツンツン頭の高校生とは訳が違うのだ。

だというに彼女の態度はあからさまに今までのものとは異なり、いつも俺をみていた時のような狂気の回数が減り、代わりにまるで女の子のような仕草をとる事が増えた。

例えば。

『あっ、すみません神名様。私としたことが朝食のミルクを忘れてしまつとは……』

『別にいらないけど？ 俺朝はお茶派だし』

『……主に気を使わせるわけには参りません』

『いや気を使うとかそんなんじゃないって』

『こ、こうなったら仕方ないので、私から抽出したもので我慢していただく他……』

「ストップ、スト

ップ！！！！！ こん

なところで脱ごうとすんなあああああああああああああああ  
ああああああああ！！！！！！！！！！』

……まあこれが女の子っぽいかと問われれば間違いなく首を横に全力で振るのが普通だろうが、俺はその時の恥ずかしがっているようなメイドさんの顔を見てしまった。

元々顔立ちだけを言えば綺麗な方なので吃驚仰天てなもんだし、もしも運悪くそんな状況を幼馴染ないし知り合いに見られたら一生の恥だ。

そして現在、今では俺も彼女の事を愛称で呼ぶようになり（強制）、あちらも俺が旦那様と呼ぶなど言ったので、下の名前で落ちついた。んでもって冒頭の喧嘩になる訳だ。

「あとさあ、二人共」



「もしこれ以上喧嘩して騒ぐ用なら……」

「……騒ぐようなら……?」「」

「もう二度と口聞かないし、この病室にも入れない」

「そんな殺生なっ!?!」「」

「……何でそんなとこだけ息ぴったりなんだよお前ら……」

喧嘩する程仲が良い。そんな諺を思い出したけど、この場合たんに利害の対象が一致しているだけだ。

「いいな? わかったらもうここで騒ぐなよ。そして今すぐ俺のベッドから降りろ」

「……はい」

「……分かりました」

そして力無く頂垂れてシュンとなる二人。いや患者に跨るとか駄目だろ、常識的に考えて。

「そんなこんなで慌ただしくはありますが、何とかこちらはひと段落着きました。」

「そういつ訳だから、こっちはしばらく休むんでそっちの方頼むな」

「……………え？ 波乱万丈聞かされたと思ったら惚気っぽい戯言を聞かされた俺への言葉そりだけ」

「そりだけだけど？」

「おまつ、もうちょい頑張っている俺へ応援メッセージとか」

「お前男に応援されて喜ぶような素直な奴じゃ無いじゃん。だから  
こっぴどい言わねえよ」

病室には正座で二人を待機させて、俺は俺で今回の顛末を協力者の  
神夜に報告。

「まあ頼りにはしてるんだぞ？」

「そんな取って付けた様な言葉はいらねえ！」

我儘なやつちやなあー

「大体！ 折角他の人から貰ったキャラクターである俺の話がこれ  
からとか出番遅すぎだろ！」

「メタいことぬかすな」



大体、人様から貰ったキャラクターとか安易に動かせるような精神してないだろウチの作者……

「お前も今何かメタ発言しなかったか……?」

「は？ 気のせいだろ？ そんなじゃま頼んでたやつ頼むぜ?」

「あいあい。お前が回されてきた管理局の極秘施設の資料な。ちやんと調べとくから養生しとけよー。まあ二人も美女に看病してもらってるならすぐ良くなるだろうぜ?」

「てんめ今ぜってーニヤケてんだろ……!」

仕返しとばかりに思っくそ受話器を叩きつけて電話を切る。あの野郎また今度チーズの差し入れに行つてやつからな……!

・・・そして、俺は二人の待つ病室に戻つていった。アイツは二人とか言つてたけど、実際まだ三人はいるんだよなあ………はあ、

消えてえ。

第五十六話 「こんな時だけの主人公属性なんていらねえ……」 (後書き)

前書きにも書きましたが、ちよくちよく執筆自体は続けていくつもりですが、更新が遅れがちになるのは確定的に明らかになりそうです。

閑話 「命君の女難な日々」プロローグ」（前書き）

活動報告でも書いていましたけど、今回から数回に渡って閑話としてデート話をしようと思います。理由としては単なるネタがこれしか浮かばなかったというものです……

ではでは

閑話 「命君の女難な日々」プロローグ」

「祝！ 退院！」

・・・なんて、無邪気に喜べたらどれだけ良かったか……

腕の方は結局、焼いて止血したせいで細胞の劣化が酷くいくら魔法による再生治療と言えど繋ぐことは出来なかったので、現在神夜

に頼んで義手を作ってもらっている。

なんでも今はとある場所に入りに入っているんで手が空いていないようだけど、どうもその相手というのがかなり人体とかに詳しい科  
学者だそうなので、義手の製作を手伝ってくれているそうさ。

ん？ 科学者？

・・・まあ、何かあるような気がしたけど気のせいかな。とりあ  
えず、腕以外の怪我の方は柳による治療もあつたお蔭で今や完治済  
み。だからこそ退院できる訳なのだが、どうも素直に喜べないんだ  
なコレが……

「それじゃ最後の確認ね？」

「分かっていますわ。この勝負の勝者が今日から一週間の間、命様  
の所有権の順序を決める、そうですね？」

「一人一日」、つまりその日におけるみこと君の生殺与奪貞操を  
握る、そういうことだね！」

「待てや神楽!？」

正直スルーしていたかったが、不穏すぎるワードに思わずつつこんでしまった。

彼女らが殺気立っている理由というのは、俺が入院するにあたり心配をかけてしまった謝罪の意味も兼ねて一日彼女達と付き合い、その間俺への命令権を持つという俺の人権何ソレおいしいの? 的な罰ゲームのことだ。

退院してすぐにといい話ではあったけど、何も帰って早々にそんなに睨みあわんでも良からうつに。

八神家では現在、ヴォルケンの皆は仕事に出掛けていて爺ちゃんもザフィーラさんと家を出ている。軽く逃げられたと思わざるを得ない。

「でも何でメイドさんまでおるん? 何時またみこっちゃんを狙わんとも限らんし……」

「それについてはご安心を。私が命様を狙っているというのは皆さまと同じ理由でしょうから」

「それは安心出来る台詞とは言えないんだけど!？」

「落ちついて風花ちゃん。大丈夫、先に命君の所有権を手に入れて………うふふ」

「すずかちゃんが黒いよお………」

怯えているのはだが、だったら止めさせて欲しいと言わせてもらいたい。景品扱いの俺としては、貞操やら生殺与奪たら聞かされている時点でここから逃げ出したい気分なのだ。

って、そう言えば前もすずかから逃げ出してアルさんと殺し合いになったんだっけ? ……うわ、どっちみち不幸なのか俺……

…orz



「それじゃ……………行くでっ！」

『ジャンケン……………ポンッ！！！』

殺気立っている割には平和的な解決法であるが、俺の目にはそれ  
ぞれの背後に阿修羅像もかくやという迫力を持った鬼が見える。

そして、数十回にもわたるあいこを経て決着がついたようだった。  
ちなみにこの間、俺は逃げ出さない様に何時か付けられていた首輪  
と腕の拘束具のレプリカを付けられている。そんなに逃がしたくな  
いか。

「うっしやあああああああああ！！ やっぱりアタシってば  
サイキョーね！」

危ない？なネタに走っているのは神楽だった。ということはトッ  
プバッターはアイツか？

「うう…まさかこの私が三番手に甘んじるとは……！」

「まだ駄キヤットは三番手で良いじゃありませんか。私なんて最後ですよ……」

いつも病室で言い争っている二人だけど、基本的に仲良くなっているようだ。つまりそれだけ顔を合わせる機会が多かったとも言える。伊達に毎日二人とも病室で喧嘩していた訳じゃないようだ。甚だ迷惑だったことに変わりはないがな！

「なんや、私二番手とかなんか中途半端感が否めんのやけど……？」

「ふむ、私は四番目か……これはちよつと手を打つべきなのかな……？」

そしてはやてとすすかの二人はそれぞれ違うリアクションをとっていた。

はやては無駄に逞しい芸人魂が自分の中途半端な順に疑問をもたげているのだろう、どうも不満があるようだ。だがそれは今拘束されている俺こそが抱くべき感情だろう。何で家の中で監禁紛いな行為を

受けにやならんのだ、俺にそんな趣味は無い。

そしてすずか。彼女は一体どういった方向で成長してしまったの  
だろう？ その眼に映る俺を一体彼女はどうしたいのだろう？ 是  
非ともそれは胸中だけに留めておいて欲しい、嫌な予感しから  
ないから。

でもってもう一人。

「何でなのはまでジャンケンしてんだよ……！」

「にゃはは……ちょっと面白そうだったんでつい」

「つい、じゃねーよ！ お前まで俺を遣い殺したいのか！？ この  
悪魔……！」

こいつもたまに危険なオーラを出すけど基本的には抑え役を買っ  
て出ていてくれた良識人だったのに！

信用できるストッパーが不在の今、俺の明日は限りなくやヴァいことになりかねん。かと言って抵抗も出来ない。まさに八方ふさがり、どうしよ本当……？

「……で、もう今すぐにでも出掛けるのか神楽よ……？」

「うん、そうしたいのは山々なんだけど、流石に病み上がりのみこと君を退院当日すぐに連れ出すほど常識を忘れてるわけじゃないよ」

「だったらその病み上がりを拘束するのは常識の範疇なのか？ 小一時間程語り合いたい命題だ。」

「だがその気遣いは素直に受け取っておきたい。明日から明確な不幸が始まる以上、今は少しでも多くの休養が必要だ。」

「それでは命様。後で昼食をお持ちしますのでお部屋でお休みになられては？」

「ああ、そうさせてもらひよ……」

アルさんに立ちあがるのを手伝ってもらいながら部屋に一人戻る俺。

……背後に猛禽のような目をした幼馴染達の視線をそこはかたなく漂う殺気とともに感じながら……

~~~~~

命が部屋へと戻り、各自が各々の家事や仕事をしながら彼女達は来たる命の所有時の行動の計画を練っていた。

まずはトップバッターの神楽だが、自室のベッドの上で幸せそうに悶えながらああでもないこうでもないああしてこうしてそのまま……ポツ。

「キヤ　　！ 私っては何考えてるの　　！？ でもでもそういうこともあってもいいっていうかむしろバッチリ来いというか　　！！」

……まあ、前世から態々この世界に命を追ってきている彼女だ。これぐらいの暴走は仕方ないだろう。多分。

そして二番三番と続くはやてと風花であるが、居間でテレビを見ながらお互いにどんな事を命令するのかを話しあっていた。

「やっぱりアレやね。みこっちゃんに『今日は家に帰りたく無いの…

…』とか言って反応を見てみたいな私的には「

「でもそれってもし、万が一億が一にでも受け入れられたらどうするのさ？ いざ本番ではチキンなはやてちゃん？」

「うづうづうっさい！ 私だってもしみこっちゃんがその気やったら………」

「わあー、顔真っ赤で可愛いよはやてちゃん」

「棒読みで言われても嬉しくないわっ！ ていうか億が一とかどんだけ低い可能性や！！ それやったら風花ちゃんこそ単なるデートぐらいにしかならんとちゃうんか！？」

「何を！」

比較的、他と比べてまだ少しぐらいの抑えの効くはやてとの会話のお蔭でぶっ飛んだ発想をせずに済んでいる風花。こうなるように会話を仕組んでいるはやてには脱帽ものだろう。

もしも彼女をすずかないし神楽と一緒に置いていたらまず間違いない思考が下の方に向くだろうし、アルと二人にしようものなら病

院での再来になりかねない。

八神家を守るため、そして命の平穩（貞操的な意味で）を守るため、夜天の主はその灰色の脳みそをフル回転させるのであった。

．  
．  
．  
そしてもう一組の幼馴染コンビであるなのは&すずかはということ。

「珍しいね？　なのはちゃんが服を買いに行こうって誘うのって。いつつも仕事のことばかりでこういうの興味無いのになって心配してたんだから」

「私だって女の子だよ！　お洋服を買ったりするぐらいするよ！」

一応ここにある程度の服は持ってきてはいるものの、それでも基本管理局での囑託の仕事が楽しくなっているのはあまり娯楽に頓着しなかったので他の八神家女性陣と比べても私服の数が少なかったのだ。



それで今度の命の所有権が回ってくる時、一応衣服ぐらいはそれなりのものを持っておこうと思ったのは一番センスの良いすずかに同行を頼んで、現在クラナガンのデパートに来ている。

「ほら、これなんてどうかな？　なのはちゃんって足細いからこういうデニム系でも良いと思うんだけど……？」

確かに、幼馴染の中では比較的細身である彼女にはそういった格好も十分に似合うのだが、なのははそのデニムを見て不満げな顔を浮かべた。

「…さつきからすずかちゃん。ずっとズボンだったりパーカーだったり、確かに可愛い物を選んでくれてるけど一つとして女の子っぽい感じの服を選んでくれないのは何でかな？」

自分としては初めてのデート（命からしてみればそんな甘美な響きのものでは無いが）なのだから、少しでも普段とは違う女子っぽいおめかしもしてみたいというような乙女チックな考えが無きにしても非ずな訳だが。

だからずかが選ぶような実用的だし確かにセンスを感じる物であつても、イマイチ納得できないものを立て続けに出されると流石のなのも訝しむ。

「何を言ってるのなのはちゃん！　なのはちゃんが女の子っぽい服装しても相手はあの命君なんだよ！」

「知ってるよそれぐらい!？」

まさか彼女は自分が出掛ける相手すら分からないとも思っていたのだろうか。ふと胸元にある相棒を気にしながらこれはOHANASHIが必要かな？　などという一部の訓練生からしてみればトラウマのような事を平然と考えてしまう。これが悪魔と呼ばれる所以であることに、未だ本人は気づいていないが。

「もしそれで命君が普段おめかししなくてふつーな格好のなのはちゃんの意外な一面を見て思わずキュンとしちゃったらどうするの!？」

「この人本音漏れてる

!？」

すずかからしてみれば、古くから付き合いのある男性の中でも少ない己の生い立ちの理解者でもあるし、自分個人としても好みの外見及び性格である命は、最上物件とまではいかないが、そんなまだ手のかかる彼だからこそ自分のものにしていろいろと、そうイロイロとしたいと思っている。

具体的にはざqwxせcなアレをdrvftbgynふjみk、  
つてな感じた。

だからすずかは敢えて地味目かつセンスを損なわない服装ばかりをチョイスして、異性を意識させない服装にしておうという魂胆だった訳だ。きたないさすがすずか汚い。

そしてなのはのツッコミが冴える中、再び彼女達のショッピングは続いていくのであった。

それぞれがそれぞれの想いを持って臨む今回の罰ゲーム。

「……こういったことは初めてですが……成程」

この中で唯一命との接点が戦いしか無いアルは、縁側で庭を眺めながらポツリ呟く。

自分には今まで無かった平穩、そして自分でも把握しきれない感情。

彼と戦い、負けて、それから触れあったその他の者達。

それら全てが私を変えた。けれど、それは決して不快な物では無かったと、自信を持って言える。

天頂に太陽が差しかかるうとして見ながら、自分の番になったなら、今感じている全てを彼に知って欲しい。あの戦いを経て、この出会いの切っ掛けをくれた彼に自分の全てを知ってもらいたい。

」  
「さて、ではそろそろ厚食の準備でも・・・」

乙女達の、それぞれの想いは果たして、どのような行方を辿るの  
だろう・・・

それはきっと、神さえも知ることの出来ないものなのだろう

閑話 「命君の女難な日々」プロローグ」（後書き）

や・・・クライマックスヒーロー（PSP）を買いに行かなくち

閑話 「命君の女難な日々」(一目) (前書き)

今回からの閑話についてですが、命君視点ではなくヒロイン視点で  
侵攻、もとい進行させていきます。

ある意味侵攻でも間違っていない辺りうちのヒロインの肉食っぷり  
を表現できるように頑張りたい所です。

閑話 「命君の女難な日々」一日目」

「おはよ〜ごぞいませ〜す……」

現在、私がいるのはとある一室のドアの前であります！　そして  
時間は午前五時！　早朝だね！

「そして〜、ここにいる人物こそ、本日私と一日イチャイチャが決定しているみこと君が〜！」

テレビでよくやるアレを思い浮かべてくれれば、今の私の状況を理解して頂けると思う。要はドッキリである。



ドキバクドツカンな胸の高鳴りを感じつつ、逸る気持ちを抑え音を立てないようにしながら部屋に侵入する。こう書くと何か響きが犯罪チックなのは気のせいですよ皆さん？

「ほお〜〜！ 前は風花ちゃんが居たから一人占めできなかったみこと君の寝顔ゲットだぜえ〜！」

そこには布団を規則正しく被ったまま寝ているターゲット。そして今回のミッションを遂行すべく私は早速行動を起こす。

「（気づかれるな神楽！ そお〜つと、そおおおつと、お布団の中にお邪魔しまつま……）」

折角今日一日彼を独占できる権利を得たのに、寝ている時間など勿体無い。ていうか寝ているからこそこそうしたチャンスが巡って来ている訳ですけど。

そうこうしている間、面白いように大人しい彼の隣に潜り込む事

に成功。彼此……うわ実際に年数で数えるとこれだけ密着した回数なんて数える程も無いかも……

「（でも　今こうしてみこと君が私の目の前に）」

腕の無い方に回り込んでいたためより体に密着できるといふ我ながらこの知略！　小娘とは年季が違うのだよ、年季がっ！

それにしても。

「っん……………すう……………」

「……………」

寝息を立てる彼を見ているだけでこう、何か……体の奥で何かが溶けていくような、こう暖かくなっていくような感じがする。

無防備な寝顔は見ているだけで顔が熱くなるし、彼の熱にじかに触れているという事実は私に幸福感を齎してくれる。

ふと、あちらが寝返りをつつてこちらと面を合わせる形になる。

「すう……………む……………」

「……………ふふっ、止めてよね……………」

あまりに無垢なその顔は、私の中の黒い情動を刺激して已まない。

だからそんな顔をしないで、これ以上

「（ヒヤッハー！ もう我慢できねえー！）」

無理でした。アダルトチックでエロチックな感じで行こうかなあーなんて思っていたんですが、やっぱり無理でした。

今のこの状況を分かり易く説明すると、空腹のライオンの檻に捕えられた七面鳥。我慢なんてできる訳無いよね、うん。だからこれは仕方が無いんだよ。

起こしてしまうかもしれないというスリルにさらに体が火照り、私は大胆にも布団を剥ぎ取り彼に跨った。・・・よし、まだ起きて無い。

「ジュルリそ……………うっわ、今の私変態さんだあ……………」

思わず涎を飲み込んで、冷静に自分を分析してみる。

寝ている異性の上体に跨って興奮している私、どう見ても変態だけれどだからどうしたという話。今の私を止めたければその三倍は持つてこい！何をかは自分でもよく分からないけどね！

彼のパジャマのボタンを外す。いつもは自分で付けているけど、

やっぱり片手ではやりにくそうなので今日は私が脱ぐのを手伝ってあげる。

そして露わになった彼の上半身には何時かの戦闘の傷が痛々しく残っていた。

胸の傷は十年前の、肩とお腹のはアルさんに付けられたもの。正直みこと君の話が無かったらこの家にあの人を置くんなんて絶対に許さなかったけど、まあそこは我慢しよう。今はそんなことよりも大事な事があるじゃないか。

「んっ……………みこと、くうん……………」

露わになった上体に顔を押し付けてチロツと舌を出す。それだけで彼を自分のものにできたようでまた体が熱くなってくる。

数回舌を這わせた後、私はおもむろに自分の着ているシャツのボタンを

「……オイ」

外そうとして、万力のような力でその手を止められた。

「あ、あははは……お、おはよ〜……」

「ああ、お早う。そしてこれはどういう訳かな？ かな？」

それは違う人の台詞……普段ならそうツッコむはずの私だけど、彼から発せられている不可視のオーラに宛てられて肅々と彼の上から降りる。これからが本番だったのに……

「その顔は反省してないな？ お前は人の寝込みに何してんだコラ  
アアアアアアアアアア！！！」

……その後しばらくの間、私は他の人が起きてくるまで延々と彼の説教を受け続ける羽目になった。うう、こういうプレイは好きじゃないよお……



「ねえ、みこと君、後何分？」

「分じゃない、後一時間だ」

「足の感覚が消えてからそろそろ一時間程経過している件について  
――！」

「却下だ。神は言っている……寝言は寝て言え、と」

今更そのネタは古いよー！ と叫びつつ大人しく正座して反省させられています。

唯一の救いは、その監視がみこと君だということでしょうか。お蔭でこうして彼と二人つきりで会話することができます。これでも痺れて無くてイチヤイチャ出来たらなお良かったんだけどなあ

「…そういえば」



そろそろ膝に血流に異変を感じ始めた時に、ふと思い出したようにみこと君が声を上げた。

「な、に？ どうした、の？」

「いやそんなに苦しそうなら話さなくてもいいぞ？ それにもう足崩しても良いってさ。さつきメールが来てそろそろ解放してやれって、さすがから」

「折檻の基本はさすがちゃんですね、分かります……ぶっちゃけ立ってない」

最近のさすがちゃんの変わりっぷりに嘆きを覚えつつ立とうとするも、完全に足に血が行きわたっていないため全く動かない。

「ほれ、手え貸すから頑張れ」

「何と優しい言葉でしょう…！そこはお姫様抱っこがテンプレですぜ旦那」

「隻腕でどろしると言っただ」

とか言いつつも肩を貸してくれる貴方が大好きです。ガチで。

「んで何処行く？ とりあえず俺も朝食食べてないから居間でいいな？」

「うん。私も折檻の疲れとかもあるからお腹がもつ」

「だったらあんな真似しなけりゃいいのに……」

「それは無理だよ」

キョトンとするみこと君にの耳元に口を寄せて囁く。確かにこんな真似をすれば皆から怒られることぐらい分かりきっていた。それでもやらすにはいられなかった。だって、

「みこと君は、私のものなんだって、その印を付けたいなあって。そう思っただら…ね」

例え今日一日だけの独占権だとしても、彼を誰にも渡したくは無  
いという気持ちはもう二十年近く抱いている私の芯になっている感  
情の一つだ。

あの喪失感を知っているからこそ、もう二度と、後悔はしたくな  
い。

だから我慢できなくなっちゃった…、そう言って最後に耳をあま  
がみすると思いつき顔を赤らめて怒られた。一々可愛いなあコン  
チクシヨーめ。

「ったくもう……で、今日の俺は一日お前の奴隷な訳だが、一体  
何をするんだ？」

居間に到着して私を投げ落とす様にソファーに落として、未だに

赤らんだ顔を隠そうとそっぽを向きながら質問してくる、私の一番愛しい彼。

そう、だな……うんっ。やっぱりこれだね！

「じゃあそじゃあそー！」

「お、おう」

「日向ぼっこしない？」

私が見つけた、ミッドでも多分私しか知らない海が一番綺麗に見える場所。

そこで私が昨日腕によりをかけて作った料理を持って行って、そして話そう。

何でもいい、ただお互いが笑い合えるような、そんな時間を共有したい。

「すっごく良い場所があつてね！ それで今日は天気も良いし、そこでのんびりしたいなあって……ダメ？」

「……ダメ、じゃない。それに俺には拒否権なんてねーしな」

上目遣いで頼んでみると、案の定恥ずかしがってくれるみこと君を見て笑いながら、私はここ何年かで一番穏やかで幸福な時間に胸を躍らせるのだった。

閑話 「命君の女難な日々」(一日目) (後書き)

ば ……ヒロイン視点で書くの想像以上に疲れる……頑張らね

閑話 「命君の女難な日々」二日目」(前書き)

二日目、今回ははやてさんのターン！

・・・だというのに何故か甘々な展開が書けなかった……って  
何をSウボアアア …… (黒い球体に呑みこまれた為途中で文  
章が途切れている…)

閑話 「命君の女難な日々」二日目

「ちえ、神楽ちゃんのせいで後の人が寝込み襲えんかったやんか」

「それを何故俺に話すし」

神楽ちゃんがふやふや顔で帰宅して『何事！？』とみんなが騒然となつたけれど、別に私達が心配するような事など一切無くたんに一日中みこつちゃんと話せて何か幸せ過ぎたらしい。ある意味、とても幸せな作りやな』と思わなくも無いけどもそれで後に控える人間が助かったので良しとせな。



「んで、今日ははやてさんな訳ですが拙者は何をすれば良いのでござるか？」

「なんやそのキャラ立て。業界ナメとるん？」

「ハント、安易な関西キャラに走った魔法少女に言われたくないね！」

「言いよった！ この人私が気にしとったことを平然と言いよった！？」

「何度でも言っつてやろうか？ この本当に関西圏出身が怪しい魔法少女〜！」

「やめて〜！ まだ関西関連なら耐えられるけど魔法少女とか、もうそないな歳ちやうのにい〜！」

「やーいやーい」

「……一体私達は何をしとるんやろうな？」

実は今回のみこっちゃん奴隷週間の暗黙の了解として、“あらゆる干渉を禁ず”というものがあり、例えばサーチャーとか誰かを買収して様子見などをさせた場合問答無用でみこっちゃんの所有権をはく奪される。

なので今現在我が家には私とみこっちゃんの二人つきりな訳やけど、なんでこんな子供じみた言い合いをしとるんやろ…？

「ふう……やっぱりはやてと遊ぶの楽しいなあ」

「そこは“と”じゃなくて“で”と違うん？」

「……言い換えて欲しい？」

「止めて！ 変な気遣いされるとムシヨーに腹立つから！」

「だって、たまにはこうしてお前のガス抜きでもしてやらんと破裂しそうだし」

「へ………?」

今までのちゃらけたやり取りから急変して、いきなり真顔でそんなことを言われて混乱する私を見ながら苦笑気味に彼は続ける。

「いや何、俺が寝込んでいた間にも皆には色々負担かけちゃったし、それに何より十年もの間お前達の将来を縛ってしまったようなもんだし、俺に出来ることなら何」

「ちょ、ちよつと待って!? 何いきなりマジな感じで……それに将来を縛るって」

そう話した彼の顔は笑ってはいるのだが、何処かすまなさそうにしている鬨りが見てとれた。

「だってさ、本来ならお前も神楽も風花もすずかもなのはも、他の皆だって俺が管理局に捕まりさえしなけりゃ普通の生活を送れた筈だろ? 魔法なんて無かったってお前達なら何だって出来た筈だ。そ

れを俺のためなんか十年も……だから俺は少しでもお前達力になって、その、何だ……まあ、そういう事だ、うん」

言葉尻は小さくなっていったけど、彼が抱えていた想いが何となく理解できた。今の彼は、昔の私に近い。

そう、まだ私が足が不自由だったあの頃に……

『ごめんなあみこちゃん。私の代わりに大きな荷物持ってもらって』

『謝るなら普通ヴォルケンの分だけ増えた食材一週間分も買っなよ！?』

『いやあ、ほら、私って買いだめするタイプやし?』

『知らんがな!? ったく……まあいいけどな』

『おっ? これが世に言うシンデレラという』

『お前がこうして頼ってくれるのなんて少ないしな、そんなぐらいな  
らお安い御用ウォーリア』

『……おたくはどうしてしょーもないネタを挟むかな』

……今思えば、あの頃の私は自分だけが体が不自由な事に多少  
なりともコンプレックスを感じていて、皆と一緒にいられるように  
多少の無茶は普通にやっていたように思う。

だけどそれはみこっちゃんやじっちゃんにもバレていて、だから  
普通に接してくれるけどたまに私がお願いをすると二人共嬉しそう  
に笑ってくれた。

だけど私にとってその善意が痛かった。

私は何も返してあげられないのに、こんな体で何一つ満足にして  
やれないのに優しくしてくれた人達に何の恩も返せなかった事が、  
私には何よりも痛く、辛いものだった……

「 てみつ！」

だから、私はそんな過去の自分を彷彿させる彼の頭を思いつきりぶつ叩いた。ちよつと威力を上げるために久しぶりに土星の輪を使つてみたけど、勘は衰えていないようやね。

「……………じぶつ」

「……………てへつ」

「てへつ……………じゃねえぞこらああああああ！！ あとちよつとで死ぬかと思つたわ！ 少しでも猫が見えたわ二匹！！」

勢い余つてハリセンではなくデバイスを起動させてドツいてしまつたけど、そこはやはり超人みこつちゃん。頭から血を流していても冴えるツツコミは私の特訓の成果と言える。

「何が特訓だこのダアホ！ つーか何でいきなり殺しにかかった！

「？」

「あんなあみこっちゃん？　今みこっちゃんが言ってくれたことなら、既に私達は返してもろってるんよ？」

言葉の意味が分からずキョトンとしている彼の頭の血を拭ってあげながら、私はできる最高の笑顔で語りかける。

「だってそやる？　私達が十年も待ってた人が、こうして元気に帰ってきてくれて、そして今もこうして私達と一緒にいてくれる。これ以上を望んだらバチが当たる」

「いやでも……」

「昔みこっちゃんが言ってくれたんやで？　『一緒にいてくれる』とが一番の恩返し』やって」

「あ………」

私がまだ自分が何も出来なくて、みこっちゃんやじっちゃんに何かしてあげようと躍起になっていた時、私は一度彼にどんなものが欲しいのか訊ねた事がある。その時彼が言った言葉は今でも忘れることなく私の胸に生きている。

『なあなあ、何かしてほしいこととか欲しいものとかないん？ 何でも言つてやー』

『急に言われてもなあ……そうだな……』

『何ならはやてちゃんの将来でもええで？』

『それなら誰かが高値で買ってくれるのでも待ってる。でもそうだな、それに近いかもしれんなこれってば』

『おつおつ、何や。お姉さんに言ってみ？』

『一緒にいてくれ』



『…………告白？』

『違い。ただ、折角こうして家族として一緒に暮らせてるんだ。ならせめてその間ぐらいは互いに元気で一緒にバカやりながら笑ってる方が良いに決まってるだろ？ だから、それまでは一緒にいてくれ』

その言葉が嬉しくて、そしてそれを真面目な顔で言われたことが恥ずかしくて私は彼から目を逸らし、少し意地悪な返しをした。

『それもいいかもなあ。でもそれじゃ私の気は済まんし、それに何より私がそんな長いこと生きてる保障なんて』

『いるかなモン』

『酷いつ！？』

『もしお前が死ぬまでに結婚出来そうに無かったら俺が貰うとしてもだ、俺や爺ちゃんからしてみればお前が元気で居てくれる事の方が何倍も嬉しいし、それに』

『……………それに？』

『長くないとか言うな。お前がこうして生きてくれてるだけでも俺達は十分に報われてるって思ってたんだからな』

「……………と、こういつやり取りが……………って、どないしたん頭抱えて？」

人が折角昔の美談を語っていたというのに、みこっちゃんは何故か頭を抱えて悶えだした。

「恥ずかしッ！？ 俺ガキの頃からそんなクサイ事言ってたの！？ 恥ずかしいッ！…！」

「まあサラッと貰ってやる発言とかもあったしなー」

「止めて

！俺のライフはもうゼロよ

！！」

「フッフッフ、まだ私のバトルフェイズは終了しておらんで！さらにドロー！今度は“ヴィータと喧嘩して落ち込んでいた時の会話”！」

イヤ  
！！とんどりうって悶絶している彼を見て意趣返しが出来たことに満足して、達成感に思わず汗を拭う素振りをしてしまう。何かやり遂げるところしたくなる事って、皆もあるやろ？

「恐ろしい……恐ろし過ぎるぜ俺の黒歴史……！」

息も絶え絶えになっているので流石にこれ以上の追撃は控えておこう。また今度、今度は他の皆がいる前で自慢してやらんと……  
・にっしし……！

「お前今また何か善からぬ企みしなかったか？」

「いやいやー。こんな清纯乙女を体現しているはやてちゃんが権謀術中を張り巡らすような黒狸に見える……って誰が狸や！」

「完璧に自爆なのに逆ギレされた!？」

こうして、私は折角の一日を彼との他愛無いやり取りだけで終わらせてしまうことになるんやけど……うん、悪くない一日やったな

閑話 「命君の女難な日々」 三日目・クリスマス特別版（前書き）

何日も遅れていながら何がクリスマスだよとツツコミが聞こえそうなんです、クリスマスで家族との団欒を大事にしたいのもありますし、少々病院にお見舞いに行ったりと忙しくてクリスマス当日に終わらせることができませんでした。本当にすいません！

だからという訳ではありませんが、私の不満的なナニカが爆発して今回のものが出来てしまったためいつも以上に覚悟を持って読んで下さい。

・・・いつもの倍酷い出来だと自覚はしていますハイ…

閑話 「命君の女難な日々」三日目・クリスマス特別版

「うあああああ！ 作者あああああああああああ  
ああ！！！」

どうしました！？ 初っ端から猛ってらっしやるようですけ  
ど風花さん！？

「折角クリスマスという美味しいイベントがありながら私の出番を  
そこを出さなかったか説明しろやゴルアアアアアアアアアアア！  
！！！」

え？ そりゃまあ私だって久々に帰郷している訳なんですし  
ゆっくりし

「お前の都合なんざ知るか

！！！！！！」

「しばらく死ねえ！くお待死ぬう！？ちくださギヤアアアアアアアア  
ア……い

「……なんぞコレは」

しばらくした後、音が止んだのを見計らったかのようなタイミングで命君がやってきた。私は返り血を拭いながら笑顔で、

「うん？ 何って、食肉を捌いてイタダケダヨ？」

「いやおかしいだろ！ さっきまでこの世の物とは思えないレベルの断末魔が聞こえてきたし！ 小説だから伝わりにくいけどここに

モザイク必須でお子様には見せられないよ的な物体が!!」

かゆ……つま

「ほらあ！何かヤヴァいウイルスに侵されたりビングデッドみたいな事言ってるじゃん!!」

もー、命君つてば小さい事を気にしちゃ駄目だよ？

「それはね？ただの息を吸って吐くだけのキーボードを打つための存在なんだからいくらポコポコにしても罪にはならないしすぐに復活するよ?」

「そんな頭の出来が悪い子供を諭すみたいに言うな!? お前のその顔と体中に付着している血痕が冗談じゃなく怖いんだよ!」

「そんな…っ。体中だなんて……エツチ」

「いい加減にしろおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!… とりあ



えず柳、柳！ このままだと風花の暴走がマツハでヤバイツ！」

（う、うんっ！ 任せて！ このままじゃ今日のみことくんの貞操もマツハだもんね！）

「それはどうでもいい！ イヤ良くは無いけどそれよりも早く作者に措置を！..！」

気にしなくても良いのに、やっぱり優しい命君はあんなでも放っておけなかつたみたいで柳さんを召喚して急いで蘇生措置をとっていた。もう半分どころか八割がたはダメだったと思うけど、そこは作者補正というかギャグ的なノリだったようで何とか復活した.....チツ。

舌打ち！？ まさかの舌打ちですよ私！？

「いやまあ、アンタがもうちょい頑張れば良かったって話じゃないのか？ そのまじやっつて出張してくるとかメタも甚だしんじやないのか？ また批判きたらどうするんだ？ 『やった、久しぶりの感想ぎゃあああ』っていつかの再来になっても俺は知らないからな？」

止めてよ！ それ以上私の傷口を抉らないでよ！ それに私だつて大掃除の疲れとかテレビとか皆で折角集まれているのに一人執筆とかは流石に寂しいものが

「黙れ元々一人暮らししてるくせに女々しい！」

そんなに怒りますか風花さんいや風花様：

「当たり前だツッ！」

だつてクリスマスだよ！？ 聖夜とかいって恋人達がくんずほぐれつしてたり、小さい勇気を振り絞つて告白してそのまま勢いでくんずほぐれつしたりできる絶好のチャンスなんだよ！？

「それを潰された私の気持ち分かる！？ 日時的にもここはクリスマス更新来るなど期待していた私のあの絶望感が！」

「いやその前にお前の回想おかし過ぎるだろ。何でどっちも如何わしい表現がついてるんだよ。何で告白からそこまでワープ進化してんだよ」

乙女補正？

「そんな乙女はいねえ！　それは乙女と言わねえ！」

「とにかく！　クリスマスを逃した私以下すずかちゃんとかなのはちゃんとかその他の怒りを込めて先程のリンチと言う訳なんだよ」

この隙の無い論理展開に命君は感激したように言葉を失い、ワープロ打ち機は膝について私の完璧さに慄いていた。

「いや滅茶苦茶呆れてるだけだけど……」

私最早生き物ですら無いんですかそつですか……

何か一人と何かが喋っているようだけど、今日は私の日なのにこんなことで時間を潰すのはやっぱり勿体無い。さっさと出掛けるなりして楽しまない！

「それじゃ命君！ 今日私と街の方にいかない？」

「無理だろ」

「……」

即答されて私の めのまえは まっくらになった！

何で？ 何でそんな冷たい事を言うの？ 私がメインじゃないから？ メインヒロイン以外には冷たくして好感度を下げようと、そういうことなの？ なの？

少しは言葉を選んだ方が？ 何だかキャラ崩壊著しいんですか…？

「いやアンタも何時までいるのさ？ いい加減バッシングが・・・」

いえいえ、今日ここに批評覚悟で来たのは風花様いや風花お嬢様のためを思ってたのですよ

「だんだん謙ってないか？ それで風花のためって一体・・・」

何だか遠くで話し声がきこえるようにでもみことくんにきらわれたわたしにはかんけないよお〜

「……スマン。方法があるならそれを頼む。いい加減にしないと風花がヤバイ」

分かってますって。流石に指名手配をされてる人間が街をうるつくとか無理ですしね、そこを都合主義で何とかするために出張ってきたんですし

「いやまたメタい発言だなオイ!？」

ねー  
ではさようなら〜これからキーボードを打つ作業に戻ります

「って! おいいきなり何帰って……って、あ」

……どうしよっかな? このままみことくんにきらわれたわたしはかたくをついでごくどーくんになっておとうさんみたいなりっぱな「お〜い、風花さ〜ん?」  
ツツツ!?

一瞬本気で思考がゲシュタルトなクライシスに見舞われかけたけど、そこを何とか踏みとどまって声のする方を向いてみるとそこには、

「…作者が『それなりに変装しないとバレるでしょうから』ってこんな風にしてくれたよ。これを使えば普通に街に行けるからさ。だから機嫌直していこうぜ?」

・・・いつもと違う命君がいた。

管理局に知られている命君の格好が・全身黒の改造タキシード・両腕を拘束されている・首輪だけど、今では腕なんて片方しか無いし服装だって自由に変えられるからその特徴のほとんどが無いと言ってもいい。

だけどそれでも一応の用心ということまで作者が命君に施した事、それは私にとってのクリスマスプレゼントだった。

まずいつもは無造作に伸びている髪がキチンと整えられていて、キリッとした印象を受けた。普段の三割増し以上にカッコ良くて鼻から愛情が溢れだしそうになったのはここだけの内緒の話。

そして服装もいつも地味系で固めている命君シャージとかシャージとかシャージとかの今の服装がこれまたツボだった。私を実家で見慣れているようなスーツ姿なのだけど、ホストのように色っぽいのに何処か清潔感を感じるような、現代風の感じがとても映えていた。

「しかも今回だけでもつ義手もつけて貰えたからな。これで怪しまれずにm「命、君…?」「ん? ってうおっ!?!?」

辛抱堪らなくなった私は思わず彼の胸元に顔を埋めてしまった。とても今のおしゃれをした命君と向き合うだけの勇氣は無く、こうでもしないと顔が爆発しそうな程に赤くなっているだろうから。

「あ、あの…出掛けるなら早いとこ行こう? 一応今回のこれはクリスマス特編でことで他の皆には知られていないけど知れたら後が怖い」

「……ん。ちょっと待って、もうちょっと」

確かに、私だけが特別扱いされたことがバレたら後の皆を刺激しかねない。特に一名程動きが読めないなので油断も出来ない。

分かっているならさっさと動くべくなのだけど、想像以上に暖かい彼から離れることが億劫になってしまった私は悪く無い筈だ。これも全部命君がいけないんだ!



・・・その後、私が正気に戻って着替えて家を出るまで大体一時間  
間を要した。

クラナガンに出て一つ思ったのは、ここが日本以上に文化が混在している世界なんだと言う事だった。

「…スゲエな。まさか地球以外にもクリスマスのようなイベントがあるなんて」

「うん。由来も似たり寄ったりなところもあれば全く違つところもあるみたいだし」

「“ベルカ聖王生誕祭”とかどう考えてもこじ付けじゃねえのか？  
まあ生誕祭自体が元々一週間かけて祝つもののようにだけど」

教会関係だけでなく、ここにはあらゆる世界の文化が混ざり合い街は騒然というか、ぶっちゃけカオスな様相を呈していた。

半裸で雪の降る中奇声を上げて走っている人もいれば、美少女フィギュアを崇拜するかの如く崇めている集団、そしてこれは一般的に見えるものだけど、

「……………（ギョっ）」

「……風花。無言でしがみ付くの止めろって言ったよな？ ドキッと  
するから止めてマジでお願いだから」

「でもほら、昼間からあんなにイチャイチャしてるカップルだっているんだよ？ 腕組みぐらい目立たないよ、きつと」

クリスマス名物“浮かれる恋人達”。

去年までは嫉妬マスクにでもなるうかと神楽ちゃん達と本気で暴れる二歩手前まで考えていたけれど、今は違う。

私もそんな風景に溶け込むように無くなっていなかった方の右手に抱きつくようにひつつく。気分は有頂天だ。きつと今頃彼氏彼女のいない人は私達を見てリア充氏ねとか思っているに違い無い。私も去年まで同じ穴のムジナだったからその気持ちは痛い程分かる。作者程じゃないけど。

……それに。

「（言ってたもんね……『話したいことがある』って……）」

以前、あの駄メイドと命君が戦っていた際、死亡フラグのようなものを立てていた事を私は忘れていない。

だから今日このチャンスにそれを聞きだそうと思っている。もしこれで告白とかだったら……

く以下、風花お嬢様の妄想なので現実じゃありません。だからすずかさん！なのはさんに電話しないで遠くから桃色の極光が……ブツッ……ツーツーツー……

『風花。実は俺、お前の事が……その』  
（顔を赤らめながら頬を掻く）

『その、何？』  
（期待を籠めた眼差しで聞き返す）

『ッ！俺、お前のことがずっと………！』  
（最後まで一気に言えない。へタレだがそこが良いッ！by風花）

『………』  
（林檎ように顔を赤くしていても命の顔から目を逸らさない）

『ずっと………ずっと好きだった！十年逃げ回ってたときだってずっとお前に会いたいって思ってた！』

『………命君………！』

『だから！俺と付き合っムゲッ！？』

以下は自主規制~~~~~

「~~~~~  
ってハッ!? もうちよつとで良いところまで行けたのに!」

「……こんな大来で声を荒げるなバカ。ていうか涎拭け」

しまった、乙女にあるまじき姿を見られてしまったけど相手が命君だしいいや。それにしてもさっきのは惜しかった。作者が切らなかつたらR指定ギリギリぐらいいまで突っ走る気満々だったっていうのに。

でもだ、こうなる可能性だつて無きにしも非ずな訳だし、もしそうなら先に待っているかもしれないムフイベントのためにも話を早めに切り出さないと!

思い立ったが吉日、私は命君を連れて以前戦場だった自然公園の一角。丁度命君が告白を約束した林道側のベンチに腰掛けた。

「それにしても凄かったな市街地は」

「う、うん。 そうだね」

興奮冷めやらぬというか、あまり観光らしい観光をしてこなかった命君はただ街を練り歩くだけでも楽しんでいたようで、私が妄想に浸っている間彼も彼で楽しんでいたみたいだった。 まともに話出来なくてゴメンね？

そして、私はいよいよ核心に触れる言葉を口にすることにした。

「ああ、あのさ？ 命君、前あのメイドと戦ってる時に…さ、言いたい事があるって、い、言ってたよね？」

「あん？・・・おー、アレか」

「うん……アレ？ 思ったのと反応が違うよっな？」

予想外に彼の反応は薄く、それどこか思い出したかのような反応に少し違和感を覚えたけど、すぐに浮かべた……妙に悪戯っぽい顔に少しドキドキした。

ひよっとしたら予想してたシチュよりも軽いノリで告白なのかな？ 最早告白されることが前提で考えを巡らせている私に彼は一言。

「あの時は流石に場違い過ぎて言えなかったけどさ、風花の泣き顔って可愛いなあーって」

「……………he？」

……………今、何と仰りましたか？

「いやー、異性の泣き顔が可愛いって思うのもどうかと思うんだけどな？ でもあん時に泣いてお願いしてきた時の顔は正直ヤバかったね。理性崩壊一步前だったぐらいだし」



何か一気に拍子抜けした。何だ、告白じゃなかったのかよう……

後に彼が何を言っているのか全く聞き取れなかった私は、その後十分ぐらいで正気に戻って思いつきりデートを楽しむことにした。こうなったらもう徹底的に楽しみ尽くしてやる　　！

閑話 「命君の女難な日々」三日目・クリスマス特別版 (後書き)

??「後の私達はお正月とか年末特編でもするのかな?」

??「うん、今のうちにプレッシャーかけてみるのはどうかな?」

(チヤキ)

??「それは良い案ですわ。では早速……」 (ジャキ)

.....後書き書く前にトーンずらさっただぜええええええええええええええええ!!!!

閑話 「命君の女難な日々 ～四日目～」 (前書き)

さて、この女難シリーズも折り返しということでも今回も頑張って  
執筆・・・

? 「あー、作者さん」

はて、誰がこの夜更けに……な、何をするだ

…… (血文字のようなものが書かれているが、掠れ過ぎて解読不可  
能)

? 「ふう、これで今回と以降に作者の余計な干渉を止められたかな  
? そうじゃないと風花ちゃんだけクリスマス特編とかズルイもん

って、作者さんが見るも耐えないモザイクに変貌しているので、  
ここは私が……

それではどうぞ」

閑話 「命君の女難な日々」(四日目)

「ふう。これで変な手出しはさせない」と

「あれすずか？ 何だって朝っぱらから風呂入ってんだよ？」

前書きの時についた返り血を流すためにお風呂でシャワーを浴びたとは流石に言えない。

「だって今日は私が命君を自由に出来る日でしょ？ だったら色々な事に備えて準備しておくに越した事は無いと思うんだ」

「・・・色んな、だって？」

「そ、い・ろ・い・ろ」

青褪める彼の顔を見て話を逸らす事に成功したと安堵する。でもいくら何でも怯える必要はないんじゃないかな？ 別に取って食べる訳じゃ…………

「すずかさんっ！？ 何か涎垂れてませんか！？」

「じゅるり…………ハッ、いけないいけない。つい乙女思考が…」

「乙女が涎を垂らすか！？ お前最近怖えんだよマジで」

「失礼しちゃうなあ。女の子を怖がるなんて」

だったらその紅い目を引っ込めて本当怖いからと、本気のトーンで言われたのでとりあえず気分を落ち付けて夜の一族の血を静める。

でもこれ、どうして私がちょっとアブナイ思考をするだけで騒ぐんだろう？ でもお姉ちゃんも恭也さんが家に来た時の夜とかこんな感じなんだろうし、気にしなくてもいいかな？

「それじゃ出掛けようか？ 今日はもう作者の介入は無いだらうし。ちゃんとフェイトちゃんの家の方にも了承は取ってるし」

「（作者エ…）で、何でフェイトん家の方の許可がいるんだ？」

不思議そうにしている命君に、今日の目的地を告げる。そこに行くためにも、どうしてもあの家に行かなくちゃいけない。

「今日はね？ 地球に行こうと思ってるんだ」

||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||

フェイトちゃんの家には地球に行くための転送ポータルが設置されていて、そこさえ通れば管理局の目の届かない管理外世界。すなわち、

「……そういう事。確かにここなら何の憂い無く出歩けるわな……」

「そういう事！ 他の皆は短絡的に考えていたいただけで、そもそもあつちで警戒しなくなつて私達には故郷があるんだし」

「態々捕まるリスクのあるミッドじゃなくても、地球でいくらでも動けるもんなあ……でもさ、これって……」

地球だったらかかっている懸賞金も何もあつたものじゃないので、変装も無く自由な行動ができるというのに、何故か浮かない顔の命君。何が気に入らないんだろう？

「どうしてお前がそこで首を傾げられるのか、俺には不思議でたまらないんだが……？」

「え？ だってここは海鳴だよ？ そりゃリラックスぐらい」

「なら何で俺は街中でこんな格好させられにやなんのだ！？ つ  
ーかなんだこのふざけた格好！」

そう言つて命君は自分の着ている服、ここに来る前に命令権を行  
使して一日その服を着続けることを義務づけたものなだけど……

「どこが気に入らないの？ もの凄く似合ってるのに」

「嬉しくねえよ！ だって！ だってこの服



どう見たって制服じゃねーかッ!！」

「うん。ほら、私も久しぶりに高校の時の制服引っ張ってきたんだけど……似合う?」

「それを今聞く!?! てか話を逸らすなああああああああ  
!！」

「……今命君が着ている服というのは、私達が本当なら一緒に通う筈だった聖祥の高校生の制服だ。」

男子のものは一般的なブレザータイプのもものだけど、中等部との差異を図るために細かい刺繍の違いなどがあるだけなので大差は無い。

それは女子の制服にも言えることで、私が着ているものも中学の時の物とあまり違いは無い。

「大体！ 俺達もうこんなの着るような歳じゃねえだろ！？」

「もう、ダメだよ？ 女の子に年齢の話題を振っちゃ」

「スマン…ってそうじゃねえ！」

うふふっ、もう一々反応を返してくれるから風花ちゃん達とはまた違ったからかい甲斐があるなあ〜

でも別にこれは無意味に着させている訳じゃない。勿論、私の趣味も多分に影響しているけどこれは命君のためでもある。

「でも命君。命君は今までずっと次元世界を巡ったせいで、学校も小学校までだったでしょ？」

「そりゃまあ、そうだけど…」

「だからね？ 今日だけでも学生の気分を味わってもらおうと思っ

て今から聖祥の校舎の方に行こうって思ってるんだ　幸い、今は  
長期休暇中だから学生はいないしね？」

たった一日だけの学生生活を楽しんでもらうために、今日のため  
だけに多少の仕込みはしてきた。後は命君に楽しんでもらえたら成  
功だ。

・・・当たり前の事だけど、私にもちゃんと旨味があるようには  
しているんだけどね…？

「それじゃ行こっか？」　ギョッ

「お、おう。そして出来れば腕を組むの止めていただけたらさ」却  
下『デスヨネー』

多分周りからは学生がデートしている風にしか見えない筈だ。い  
くつか怪しい視線も感じるけどその視線の方に命君が殺気を飛ばす  
だけで逃げていく処から察するに、私を見ていた男の人を命君が追

い払ってくれたのかな？

・・・だったら何か嬉しいなあ。別に視線自体は慣れてるけど、こづやっているとそれも全然あつて無いようにしか思えないし。

「…どうしたのさ今度は？ 急に笑ったりして」

さも自分は不本意ですといった顔をしているけど、ちゃんと男の視線を察知するとそつちを睨む辺り、命君にもデリカシーはあるようだ。それとも…？

「（ちよつとは独占欲でも持ってくれてるのかも……なんちゃって）」

でもだとすれば嬉しい。

「おいすずか。悪いんだけど流石に十年ぶりだと景観もあんまし覚えてなくてな、ナビ頼みたいんでそろそろ正気に戻ってくれ」

「……………（色々と妄想中）」

「………しゃーない。知ってそうな場所を探して行くか」

彼が自分に対してそんな気持ちを抱いてくれているのなら……………

「（…ひよつとして、今日イけるとこまでイケちゃう!? わぁやバいよバいよ！ お風呂入って正解だったかもだけどデートの後でもう一度ちゃんと洗っておいた方がいいよねっ!?）」

「すずかさーん？ 衆人監守の街中でトリップしないでー!? 俺すっげえ恥ずかしい！」

何処か遠くに命君の叫びを聞きながら、私は頭の中の夢想にしばしの間浸っていたのでした。

~~~~~

「はあ〜……すずかがこれで迷いかけたけど、途中で校舎を見つけて良かった……」

「~~~~  
~~~~キヤツ~~~~  
~~~~もお~~~~」

「いい加減起きんかい！」

「はじわっ!?!」

折角今幸せ家族計画第三章も最後のイベントを残すのみでここに  
至るまでのルートとかも数回繰り返して漸くベストendだったと  
いうのに、命君の理不尽な一撃によって私は現実に引き戻された。

「何するの命君！ あと少しで全CGコンプでシナリオも全部回れ  
るところだったのに！！」

「何の話！？ お前この一時間呆けてた間ずっと何してた！？」

迫るヒロインを蹴散らして最も難易度が高い私ルートにやっと入  
ったというのに……………って、うん？

「私そこまで攻略難しくないよ！ 幼馴染で小さい頃に秘密の共有  
とかするぐらい攻略簡単なヒロインだよ！」

「……………まだ覚醒しきってないのか？ 何ならも一発ドツいて……………」

「命君ツッ！」

「うおっ!?!」

「私ってそんなにお高く止まってる!?! これでも暴走している風花ちゃんとか神楽ちゃんに負けられないように色々頑張ってるんだよ!?! それでもまだ私は!」

「す、すずかさん…?!」

「ッ! ……ゴメン、ちょっと取り乱しちゃったみたいで。きつと寝惚けてたんだようん」

「歩きながら三十分寝てたっってお前な……」

いけない。もう少しで見せなくなかった部分を出してしま  
うところだった。

普段から命君一筋というか、命君狂いな彼女達とずっと身近にいたことで私が感じていたこと。



本当に、私は神名命を“好き”だと思っているのだろうか？

彼女達は彼がいなくなっただけでしばらく元気が無く、その上行方不明と伝えられた時なんか自殺しそうなくらい落ち込んで、本当に彼の事が好きなんだって、その想いの強さと脆さを見せつけられたような気持ちになった。

そんな二人を励ましたりしながら、ずっと私は自身の想いについて考えていた。

私は二人のように彼との深い接点のようなものは無く、唯一と言っても良い繋がりの一族の掟だって彼が私の『親友』になるという事で落ち着いているし、それ以上の進展は無かった。

元々の出会い方だってそうだ。彼が私と家の付き合いで顔見知りだった風花ちゃんと先に知り合っていて、その繋がり無くしては今のようない関係にすらなっていなかっただろう。

思えば私はいつもそうだったように思う。自分からでは無く、いつも周りが動いてくれたお蔭で一人にならずに済んでいるだけだ。

一番最初の親友のアリサちゃんやなのはちゃん達とだって、喧嘩から始まった関係とはいえなのはちゃんがあそこで割って入ってくれなかったら、私じゃとてもアリサちゃんと面面向かうような度胸は無かった。

小さい頃からの知り合いだった風花ちゃんが虐められていた時でさえ、私は自分に飛び火するんじゃないかと考えただけで足がすくみ、結局命君が助けた後でしか話しかけることもできない臆病者だった。

だから私は変わりたいと願った。彼がいなくなって皆が落ち込んでいる中、私は一人決心した。

「（これまでずっと私は受け身の生き方しかしてこなかった……なのはちゃんは魔法に巻き込まれた時だって自分の意志で動いていた。はやてちゃんも本の呪いで苦しんでいた筈なのに心配かけまいといつも笑顔だった）」

私の周りには強い人ばかりいて、いつもそんな人達に囲まれている私は、殻に閉じ籠っているようなどうしようもない臆病者で、命君という切っ掛けが無かったら皆に自分の正体を暴露する勇氣なんて、とてもじゃないけど持てなかった。

「（…だから！ これからの私は変わってみせる！ 周りからじゃない、自分から動いて、そして……）」

・・・変わった私を、彼に見てほしい。認めてもらいたい……

その一心で今まで私は行動してきたつもりだった。

落ち込んでいた二人に檄を入れて、『自分達で命君を迎えにいくぐらいじゃないと、私が命君を取っちゃうよ？』と言ってあげると二人は驚く程慌てて復活した。

そして皆で話し合ってミッドに移り住むはやてちゃんの家を拠点にしながら、管理局の情報すら使って命君を探しだそうと。

「（…これまで順調だったつもりでいたのは、私の樂觀だったのかな…？）」

そして十年経ってやっと彼は帰ってきてくれたけど、その変貌ぶりに私は最初泣きそうになった。

全身を覆うような黒服は、数々の実験でつけられた傷を隠すためのもの。今日改めて彼の裸（強制的に着替えさせた時）を見て、それは驚いたものだ。

全身といってもいいぐらい、首の下の部分からそのまま足の付け根まで痛々しく残っていた切傷、その他にも体を切り開かれたような手術痕も幾つか。フランケンシュタインという言葉を想起するぐらい、その姿は痛ましかった。

でも彼は、その傷を見て愕然としている私に笑いながら頭を撫でてくれた。

『別に、すずかが気に病む必要は無いだぞ？ これつけた連中は今頃知り合いの伝手でそれなりに痛い目には遭ってもらってる筈だし、それにもう全然痛くないしな』

まあ、出来る事なら皆には見せたくないものではあったんだがな……。と最後の方は苦笑のようにそう洩らしていた。

まただ。本来なら私がここで彼を慮るべき場面で私は、逆に慰められた。

変わったのだと思っていたのに、その実何も変わっていなかったのかと、そう思うと自分が心底情けなく思えた。

「……………」

「す、すずかさんっ！？ 今度は急に泣き出した!？」

変わらないと、もっと強くならないと私は……私はッ！

「だぁもうっ！先に謝っておくからな！ゴメンッ！」

「……………ふえ？」

自分の不甲斐無さに落ち込んでいたまさにその時、不意に浮遊感のようなものに襲われた私はなのはちゃんのような気の抜けた声を上げてしまった。

「ふ、ふええ??」

「何なのは退行してんだお前は。って、今の絶対なのはに言つなよ!? 言ったらまたあん時みたいに砲撃でブツ飛ばされちまうからな……………」

「え?……………ええーっ!!?」

五月蠅いわっ！ と声を荒げる命君だけど、私は自分の置かれて  
いる状況に混乱してそれどころではなかった。

簡単に説明すると、気がついたら私は彼の背中に背負われていた。  
何を言ってる？

「あ、あのう？ これは一体……？」

「いやな？ 何ですかがいきなり泣き出したとか、妙に思い詰  
めるような顔してるなとか思った俺はな」

「ああまただ、また私は誰かに気を使って貰ってるんだ。本当に  
なさ……」

「そして男としてはやっぱり、泣いてる女の子がいれば黙って抱き  
しめてやるのが最高にカッコいいと俺は思う訳だよ。オッケー？」

「はへ？ うん。それは分かるけど……」

・あれれ？ おかしいな、いつもの命君なら、そういう事に何の頓着も見せ無さそうなのなのにどうしてそんな事を…？

「でもさ、生憎俺の手は一本しかない訳で、これで抱きしめたところであつこ付かないじゃん？」

「えと、別にそんな事は無いんじゃない？ ていうか別にそこまで「だから考えたんだけどさ」「…？」

「背中ならいくらでも貸せるし、こうすれば俺はお前の泣いてる顔を見なくて済むだろ？」

それにさ、と、顔は見えないけど何処か恥ずかしそうにしながら、言う。

「……今日一日、俺はお前の命令を聞く、いわば従者みたいなもんだ。従者がいつまでもご主人様の泣き顔を見たいと思う訳無い………って、これ相当恥ずかしい台詞じゃね？ いや自分で考えるような言葉なんだから決してそこまで気障では無いと思うんだけど流石



に自分でもクサイんじゃないかと思うんだけどでもやっぱりここでは  
ずかに泣いて欲しく無いと思う気持ちは本物な訳でなら多少の恥じ  
は忍んでここはカッコつける場面だと思っただけどころやって心中  
暴露してりゃカッコも何も無いわな！ ははは！」

「……………」

一気に捲し立てるように言って、恥ずかしさを誤魔化す様に大声  
で笑う命君。

本当なら、私が支えられるんじゃないなくて、支えてあげたい  
んだけどなあ……………」

「……………」

「お？ 泣きやんだ？」

「まだ だからこのまま学校入る」

「げっ、流石にそれは恥ずかしくない？」

「だって今日は従者なんでしょ？ だったら、お嬢さまの言っ事は聞かなくちゃ」

「言うなあああああ！ 自分でも恥ずかしくてたまらないのに！」

でも、命君になら、甘えたっていいよね……？

内心の喜びを悟られないように、でも彼の優しさに甘えるために背中に顔を埋めながら、私達はたった一日だけ主従関係を満喫す

るのだった。仕込みは無駄になりそうだけど、まっ、いつか

「「お、お嬢さま……」

その頃、海鳴の寒空の下、嘆くメイドさんの姿があったとか無かったとか。

閑話 「命君の女難な日々」(四日目) (後書き)

・・・し、死ぬかと思った……ではできたら明日。できなかったらちょっと間をおいて新年でお会いしましょう。

あれ？でも今の言い方だと今年もう書かないフラグが……気のせいですか？

閑話 「命君の女難な日々」(五日目) (前書き)

遅ればせながら、明けましておめでとございます。今年携帯を持ってから初めて、誰からも年賀メールが来ないというハブリを経験したイイ日旅立ちです。

泣きました。それ以上に貰ったお年玉の額の多さに驚愕しました。所詮、人は人よりも金を取る生き物なのでしょうか？ 金は……ッ命より……ッ重い……ッツ！ みたいな？

それはともかく新年短編を除いたら一発目の投稿です、出来は変わり映えしないものですが、よろしければお付き合いの程を、今年もお願いしますという事では…

閑話 「命君の女難な日々」五日目」

「……………」

「……………」

私達は今、この瞬間に互いの尊厳を賭けたといっても良いぐらいの瀬戸際にいます。

互いに無言。滴る汗を拭うこともせずただ、静かにその時を待つ……………そして、

「それじゃいくよー！ 『さ』おだ」

「そこっ！」

「にゃあああああ！ 取られたあああああ！」

「これで最後だな。半分以上を取った、命君の勝ちだ」

「うっし！」

ま、負けてしまったの……これは空戦魔導師としてあまりにも屈辱的な……

「空戦関係無くないか？」

「大アリなのっ！ マルチタスクを普通の魔導師よりも酷使用する私達が、私達がああ……」

「かるたで負けるなんて屈辱なの

!!!!!!」

今私と命君は、今までサボっていたある事のツケを消化している  
最中です。

命君が帰って来てから、未だに地球にいる人達に挨拶回りを済ま  
せていなかったのは、まあしょうがないと思うけど何もそれを私の  
日にしなくなつて……

「それにしても色々な意味で見違えるようだね、腕なんか片方しか  
無くなつてるし」

「はは。これは多分に自業自得なんで気にしちやいませんけどね、  
それに案外不自由なく生活できてますし」

「それでも働き口とかには困るんじゃない？」



「うぐう」

「どうやら命君は突かれないところを突かれましたみたい  
です。」

最近になって、自分がニートである現実には危機感を感じ始めているけど、誰一人としてそれを責めたりしていない現状にこそ、命君が恐れている事があったりする。それは・・・

「大丈夫だって！ 命君は別に何もしなくても、私が頑張ってるから家で待ってくれさえすれば！」

「うちは家が家だけど……それでもママはきっと歓迎してくれるよ！ パパなら私が黙らせるし！」

「うちやったら何の心配もいらんで？ 私の足が動かなかった頃だ  
いぶ世話になつとるさかい、あの時の恩返しとでも思ってくれれば  
」

『私の家も問題無いよ。それに命君の大好きな猫もたくさんいるし、メイドだって……』

『何の問題もありません。主が働くなど、従者である私がいるのですから。ただ命様は座していればいいのです』

・・・上から神楽ちゃん、風花ちゃん、はやてちゃん、すずかちゃん、アルさんの言葉。皆命君を働かせたくないみたいだ。

だけどそれを良しとしていないから、今のお母さんの質問みたいなものはかなり堪えるみたい。

「確かにミッドでも片手しかないっていうのはハンデだもんね。それに向こうじゃお尋ね者だし」

「ぐっ……………俺悪い事してないのに、無職確定ルートとかあんまりだ……………」

一応脱走とか、研究所壊滅とかしてるそうだけど、それは気にしない方向なのでしょうか？ そうなんだと思います。だって命君、管理局の制服を着た私達と一度だって目を合わそうとしてくれないぐらい苦手意識を持つてるんだもの。

だからという訳ではないけど、元々私服で通っていた囑託の私達だったけど、今ではもう誰も制服を着なくなってしまいました。流石にヴィータちゃんとかの私服は派手なものが多いから制服を着ているけど、何故かヴィータちゃんの制服姿は平気だと言っていました。その理由が、

『だってヴィータの場合だと、服に着られているって感じしかないらからむしろ微笑ましいもんなー』

『あんだと！ それって要は私の事を子供扱いしてねえか！？』

『爺ちゃん、ヴィータの制服姿どう思う？』

『え？ そこで儂にふるのか？ ……そうじゃのう、キリッとして今流行りのカッコ可愛いというやつじゃと思うのじゃが……』

最近の彼はヴィータちゃんに対するスルースキルが最早カンストしています。常に傍らに雪而さんが控えている時に限ってちよっかを出しては、雪而さんを引き合いに出してヴィータちゃんに自分の存在を消させて雪而さんに集中させるといふ高等テクを使つては、怒りを受け流しています。

「でも、だったら良い働き口を知っているんだけど？」

「マジツすか士郎さん！？是非も無く教えて下さい！！」

おっと、私が回想している間に会話は進んでいたみたいで、何時の間にかお父さんがニヤニヤしながら何か話を持ちかけようとしているようです。

「まあ、これは今日限定のアルバイトなんだけど、やはり一度でも体験してみるのも大事だろ？それで気に入ってくれば正式に雇うし」

「雇う？あの、ひょっとしてその働き口っていうのは……？」

「うふふ、うちならいつでも歓迎よ？ 恭也がいなくなってから翠屋にはイケメン成分が足りなくなってきたから」

「母さん！？ それはちょっと聞き捨て「だって土郎さんは私だけのイケメンなもの？」はっはっは！ 命君！ うちは厳しいぞ！ ついてこられるかな？」

「あ、あははは………が、頑張らせてもらいます、ハイ」

……は、恥ずかしッ！ 両親の惚気っぷりは知っているけど、それを家族以外に見られる事はとてつもなく恥ずかしッ！

「……なのは。凄いな、あの人達」

「うん……万年新婚夫婦は伊達じゃないの……」

「ていうかあれから十年経ってる筈なのになんで歳とって無いように見えるんだよ俺よかよっぽど人外じゃねえか」

命君の意見も最もだけど、私としては両親よりもさらに恐ろしい存在に戦々恐々している。それは・

「あら〜？ それにはひょっとして美由希お姉さんも含まれちゃったりしてるのかな〜？」

「……………」

「どろろして顔を反らすのかなあ〜？ 私そいつ反応されると傷つくなあ〜！」

「……………近いので、出来れば離れてくれると嬉しいかなあーって、俺は思います」

「ぐふふ、照れちゃって」ヤッめ、ヤッめ！

「ちょ、突っつかないで！ そして近い近いですからマジで！」

・・・お姉ちゃんが大学生でも通用する、ていうか私と同年代と言っても疑われ無さそうなの若さは何なの!? 高町家は化け物なの!?・・・って

「それじゃ私も実は　　!?!」

「ちよつと美由希さんマジで離れて！　なのはも何か『叫び』みたいになつてるし!」

「あゝあれね。アレは“ムンク”って芸術家が描いた『叫び』ってタイトルの作品であつて、決してムンクの叫びって題名じゃないんだよねー」

「そんなトリビアはどうでもいいから頼つぺたから手を放して下さい!?!?!」

「ふふふ、本当に昔からからかい甲斐があるなあ命ちゃんは」

「……………勘弁して下さい」

く語り手がしばらく混乱中のため、しばらくお待ちくださいく

・・・ふう、何とか正気を取り戻せたの。大丈夫、私は御神の技を使えないから、きつと私は普通の……でも私は魔法が使えるから普通とは……言えないかなあ……

「なのはっ!? 頼むからこれ以上意識トリップさせるなよ!? 俺だけじゃツツコミきれない!」

「ハッ!」



何時の間にか私のポジションはツツコミになっていた事に軽く驚きを感じるけど、思い返せば私の親友のほとんどがポケ属性だったよな……？

「ツツコミしてくれるのはアリサぐらいか……？」

「にはは……他の子が暴走した時はまともな人がツツコミに回ってくれるんだけどね」

「完全なポケ属性がないだけマシ、か？」

それは確かに、私が基本的に皆を窘める役目を負う事が多いのでそれは助かっている事だ。それでもはやてちゃんとかはたまに火に油どころか重化石燃料を注ぐような事をするから油断ならないけど……

「命君、それじゃ準備が出来たから奥で着替えてくれるかしら？」

「……まさか片腕ウェイターをやらされる日がこよつとは……」

「大丈夫　命君は恭也程のイケメンじゃないかもしれないけど、決して顔立ちは悪くないわ」

「あくまでも恭也さん基準なんすね……まあ、確かにあの人は声も見た目もイケメンとしか言い様が無いけれど」

そうそう。私がトリップしていた間、お母さんが命君が着れるようにお兄ちゃんが使っていたという制服を直して、命君が着替える事になりました。でも、

「お兄ちゃんって制服なんて着てたかな？　いつもエプロンだったよな……？」

「だって恭ちゃん、その制服を一度しか着たこと無かったもの」

「えっ！？　それってどういう……」

私がお姉ちゃんに言葉の真意を聞くこととして、それは控室から聞こえてきた大声によって遮られた。

『 土郎さん無理！ いくら何でもこの格好は無いだろ！ ていうか絶対こんな服を恭也さんが着る訳が無いッ！ 』

『 はっはー。何を言っているんだい？ 確かに恭也はこの制服に腕を通したことがある……一度だけだが 』

『 ほらやっぱり！ それっ何も知らされずに今の俺みたいな状況で無理矢理着替えさせられたんですよね！？ そして今も！ 』

『 分かっているなら話は早い！ 問答無用で往かせてもらっつー！ 』

『 うわこの大人マジだ 』

『 ！?!?!? 』

ドタバタドタバタドンガラガッシャアアアアアアア……

「ど、どんな服なの一体……?」

ある意味不安と期待の入り混じった眼差しで私達が固唾をのんで控室の入口を見つめていると、まずお父さんが顔を出した。

「ほら、折角のイケメンが台無しじゃないか。もっとスマイル！」

「……この格好にイケメン要素は皆無だと思つのですが？ ていうかコレ、完璧に男が着る服じゃ……」

現れた命君の服装。それは、ものの見事に似合っていた。ネタ的な意味で。

「ぶっ！ ふふっ……やっぱりその格好は若い男の人が一番似合うわぁ」

「あっはっはっはっは                   ！   命ちゃん最高ー！   写真撮っていい？」

「止めて!? こんな格好を記録に残さないで　　!?!」

「うわぁ……………皆喜びそう〜」

命君の格好を一言で表すなら、『メイドさん』

それもただのメイドじゃない。背中パツクリ露出されていてスカート丈も昔のフェイトちゃん程だ。あれはかなり恥ずかしいに違いない。

「見るなああああああ!　こんな俺を見るなああああああ  
ああ!」

「ゴメンね命君?　でもこれも仕事だから……………」

「とか言ってレイジングハートで記録残してんじゃねえよ!?　しかも静止画だけじゃなくて動画撮影まで!?　鬼かお前!」

「むっ。違っもん、これは『面白い格好になった時は何かしら記録

に残す事』っていう乙女規約にもあることだもんっ！」

「ってことはあれ？　すずかの時の格好も風花の時のも………うが  
あああああああああああ！」

頭を抱えて悶え出した命君を、私達は微笑ましげに見つめては写真を撮ったりして和んでいた。

「帰ってきて良かったわね、なのは」

「うんっ！　皆も明るくなっただし、後もうちょっと頑張れば、皆揃って地球に帰ってこられるよきつと！」

「そしたら今度は本格的に争奪戦が始まる訳ね？　私も立候補しちやおうっかなあ〜？」

「お姉ちゃん！　これ以上は流石に私も処理しきれないからやめてよう！」

「はっはっはー！………なのはは誰にもやらんぞオオオオオオ！」

「見るな…っつて、土郎さん？ なして貴方は木刀を構えて……ぎゃあ  
ああああああー？」

……その日、結局高町家でほとんどの時間を使い果たしてしま  
った命君は、また後日他の家で挨拶回りをする事になったのです。

閑話 「命君の女難な日々」(五日目) (後書き)

明日の成人式、私は出ません！ だって知り合いとかいないからっ！

明日は一人でお酒をちびちびしながら『大人になること・・・それは酒を飲めるようになるということだけだ』とかどっかの漫画の主人公みたいな事を言いつつ過ごす予定です。



閑話 「命君の女難な日々」最終日」（前書き）

過去最長に間が空いたのには理由があるんです！ いや個人的な理由ではあるんですけど！

ちょっと進路関係で親と言い合いになったりレポートが大量に出たりとここに来ること自体は出来てたんですけど、気分的にも時間的にも執筆にとれる時間もやる気も無い状態でした。もし待っていて下さった方がいるのなら、本当に申し訳ありません。

一応今回閑話ラストと相成った訳ですが、正直出来の如何については自信なんてありません。これはいつもの事ですが、久しぶりにまともに一話書きあげたのでどうも感というか何と言うか、小説書くのって難しいのだと改めて認識させられました。レポートとは訳が違います。いや書いてて楽しいんですけどね？ 寒さでキーボード打つのが痛くて痛くて……

と、長々語ってしまいました。付き合ってらんねーよ！という方はブラウザバックをクリックして、それでもないんだからねっ！という方はこの先をどうぞです。

閑話 「命君の女難な日々」最終日」

ズズズッ

「.....」

ズズーッ

「.....うん。やっぱり美味しいな、このお茶。味とかの細かい事を分らないけど、相変わらずアルさんの淹れたお茶はいいわあ」

「左様ですか」

本日は日柄も良く、外でティータイムをするには絶好の日和。

今日は最終日。とうとう私を最後に命様の使用権が切れてしまう訳だけど、私としては特に何かしようとは考えなかった。

・・・まあ、思いつけなかった、と言われれば頷かざるを得ないのですが……

「だってアルさんがミッドで知ってる場所って限られてるしねえ」

「……申し訳ありません。もっとサーチしておくべきでした」

「いやいや、俺としてはこうゆっくりとした時間を過ごせるってのは嬉しいから良いんだけどさ。今まで色々と連れ回されてきたんだし」

「……………お気を使わせてしまったようで……」

「気に……………ってもうこのやり取り何回目かね……………」

主に心配をしてもらうのは従者冥利に尽きるというものなのだが、自分の不徳で気を使わせてしまうのは恥ずべき事だ。

幸いと言ってはなんだけど、命様はそのようなことをあまり拘らずに対等でありたいと思って下さるけれど、やはり……………

「……………あの、何を」

「ねえ、こんなに頬っぺた抓ってるのにその薄過ぎるリアクションは何？ 結構思い切った事してるんだけど？」

ムニールと、命様は私の頬を抓ってきているのだが、それについてどう反応を返せばよいのか。

というが、

「命様」

「はい？」

「このような事をなされている最中に言うべき台詞では無いと思うのですが、いつも命様から誰かにこのように接することなどありませんでしたよね？」

「・・・」

いつも他の雌共がアプローチを仕掛けているというのに、命様はそれら全てを無視しているのが普通。

だというのに、今も私の両頬を抓ったり揉んでみたり突いてみたり。もしか・・・

「（私にだけ……？ 私だからこのようなお戯れを？……………うふ、うふふふふ）」

何故だろうか、顔が歪みそうになった止まらない。

別に、そう別に私としては命様が誰かと付き合いおつが構わなく、主の側で望むままに仕えさせてもらえるのならばそれ以上など望まない。望めないように造られた筈だった。

だというのに、命様に出会って、他の家族の方々、そしてこれに挙げるのも癪なのだがあの女共との触れ合いも、それら全てが私を変えてしまった。

これが弱くなったのかは分からない。ただ、この変貌が例え私の弱くしたとしても、構わないと思っている。

強さだけを求められて製造された私が、だ。

今、もしも命様が私に特別な想いを持ってこのような行為をなされているのなら、もしそうだとしたらと思うだけで私は体が熱くなってしまうのを止められなくなってしまう。

戦いだけが全て、主だけが全てだとインプットされた筈の私に、  
“誰かに想われる”という事が何よりも嬉しいのだ思わせる彼。

これが『誰か』で良いわけじゃない。きっと命様だからこそ感じるのでしよう。

全力の私に伝えてくれ、今までの主、至高とさえ思っていた旦那様よりも私を思いやり、共に居てくれた。まあ私が勝手に押し掛けたというのはこの際脇に置いておくとしましよう、ええ。

「その、これは……」

「ええ分かっていますとも。これは命様なりの親愛の表現、『お前は俺のもの』というアピールなのですな、分かります」

「いや違エよ!? 何か気にし過ぎていたからこうやって軽く罰を与えればいいかと思ってただけで! そりゃ確かに柔らかいかか気持ちいいなあと思ったけどさあ!」



・・・ええ、分かっていたとしても。どーせそんな事だろうだ  
なんて、ええ私従者ですから。分かっていたとしても……

「え？ 今度は赤くなるんじゃない？ 暗く？ え、マジでどうした  
のアルさん!？」

ああ、心配されるのも今はお手を煩わせるといふ気持ちよりも、  
何でそこでそうなのかという不満を抱いてしまえそう。現在進行形  
で抱いているだけだ。

でも、こんな風に思える“今”があるのも命様のお蔭。そしてこ  
の変化を受け入れられるのもまた・・・いや、これを言えばきつと「  
私が変わっただけ」だと仰るのでしょね。

「……何でもありません。では、そろそろお昼にしましょう」

「あ、はい。お願いします……」

「ふふ、今日はこの日の為に腕によりをかけて作った自信作ばかりですので、期待して下さいね？」

「お、おう」

ちなみに。今私達がどこで外食をしているのかというと、

「うわぁ……本当に『主従』って感じだねエリオ君」

「うん。でも片腕しかない主人とそれを仕出かした張本人っていう構図に僕は置いてけぼりにされた気分だよ」

「気にしちゃダメだよエリオ！ ミコトはいつつも私達の考える事

を平然と無視するような人なんだからっ！」

「フエイト……。またそんな事言ってるよ」MOGI SENJI  
ようぜ』って焼かれる羽目になるよ？」

「はっ！？」

「アリシアさーん、後で訓練室で思いついた技を試したいんで場所と妹借りてもいいっすかぁー？」

「データくれるならいいよー！ 序に私に会いとかくれると三セツトぐらいなら余裕で貸すよ？」

「出会いならまず親馬鹿フレシアさんを何とかして下さい」

「姉さんにミコト！？ 何で私の預かり知らないところで私の命のやり取りが！？」

「「気にすんなー」

「「気にするよっ！？」

・・・大変賑やかです。八神家とは違い、ここだと「家族」というものがより強く感じられます。

以前からテストロッツサ家が所持していたロストロギア級の次元移動型居住空間、『時の庭園』の庭を御借りして、そこでテストロッツサ家の皆さんから少し離れた場所でシートをひいて寛いでいます。

何せ私と命様は揃って管理局に追われる身。特定の世界にいるよりもこうして次元を移動できる場所だと落ち着けるといふもの。

別に局員の邪魔が入ろうと蹴散らす上に楽しめるので問題は無いのですが、如何せん、主との一時を邪魔されるというのはあまりに………教わった言葉を使うのならウザい、そんなところです。

私のデータ蒐集を条件に前もって間借りしておいたのは正解でした。まさかシユミレーターの再現度が私の幻術結界並だとは、恐るべしプレシア様。

「これが本日のお弁当です」

「おおー、これ全部地球の料理だよな？ 全部一人で？」

「ええ。時間的には相当時間が空きましたし、料理本を見て覚えるぐらいの暇はありましたので」

「……作者虐めんなよ……」

いえいえ、そのようなことはありません。まさか私の出番だけこんなにも遅れるだなんて、そのような事を不満になど思っておりませんとも。ええそうですとも。

「では、さようなら」

「……………えっ。」

「ですから、どっせ。」

「いやいや、片手しかないけど、自分で箸持てるからほら、別にそんな」

「いいから、どっせ。」

「えっ？ だから自分で食べられるからそのあ〜んってやつを引っ込めて……………」

「どっせ。」

「……………あ〜」

嗚呼、ムグムグと恥ずかしそうに私の作った里芋の煮っ転がしをお食べになるその御姿……………

「(グラウ、録画は?)」

「(パーフェクトに)」

「(流石は私の牙。そのまま動画、静止画、双方の録画を続けなさい)」

「(Yes My Bady)」

「これは貴重だ。一応規約もあるのでこうして記録は残しておきませうけど……」

「……………今は私だけのものにしたいですわね」

「（あくあく）ん？ 何か言った？」

「いえ別に。では次はこのハンバーグでも……」

「和洋折衷だなあもう！ いいよ全部それで食べるよ何か俺の箸何時の間にか微塵に裂かれているし！」

撮影の邪魔になる被写体は要りませんので。先程ちょっと。

ああそうだ、昼食が終わったら話もしないと。

私が命様の元に仕えて、今まで感じたことを聞いてもらいたい。別に他に意味は無いけれど、何故かそうしたいと思う自分がある。



変わった私を見て欲しい。何とも従者にあるまじき思考だとは思  
うけど、

「命様」

「今度は何さ？」

「いえ、この昼食が終わったらで良いのですが、その………少し、  
お話を聞いてもらっても………？」

嗚呼、メイドたる私が主に我儘など許されるものでは無いけれど、  
でも。

「アルさんからそう言うってくるのって初めてだったけ？ いいよ、折

角ゆっくり出来るんだし、いくらでもこいつてんだ」

・・・私も、そんな事を考えても良いんですよね？ 命様……

閑話 「命君の女難な日々」最終日」(後書き)

……最近、雪を見て普通にウザいと思えるようになった自分に気づきました。子供の頃はあんなに喜んでいたのに……

第五十七話 「指令！ 管理局の内部を探れ！……………これ何てスオーク？」（前

大変長らくお待たせしました。ええ、例え「待つてねーよ！」と罵られようと、私は宣言します。

にじファンよ、私は帰ってきたあああああああー！！

馬鹿はここら辺で。少し期末の出来が芳しくなく、鬱な状態とレポートによる提出ラッシュで執筆する時間が取れなかのかなり遅れてしまいました。でも何とか一カ月間を開けずに……………！

今回から新シリーズ、という訳でも無いですけど、管理局側の人間を出してテキスト暴れようとか何とか。あと、あのキャラ達の間係を少し進めてみたり。

では、久しぶりの本編をどうぞ。出来の方は気にするなっ！ 腕だけ怪人もそう言ってる！ と、いいよね。

第五十七話 「指令！ 管理局の内部を探れ！……………これ何てスオーク？」

「じっちゃんじっちゃん」

「およ？ 何じゃな？」

「あのさあのさ、お……………僕があまり人の目につかない方が良くら  
って理由で変装させられるのは分かるよ？ 分かるんだけどね？」

「うむうむ」

「……………これはあんまりじゃなかるうか？」

「どうも皆さんお久しぶり！ やあああつと女性陣から解放された  
と思ったら、少しばかり厄介と面倒と恥をかかされる羽目になって  
いました。」

「ねえ、ヴィータもそう思わない？」

「ぶくくく……っ、べ、別に良いんじゃないの？ に、似合っ  
てん  
だし……ッ」

「……………シグナムさん？」

「わ、私としても男かつ成人男性、しかも魔法が使えないというミ  
コトが持たれている先入観の裏を突いた実に理にかなった変装だと  
思うぞ！ 決して面白いとは思っていないからなっ！？」

「はは、本音ダダ漏れだよコンチクショイ」

今俺……………命令により『僕』になっている神名命改め、【八神楓  
子】として幼児化アンドTSを強いられ、一路管理局へと向かって

います。

メンバーは爺ちゃん、シグナムさん、ヴィータと僕の四人。まあ戦力的にかなり可笑しい気がするけど、別に殴り込みをかけようって腹じゃ無い。

ならどうしてこんな事になっているのか？ ダイジェストでお送りしますと……

『なあなあみこっちゃん、TSに興味あらへん？』

『あらへんがな』

『ねえねえ命君、若返りたいとかない？』

『爛々と目を紅く輝かせながらその台詞だと、シヨタコン扱いされそうだから気をつけような？』

『命よ、お前さん外に出たいと言っておったじゃろっ？』

『そ、それが今のとどう関係あるのさ？』

『いやな、女装の上に幼くなれば正体を勘ぐられる事も無いじゃろっし、シグナムさんらと同行すれば怪しまれずに外を練り歩けると思っのじゃが』

『』と、言っ訳でレツツ……』

『……………』

く以上、ダイジェスト終了。ところどころ省いているけど、TSの下りなんて説明しても面白くないからこの際良いだろっ。っーか思い出したくねー。

そして管理局に向かう事になった理由は、本来ならただミッドの街を遊びに行くだけだったのだが、ヴィータの阿呆が調子に乗って



『どーせバレねえんだし管理局に遊び行ってみない?』の一言により、何故か同調した二人も合わさって俺の意見は容易く飲み込まれた。マイノリティーのサガとはいえこれは辛い。

ちなみに、今の皆の服装を纏めるとこんなんだ。

シグナムさんは最近履くようになったハイヒールに時々転びそうになる……事無くモデルばりの歩きで過ぎゆく人々を魅了している。

服装もトレーナーにジーンズではなく、タンクトップにパーカーでも無い、雑誌で出てくるような『デキる女の着こなし』を自分なりに工夫したオシャレをしている。正直人は変わるものなんだとしみじみしていたら思いっきり睨まれ「わ、私だってそれくらい……」と言われた。

「しかしシグナムさんこの十年ですっごく印象が変わったっていうか、あの頃は例に上げたような服装しかしていなかったのに……」

「だろ? コイツってば妙に色気づきやがってさあ、もういっそ管

理局で声をかけてくる連中の誰かと一気にくっ付けばいいと思うんだ、私」

「へえ、して。その中にイケメンはおわすので？」

「うーん、私基準で言わせてもらえば二人は。どっちもスナイパーだしクロスレンジで戦うシグナムとは相性バツチリじゃね？」

「おー！ それじゃ今日はその人に会いに!？」

「その二人！ 当人を差し置いて何勝手な話を進めているんだッ  
!！」

「面白そうだったので」

「純粹に誰かとくっついて離れてくれないかなと」

「……命は後で覚えておけよ？ そしてヴィータ、貴様は今すぐレヴァンティンの鎧にしてくれ」

やっぱり変わってないなあシグナムさん。すぐキレる辺り。

何とか爺ちゃんに宥められ落ち着きを取り戻してはいたけど、それを面白く思っていない方が一人。今の格好だと目線も近くなっているのでその『くつつくな触んな私のもんだ』的なオーラを的確に感じる事が出来る。

シグナムさんの変化も、ヴィータのこういった表情も一つの事柄が起因しているんだろうが、それはさておき。

ヴィータの格好は以前とあまり変わらないパンクでフリフリな感じのもののだが、以前と違って今は変身魔法で年齢を15、16に設定しているため、今どきの若者のような印象を受ける。

しかも土台がかなり良いヴィータなので、メイクもしていないのにさつきからチラホラ注目を集めている。スッピンでここまで綺麗なのだから、これでシャマルさんかすずか辺りに化粧でも教われれば化けると俺的には踏んでいる。

「ヴィータも羨ましいならシャルマルさんにも頼みこんだらどうだ？」

「べべ、別にイ！？ 羨ましくなんてねえし！ 大人っぽいとか言われてみたいとか可愛いよりも綺麗と言われてみたいとかそんな全然思っでねえ！」

実に素直な子である。これでロリ体型なら頭を撫でたくなるような感じなのだろうが、今は普通にお年頃然とした格好なので、周囲の男どもから『リアルツンデレ……ッ！』とか『意地っ張りなツリ目美少女k t k r！』などえらい衆目を集めてしまっている。

何とか注意を逸らす様に声を抑えながら、

「そりゃ身内じゃ恥ずかしいか。ならあの堅物クロノさんを墮としてエイミィさんから、八神家にいないフェイト辺りにでもアドバイ

スを買ったらどうだ？」

「うっ」

「まあエイミィさん辺りなら嬉々として可愛がってくれらるだろうし、フェイトもフェイトで周りに姉や親馬鹿プレシアさんもいるから多くの助言が貰えるかもだぜ？」

「で、でもよぉ……あそこのメンバーだとフェイトぐらいしか頼れなくないか？」

それは一重に残りのメンバーの意見を当てにしていないという事なのか？ 当人達に知られたらえらい事になるぞ？

「大丈夫だつて。仮にも二児の母だし、アリシアさんだつて合コンとかにはしょっちゅう行ってるって話だぜ？」

ちなみに後者は『極秘』書かれてあった以前時の庭園に行った時

に拾った、合コンの日時についての内容を垣間見たからなのだが。  
まあバレなきゃ大丈夫。

「うううう……」

「恥ずかしがるのもいいけど、このままシグナムさんとの距離を広げられっぱなしなのはヴィータだって嫌じゃないのか？」

「むうう……」

「一人で頑張るよりも、多方向からのアプローチが効果的だって事もあるんだ。騎士だろうが何だろうが、搦め手を使っても良いと思っぞお……僕は」

「ぐぬぬぬ……！」

よし、もう一息か。

ちなみに、俺がヴィータの応援をしているのは一重に頑張ってもらいたいという理由の他に、いつも風花やはやてを嫉めてくるコイツへの意趣返しもあったりする。こうしてコイツの乙女的な思考を刺激してやれば、面白半分で風花達をからかってこなくなるだろうと思うので。

そしてトドメとなるように耳を寄せさせて、いかにもお得っぽい感じを装い、

「それにだ、爺ちゃんは派手な服装よりも結構大人しめな感じが好きだと思っぞ?」

「ッ!」

「シグナムさんのスーツっぽいのはよりかは、ワンピースとかの清楚な感じやロングスカートとカーディガンのようなお嬢さまっぽい服装の方が好きだと思っ」

これは俺の個人的観察眼によって得た知識と、火竜達との合意の元での意見だ。一度すつごく暇だった時に『誰誰の好みを話しあってみよう！』とおかしなテンションで、それぞれの好みの異性を暴露し合った際、オマケとしてそれぞれで爺ちゃんの好みを討論しあった結果が上のだ。

そしてその効果は靦面。

「……命、その情報は確かなんだろうな？ その、大人しめな感じのするの、い、良いのか？」

ソワソワ落ち着かない感じで訊ね返してくるヴィータを見て内心、新世界の神様のような笑みを浮かべながら、

「それにいつも派手な格好のヴィータがそんな格好をしたらさ、普通に異変に気が付いて声をかけてくるだろうし、まあ本人の頑張り次第な所も多分に……」



「私、頑張ってみる！」

「……おう」

大人しいと言えばやっぱり大人の意見の方が良いよな、ならテスタロッサ家でいいんじゃないかね？、それだア！

と、そんな感じでシグナムさんへの対抗意識を助燃させる事に成功。今後の乞うご期待！　ってなもんである、モンディアル。エリオの旧姓らしい。

何となく面白そうな感じになった事で、そろそろ管理局の建物が見え

(ねえ命ちゃん?)

「あん？ 何だよアークルさんや？」

（主よ、自分の服装紹介を忘れておるぞよ）

「ぞよって……碎羽、お前そんな語尾してなかったろ」

チィ、目敏くいらん事に気が付きやがって……！

（お館様！）

「（流石は崩！ コイツらを黙らせて……）」

（その格好、確かごしっくろりいたと言っものでしたっけ？ 凄く似合っております……！）

「お前はああああああああああああああああああああああああああああ……！」

思わず全力シャウトモン。衆目を一気に集めてしまった事で意図して隠していた姿がヴィータ達より目立ってしまった。うわぁ……

『おいおいあそこの女の子達レベル高くな？』

『真ん中のオジサマもレベル高い〜！』

『スーツのきよにうお姉さんも良いけどあっちの発育途中って感じのパンク系の子も捨てがたい！』

『俺は敢えてあのゴスロリっ娘を選ばぜ！』

『『止せよ犯罪者！？』』

『違う！ ロリも好きなんじゃ無い！ ロリ“が”好きなんだッッッ！』

『『お、漢だ……』』

お前から黙れ。そして後半組は通報されてしまえ。

俺、というか自己防衛の為に一人称を変えて自分を偽っている訳だけど、今の服装は正直イタイ。

だって見た目的には十歳前後で設定されているからまあギリギリ大丈夫だとしても、それでも街中をゴスロリドレスで闊歩するのは正直SAN値がガリガリ削られる。一刻も早くダイスを振る必要がある。

黒髪を隠すためのなかどつかは知らないけど、短髪を補つたために銀髪のカツラを被せられ、背中の部分には羽をあしらった意匠の飾り。

『うおー！ アンゼロットコスキタ

！』

とははやてとすずかの談。特にはやてが持っていたゲームのラスボスの服なのだそうだが、ラスボスが幼女ってどうなのさ……？

昨今のゲーム事情に軽い不安を覚えながら、とうとう目前に本局の建物が見えてきた。

「で、どうすんの正式な局員でも無いのにこんな目立った格好の奴ら三人も集まって？」

「僕は保護者じゃし、特に目立っておらんから頭数に入っておらんだけじゃよな？ 無視している訳じゃないんじゃよな？」

当たり前である。ボクガオジイチャンヲワスレルワケナイジヤナイカ！。

それに無難にワイシャツの上からジャケットを羽織る爺言葉の四十代……一体どのジャンルなら受けるのだろう？

そんな益体も無い考えを巡らしながら、僕達四人による管理局見学ツアーは始まった。一応僕犯罪者なんだけどもな……

「うん？ でもシグナムさんやヴィータはここで囑託の仕事してるんだから別に見学する必要は」

「「師匠ノ雪而爺ちゃんが知らないだろ！」「」

どうやら僕の事情と都合と感情はどつでもいいらしい。くそシヤマルさんを嚇けんぞ、爺ちゃんに。

そして何時の間にか一人称僕を定着させてしまった楓太君御一行は、魔窟・管理局地上本部へと歩を進めるのであった……b  
Y裂神

「……なんだ上の不安を掻き立てる嫌な煽りは……… って裂神  
んんんツ!？」

第五十七話 「指令！ 管理局の内部を探れ！……………これ何てスオーク？」（後

最近の魔法少女アニメ……………怖っ！ マスコット滅茶苦茶怖っ！

それに未だ主人公の変身を見ていない……………



第五十八話 「慣れない場所で走り回ってはいけませんっ！………保母さん？」

東北の方の地震について様々なメディアで情報が錯綜していますが、嘘の情報を流したりする輩がいるのは信じられません。こんな時にどうしてそんな軽率な事が出来るのか、震災の被害にあつた人達に顔が知られないからとやる事が不謹慎極まりありません。

冒頭から愚痴っぽくなってすみません。今回無事の報告も兼ねて更新する事にしました。

稚作ではありませんが、少しでもこれを読んで気を紛らわす事が出来たら幸いです。それでは・・・

第五十八話 「慣れない場所で走り回ってはいけませんっ！……保母さん？」

管理局を歩いて思うのだが、本当にこんな奴らが次元世界全ての平和を守るうとしていいる組織なんだろうかと、ふと思った。だって、

『お早うございます！ シグナムさん！！』

声一番と張り上げて、入り口から出迎えをしていた男性局員の数にまず驚いた。

ざっと数えて十数名。これが何の打ち合わせもなく揃った数だと

思えば結構な異常なんじゃないだろうか。

しかも全員の目に映っているシグナムさんの姿は美化数倍増しのような、何つーか神聖視している節すら見られた。

その眼が余さずある一点に注がれていたのは言うまでもない。テメエら全員正直過ぎだ。

そしてヴィータを見掛けてもまた視線と挨拶が集中、その数は先のシグナムに匹敵する。

「ねえじいちゃん」

「…何じゃ？」

「こつて別にアイドルがファンとの交流会に出向いた会場とかじゃないよね？」

「その形容を何を見て思ったのかは敢えて触れんが……儂も概ね同意見じゃな」

「(コイツら本当に公務員か……?)」

そこらのアイドルでは足下にも及ばない容貌だとは思うが、それでも司法機関と警察が合わさった組織の人間がそこまで欲望に忠実でいいのかと不安になる。

そしてこの連中のせいで身体を調べ尽くされ今尚指名手配されているのかと思うと、怒りよりも嘆きの方が強くなってくる。俺はこんな連中から逃げ惑っていたというのか……

ちよつと鬱な考えを頭の隅に追いやりながら、二人の案内に従つて局内の廊下を歩いていく。

どうにも二人はこのような視線には慣れていくらしく、行く先々で衆目を集めているのにも関わらず平然と、

「じつちゃん！ 何か飲み物欲しくないか？」

「い、いやあ今はそんなに喉も乾いとらんし大丈夫じゃよ…」

「師匠、あちらに食堂がありますので昼になったらあそいで」

「う、うむ……」

……じいちゃんを囲んでいた。



えてきたり、「大丈夫、俺なら殺れる……！」と手に即席ブラックジャックとデバイスで魔力刃を形作った魔法を展開している奴がいたりとかかなりカオスな事になっていた。

俺はそれを後ろから眺めている訳だが、気づいていないのか三人は？

いやじいちゃんは気づいてさつきから冷や汗を浮かべているようなのだが、二人が全く意識していないでさらに密着度合いを高めて周囲にプレッシャーを与えている。

「……………うん。ちょっと離れてお」

このままでは何か暴動が起きかねない。

それを予感した俺は三人から距離を置きつつ、一人で局内をブラつくことにした。

何やら背後では「ヒヤッハー！ もう我慢ならねエ！！」と世紀末的な叫びを筆頭に、「てめ中年そのポジ変われやあああああ！！」とか「シグナムさん俺だ結婚してくれえええええ！！」だとかあと「ヴィータたんハアハア……！！」等といった変態的な発言が聞こえてきたような気がした。

そしてその後「師匠との時間を邪魔するなああああああ！！」という咆哮と爆音が聞こえ、「テメエら横一列に並べえええええ！！」纏めてぶっ潰してやらあああああああ！！」とバイオレンスな雄叫びと何かブチャツとした水つばい音が聞こえてきたような気がした。

「……………うん、気のせい気のせい」

俺は知らない。ちょっと鉄臭い匂いだとか焦げた匂いだとか！



関係者だと思われなくなかった俺はその場から全力で離脱。完全に逃げの態勢である。

(いいの？ あれ放っておいて？)

「(関わりたく無いでござる)」

(いや気持ちは分かるんだけどねえ)

「(そんな事より二人で局内探検ツアーしようぜ!)」

(それもそうねー！ でも私まだ実体化出来ないんだけど……)

え？ 何？冷たい？ 冷静な分析の結果だ、決して現実逃避なのではない！

すれ違う局員の顔が必死なのを尻目に、俺は惨劇の現場を後にした。

.....

話は変わるが、初めて来た場所において人がまずどんな行動を起こすのか考えてみよう。

自分の知らない場所に来て、普通何の用意も無しに動きまわったりはしない。これは常識だ。

アミューズメントパークなんかでも、入り口でパンフレットを買ってそこに書かれてある簡易マップを頼りに歩いたりするし、各地の目印になるようなアトラクションを目指して移動するためにあまり迷うといった事は無く、例えばその道のりが遠回りになったとしても他の売店を回ったりアトラクションを楽しむ事は出来る。

ではここで問題。ででん。

何一つ楽しむ様なアトラクションも無ければ、目印となるような建造物があるわけない室内。

そして何らマップや案内となるようなものを無い状態を、果たして何と言つてしょう？

「……………はい、単なる迷子です」

軽く自分の軽率さと迂闊さと間抜けさに嫌気がさす。

あの場から離れるためとはいえ、わき目もふらずに走ったせいか居場所が全然分からなくなった。

個人的にはまっすぐ走って出口まで一直線だったように思うのだが、果たしてどこで道を間違ったのか皆目見当もつかない。ただ、はっきり言える事は、俺は齡二十にして迷子という恥ずべき事態に陥ってしまったという事。皆には知られたくない事実がこうしてまた一つ、増えてしまった。

「とりあえず人探して……………」

(あつ、あつちに女の子がいるわよ！)

「え？ どれど」

「

「ねえティアー、何か食堂の近くで騒動が起きてるみたいだけど行ってみない？」

「イヤよ。それに騒ぎを起こしてるのはまた八神ってとこの囑託魔導師らしいし、あの人達の騒ぎに巻き込まれたらタダじゃすまないわよ」

「あー、あそこの人達皆出鱈目に強いもんねー」

「全く何でそんな人達が局員として正式に採用されていないのかしら？」

「ちゅあー？」

「……別にあなたの答えを期待してた訳じゃないからいいんだけどね」

「酷っ!?!」

漫才のようなやり取りをしている姦しい二人組を発見。

「……ただどこかで見たことあるような……? 特に青髪の短髪の子は何かこう……ああもうちょいで思い出せそうなのにい!」

頭を抱えて思いだそうと蹲ってしまったせいだろうか、少し離れた場所にいた筈の二人に姿を見られてしまい、

「ねえ、そこのお嬢ちゃん?」

「うーん何だろ何か足りないというか足りないというかむしろ着込んでいる？ 何が？」

「……無視されてるね」

「そのゴスロリっ子！」

「うひゃあ！？」

考え事をしていたため二人に声を掛けられている事に気づかなかった俺だったが、あちらは無視されて少しイラっとしたらしい。

気づけば俺は青髪の子に首根っこを掴まれた猫のように持ちあげられていて、その横のツインテールの子はムスツとした顔でこちらに強めな視線を送りながら、

「ここは子供が入ってきてもいい場所じゃないのよ。ひよっとして保護者とはぐれた？」

「いや、はぐれたというか逃げ出したというか……」

「逃げちゃったの？ 駄目だよ、家族は仲良くしなきゃ」

そう言って青髪の子は俺の首辺りの服を器用に掴みながら視線を合わせて言う。

だけど、その至近距離で顔を見たお蔭か、彼女に何が足りなかったのかすぐに分かった。

「そっか鉢巻きと露出……」

「は？」



そつだ思い出した。確かこの二人とはミッドに来た時に一番最初に出会った局の魔導師！

そして青い子の方は確か腹だしルックと鉢巻きだった！だから局員の制服を見た時何かが足りないと思ったんだ。二つの意味で。

「え？ え？？ て、ティア？」

「いや、私に振らないでよ……」

「青い子はもつと派手な服装が趣味だとばかり思ってたけど違うのか。B Jがお腹露出してたから軽い〇女だとばかり」

「違うから！？ 私別に〇女じゃないよ！？」

「いや待ちなさいスバル。今この子変な事言わなかった？」

「そつだよ！ 私恥ずかしい女じゃないもんっ！」

「そうじゃなくて、どうしてこんな小さな子がアンタのB Jの外見バリアジャケットを知っているのかって事」

「あ」

ちなみに○の中に入る言葉は皆さん想像して下さい。少なくとも俺は少女と呼べる年代の子を相手に直にその言葉を言うのは躊躇われる。

……確かフェイトにはもっと小さい時に言った覚えがあるけど、アレは仕方ないね！ だって格好が格好だもの！ うん！

だが、この時俺は自分の見た目がゴスロリ幼女なのをいい気に、自分の失言に気づく事が出来なかった。

「あなた」

「はい？」

「どうしてコイツのB」の事を知っていたのかしら？」

ツインの子の視線が鋭くなつていくのを見て初めて、自分の犯してしまったミスに気が付いた。慌てて言い訳を模索するも中々いいアイデアが出てこないまま俺は苦肉の策として、

「だ、だってあんな格好防御力とか低そうだし見た目からして派手だし一度見たら忘れられなくて……」

決して嘘ではない。あの時一回きりだったのに、顔を見ただけで思いつける程のインパクトがあったのだから。腹だしは健康的な色気があつて、おじさんは大好きだと思いまs……失礼、余計でした。

まあ同員なら普段の出撃の際に市民にその姿を見られても可笑しく無い筈だし、この言い訳もそれほど的外れなものではないと踏んではいるのだがツインの子の疑いの目は晴れてくれない。」

「ふうん………それじゃ何処で見たのか教えてくれる？」

「えっと、確か黒服のお兄さんを追いかけている時

」

言って気づいた。俺はバカかと。

あの時俺が逃げていた場所はハイウェイとまでは言わないが、普通に車の行き来がある道路だった。

そんな場所をバイクが出てくるまで逃げおおせていたような速度

で走っていて、尚且つ時間帯を考えても決して今の俺の格好のような幼女が出歩く道でも無かった。

なのに俺はどうして嘘をつけなかったのだろうか。嘘には少しの真実を混ぜるといいとははやくから教わった事なのだが、どうも俺にはその奥義は無理だったようだ。

「よっしゃあ！ 言質取ったわよ！」

「ティア？」

「この子多分あの指名手配犯の事で何か情報を持っている筈よ！  
これはお手柄よ！」

「え？ でもこんな小さな子が……」

「今じゃ九歳だってAAAランクを取れる時代なのよ！？ この前記録映像で見た高町さん凄かったでしょ！？」

「あー……………」

そう言われている高町さんですが、一体どんな映像が取られているのやら。俺が覚えている中で唯一記録が取られた戦いと言えば……  
……ああ、フェイトにトラウマ植え付けた模擬戦か。

そんな事を考えてみたところで、今の姿から自力で戻る事は出来ず、戻ったところでここは敵の本拠地。

遊びに来た筈なのに、何時の間にか窮地に立たされていたでござるの巻。どうしてこうなった……………」

「これで昇進昇給間違いなし！」

「そーいえばティア早くお金貯めて自立したいって言ってたもんね」

「あんのブラコンから離れるためよ！ 絶対その子逃がすんじゃないわよ！」

「了解っ！」

「了解するなよっ」

進退窮まるのはおれにしろいしうしう事を指すのだらう。おれにせよいしうてものか……………

第五十八話 「慣れない場所で走り回ってはいけませんっ！………保母さん？」

全く関係ありませんが、るろうに剣心のPSPのゲーム、アレ面白いです。コンボが墨の剣閃で表現されるのがもう！



第五十九話 「代償……言葉は重いのに、内容は軽いってどっぴい事だコルマ

……まさかの二カ月だけは何とか阻止！ つつてもギリギリで  
すがね！

もしも待っていた方々が居て下さったのならここに長らくお待たせ  
してしまつた事の謝罪と、相も変わらぬ駄クオリティーについて謝  
らせてください。マジすいませんでした……

最近頭を下げる事の価値が軒並み暴落してきた感のある私ですが、  
その割に暑くなつてきたせいで制汗グッズへの出費が増大しました。  
おのれ多汗………！

何かどうでもいい事を挟みましたが、それではどうぞ

第五十九話 「代償……言葉は重いのに、内容は軽いってとていひい事だ」

「うわ、すっげ久しぶりな気がする……」

「何言ってるんのアンタ？」

「怖いよー、ツリ目ツンデレっぽいテンプレ少女に拉致られて怖いよー、と」

「棒読みで言ってるじゃない！ てか誰がツンデレか！？」

「でもよくティアがツンデレだって分かったねー？」

「ふんっ、ツインテールでツリ目ときて、ここでツンデレ以外の選択肢はあり得ないッ！」

「だよーね!? これだけの属性でもうお腹いっぱいなのに、実は胸のサイズの事を気にしていたり日々影に隠れて豊胸体操してたりしているんだよ!? もう最ツ高……………に! ティアのツンデレは萌えるよ!」

「黙ってなさい二人共!」

「いやあ、何かあまりに久しぶり過ぎて少しばかり調子に乗っちゃったみたいで失敬。」

「要約すると、少しばかりヘマをやらかしてしまったワタクシ事神名命君Ver幼女がツリ目ツインと腹出しギャルに捕まってしまう、現在は尋問室ならぬテキトーな空き部屋にてツリ目からの質問に答えられている最中である。」

「まったく……というかスバル！ あんたも不審人物と仲良くしないの！」

「え？ でも折角ティアのツンデレについて語れそうな相手が見つかったのに？」

「語るなッ！？ あと何で私が胸の事を気にしている事を知ってるのよ！？ ずっと隠してきたのに！！！」

「ふふふのふ、ティアさんや、このスバルさんの目を侮ってもらっちゃあ、困るってもんですぜい……？」

「な、何よ……？」

どうでもいいけどこの二人、俺への質問を差し置いて二人の世界に入っちゃったようだが……まさか！？

「（これが世に言ひとせるの“百合”……！）」

「私の目にかかれば！ 服の上からだろうが相手のスリーサイズぐらい把握する事等赤子の手をバスターするより易しッ！」

「威張るなッ！？ そしてバスターすんなやッッ！！」

「キヤイン！？ い、痛いよう〜ティアあ〜……………それにそっちの子にもツッコまれたし……………」

ティア以外にツッコまれた事無いのに…………と妙な事を口走っているが…………まあ、無視だ無視。気にするだけ野暮つてもものだろうと思う。むしろ思いたい。

そしてツッコミでペースを取り戻せたのか、先のツインがこちらに向き直ってふふんと鼻を鳴らした。

どーでもいいけど、俺が外見通りの幼女だったら軽く泣きだしそうなレベルのオーラだ。ただ、これぐらいでビビっていてはゼミのメンバー相手に本性の根暗を隠して喋る事なんぞ出来やし

ない。あつ、これリアルの話な？

「さあて、アンタがああの指名手配犯の情報を持つてる事は分かってるのよ。キリキリ白状なさいっ！」

「青髪のお姉ちゃん、これって管理局的にはいいの？」

「まあ、実際に拷問してる訳でも脅迫してる訳でも無いからね、だから何か知ってる事とかあつたら話してくれないかな？」

「うんっ！」

「ちょっと待てやそこの二人！！」

「「はい？」」

敢えて惚けたように返事をするが、別にどちらも訳が分かっていない訳ではない。

そう、上記の会話は全て互いに確認をした上での行動に過ぎない。何故なら、今この場において俺と腹出し少女は同じ目的の下に協力し合う『仲間』なのだから。すなわち！

「何なのアンタ等のその連帯感！？ 何か私が悪役みたいじゃない  
！！」

「でもティア、いきなりこんな小さな子を捕まえて連れ去って無理矢理尋問なんて、誰がどう見ても不審者がロリコンかペドだよ？」

「つまり？」

「ティアは実は小さな女の子が大好きで部屋に連れ去りたかったって誤解されても、しょうがないって事だね？」

「ねー」と、頷き合いながら二人して厭味つたらしい笑みを浮か

べながらもう一人の少女を見やる。

「違うわよっ!? 私はまだ、この子が例の指名手配犯の手がかりになるって思っただけで! ロリコンなんかじゃないわっ!」

「……………」

「ほ、本当よっ! だからそんな冷たい目で見ないでよ……」

向こうはもう必死で取り繕っているが、その必要は欠片も無い。

実はこれ、アイコンタクトだけで向こうの青髪の芝居に付き合った結果だったりする。ただ、まさかここまで簡単に狼狽たえるとは思っていなかったけど。



隣の青髪を見ると無茶苦茶イイ笑顔をでそのツインの少女の肩に手を置きながら、分かっている分かっていると、まるで慈母のような笑顔で少女を抱き締めていた。

・・・その際、ツインの見えないところで顔から忠誠心が噴き出ていたのは、きつと何かの身間違いだろう。だから、彼女の背後に黒髪ロングで腕にタジャスピナー付けてる女の子なんて見えない見えていない。誰がなんと言おうとだ。

要するにこれ、誰が一番得をしたかと聞かれたら間違いなく青髪少女だという話。

ツインの子をからかうためだけに俺を連れ去る事を許容し、俺が犯人と繋がっていきようがいまいが関係無くツインをからかえさえずれば、そして今のような状況になりさえすれば良かったのだ。

「（何と言つ策士……！）」

「信じてよお………私は普通だよお………もう凡人でも何でもいいけど、とにかく変態じゃないのバカ兄とは違うのお………」

「うんうん、ティアは普通に“女の子”が好きなんだってこと、私がかちゃああんと、理解してるから大丈夫。ティアには私が付いてるから大丈夫だよ」

さらつと慰めの中に欲望が垣間見えたけど、俺はそれにツッコむ前に青髪からのアイコンタクトで、

『今からはR指定だ、幼女はどっか行きな』と、ついに一線を越える並々ならぬ決意の視線を俺に向けてきたので、空気の読める人間として、野暮な事はしたくないと俺は部屋をそつと出ていった。

決して、視線の意図に『ティア可愛いよティアハアハア』とか『ロツクは万全、勝負下着もオツケー、今日で勝負をキめる！』とか『邪魔したら粉碎する』とかなんてものは無かった。

ただ、部屋を出て扉の前に少しだけ聞き耳を立てたのだが、衣ずれの音が聞こえてきた瞬間、俺は一目散にその場を離れた。何となく、あのままだったら何か壊れるような、そんな気がした。

||  
||  
||  
||  
||  
||

(……世界って広いわねえ)

「(個人的には、管理局員にはまともな奴がいないって事にげんなりだけどね……)」

(あら？ さっきの女の子口調が抜けきって無いわよ)

「(うわっ、何か素で喋ってたぞ今!?)」

(徐々に体に精神が引っ張られてきているとか?)

怖い事言わないでほしい。それが事実だったとして、誰得だと言  
うんだ。

(一緒に風呂入れたり一緒に寝たりする理由が得られる人得じゃない)

？も無い断定に文句をつけようとして、何となく該当する人物たちに気が付いたので言葉を飲み込む事にした。何でここで否定できないかな俺……………

（だって幼女状態だとお風呂一人じゃ無理だって言ってたわよ？  
はやてちゃんが）

「（何故に？）」

（その変身魔法なんだけどね？ アルさんと夜天の書の合作らしくて、思考はともかく、感覚も外見に近づくそうなのよ）

「（だからって何だってんだよ…？）」

（つまりね？ 一人で頭を洗おうとするじゃない？ その時に例え  
ば命ちゃんが想像する女の子だったらどうなるかしら？）

言われてみて、生前近所で面倒を見ていた事のある園児たちとの入浴で、男湯に紛れていた子を洗った時に事を思い出しながら、小さい子が頭を洗う時の事を思い浮かべて……………

「あっ」

(気が付いた?)

思い浮かんだ情景には、その子供の頭に輪っかのようなものが付いていた。無論、言わずと知れたシャンプーハットなんだが、これを付ける理由と、今の話から推測するに、思っていた以上に悪い事になりそうな予感が背筋どころか体中を駆け廻った。

「……………一人で頭を洗えない？」

(ビンゴ) 子供はやっぱり、大人に頭を洗ってもらわなくっちゃね)

楽しそうに言うアークルさんだが、こちらら脳内大パニックというかその事を考えるだけで今から鼻血で貧血になりそうだった。

だって、もしも連中の思惑通りの効力の魔法だとして、これはアルさんじゃないと解けないと言っていたしあの人なら俺が言えば速攻で解除してくれるだろうと信じているが、何分周りの声が怖い。

夜天の書とか言ってる時点で、既にアルさんは懐柔された疑いが高い。つまり、今の発言の通りの『子供っぽい感性』を持っているとしたら、俺は一人で頭を洗えないどころかもっと恥ずかしい事になりかねない。

「ハッ!? だから今もこうやって迷子に!？」

感性が子供に近づいていると言う事は、すなわち考え無しの本能のみで動いてしまう傾向が高いと言う事。

だから怒る時は素直に怒るし、嬉しい時は素直に笑い、思った事は包み隠さず考えもしないで喋ってしまう。

さっきの少女達との会話のノリがまさにそれだ。俺は、いくら見た目が幼女で正体がバレないからという理由で、慣れない年下でも年頃の女の子との会話なんて軽快に出来やしない。それが出来ていたというのは、つまりそれだけ考え無しで喋っていたと言う事だ。

これだけならまだいい。だが、この状態が続くのはあまりにいただけない。

風呂では頭を洗えない。だが、夕食に苦手な食べ物が出たら？  
夜中にトイレに行くのが怖くなったら？



前者ならまだヴィータ辺りに食べてもらえばいいとして、後者はあまりに恥ずかしすぎる。男としては、同じ男である爺ちゃんやザフィーラさんには頼れないし、かと言って女性陣にも頼めないのは自明の理。むしろ女性に「暗くて怖いからトイレまで一緒に来てくれる？」だなんて、死んだって言うもんか。

ただし、今はこう思っていても実際にその時を迎えてしまった時、俺がどう行動するか断言出来ないからこそ今こうして悩んでいるのだ。

（あの子達も考えたわねえ、自白させる目的もあるんだろうけど、幼女、というか子供状態でならいつもよりはガードが低くなってる筈だしねえ）

「ん？ 何か今言った？」

（なぐんにも）

今聞き捨てならない言葉が聞こえたような気がしたが、向こうが  
ああ言ってるのだから聞き間違えか何かだろう。疲れてるのかな俺  
……

(うっ、こつもあっさり引き下がられるところを見ると、本当に  
感性が子供に近づきつつあるのかもね……だとすると、早めにこ  
ちらも準備しておかないと……)

何となく、家に帰る事が怖くなってきた。心配のし過ぎかもしれ  
ないが、そうでなかった場合の自分の恥さらし加減を考えるとこれ  
でも足りないくらいだ。

既に幼女に変身させられた時点で十二分に恥ずかし  
い？ 気にすんなっ！ ていうか、しないで下さい本気でお願いま  
す。

その後、食堂に戻って正座で説教されている二人の見知った女性と説教かましている祖父を確認し、これ以上いても問題しか起き無さそうだったので早々に帰る事になった。

食事は当然のように出入り禁止になったある二人がいてくれたので、局内ではなく街のレストランで済まして、帰りに頼まれていた夕食の材料を買って帰った。

帰り際、何故か爺ちゃんの手を繋ぎたくなったり、頭を撫でられて満更でも無いと思ってしまった辺り、もうだいぶ引き摺られてきたなあと内心涙ながらに思ったりもしたが概ね外出にあたって予想していた事態にはならなかった。

……ただ、帰宅した後のほうが色々大変だったという事だ

け、ここに明記させてもらう。詳細は語りたくないが、俺が元に戻れたのはこの日からさらに一週間も伸びただけ言っておこう。ぐすん。

第五十九話 「代償……言葉は重いのに、内容は軽いってどっぴいり事だコルマ

ちなみに、今回で二人組の出番はしばらくありません！ だって元々あまり出すつもり無かったですので。

短編集 「読むときは細心の注意と、お釈迦様のように寛大な御心をご用意の上

今回は前より早くに投稿できました！ まあそれでも長らく時間がかかったのは私自信の不手際なんですけどねっ！ 本当にすいません！

ただ、こんな小説でも一日のアクセス数がゼロにならないだけで嬉しい限り……見捨てないでくれた皆さんには感謝の念が尽きません。何のお返しも出来ませんが、こんなお話で良かったらどうぞ。

今回の話は勢いとメタとg d g dだけで構成されています。サブタイ通り、寛大な心をご用意の上、「まあカップ麺の暇潰しぐらいにはいいよね」という気軽な気持ちで、覚悟の決まった方はこのままお進み下さいませ。

短編集 「読むときは細心の注意と、お釈迦様のように寛大な御心をご用意の上

く持たざる者の反逆く

「みこっちゃん、私は常々思ってきた事があるんや」

「へえ、何ぞ」

「……………おっぱいには貴賤は無いんや……………」

「何を唐突に」

「確かにおっきいおっぱいは素晴らしい。揉むもよし、頬擦りするもよし、吸うもよしと三拍子揃ったまさに王道や」

「……そのどれもやった事は無いから断言は控えるが、大きい目を惹くのは確かだな」

「そや。だけど私は、だからと言ってちっばいを否定しようという世論に反逆するッ!!」

「何か、最後まで魂からの叫びみたいだぞ」

「最後まで聞けえい！ いいみこっちゃん!? おっばいに夢や浪漫が詰まっているとしたら、ちっばいは夢や希望を与えてしまったが為にあんな姿になってしまったんや！ そう！ 何と言う自己犠牲精神!!」

「………今度はオカルト雑誌にでもハマったのか？」

「つまり！ ちっばいを持っている女性は皆須らく博愛精神を持たまさに菩薩！ だからみだり乳振り回すような阿婆擦れとは違うんやッッ!!」

「そうか。なら、お前の言うところの阿婆擦れ達から逃げた方が良いと、俺は思うがな」



「へ？……………つて、すずかちゃんに神楽ちゃんになのはちゃんに  
風花ちゃんまで、どうしてそんなに殺気立って……………ぎにゃああ  
ああああああああ……………！」

「  
    憐れな。何をトチ狂ってあんな事を言ったのやら」

「それは彼女がこの家の女性陣の中で、一番胸囲のサイズを気に病  
んでいるからでは無いでしょうか？」

「アルさんはそうでも無かったり？」

「私は特にそういう事は。ただ一人にさえ気に入ってもらえば、そ  
れで私は満足です」

「成程。でも、毎日はやてと夜部屋でござござやってるみたいだけ  
ど、それは関係無いんだな」

「……………何故それをござ存じで？」

「はやてが『仲間が増えた!』って喜んでた」

「少しお待ちください。少しあの中に混ざってきますので」

「……………行っちゃったなあ。まっ、最後の砦にヴィータがいるのを忘れるなんて二人とも焦って……………あれ? 部屋の中なのに急に暗

く  
「

〜ある日の電話〜

『prrrrr……………あっ、もしもし? 俺だよ俺、御厨さんだよ』

「……………その出だしからだと思われか何かだと思われと思うぞ?」

『大丈夫だろ？　そもそもお前宛の携帯に直通で行くようにしてるし』

「それもそうだけどさ。で、今日は何か用か？　義手が完成したとか」

『いやまあ、そっちの方は博士のモチベーションが急降下中だからもう少し時間が掛りそうなんだが……』

「何か身内の不幸とかあったとか？」

『仮にそうだとして！　お前は普通にそんなところを突つつくんじやありません！　不謹慎過ぎるわっ！？』

「やだって、そうでもなきやモチベーションが下がる理由思いつかないしさ。それとも失恋とか？」

『……………似たようなものかな？』

「何で疑問形なんだよ。でもそれじゃ、今回の電話は別の話って事か？」

『そゆこと。いつも女を侍らしているリア充に（ブツツ！！）痛てえ！？ 思いつきりマイク打撃しやがったなテメエ！？』

「くだらない事言うからだろうがボケ。それで本題は何？ もしも本気で下らない内容だったらお前を以前転移の旅で発見したチーズの惑星に送り飛ばして第二のジエーにしてくれる」

『本気で止めろよ！？ …………… いやさ、少し女性についてお前の意見を聞きたいと思つてな。今生憎と周囲に女しくない状況でこつという事聞ける相手がお前ぐらいなんだ…………！』

「はっ、人をリア充とか言っておきながら、さてはアレか？ どの女の子選べばいいのか分からないとか、皆魅力的だから選ぶに選べないとか、そんな虫唾の走る程歯の浮いた悩みか？」

『ナメんなよ！？ そりやお前、最近次元世界規模で搜索されたりしてるし何も悪い事してねえのに懸賞金がどつかの管理外世界の財閥が出してるつて話とかあつて迂闊に外出歩けねえつてのに、研究<sup>ち</sup>所でも最近変な目で見られて居心地悪いんだよ！ 癒しがロリしかないんだよ！』

「何がナメんなだコラ！？ 俺だつて魔法で誤魔化さなきゃ外歩けないし出る時だつて絶対に監視役付くしメイドは毎晩枕元で仁王立ちだしそもそも追っかけてる筈の管理局員は基本的にアホしかいね

えし！ あんな連中に人生を振り回された俺の気持ちがかんのか  
！？」

『はっ！ それでも惚れてくれる相手がいるだろうがこの幸せモン  
！』

「テメエこそ懸賞金まで出される程想われてるじゃねえか！」

『だから困ってたんだよ！ お蔭でうちの連中の過激派がその財閥潰  
そつとか言い始めてんだぞ！？』

「知ったことか！ 一緒にいる連中の手綱ぐらい引いとけ誑しがっ  
！！」

『テメエはその手綱を首輪と一緒に引かれてるがなっ！！』

「『ぶっ飛ばすぞテメエ！！！！！！』」

.....

「.....で、これで満足か？」

『おう、すまねえな。こうでもして発散しとかねえとストレスで十  
円はげが出来かねん.....ッ』

「まあ、こんなんで良かったら俺も付き合っってやるよ。どっせ家で  
暇だしな」

『忍びねエな』

「?万でいい」

『そこは“構わんよ”って合わせるよ!..?』

〜ニートとロリと番犬の留守番〜

「……暇だなあ」

「オイザツフィー、何か芸とか無いのか？ ほら、火の輪潜りとか、日輪の輪っかの無限コンボとか」

「前者も無理だが、後者だと俺がダイヤ最強になってしまっが、それでもいいならお前にやってやってもいい」

「じゃパス。ならミコトは？」

「片手でblank付きの俺にはねえよ。お前こそネコ耳メイドで『じ子だによ』とかやれよ。目からビーム出せよ」

「ふざけんな。そんなこつ恥ずかしい事出来るか。あと、それってじつちゃん好きかな？」

「真に受けん方がいいぞ。雪而殿だと純粹に褒めるか愛でるだけで終わる」

「だな。爺ちゃんだと可愛いので終わらせるだろうな」

「ちえ。じゃあ何か無いか？ シグナムに大差付けるようなアイデア」

「「ロリじゃまず無理だな」」

「よっしゃ一人と一匹、お前らアイゼンの消えない染みになりたいんだなそうなんだな！？」

「「はいアウト」」

「なあっ!?!？」



「会話文の中で感嘆符付ける程取り乱したら負け” そう決めたのは他でも無いお前だった筈だが？」

「卑怯過ぎんだろ！ 二人がかりで攻めてきたじゃねえか！！」

「バカめ、こういうゲームでは自分一人で戦うのではなく、誰かを蹴落とす方が勝率が高いのは自明の理」

「それが分からないようでは、ベルカの騎士も地に堕ちたな」

「畜生……！ なら今度はしりとりだ！」

「じゃ俺からな。チヨココロネ」

「なんでそれからなんだよ………ネウロ！」

「それは創作物のキャラクターだろうに、ロベス＝ピエール」

「おっ、ザフィーラさん世界史好きだったり？ ルビー」

「コイツ古いモン好きだかなあ、ビール」

「温故知新というだろう？ ルール」

「その返しは……………ルカニ」

「あつそれ呪文だろ！？ ニフラム！」

「お前が最初に創作物アリにしたらろう……………ムカデ」

「そこは空気を読んで欲しかった……………でんでんむし」

「それずるくね？ しいたけ」

「というかこの形式何時まで続けるつもりだ作者め……………毛虫」

「死体。あつ、それは後二百字ぐらい稼ぐまでってさ」

「ふざけんなつ！ どうして作者の文章稼ぎにアタシらが付き合わなけりゃならないんだよ！？」

「ぶつちやけする事無くて暇だから」

「……………そうだったな。それじゃ、いか娘で」

「何時か書きたかったやり取り」

「何でだよはやて！？ 何でこんな……………っ」

「もう時間が無いんや！ 私が、私がやらなといけな事なんや  
……………」

「だからって！」

「でも！」

「「コイツだけは絶対に譲れないッツッ！！！」」

「……………あの、風花ちゃん。あの二人は一体？」

「あつ、なのはちゃん。アレはね、“昔二人がゲームをしていてデ  
ンションが上がってキャラクターに成り切って対戦する”っていう  
やつの再現ブイを撮るからって」

「再現ブイ！？　なんでそんな事をやってるの！？」

「何でもいなかった空白の時間を埋める為にとって名分で、後はただ  
単に懐かしいゲームで盛り上がってるってだけの話なんだけどね。  
様子が面白そうだからって神楽ちゃんがほら、あつちで撮影して  
るでしょ？」

『いいねいいねえ〜！　ってはやてちゃん！？　それはいくら何でも近づきすぎ！』

『何言つとるん？　昔はこれぐらいの距離でコントローラーを握って熱い対戦を繰り広げていたもんじゃない？』

『懐かしいなあ。確かRPGだと一人でしか出来なくて、交代でやるために二人羽織り方式をやってたんだっけ？』

『そうそう！　私がみこっちゃんの膝に乗って先にプレイして、交代する時はそのままの姿勢でみこっちゃんが手を伸ばすってやつ』

『何当たり前のように羨まけしからん昔噺をしてるのさ！？　羨ましいから今すぐ私達もやろつよみこ君！』

『いい歳こいてするかボケっ！？』

「じゃははは……と」るで、どうしてそんな昔の話を今更？」

「それはね？ 作者がそういう話を創るとヒロインが決定しちゃうからって自粛したんだよ」

「ほえ？」

「作者つてさ、『リリなの』原作と二次含めて、一番はやてちゃんが好きらしいから……」

「……えこひいきしないための措置だったんだね」

「実際、その場面を文章化しようとして、ムシヤクシヤし始めたのとリアルで恋愛経験が無かったから書けなかったつてさ。幼馴染の女の子はいたクセに、情緒の発達が人一倍遅かったからね作者。男女の関係だつて知識として知ったのは中学二年の冬だったし」

「遅咲きにも程があるよ!？」

「うん。私もそう思った。でも一番に言いたい事はね……」

「な、何…?」

「  
今回メタ話多過ぎな上にグダグダ過ぎんでしょ  
おおおがああああああ！ それに唯一ヒロインらしい仕事した  
のアルさんにヴィータちゃんだけって何なの!? メインヒロイン  
総すかんとかふざけてんのかグオラアアアアアアアアアア!?!?!」

「落ち着いて風花ちゃ………きゃあ!?!」

『『『魔王様が膝を付いた!?!』』』

「そのの三人! それどういう意味なの!?!」

ぶらり



短編集 「読むときは細心の注意と、お釈迦様のように寛大な御心をご用意の上

あゝ、MP3ぶっ壊れた……………何で水に落としちゃったかな私  
は……………ッ



番外編 「暑いときはプール……でも無いかもしれないな」

『  
うっ だあ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ 『 『 『 『 『

『  
あ び い  
『 『

現在八神家、真夏の節電体制で皆が死屍累々となっているのであります。

もう暑いのであります、扇風機如きじゃこの暑さは乗り越えられないのであります。

「てわけで妖精ちゃあああん、氷出してえええええええ」

「リインは妖精ちゃんという渾名ではありませんっ！ そして、リインはその考えに同意します！ ナイスアイディアだと言わざるを得ないのでてややっ！」

だいぶ頭がやられ切って俺達の口調はゲシュタルト崩壊を起こして、リイン？も可笑しなテンションのまま氷を召喚し、そのまま互いの頭の上に直接乗せる。

「「きんもちいいいい………!!」」

氷の冷たさのお蔭で少しは落ち着きを取り戻し、改めて八神家の面々を見渡してみる。

「もう脱ごうかな……」

「だ、ダメだよ風花ちゃん……ヴィータちゃんぐらいじゃなきゃ、私たちがじゃ犯罪に……」

「そうですね……幼女以外でそれは……あと、命様の前で貴女のような危険人物？は絶対に上着をパージしないで下さい……幼女はともかく」

「テメ、それアタシに喧嘩売ってんだな？ よしシグナム買ってやれ」

「断る。こんな死ぬるような暑さの中で私が戦おうものなら、熱で死ぬのは真っ先に私だ」

「うううう、あつーいーのー！　なのははなのははもう我慢できないのー……！……」

「なのはちゃん、口調が退行してるだけじゃなくて混ざってるよ…」

「ていうかみこっちゃんずっとこいで！ リインは私のデバイスなんやから、私が氷の恩恵を受けるべきそうすべきなんや！」

「はやてちゃんも、ただでさえ暑いんですからもっ少し落ち着いて下さいよぉ……はぁ」

「……」

おう、皆も皆で死にそうだ。そしてザフィーラさんは凄くヤバそうだ、いつもの狼モードのせいで熱の籠もり具合が殺人レベルっぽい。

ミッドチルダも現在は節電フェアを行っているせいで、そう簡単にエアコンに頼れなくなっている。

そして例年に無いと言う猛暑日のせいで、八神家は全員がダウン寸前。今すぐにも涼を得なければ全員が茹ってしまいそうな程だ。

「あれ？ そーいや爺ちゃんが居ないな？」

「じっちゃんならさっき買い物に……」

「この暑さでか？ 死ぬんじゃない？」

「おいバカ止めろ。物騒な……って、あながち冗談じゃ済まない暑さだが……」

気温にして37度。体温どころか人なら風邪の体温は流石に、いくら元が神様みたいな存在とはいえ爺ちゃんも危ない気がする。気がするだけで、一向に動く気にはなれないのだが……あつ、氷溶けた。

いい加減に全員が暑さで気まで可笑しくなりそうなその時、







死にかける表情に活力が戻り、期待に満ちたそれをただの紙に注ぐ。

否、それはただの紙に非ず。この暑さを越えるための、それはまさに救世主……！

「買い物してたらくじの引換券がもらえてのう。そして試しにやってみたら、家族分の『クラナガンロイヤルプール』のチケットが当たったの。これで涼みに行こうじゃないか」

『 『 『 『 『 おじいちゃんああああああん！！ 『 『

「爺ちゃん最高！マジで愛してる！」

「じっちゃんアタシだ！結婚してくれいや本気と書いてガチと読

むぐらい!!--」

「待てええええええええええ!?! 命にヴェータ、何先走った事言  
つてるんだああああああああああ!!-- 雪而殿と付き合うのは私  
だああああああああ!!--!!--!!--」

「「やんのかテムエ!?!」」

「待つて命君はおかしいからね!?! そこに混じるのは可笑しいか  
らね!?!」

暑さで既に参っちんぐだった俺達にとって、その齎されたチケッ  
トの衝撃は残っていた理性をふっ飛ばすのに十分過ぎる威力を備え  
ていた。いざ往かんっ、涼を求めてツツツ!!!--

「……俺、今ほどプールに来れた事を幸せに思った事無い……！」

「そんな泣く程言われると僕も嬉しいのじゃが、それはどっちに対して言っておる？」

「ん？ そりゃこうして誰の目も気にせず泳げる事以外に何かあるよ？ あのチケットがプレオープンのものだったお蔭でほぼ貸し切り状態だから、俺も指名手配考え無いで済むし！」

爺ちゃんが貰ったチケットは、つい最近になって完成した施設のプレオープンチケット。つまり、今ここには俺達以外の人はあまりいないお蔭で、俺にかけられている手配の事を気にせずに済む。

簡単に認識阻害の術をアルさんがかけてくれているのもあって、もう気兼ね無く泳げるとあって俺のテンションはフォルテッシモ。このままクライマックスにフィーバーしてくれるわ!!

「……ちなみに、水着の皆は」

「さあ時間は有限だ！ てことで俺は先にあのウオータースライダー行ってるから爺ちゃん他を待っててね〜！」

「ああ！？ 逃げるでない、儂だけ女の子集団にいるというのはあんまりに居心地がっ!？」

ここは水着のレンタルも行っている施設で、先程着替えている最中に女子の会話をうっかり聞こえてしまった俺達は、なるべく女子連中と会いたくないと考えていた。

だって、聞こえてきた会話……

『うーん、最近の水着レンタルは色んな種類があるんだねえ。あつ、これなんかみこと君鼻血ものかも！』

『待ちなさい。そんな破廉恥なものを……む、胸を強調するものは卑怯です。下劣漢にも劣る愚行です、今すぐハンガーに戻しなさい』

『へっへーんだ。メイドは胸に自信が無いからそう言うんだろうけど、そこで引く神楽ちゃんでは無いのだよと言わせてもらおう！八神家随一の戦力をここでアピールしないで何としようか！』

『はあ！？ 何自分が一番大きいみたいと言ってるのさ！ 私だって最近下着のサイズ変わったんだから！』

『マジでか！？ そなら風花ちゃん、私に是非サイズ測定を……！』

『寄るな変質者！？ それにはやてちゃんもっと自分のサイズを気にすれば？』

『おぐはっ!?!?』

『はやてちゃんが血を吐いた!? ダメだよ風花ちゃん、はやてちゃんはこの中で一番小さい事を気に病んでいるんだから!』

『そう言いつつすすか殿の水着は危ない気がするのだが………布地の面積的に。私もそれくらい積極的に………』

『シグナムなんざスク水で十分だろ。そっちの方がエロいぞ』

『貴様にこそお似合いだろうがロリ騎士!?!』

『んだとお!? アタシはもっと可愛いものの方がいい! 誰が好き好んでそんなもん着るか!?!』

『(実はそれが一番二人に受けそうな気がするんだけど………しかしかも、隙を窺いつつスク水を着る風花ちゃんの強かさが………)』

……頼むから、“わざと”聞こえるように念話まで使って  
そんな会話をしないで欲しい。こちらが羞恥で死ぬる。

「儂のあんな後の水着審査をしるというのか！？ それでもお前は  
儂の孫か！？」

「孫だからこそ！ 爺ちゃんには見目麗しい少女達の逢瀬をだね！  
俺ってば親孝行じゃね！？」

「ならば儂と一緒に逝こうか！」

「離して〜〜！ お願いだからあんな会話の後の水着姿とか、幾  
ら何でも羞恥心でヤバいんだってばあああああ！！！！？」

走り去るうにも羽交い絞めにされているせいで身動きが取れない。

男二人で見苦しい現実逃避をしていると、ふと背後から声が聞こ



えてきた。

「……すずかちゃんずっつい」

「はやてちゃん？ そんな親の仇を見るような目で見られると困るんだけど……？」

「でもすずかちゃんは可笑しいよ。そのスタイルは何なの、夜の一族って皆そうなの……」

「あーあ。なのはちゃんとはやてちゃんが暗黒面に堕ちちゃった」

「……勝者の余裕というのは、こうまでも理不尽にストレスを催すのですね……！」

「……神楽ちゃんとすずかちゃんは、私達八神家女子を敵にした……！」

「そう言ってる風花ちゃんだって相当のものですよ？ それに水着が……特に胸が凄い事に……」

「あははー、何と云うか、思ったより水着のサイズが小さくて……形が」

「シグナム。分かっていると云うけど、抜け駆けしようなんぞ考えるんじゃないぞ……?」

「ふっふっふ、それは貴様とて同じであるじ……?」

……

「爺ちゃん」

「おニト」

「覚悟を……決めようか」

もう逃げられない。振り返ったら、自分がどうなるかも分からないけど、もう逃げる事は叶わない。

俺達は決意を胸に、声のした方を同時に振り返り

「BUY&amp;T IK(T+?)\*L(YT  
%DECY?»

「I( )%#\$& }? }~ = P = (O&amp;#p;#”  
「!!--」

「あっ、みごと君……って鼻血が凄い事に!？」

「じつちゃん！ その出血量はマジでヤバくないか！？ しゃしゃ  
シヤマルウウウウウ！！ 回復魔法を今すぐにいいいいいいいい  
！……」

・・・嗚呼、悔いなんてあるものか……

俺達は最期、女神達の姿を目に焼き付けて・・・そのあまり  
の衝撃に脳が耐え切れずに意識を落とした。嗚呼、何だか今なら時  
が見える気がする……

番外編 「暑いときはプール……でも無いかもしれないな」(後書き)

ちなみにこれ、次回に続くんです……

後、水着に関して描写する気は無いんで、描写に関しては脳内補完  
でお願いします。まあリリナの勢は水着姿の材料が多くて困らない  
んですけどねー

番外編 「俺達の夏は……これからだ？」（前書き）

やー、私はまだ夏休みなのですが、もう高校生以下の方は二学期ですかね？

二学期制になってるところの夏休みと違ってどんな感じなのかは知りませんが、私の地元は今頃から運動会をやっていました。残暑厳しい時にしなくても良いだろうと恨み言を呟いたのは一度や二度じゃききません。

そしてギリギリ一カ月更新……ですかね？ それではござい。

今回は、今までずっと出せなかったゲストキャラクターがゲスト参加しています。あくまでも『ゲスト』参加と逃げ道を作っている辺り、出来への自信の無さが出ている事をお許しください。それでは今度こそござい。

番外編 「俺達の夏は……これからだ？」

「し、死ぬかと思ったあ……………！」

「よもや鼻血で死にかけるとは……………」

うちの女性陣のスペックをナメ過ぎていた。

水着姿を一瞥しただけで危うく理性が吹き飛びそうになったものの、根性とヘタレを全開にしてその場を逃げ出す事で事無きを得た。

「しかし命、あのまま逃げてきて良かったんじゃろうか？」

「なら爺ちゃんだけでも戻っていいんだよ？ 俺は全然構わないから」

「自分だけ逃げるつもりなら、その幻想はいち早くぶち殺すべきじゃない。むしろ俺が殺す」

「こええよ！？ 冗談だから、ちゃんと二人で逃げようぜ！？」

「……戻る選択肢は無いんじゃない？」

当たり前だ。戻ったら今度こそ死ぬかも分からないし、本能の赴くままに動いた事を考えると目も当てられない。

しばらく休もうと二階に上がると、そこには子供用の浅いプール



が広がっていて、『レストスペース』という表示からここなら丁度良さそうだったのでとりあえず売店を探す。

「……………」

「どっした爺ちゃん？」

「いや、命お主、ミッド語読めたのじゃな？」

「ああ。以前エリキヤロがうちに來ていた時の暇な時間に教えて貰ったんだよ」

「……………」

その眼やめえ。俺だって恥を忍んで頑張ったんだ、だからそんな憐れむような目は止めるや爺ちゃん。

少し居た堪れない雰囲気が出来あがり、どうしようか悩んでいると運良く売店の香ばしい匂いが。ミッドにも焼きトウモロコシってあるんだ……

「……な？」

「へいらっしゃ……いい？」

「うむ？ 客ならちゃんと持て成さなければならんだぞ？ 変な声を上げるんじゃない」

「ふうむ、良い匂いじゃのう。」じつと少し一服していくかの

「……あるえ？」

「（どうしてお前がここにいんの？ ついに職が？）」

「（そこから先は聞かなかった事にしてやるから、これ以上触れたら……分かってるな？）」

見覚えのある男が法被を着てトウモロコシを焼いているものだから吃驚した。確かに何でも屋を営んでいるとは聞いているけど、なしてこんな場所で？

「では何が良い？ おススメはこのとうもろこしだぞ！」

「ふむ…では、それと焼きそばを頼む。命は何が良い？」

「あ、ああ…ならトウモロコシを二つと、チーズフォンデ（ガタツ）…冗談だ。たこ焼きを頼むわ」

「うむっ！ では早速焼くのでしばし待つかいい！」

銀髪で眼帯という中々に強烈な個性のヴィータ程の背丈の少女を伴っての、こんな所でのバイト……まさか……!?

「……………そうか。コイツも俺と同じ……無職なのか」

「オイコラ本物のニート野郎。その、まるで同情しているような視線を止める。俺のはれっきとした仕事で、バイトでも無ければコイツは決して後ろ暗い事情とか無い」

「……………うん。誰だって、最初は認めたく無いよね。このロリコン」

「テメエ本気でぶっ飛ばすぞ!？」

「こらっ! お客様と話していないで、ちゃんとたこ焼きと焼きそばを作るのだ! 姉は焼きトウモロコシしか作れないのだぞ?!」

「ああっもっつ! わぁーったよ! 覚えてるよニート!」

「ニートニート言うなっ!?! それすっごく気にしてるんだからな

!？」

・・・これはあくまで番外であり、命には既に義手も取り付けられてはいるがそれでも今なお無職である。まあ、地球での翠屋でのバイトぐらいでぶっちゃけヒモである。

「ヒモ言つなああああああああああああああああ!？」

「これ、命！ いきなり大声を出すでない！」

「あつ、すいません……」

何だか聞き捨てならない言葉が聞こえてきたような気がする……しかし、何だかやたらメタかったような気がする……

変な電波にツッコミを入れているとトウモロコシの方が温め直すだけだったらしくすぐに出来ていた。何と言うか、小さな子が背伸びして頑張ったという感じがして無駄に出来ない気持ちが湧きあがる。

「よしっ、出来たぞ！」

「おお、美味しそうじゃな。ありがとうの、お嬢ちゃん」

「ああ十分美味そつだ。凄いな君」

「ふふん。こつ見えて姉は焼くのと炒める系の料理は得意なのだ！」

「へえー」

うん。頑張った子って誰彼構わず応援したくなるよね。それに自分の事を『姉』と呼んでいるし、きつともっと小さな妹がいて面倒をみているんだろう。

「……こんな良い子を……お前という奴は……！」

「いやそんな碌でも無い奴を見るような目で見られても困るんだが！？」  
それにコイツは見た目よりもずっと大人だぞ！？」

「貴様！？ ま、まさか大人とかいう言葉で……?!」

「何を想像した！？ お前今、何を想像した！？ 言っとくがお前の考えてるような問題は一つつつつ切、無いからな！？」

そ、そうだったか……なら良かった。

もしもこんな良い子を毒牙にかけてようものなら、俺の全力を賭して丸焼きどころか消し炭すら残さず燃え散らすところだ。

トウモロコシを受け取って近くにあった席に座る。少し血と一緒に水分も無くなったからついでにカクテルも頼んでおいた。昼間からアルコールとも思っけど、ちゃんとノンアルコールなので問題無い。

「かき氷だけじゃ無いんだなあ、ブルーハワイ」

「僕はかき氷ならみぞれ一択じゃがの」

「俺は宇治金時も好きだけど、やっぱり苺だな」

「みぞれじゃろ」

「人それぞれだろ。押し付けるのはどうかと思っせ爺ちゃん？」

「人の店の前で下らない言い合いしてんなよ。さっさと食べ、焼きそばとたこ焼き出来たら」

「「オリース」」



「……無駄に息びったりだな」

いやあ、やっぱり頼んだ物全部揃ってから食べたかったんで。頑張って適当な話を考えていたところだ。

受け取った品物は金額の割には量の少ない、まさに“こういう”所特有な感じのものだった。知り合いなんだから割増しにしてくれても良かるうに。

「こっちは商売だからな。お約束もそうだが、利益が一番だ」

「夢の無い商売人の未来は暗いと思う」

「うっせ。味は値段以上のつもりだ、しっかり味わうんだな」

「ほほう？　なら舌の肥えた命さんが確かめてみようじゃないか」

「上からかオイ」

ふふんだ、こっちは毎日はやて達の料理で贅沢しているのだ。そう簡単に高評価は出さ……

たこ焼きを一口。熱々の中身からは、出汁の沁みた衣とタコの風味がふんわり口の中に広がり、おそらくは隠し味か何かだろうが衣に含まれているピリツとした味がネギの甘みで中和されてソースと鰹節の奏でる味の相乗効果が………！

「じゅうじゅう　まああああ　いいいいいいいい　ぞおおお  
おおお　おおお　おおお　おおお　………」

口からのみならず、目からも怪光線が飛びだし感動が涙ではなく破壊力となって外に飛び出した。何このたこ焼き美味過ぎる。

「うおう！？ お前もしかしてリアクションマイスターか！？」

「め、目から光線だと！？ まさか魔導師か！？」

「いや目から光線は魔導師というか超人だろ！ そんな無駄な魔法の発動の仕方は無いだろ！」

「お、おおお………！」

「あれ？ まさか爺さんの方」

「う……………ま……………い……………ぞ……………」

「ぎゃー!? 二人も化け物がー!?」

隣では爺ちゃんが口からプラズマ火炎を噴いていた。一瞬亀の大怪獣が頭に過ぎったけど、俺もそんなもんなので美味しさに咽び泣く事にしよう。

……結局。この後も暴れ回った俺達は爆発するナイフと無数の銃火器による一斉掃射によって強制退去を余儀なくされた。でも美味しかったなあ……

「ぶはあ……アレ何であんなに美味しかったんだろ」

「まさかあれほどとは……はやてちゃんの料理に匹敵するのではな  
いかの？」

「うん。事前の印象が最悪だったからなあ、そのギャップで余計  
に美味しく感じたのかもしないし」

「それは失礼過ぎるじゃろ」

「でも爺ちゃんだって、さっきの奴ロリコンとか思わなかったのか  
？」

「それは無かったのう。ヴィータちゃんといつも一緒にいたせいか、  
そついう誤解はしょっちゅう受けておったしのう……」

「あー……」

自分も同じ誤解を受けていたからそうは思わなかったのか。ただ違う所があるとすれば、ヴィータの場合その誤解を普通に喜べるという事か。爺ちゃんも苦労してきたんだなあ…

追い出されて一階に戻るとすぐにうちの連中と遭遇した。但し、全員ではなくはやてとヴィータの二人だったが。

「およ？ 二人ともどこにおったん？ 探してたんやで？」

「おう、ちょっと二階で休憩してたんだよ。子供用の浅いプールとフードコーナーが設置されてたからな、お蔭でさっきのダメージも抜けたところだ」

「ほうほう。なら今はもう大丈夫なんやな？」

「……直視は無理だけだな」

はやてはコンプレックスを感じているそうだが、それはうちのチート気味にスタイルが良い連中と比べているからであって、世間一般に基準だと十分に優れたスタイルだ。

つまり、コイツのネタに走ったであろう旧スク水Ver白であっても俺には些か刺激が強いのだ。むしろコイツの場合、これを狙っている気がしてならない。

「浅いプールがあんのか!？」

「う、うむ。それにここほどの大きさは無かったが、流れるプールもあつたから泳ぐ練習には丁度い」

「よっしゃなら行くつ今すぐ行くつ! さあ善は急げって言うかんなっ!」

「ほっ!? そんなに引つ張らなくても~~~~~!」

「……あれは?」

「シグナムに先を越される前につちゅーこつちな」

「乙女だねえ」

「やねえ。うちで一番とちやう?」

だたと頷き、爺ちゃんの手を引いて二階に向かうヴィータを見送る。はやてとお揃いの紺色スク水だが、どうしてもあれこそがヴィータのために誂えた水着に見えて仕方が無い。なんたって名札『びいた』だかね。

しかし、そこではたと気づいてしまった。



「なあなあ」

「何カナ？」

「何で片言になってるのはツッコまんけど、なあ、分かっとなるんやろ…？」

「一体何が分かったイウノカナ？」

にっしっしと厭らしく微笑む様は、さながら権謀を巡らせる狸のよう。しかも一歩一歩にじり寄ってくるのはいつそ恐怖すら煽る始末。多分だけど、この場合の立場は普通男女が逆な気がしてならない。

白スク水に迫られる様は、いつそ嬉しいシチュエーションの筈なのに嬉しくないのは何故だろう？ 俺は一体どこまでヘタレなのだ

ろっつ？ いやいや、ここで逃げ腰になるのは仕方が無い事だ、だから俺がビビりという話では無い筈。多分きつとそうだと嬉しい。

「他の皆はまだ二人を探してる最中。そして、一番に見つけたのがこの私……………後は、分かるな？」

「あんまし分かりたくないかなあ…？」

「なら……………その体の刻みつけたる！」

「ぎゃあああああ！？ それ男女逆だつてばあ！？」

「ならみこっちゃんが襲ってくれるん？」

「おかしい！ 言葉が明らかに可笑しいかな！？」 『襲ってくれる？』 『つてのはニュアンスが絶対におかしいかな！？』

襲うつてのは決して恣意的に行ってもらう事では無い。だから襲つてくれると尋ねてきた時の顔は絶対に矛盾してると思う。そんなに顔を輝かせてもらっても困る。

駆け足でその場から離れるが、何処からか取り出した（決して出所は見えていない）たら見えていない）デバイスを構えて魔法陣を無数に展開、そこからは黒い短剣状の弾丸が成形されていく。

「ほな………実力行使で捕まえたるからな、みこっちゃん！」

「それは御免蒙るので俺は逃げるッ！」

他の連中が来る前に逃げきるッ！

．．．．．うん、これってどう考えてもフラグだよな？ 何で  
無駄に建てたかな俺……ッ！？

番外編 「俺達の夏は……これからだ？」（後書き）

TOX面白いんですよえ、全く関係無い話ですが。

……ええ、ティポ可愛いよティポ。

すんげえ番外編 「ネタが無かったんや……一発ネタしか無かったんや……ッ

もう本当にすいません。何がすいませんって、もう全くと言っていい程本編のネタが思いつかなくて筆ならぬ指が動いてくれなくて……

そんな折、何故か頭に浮かんでしまった一発ネタをとりあえず文章にしてみました。

以前書いた番外編との繋がりがどこるか本編に一切関わらないお話ですが、本編で作者の力量不足故に不遇だったあるキャラの救済……  
…になればいいなあ。

すんげえ番外編 「ネタが無かったんや……一発ネタしか無かったんや……ッ

「はあああ……………」

「そ、そう気を落とすなつてば司書長？ なつ、ほら酒も注いでやつから今日は飲もう！ とにかく飲もう！」

「……………はあ」

「（あかん、ダメージが予想よりデカいわこりゃ）」

ミッドチルダ首都クラナガンの外苑部、高層ビルの立ち並ぶ首都

圏を離れたそこにある一軒の居酒屋。

元々ここは、同じスクライア部族出身であり幼馴染兼上司で現在、鬱屈としたオーラを噴出させている男であるユーノから教えてもらった穴場中の穴場だ。

かの三提督でさえお忍びで来るらしいという、一介の司書風情の俺が来るには場違いな感じがしなくもないがおやつさん曰く、来者は拒まない主義らしい。だからこそ今のユーノも置いてくれてる訳だけ。

「そりゃまあ、な？ 初恋があんな形で終わるってのはそう無いとは思っぜ？」

「……まさか同性に、僕ってそんなに魅力無かったのかなあ……」



「相手が悪かったと思うしか、無いだろうなあその辺は。かねてから噂はあったし、それに実際に告って玉碎したんだろ？」

「……私、フェイトちゃんの事が好きなのっ！………ってさ、ははっ、この世に神はいねー」

いよいよ口調まで崩壊するレベルまで壊れてきた友人を前に、失恋ってここまで衝撃を受けるものなのかと戦慄を禁じ得ない。

『高町なのは』と『フェイト・T・ハラオウン』の“電撃婚”

つい先ほど、二人の披露宴を終えて式を抜けた俺は、魂が抜けかねない親友を連れて二次会の誘いを断ってここへと避難してきた。

コイツが九歳の頃に出会い、後に『PT事件』、『闇の書事件』、近年だと『JS事件』の立て役者でもある初恋の相手、高町なのは嬢への失恋の翌日に結婚式に招かれりゃ、多分俺も今のユーノのようになると思う。

というか高町嬢、貴女は鬼か？ 告白をつつた相手に結婚式の招待状を渡すとか、やはり管理局の白い悪魔の異名は本物だったようだ。

事実、一人にしておけなかった俺も一応、無限書庫からの職員代表としてユーノのサポートをするために式に参加したのだが、そこでのハラオウン提督は同情的な視線をユーノに向けて無言で肩を叩いていた。

普段俺達を過労死させたがっつてるとしか思えない程の過剰請求をしてくる人とは思えない、慈悲に満ちたやり取りに不覚にも涙を禁

じ得なかった。今にして思えば、彼の背中にも哀愁が漂っていたように思う。

コミットは管理世界の中枢だけあって、様々な文化が容認されている。その中には当然、同性婚も含まれている。

だが、だからといってそれを全ての人間が許容出来る訳ではない。ハラウン執務官の兄として、提督にも形容し難い想いがあったのだろう。この日ばかりは普段の呪詛を振りまく気にはなれなかった。彼もまた、ユーノと同じく今回の結婚で心労が嵩んだ一人なのだ。

「クロノも誘えば良かったかな？ あの中だとクロノでも大変そうだし」

「そ、そうかもなっ！ 提督だって人の子なんだし、内心複雑みたいただったしな！」

「それでも妹の幸せだからって、許容出来るクロノは凄いわ。僕にはとても……」

「（鬱にならないでえええ！ 気を紛らわせるためにここに来たわけだし愚痴には付き合ってもりだけでもおおおお！！）」

今日のユーノの鬱さはヤバい。

どれくらいヤバいかって言うと、提督の資料請求で十徹した次の日の提督との会話並にヤバい。あの時って無限書庫内がいくら空間が歪んでいるからって、二人の視線の間だけで軽く次元が擦れてたし。

もうこのまま虚数空間に堕ちてしまいそうな友人を何とか励ませようとあの手この手と尽くしてみるも、一向に立ち直る気配が無い。

コイツが高町嬢を想っていたのは知っている。何せ、彼女を支えるためにと十年もの間、労働条件最悪の職場のトップなんかをやっていたのだから。

戦闘魔導師として致命的な欠陥を抱えるユーノにとって、彼女と同じ空を飛ぶ事が出来ない事は何よりも重い足枷だった。

でも、それでも彼女のためにと自分の出来る事をとギリギリまで踏ん張り、どうにもこうにも、どうしようもなくなるまでユーノは頑張った。倒れた回数は人間の指の数を越えた辺りで数えるのを止めた程。

もしも、無限書庫の司書がユーノのハードワークっぷりを見かねてスクライアに連絡を入れてくれなかったら、俺はユーノの過労死

体を見る事になっていたと思う。

というよりも、ユーノにはその当時から知り合いであった筈の提督達の推薦もあって司書長になっていた筈なのに、以降のサポートをほぼ一切行っていないかった。だから司書達も頼るのを提督達ではなく、故郷でもあるスクライアに託したのだから。

まあ心配を表に立たせるようなユーノではないし、彼らも無条件に大丈夫だとも思っていたのだろう。

実際、ユーノの近況と体調その他諸々について彼の周辺で知っていた人物はほんの一握り。

医務官だったシャマルさんと、捜査官でうちに資料を直接受け取

りに来ていた八神さんぐらいなものだ。

あのハラOWN提督でさえ連絡用のディスプレイ越しでユーノに会ったのが今日で半年ぶりだというのだから、いかにユーノが人と関わっていないのかが分かるというものだ。

ユーノの環境を知り、スクライアの族長はすぐに当時から交友のあった俺にその事実を伝え、俺は無限書庫で司書をする事を即断した。このままでは、本気でユーノが危ないと思ったからだ。

とはいえ、俺が出来たことなんてほんのガス抜きが精一杯。知り合いだから気兼ねもなく無茶をする事を止めなかったユーノの手綱を操れたのは、一重にシャマルさんのお蔭と言えた。

健康状態を把握し、倒れて医務室に運ばれるユーノに対してはほぼ絶対的に優位に立てる彼女と結託し、まず栄養状態の管理やら体調面の改善を行い、スクライア総出で書庫内の仕事をユーノの分まで肩替りした。

その結果、今ではユーノが抜けても稼働状況が三割も落ちる、なんて事も無くなって今もこうして司書達全員からの応援メールに頭を悩ませながら俺がユーノを宥める時間が持てている訳だ。

「僕もっ、本当どうしようかな……」

「……あのさ、そこでわたくしめに一つ提案があるのですが」

「何？」

「このまま憂鬱にさせていては明日からの業務に支障が出る。とい



うかそれ以前に暗いユーノを見た瞬間に俺が女性司書に任務失敗と見なされ殺されかねん。

故にここでユーノに立ち直るとまではいかないまでも、高町嬢の事は振り切ってもらわないと困るのだ。さっきからやたらと女性司書から『司書長が落ち込んでる？ なら私の部屋に！』と煩いのだ。つか何故に俺のアドレス割れてるし。

「実はさ、今まではユーノが高町嬢に懸想していたから断り続けていたんだけど、お前にお見合いの話が来てたんだよ」

「お見合い？ 僕に？」

「そつだ。若くして無限書庫を復活させた秀才、考古学界においても新進気鋭のエリートとしてのお前とお近づきになりたがってる人って結構多いんだよ。いやあ、親友としては鼻が高いってもんよ」

「えー？ 僕なんかに？ そんなの嘘でしょう？」

「……嘘ついてどないすんねんこの阿呆」

「あたつ。……ていうか、最近はやての言葉が写る時が無い？」

「使いやすいんだよ、きっと俺の魂の前世は地球だったに違いないっ！」

よしよし、少しずつ調子が戻ってきたみたいだ。この調子で………！

1473

「お前が自分を過小評価するのは勝手だけど。そう思っていない人だっているんだよ、俺もスクライアの皆も、当然司書達もだ。お前にはもっと評価があつてしかるべきだぜ？」

「言い過ぎだよ、僕に出来る事なんてたかがしれふえるっふええええ！？」

「……ほほう？ それは俺に対する当てつけ及び喧嘩を売ってるっ

「事でいいんだな？」

男のクセに餅のように柔らかい頬を弄り回しながら、目前の無自覚チート野郎を睨みつける。

確かにコイツは戦闘魔導師としては欠陥持ちだ。何せ、攻撃魔法全般に対して適性がゼロ。魔力弾一つすら形成できないのだから。

だが、それでもユーノという存在は“天才”の領域にいるフェレ……人間だった。

「今何だか失礼な事を言わなかった？」

「いいいい言っでねえし」

「動揺隠す気無いよねそれ？」

本来であれば次元航行艦による大出力によってしか行えない、次元震が発生している空間に対する境界措置が出来る生身の魔導師なんて、次元世界に一桁いるかいにか。

しかもそれが魔力頼みの力任せではなく、ユーノの少ない魔力でも行使出来るだけの術式自体の優秀さと緻密さ。それをデバイスによる演算補助無しで行えるのだからコイツも十分にチートだ。

しかもシャマルさんに昔の話を聞いて唾然としたのだが、現空戦ランクでニアスの八神教導官を相手に、彼女の重いと有名な攻撃を防ぎつつ片手間で転移魔法を行使したという。

これはやってみれば分かるのだが、通常魔法の並列使用というのは魔導師にとってはむしろ当たり前の技能であり、それは空戦であれば常に飛行魔法を駆使しながら攻撃魔法を使用するので珍しい技能なのではない。

それが可能となっている大きな理由の一つに、元々並行運用を前提に先人達がそのように飛行魔法の邪魔にならないように攻撃魔法の術式を編んだという事実がある。

ミッド式は主に陸戦と空戦に別れるのだけど、攻性魔法と移動補助系、特に身体強化や飛行魔法は術がそれぞれ似通っているためにそれほど並行して行う事が苦にならないように設定されている。

だけど、転移魔法は違う。何故なら、転移魔法自体が戦闘用の魔法の術式とはまるで異なるリソースから組み込まれている術式だからだ。

ショートジャンプという、短距離を転移して奇襲を仕掛けるような魔法もあるが、そもそも転移魔法自体が複雑な式である事と、その演算の複雑さからデバイスを用いてもロスが懸かり過ぎるために戦闘では行使出来ないのが一般常識だ。

だというのにユーノはよりにもよってそれをやってのけたのだ。歴戦のベルカの騎士を相手にだ。

それを聞いた時、俺はユーノに対して羨望と嫉妬を抱かずにいらなかった。この次元世界に一体何人、A A Aクラスの攻撃を防ぎながらその一方で高度な転移魔法を使える魔導師がいることか。

マルチタスクの数とか云々ではない。これは明らかに才能とユー

ノの努力があつての賜物であり、コイツをチートと呼ぶに値する事実に他ならなかった。

「……だと言うのにお前は言うに事欠いて“自分なんて大した事無い”だあ？ テメエそれは読書魔法を覚えるのに一週間もかかった俺をバカにしてんのかあアン！？」

ちなみにこの魔法はユーノオリジナルであり、俺は習得が遅い方だったとはいえ、未だに加減を誤ると情報量に脳がやられるというシビア仕様。ぶっちゃけ無限書庫で働くだけでマルチタスクが二三増えるなんてザラである。そうでもない生き残れないので。

「わ、悪かったってば。だからほら、嫌な事を忘れるために飲もう？」

「忘れるのはテメエつってんだろおおおがああああああ！！  
いいか、この見合いには司書達やスクライアの皆、全員が期待し

てるんだ。お前が幸せになる事を、皆が望んでんだよ」

「……………」

「人に気を使うのはお前の魅力だろうよ。でもな？ そんなお前だからこそ、俺達は幸せになってもらいたいし、出来る範囲であれば幸せにしたいとも思ってたんだよ」

何せ見合いが来た話をした時、ユーノに想いを寄せていた女性司書は涙を飲んでその話を祝福してくれたぐらいなのだから……………その代わりにユーノの寝顔写真を撮ってこいと脅迫もとい、恫喝されたけど。

「ちなみに何だけど、どういったところから話は来てるの？」

「えーつとだなあ……………陸の方から眼鏡美人さんとほら、偶に八神捜査官と来るあのお淑やかなロングの子の写真が来てるぞ。後は……………聖王教会からも。ほれ、中々に美人な金髪さんじゃないか。この水色の娘さんも中々捨て難いと思うけど、俺的にはこの茶髪の大人



しそうな子がストライキ、じゃなかったストライクだな。てかもげやがれこんちきしょう」

「嫌だよ。というかそのお見合い写真どこから持ってきたの……？」

「デバイスに収納してた。お前に見つかると処分されそうだったし」

特に高町嬢の話が決着つくまでは不干涉でいたいと思っていたし。

「うぐ、そうだったんだ」

「まあ他にも来てたんだがそれは全部捨てたよ、俺じゃなくて他の司書が」

今現存しているお見合い写真は女性司書達の検閲を逃れ、ユーノ

に見せる事を許された人達だ。他のは下心が明け透けだなど好き勝手言われながら無限書庫の塵と化した。いやあ、無限書庫で焼いた焼き肉は美味かった……………

「……………って紙媒体を扱ってる部署でなにしてるの！？　本が燃えたら……………！？」

「大丈夫だって。しっかり結界張ってたし、防災防臭防煙対策はバツチリ」

「他はともかく二つ目え！！　それどんな術式！？　なんで防臭のための結界魔法なんてあるの！？」

「アレだろ？　味的には問題無くても、周囲にトンでも無いバイオハザードレベルに匂う物を食うための。食堂で働いてたおっちゃんに教わったんだ」

「食堂のおじさんって……………」

だって管理局員だぜ？ 世界中の様々な魔法が集約されているのがここ管理局なのだから、防臭結界ぐらいあって然るべきだろう。

「まあとりあえずだ！ この中から誰か選ぶも良しっ！ 或いは全員とお見合いして決めるもよしっ！ さあ、どうする？」

それぞれ腹に秘めた思惑があるにせよ、ユーノの幸せを考えてくれるのであれば俺達に文句は無い。

この中でユーノが一体、誰を選ぶのか楽しみだ……

……と、無限書庫勢がユーノの幸せのために暗躍する中、  
シナリオ  
思惑通りの展開に一人ほくそ笑む影が。

「(ふつつつ……なのはちゃんとフェイトちゃんがくつついたのは流石に驚いたけど、これで労無く一番の邪魔者がいなくなった……！ つまり！ 現在ユーノ君は完璧なフリーー！)」

「(待ちに待って幾星霜……この機、逃がすつもりは無い……ッ  
！)」

「(なのはさん達はお幸せに……私は私で、幸せを掴んでみせますー！)」

二人の結婚を機に動き始めた彼女達。

果たして、ユーノはなのはへの想いを振り切って新たな恋を見つける事が出来るのか？

果たして、無限書庫司書達は迫りくる魔の手？からユーノを守る事が出来るのか？

果たして、乙女？達は見事ユーノを射止めて我がものとする事が出来るのか？

そして、名前だけで出番の無かった人達の動きは！？ その時、ついにあの最終兵器が姿を表す……！！？

次回、『無限書庫の華麗なる一日』にいいいい、転・送!!

「……………って、最後に何言わせるの」

「あっ、今のは必要な事だから気にせんといて」

すんげえ番外編 「ネタが無かったんや……一発ネタしか無かったんや……ッ

登場キャラクター

ユーノ・スクライア

言わずとしれた原作ナンバーワンの不遇キャラ。私的に好きなキャラなのですが、どうしてか不幸が似合う、TSしたらお嫁さんにしたキャラ不朽の三位（オイ

このお話の独自の設定として出した魔法に対する推察ですが、ノリがほとんどのためあまりツッコまないでくれると嬉しいです。

そしてそれでもやはりと思う。ヴィータ相手に保つシールドを張れる事もその傍ら転移魔法出来る事も、この子やれば出来る子なのにどうして……

失恋してしまったユーノ君、果たして肉食系としか考えられない魔砲少女達から狙われた彼の今後は！？ 一発ネタなので私にも分からない。

モブ司書

同じスクライア出身であり、無限書庫の司書から連絡を受けた族長の命令によって出向いてきたオリキャラ。

ユーノの事を思つての行動もやれば、もげるリア充と悲しみと嫉妬と羨望のシャイニングフィンガーなんかも繰り出す司書としては平均的なキャラ。無限書庫にはもつと濃い方達が勢ぞろいです。

唯一ユーノと対等な立場に立てるといふ事で司書達とユーノの間で中間管理職の如き苦勞を強いられる、確実に婚期を逃すタイプの人間。

ちなみに彼がシャルマルだけを名前で呼ぶ理由はユーノを運ぶ時に一番出会う機会が多かったから。恋愛感情は無いが、彼女がユーノの彼女だったら自分楽出来るんだろつなあと密かにお見合い写真の中にシャルマルさんの顔写真を紛れ込ませていたり。これも誰かさんの計画通りだったりするのかどうか……………？

この後の展開としてはお見合い話でそれぞれのキャラとの接点にスポットを当てながら、暗躍するキャラ達と無限書庫司書達との手に汗握るバトル的な感じ。



．．．．まあ続きなんてある訳無いですけどねえ！  
それなら早く本編書けっというね……本当何書いたんだろ俺。

ある意味最終話？っぽい 「ある日、男が思うこと」(前書き)

こゝとしもくくりすますがやゝつてくゝるゝていうか、この日はあくまで某宗教の宗教的な意味を持つ日であって特におかしい日では無いのです。そして私はキリシタンでも何でも無いので特に何かをする必要は無いのでっす！

・・・と、自己弁護をつい先ほど終えた感じですかね。リア充末永く爆裂四散しろ。

物騒な話題と誰も幸せになれない話題はこの辺にしといて、今回はある意味じゃ最終回っぽい感じですよ。

それは何故か？ 要するにアレですよ、恋愛RPGで言うところの告白フェイズ。発禁がかかるゲームだったらそのまま『アーツ』に移行するイベントをやってしまうからです。

まあ本編とは無関係になりますけど、ヒロイン出ませんけど、男側の独白オンリーみたいなものですけど甘酸っぱい感じが出てればなあー……あれ？ セールスポイント薄くね？ まあ、いつもの事で

す。  
ええ。それでは―

ある意味最終話っぽい 「ある日、男が思ひこむ」

「ちっ、と………」

思えばここまで長かったようにも思いつし、短かった気がしないでもない。

逃亡生活を思えば実質一緒にいられた時間は少なかったかもしれないし、そういう話題で盛り上がる十代はすっ飛ばしてしまったている。

けど、むしろその十年間の空白で随分と思いきらされたものだ。

転生という“ズル”から精神年齢が無駄に上がり、故に同年代をどうしても子供と捉えがちになってしまふし何より、自分が犯罪者になってしまふんじゃないかという内心の危惧が大きかった。

だから気づかないフリを続けていた。ずっと。

多分、あんな風に言ってもらえたのは初めてだった。

小学は全然、中学だとそもそも虐めを受けてた訳だし、それ以降の高校や大学でも異性に近づこうと思わなかった。

だから転生してもう一度人生を繰り返す事になって、改めて考えると俺はかなり恵まれた環境に送って貰えたのだろう。爺ちゃんには感謝しきりだ。

まず、家を打ち抜いて墮ちてきた筈の俺達を拾ってくれた子がいた。

その子は一人暮らしをしていて、俺よりもずっと小さい筈なのにその寂しさをずっと一人で抱えていた。だから彼女の申し出を断る気にはなれなかったし、打算的な事を言えばここ以外だと他に行くあても無かった。

そうして一緒に暮らしているうちに、少しずつ自分の事を話すようになってくれたし、それが距離が近づいた証だと思つと、こつ言つてはアレだが本当に嬉しかったのだ。

丁度その子と同じくらいの少女と出会い、そして少女に裏切られたと思つていた俺にとってその子の純粹さは素直に嬉しかった。だから、俺は彼女の家族でありたいと普通に願えるようになっていった。

そして今日。

聖人の誕生日でありながら色々な思惑で利用される何とも俗っぽい節目の日ではあるものの、それでも何かを為すには持つてこい日である。

「……まあ、アレだよ、散々悩んで選んだんだし、多分貰ってくれ  
るといいよな、うん」

それでも“こんな”事をするのは前世も含めて初めてだし、喜んで  
もらえるのかどうかも分からない。

一応頼れる人間は周りにいたので困らなかつたけど、それでも最  
終的な判断は全部こちらだったのでやはり、自信はあんまりない。

ここまでできても思っけど、自分からアクションを起こすのはコ  
レが初めてなのだ。大目に見て欲しい。



与えられた私室の真ん中。布団に腰を下ろした俺の目下に坐す、  
掌サイズの四角い箱。

もうさっきから何度も睨めっこをする嵌めになっているのだが、  
待ち合わせまでは部屋から出ない事になっている。そのせいで余計  
に緊張してしまうし、今だって緊張で少し身体が熱くなってるほど  
だ。

既に外出用に着替え終わっているし、後はもう時間を待つばかり。

流石に予定時間の一時間前からこうしてそわそわするのも見つと  
も無い気がしなくもない。が、別段誰かに見られている訳じゃない  
から問題は無い。

『内側からなら都合十人ちかくの視線はあるけどねー』

「うおづっ！？　び、びっくりさせんなっ！？」

『さっきから話しかけていたのに、緊張してて気づかなかった人がそれを言うっ？』

「……」

前言撤回。　そっぴや俺には中の人達がいたんだっ。　ガツテム。

思えば、俺が行動を決心した時も急に内側に呼ばれたかと思っただけから『今更かつ』とツッコまれたものだ。

特に崩なんかは直接炎弾で死ぬほど強烈なツッコミをしてきたけ

ど、そんなにじれったかったか俺と尋ねてみると何故が大泣きされた。

他の火竜達の視線に耐えきれなかった事もあって、ワンワン泣き続ける崩をしばらくあやしなから俺が謝る羽目に。俺、何か悪い事しましたっけか？

でもその後、俺がしたい事に道を示してくれたのは他でも無いコイツらだったし、それを思えば今だって緊張しないで済む。

でもそれはイコール、俺が今からやろうと思っっている事を一部始終どころか内面からその心情の総てから行動を全部見られてしまうという事で、

「……なあアークルさん？」

「ん？ なあに〜？」

「今から数時間程、俺と君達の意識のリンク切れない？ その、流石に恥ずかしいと言いましょうか、デートに保護者同伴って歳でも……」

「『『『『大・却・下！！』』』』」

返答は女性陣四名と爺の声。いやだから、これからデートすんの俺の総て覗かれるとかもう憤死ものの恥ずかしさなんですが!？

「駄目ったら駄目です。ええ、御館様がふ、ふしだらな事に手を出さないよう、まず私がですね……」

『そうよ！ 駄目よ命ちゃん！ まずそついう恥ずかしい事はお姉さんで慣らしておいた方がいいわ！』

『見事に欲望が洩れてるわねアンタ達。大丈夫、私に任せておけば。何せ経験豊富だしね！』

『だ、だ、駄目だよ皆っ！ あくまで！ あくまでも皆で命君のデートを見守ろっつて話だよ！？』

『オーホッホッホ！ それで行くところまでイクのであれば僕も混ぜさせて』

しばらく心の内側で爺の断末魔の叫びを聞きながら、彼らの心が流れてこんでくるだけに想像の一部始終が脳内で展開されて居た堪れない気分になった。

……い、幾ら何でも初デートでそこまでやるのか！？ それ

は流石にアレ過ぎるのでは!?

そう思ってしまう俺はガキなのだろうか。ならまだガキでいいんじゃないかと思う反面、生前と合わせると彼此四十年近くの人生経験がある筈なのにこうしてデートすら碌にしなかった自分というのも大概何だと思うと同時に、少し情けないような気がしなくもない。

そもそも『デート』という言葉を意識したのも、この日外出しなしかと誘った翌日の事だったし、それが人生初の試みだと気付くとしばらく布団から顔が出せなかったのをよく覚えている。

だからこそ、もし今から“本番”を迎える事を考えると自分がどうにかなくなってしまいそうで怖い。

それ以上に、楽しみでしようがないと思ってる自分は多分アホだ。トチってしまいかねないというのに、もう四十分先の事が待ちきれなくなってきた。

「（……まあ、待ち合わせ先で待ってるっていうのも、アリだよな……寒いけど）」

一緒に暮らしているのに待ち合わせ場所を指定したのは、何となく気分だったけど今じゃ正解だと思つづくほっとしている、

家の内線で先に待ってる事を何とか噛まずに伝え終え、とりあえず家を出ようとしてリビングにてイヤラシイ笑顔の家族達と鉢合わせになってしまった。

「」「」「」「」「」「」「」「」

「な、何だよその含み笑いは……?」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」

顔を見合わせてニヤついたりと思っただら即座にそれぞれの行動に戻り、何となく手の降ろしどころを失ってしまった俺は気恥かしさやその他諸々を隠しきれなくなりそうだったので逃げるように家を出た。

空は曇って昼間だというのに外気に熱は無く、日差しも無いせい  
かかなり冷え込んでいる。



「おおー……！ やっぱ寒いな……」

これで雪が降ってなくて良かった。こういう場合振ってた方が風情があるのだろうが、俺はそれよりは過ごし易い方が良いと思う。何で寒くなっただ方が良いんだろう？

「（だってそうしたら余計に暖を取らないといけなくなる訳で……あっ）」

何となく意味深な部分に気づいてしまったような気がして、この思考を一切キャンセルする。

だけど、それを望んでいる自分もまあ、否定しきれない訳で。

「（だけど恥ずかし過ぎんだろ……………）」

寒いからこそ、互いに身を寄せ合って暖を得るだなんて。それこそまさに……………そこら辺に歩いている男女のようで。

まだそんな関係じゃない……………でも思ってしまう俺は相当駄目なんじゃないかろうか？ それをあまり拒否出来ないのと、しようとも思っていないあたり。

だからという訳じゃないけど、今日は少し、素直になってみようと思っ。

今までではぐらかしてきた気持ちの分、今日だけで取り戻す勢いで  
はしゃいでしゃしゃいではしゃぎまくって、そして言おう。

「ちてそろそろ………！ 来たか」

……その言葉に今まで言えなかった、ありとあらゆる感情を籠  
めて。

ある意味最終話？っぽい 「ある日、男が思うこと」(後書き)

今年の更新もこれで最後となるでしょうから最後に一言……

境ホラ面白いですよー。うん、見事に私事と関係ねー事実でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4574m/>

---

ヒーローにはなれない...けど

2011年12月24日04時53分発行